

TSしたらなんか相棒たちがいるんですけど・・・

コジマ汚染患者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原因不明でTS少女化した主人公！なぜか傍らにはゲームでの元パートナーが!?!しかも日本中でポケモンが現れる!?!政府とかのお偉いさんがてんやわんやな中、主人公はパートナー達と共に平穏に暮らしていけるのか!?!

「俺に出来る金儲け・・・これだ!」

俺っ娘系ポケモン配信者、爆誕？

というか、作者はこれちゃんど続けられるのか!?!

※とあるポケモンTS系ssをリスペクトしている部分があります。

目次

第一章 国内編

第1話	1
第2話	9
第3話	17
第4話	25
第5話	35
第6話	45
第7話	54
第8話	63
第9話	73
第10話	85
第11話	95
第12話	106
第13話	119
第14話	129
第15話	137
第16話	149
第17話	160
第18話	174
第19話	185
第20話	196
第21話	207
閑話 うみちゃん家の日常	220
第22話	229

第44話	569
第二章 海外編	
第43話	555
第42話	542
第41話	530
閑話 ポケモン達の日常 天獄編	518
第40話	504
第39話	489
第38話	473
第37話	463
第36話	449
第35話	435
閑話 うみ家の日常 part 2	418
第34話	402
第33話	389
第32話	370
第31話	358
第30話	336
第29話	319
第28話	308
第27話	293
第26話	279
第25話	264
第24話	252
第23話	241

第52話 第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話

662 649 637 623 610 600 591 578

第一章 国内編

第1話

ポケットモンスター。縮めて、ポケモン。1996年にゲームフリークという会社が開発し、任天堂が発売した超人気ゲームタイトルだ。

海、山、街中、果ては宇宙から来たものまで、様々なところに存在するポケモンを主人公たるトレーナーが捕まえ、そのポケモンでもって時に冒険し、時に他トレーナーとバトルする。そんなポケモンは世界中の人を虜にし、今なお成長を続けている。

かくいう自分も、『廃人』などと呼ばれるほどのめり込んでいたわけじゃないが、ポケモンを楽しんできた者の1人だ。ただ……

「どこだんこ」

目を覚ますと、そこは知らない天井だった。窓際にある、自身が寝ているベッド。その対角線上にある、簡素な机とその上にあるパソコン。部屋を快適な温度に保つために稼働しているエアコン、その下のタンスと隣にある大きめの鏡など、殺風景ながらも最低限ある家具のどれもが、自分の持つていたものとは全く違う物であった。

（あれ……確か昨日、学校が終わって直帰して……それで疲れがピークだったから、帰ってすぐに寝て……ってか、なんか部屋でかくないか？）

未だ寝ぼけている頭ではうまく考えがまとまらず、ボーっと部屋を見回す。すると、ベッドの枕元に置いてある時計が目に入る。

「……」

「……っは!?!」

そこには、数字の9に短針、12に長針が指し示されていた。

「ち、ち、遅刻ううう!?!」

一般学生にとって致命的なまでの寝坊である。慌てて飛び起き……何故か部屋同様大きくなっているベッドから……鏡の前を通り過ぎ

「ん？」

ようとしたところでピタツと止まり、鏡の前に立つ。

ボサボサな黒髪に黒い瞳、日に焼けているわけでも色白でもない微妙なラインの肌で中肉中背の冴えない男子学生。それが自分だった。

「……へ、へへ……夢だ。これは夢だ」

しかし、そこに写っていたのは、透き通るような白い肌、窓から差し込む朝日に照らされ、綺麗に光っているような銀髪。瞳はサファイヤのように深い海の色。中肉中背どころかもはやランドセルすら似合いそうなくらいの超小柄な体型。

(いやまさか、そんな……そう、これはまだ夢見てるんだ。早く起きて学校に行こう……)

おもむろにほおへと手を伸ばし、そつとつねる。

「いつててててー！」

慌てて手をパツと離し、鏡を見る。そこには変わらず、銀髪蒼目の美少女がいた。それを見ておれは、「旦那ふう……と落ち着いてから、

「……なんじやこりやあああああ!!!」

盛大に叫ぶのだった。

「よーし、おちけつ、落ち着け俺」

SAN値直葬状態からなんとか復帰した俺は、とにかく今は現状把握だ、ということで自身の部屋を確認していた。

「これもか……」

結果わかったこと……この体が一体誰なのかはわからないが、かなり物に対して頓着しないタイプだったのだろう。服は全部白いワンピース、下着(罪悪感半端なかった)も同じく白一択。その他机の引き出しやら何やらをひっくり返してみたが、ペンや鉛筆、紙などの事務的なものしか出てこなかった。

「ここにもいないのか……」

意を決して部屋の外へと出ると、廊下を挟んで向かいに一部屋、廊

下の先に階段、階段の間にさらに二つの扉。階段を降りると、物はあ
るのにろくに生活感のないリビングなど。どうやら一軒家らしい。

「でもなんでだろう……？俺以外に人がいない……」

ウンウン唸りながらリビングのソファに座ると、テーブルの上に一
枚の便箋があった。

「手紙……」

申し訳なさから軽くごめんなさいをしてから封を開ける。手紙に
は差出人の名はなく、中身にはひどくシンプルな一文があった。

『ごめんね、うみ』

視線を動かすと、便箋があった場所には銀行の通帳とカードが置い
てあった。便箋の下に置いていたのだろう。

「……ひよつとして、捨てられたのか……？ ……海つてのがこの体
の持ち主の名前か？」

もし捨てられたのなら最悪だ。俺自身の年齢はともかく、今の見た
目は完全に幼女だ。もし身寄りのない状態なら、このままではどうし
ようもなくのたれ死んでしまう。

慌てて通帳を開くと、今度は別の意味で驚愕する。

「なんだこの金額!？」

そこには、今まで見たことのない金額が表示されていた。

「ぜ、0が5、6、7、8……と、とりあえず後!!」

気の遠くなるような感覚がして慌てて通帳を閉じる。しかし、ここ
でふと疑問が浮かぶ。

「育児放棄……ではないのか?」

普通に考えて、育児放棄するのならこんな大金は残さないだろう。
部屋も荒らされた形跡はなく、夜逃げなどといった感じはしない。

「う~~~~! ……なんか頭痛くなってきた! ……とりあえず保留!」

見た目相応の知能になってしまったのか、頭痛がしてきたので思考
を放棄する。そうしてまだ何かないか、と一階の部屋中を探していた
時だった。

ピンポーーーーン

「!？」

突如、玄関からチャイムがなる。一瞬だけ親が帰ってきたのか、と思っただが、ドアをどんと叩く音とともに声が聞こえてくる。

「おーい、誰かおらんのですか?」

(明らかにおじいさんっぽい声・・・身内じゃないっぽい?)

そこまで考えたところで、体から力がフツと抜け、倒れ込んでしま
う。

「え、なん……で……」

—————

どたん、という音が屋内から聞こえる。人が倒れた音だ、そう判断した老人は、心中ですみません、と断ってからドアを開けた。幸い、鍵はかかっていなかったらしくすぐに開いた。中に入り、音が聞こえた方へと急いで入る。すると、リビングに入ったところで愕然とする。

「!? 大丈夫か嬢ちゃん!」

そこには、純白のワンピースを着た少女が倒れていた。その顔色を見て、異常事態だと判断した老人は、慌ててその子を抱え近くの診療所へと運んだのだった。

—————

『やったー! 勝ったー!』

なんだろうこれ……

『くっそー、なんで厳選もしてないのにそんなに強いんだよ●●の○

○○○○は』

これは……あれだ……まだ友達とポケモンやってた時の思い出

……

『へっへーん、そりやそうだろ!俺の○○○○は最強なんだ!』

ああ、懐かしいな……もうしばらくポケモンなんてやってなかったな……

『また会いたいかい?』

ああ、会いたいな……もう一度あのワクワクする冒険がしたい

『いいだろう。じゃあそうしよう』

……………

「……また知らない天井か」

何かとても楽しい夢を見ていた気がしたが、思い出せない。目を覚ますと、朝見たのとは違う部屋であった。

「起きたかい？」

突如聞こえた声の方へ向くと、そこにはしわくちやの顔に憂いを帯びた、甚平姿の男性の老人がいた。

「ここは……」

「あんしんせえ、ここはわしの家じゃ。嬢ちゃんの家隣の隣じゃけん、問題ないよ」

そう言つてニカツと笑う老人。どこか愛嬌のあるその顔を見てみると、ああ、安心できるんだ……というきもちになり、起きたばかりだというのに眠気がやってくる。和室らしく、畳のい草の香りがさらに眠気を誘う。

「まだ眠いかい？もう少し寝てなさい」

「……うん」

老人の言葉に頷き目を閉じると、俺の意識はすぐにまた暗い底へと潜っていくのだった。

「……寝たか」

少女が寝たのを確認してから、老人は隣の部屋へと移る。机には、少女の家から持ってきた鍵と手紙があった。念のために閉じまりをして、持ってきたのである。

(手紙の内容からして恐らく育児放棄か……あんな小さな子どもを残して、なんてことを……)

見ず知らずの、顔も分からない親への怒りで拳を握る老人。

「さて、今後をどうするか……」

保護施設への連絡、警察への通報などが頭に浮かぶ。が、ふと少女

のことを思い出す。

「……何にせよ、あの子に話を聞いてから、じゃなあ」

自身の早とちりの可能性もあるしなあ、と一人呟きながら、テレビをつける老人。

『……では、次のニュースです。〇〇県の農家にて、不思議な形のきのみが自生しているのが発見されました。専門家によると、「全く未知の物質が含まれており、完全なる新種であることが判明した」とのことです。政府と環境省、農林水産省は……』

—————

(……寝れねえ!!)

老人が出て行ってすぐ。俺は、なぜか突如として眠気吹っ飛んでいったことにより、結局起き上がっていた。

「布団は心地いいし、畳も嫌いじゃねえ……というか、めっちゃ寝れそうだったのにどういふことだよ！」

うがーつと喚いていると、背後でカタンと音が鳴った。

ピタツと止まって後ろを見ると、俺は目を見開いた。そこにあつたのは、黒い縁取りから下が白、上が赤の紅白に別れた球体。俺はそれに見覚えがあつた。

「……モンスターボール？」

そう、それはまさにモンスターボールそのものであつた。そつとボールに向き直り、ゆつくりと手を伸ばす。

「へえー、最近はこのなりアルなおもちゃ出来てたんだ。スツゲー」
手にとつてまじまじと見ながら、そんなことを口にはしていると

カチツ

「あつ」

P O O O O N

「うわあつ!？」

たまたま指が真ん中のスイッチに当たると同時に、ボールが開き、中から何かが飛び出した。

「いつてて、なに、が……」

衝撃で転んでしまい、頭を抑えながら起き上がると、再度俺は言葉を失った。

そこにいたのは、見慣れた、しかし見慣れない生き物だった。明るいオレンジ色の肌、耳は魚のヒレみたいな形をし、周囲を警戒してかぴこぴこと動いている。尻尾は先端がカミナリのような形をしており、不安げに揺れている。大きさはかなり大きく、ぬいぐるみや抱き枕のようだ。

「……」

「……」

俺に背を向けているその生き物は、キョロキョロとせわしく辺りを見回している。

(あれ……この生き物……)

何故だろう、すぐく見覚えがあるような……でも一体どこで……

「あ……ライチュウ?」

俺の声にピクツと尻尾が立ち、ゆつくりとそいつ……ライチュウ(らしきもの)が振り返る。

「……」

「……」

しばし沈黙が流れ、お互いに気まずい空気になる。

(ええい、らちがあかねえ! こうなったら……)

俺はそつと坐り直し、ライチュウへ向けて両手を差し伸べる。

「おいで」

「……!」

戸惑っているようだったライチュウ? は、一瞬逃げるようなそぶりを見せるが、俺の顔を見て、驚いたような顔をする。そして、次の瞬間ものすごい勢いで突っ込んできた。

「ライアイ!」

「ふぐっ!」

下腹部への衝撃で悶える俺の上で、ライチュウ? は全力でグリグリしてきていた。

「ライライライライ！」

「ちよ、まつて、くすぐったいよ！ あははははー！」

「おい、起きたかい……ってなんだこりゃ!？」

これが、この俺『うみ』の初めてのポケモンとの遭遇であった。

『……また、農家の方の中には、妙なきのみを啜えて飛び去る、巨大な鳥の姿を見たという証言もあり、市では外来種の猛禽類である可能性も視野に入れ、近隣住民に注意を呼びかけています。それでは次のニュースです……』

第2話

「それで、嬢ちゃんの名前は？」

突然のライチュウ出現によるドタバタから数分後。俺こと『うみ』は、おじいさんからの尋問：いや質問を受けていた。どうやら、病院（診療所だっけ？）に連れて行ってくれたらしい。結果的には栄養失調状態だったってオチがついたらしいけど。

（そりやかなり病弱そうな感じだもんなあ俺・・・）

鏡を見た際の自分の姿を思い出し、納得する俺。つと、おじいさんが返事を待ってる。

「えっと、うみっていいいます。助けてくれて、ありがとうございます」
そう言つて手をつくど、なぜか一瞬ポカンとした後、おじいさんは慌て始めた。

「い、いやいや、気にせんでええよ。わしはただ回覧板持つて行つてただけじゃえねえ。・・・ところでうみちゃんや。お母さんお父さんはどこで働いているのかね？」

おっと、これは急に答えられない質問。しかし仕方ないから正直に答えることにする。

「わからないんです」

「そうか・・・じゃあ、どっちか帰ってくるまで待つていようねえ」

「いえ、そうではなく。俺、お父さんもお母さんも分かんないんです」
「なっ・・・」

何故か固まったおじいさん。と思いきや、すぐに動き出すが、何故か目元に手をやってブツブツと呟いている。

「やはり放棄・・・？いや、そもそも親子ではない？・・・誘拐？」

あ、だめだやつば戻つてきてない。聞き取れない声でボソボソとしゃべっているおじいさんを見つつ、俺は自分の正座した膝の上で煎餅を一心不乱に食しているライチュウを撫でる。部屋に入ってきた際は驚いて錯乱していたおじいさんだったが、しばらくして落ち着いてからは、なぜかこの子を見ようとしなない。

(いやまあ、おじいさんだしポケモン詳しくないってこともあるだろうけど、こんな色のでかいネズミとか誰でも驚くだろうしなあ・・・) 思考を巡らせていると、ようやく再起動したおじいさんが更に質問してくる。

「よし、じゃあおじよう・・・うみちゃん。君はあの家に来た頃の記憶はあるかい?」

「それが全然なくて」

「そうか・・・じゃあ、とりあえずどうしたいかだけ聞かせてくれないか。保護施設に連絡するのと、警察に・・・」

そこまで聞いて、俺の体に衝撃が走る。何故かはわからないが、背筋の凍るような感覚と、恐怖が込み上げてくる。

「だめ!」

「え?」

「・・・あ」

無意識に出た叫びに驚くおじいさん。その顔を見て我に返るが、それでも何故か警察や保護施設にだけは行きたくないという気持ちがある。湧く。

「ごめんなさい・・・でもその、保護施設とか警察は嫌なんです・・・」説明はできないんだけど、と続けるとおじいさんがうーんとうなる。ライチュウも突然の叫び声に驚いたのか、心配げにこちらを見上げています。またしばらく静寂が訪れる。と、おじいさんがよし、と一つ呟いてからこちらを向く。

「そいじゃあとりあえず、しばらくはわしが面倒見ちやる」

「え?」

予想外の言葉に惚けた表情でおじいさんを見ると、ニカッと笑いながら頭を撫でてくる。

「頼るあてもないんじやろ?それにあの家から離れたくないみたいじゃし、隣じゃけんちようどええわ」

ほかんとしてその言葉を聞いていると、何故か自然と涙が出てくる。そんな俺を見て、慌てたおじいさんが手を離すが、全然止まらない。

「うおお!?すまん、触るのはまずかったか!？」

「あ、い、いえ!違うんです!なんていうか、嬉しくて・・・」

そうか、そりゃあよかった。そう言って立ち上がると、おじいさんは今度はライチュウをしっかりと見る。

「・・・そのよくわからん生き物は、とりあえずうみちゃんのペットつてことでいいかい?にしてもどっから入ってきたのやら・・・」

「あはは・・・」

(突然枕元にボールごと出てきてたとかいえねえ・・・!)

そして、俺自身は自宅で暮らし、食事だけはおじいさんに作ってもらう運びとなった。なお、自宅に戻ったときに通帳を見せたらライチュウを見たとき並みにびっくりしていた。

「さて、どうしようか・・・」

おじいちゃんのお話から数時間後。既に夜と言っていい時間となり、おじいちゃんは晩御飯を作るために自分の家へと戻り、今自宅には俺一人・・・いや違う、俺一人と一匹だ。おじいちゃんがいた手前、ライチュウに構い続けるわけにもいかなかったので後回しにしていたが、何故現実にはライチュウが・・・ポケモンがいるのか。

「おまえ、どこから出てきたんだ?」

「ライ?」

「他にもポケモンが来てたりするの?」

「ライ!」

「・・・あかん」

ダメ元で意思疎通を図ってみたが、全然ダメだ。全く何言ってるかわからん。

(まあそんな気はしていたが)

ポケモンは基本犬などと同じくこっちの言ってることを理解はしても言語を喋ったりはしない。当然のことながら、ライチュウもただ鳴き声でしか受け答えしてくれない。

「どうしろっていうんだよもう〜!」

「ライライライ!」

自室から引っ張ってきた枕を抱え、リビングのソファに寝っ転がり

枕に顔をうずめる。遊んでいると思っただのか、ライチュウも嬉しそうに真似をしてリビングの床で寝っ転がる。

「うくん、まだ時間はあるだろうし・・・そうだ！ネット！」

確かパソコンが自室にあったはず。思い立ったがなんとやら、というわけで二階の自室へと向かう。ライチュウは、俺が移動したのを察すると、素早く動き、俺の周りにまとわりつく。

「うわわ、なんだよ、危ないぞ?」

すると、そのまま軽快に俺の体を登り、気付いたときには俺の肩に鎮座していた。

「つとと、なんだ、そこが好きなのか?」

「ラァー!」

おうよ、と言わんばかりの鳴き声にしようがないか、とそのまま放置し、改めて二階へ向かう・・・

「・・・」

「ライ?」

二、三步歩いたあと、おもむろにライチュウを抱え、そつと床に下ろす。

「肩に乗るの禁止」

「ライ!」

いやなんかバランス悪くなつて歩きづらいし・・・。

そんなこんなでしょんぼりするライチュウをぬいぐるみ抱きして二階の自室へと向かい、机の上にあるパソコンの前に座る。ところが「おかしい・・・ポケモンがヒットしない・・・?」

何故か、どれだけ検索しようとも、一切情報が出ない。『ポケモン』『ポケットモンスター』と、どのように表記しても一切出てこない。

「ひよつとして、ポケモンというゲーム自体が存在しないのか:?!」
行き着いた予想に愕然とする。まさか、あの大人気ゲームが存在しない・・・?そんなバカな話が・・・

「なんで・・・いやまさかな」

一瞬よぎった嫌な予感にまさかそんな、と否定する。しかし、震え

る手を抑えながら検索欄にタイピングしていく。

「任○堂・・・よかった、あった」

まさかゲーム会社そのものがないのか、と思ったがそんなことはないらしい。しかし、赤い配管工やピンクの悪魔、でかいゴリラと言った有名タイトルもある。いったいなんでポケモンだけが・・・

「・・・ん？」

○天堂のサイトをスクロールしていると、一つあることに気づく。そこで一旦サイトを閉じ、再度検索欄に書き込む。

『ゲーム会社 ゲームフリーク』

『お探しのページはございません』

「・・・ふう、そういうことか・・・」

一息ついたところで俺は絶叫する。

「ゲームフリーク、逝っちゃったああああああああ!!?!」

まさかの事態である。そりゃポケモン出ねえわ。だってゲーム会社（開発元）いねーもん！

驚いたライチュウが、ベッドの上から何事か!?!とこつちを見るが、そんなことは知ったこつちやない。こうなるともう一つ、新たな疑問が出てくる。

「・・・つまりここは俺のいた世界とは違う・・・のか?」

今のところ差異は『ポケモンが無いこと』だけであるが、それでも俺自身への影響は計り知れない。なにせどれだけ学校が忙しかろうと、友人がやらなくなろうと一人ひたすらやり込んだゲームが無いのだ。それはとても悲しいことである。

「ここが別世界・・・だからライチュウが、ポケモンが現実にいるのか? ひよつとして「こつち」では別の名称で呼ばれてるとかそういう・・・?」

思い至った可能性に、慌てて検索を再開する。しかし、どれだけ関連しそうなことを調べても、出てくるのは関係のないサイトばかり。「うむむ、どうなってんだらう。・・・とにかく、まずはライチュウ関連から探して・・・ん?」

検索を諦め、ホーム画面に戻ったときだった。パソコン内に、見た

ことのないファイル欄がある。

「なんだこれ・・・ウイルスか何かか？」

訝しみながらも、ひよつとしたらポケモンに関する何かがわかるかも、そう思うといてもたつてもいられずえいとクリックする。

あおこには、何かのプログラムのようなものが入っており、開くと同時に起動する。

「うわ、ウイルス!？」

慌てて閉じようとするが、次の瞬間には完全に作動してしまう。しまったー！ー！そう思うが、何も起こらない。

「・・・いや、なんだこれ。ボックス？」

画面に映し出されたのは、『誰かのパソコン』と書かれた謎のシステムだった。

「誰かのって誰だよ・・・いや、違う。これってまさか・・・」

眩きながらスクロールすると、今度は箱のような枠の中に、5つの丸だけが入っている画面が出てくる。

「この丸・・・ひよつとしてモンスターボールか？」

そう、そこに入っていた丸は、上が赤、下が白の紅白に分かれたモンスターボールそのものであった。思わず自身の傍に置いているモンスターボールと見比べる。そして、カーソルをその丸に合わせると、何かの詳細なデータと画像が現れる。

「・・・クロバット。こうもりポケモン。タイプどく・ひこう・・・これもしかして、ポケモンの預かりシステム？」

調べた結果、今はポケモンは5匹しか入っていなかったものの、30匹入るボックスが8つ、計240匹分の容量があることがわかった。また、入っているポケモンに関しても見覚えがあった。

「こいつも・・・こいつもこいつも。俺が一番育てた奴らばかりだ・・・」

廃人と呼ばれるほどは育成に夢中にならなかつた俺だが、世代ごとに最低一匹は本気で育てていた。その数は6匹。ボックス内の5匹は俺の育てていた奴らと同じポケモンばかりだった。

「ひよつとしてお前も俺が育てたライチュウなのか・・・？」

「・・・？」

ライチュウを見てそう眩くも、首をかしげるばかりである。すると、ピロン、という音と共にメールが届く。

「？誰だ？」

メールをクリックし、開封する。するとそこには、

『やあやあ、どーもどーも、私は神だ（・・ω・・）』

などというふざけた文面があった。

「・・・はあ？」

「そうか・・・わかった。引き続き頼む」

「どうだった」

「ダメです、どこの研究員も、同じ事ばかりです。『こんなきのみ、見たこともない』と」

「・・・」

その言葉に、いわゆる『政府のお偉いさん』である男はまたか、という顔でうなだれる。突如発生した「謎のきのみ大量発生事件」に対応するため、急遽様々な専門機関に依頼しつつ調査をしたが、結局分かったのは、「何もわからない」という事だけ。

「・・・いったいなんなんだこれは」

手元の資料を見つつしかめっ面をする。そこには、桃や梨など、既存の果実類によく似た、しかし色や大きさなど所々が違う謎のきのみ画像があった。このきのみが発生し出してから2日。まるで進展がないというのが、とても堪えていた。

「外来種の可能性は」

「既に海外の機関にも調査してもらっています。結果は・・・他と同じです」

その言葉に本日何度目かのため息が出る。現在このきのみは農園など果物と関係のある地域でのみ発見されているが、その数は少しづ

つ増えている。それも、既存の果物の割合が減っていることから、何かしらの要因で果物がこの得体の知れないきのみが変わっているという可能性も出ている。

「このままでは国内の果物生産と、それに携わる農家に多大な損害が出ると思われます」

「わかっている。すぐに対策を行うよう、議会にも資料を提出しよう」

はい、と言って出て行く職員を見送りながら、男は呟く。

「これはいったいなんなのだ……。何かの予兆なのか……。？」

そう呟くと気を紛らす為にテレビをつけ、男は再び資料を読み込むことにするのであった。

『「……現場からは以上です。続いてのニュースです。今日未明、???の県のキャンプ場で、大型の熊が目撃されました。目撃者の証言によると、その熊は胸の部分に丸い輪の模様が有り、突如森の中から現れ周囲の者をすごい力でなぎ倒していたとのことでした。また、逃げようとした一般客の乗った車を叩いた際、車の側面がまるで紙のように切り裂かれていました。その後、数十分の間暴れた後、森の中へと消えて行ったとのことでした。ツキノワグマとは生息地的な違いがあることから、先日の農家の目撃した鳥と同じく、大型の外来種であると思われます。現在、捜索・捕獲隊が編成されているとのことです。次のニュースです……』

第3話

「神って・・・なんだこれ? いたずら?」

突如送られてきた、神と名乗る人物からのメール。半信半疑でスクロールすると、本文が現れる。

『あ、今疑ったでしょ?(?▽?) まあそうなってトーゼンなんだけどネ! 手短にいうけど、君の願いは叶えてあげたよ! 感謝してネ!(・ω・) 変化が大きすぎると問題だから今のとこゆつくりだけど、今後一層楽しくなってくると思うから、お楽しみに! つーわけで、新たな人生、謳歌するといいいよ! じゃねー(・▽・)ノシ』

「・・・」
ものすごく読んでいると疲れる文章だったが、所々で重要な情報があった。まず叶えられたという「俺の願い」。正直見に覚えがないが、恐らくこれがライチュウ達が現実にいることの答えだろう。

「俺が願ったから、お前がきたってことなのか」

「?ライ!」

ライチュウを見ながらそう呟くと、こちらを見て首を傾げた後、構って欲しそうにすり寄ってくるライチュウ。

「よーしよしよし、いい子いい子」

「チャア〜」

よっこいしょ、と膝に乗せ、ひたすらにもふる。ライチュウも心地良いのか、目とトロンとさせ、されるがままとなっていた。

(このままメールについて考えても、自分のことを神とまで言うおかしな存在の考えなんてわからん。どうしよう・・・)

ふとライチュウを見ると、完全にとろけていた。

「おーいうみちゃん、ご飯ができたよー」

「あつ、はい!・・・ほら、行くよライチュウ」

「チュー」

・・・

「ふう、美味しかったねえ」

「チャア〜!」

おじいちゃん家でご飯をいただいて、そのまま家に帰ってきた俺とライチユウ。ライチユウのご飯をどうしようか困っていたが、どうやら雑食な感じである。・・・それでもチョコとか玉ねぎとかはまずそうだけど。今はリビングのソファの上でお腹を上にして満足そうに寝っ転がっている。その姿はまるで日曜休日のおっさんである。

「・・・散歩、行こっか」

そんなライチユウの姿に苦笑しつつ、外出の準備をする。・・・と言っても、服は白いワンピースしかないのだが。俺が玄関に向かうと、ライチユウも起き上がり、側をついてくる。

「結構いい天気だねえ」

「ライー！」

都会のビル群の隙間からは見ることが難しい、満天の夜空を見上げつつ、ライチユウと連れ立って歩く。あたりはのどかな田園風景といえは聞こえはいいが、身もふたもないことを言うならば、畑と田んぼだけのザ・田舎という感じであった。やや遠いが、海らしきものも見える。

我が家から歩いて行ける範囲に、海・山があり、かなり自然に恵まれた環境である。

「もう暗いし、もう少しだけ歩いたら帰ろうね」

「ライー！」

そうしてしばらく歩いていると。

「うわぁ、助けてくれえ!!」

「!？」

どこからか悲鳴が聞こえてくる。一体どこから、そう思い探すと、俺の歩く道の少し先に懐中電灯らしき明かりが見える。

「ライチユウー行くよー！」

「ライー！」

とつさに体が動き、ライチユウを連れて走り出す。近づくとつれ

横からものすごい勢いで突っ込んできたライチュウがそのままサイドンの横つ面に蹴りを叩き込んだのだった。

「え?」

予想外の事態に惚けていると、起き上がったサイドンがライチュウと向き合う。

「フーツ!」

「グルルル・・・」

互いに間合いを凶りつつ睨み合っている。と、次に仕掛けたのはサイドンだった。又しても巨体を生かした突進をする。狙っているのかたまたまか、その位置はライチュウを挟んで俺と男性を巻き込む方向へ向かっている。これではライチュウが避けられても俺たちが・・・。

(いや、そうだ・・・!あれが俺のライチュウなら・・・!)

一縷の望みにかけて、俺はライチュウへと指示を出す。

「ライチュウ! 『かげぶんしん』!」

「!ライ!」

俺のとつさの叫びに応じて、ライチュウが技を繰り出す。ライチュウの周りに、3匹のライチュウの姿が現れ、道から逸れた位置へと走り出す。するとサイドンは、そのうちの一体を追いかける形で進路を変え、道から逸れたことにより溝に足を取られ畑へと転がる。

「ゴア!」

「いまだ! 『かわらわり』!」

俺の掛け声とともに、飛び上がったライチュウは、その手を振りかぶり、サイドンめがけて落ちて行く。

「ラアアイ、チュウウ!」

「ゴツ!」

サイドンの脳天に強烈な一撃が叩き込まれる。その一撃で「ちからつきた」のか、そのままサイドンは目を回し、起き上がってくることはなかった。

「やっ・・・た・・・?」

現実味が感じられず、思わずそう呟く俺。その傍らには、ちよこんとライチュウが戻ってきていた。

「ライ！」

「あ……」

その「ほめてほめて」と言わんばかりの姿を見てようやく安心したのか、どつと体から力が抜ける。よくよく考えると、月明かりがあると言ってもかなり暗い中、人間大の巨大なポケモンに襲われたのだということがわかり、気絶するほどではないが恐怖が込み上げてくる。

「……こ、怖かったよお……」

「ライ？」

思わずぎゅつとライチュウを抱きしめて涙目になってしまおう。なんで泣いているのかわからないのか、「どうしたの？」と言った表情のライチュウを抱きしめながら、しばらくの間しくしく泣いてしまっていた。

「全く……こんな暗い中で歩くんじゃない！心配したじゃないか！」「ごめんなさい……」

その後、へたり込んでしまつて時間が経ち、俺はおじいちゃんからの説教を食らっていた。

どうやらサイドンの咆哮や男性の悲鳴がかなり遠くまで聞こえていたらしく、周囲の住民が灯り片手に集まつてきていた。サイドンは住民が来る少し前に、起き上がったどこかへ去つて行つてしまった。起き上がったときはすわ再戦か、と戦々恐々としたが、こちらを見てすぐすと逃げるように去つていくサイドンには驚いた。

本当はこれ以上被害が出る前に捕まえるべきなのだろうけど、残念ながら俺はライチュウの分以外のボールを持っていない。

「聞いているのか？」

「ふえっ？あ、はい！反省してますー！」

思考に意識を割きすぎて、生返事をしてしまいジト目で見られてしまう。そんな俺とじいちゃんの所に、住民の人がやってくる。

「まあまあ、そこまでにしといてやんなガンテツ爺さん」

「ガンテツ？」

「おや？お孫さんは知らないのかい？昔木材やら何やらを使った工芸品の職人してて、性格が頑固な人だから名前と合わせてガンテツ爺さん、この辺ではそう呼ばれてるよ。にしてもガンテツ爺さん、お孫さんがいるとは思わなかったよ。にしても綺麗な銀髪だねえ。ひよつとして夏休みだからおじいちゃん家にきてるのかい？」

「いや、この子は・・・」

「そ、そうー！そうなんです！久しぶりにおじいちゃんに会いにきてて！ね！おじいちゃん！」

正直に違う、と言おうとしたおじいちゃんを遮って必死にアピールする俺。折角だしこのまま孫と祖父、として認識してもらっている方が何かと都合がいいだろう。

「にしても、都会ではこんな不思議な生きもんがペットになってるんじゃないー」

「でっかいネズミみたいなのやつやなー」

ライチュウは少し離れたところで突かれまくっていた。まあ物珍しいのだろう・・・電撃、食らわせないといいけど。

「はあ・・・とにかく、今度からは出かけるときはちゃんと行ってから出るように！いいいな？」

「はー！」

説教も訂正も諦めたのか、ため息をひとつ付けてそう締めくくるおじいちゃん。その後、畑にできたクレーター（原因：かわらわり）に驚く住民の方たちや、「化け物を見た」と言って呆れられている気絶していた男性などに別れを言って、俺とおじいちゃんは家に帰るのだった。

「そうだ・・・ライチュウ、おいで」

「ライ？」

帰宅後。ライチュウと一緒に風呂に入る。意外にも濡れるのは嫌いじゃないのか、喜んで一緒に入ってきた。風呂から上がり、二階の部屋のベッドの上でライチュウと向き合う。

「ライチュウ。おまえの、ニツクネームをつけようと思う」
「？」

思えばこれまで、『ライチュウ』『ライチュウ』と呼んできたが、もし今後ポケモンが世にたくさん現れるとなったら。ライチュウだつてでんせつでもない、言つてしまえばありふれたポケモンだ、複数現れることもあり得るだろう。そうなつてもこの子のことがわかるよう、ニツクネームが必要だと思つた。

・・・それに、この世界での唯一の家族だ。おじいちゃんは世話を焼いてくれるし、孫として接しているが、本当の意味での家族ではない。親子ようだいいもない中、本当に家族と言えるのはこの子だけだろう。それなら特別な呼び名をつけてあげたい。

「・・・ライ。今日からお前は、ライだよ」

そう言つて微笑むと、ライチュウも嬉しそうに尻尾を振りながら元気に答える。

「ライ！」

「よろしくね、ライ」

こうして、この日俺ははじめてのポケモンバトルをし、正式に新しい家族を得たのだつた。

「ようやくか・・・」

とある研究機関の研究施設。そこでは、きのみに付いての調査が行われていた。この日はとうとう、モルモットを用いた動物実験を行うことになつていた。

「この妙なきのみ・・・一体どこの誰がこんなものを・・・」

その研究員は、これまで様々な植物学の権威の元で学んできた、いわゆるスーパーエリートであつた。もはやこの日本に自分の知らない植物などない、そう思つていた。しかし、

「このような形状も、成分も未知なものが、日本にあるとは・・・」

ある日、突然政府から依頼を受けた際はかけらも信じていなかった。なんらかの方法で作つた新しい交配種か、精巧な作り物であるとすら考えていた。しかし、調べれば調べるほど、その特異な成分や

フォルムに愕然とした。

「今回の実験で新たなデータが得られるといいが・・・」

そう言って実験の準備作業を指揮していると

「○○さん！大変です！実験用のモルモットが逃げ出しました！」

「何をやっている！さっさと探し出せ！」

すいません！と泣きそうになりながら謝る下っ端にイラつきながらも指示を出す。下っ端が出て行った後、○○自身も部屋を後にし、実験の準備のために実験室へと入る。

「・・・ん？」

ふと、視界の端で通路の先を紫色の何かを通ったような気がして立ち止まる。しかし、突き当たりには何もいない。

「・・・気のせいか」

そう呟いて○○は実験室へと入って行った。

第4話

サイドンとの交戦から数週間が経過していた。あれからポケモンに出会うこともなく、日々を怠惰に過ごしている。しかし現在。俺はどうしようもない問題に直面した。

「働く方法が・・・お金を稼ぐ方法がない・・・!」

事の発端は数時間前・・・

「そういえばおじいちゃん、あの家ってローンとかどうなってるんだろう?」

「どうした急に?」

朝ごはんをおじいちゃんの家で食べている時。ふと、自分の生活している家のことが頭に浮かんだのだった。

「わしがうみちゃんの通帳のお金から出しとるよ」

「ふーん・・・」

おじいちゃんの言葉に、当たり前のように頷いた。しかし、ふと考える。

(俺の感覚では大金だったけど・・・家の物とか、光熱費とかを考えたらひよっとして足りないんじゃない?)

もしそうになると、お金がなくなったら・・・。どうしようもなくホームレスである。

「あかん・・・」

「あか・・・なんだって?」

「ライ?」

「どうしよう・・・バイトしようにもこの辺にはバイト先とかないし・・・」

というかそもそも今のこのロリボディでは、働きたいと行っても真

面目に取り合ってくれるかどうか……。

「どうしようか……ねえライ、何かないか？」

「ライ？」

ダメ元でライにも聞いてみるが、当然良いアイデアなど帰ってこない。今はまだお金に余裕があるからこそそうして昼寝したり散歩したりして過ごすことができているが……。

「何か……俺でも出来ること……何かないか……」

そういうわけで、現在自室にてネットサーフィン中である。

「これも、これも、この仕事も。全部ダメか……」

結局見つけた仕事は全て俺自身の容姿と田舎であることがネットとなり不可能と結論づけられた。

おじいちゃんに話すわけにもいかない。もし話せば、あの気の良いおじいちゃんのことだ。当然のようにわしが払うと言うだろう。そこまで面倒を見てもらうのは流石にアウトだ、俺的に。

「だめだ、とりあえず息抜きしよう。何かいい音楽とかないかな……」
そう言ったわけで、とある動画サイトへと飛ぶ。好きなアイドル歌手の歌を検索し、パソコンから大音量で聴く。

「♪やっぱこの曲いいな。……あーあ、でもお金……どうしよう
〜」

気分転換をしているのに結局またお金の問題に頭がいっぱいになる。あー、世の中なんて世知辛いのか……。

「ん？」

ボーツとパソコン画面を見ると、あることが脳裏に浮かぶ。そこには、有名な歌手の曲を歌う人と、コメント欄がある。

「……これだ！」

あつた！子供でもできて、うまくいけばお金も稼げる方法！

「・・・なんじやこりや?」

ある日、おじいちゃんことガンテツは、うみの家の前に車が止まっていることに気づいた。どうやら配達のようなのだが、何回も往復しながら多くの段ボール箱を運び込んでいる。無駄に多い段ボール箱、さぞかし辛いんだろう。というガンテツの予想に反し、配達員の男はデレデレの顔である。何事か、とうみの家へと入る。

「なんじやあこりや?」

家の中には、開封済みの段ボール箱が山積みとなっており、ライがその合間を走り回っている。ガンテツは何が何だか、と思いつつ段ボールをたどって二階へと上がる。うみの部屋、と書かれたホワイトボードのある部屋を開けるが、そこにうみはいない。

「あ、おじいちゃん!」

「ん?おお、そこじやったか」

背後からの声に振り向くと、うみの部屋の向かいの部屋から、うみが出てくるところであった。

「一体何をそんなにこうたんじや?」

「ふっふっふー」

ドヤ顔でない胸を反らすうみに、訝しげな顔を向けるガンテツ。そんなおじいちゃんの様子を意に返さず、うみは宣言する。

「おじいちゃん、俺・・・動画配信者になる!」

「・・・はあ?」

俺の思いついた策。それは、動画配信による収入源確保である。うまく軌道に乗れさえすれば金にもなるし、こんな田舎でも内容さえ考えればうまくやっていけるだろう。おじいちゃんからは変なことしてんな、程度にしか見られていなかったが、今に見てる。バンバン配信して、がつつり稼いであつと言わせてやる!

「パソコン、よし。マイク、よし。・・・それと、心の準備、よし!」

とりあえず、最初は雑談の配信だ。自室の向かいの部屋を実況部屋

として生まれ変わらせた。一軒家に一人暮らしという贅沢だからこ
そでできることである。ここから俺の、配信者としての人生が始ま
る……!

動画時間：30分

視聴者：10人

……ああ、知ってた。知ってたさ。そんな人生うまくはいかない。
10人。たったそれだけの人数が、俺の配信者デビューの数字として
刻まれたのだった。

「うううう、視聴者にすら呆れられるってどんなだよ……」

配信はそれはもう酷いものであった。誰か入ってくるたびに喋れ
なくなるし、気を利かせた視聴者が話題を振ってもフヒビアババと慌
てて全力スルーする始末。最後の方は視聴者も教えるのを諦めて退
室する人もいた。だめだ、これじゃあだめだ。

「ライ、配信って難しいよ〜!」

「ライ……」

ライに飛びつき、癒しを補給する。

「このままじゃだめだ。なんか配信で使えそうなネタ……」

キヨロキヨロとリビングを見渡していると、窓の外の綺麗な海が目
に入る。

「これだ!」

そんなわけで翌日。俺はいつものワンピースに麦わら帽子をかぶ
り、釣竿片手に家からほど近い港に来ていた。

「というわけで、今日は釣り配信をしたいと思います」

『釣りの意味違くない?』『まあ、配信初心者っぽい仕方ないね』『今日

はあのおどおどした雑談枠じゃないのか』

前回やってきていた数少ない視聴者の方が数人来てくれていた。しかし、釣り配信にも種類があるのか・・・今度調べとこう。それと、初回配信のことは忘れる。あれは黒歴史としておくから。

やや離れたところではライが海鳥を追いかけて走り回っている。ライを配信に写す訳にはいかないだろうから、そのまま遊んでくれているといいんだが・・・。

「それではやっていこうと思います。釣りは初めてなので色々教えてください」

『そういう形での配信か』『現役釣り師のワイ高みの見物』『ちくわ大明神』『誰だ今の』『初見でも思ったけどかなり可愛いな』『幼女！幼女！ツルペタ幼女！』『変態だ、つまみだせ！』

変態も出没し、コメントが少し賑やかになる。このまま少しでも見てくれる人が増えればいいんだが・・・。

釣りを始めたはいいものの、ここからがまた大変だった。

・・・

『もつと思いつきり投げれない？』

「え？ええと、こ、こうですか？」

『なんで後ろに飛ぶんだ？』『ある種の才能だろこれ・・・』

・・・

『餌つけた？』

「ああつ!?忘れてました!？」

・・・

『引いてるよ』

「あ！そ、そおい！・・・ああ、餌だけ持ってかれました・・・」

・・・

そうして視聴者からの指示のもとドツタンボタンしつっ1時間が経過した。

「えー・・・、現在1時間が経過しました。・・・釣果はゼロです・・・」
『あちゃー・・・』『草』『全然なっていない！もつとしっかり竿握って！腰も使ってホラ！そうすればもつといくんだよ遠くまで！いけた時

はかなり気持ちいいから!』『釣り師ニキ下心ないのかもしれないが結構危ない発言でワロス』『おい、●造混じってんぞ』

このままでは教えてくれた釣り師ニキにも申し訳が立たない。何としても一匹くらいは釣らねば……

「……!引いてます!当たり前ですよこれ!」

『おおっ!』『時間的にラストだろこれ!』『引けー!』『いや、少し泳がせて体力を削れ!引きが弱まってきてからが勝負だ!』『やんややんや』

「りよ、了解です!」

にわかに騒ぎ出す視聴者。必死に竿を握りながら釣り師ニキの指示通りに動く。

「もう、少しいい……」

『又ツ!』『踏ん張ってるw』『体あれ45度くらいになってね?w』『もう少した、頑張れ主!』『釣り師ニキもはや師匠っぽいわ』『わこっ』『初見です』『踏ん張る姿も可愛い……』『まだいたか、ほらはやくシベリア行くぞ変態』『容赦なさすぎて草』

どうやら初見の人が来ているようだが、相手にしている余裕がない。

「……!見えた!」

『おお!』『赤いな』『鯛?』『いや、にしても赤すぎる』『なんだあれ?』『誰か状況教えてクレメンス』『幼女主が魚と格闘中』『おけ把握』『有能w』

「ふおおおお……おお?」

最後に思いつき持ち上げると、水面から魚が揚げられる。しかし、コメント欄は困惑していた。俺も予想外で喜びよりも困惑の声が出る。

『いやまじでなんだこの魚』『見たこともない』『俺もだ。こんな魚は見たこともない』『釣り師ニキすら知らんのか……』『新種じゃね?』『配信中に新種を釣り上げる幼女w』

コメント欄では新種新種と騒いでいるが……
「これコイキングですね」

『お?』『主は知ってるのか』『釣り師ニキ敗北か?w』『(´・ω・´)』

視聴者が疑問を持っているようなので、一応説明してみる。

「コイキングはですね、さかなポケモンという分類で、すぐくよわいんですが、はんしよくりよくが高いんです」

少しノリノリで説明したのだが、なにやら視聴者の反応が悪い。

『ほーん』『いや、ポケモンがまずなんなんだ』『すぐくよわいとはまたざっくりとした情報だな・・・』『繁殖って、これがまだいるってことか?』『いやいやこれおもちゃとかだろw』『今動物図鑑サイト見てきたが、こんないなかったぞ』『俺の爺様にも聞いたが、見たことないとよ』『釣り師ニキのじいちゃんって?』『現役漁師』『その人も知らねーんじややっぱ偽物か』

「だから、これはポケモンといってですね・・・」

どうにか信じてもらいたくて、言葉が続けようとしたその時。

『これあれじゃね?最近ニュースでよく見る外来種ってやつ』

ドクン、と心臓の跳ねる音がした。前回のサイドンが思い出される。

「それってどういうニュースでした?」

『あれ?知らない?』『俺も知らなかった』『結構ニュースが上がってたぞ』『あー、熊騒動とかの奴か』『きのみ騒動の時もなかったか?』『ああ、大型の猛禽類っぽい奴な』

「すみません、最近の話題には疎くて・・・それで、どんな内容でした?」

『動画サイトにもあるから見てみ』

「ありがとうございます。ちょうど魚も釣れてキリがいいので、今日の配信はここまでにします。見てくださってありがとうございますました」

『おつ』『おつー』『また来ようかな』

配信を切る前にやってきたコメントに嬉しくなるが、とにかく今はニュースだ。パソコンと釣り竿を急いで片付ける。

コイキングは・・・しようがないか、とサイドンと同じくりリース

することにする。ペイツと海へ投げると、先程までぐったりとしていたのに、即座に泳ぎだし慌てて海の底へと消えていった。

「あった」

帰宅後、竿の片付けもそこそこにすぐにまたパソコンを起動し、外来種系のニュースを検索する。動画を再生すると、キャスターの声を消した純粋な映像に字幕を付けた物のようだった。

「・・・鳥の方はわからないかな・・・。本当にただの外来種の可能性もあるし」

そう呟き、次の熊の出没事件についての動画に飛ぶ。

「・・・丸い輪の形の模様・・・なんかそんなポケモンもいたような・・・」
今度は記憶になんとなくヒットしたものの、思い出せずよりモヤモヤしてしまう。

(でも、他のニュース以外のサイトとかでも外来種関連の情報が何件も、短期間で上がってる・・・)

『変化はゆっくりするから』

「・・・試す価値はあるかも・・・」

神の言葉を思い出しつつ、俺は明日の予定を考え、準備を始めることにした。

最近のイチオシ配信者をupするスレ part123

142：名無し

だから断然△△ちゃんだって！

143：名無し

いやいや、???もなかなか面白いぞ

144：名無し

お前ら少しは新しい名前あげろや。さっきから有名どころばっかじゃん

145：名無し

じゃあ1人期待してる新人を推しとこうかな

146：名無し

どんな配信者？

147：名無し

海チャンネルって配信者

148：名無し

まじで知らなかった。情報うpれ

149：名無し

性別は女。というか幼女

150：名無し

k t k r

151：名無し

やったぜ

152：名無し

お前らもちつけ。まだ二つしか動画上げてないが、おそらくガチの初心者。

1回目 ーーURLーー

2回目ーーURLーー

153：名無し

おい1回目見てきたがなんぞこれ。ガツチガチやないか

154：名無し

しかもすげえ支離滅裂なこと言ってるしw

155：名無し

いくら幼女とはいえこれは・・・

156：名無し

銀髪蒼眼で一人称俺のロリ・・・ありだな

157：名無し

わかるマーン

158：名無し

2回目見たぞ。なんか変なの釣って変なこと言ってたな

159：名無し

だいぶ不思議ちゃんだな。ってか誰かこの子の言ってるポケモンって何か知ってる？

160：名無し

さあ？アニメキャラじゃね？

161：名無し

調べてきた。ポケモンなんて名前なかったぞ

162：名無し

デ○モンならあったぞ

163：名無し

それは多分違うわ

164：名無し

そうか、パチモンだったか・・・

165：名無し

山田くん、>>164の命持ってっちゃって

166：名無し

>>165はい

167：名無し

テラヒドスw

168：名無し

とにかく次回配信の時に聞いてみようかな

169：名無し

まあある意味で気になる配信者だなこれは

170：名無し

幼女だしな

171：名無し

ロリコンだ、殺れ

172：名無し

ロリコンは豚箱に出荷よー(´・ω・´)

173：名無し

そんなー(´・ω・´)

第5話

コイキングを釣り上げた翌日。俺は今度は、持てるだけ必要なものを持って山の方へとやってきていた。

「でもおじいちゃんも来るとは思わなかったなあ・・・」

「何を言つとるか。ふらつと出て行く前科もちじゃろうがうみちゃん
は」

そう、山に入るとおじいちゃんに伝えたところ、行つてはいけな
いと言いついてしまったのだ。

「前も夜に出歩いて危険な目におうたんじゃろうが。それに山は素人
がむやみに入るところじゃないんじや」

正論を並べられぐうの音も出ない状態になった。それでもどうに
か説得して、おじいちゃんがついてくることを条件に山に入ること
を許可してもらった。

「しかし、なんで山に入りたいんじや？わしが言うんもなんじやが、何
もないぞ？」

「調べたいことがあるんだよ。・・・何かに会えるといいんだけど」
「獣か？ダメじゃ、猪や熊以外にも、危険なもんはぎょうさんおる。何
にも会わんのが一番じゃろうが」

軽く怒ったようで、護身用に持ってきた鉈を担ぎ俺を優しめに小突
くおじいちゃん。

「でも、それじゃあダメなんだよ。山の状況を調べておかないと、大変
なことになるかもしれないんだ」

「よく分からんが・・・その手に持つとるかめらもその為か？」

今回俺は、配信しつつの山上りは流石に危険だと思い、記録用にビ
デオカメラを用意した。背中のリュックには、ロープや非常食、十徳
ナイフなど、おじいちゃん監修の元用意したサバイバル用具が詰まっ
ている。ライはと言うと、パンパンになったリュックの上に鎮座して
いる。・・・流石に重いんだが。

「じゃあ入るぞ」

「うん」

真剣な顔になったおじいちゃんにつられ、こちらも気を引き締める。そして、おじいちゃんが先頭に立ち山の奥へと進むのだった。

「何も出ないね」

「最初にゆうたじゃろうが。何もないのが一番よ」

山を探索して2時間ほど。溪流へとたどり着いた俺たちは、お昼を作りつつ休憩していた。

結局半日調べて結果は遭遇0。ポケモンにも他の獣にも合うことはなかった。獣はともかく、ポケモンに会えないと言うのは少し焦る。

神（自称）は「ゆつくり変化していく」と書いていた。しかし、既に人を襲い始めたポケモンがいるかもしれない以上、それを俺はほつとけない。俺はポケモンが好きだ。しかしこのままポケモンが『害獣』として認識されてしまえば、そこから先はポケモンと人との争いだ。そんな形の関係なんて俺は嫌だ。だからこそ、不安要素は消しておきたい。

「ごめんおじいちゃん、もう少し調べてもいい？」

案内役兼お目付役のおじいちゃんに頼むと、おじいちゃんは渋い顔をしつつも頷いた。

「・・・片付けをしなさい」

「・・・！わかった！」

そうしてうみが午後の探索の準備をしているなか、ガンテツは周囲を戸惑いの表情で見回していた。

「・・・どうしたの？」

「いや・・・。うみちゃんは早く準備しなさい」

うん、わかった。そう言って作業を続けるうみを見つつ、ガンテツ

は思案する。

(流石におかしい……。確かに獣に会うのは危険じゃし合わないに越したことはないが……。この山は別に手入れが行き届いとるわけでもない。普段なら小動物程度であれば遭遇するはず……)

「なにより、なあ……」

ガンテツは自分が座っている倒木の後ろを見る。うみには気づけなかったが、そこにはまるで砲弾か何かに貫かれたかのような大穴が開いた木があった。

(やはり危険だ。今すぐうみを連れて帰るべきだ)

頭の中の理性が叫ぶ。やはり帰ろう、そううみに言い聞かせようとしたその時。

ガサツ……

「!!」

ガンテツの後ろで草が揺れた。とっさにうみを守るよう近くへ走る。

「おじいちゃん?」

「静かに!何かおる……!」

鉈を抜き、慎重に草むらへと向けるガンテツ。後ろでは、うみがガンテツの言葉に驚き、無意識に背後へ隠れようとする。

ガサガサツ……ザザツ

「……!?こいつは、いったいなんじゃ!」

現れたのは、全身が鎧のようなものに覆われた得体の知れない生き物だった。そいつはこちらをじっと見ている。

「ようわからんが、とにかくうみちゃん。逃げんさい」

刺激しないよう小声で囁くが、返事がない。どうしたのかとちらりと振り返ると、そこには顔面蒼白でガンテツの服を掴むうみがいた。

「どうした、怖いじゃろうが、とりあえず逃げんと……」

「……おじいちゃん。逃げよう」

「ああ、わしも後から逃げる。ちゃんと追いつくから、早くお前だけでも……」

「違う!あれはサナギラス……!山すら崩せる力を持つてる!そんな

鈍じゃダメだ！逃げないよ！」

錯乱気味に叫んだうみに反応したのか、サナギラスがこちらへ向けて前傾姿勢をとる。

（あれは・・・確かサナギラスの特徴は・・・!!やばい！）

「おじいちゃん、横に飛んで！早く！」

「!？」

さっとガンテツに指示を出しつつ飛ぶうみと、反射的に横っ飛びするガンテツ。

すると先程まで2人がいた場所を、高速でサナギラスが通り抜ける。

「か、間一髪・・・！」

「なん・・・という・・・」

なんとか避けられたことに安堵するうみと、後ろのサナギラスを見て絶句するガンテツ。

そこには、突っ込んだ衝撃で大穴の空いた木と、その先でサナギラスがめり込み巨大なヒビの入った岩盤があった。サナギラスは、自身の背後から圧縮ガスを噴射して高速で突っ込むことができる。それに加えての鎧のような体。それが生み出す結果は見ての通りである。

「逃げよう、おじいちゃん！」

「っ、お、おう」

うみの言葉に頷くガンテツ。急いでその場を離れる2人に、ライも流石に状況を読んで、横っ飛び時にリュックから飛び降りたまま2人を追う。

その後ろでは、完全に2人をロックオンしたサナギラスが、岩盤から這い出て少しずつ追いかけてくるのだった。

「・・・どうじゃ!？」

「・・・ダメ！まだ来てる！」

サナギラスから一心不乱に逃げる2人。しかし、その背後から木の倒れる音が近づいてくる。どうやらサナギラスは先ほどと同じよう

に突撃を繰り返しつつ追いかけてきているようだった。

「……しょうがない！」

うみは突然サナギラスの方を向いて立ち止まる。それに驚くガンテツ。

「何をしとる！はよう逃げんか！」

「おじいちゃんは先に行つて！俺とライであいつを止める！」

「いかん！あんなものを食らったら一たまりもないぞ！」

なんとかうみを連れて逃げようとするガンテツだったが、次のうみの言葉に固まる。

「このまま逃げてたら、あいつが住宅街まで来ちゃうよ！」

「！」

もしもあの化け物が人の住む圏内までやってきてしまったら。木どころか岩盤を破壊するほどの化け物だ。想像するだけでもゾツとする。

「しかし……！」

だがガンテツにとつて、もはやうみは本当の孫のようなものである。そんな彼女をおいて逃げることはできない。

「……きたー！」

ガンテツの葛藤をあざ笑うかのように、木々をなぎ倒しつつサナギラスが追いついてくる。猪や熊よりも小さいというのに、今やその姿を見るだけで恐ろしい。

「ライ！準備はいい!？」

「ライ！」

臨戦態勢に入ったライ。それを見たサナギラスは、先程まで感情の見えなかった動かない顔に驚愕の雰囲気を纏う。そして次の瞬間には、ライを敵と判断したのか、うみとガンテツから視線をそらす。

「フーッ」

「……」

そうして、ライとサナギラスとの間に緊張が走る。あたりが静寂に包まれ、見守るガンテツとうみの間にもプレッシャーがかかる。

「……！」

「ライ！『かげぶんしん』！」

最初に動いたのはサナギラスだった。先程と同じように高速での体当たり。対してうみは、サイドン戦でも使ったかげぶんしんの攪乱を狙う。

「・・・！」

「ラツ！」

「！ライ！」

しかし、サナギラスは3匹に別れたライたちの中から、あつさりと本物を見分け、弾き飛ばしてしまう。幸いにも、ライは吹き飛ばされた先にあつた枝を器用にも尻尾でつかんで耐える。

「・・・」

「!?しまった!?!」

しかし、サナギラスはゆつくりとうみ達の方を見る。吹き飛ばされたライは、サナギラスを挟んで反対側だ。

(まさか、あえてあつち方向に吹き飛ばしたのか・・・!?)

まさかの事態に固まるうみ。と、またしてもサナギラスが高速での体当たりを敢行する。その狙いは当然のごとくうみ達。ライも慌ててこちらに戻るが、距離が離れすぎている。

(完全に舐めていた・・・! 相手が野生だからと油断してた・・・!)

トレーナーの付いていない野生のポケモンだからと、どこかこちらが有利だと慢心していた。しかし今となっては後の祭り。サナギラスの突っ込んでくるのがスローモーションで見える。

(これが走馬灯なのかな・・・ごめんなさい・・・おじいちゃん)

自身のわがままに付き合わせて、危険な目に合わせてしまったこの世界での祖父へと心の中で謝るうみ。もう当たる、という距離までサナギラスがやってきた時だった。

「おおおおおおあああああー！」

「っ!?!おじいちゃん!?!」

「・・・!?!」

ガンテツがサナギラスとうみの間に入り、持っていた鉈の側面で防御しようとする。しかし、そんなものでどうにかできるような体当た

りではなく、2人とも吹っ飛ばされてしまった。

「おじいちゃん！」

「・・・かはっ！」

吹っ飛ばされた2人は、ちょうど背後にあつたなだらかな崖から転がり落ちて行き、やがて茂みの中へと入っていった。

「ラァ!!」

「!?!?」

それを見て怒りの形相になったライは、追いつくと同時に『かわらわり』を、隙だらけのサナギラスの横側面に叩き込む。油断していたサナギラスは、効果抜群の一撃を受け、吹き飛ばされる。

追撃しようとしたライだったが、まずはパートナーの無事を確認せねば、と急いで崖を下っていくのだった。

「全治3ヶ月ですね」

サナギラスとの遭遇の後。吹き飛ばされ、崖から落ちた俺たちは、サナギラスの追撃を逃れ急いでおじいちゃんを隣町の病院へと連れていった。結果は右腕の骨折と肋骨一本にヒビ。サナギラスの体当たりをまともに食らってこの結果なら、奇跡的といっていい結果だろう。

「にしてもガンテツ爺さん、あんたも歳なんだし、山で遊ぶんはほどほどこにときいよ?」

「はっはっは、耳がいたいな」

サナギラスのことを正直に話すわけにもいかず、山で孫と戯れていて誤って崖から転落、という話になっていた。

診察を終えて病室から顔見知りの医者が出て行き、ガンテツは傍らでずっと黙っていたうみを見る。

「・・・なんじゃ、その辛気臭いツラは」

「・・・」

勤めて明るく話しかけるが、うみは俯いたまま何も言わない。窓の外へと目を向けつつ、ガンテツは呟く。

「これはお前のせいじゃないぞ」

その言葉に弾かれたように顔を上げるうみ。その目の周りは泣きはらしたかのように赤くなっていた。

「だって！俺が、俺が山を調べるって言ったから・・・！」

「ライ・・・」

そう言つてまた泣きそうになるうみと、それを心配そうにリュックの中から見つめるライ。病院内ではリュックに隠れるよう言われていたので近くには行かず、リュックの中から心配げに見ている。

ガンテツはまた俯いたうみの頭を、無事な左手で撫でる。

「それでもお前さんは、自分じやのうて他の住民のことを考えとつた」
「！」

「あんなのがおるなんて誰も知らんじやろうや。あれは避けられん事故じやつたつちゆうことじや。でもうみはあのとき、自分が逃げることで他の人が襲われることを良しとせんかった。・・・うみ、お前は優しい子じや」

そう言つて撫でてくれるガンテツ。呆けたような顔で聞いていたうみだったが、すぐに顔をくしゃつと歪ませて、泣き出す。

「ふっ・・・ぐっ、ぐうっ・・・」

「よしよし、泣いたらええ。今はしっかり泣いとけ」

その後、面会時間が終わるまでうみはガンテツの元を離れようとしなかった。

「・・・ライ」

「チュウ？」

自宅へと戻り、1人の夜を過ごしていたうみ。リビングのソファで

喋ることなくじつとしていた。しかし、おもむろにライへと話しかける。

「あいつに、勝てる?」

「・・・」

あいつ、と言うのがサナギラスを指しているのはライにもわかった。サナギラスはタイプいわ・じめん。サイドンと同じく、ライのでんきわざは効かない。こちらが圧倒的に不利。しかしそれでも、うみはライを連れて行くつもりだ。うみの真剣な顔を見て、ライは元氣よく頷いた。

「ライ!」

「・・・ありがとう」

そつと微笑むと、ガンテツからもらったサバイバル用品をリュックへと詰め直す。

そしてパソコンを立ち上げると、すぐさま一つのファイルを開く。

「・・・力を貸して」

開かれたのは預かりシステム。頭の中に都合よく入ってきた使い方、様々な機能をアンロックしていく。そして、ボックス内にある5つのボールの中からある一つをクリックする。そのポケモンの詳細が書かれているタブが開くと、その斜め上にあるマークをクリックする。

程なくして、パソコンの前にあるものが置かれる。それをうみは直ぐにライへと渡す。

「・・・行こう、ライ」

「ライ!ライライ!チュウ!」

やる気満々なライを連れ、うみは家を出た。

目指すは、サナギラスのいた山。

「・・・リベンジマッチだ」

山のとある場所。そこには、悠然と佇むサナギラスの姿があった。サナギラスは、微動だにせずじつと木陰にいる。その身には、最後にライが与えた『かわらわり』のダメージか、若干の凹みがある。と、突然サナギラスは光りだす。目も開けてられないほどの光の中、サナギラスの姿が変わってゆく。手が生え、足が生え、尻尾が伸び、体自体がさらに大きくなる。2メートルほどのおおきさにまでなると、光が収まっていく。そこには、もはやサナギラスの姿はなかった。

「・・・ゴアアアアアアアアア!!!」

暴君が、産声をあげた。

第6話

「ここだったよね・・・」

日がもうすぐ沈み夜になる寸前。俺はライに匂いを辿ってもらい、共に初めてサナギラスと出会った溪流付近まで来ていた。

「ライ、準備お願い」

「ライー！」

よしきた！というような感じで一声鳴き、ライがいつでも戦えるよう臨戦態勢に入る。そして、俺は昼と同じ位置で焚き火をし、煙と明かりが最大限に出るようにする。

（あのタイミングで出てきたってことは、サナギラスは多分ここをナワバリにしているんだろう。ならまたここで同じように侵入者がいることがわかるようにすれば・・・）

と、ライの尻尾がピクリと動き、山の奥に向けて威嚇する。

「フーツー！ライライー！」

「！来たか!？」

ライの見据える先、山の奥から地響きが近づいてくる。直ぐに逃げられるように料理以外の荷物を片付け、遭遇に備える。

「・・・なんか、振動がでかい?」

若干の違和感を覚えたうみが思考を巡らせていると、前方から石の礫がいくつも飛んでくる。

「ライー！」

しかし、それらはライが尻尾で叩き落とす。すでに地響きは直ぐそばまで来ており、思考を一旦置いて戦いに備えるうみ。

「グアアアアアアアア！」

「なっ!？」

現れたのは、サナギラスではなかった。緑の巨体を持つそのポケモンは、サナギラスの進化形にして、山すら破壊するという規格外。

「バンギラス・・・!？」

「グアア!!」

バンギラスはうみとライチュウを視認すると、怒りの形相で襲いか

かる。とつぎにライがうみを守ってバンギラスの前に出る。バンギラスはそれを御構い無しにドスドスと突っ込む。

(別個体・・・!?それともあのサナギラスが進化したのか・・・?だけど!)

「そいつは悪手だろ!ライ! 『かわらわり』!」

「ラアアイ、チュウウウ!!」

「ガッ!」

馬鹿みたいに突っ込んできたバンギラスに、ライが素早さを生かした速攻を叩き込む。バンギラスが驚愕の声を上げつつ後退する。サナギラスの時はこちらにとつて不利ないわ・じめんタイプであったが、バンギラスはいわ・あく。でんきわざも効くようになったため、むしろ都合だ。

「ライ!動き続けて攪乱しろ!」

「ラッ!」

俺の指示に合わせて、ライが木々や岩を使い三次元的な高速機動を行う。バンギラスは確か、すばやさがかなり低い部類のポケモンだった筈。こうしてライが動き続ければ、相手の攻撃は当たらない。

「グウ!」

「!来た!」

どれだけ腕を振り回しても当たらないライにイラついたのか、俺に狙いを変えるバンギラス。ライを無視してこちらへと近づいてくるバンギラスだが、

(狙い通り!)

バンギラスは、溪流の川を挟んだ対岸にいた。川幅はかなり小さく流れも緩やかなため、ためらいなく渡り始めるバンギラス。そこへ、ライが枝を飛び移って真上を取る。

「!」

ライに気づいたバンギラスは、空中なら逃げられないと判断したのか、川の途中で立ち止まりライに向けて口を開ける。そして、一瞬のタメの後、強力な熱線が放たれる。その熱線はおそらくノーマルタイプのわざである『はかいこうせん』だろう。ライへと向かうその光線

は、ライを撃ち抜いてなお空高くへと放射されていた。

『はかいこうせん』を撃ち終わり、相手を倒したことに満足したバンギラスは、次はお前だ、という風にうみの方を向く。

「残念でした」

「ライ！」

「!？」

そこには、ドヤ顔のうみとピンピンしているライがいた。最初から飛び上がっているのは『かげぶんしん』で出た偽物だったのだ。

「グオア！」

バンギラスは一瞬だけ驚いていたが、すぐに怒りの声を上げ再度『はかいこうせん』を撃とうとする。

「ライ、行くぞ」

うみの言葉に頷くと、ライがもちものを取り出す。

それは、黄色い宝石のような形をしていた。

「それだけ濡れてれば、電気もかなり通るだろう？」

バンギラスは川を渡っていた。かなり乱暴に歩いており、当然ずぶ濡れだ。ライが宝石・・・でんきのジュエルを砕くと同時に、バンギラスのはかいこうせんが発射される。

「ライ！『10万ボルト』！」

「ラアアイ、チュウウウ!!」

渾身の電撃が、寸分変わらずバンギラスを撃ち抜く。

「ガガガガガガガガ!?!」

はかいこうせんはうみのすぐ横を掠め背後にあつた木々を数メートルほどなぎ倒していく。

バンギラスの方はというと、濡れた状態でジュエルに強化された電撃を受け、苦悶の声を上げる。電撃が終わると共に前のめりに倒れるバンギラス。しばらく警戒して離れて見守るが、起き上がることはなかった。

「・・・ふう」

安堵のため息を一つつき、背後を見る。そこには、はかいこうせんによって破壊された後が道のようになっていた。もしこれが直撃し

たら、と思うとゾツとする。

「にとしてはバトル中はなんともなかったな……そうだ、バンギラス！」
慌てて駆け寄り倒れたバンギラスの容態を診る。危険なポケモンであるということ、おじいちゃんに怪我をさせたということから能動的にバトルを仕掛けたが、懲らしめることが大事なのであり、バンギラスを殺してしまいたい訳ではない。

「……専門家って訳じゃないけど、ダメージだけで後遺症とかはない……といいけど」

当然というべきか驚くべきか、バンギラスは倒れ気絶してはいたものの、死んではいなかった。いわゆる「ひんし」状態である。

「人間の薬がどこまで効くのかわからないけど……あれ？」

持ってきていた救急箱から薬を取り出そうとした時。その中に入れた覚えのないものがあつた。

「これって……」

それは、蓋ではなくスプレー式で、紫の容器に入った謎の液体だった。一つではなく複数個がまとめて束になっている。

「これ、ポケモン用のキズぐすり……!?なんにせよ有難い！」

急いでバンギラスの傷のある部分にスプレーしていく。

「グツ……」

「痛いのか？悪いが我慢してくれ」

染みるのか、時折呻くバンギラスに声をかけつつ、ひたすらキズぐすりをかけ、患部に包帯を巻いていく。どうやらライとの戦闘時以外にも、いろんなところにぶつけていたようだった。そして、その中にはだいぶ前からできていたと思われる深い傷があつた。

「……これ、サナギラスの頃からあつたのか？」

進化しようとも、ダメージは残る。ひよつとしたらサナギラスの頃からこの怪我で気が立っていたのかもしれない。

「……ふう、出来た……」

どうにか全てのキズへ処置を終えると、疲労感から倒木を椅子がわりに座り込む。バンギラスへの治療中に周囲へ警戒してくれていたライも戻ってきて、膝の上に飛び乗り甘えてくる。

「よしよし、ありがとうねライ」

「ライアイ！」

もつと褒めて！という風にじやれつくライを撫でながら、未だ寝ているバンギラスを見る。

(こいつはどうしよう・・・サイドンの時も思ったけど、いつまでも倒したら放置、なんてしてられないしなあ・・・特にバンギラスは、放っておいたら山壊しそうだし・・・)

全てにおいてモンスターボールが無いのが悔やまれる。と、その時、茂みから音が複数近づいてくる。

「・・・！またか？ライー！」

「ライー！」

連戦で申し訳ない、と謝りつつライの前に出てもらう。すると茂みから、沢山の巨大な蜂がとびだしてくる。

「スピアーー！」

それはどくばちポケモンのスピアーの群れだった。両手とおしり、三箇所毒針を持って素早く攻撃してくるポケモンであり、何より群で襲ってくるという習性。これが今、一番厄介だった。

「スピッ！」

数えるのも難しい数のスピアーが『どくばり』で襲いかかる。しかしスピードならライも負けていない。

「ライ、10万ボルト！」

「ライー！」

「ス、スピッ!？」

電撃によるなぎ払いにより感電し、倒れていくスピアー達。しかし、相手はたくさんのもれである。どうやらどこかにある巣を刺激していたらしい。今まで出てこなかったのは、バンギラスを警戒していることか。

「！ダメー！」

そんな考えをめぐらしていると、ライの電撃を躲した一匹が眠っているバンギラスへと向かう。

(今のバンギラスは無防備だ！それに怪我也完治してない！もし今ス

ピアアの毒を食らったら本当に死ぬかもしれない！)

「やめろ！」

「ライ!？」

咄嗟にバンギラスとスピアーの間に入り、両手を広げて立ちふさが
る。驚くライの声の方を向くと、どくばりを躲しながらこちらを心配
そうに見ている。

(・・・ごめん、ライ・・・!)

バカなことをしている、と自分を噛いながら目を瞑る。

「・・・っ！」

「スピアー!？」

「・・・え?！」

しかし、どくばりは刺さってこず、スピアーの悲鳴が聞こえる。
そつと目を開くと、俺の後ろから腕が伸び、スピアーを鷲掴みにして
いた。

「・・・バンギラス?！」

「・・・」

俺の呼びかけには答えず、スピアーをライが足止めしている群れに
向かってぶん投げるバンギラス。突如飛んできた仲間にぶち当たり
混乱するスピアー達。と、ゆっくりと起き上がったバンギラスは、怒
りの形相で口を開くと、はかいこうせんを放つ。

「グ、ガアアアアア!!！」

咄嗟に群れからライが離れると同時に、スピアーの群れに直撃した
はかいこうせん。文字通り蜂の巣をつついたような騒ぎが起こるス
ピアー達。結局、群れはどこかへと撤退していった。

「・・・! そうだ、バンギラス! 大丈夫か!？」

その一部始終を呆けて見守っていた俺だったが、慌ててバンギラス
に駆け寄る。

「・・・」

しかしバンギラスは俺をそつと押しのけたちあがる。こちらを見
る目には、もう怒りも敵意もなかった。

問題ない、というかのような仏頂面のバンギラスに、少しだけ苦笑

してライを抱き上げる。

「一緒に来ないか？」

「・・・!?」

俺の言葉に驚いたような顔をするバンギラス。次いで躊躇うようにそわそわしていると、俺の腕の中にいるライが話しかける。

「ライー！」

「・・・グル」

「ライライライー！」

「・・・」

なにやらよく分からないうライとバンギラスの会話はしばらく続き、その後バンギラスの方が諦めたようなため息をつく。

「・・・?うわー！」

首を傾げていると、おもむろにバンギラスが俺を担ぐと、やまのふもとへ向けて歩き出す。

「・・・ひよつとして、承諾ってことか？」

「・・・」

好きに受け取れ、という風に仏頂面を崩さないバンギラスだが、後ろでバチンバチンと尻尾が揺れていた。

「ははっ！よろしくな！バンギラス！」

「ライー！」

素直じゃねえな、と思いつつ新しい家族に挨拶する俺とライ。そんな俺たちを担いだままふん、と鼻息で返事するバンギラスの尻尾は、やはり上機嫌にブンブン振られているのだった。

「あ、でもおじいちゃんにはちゃんと謝ってもらおうからな」

「・・・グルウ・・・」

「おーい、○○ー！ちよつとこつち来んか！」

「あいよー・・・」

とある海域、漁師が網の引き揚げをしている時のこと。○○こと『釣り師ニキ』は自身の祖父に言われ、漁の手伝いに来ていた。

「つたく、こっちはまだレポートも課題もあるつてのに・・・」

ぶつくさ文句を言いつつ、これ以上何か言われる前に、と急いで祖父の元へ行く。

「で、どうしたの？」

「見たこともないハリセンボンが網にかかるとるんじゃ！ほれ！」

祖父の指差す先を見ると、ハリセンボンがかかっていた。しかし、たしかにそこにいたハリセンボンは、見たことのない種類であった。「まじで分かんねーな。これ最近よく聞く新種じゃね？」

そう言つて作業に戻ろうとするが、祖父がまたしても声を上げる。

「待て!!なんじゃあ、あれは!!」

またかよ、と思いつつ祖父の見ている方を向いた○○は、言葉を失った。

「・・・は？」

漁船のすぐ近く、海面から何かが出ている。鯨か、とも思われたがそれよりさらに「青い」その何かは潜ったかと思うと、一瞬の間をおいて海中から飛び上がる。

「うわああああ!!」

「落ち着け！船を安定させるんじゃー！」

同じ船に乗っていた他の漁師達が慌てる中、その超巨大な何かは、漁船の上を軽々と超え海の中へと入っていく。

「うお！波が!？」

「生簀を閉めろ！さっさと逃げるんじゃ！○○！はよう動け！」

祖父が叫ぶが、○○はぼうつと海を見続ける。

「・・・目が、あった・・・」

その何かが飛び上がり、ひねりを加えて飛び上がり漁船の真上に来た時。○○はたしかにその生き物と目があったのを感じた。深く青い海の底を見ているかのような気分になり、またその異様に見とれていた。

祖父の指示が響く中、○○はその何かが海の底へと帰って行くのを
ずっと見ていたのだった。

第7話

バンギラスとのバトル、スピアーの撃退から夜が明けた。おじいちゃんは入院中のため、近所のおばあちゃんが朝ごはんを作ってくれた。

「しかし、ガンテツ爺さんが怪我してしまうなんて災難だったねえ」

「ええ、まあ・・・」

本当のことを言うわけにもいかず、苦笑いするうみ。しかしそんなことは御構い無しに話し続けるおばあちゃん。どうやら話し相手ができ嬉しいらしい。

「ライちゃんも、まだたくさんあるけえね〜」

「ライ！」

ライにもご飯を出してくれるというのはありがたい。・・・けどライや。それキャットフードだぞ。お前はそれでいいのか。

「うみちゃん、お代わりいるかい？」

「あ、はい。お願いします」

茶碗を持って台所へ行くおばあちゃんを見つつ、ちらりと窓の外を見る。

「・・・」

(ごめん・・・けどそんな目でこっち見ないで・・・！)

窓の外では、こちらを恨めしそうに見ながらキャットフードをもそもそと食んでいるバンギラスがいた。

いやまあ家に入ったら床抜けちゃうし・・・。

そんな言い訳のようなことを考えていると、おばあちゃんがお代わりを持って戻ってくる。

「それにしても、最近の熊つてのは随分おかしな形してるねえ」

「ははは・・・ソウデスネ」

「おお、うみちゃん！どこに行ってたん・・・なんじゃあ!？」

バンギラスに乗って山を下った時。住民達が集まっている所に合流した。話を聞くと、どうやらおじいちゃんに頼まれて俺のお守りをするつもりだった人が、俺が家にいないのに気づいて探そうと人手を集めている所だったらしい。

「あの・・・えと・・・これは・・・」

上手いことバンギラスのことを説明できず、挙動不審になるうみ。住民達はそんなうみの横で所在なさげに立っているバンギラスを見ている。

「ほえー、最近外来種がなんだと騒がれとるが、こんな熊は見たことがないなあ」

「・・・え?」

その言葉にキョトンとするうみ。その後も住民達（備考：年寄りばかり）は感心したようにバンギラスを叩いたり撫でたりしている。

「にしても随分とおとなしいもんじゃなあ。・・・硬いのお!」

「うみちゃんを乗せてたってことは、うみちゃんのペットかい?」

「え?・・・あ、はい!そーなんですよ!あ、あはははは・・・」

(いいのか!?それでいいのかあんたら!?)

あまりの老人達の無頓着さにある意味戦慄するうみであった。年寄りが周囲に群がっている間、バンギラスは黙ってなすがままとなっており、後で若干不機嫌そうなバンギラスのアフターフオローに苦勞するうみの姿があった。

そんな昨夜の珍事件を回想しつつ朝食を終えたうみは、食事を作ってくれたおばあちゃんにお礼を言うと、家に帰る前に地域の公民館へと向かった。

「・・・そうか、山の中にそんな巨大な蜂が・・・」

そう言って頷くのは、うみ達の住む地域の山でマタギのようなことをしている老人だった。他にも、周囲の山や森の管理をしている所有者のおじさんも来ている。スピアーが巣を作り、山に潜んでいると言うことは、今後山に入った人が被害に遭う可能性が高い。しかも今回

のバンガラス騒動やサイドン騒動をうけて、山の調査に入ることが検討されていることがわかったのだ。

そのため、昨日集まっていた人の中から、いろいろなことを決める立場にある人を見つけ、話があるというところで呼んでおいたのだ。

「信じろつちゆうんか？子供の与太話じゃろうに」

どうやら山の所有者の人は信じてくれてないようだ。しかし、もしなんの準備もなしにスピーアと鉢合わせでもしたら、どくばりによる一撃で簡単に殺されてしまうだろう。

「お願いです、信じてください！本当に、今の山は危険なんです！」

「熊や猪ならそこにおけるマタギの爺さんがどうにかする！そもそも、でかかろうが蜂は蜂、刺されることには気をつげんと言っんじやろうが、そもそも近づかんかったらええ話じゃ。嬢ちゃん心配せんでええ！まったく、ようわからん生き物を飼つとると飼い主までおかしうなるんか・・・」

所有者の人の言葉に、連れてきていたライが反応する。パチパチと頬の電気袋から電気が漏れ、今にもぶっ放しそうだ。

「・・・それで、その蜂にはどんな対応をすればいいんだい？」

「・・・！」

「爺さん、あんた信じるんか？」

所有者の人は信じられないものを見る目でマタギの人を見る。

「わしも本気で信じとるわけでは無か。ただ、山つちゆうんは舐めてかかることえらいことになるけえのう。できる準備はすべきじやろうが」

マタギの人の言葉に、所有者も唸る。その様子を見つつ、マタギのおじいさんがこちらに話を振る。

「それで、どうなんだい？」

「あ、はい、ええと、とりあえずそれらしき姿を見たら、何もせず近づかないようにしてください。縄張りに入った存在に対しては容赦ないですが、逆に言えば入りさえしなければ積極的に襲ってくることはないはずです」

それに、と続けて俺は公民館の窓の外を見る。それにつられて外を

見た2人は絶句していた。

「な、な、な・・・!?」

「・・・これは」

外ではこちらの様子を伺うようにバンギラスが覗き込んでいた。所有者のおじさんは腰を抜かし、マタギのおじいさんも目を見開いている。

「この子をおじいさんと一緒についていかせます。もしもスピーアーに襲われたら、助けてくれますので」

「・・・この獣は一体何かな?」

先に復活したおじいさんがバンギラスから目を離さずに聞いてくる。俺はどうせ信じないだろうとわかっているが、ポケモンとしてのバンギラスについての説明をする。

「・・・山を崩せるほどの怪物・・・か」

説明を聞いたおじいさんは何かを考えるようにして黙り込む。代わりに、所有者のおじさんが慌てたように叫ぶ。

「じよ、冗談じゃない!あの山を崩されでもしたら・・・!」

そう言っただけで慌てるおじいさんに、緊張で引きつりそうな顔を務めて引きしめながら、安心させるように説得する。

「大丈夫です、この子は俺の家族です。・・・ですがそうですね。もし仮にこの子が山を崩してしまったとしたら・・・」

その先を一旦溜める俺。固唾を飲んで次の言葉を待つおじいさんに、笑いながら言う。

「俺をどのようにしても構いません」

(だって身寄りもないから村八分的なことになったら俺生きていけないし、責任取りようがないしね)

「どう思うんじや」

うみが言いたいことを言って、当日の話を進めて帰っていったら。無言で2人残っていた中、マタギの老人が呟く。

「はつきりいつて理解できん。・・・しかし実際によくわからんもんを見せられて正直半分くらいは信じ始めとる」

そう言って吐き捨てるのは、うみが入った山を管理している男。最初は少女のよく分からん世迷言と一蹴するつもりだった。しかし最後の言葉に込められた覚悟が、少女の言葉を戯言と断じさせない。

「何があそこまであの子を動かすんじやろうか。何にせよ、調べることは確定しとるし、好きにさせたらええ」

「甘いとう、やはり子どもができるとうなるんか」

「あんたの方がよっぽど甘いわ。わしはただ山に異常がなければそれでええ」

そう言って立ち上がる男に、老人が再度呟く。

「あの生き物・・・クマだ何だと言われているが、どのクマにも特徴は当てはまらん」

その言葉に男が振り返る。老人は続ける。

「そもそもわしの知る山の生き物、そのどれにも当てはまらん。あれはまるで・・・」

「やめてくれんか爺さん」

化け物じゃ、と続けようとした老人を男が遮る。

「・・・うまくは言えんが、あの子はあれを家族とまで断じた。それに自分をどうとでもせえ、とも言った。そこまでの覚悟があるんじや。あれが何であれ信じてあげんとかわいそうやろが」

そう言って立ち去る男の背を驚きの表情で見送った老人は、くつくと笑う。

「まったく、やはり甘いんはお前じゃ」

そんなやりとりがあったことはつゆ知らず、うみは配信部屋で配信の準備をしていた。

「よし、準備はオツケー。あ……人がもう来てる」

準備をし、配信サイトにログインすると、すでに配信前から2、3人の視聴者がやってきていた。そのことに少し嬉しくなりながら、うみは配信を始める。

「はい、どーもこんばんは。うみです」

『わこつ』『わこつ』『配信やっぱ来たー！わこつ』

「始まる前から来て下さるとは、ありがとうございますー！」

『釣りのことまで教えた仲だしな』『また緊張してガチガチの雑談でもする？w』『はあー！やはり今日もカワユス』『おう変態、東京湾とオホーツク海、沈むならどこがいい？』『素直に死んで♡』『あるえ!』『釣り師ニキでしたか。その節はお世話になりました。最初の配信については忘れてくださいよう……。あ、変態さんはお断りです。でも聞いて行くだけなら問題ないですよー』

『ん？』『あれ？』『グフウ!？あ、でもうみちゃんにならそう呼ばれてもいいかも……。ってかなんかあらしい方が上手くなってね？』

「何を言いますか。元からお話は得意ですよ？最初がまずかつただけで」

そこまで話してから、少しずつ初見さんが混じり、話が盛り上がってくる。

『結構可愛いけど、何歳なの？』

「女性に年齢は聞くもんじゃないですよ？」

『銀髪ってことは、ハーフ？』

「秘密です」

俺の個人的な情報を抜き出しにくる奴もちらほら現れる。しかし最近調べて知っているぞ！そう言う特定厨とか言うやつに情報を渡すのはアウトだってことはな！

「結構人もきてるみたいですし、雑談でもしますか」

『なるほどリベンジってことか』『どゆこと？』『初見は第一回放送を探してみろ。そしてうみちゃんの成長を感じ取れ』『何話すんだ？』

「俺からの話題として少し、みなさんに聞きたいことがあるんですが……皆さんの中に、最近見られる、外来種を目撃した人っていま

すか？」

『?』『ああ、ニユースによく出てる・・・』『なにになに?最近ニユース見てない』

パソコンで検索する限りの情報では外来種というのがポケモンなのか本当にただの外来種なのか分からない。けど、真偽不明ではあるけど、様々な情報を持った人が集まるここなら、ポケモンらしき情報も出るかもしれない。

『ニユースで見るくらいのことしか知らね』『俺も』『最近外来種っぽい奴なら見たぞ』『!?』『釣り師ニキまじか!』

「!そ、そのことを教えてくれませんか!?できるだけ詳細に!」

『うみちゃん必死だな』『釣り師ニキ、責任重大だぞ』『え、まじかよ』
釣り師ニキのコメントに注目し若干前のめりになる俺に、視聴者が少し戸惑っている。しかし、この情報によっては、今後のポケモンについての問題解決に必要なかもしれないのだ。非常に気になる。『爺さんの漁について行ったときに、網にかかってたんだよ。なんかハリセンボンみたいだったんだが、今まで見たことのない種類でな。多分日本近海で獲れるもんじゃねえよあれ』

「・・・そうですか。ちなみにもっと特徴とかなかったですか?」

『思ったより食いつくなあ』『つまり外来種についての情報があればうみちゃんと話せる・・・!』『シベリアはこつちよ変態』『またシベリアかよ!もう行かないっつーの!』『おまいらもちつけ、釣り師ニキにコメントさせろ』

『特徴つつても・・・なんか普通のハリセンボンっぽいんだが、よく分からんけど水揚げしたときに突然針を減多やたらに飛ばしまくったり、口から水をぶっ放してきたりしてたわ。水の方はともかく針はなんか鉄板とかにもぶっ刺さってたぞ』

『怖っ!』『けが人とかでなかったの?』『幸いにもすぐに海に投げ捨てられたからけが人はいなかったわ。ただ船やらリフトやらに棘が刺さりまくって大変なことになったわ』『ほえー』

コメント欄で談義が始まる中、俺は肩を震わせ俯く。

『うみちゃんどした?』『お腹痛いか?』『どうか泣いてる?』『ちよつ、釣り師ニキ謝れよ』『なんで俺?!ごめんなさい!』『謝んのかいw』

「それ!ハリーセンじゃないですか!」

『は?』『え?』『ほい?』

コメント欄が疑問符だらけになる中、俺は興奮のあまり喋り続ける。

「ハリーセンはふうせんポケモンで、タイプはみず・どく。体を膨らませるために水をたくさん飲み込んで、その水の勢いを使って針を飛ばすんです!あ、針には毒があるんで刺された人がいなかったのは良かったです!」

『毒あんのかよ!』『セーフウ!』『どうかポケモンって何?』『前回の放送からうみちゃんが言ってるよく分からない生物』『ああ、妄想的な?』

「妄想じゃないです!それとハリーセンは、泳ぐのは得意じゃないんですよ!」

『魚なのに?』『アホの子かな?』『でも毒あるんだろ?』『うみちゃん言ってるだけかもしれんぞ?』

コメント欄ではポケモンを信じてくれてる人は少なく、大半は俺の創作だと思ってるようだ。しかし、ここではあえて否定はしない。今重要なのは、情報を持ってきてくれる可能性を作ることだ。

「もし皆さんの中で、外来種にあったことのある人が近くにいたりしたら、ぜひそのお話を俺に聞かせてください!力になるかはわかりませんが、俺ができる限り相談に乗りますので!」

『ちよつと外来種探してくる』『確か親戚が外来種の話してたはず』『うみちゃんの外来種相談室開設かw』

「相談室・・・いいですね!それ採用です!今度から、配信で「ポケモン相談室」やっていきます!宜しくです!」

『おk』『なんか知らんがうみちゃんカワイイヤッター!』『うみちゃんカワイイヤッター!』『信者できるの早すぎだろw』

こうして、「ポケモン相談配信」というジャンルでの俺の活動が決

まった。

うみが配信で相談室を開くことを宣言した頃。とある研究室では主任の怒号が響いていた。

「きさまら、これで何回目だ!」

「す、すみません!」

怒り心頭の主任と平謝りする下っ端研究員。その前には、頑丈な特別性ガラスでできていたはずのモルモットケースが、何かで削られたかのような跡を残していた。

「またしても実験用のモルモットに逃げられるとは……これで何回目だと思っっている!」

主任の怒声に完全に萎縮してしまっている研究員達。そんな部下の姿を見てさらにイラついたのか、「さっさと片付けて、探せ!」と言って主任室へと戻る主任。慌てて研究員達が片付けを開始する中、最近になって増えている実験用動物の脱走に頭を悩ませるのだった。「くそっ、最近面倒続きだというのに……!」

未知のきのみの成分分析に、実験用動物の脱走。相次いで起こる問題と課題に、やり場のない苛立ちを覚えるのだった。

深く暗い海の底。人はおろかポケモンですら近づかない海の底にある海流。本来ならそこに生物などいるはずもない激流の中を、そのポケモンは泳いでいた。その姿は暗い深海では何者にも気づかれないことはない。ふと、その生き物は何かを感じ取ったのか、海流から外れて上を見上げる。そうしてしばらく海の底から海面を見上げ続け、少ししてまた海流の中へと戻っていくのだった。

第8話

配信でポケモン相談室と銘うった活動を始めて3日が経過した。

「うーん……。情報は集まるんだけどなあ……」

配信という形での視聴者からの情報獲得は、なかなかにはかどっていた。しかし、不特定多数の人間からの情報ということもあり、情報の信頼性という課題が浮き彫りとなっていた。

「……青いたぬきに赤いきつね。俺の知らないだけで本当にそんなポケモンがいるのかもしれないけど、明らかにふざけてると思うんだよなあ……」

配信から得た情報を一通りまとめて、パソコンを閉じる。うーん、と一つ伸びをしてから一階へと降り、そのまま家の裏手に回る。家の裏には、面よりさらに広い庭が広がっている。さらに奥には森があり、少し前に探索してみた結果、かなり広い範囲が敷地として柵で区切られていることがわかっていった。

「2人とも、どんな感じか……。うわあ!?!」

そこで遊んでいたはずのバンギラスとライを呼びに行くと、突然土煙が舞う。

一体何事か、と急いで庭に出ると、

「ガァー!」

「ライー!」

ライとバンギラスがバトルを行っていた。バンギラスが「きりさく」で襲いかかると、ライが「かげぶんしん」や持ち前のすばやさでもってかわす。この応酬があまりに早すぎるため、2匹の周りだけ地面が抉れたりたまたまあった木がなぎ倒されていたりと、かなり無残な光景が出来ていた。

「2人ともー!」飯だよー!」

「!ライツ!」

「……」

先に反応したライがものすごいスピードでとんできて、俺の前でちよんと座る。呆れながらライを持ち上げると、その後ろからバンギ

ラスもドスドスと戻ってくる。

「どう？少しは収まったか？」

「・・・グルウ」

こちらをみないが、返事はしてくれるバンギラス。

こいつはどうやら、時折暴れないとフラストレーションが溜まるようで、危うく家を壊しそうになったことがあった。そのため、今ではライが時たまこうして相手をするので発散させるようにしている。

「んじゃ、ご飯にしようか」

そう言つて庭に面した縁側に座り、ペットフードを皿に盛つて出す。すると2匹ともものすごい勢いでがつつく。

「うんうん、いい食べっぷり。2人とも元気でよろしい」

こうして2匹の世話をしていると、なんだか父親にでもなった気分になる。

「・・・まあ、見た目的には母親なんだろうけどなあ・・・」

自身の体のことを思い出し、少ししよんぼりするうみ。そんな主人の様子を、よくわからないという目で見る2匹であった。

「とりあえず、確実にポケモンだと言える事例は2件だけ、か」

2匹に食事を与えた後、再度部屋に戻りまとめた情報から2件だけをピックアップする。一件は相談室創立のきっかけとなった放送で得た釣り師ニキからの情報。そしてもう一件は、〇〇県の農家の息子から寄せられた情報だった。

「2日前、実家の農園にて収穫の際に発見。黒い翼に、帽子のような頭。そして送られた画像・・・」

画像には、撮影者の近くの木から林檎を啜え飛び去る鳥のような姿が捉えられていた。

「頭の形状とサイズから考えて、こいつは多分ヤマカラスだろうなあ。釣り師ニキの話からしてハリーセン。出来れば実際に話を聞きに行きたいけど・・・」

そこでうみはため息をつく。釣り師ニキも農家の情報元も、どちらもうみのいる地域からはかなり遠いところにあつた。

「流石におじいちゃんをおいてはいけないしなあ……。仕方ない、一日諦めるか」

そう言つてうみは、まずは今重要なことから、とおじいちゃんのお見舞いに行く準備をするのだった。

「おじいちゃん、来たよー」

「おお、こつちじゃ」

うみが病院に着くと、ガンテツは無事な方の手を使って本を読んでいた。うみの姿を見ると笑いかけながら本を閉じ、手招きする。

「おお、ガンテツさんこのうみちゃんじゃなかか。飴ちゃんいるかい？」

「わあ、ありがとうございます！」

「うみちゃんや、怪我はしとらんかい？」

「俺は大丈夫です。おじいさんこそ、腰大丈夫ですか？」

「おお、もうすっかり治つとるわい。もう直ぐ退院じゃなあ」

ガンテツの元へ行く最中にも、同じ部屋の入院患者のおじいさんやおばさんから挨拶されるうみ。多くの人に愛されているうみを見るガンテツも心なしに嬉しそうにしている。

「おじいちゃん、具合はどう？」

「安静にしないと、問題ないよ。うみちゃんこそ、ちゃんと生活できてるかい？はいしんとやらをして夜更かししてるんじゃないかな？」

「……デキテルヨ。チャントネテルシ」

ギギギ、と首をそらすうみに、ジト目を向けつつデコピンするガンテツ。

「あたたつ」

「嘘が下手じやのう。あんまり夜更かししたらあかんのやぞ？」

「うう……。わかつた」

デコピンされた額をさすりながら口を尖らすうみ。そんなうみを見て再び笑つたガンテツ。2人はしばらくの間、互いの近況を喋り合

うのだった。

「・・・さてー！今日もやっていきますか！」

ガントツの見舞いから戻ってきたうみ。自室に戻りパソコンを起動する。ここ数日間、うみは大半の時間を配信部屋か自室のパソコンの前で過ごしていた。その原因は、

「・・・だああ！やっぱダメだ、きっぱりわからない！」

そう言つてぐでーんと椅子の背もたれに思い切り寄りかかるうみ。パソコンの画面には、ポケモン預かりシステムがあった。

バンギラスと戦う前。なぜか頭に浮かんできた使い方でもちものを引き出したうみは、あれからどうにかポケモンも引き出せないか四苦八苦していた。しかし頭に入ってきた知識はもちもの関連のみであり、預かりシステムそのものは使いこなせていない。その為、こうして日々預かりシステムを使えるようにしようと、格闘しているのである。

「なんでもちものだけなんだよう・・・せめてポケモンを出すことくらいさせてくれたって・・・」

ぶつくさ言いつつキーボードをタツタカ叩くうみだったが、突如スマホからアラームがなる。

「あれ？もうだったのか・・・しようがない」

アラームを止め、時計を見上げると少し焦るうみ。もう少しシステムの解析を進めたいが、もう直ぐ配信の予告した時間である。仕方ないのため息混じりに椅子から降りると、向かいの配信部屋へと向かう。

「よつと・・・なんか最近増えてるんだよなあ出待ちしてる人」

配信用パソコンの前でそう呟くうみ。画面に移された配信準備画面には、視聴者数が既に30人ほどいた。そこまで多くはないが初回配信から考えるとうみ的にはかなりの快挙である。

「どーも、こんばんは。うみでございます。今日もポケモン相談室やっつけていききたいと思います」

『わこつ』『初見』『わこつー』『来たばっかだけどポケモンって何?』『外来種の情報集めてきたよー』

ヘッドホンをして、配信開始のボタンを押すとともにここ最近で定着してきた挨拶をする。相談室開始からそれなりに初見さんが来るようになっていた。

「どうも、初見の方はポケモンについては途中で説明します。情報集めてくれた方、ありがとうございます」

『ポケモン?』『最近よくニュースになってる外来種騒ぎあるやろ?あれが外来種じゃなくてポケモンってやつかも知れんらしい』『ポケモンってのはうみちゃんがよく言ってる不思議生物のこと。ポケットモンスターの略らしい』『ほーん』『なんだ妄想か』

優しい人が初見にポケモンのことを教えてくれている。・・・ただ未だに妄想扱いされているのはかなり悲しい。

「妄想じゃないですよ。本当にポケモンはいます。この雑談枠は、ポケモン相談室という枠で、皆さんからの情報を聞いて、それがポケモンかどうかを俺が確認し、ポケモンならばどうするべきかを教えていくという流れになります。・・・とりあえず、何か情報を持ってきてくれた方はお願いします」

『相談室か』『斬新・・・というわけではないけど、相談の内容が斬新やな』『説明しよう!ポケモン相談室とは、この配信の主であるうみちゃんに最近目撃した外来種についてや、珍事件についての情報を提供する事で、どう対処すべきかを教えてもらおうという枠である!』『有能。ちなみに情報が足りないとうみちゃんも分からなくなってるから相談する奴は情報がしつかりしてることを前提でこいよ』『つまり情報不足だとうみちゃんの慌てる姿を見ることができると!』『またうみちゃんのテンパリが観れると聞いて!』『増えたのか変態。来い、今度はアウシユビツツだ』『収容場所が増える!』

「説明してくれた方、ありがとうございます。・・・配信外でも、ポケモン関連の情報を送ってくださる方のみメールを受け取っていますので、よろしくです」

『おk』『そんなことより誰か今相談するやつとかいないのか?』『俺

だ』『そのID・・・釣り師ニキ!?』『生きていたのか!』『殺すな』
「あ、釣り師ニキ、どうも。いつもありがとうございます」
『あ、はい』『くそう!うみちゃんからの信頼を勝ち取ってやがる!』
『羨まC』『はあああ!私もうみちゃんと仲良くなりたい!』『おいなん
か百合の花園から来たやついんど』

どうやら今回最初の相談者は釣り師ニキのようだ。釣り配信から
かなりの頻度で見に来てくれる、もう常連と言っていい人だ。何よ
り、情報が結構細かく言ってくれるから判断しやすい。

「釣り師ニキ、本日のご相談はどのような内容でしょう?」

『キャラ変わったな』『なんか相談の時はマジでカウンセラーっぽく行
くらしい』『これはこれで可愛い』『メガネ・・・だと・・・!?』『あ・・・』
『ふう・・・』『おい、何人かおかしいぞ』

俺は釣り師ニキのコメントを待ちつつ伊達眼鏡をかける。2回目
の相談室配信の時にかけてから、結構このスタイルが気に入ってい
る。

『また爺さんの漁について行ったんだが、今回はカメラ持って行つた
んだよ。もしもポケモンにあつたら撮影しようと思って。んで、今回
マジで普通の生き物とは思えないやつに出くわしたうえに、撮影もで
きたからうみちゃんに聞いてみようかと思って』

「それは・・・わざわざありがとうございます」

俺のためにわざわざカメラを漁にまで持って行ってくれるとはと
ても嬉しいことだった。何より釣り師ニキはちゃんとポケモンって
言ってくれるし。

『有能』『早く画像カモン(´▽｀)』『まあまあ、今うみちゃんに送っ
てるから』

「・・・はい、ありがとうございます。今出しますね・・・」

届いたメールに添付された画像を開く。

海の真っ只中、水面を魚が跳ね、海鳥がそれを襲っている。

『魚じゃなくて鳥なんだが、よく見てもらいたい』『?特になんも変な
ところなくね?』『あ!なんか海鳥に混じってやたらでかいやつがおる
!』『どいっや?』『真ん中、一際集まってる』

コメント欄の証言を見つつ真ん中付近の海鳥をよく見る。すると、確かにふつうの海鳥の中に、一羽かなりでかい鳥が紛れている。その鳥は全体的に白く、羽の先が青い。頭の頭頂部も青で、何より特徴的なのは口だ。その黄色いくちばしの下部分が異様に大きい。その下くちばしを使って海面の魚をすくっているようだった。

『ずっと漁船についてきて、魚が海面付近に来ると画像みたいにして魚をことごとく持ってくるんだよ』『なんだこれ?』『マジでよー分からんやつやん』

コメント欄では話し合いが続く中、俺は心の底から嬉しさを爆発させる。

「釣り師ニキ、大手柄ですよ！これ間違いなくペリッパーですよ！」

『ペリ?』『なんだって?』『あ、またうみちゃんが変なスイッチ入った』『どゆこと?』『説明しよう!うみちゃんは、提供された情報の中のお目当ての情報があると、こうしてわかりやすくはしゃいでしまうのだ!因みに、大抵終わった後に恥ずかしさで顔真っ赤になるぞ!』『なにそれ可愛いだよ』

「ペリッパーはみずどりポケモン、タイプはみず・ひこうで、海辺の険しい崖に巣を作るんです!画像の通り特徴的なくちばしで餌をすくい取って食べたり、中にタマゴや他の小さいポケモンを入れて運んだりもできるんです!あのくちばしですくい取った餌は丸呑みにしたり、そのまま運んで子供にあげたりも出来るんですよ!タマゴは、くちばしに入れて守っていることが多いんですよ!でも大体は崖の近くにいるのでこういう場所にペリッパーが現れるのは珍しいですよ!釣り師ニキは運がいいですよ!小さいポケモンやタマゴを運ぶ姿から、そのらはこびやとも言われてるんですよ!・・・あ」

『言われてるんです、って言われても知らんけどね』『ああ、今日は顔真っ赤見れるぞ』『めっちゃ喋ったなあ』『あいつポケモンのことになると早口になるよな』『おいやめろ』

我に帰り、コメント欄を見て顔を真っ赤にして黙り込むうみ。あまりの嬉しさに舞い上がってしまったことを自覚し恥ずかしがる。

「・・・すいません、取り乱しちゃいました・・・」

『ボソボソ声もいいな』『変態か・・・?』『変態警察動き早いな!』『なんか俺の話で喜んでくれて嬉しいような恥ずかしい思いさせて申し訳ないような』『釣り師ニキは・・・悪くないけどなあ』『ああ、うみちゃんの恥ずかしがる顔は悪くない』『変態、次はこの収容所がいい?』『ダウハで!』『選べるんかい!しかも収容所知ってんのかい!』『あ、いえ、釣り師ニキは悪くないです。・・・自分がもつと自重しないといけませんから・・・』

『そうか・・・?じゃあとりあえず、こいつはどうすればいいんだ?』『釣り師ニキのコメントに、気を取り直して答える。』

『基本的にひかえめやおくびようといった性格の個体が多い種類です。もし今後も魚がとられるようだったら、少し大きめの音でびっくりさせるとかでもいいと思います。あ、でもあまり刺激したら反撃するかもしれないので可能な限り不干渉がいいと思います』

『おk、ありがとう』

「いえいえ」

その後も、いくつか情報を持つて相談してくる人はいたが、結局釣り師ニキ以外の情報はポケモンかどうか怪しい内容であった。

「それでは、今日もありがとうございました」

締め言葉とともに配信を終えると、手を上にあげ大きく伸びをする。

「にしても、今日は収穫があつてよかった」

釣り師ニキの情報は確定でポケモンだろうし、これから吟味していく必要があるもののポケモンの可能性のある情報もいくつか得られた。

「・・・?メール?」

情報をまとめてみると、画面端でメールのアイコンが点滅する。情報が届いたのか、と思いメールを開くと、

「・・・!」

『預かりシステムがアップグレードされました』

慌ててシステムを起動すると、今までクリックしても使えなかった『預かり・引き出し』の項目が光り、NEW!の文字が付いている。

「・・・っしー！」

思わずガッツポーズを取るうみ。ウキウキ気分で早速他の相棒達を出そうとする。

「・・・あれ?」

どれだけクリックしても反応しない。故障かと思いい慌てるうみ。と、メールに続きがあることに気づく。

『なお、「預かり・引き出し」機能に関しては、専用の機械が後日届くこととなります』

「なんだよそれえええ・・・」

気の抜けた声とともに、うみは机の上につ伏すのだった。

「らっしやあーせー」

とあるコンビニ。気のない挨拶をしつつ商品の品出しをしている男がいた。そこへ店長がやってくる。

「君、次は飲み物の棚も頼むよ」

「ええ?・・・はい」

さつきからずっと品出しやってんだけど、という不満を押し込み、ドリンクの冷蔵庫の裏へと回る。

「・・・あれ?なんだこれ?」

飲み物の箱を運び、品出しを終え店内に戻ろう、という時。男は積み上げられた段ボールの上に妙なものがおいてあるのに気づく。

それは上と下で紅白になっている謎のボールだった。

「先輩が置いてったのか・・・?」つたく、片付けくらしいろつての・・・」ズボラなバイトの先輩への愚痴をこぼしつつ、ボールをその辺に放り、店内へと戻る男。

残されたのは、『二つ』の紅白ボールと『青い』ボールだけだった。

第9話

預かりシステムのアップグレードの翌日。うみはそわそわしつつ預かり・引き出しのための機材が来るのを待っていた。

「早く・・・早く・・・あぁ〜！ライイ！待ち遠しいよ〜！」

「ラッ、ラアアイ・・・」

ソファに座り、ライを抱きかかえて今か今かと待ち続けるうみ。ずっと抱かれているライは、うみに抱かれることは好きだが流石にうっとおしそうにしている。

そんなライの様子は意に介さず、ニヤニヤと笑いつつ配達を待つうみ。

「どーもー、〇〇急便でーす」

「・・・！来た！」

「チュウウ!」

と、玄関からインターホンと共に宅配便のお兄さんの声がする。慌てて走り出したうみに、ソファの上に放り投げられてしまうライ。

「ようこそー！」

「!?え?」

勢いよくドアを開けたうみに驚く配達員。その手に持った荷物を嬉しそうに見るうみだったが、段々とテンションが落ちてくる。

「・・・」

「あ、うみさんですね。ここにサインお願いします」

突然黙ってしまったうみに戸惑いつつも職務を全うする配達員。黙り込んだままのろのろとサインをし、荷物を受け取ったうみに一度礼をして、車に乗り去って行く。

「・・・」

「ライ?」

リビングに戻ってきたうみに寄ってくるライだったが、うみは黙ったままである。そして手に持った段ボールをテーブルに置き、開封する。

「・・・分割かい!!!」

中身を見て予想通りの結果に絶叫するうみ。「両手ほどしかない」
段ボールから出てきたのは明らかに何かの機械の部品であった。

「なんで分割したんだよ！こっちは昨日の夜からワクワクしてたつて
のに！いい加減にしるよコラア！」

「ラ、ライライ・・・」

少女の姿で見せてはいけなような状態になっている主人に若干
ドン引きするライ。縁側からその様子を見ていたバンギラスは、あほ
らし、という風のため息をついていた。

「それじゃあ、入るぞ。・・・うみちゃん、大丈夫か？」

「ええ、はい・・・」

分割配送の悪夢に絶叫していたうみは、現在マタギのおじいさんと
山の所有者のおじさんと一緒に、山の入り口まで来ていた。前回決め
た山の調査への同行である。うみの様子に首をかしげるおじいさん
だったが、まあいい、と意識を切り替える。

「それじゃあ、山に入るぞ。・・・あんたまでくる必要は無いんじゃない
いか？」

所有者のおじさんにそう言って笑うおじいさん。所有者のおじさ
んー板木（いたぎというらしい。ばんぎう？と言ったら怒られた）
さんは、ふん、と鼻息を鳴らす。

「所有者のわしがこんでどうするんじや。わしは実際に目でみんこと
には信じんのじや」

そう言つてそっぽを向く板木を見て少しくすりと笑ううみ。

「なんだかバンギラスみたいだね」

「んなわけあるかい！（ガア！）」

うみの言葉に、板木とバンギラスが同時に叫ぶ。案外相性良さそう
なのに、と思ううみと笑いをこらえているおじいさん。そんな2人を
見てぐぬぬと唸る1人と1匹。

「んなことより、さっさと行くぞ！日が暮れるじやろうが！」
そう言っただけで進む板木。

「あ、そっちは違う道じゃぞ（ですよ）」
「……」

その後、板木は黙ってうみとおじいさんの後ろをついていくのだった。

「ここかな？」

「ここです」

しばらく歩き、うみ達はバンギラスと戦った溪流へとやってきた。うみはおじいさんにスピアーと会った時の話をしている。ちなみに板木は疲れたのか倒木に座っていた。

「ふむ、草むらの中か……」

「やっぱり蜂なら、高いところに巣がありますかね」

「いや、オオスズメバチなら地面の中にも巣を作る。それを知らん初心者が登山中に道を外れると誤ってふんずけることもあるからもう」
「うわあ……」

少しあたりの地面を見渡して警戒するうみ。そんな姿に微笑みながら、おじいさんが尋ねる。

「それで、スピアーとやらはどっちに逃げたか分かるかい？」

「あ、えと……あっちです」

記憶を頼りに木々の奥を指差すうみ。

「ふむ、とりあえずどこまでが縄張りなのかを知る必要があるな。これからわしはもう少し山の奥に行くが……」

「俺も行きます。俺にはライがついてますから、もしスピアーが狙ってきたら大丈夫です」

「ライー！」

そう言っただけで真剣な顔で頷くうみ。後ろのリュックから顔を出したライも「まかせろ！」という風に鳴く。よし、と頷き持ってきた猟銃を担ぎ直すおじいさん。

「おい、俺も行くぞ。もう行ける！」

「・・・」

後ろから板木とバンギラスもやってくる。全員が揃い、なるべく静かに森の奥へと向かう。

「・・・にしても静かだな・・・」

森に入っただけに、おじいさんが異変に気付く。普段なら襲ってまではこなくともここまでくれば出会うであろう山の生き物に出会わない。

「ひよつとしたらバンギラスがいるからかもしれないです」

バンギラスと共に家に帰っていた際のことを思い出すうみ。あの時、途中でクマに出会ったが、バンギラスがひと睨みすると全速力で逃げていった。バンギラスはどうやら森の生き物から恐れられていたようだ・・・まあ当然だろうが。

「・・・しっ！」

突如、先頭を歩いていたおじいさんが全員を止め、静かにするよう指示する。

「・・・何か聞こえる。羽音か？」

その言葉に耳をすませるうみ。前方の木々の奥から、聞き覚えのある羽音が大量に聞こえてくる。

「！スピーアの羽音です！」

その言葉に全員が逃走の準備をする。しかし、うみだけが別の音も捉えていた。

（・・・!?何かの悲鳴！）

「!?うみちゃん!どこへ行く!そっちは蜂が！」

「何かが襲われています!人だったら助けないと！」

突然走り出したうみとライに慌てるおじいさん。少しの間追うかどうか躊躇うも、仕方なくうみを追いかける。後からバンギラスと板木も走る。

「なんだってんだ一体・・・！」

「とにかく追うぞ!うみちゃんとライ君だけでは危険じゃろうが！」

「分かってるっての!まったく、お前も大変だな、飼い主があんな感じで

！」

走りつつバンギラスにそう言うと、バンギラスは「もう慣れた」と言わんばかりに首を振る。

一方、うみの方は既に羽音の音源の元にたどり着いていた。

「……！」

そこには、無数のスピアーが飛び交っていた。その中心にある木には、大きな巣ができています。と、そこから少し離れた場所で、何かのスピアーと戦っている。

「あれは……！サイドン!?!」

そこでは、かつてライが叩き伏せ、逃したサイドンがいた。無数のスピアーに向け手を振り回しながら威嚇しているが、スピアーは数の利を活かしてヒット&アウェイで『どくばり』攻撃を繰り返している。既にサイドンの体はボロボロだった。もっとスピアーが少なければ、その硬い装甲と突破力でどうにか出来るだろうが……。

「いくらサイドンが頑丈でも、毒の針をくらい続けたらまずい……！」

「一体何が……これは!?!」

「なんなん……うわあ!?!」

追いついたおじいさんと板木が驚くなか、うみは急いでリュックを漁る。

「ライ！バンギラス！スピアーをサイドンから離して！出来るなら、スピアーへの攻撃は最小限で！」

「！ライ！」

「グルルツ！」

かなり無茶な指示ながら、頼もしい返事と共に飛び出す2匹。

「スピッツ!?!」

2匹に気づいたスピアー達の一部が襲いかかる。

「チュウウウー！」

「スツ!?!」

「グラアアアアアア!!!」

「!!?!?!」

しかし、ライは『10まんボルト』で、バンギラスは『きりさく』や

『あばれる』で応戦する。一度のわざで10匹のスペアアが吹っ飛んでいき、気絶していく光景は圧巻の一言である。

「わしらは一体、何を見とんじゃ……」

「は、ははは……怪獣戦争か……」

2人の呆然とした声を聞きつつ、お目当てのキズぐすりを見つけたうみは、サイドンの元へと走る。

「大丈夫か!？」

「……グルウ」

弱々しいながらも帰ってきた返事にホツとしながらも、急いで治療するうみ。

「とりあえずこれで体力は大丈夫だろうけど……」

一向に元気にならないサイドンに焦るうみ。

（まずい、多分『どく』状態なんだ……キズぐすりじゃあ『どく』までは治せない。どうしよう……）

何かないか、と周囲を見渡すうみ。すると、スペアアの木のすぐ近くに、桃色の実がなっている木を見つけた。

「あれだ！ライ、あのきのみを持ってきてくれ！」

うみの指示を聞き、指差す方を見たライは全力で疾駆する。しかし、その進行方向をを塞ぐ形でスペアアの群れが襲いかかる。やむなく急停止し応戦するライ。

（ダメだ、数が多すぎる……！バンギラスもすばやさが高くはない以上、突っ込ませるにも限度が……！）

どうしよう、と焦るうみ。すると、

ダアン！

「!？」

突如銃声が響く。慌てて横を見ると、すぐ近くまでやってきていたおじいさんが猟銃を構えていた。

「あの木でいいんじゃない?！」

「！はい！お願いしますー！」

その言葉に、迷いなく銃の引き金を引くおじいさん。

目当てのきのみのある木を正確に打ち抜く弾丸と倒れていく木を

見て、その後こちらを見るスピアー達。こちらを脅威と判断したのか、一斉にこちらへと向かってくる。

「おい！こっち来よったぞ?！」

「大丈夫！バンギラス！」

猛然と襲いかかるスピアー軍団とうみの間に、ズンと仁王立ちするバンギラス。その勇ましい背中にニヤリと笑うと、バンギラスにとつておきの指示を出す。

「バンギラス！『はかいこうせん』！」

「グ、ガアアアアア!!！」

圧倒的威力の光線が、迫ってきていたスピアー達を覆い尽くす。光線が収まると、そこには目を回すスピアー達がのびていた。

「いまだ！ライ！」

「ライ！」

スピアー達の矛先が変わっている間に、なんとか取りに行ける距離まで倒れてくれた木にライが飛びつき、そこになっていたきのみーモモンの実をこちらに投げる。

「ナイス！2人とも！」

2匹にグッド！と親指を立て、急いでサイドンにモモンの実を食べさせる。

「ほら、モモンの実だよ。お願い、食べて・・・」

祈るように呟きながらサイドンに食べさせる。すると、キズぐすりを塗ってからも苦しそうだった顔が穏やかになる。

「・・・よかったあ」

「どうやらなんとかなつたみたいじゃの」

こちらにスピアーが来ないか警戒しつつ、おじいさんがこちらを見る。板木さんは俺の横でおっかなびっくりサイドンを見ている。

「こいつを助けたはいいが、あの蜂どもをどうする?！」

スピアーの方へと向きながら板木さんがいうと、おじいさんはサイドンをチラ見して渋面になる。

「・・・予想しとつたよりだいぶまずいのお。こんな大きな生き物すら倒せる毒を持つあんな大きさの蜂なんぞ、わしの手にも負えん」

「まさか本当にうみちゃんについてきてもらったことが功を奏したとはな」

「まだ油断できません。ライ達だつてずっと戦えるわけじゃないですし……」

そう言いつつ、うみはスピアーの今後について考える。

（出来れば被害を出す前にどうにか保護しておきたい……でも、この状況じゃどうにも……）

どうにかせねば、と再度周囲を見渡し策を練る。

（さてよ……蜂つて確か……！）

ある一つの作戦を思いつき、一か八か、なるようになれ！と行動を開始するうみ。

「おじいさん、板木さん。お願いがあります」

「本当にうまくいくのか!？」

作戦を伝え終わると、板木さんがそう小声で叫ぶ。

「しかし、あれも蜂だと言うのなら有効かも知れん」

おじいさんは、作戦に乗り気である。

「どちらにしろこのままではジリ貧です。それとも、他に案が？」

「うっ、わ、分かったよ！やるぞ！」

うみにジト目で見られ、案がないためにやむなく同意する板木。

「ライ！薙ぎ払い『10まんボルト』！」

「ライアイ！」

俺の指示とともにライが電撃を前方広範囲に向けて流す。電撃を避けるように後退していくスピアー達を追い立てるように、電撃を続けるライ。

「いいぞライ、そのまま！」

「チュウ！」

「スツ、スピッツ！」

少しずつ巣の近くまで後退するスピアー。と、巣を挟んで反対側からバンギラスがさらに追い立てる。

「バンギラス、そのままエンドレス『あばれる』！」

「ゴルアアアアアア!!」

日頃ライにいいようにされる鬱憤を晴らすかのように暴れるバンギラス。それに驚いたスピアー達はさらに巣に近づいていく。

「今です！」

十分にスピアーが密集したことを確認し、うみが叫ぶ。うみの掛け声とともに、その横で火を起こしていたおじいさんと板木が思いつきりスピアーと巣へ向けて煙を流す。

「スピッツ、スピッツ！」

たまらず逃げようとするスピアー達。しかし、地上ではバンギラスが見境なく暴れており、空へ逃げようとしても、ライが電撃でシャットアウトする。

そうして煙の中にスピアーを閉じ込めて数分後。羽音のしなくなったのを合図に火を消し、様子を見る。煙が晴れると、そこには全てのスピアー達が気絶していた。

「本当にうまくいくとはな・・・」

板木さんが感心したように呟く。

「蜂は火や煙が嫌いだ。特に煙を吸うと気絶する。・・・よく知っていたね」

うみの頭を撫でながら微笑むおじいさん。

「それでもただの蜂でないスピアーに効くかは賭けだったですけどね・・・起きないうちに、巣を木から外しちゃいましょう」

気絶しているスピアーをバンギラスに頼んで一箇所にとめてもらい、その間に俺たちでスピアーの巣をひつぺがす。

「でかいな。ただの蜂と比べると相当だぞこれは」

おじいさんはそう言って目を丸くしている。板木さんは、スピアーが気絶した頃から少しずつ調子を取り戻しているのか、へつとわらう。

「あのお化け蜂さえいなけりやあ、ただでかいだけの木屑の塊だな」

「あ、そこ中にビードルいますよ」

「おおわ!？」

巢の中で気絶しているビードルやコクーンを見て驚く板木さん。そんな姿を見て、俺とおじいさんはくすくす笑うのだった。

「さて、巢はこれでよし」

どうにかギリギリ持ってきた袋に入った巢をいまだ嫌がつている板木さんに押し付けると、俺はバンギラスの元へと向かう。そこでは意識は取り戻したものの、まだ本調子でなく動けないでいるスピアー達がいた。ちなみにサイドンは毒が抜けると復活した。自身を助けてくれたうみに懐いているようだったため、このまま連れて帰ることにする。とりあえずサイドンは置いておいて、うみはスピアー達の前に出る。

(こいつらは以前バンギラスを攻撃していた。でも多分あれは弱っている獲物を狙うっていう野生の本能だったんだろうな)

現在進行系でバンギラスにメンチを切られ若干怯えているように見えるスピアー達を見てそう考える。あの夜に襲ってきた勢いや、今さっきまでの勢いが見る影もない。そんなスピアー達の前に立ち、バンギラスを呼ぶ。

『バンギラス、『伏せ』』

「・・・!？」

おい嘘だろ、と言いたい風なバンギラスにつこりと微笑みながら「早く」となるべくドスを効かせるように言う。渋々土下座のような形になるバンギラスの上によっこいしよ、と座るうみ。

バンギラスを椅子扱いするその姿にまじかよ、と言うような空気がスピアーの間流れる。少しだけブブブ、ブブブ、とざわめくスピアー達を見下ろしつつ、パンパンと手を叩くうみ。たちまち静かになったスピアー達を見下ろしつつうみが喋り出す。

「さて、スピアー達。見ての通り君らの恐れるバンギラスは俺の家族

だ」

恐らくどこの世界にもそんな椅子がわりにされる家族はいない。とおじいさんは思った。

うみも内心バンギラスには悪いと思っっているが、スピアーに話を聞いてもらう以上、自身が強者なのだとスピアーに認識してもらう必要がある。もしうみが格下扱いされると、今から提案する案においてかなり苦勞してしまう。後でバンギラスにはたっぷりご飯あげよう、と思おうみなのであった。

「俺からみんなに頼みがある。．．俺はできれば君たちと心を通わせたいと思ってる」

そう思ってるならその態度はなんだ、と板木は思った。

「そこで、君たちには実際には人間と暮らすということを知ってもらうために、俺の家に来て欲しい。巢はちゃんと返す。いくつか守ってもらうルールはあるけど、基本的に自由に暮らせるところだ．．．どうかな？」

最後の最後で少しへたれたうみ。カチカチカチカチとスピアー達が話し合いをしている。と、一斉に静まると、おもむろに全員で両手の針を地面にブツ刺し、頭を下げる。無数のスピアーが土下座のようにして頭を下げる光景はかなり異様だった。

「．．．よしー」

お目目ぐるぐるで頷くうみに、あ、なんかもうどうでも良くなったんだな、とおじいさんと板木は思った。同時に、スピアー達がなんだか任侠映画に出てくる下っ端ヤクザのようにも見えるのであった。

「じゃあ、そういうことで．．．いいですかね？」

「いやこっちに聞かれても．．．」

「人を襲ってこないようなら問題はないんじゃないが．．．さつきまでかなり好戦的なことはわかったしのう」

「え．．．襲うの？俺やおじいちゃん、板木さんや住民を？」

若干ハイライトの消えた目でスピアー達の方を向くうみ。全力で首を横に降るスピアー達。その様子を見たうみはおじいさんたちの

方を向き笑う。

「大丈夫っばいです」

「・・・ああ、うん」

なんかもうどうでもいいから帰りたい、そう思う2人であった。

一方のうみも、自分がなんかやらかしちやつたことを自覚していたが、なんかもううまく収まりそうだし、いいか、と思っていた。

こうして、お目目ぐるぐるでバンギラスに肩車してもらったうみと、その背中にしがみつきながらご機嫌に鼻歌を歌うライ、もう思考を放棄したマタギのおじいさんと板木さん、群れをなしてうみちゃんに付き従うスピーアー軍団と言うなんともカオスな集団は、山を降りていくのだった。

第10話

山でのスピアー軍団の戦闘とうみちゃん組加入・・・じゃなかったうみ家への加入から3日経った。

「・・・んう、朝?」

朝日と鳥の鳴き声、そして特徴的な羽音によって目覚めたうみ。寝ぼけ眼のままカーテンを開けると、そこではスピアーが1匹いた。

「おはよう。今日もありがとね」

「スピッ!」

ビシツと敬礼をして裏庭へと戻っていくスピアーを見つつ、うみは家が賑やかになったなあ、と感じていた。

「おはようライ。今ご飯持ってくるからね」

「ライ!」

リビングへと下り、ソファの上に寝ていたライに挨拶するうみ。今日も元気なライの挨拶を聞きながら、ペットフードの袋を開ける。

「はいどーぞ。バンギラス達にもあげてくるから、ちゃんと食べるとよ」

「ライ!」

ライの前にペットフードを持った皿を置き、大量のペットフードを持って庭へと向かううみ。

「おはようバンギラス、サイドン。朝ごはんだよー」

「・・・」

「グルウ!」

庭に用意された掘っ建て小屋から出てくるバンギラスとサイドン。バンギラスがやってきたときに雨風を凌ぐ場所として急遽用意した小屋（作者：バンギラス）だったが、サイドンまでやってきたことで追加が必要となってしまう。そこで、マタギのおじいさんや板木に頼むことで、さらに大きい小屋を作ってもらったのだった。

幸いにもうみの家の裏庭はこの家の敷地にも重ならない大きな空き地が隣接しており、小屋を建てる場所には困らなかった。若干狭さにストレスを感じていたっぽいバンギラスも心なしか嬉しそうに

していたのが印象的である。

「バンギラスはこの前悪いことしちゃったし、ちよつと多めに用意したからね」

「……！」

気にしていない風に装っているが尻尾をバチバチと振りまくっているバンギラスに温かい目を送りながら縁側でまったりしていると、食べ終わったライがじゃれてくる。

「よしよし」

「チャア〜！」

嬉しそうなライの背中を撫でながら庭の一角にある巨大な巣を見るうみ。そこでは今日もせっせとスピアー達がコクーンやビードルの世話をしていた。スピアーが家に来てからというもの、うみの家の裏庭はかなり賑やかになっていた。

「？ああ、よしよし」

「……！……！」

足元に違和感を感じて下を見ると、ビードルが1匹うみの足元にやってきていた。針に気をつけつつ撫でてやると、嬉しそうに動いている。そつとスピアーを手招きし、満足げなビードルを回収させる。コクーンは流石に動いたりしていないが、ビードルはまだ自分で動けるため、時たまこうして庭を這い回っているのだ。

「……そういえば、コクーンはああして世話してもらってるけど、どうやって進化するんだろう」

ゲームではレベルアップで進化するはずだが、こうしてスピアーに世話されている様子を見るとどうやってレベルアップするのか見当もつかない。

そんな感じで色々と考えを巡らせていると、朝食を持っておばあちゃんがやってくる。

「うみちゃんや〜、ご飯持ってきたよー」

「あーはーいーみんな、ちゃんと大人しくしてくんだよ」

ライやサイドンは鳴き声で、バンギラスは尻尾の一振り、スピアー達は敬礼とそれぞれに特徴的な返事をする。その様子によし、と頷

き、うみは家に戻るのだった。

これが最近のうみの家での朝の始まりである。

「さて、今度は何しようかな・・・」

朝食を終え、うみはリビングで考え事をしていた。ライはバンギラスと遊んでおり、完全に1人である。

「こないだはゲーム配信とか勧められたけど、ゲームは上手くないしなあ・・・」

配信にて今後の活動について聞かれたうみ。自身としてはずっと相談室をしていたところだったが、流石に視聴者の方が飽きてきているようで、人数が減り始めていた。

「うん・・・そりゃあニーズに応えることが基本だからしょうがないけど・・・でも何をしたらいいんだろう」

とりあえず今回は前もって考えていた内容で配信するとして、今後の活動においてどうするかはまた考えよう。

「なんか最近どん詰まりになってるんだよなあ・・・配信もポケモン情報も」

今後の活動に不安を感じつつ、配信の準備を始めるうみなのだった。

「はいどーも、うみです。今日はまったり海釣りでもしようと思います」

『わこっ』『また釣るか!』『釣り(意味浅)』『わこー』『ほう、また教えていこうかな』

「はい、前回の釣果は1匹だったので、今度はもっと釣れるよう頑張ります!釣り師ニキは今回もよろしくお願いします」

平日の朝ということもあり、視聴者はさほど多くない。しかし、今

回はリアルタイムでの視聴者は重要ではない。あくまで相談室の箸休めの配信だ。・・・半分くらい趣味になり始めているが。

『いいぞいいぞー』『今回は麦わら帽子か』『ありよりのあり?』『あり居り侍りいまそかり』『さっさと平安の世に帰れ』

視聴者はどうやら俺の格好がきになるようだ。最近になって日差しが強い日が増えてきたため、熱中症対策でおじいちゃんの家から引っ張り出してきた麦わら帽が最近の外出時のお気に入りだ。

「へへへ、似合ってますか?日差しが強くなってきましたし、皆さんも気をつけて下さいね」

『良き・・・』『変態・・・?』『変態警察早い!?俺はただ似合ってるというつもりで・・・!』『最近の警備きつすぎんよー』『うみちゃんも気をつけてね』

「さて、それじゃあいきますか!」

「まあざつとこんなもんですよ!」

『やべーな』『今回俺の出番ねーな』『釣り師ニキはお払い箱・・・つまり今度は私の時代よ!』『変態ニキ・・・』『頭・・・冷やそうか・・・』『もしかして、またシベリアですか!?!』『yes! yes! yes! yes! yes! yes!』『オーマイゴット・・・』

40分経過し、俺のもってきた大きめのバケツには様々な魚が入っていた。思わずドヤ顔でえっへんと胸をそらす。画面外ではライがカニを追い回して遊んでいる。

『ドヤうみちゃん、いい顔や』『素直にタイプです』『そうか、今度は君だね。変態ニキが待ってるぞ』『(。D。)』『なんというか、こう・・・父性的な何かを感じる』『同意』『ぺったんk』『お前は今言っではいけないことを言った』『変態警察ニキ、判決を』『死刑』『超スピーディー!?!』

「誰がぺったんこですか。俺だって成長したら・・・」

そこまで言っつて、いや俺は男だろうが、と自分で突っこみを入れる。

無自覚に女の子の思考になったことに凹む。

『まあ美人にはなるだろうなあ』『大きくしたいならまず食生活と日々の生活から！これ常識ね！』『随分と詳しいみたいだな変態ニキ。さあシベリアに帰るぞ』『あれえ!』『草』

何やらコメントも胸談義になっているが、気を取り直して釣りを続ける。

「・・・ああ、もうそんなことはいいですから！ほら、まだいける時間ですし、じゃんじゃんいきますよー！」

『来なくなったね』

「・・・」

しかしその後、一向に当たりが来なくなった。ぶすつとした表情で竿を持つうみだったが、時間的にももうあたりは望めない。

「もう時間ですし、そろそろ終わりですね」

『まーもうすぐ釣れなくなる時間帯だしなあ』『え？もう終わり？今来たんだけど(´・ω・｀)』『じゃあここからは雑談とか！』『あほ、うみちゃんが熱中症なるわ』

「・・・そうですね。今夜は雑談配信にでもしますか」

『おっ、一日二回配信か!』『や　　つ　　た　　ぜ』『おお、帰ってからの楽しみができたな!』

視聴者からの反応は概ね好評のようだった。早速片付けて家に帰ろう、と思いきや糸を巻いた時だった。

「・・・？」

『うみちゃんどした?』『根掛かりか?』

首をかしげるうみに視聴者が心配する。うみは、竿にかかる謎の力に戸惑っていた。

「・・・何かかかっています!」

『!?!』『うおお、まじか!』『引けー！引くんだー!』『ちくわ大明神』『誰だ今の』

慌てて竿を持ち上げるうみ。凄まじい力に腕が持つてかれそうに

なる。

「うぎぎぎぎぎぎぎぎ！大物、だあああああ!!？」

『草』『女の子が出ていい声じゃねえ』『でもかわいい』『うみちゃん
カワイイヤッター!』『うみちゃん、少し緩めて！少し泳がせるんだ
!』『釣り師ニキ今日初仕事w』

釣り師ニキの指示のもと、緩急をつけてどうにか疲労させようとする。

「なんか、全然止まらなああああ!!？」

『大草原』『なんか様子おかしくねえか?』『いやまじで、大物にしても
限度あるやろ!』『うみちゃん引き摺り込まれるんとちゃう?』

しかしかかった魚は、一向に疲労した様子を見せず、ものすごい勢
いで泳ぎまくっている。

「・・・まさか！ライ！お願い！」

「ライ！」

『!』『なんだ?』『ネズミ?』『いやデカすぎるやろ』『黄色いし』

急いでライを呼び、構えてもらう。画面内に入ってしまった、ライを
見た視聴者が驚いている。

「ライ、海面、あの暴れてるところに『10まんボルト』！」

「ライ、チュウウ！」

『うおお!』『電気!?!電気出た!』『どーなってるんだ!』『まじかよ!』

ライが電撃を未だ泳ぎ続けている魚に放つ。しかし、電撃は海面に
当たるも魚はピンピンしている。

「なんで!?!」

「ライ!?!」

『電気は海面に落ちてもその周辺以外の場所には感電しないよ！それ
に水中にいると更に電気は通りにくい!』『有能』

「そんな・・・」

視聴者からの情報にどうすべきか考えるうみ。電気を直接叩き
込まなければいけない。しかしライは水中では戦えない。相手は水
中を自在に泳いでおり、仮にライが海に潜って格闘戦に持ち込んでも
勝てるかと言われたら難しい。

「！出た！」

『なんだあれ』『エイ?』『にしては青くね?』

と、猛然と泳いでいた魚が海面を飛び上がる。その姿は青いエイそのもの。その姿を見たうみは驚く。

「あれは・・・タマンタ!?!」

『タマ?』『タマタマ?』『おいやめろ』『また外来種・・・いやポケモンか?』『まじか、また釣り放送で見つかったのかよ!』

「カイトポケモン、タイプみず・ひこう。海面近くを飛ぶように泳ぐポケモンです！模様は住む地域によって変わりますが、きほんテツポウオotteいうポケモンの群れといることが多いんですが・・・つとおおあああ!?!」

説明していると再度タマンタが爆走し始める。急に釣竿に負荷がかかり、ミシミシと嫌な音が聞こえる。

『飛ぶようになってか、まじで飛び跳ねてんじゃねーか』『ちよつとかわいいけどなんか・・・』『すげえ激しいな』『まじですげえテンション高いなあのエイ』

タマンタはものすごい勢いで泳ぎ続ける。うみはどうにか竿を持つてはいるものの、完全に引つ張られてなすがままの状態である。

「くう、ライ!」「10まんボルト」でタマンタを近くまで誘導できる!?!」「！ライ!」

ライが10まんボルトをタマンタの進行方向に向けて連発し、進路を限定する。

『めっちゃ電気放ってるやん』『なんなのあのネズミ』『というか普通に言ってるけどあれほんまにネズミか?』『ちよつとわからんくなってきた』

「いいぞ、ライ!」

コメント欄が戸惑っているが今はライについて説明してもらえない。ようやくタマンタがうみの近くまで追い込めた。なおも海面近くを爆走するタマンタだったが、もう完全にライの射程範囲内だ。

「ここまですればもう当てられる!ライ!一点集中『10まんボルト』!」

「ラアアイ、チュウウウウ!!」

「マママママママ!?!」

「ココココココココ!?!」

『一点集中10まんボルト』とは、ライとうみが暇つぶしに考えた必殺技の一つである。普通の『10まんボルト』とは違い、ライの電気袋に溜まった電気をさらに過剰に貯めさせ、それをたった一体の相手に対してぶっ放すアレンジわざである。なお、ライは過剰に電気を貯めると、ものすごく電気袋がかゆいらしい。10まんボルトは正確にタマンタを射抜き、タマンタが苦悶の声を上げる。

「やった・・・!ん?なんの声だ?」

『おお、当たった!』『ってかあれ多分10まんボルト以上あんだろ・・・』『もう電気をぶっ放すネズミ?に対してはノーコメントだね・・・』『ってかなんか様子おかしくね?』『別の鳴き声聞こえてね?』

「・・・」

うみは海岸に流れ着いたタマンタに近づく。タマンタは海面に腹を上にして黒焦げで浮かんでいる。そしてその横には、「釣り糸を引つ掛けた」テツポウオが目を回し、同じく黒焦げで浮かんでいた。

「『いやそつちいい!?!』』」

海岸にうみと視聴者の絶叫がこだました。

「えー・・・それでは、とりあえず今回の釣り配信は一旦終了します・・・今夜もう一度、雑談配信でお会いしましょう、さようなら」

『おつ』『おつーw面白いもん見れたわw』『あのネズミの事とか、説明楽しみにしてるよー』

気絶したタマンタとテツポウオを、配信でみえないように持っていた最後のキズぐすりで治療した後。配信を止めたうみは、ライに呼んで来させたバンギラスに頼み、2匹を家に運んでいた。夜の配信で話

すネタとして、ライの事を話すこととなったが、ポケモンを探す上でいつかはこうしてライ達を見せるときはくるだろうと考えていたため、後悔はない。

「とりあえず、今問題なのはこいつらだな・・・」

応急処置としてテツポウオは水槽に、タマンタは裏庭の池に入れておいた。海水でないので大丈夫か是不安だが、他に方法がない。

「まさかタマンタじゃなくて、その下にいたテツポウオが釣れてたとはなあ」

結果分かればなんてことはない、テツポウオが竿にかかり、驚いて泳ぎ回っているところに泳いでいたタマンタが運悪く引つかかってそのまま泳ぎ続けたというだけの話であった。なんとも間抜けな話であるが、タマンタからしてみれば突然テツポウオに引つ張られあつちこつちに引きずり回された挙句、ライの一点集中10まんボルトを食らうという笑えない状況である。

「ごめんね、タマンタ。とりあえず元気になるまでは世話するから・・・」

「タ、タマア・・・」

まだ痺れているタマンタだったが、どうやら気にしていないようだ。こちらにニツコリと笑いかけてくる。なんだこの子天使かよ。

「ライ・・・」

「コウ！コア！」

ライが水槽のテツポウオに謝っている。こちらはどうかやら怒っているようだが、顔が全く変わってないのでよくわからない。申し訳なさそうなライだが、正直シニールで笑える。

「・・・さてと」

タマンタ達に謝罪を済ませたうみは、夜に配信する説明会でどこまで話すか考えるのだった。

「そっちはどうだ？」

「いや、問題ない。このまま観測を続けよう」

宇宙ステーションにて実験中の2人の宇宙飛行士。2人は現在、実

験の準備に勤しんでいた。

「・・・ん？」

「なんだ？」

「いや、なんかあつちに蛇みたいなのが動いていたような・・・」

そう言つてオーロラ付近を指差す男。もう1人の男は笑いながら答える。

「はっは、そんなバカな。蛇どころか、他の生き物もいられないよここは。宇宙なんだぞ？」

その言葉に男は苦笑いで答える。

「そ、そうだな。多分デブリを見間違えたんだろう。悪い、作業に戻る」

そう言つて、男達は作業に戻るのだつた。

「緑色のデブリ級の大きさの蛇なんて、まさかな・・・」

第11話

「よいしょ．．．と。聞こえますか？」

『おk』『大丈夫だ、問題ない』『それあかん奴じゃ．．．』

タマンタ・テツポウ才感電事件から時間が経ち、夜の雑談配信の時間となった。俺は現在、常連となった100人ほどの視聴者の前で配信していた。今まで配信の内容は過去ログに普通に残してきたが、特に今回の放送は多くの人に見てもらいたいと思う。そのためできるだけわかりやすく説明せねば．．．。

「すう．．．ふう．．．。では、今夜に配信は雑談．．．という名の昼間釣れた生物．．．ポケモンに関するより詳しい説明を行います。昼間の配信を見ていない方はすいません、最初の方は話についていけないかもしれません」

『舞ってた』『舞うな、座れ』『ポケモン?』『ああ、うみちゃんの妄想の．．．』『見てなかった奴らは急いで見てこい。マジでびっくりするぞ』

「それではまず、ポケモンっていうのがどういう生き物なのかについて話します」

そこで一旦切ったうみは、ペットボトルを取り水を含む。落ち着いたところで、説明を開始する。

「ポケモンとは、ポケットモンスター略です。不思議な生き物で、皆さんも知っているどこにでもいるような生き物と似ている子もいれば、全く見たことのない姿の子もいます。中には人知を超えた現象を起こすことのできる存在もいます。海に、山に、森に、川に．．．。はては街中にもいます」

『ファッ!?!』『おいおい、スケールデカすぎね?』『何言ってるんだこの子w頭いかれてんのかw』『死ぬ』『この世に生まれたことを後悔させてやろう』『お前ら落ち着け、うみちゃんが喋れねえだろうが』

一旦コメントがある程度収まるまで待ち、うみは話を続ける。

「信じられない方、信じてくださる方、それぞれいると思います。．．．そこで、とりあえず見てもらいたい子がいます」

そう言っとうみは一度席を立つ。

『放送事故?』『うみちゃん行っちゃった・・・』『イツた・・・?』『真剣な場にも現れる変態は収容所にしまっちゃおうねえ・・・』『あ、戻ってきた』

戻ってきたうみは、抱えていた「それ」をカメラに映るよう机に乗せる。

『・・・は?』『あ、昼間の配信に出てた電気ネズミ!』『電気?ってかこんな色の生き物いたっけ?』『少なくとも日本原産じゃねえな』『あれじゃね?最近のニユースの・・・』

「はじめまして、俺の相棒兼家族、ライチュウのライです。ほらライ、挨拶して」

「?ライ!」

『?!』『え!』『キエアアアアア!シャベツタアアアア!!』

カメラに向かって元気に挨拶するライに、視聴者が阿鼻叫喚となる。

「この子は、種族名ライチュウ、ねずみポケモンという分類で、ニツクネームはライ。タイプはでんきタイプです」

『待って待って、何この生き物』『昼間の動画見てきた、こいつか電気ぶっ放してたの』『え、こわ・・・』『いや流石に嘘すぎるwどうせ人形だしwあの動画もどうせCGだろw』『生放送の配信で合成ができるとでも?』『やめとけ、どうせマウントとりたいだけのイキリだ。相手にするな』

混乱が未だ収まらない視聴者に、出来るだけ丁寧に説明していく。ポケモンについてで欠かせない情報であるタイプとその相性関係、きのみなどの異変や道具。そう言った情報を一気に放出するうみ。ここで一気に言うことで、無理矢理でも視聴者に分からせる、そのためにもひたすら喋り続けた。

「・・・以上です」

うみが喋り終わると、コメントが津波のように送られてくる。

『よー分からん』『タイプとかわざとか、結構凝った設定だな』『ばか、設定じゃねーよそういう生き物がいるっていうことだよ』『おいおい

W信じるのかよW頭大丈夫か?』『お前ら落ち着け、この配信も残るだろうし、分からなかったやつはそれ見ろ。否定したい奴も否定すんのは勝手だが配信中に言うな。どっかでスレ立てて勝手にやってる』
信じる人と信じていない人は大体2:8くらいの比率のようだ。

大混乱のコメント欄を見ながら、うみはとりあえず次に移ろうとパソコンを持ち立つ。

「それでは次に、実際にポケモンのバトルを見てもらいます」

『バトル?』『え、戦うのかよそいつ』『昼間にもやってたぞ。めっちゃ電気出してた』『まじで?!』

昼間の放送に来ていた人はなんとなく察しているようだが、見えない人がピンと来ていない。とりあえずライについてきてもらい、配信しながら裏庭へと向かう。

「えー、ここがうちの庭です」

『広いな』『なんかでっかい蜂の巣ない?』『いやでか!』『あれもポケモン?』

庭を写すと、視聴者がスピアーの巣を見て驚いている。スピアー達は現在森に餌を取りに行ってるためあまりいない。

「あれはスピアーという、蜂そつくりのポケモンの巣です。最近山に入った際に見つけて、色々あつて家族になりました」

『いやこれを家族と言えんのかい...』『お母さん許しませんよ!』『母親面すんな』『実際親は泣くんじゃないか?』

「...?ああ、俺今は親はいないですよ」

『...え?』『あかん』『いやいや、親は仕事でいないとかそういうのだろ!』

「いいえ、1ヶ月ほど前に置き手紙だけ置いてどっか行つたみたいですよ」

『はい闇深』『あかん奴やん』

「とういか俺自身親の顔とか覚えてないんですよー」

『いやそんな簡単に...』『うみちゃん?それはギャグとして言っているのかい!?!』

コメントが心配しているが、うみはそれに気づかない。スピアーの

衝撃を吹き飛ばす発言にコメント欄がドン引きする中、うみがバンギラスを呼ぶ。

「おいで、バンギラス。ちょっと頼みたいことがあるんだ」

「・・・？」

『!?』『おいおい、もう誤魔化しようがないぞ!?』『でつか!?つか怖!?』

画面内に現れたバンギラスに、再度コメントが騒ぐ。うみはその様子を見つつライとバンギラスに説明する。

「それじゃあ、いつもみたいに遊んでみて」

「ライ！」

「・・・グル」

少し離れたところでパソコンを持ち見守るうみ。うみが十分に離れたところでバンギラスから動く。

「ガアッ！」

「チュウ！」

速攻での『きりさく』に反応し、圧倒しているすばやさでもって回避するライ。あまりの早さにバンギラスの反応が追いついてない。それでもバンギラスは思い切り腕をぶん回す。こちらにも風圧が来て、うみの銀髪がたなびく。スピアーも必死で巢から飛ばされそうなビードル達を守っている。

『うおお!?』『はえー!』『ライちゃん見た目に反してクツソ強い!』

『あの早さに加えて電撃ってことか・・・』『いや当たってないけどあのでかい方も大概じゃね?』

「ライはかなり素早いですけど、バンギラスの方はパワーもありますし、当たると結構きついですね」

『ちなみにあつちのでかい方はどんくらい強いのか?』

「そうですね、怒って暴れると山一つ崩壊します」

『?!』『ファッ!?』『はいもうアウトー』『やっぱり嘘やんwんな生き物おるか?』『?あいつどこいった?』『今しがたBANした。あまりにもうっとおしかったから』『変態警察ニキ!?』『マジで有能やな』

バンギラスの説明に驚く視聴者。と、ライがバンギラスの猛攻をかくぐり『かわらわり』を頭に叩き込んだところでバンギラスが気絶

し終わりとなる。威力がありすぎたのか、庭にサイドンの時と同じようなクレーターができる。

「・・・とまあこのように、ポケモンのバトルとは、ポケモン同士での対戦的なもので、相手を殺すまでするものではないです。あくまで相手が戦闘不能になるか、きぜつするまでという感じですよ」

『ほーん、格闘技的な感じなのか』『格闘技でクレーターができてたまるか』『面白そうではある』『なんか危なくね？ポケモン？とかいうやつがかわいそう』『あーまあ動物愛護団体とかもなんか言ってきてきそうだよなあ』

視聴者のポケモンバトルへの感想は概ね好評ではあるが、野蛮だ、危険だという意見もちろほら見える。

「そうですねえ、でもバトルが嫌ならあくまでやらないというスタンスでもいいと思いますよ。ただ、ポケモンによつては適度にバトルした方がストレスの発散などの面で良い時もありますよが」

『ネズミが歯を研ぎ続けるみたいなものか』『生態的な意味でやらないといけないってことか』『あのでかいのも結構好戦的な感じしてるしな』

「ええ、バンギラスはたまにバトルしてあげないとフラストレーションが溜まって暴れちゃいますね」

『山壊すデカブツが暴れるとかなにそれこわい』『ほえー、ポケモンって結構危険なのな』

「あつ、でも基本的には仲良くなればライみたいに人懐っこくていい子もいますよ!？」

なんだかコメントの流れがポケモン危険な方向に向かい、慌ててライを画面内に出す。

「？」

『おう、首傾げとる』『うん、かわいい』『ライちゃんも可愛いけどうみちゃんも可愛い』『・・・』『変態警察ニキ、落ち着いて』

「えー、というわけで今回の配信ではポケモンについての説明を行いました。もし今後ポケモンの可能性のある生き物に出会った際は、俺に情報をください。それが本当にポケモンであったなら、俺が相談に

乗れるかもしれません。それと、もしポケモンにであつても決して刺激しないでください。ポケモンは本当にわざという形で危険な攻撃をしてくることもありますので」

『りよー』『わかつた』『まあ頭に入れとくかな』『あほらし』『また何かあつたら知らせるねー』

何人かの視聴者は与太話だと思つていようだが、常連の人は信じてくれるみたいだ。少し嬉しくはあるが、情報のために危険なことにならなければいいが……。

「……？」

ふとシャツトダウンしたパソコンを見たうみは、その画面に違和感を覚える。

「なにかが見てた……？」

そんなまさかな、とパソコンを閉じ、『かわらわり』によつて庭にできた巨大なクレーターは見なかったことにして、ライを抱えリビングへと戻るのだった。

「……グウ」

「あっ!?ごめんバンギラス、今キズぐすり持つてくるから!？」

新人配信者：うみちゃんについて語るスレ

1. 名無し

さて、そんなわけで今日結構やばい配信だったわけだが

2. 名無し

流石にこれは……ねえ？

3. 名無し

わいは信じるで！ポケモンってのについて知っとくのもおもしろ
うやん

4. 名無し

まじかよ

5. 釣り師

俺もだ。あの子が嘘つくとも思えんしな

6. 名無し

釣り師ニキキター！これで勝つる！

7. 名無し

じゃあ何か？ここ最近の外来種騒動はみんなうみちゃんの言うポ
ケモンってやつで、これからもまた現れるってのか？

8. 名無し

そう言うことやろうなあ

9. 名無し

おいおいwアホかよw常識的に考えれないのかお前らwどうせあ
の配信でのバトルってのもなんかのCGとかおもちゃだろwなに真
面目に喋ってんだよ死ねよw

10. 名無し

<<9ここにも出るんか草生え荒らし太郎

11. 名無し

そのあだ名は草。それより今後どーすんのこのスレ。外来種の情
報共有板として使ってたけど

12. 名無し

いつも通りでよくね？特に使い道が変わるわけでもないし

13. 名無し

せやな。ただ今後はポケモン関連らしき情報をうみちゃんに届け
ることが目的というより、ポケモンを見つける方向でシフトしてい
くだろうけど

14. 名無し

見つけてどーすんの？うみちゃんが言うには刺激しない方がいい
んだろ？

15. 名無し

うみちやんに相談

16. 名無し

うみちちゃんとお話し

17. 名無し

うみちちゃんとお付き合い

18. 警察

<<16、17 さて、今日は仕事が多いな。ほら刑務所行くぞお前
ら

19. 名無し

変態警察ニキキター!

20. 名無し

そーいやさつきから草生やし荒らし太郎がいねーな

21. 警察

ああ、そいつならさつき出禁にしてきた

22. 名無し

マジで有能やな!?

23. 名無し

もうあいつ1人でいいんじゃないか? (AA略

24. 名無し

とりあえず話を戻すと、

ポケモンを探す

うみちやんに発見次第報告

指示を待つ

って事でおk?

25. 名無し

それでいいんじゃないか?と言うかそれ以上なにもできんぞ

26. 名無し

たしかに。・・・話は変わるが、うみちちゃんの闇深案件についてどう
思う?

27. 名無し

あー・・・

28. 釣り師ニキ

どうりで結構夜更かししてるなと思ったんだ・・・親フラとかもなかつたし

29. 警察

外見的にまだ小学生、成長の個人差を考えても中学一年生くらいだろうに

30. 名無し

・・・なあ、いまひとつ嫌な予感がしたんだが、親がいないってことは学校とかって・・・

31. 名無し

あかん

32. 名無し

それ以上いけない

33. 名無し

こ、この話は永久的タブーとする！

34. 名無し

異議なし

35. 名無し

異議なし

36. 釣り師

異議なし

37. 警察

異議なし

38. 名無し

それでどりあえずどーする？

39. 名無し

俺は熊騒動のあったキャンプ場が家から近い。その辺調べてみる

わ

40. 名無し

俺はじゃあ最初の農園のきのみとか調べるわ。実はあれうちのじ
いちやん家だし

41. 名無し

さて、忙しくなるぞ！

とある国の有名観光地となつていとある常夏の島。そこにある
火山の中、『それ』は現れた。

「.....」

『それ』は眠るように丸まり、マグマの中に沈んでいる。普通の生き物
であればタダでは済まない超高温のマグマの中で『それ』はまるで快
適なベッドの中のような心地よさとともに眠っている。

「.....」

『それ』は今はまだ眠りにについている。そして、『それ』に気づく者も
いない。しかし、かつてこことは違う世界で、長期にわたって降り続
いた大雨を光と熱で蒸発させ、水害から人々を救ったという伝説を持
つ『それ』は、またいつかその眠りから目覚める時が来るだろう。

「.....GULL」

それが果たして100年後なのか、1時間後なのか。それは彼のみ
が知ることである。

こことは違う異世界。現実と繋がってはいるが、1人——いや、
1匹を除き自由に行き来する者のいないその世界で、『それ』はある空
間を覗いていた。

「.....」

『それ』はライやうみが世界に現れる以前から存在した。しかし、なぜ
か『それ』は力を失い、異世界から出ることができなかつた。故に、た

だ漠然と現実世界を「観る」事しかできないでいた。

しかし、異世界をただ悠然と飛び回っていたある時。『それ』はなにかの力の波動を感じとる。急いでそこへと向かうと、また空間を歪め、「観る」。

「・・・！」

そして『それ』は、ヒトでありながらヒトでない力の波動を感じる1人の少女を見つける。

「……………あれができれば、自分は力を取り戻せるかもしれない。

「GYURUKYUI……………!!!」

尋常ではない叫びをあげる『それ』。そこに含まれる感情は「歓喜」。力を取り戻す可能性を見つけた喜び。故に、『それ』は行動を開始する。

『それ』は決してその少女を逃さないだろう。

第12話

新人配信者 うみちゃんについて語るスレpart3

120. 名無し

で、どうだった？

121. 名無し

だめだ、キャンプ場の方はもう警察がバリケード作ってて一般人
じゃ入れねえよ

122. 名無し

あーやっぱりか。まあ怪我人も出てたし妥当やな

123. 名無し

農家の方は？

124. 名無し

とりあえずきのみに関しては回収できた

125. 名無し

よし、うみちゃんに相談してみよう

126. 名無し

メールはもう送ったで

127. 名無し

いやお前平日の真昼間に送っても、うみちゃん学校いつてるだろ

128. 名無し

5分ほどして帰ってきました・・・

129. 名無し

あっ・・・

130. 名無し

ばか、その話はタブーだっつってんだろ

131. 名無し

反省はしてる

132. 名無し

それでなんて？

133. 名無し

とりあえずきのみの名前と栽培について教えてもらった

134. 名無し

栽培!?出来るのかよ

135. 名無し

結構簡単っぽいぞ。あ、ちなみにきのみはオレンの実って名前らし

い

136. 名無し

オレン?変わった名前だな

137. 名無し

なんでもポケモンに与えると怪我が治るらしい

138. 名無し

薬草的な感じか

139. 名無し

それで栽培の方は?

140. 名無し

今準備してる。これから開始だな

141. 名無し

他の奴らは?なんか有力な情報とかないわけ?

142. 名無し

平日の昼間だぞ?働いてる奴の方が多いわ

143. 名無し

つまり今いる俺らは・・・

144. 名無し

やめろ、俺は休憩してるだけだ

145. 名無し

人生の?

146. 名無し

ちっげーよ!

147. 名無し

警察ニキと釣り師ニキは?

148. 名無し

警察ニキなら仕事らしいぞ。釣り師ニキも学校らしい

149. 名無し

新情報ゲットしてきた!

150. 名無し

ナイス

151. 名無し

でかした!それで内容は?

152. 名無し

きのみの研究をしていた研究所で謎の生物が脱走したらしい。知り合いにその研究員が居るんで話を聞いてみたら、「紫色をしたでかいネズミ」だったらしい

153. 名無し

可能性はあるけど・・・

154. 名無し

それ詳しい情報は得られない感じじゃね?

155. 名無し

それなんだが、今その知り合いが近くにいるんだよ!んで、今そいつにこの入り方教えてるところ!

156. 名無し

本人いるのかよ!

157. 名無し

すまない、紹介に預かった研究員の者だ。ここなら謎の生物に関する情報を得られると聞いたのだが

158. 名無し

研究員キター!

159. 名無し

とりあえずその生き物の外見情報オナシヤス

160. 名無し

オナシヤス・・・?

161. 名無し

おい、初心者用語使うな。お願いしますって意味な

162. 名無し

ああそういうことか。

外見上は通常思い浮かべることのできるネズミと変わらない。ただ、大きさは0.3mほどあり、全体的に紫色をしていた。仕掛けた捕獲用の罠はどれも効果がなかった。罠付近の痕跡から、非常に知能が高いものと考えられる。研究所内の備品のいたるところに削られたような歯型が残されていた

163. 名無し

ちなみに画像とかある感じ？

164. 名無し

それは残念だが機密情報もあるのでここには出せない。

165. 名無し

おk、じゃあとりあえず誰かこの研究員の話のコピペしてうみちやんに送って

166. 名無し

もうやってる。というか返信今きた

167. 名無し

有能。なんて？

168. 名無し

ポケモンの可能性ありだつてさ。考えられるポケモンはコラッタ、ねずみポケモン。タイプはノーマル、基本夜行性で、伸び続ける歯をメンテナンスするためにひたすらいろんなものをかじるらしい

169. 名無し

うみちゃん・・・？それにポケモン・・・？なんのことだ？

170. 名無し

おい、友人。お前からそいつに説明してないのかよ

171. 名無し

わり、今からするわ

172. 名無し

うみちゃんは対処法についてなんて？

173. 名無し

どうにもできないとよ。コラツタつてのは普通のねずみとは違うから、ネズミ捕りとかでは捕まえるのは難しいらしい。

174. 名無し

なるほど、つまりは手懐けてゲツトするか・・・

175. 名無し

バトルで倒して捕縛、つてことだな

176. 名無し

バトルに関しては多分うみちゃん以外にできる奴いねーだろうし。

177. 名無し

説明終わつたよー。過去配信とか見せたりしてたら遅くなった。

178. 名無し

というか研究者つてこの手の話は信じねーんじゃね？

179. 名無し

いや、非常に興味深い話だ。ぜひそのうみちゃんという人物とは

会って話がしたい

180. 名無し

それは無理じゃね？

181. 名無し

まーそれはともかく、ここで研究畑の奴とつながりができたのは結構

構ナイスプレーだな

182. 名無し

とりあえず研究者ニキはコラツタの手懐け頑張れ

183. 名無し

とりあえず上に報告するにはするが、信じてはくれないだろう。個

人的に試す

184. 名無し

おー

185. 名無し

今北産業。きのみヤベエわ

186. 名無し

どうした農家ニキ

187. 農家ニキ

オレンの実を実験がてら怪我してうちの飼い犬に食わせてみた

188. 名無し

はいバカ

189. 名無し

なんでまだ完全にはわかってないものを試すの？バカなの？死ぬの？

190. 農家ニキ

いやコロって名前なんだが、前脚骨折してすげえ痛々しい姿で、薬草的な実だつて聞いてちよつと魔がさした。でもヤベエのはここからだ。なんと、前脚骨折つていう結構な重傷が完治した

191. 名無し

!?

192. 名無し

それは本当かい!?

193. 名無し

ちなみに研究者ニキ、どれくらいやばい？

194. 名無し

医療が変わるレベルだ！骨折レベルの傷害がきのみ一つで治るなんて、信じられない！

195. 名無し

・・・あええ？研究者ニキ？

196. 名無し

あー、知り合いなんだが、あいつ細胞分裂の活性化だとか純粋な成分による効能か、とかぶつぶつ言ってる

197. 名無し

あー、自分の世界に入ったか

198. 名無し

それで、農家ニキの犬はどんな感じ？

199. 名無し

いやもうピンピンしてる。なんかものすげえ走って散歩行つたわ

200. 名無し
ヤベエなきのみ

掲示板がなんやかんやで騒いでいる時。配信にて『釣り師ニキ』と呼ばれる男は、山の中を祖父やその他漁師仲間とともに登っていた。

「こらあ！ワタル！はようこんか！」

「ウルセエよじいさん！つか、なんで山に登ってんだよ！漁は！」

「あほう、今日はわしらが植林する日じゃ！つべこべ言わず苗木持ってこい！」

ズンズンと登る祖父と、釣り師ニキことワタル含む漁師仲間は、ひこいら荷車を引いている。そこには苗木が満載されていた。

漁師が山に登るということに疑問を持つ人もいるだろうが、実は漁師が植林活動を行う事も多い。そして今日は彼らがその役を担っているということだった。

「つたく、なんでこんなこと・・・」

学校から帰り、ポケモンについて調べていこうと思っていたワタルだが、突如祖父に連れていかれ、このような状態となっていた。

「ふう・・・ん？」

植林作業に入る祖父たちを見つつ、近場の岩場に座り込むワタル。ふと山の奥を眺めていると、なにかが動く影が見える。

「なんだ？」

警戒しつつ茂みの中に入るワタル。

ひたすら茂みの中を歩き、途切れた所に来た時だった。

「・・・おい！」

そこで見つけたのは、見たことのない生き物だった。体は蛇のようであり、色は水色。頭部には魚のヒレのような白いトサカがあり、何かに襲われたのか、腹部を負傷していた。

「こいつは・・・これがポケモンってことか？」

「おい！ワタル！・・・？」

いつまで休んでいるのか、と怒りながら祖父がやってくるが、そこ

にはワタルの姿はなかった。

「……どうしよう」

謎のポケモンを抱え、山を駆け下りてきたワタルは、自分の部屋へと戻ってきていた。

「と、とりあえず手当だな！」

そう言って救急箱を探すワタル。

するとポケモン(?)が目を覚まし、そこが自身が最後に気を失った場所でないことに気づき暴れる。

「とあ!?!落ち着け、怪我してるんだから！」

慌てて抑えようとするワタルだったが、怪我しているにも関わらず物凄くうごきまわり、かつ蛇のような体がうまく掴めない。

「キュウ!キュウ！」

「落ち着けて!怪我が悪化するだろ!?!取り敢えず止血だけでもってあああああ!?!パソコンはやめろおおお!?!」

ポケモンは盛大に暴れ、ワタルの部屋は凄惨な光景が広がるのだった。結局キズが開き、動きが鈍くなってからようやく動きを止めたポケモン(?)に、ワタルは死んだ目で包帯を巻くのだった。

電気もつけず、昼間だというのにカーテンすら開けていない薄暗い部屋の中、その男はパソコンの画面を凝視しながらキーボードに指を走らせていた。

「……この情報も違うか。こっちはまだそれっぽいかなあ。ああ全く、上も少しは仕事を分担してくれっての」

悪態をつきつつもその指は止まらず、いくつもの検索窓を開いてく。時たま口になっている棒付き飴を舌で転がしながら、ひたすら情報を集める。

「どうだ？何かわかったか？」

不意に男の後ろからドアの開く音と声がある。振り返ると、部屋の入り口からスーツ姿の初老の男性がこちらを見ていた。

「ダメっすね。外来種やらきのみ情報はどれも当たり障りのないものばっかですわ。というか、そっちの方面は『あんたら』の方がわかってるんとちゃいます？」

「それでも些細な情報が時に重要になるのさ。こちらに届くのはいつも大きな情報ばかりだからな」

そう言つて肩をすくめる男性に、しっしっしと笑いながら再びパソコンに向かう男。

「そいじやまあ続けます。なんもないとは思いますが、またなんか進展あったら連絡しますわ」

「ああ、頼むぞマサキ」

そう言つて男——マサキの肩を叩くと、差し入れの袋を置いて男性は部屋を出るのだった。

「コーヒー牛乳たのんどったのになんでココアやねん・・・」

「ふう、これでよし」

池のタマンタの包帯を取り、うみは一息つくのだった。

今日はようやく体が全快したタマンタとテツポウオを放流する日だった。

「ごめんな、2匹とも。達者でな」

「タマ〜」

「コッ」

海辺に連れて行き、別れの言葉を言ううみ。ライはその横でテツポウオにじゃあな！と言う風に手を振っている。

タマンタもうみに笑いかけながらヒレを振る。テツポウオはケツと言う風にそっぽを向いているが、まんざらでもなさそうだ。

「じゃあね、元気になー!」

「ライラー!」

遠ざかっていく2匹が見えなくなるまで手を振り、家へと帰る。

「治ってよかったね」

「ライ!」

ライと家に帰り、リビングにいくうみ。

「テレビでも見てるか・・・」

夜の配信まで時間が空いていることを確認し、ゴロゴロして過ごすことに決めるうみ。ソファへと座り、テレビをつける。ライはそんなうみの膝の上に丸くなり、うみに撫でてもらう。

『昨夜未明、〇〇高速にて玉突き事故が発生。ドライバーによると、「突然大きな鹿が飛び出してきて、避けようとしたらスリップした」と証言しております』

『アイドルの〇〇さんが、番組のロケの最中鳥に襲われるというハプニングが起きました。鳥は通常ではありえないほど大きかったとの証言もあり、相次ぐ外来種関連の事件との関連性が示唆されています』

「・・・」

外来種関係のニュースを見て苦い顔をするうみ。ポケモンの可能性もあると考えてはいるが、詳しい情報はあまり報じられないニュースでは真偽を見分けられない。それでももしもポケモンが人々を傷つけているのだとしたら。そう思うとなんとかしなくてはという思いが高まる。

「やっぱり今のまま情報を集めるしかないか・・・」

おじいちゃんが退院したら、少し遠出をして見る必要があるかも。そう考えるうみだが、すぐにある問題にぶち当たる。

「そうなるバンギラス達をどうすれば・・・」

そう、もしうみが遠出をするとなった場合、バンギラス達の世話を

する者がいなくなる。おじいちゃんに頼むにしても、スピアーやバンギラスの世話を任せるのは殺しにいつてるも同然である。

「はぁ・・・手詰まり」
「チュウウ？」

どうにもうまくいかない状況に、ため息の止まらないうみなのであった。

『・・・』

そんなうみの後ろ、立てかけられた鏡には、水面のような波紋が出来るのだった。

「はぁ・・・うみちゃんやっぱかわええわぁ！」

都内のあるイベント会場、その楽屋の一つに、デレッツデレのだからしない顔をしたアイドルが1人、スマホを前に悶えていた。

「アカネちゃん、そろそろ準備・・・また動画見てるの？そろそろ握手会始まるから！ほら！」

「いやー！うちの楽しみを奪わんといてー！」

準備ができたか確認に来たマネージャーが、呆れつつスマホを取り上げる。この世の終わりのような悲鳴をあげつつ足にすがりついてくるその光景に、ファンが見たら即座に離れていくんだろうなと思うマネージャー。

「ほら、今日の仕事はこれで終わりなんだから、シヤキツとするー！」

「ううう、後でちゃんと返してーな。スレにも書き込むんやから」

恨めしそうにマネージャーを睨みつつも、いそいそと準備を進めるアイドル。。。アカネだったが、ふと楽屋の端を見て止まる。

「なんやあれ？」

そこには、上が黒、したが白で、黒の上から黄色いラインの入ったボールが落ちていた。

「あんなん持ってたっけ？」

「アカネちゃん!?!急いで！」

「はいはい、もーちよい待ってなー！」

マネージャーにドア越しに答えながら、まああとでいいか、と部屋を後にするアカネなのだった。

『20# #年12月15日』

私はもうダメだ。人生最後の登頂先として選んだ山で吹雪にあうなんて、なんともひどい最後だ。こうして日記に書く手も震えが止まらない。未だ吹雪は止む様子はなく、テントも飛ばされてしまった。ここが俺の墓場かもしれない』

『12月16日』

今日はおかしな幻覚を見た。吹雪の中、命からがらたどり着いた洞窟で休んでいると、俺の横に見たことのない生き物がいた。そいつは尻尾がとても大きく、色は茶色。その特徴的な尻尾で自立している。おかしな幻覚もあったものだ』

『12月17日』

どうにもおかしい。幻覚だと思った生き物だったが、寝ているうちに増えている。どいつも眠っているようだが、正直気味が悪い。しかしそいつらは俺の近くで密集しており、温かい体温が寒さを紛らしてくれる』

『12月18日』

吹雪が止まないまま4日目 came。しかし、もう寒くはない。よく見ると、茶色い奴だけでなくカマキリのような鎌を持った虫のような化け物や、ふわふわの綿飴のような羽を持つ鳥など、見たことのない生き物達が体を寄せ合い暖め合っている。どうやらここはこの生き物達が寒さをしのぐための場所らしい。俺を襲わないのは仲間だと思っっているからだろうか』

『12月19日』

吹雪が止んだ。不思議な生き物達はみんな元気に外へと飛び出していった。結局私を食べようとするものは1匹もいなかった。そんなことより、洞窟を出てすぐ、向こうの山から日が昇っていた。すると、私の頭の上を、見たことのないとても美しい鳥が飛んで行った。その鳥は虹色に輝いて見えた。その鳥が昇りくる日の出に向かう幻想的な光景を、私は生涯、忘れることはないだろう』

「とある登山家の記録日誌70Pより抜粋」

第13話

「……はい、どうぞー！」

「ありがとうございます！」

受け取りサインを終わらせると、配達員は笑顔で帰っていく。それを見送ると、最後の機材がようやく届いたことにうみは喜びニヤニヤしながら段ボールを運ぶ。

「さて、ようやく完成だー！」

上機嫌で階段を登り、ついて来たライがうみの部屋のドアを開ける。そこには同じような段ボール箱が山のように積まれ、機械の部品が散らばっている。

「こつちを……こうして……これは……ああドライバードライバー……」
ブツブツ呟きながら、さながらプラモのように組み立てていくうみ。全ての部品を組み立て終わると、パソコンの端子に繋ぐ。

「出来たー！これが……！」

そうして完成した装置は、ボールがちょうど一つだけ入る窪みがありその周りをガラスが覆い、その上にさまざまなうみでは理解できない謎の基盤やら配線やらを付属の説明書の通りにぶっこんで蓋をしただけの簡素な円柱型の機器が蓋をしている。

早速相棒達を呼び出そう、とパソコンに手をかける。

「……あ。でも……」

そこでふと、現在の家の状況を考える。バンギラスやサイドンなどの大型ポケモンもおり、家の中にはライのみしか満足に生活できるスペースのない状況。庭があると言っても、バンギラスとサイドン以外のポケモンのための小屋などなく、吹きっさらし。

「うーん……今度は住む場所が問題かあ……」

システムの中に入れておけばスペースなど問題ない。しかしそれではなんとするか、すごく可哀想だ。何よりどうせなら一緒に触れ合いながら住みたい。

そう考えたうみは、取り敢えず今呼んでも問題がなさそうな奴を1匹だけにしよう、と考える。

「こいつは……まあ大丈夫。こいつも……いやでも少し無理があるか……?こいつはダメだ、絶対あかん」

ウンウン唸りながらパソコンとにらめっこすること30分。

「よし……こいつに決めたー!」

そう言つて勢いよくエンターを押す。

『pipipipi』

装置が音を立て、ガタガタと震える。ワクワクしながら装置に顔を近づけるうみ。

『pipipipi……BOM!』

「わあっ!?!」

軽い爆発音のような音とともに、なにもなかった装置の中にモンスターボールが現れる。急な爆発音に驚き後ろに転がるうみ。しかしボールがちゃんと出て来ていることに気づくと、嬉しそうに手に取りくるくる回る。

「いやったー!どうとう出来たー!」

小躍りするうみを見て、よく分からないが何か喜ばしいことがあったんだろう、ということとは理解したライも嬉しそうにうみの周りをぐるぐる走る。

「早速出迎えよう!行くよライ!」

「ライ!」

うみは新しい仲間のボールを持って庭の池の前に立つ。一体何事か、とバンガラスやスパアールが集まってくる。

「おいで……ミロ!」

勢いよく放ったボールは池の真上で開き、中から光が溢れる。ボールはうみの手元に戻り、飛び出た光が形を変え始める。見た目はリユウグウノツカイのようであり、下半身部分が綺麗な七色に輝く鱗に覆われている。尾びれは扇型に開き、髪のような赤っぽいピンクのヒレが伸び、幻想的な美しさを醸し出す。

そのポケモンの名はミロカロス。ポケモン世界では、「世界一美し

いポケモン」と呼ばれていた。

「・・・ミロ」

瞳を閉じじつとしているミロカロスのミロに、そつと声をかけるうみ。その声に応え、目を開くとゆっくりとうみの方を見るミロ。

「・・・！ミロー！」

自分の声に反応したことに嬉しく思い、笑いかけながら抱きつこうとするうみ。

「・・・アッ？」

「・・・え？」

まさかのドスの利いた声に固まるうみ。周囲を見回し、何故か嫌そうな顔をしながらゆっくりと口を開くミロ。嫌な予感がして離れようとするうみだったが、遅かった。

「キュアアアアアアア!!!」

「うわああああああ!!」

「!!スピイツ!!?!」

「ゴアアアアア!!」

開いた口から放たれたのは、みずタイプの大技である『ハイドロポンプ』。予想外の行動に逃げ惑ううみ。慌てすぎて、迎撃しようとしていたライを抱きかかえ全力疾走である。スピアー達も、文字通りの蜂の巣をつついたような大騒ぎで飛び回っている。バンギラスに至ってはハイドロポンプが直撃し撃沈している。

逃げ惑ううみとスピアー、水浸しでグロッキー状態のバンギラス、見境なくハイドロポンプをぶちかましているなぜかキレてるミロ。カオスな状況は、畑の手伝いからサイドンが帰って来るまで続いた。・・・ミロカロス。「世界一美しいポケモン」・・・のはずである。

「ひ、酷い目にあつた・・・」

「チュウ・・・」

ミロが大人しくなるまで待ち、ボールに収めることでようやく収束した騒ぎの後。濡れ鼠となったライとうみは一旦風呂に入り、リビン

「キュウ！」

「じゃあどこにしよう・・・」

そう呟くうみに反応して、ミロはうみの腕にすばやく絡み、頬にかおをスリスリしつつ一鳴きする。

「キュウ！」

「・・・ひよつとして、こころ？」

「キュウ！」

元気な返事とともに尻尾をバシンバシンと床に叩きつけるミロを見て、うみは察する。

(あ、多分一番面倒な性格の奴来たわ)

こうして、新しい家族としてミロカロスのミロが加わったのだった。

「はいどーも、うみです。今日も相談室やっていきますよ」

『舞ってた』『舞い踊っていた』『舞い上がっていた』『お前ら座れ。舞うな』『わこつ』

物凄いこの世の終わりのような形相でひつついてくるミロをどうにか引き剥がし、ライを連れて配信部屋で配信を開始したうみ。ライを連れてきたのは、もしもミロが突撃してきたときに抑える役であると共に、視聴者の中に「ライをもっと映して」という要望があったため連れてきた。

(流石にミロを映すのはまだ早いだろうしなあ・・・)

ぼーっとそんなことを考えていると、コメント欄が賑わい始め、相談を書き込む者も現れ始める。

「それではまず・・・○○さん、どうぞ・・・」

『……ってなわけなのですが、どうすればよいでしょうか』

「うーん……それはポケモンではなくおそらく他の獣を見間違えたと考えられます。申し訳ないですが、俺では力になれません……」

『そうですか……すいません、ありがとうございます』『今日は不作やな』『んな農家みたいなこと言うなし』『おーつす、ども……』『釣り師ニキ来た！』『どした？元氣ないんか？』

「あつ、釣り師ニキ、こんばんは。何かあったんですか？」

『ああ……取り敢えず簡潔に言うわ。ポケモンっぽい奴保護した』『……っ!?!』

ガタン、と椅子の倒れる音がする。思わず立ち上がって口をパクパクと開け閉めしながら固まるうみ。

『ファッ!?!』『うおおおおい！まじでか!?!』『おちけつ者共！まずは釣り師ニキ様殿の話を聞くがよろしおす！』『いやお前が一番落ち着け』『っ、っ、釣り師ニキ、詳しいことを教えてください！』

『いや、所用で山に入ったときに、偶然怪我してるところを保護して、今は包帯だけは巻いてるけど……ああいや、容姿か。蛇みたいな胴体で頭に白い魚のエラみたいなきかがある。色は水色だな。結構暴れるからさつきまで部屋が酷い有様だったわ』

釣り師ニキの説明に思わずガッツポーズをとる。間違いない、ポケモンだ。

「お手柄ですよ釣り師ニキ！それは恐らく、ミニリュウというポケモンです！」

『ポケモン判定入りましたー！』『やんややんや』『久しぶりに見たなポケモン判定』『ミニリュウってのか』『画像は？』『今送った』

釣り師ニキから送られてきた画像を見る。空き巣に入られたかのような荒れた部屋の中、包帯だらけの痛々しい様子で警戒しているかのようにこちらを伺う姿が記録されていた。

「間違いない、これミニリュウです。あつ、今画像出しますね」

『ほーん、かわいいな』『その後ろの惨状を見るとなんとも言えんけどな』『あれ？後ろの方、パソコンが真っ二つなんだけど』『ああ、尻尾を叩きつけられてあんな風になされた』『じゃあ今釣り師ニキは……』

『新しいパソコンだよちくしょう』『乙』

「それで釣り師ニキ、今はどう言った状況ですか？」

『一応手当はしたけど完全ではないし、動物病院にも連れていけないからどうにもならない。あとさつきから少し大人しくなってると思ったら、多分これ少し弱ってるわ。うみちゃん、なんか策はある？』

釣り師ニキのコメントに少し考えるうみ。出来ることならキズぐすりを持ってすぐにでも会いに行きたいが、それをするには距離が遠い。かといってそのまま放置も如何なものか。

『あ、俺ん家まだオレンの実ってやつあるぞ。郵送しようか？』

「!」

すると、コメントからそう提案される。うみが驚くなか、コメント欄だけでトントン話が進む。

『まじか、頼む。幾らだ？』『もらっても意味ないしそもそも売りもんにならないものの押し付けだから送料だけでいいわ。とりまメアドをそっちに送るから』『サンキュー。助かったわ』『おい、他にもきのみある奴は？』『俺んところにはなんか黄色くて硬い実がなってたわ。うみちゃん、なんかわかる？』

「・・・えつ、あ、はい。前に送られてきた画像的には多分オボンの実だと思います。オレンの実と同じような効果があります」

『だそうだ。こっちからも送るぞ』『すまん』『あ、送料は持つてくれよ？』

コメント欄で団結してミニリユウを助けようとするその動きに、少し感動するうみ。じんわりと潤んできた目元をぬぐい、ある決心をする。

「釣り師ニキ、あとで住所送ってください。念のために俺もそっち行きます」

『・・・えっ』『はっ』『まじ？』『うみちゃんが郵送される・・・？』『なん・・・だと・・・!?!』

うみが配信で爆弾発言をかましている時。とある場所でなにかを探しパソコンに向かっていた男が、手を止める。

「・・・なんだ？」

画面には、さまざまな企画で配信を行う某有名サイトが開かれていた。いろんなジャンルの放送がポップされている中で、とある一つの放送が目に入る。

『ポケモン相談室』・・・なんだこれ。ええと、過去ログ過去ログ・・・その配信を行っている配信者のチャンネルから過去の動画を一から見始める。初めはぼーっとしていた男だったが、第2回、第3回と見進めるうちに目つきが変わる。現在配信されている放送の前までを見た男は、慌てて電話を取る。

『俺だ。何かわかったのかマサキ？』

「おうおっさん、ちよいと調べてもらいたい奴がおる」

『どんな人物だ』

「ええと・・・『うみチャンネル』っちゅう配信者や」

『配信者？・・・分かった、その手の話題に詳しい奴が部下にいる、調べてみよう』

そう言って切られた電話を下ろしつつ、マサキはニヤリと笑う。楽しそうなその表情とは別に、つうと汗が頬を伝う。

「はは・・・やばいでこれ。面白くなりそうやんか」

そうしてマサキは、再びパソコンに向かい、情報集めに奔走するのだった。

「・・・」

一方、マサキからの電話を受けたスーツの男は、とある都内の建物の中を歩いていた。

「うみチャンネル・・・ね・・・何が何だか」

そう呟きながらやってきた『外来種事件対策課』と書かれた部屋に

入る男。

「おい、タケシはいるか」

「は、はい！あちらの机です」

近場にいた職員に尋ねると、職員は男を見て驚きながらもやや奥の方にある机を指差す。そこへ向かうと、ひたすらキーボードに指を走らせつつ、一切脇見もせずパソコンの画面を見続けている。あまりに不気味なその姿に、隣の職員は変なものを見る目である。

「おいタケシ、仕事中だろうが。なに見てる」

「してますよ。ちゃんと情報を集めてですね・・・」

「ふん！」

「あ痛!？」

パソコンから目を外さず答える職員――タケシに、男は鉄拳で答える。

「なにするんですか。痛いつすよ」

「痛いじゃねえよ！仕事だって言ってるだろ！」

頭を抑えながら涙目になるタケシに、男は説教を始める。周囲の職員は、「また怒られてるよ・・・」と呆れている。

「つたく・・・それで、なんなんですよ」

「お前に調べてもらいたい人物がいる」

「はいはい。で、誰です？」

「配信者、とかいうことをやっている人物だ。活動名は・・・うみちゃんネル」

ピクン、とタケシがその名前に反応する。そんなタケシの肩をポンと叩きながら、男は部屋を出ていくのだった。

「ふふふ・・・まさか公認で調べられるとは・・・！待ってろようみちゃん！変態警察ことこのタケシ様が今力になって見せるからな！」

頭のおかしくなったタケシを見て、今日も平常運転だな、と仕事に戻る職員たちであった。

とある森の中。くらい夜の森は、静寂に包まれていた。普段であれ

ば夜行性の森の獣たちが蠢く森は、不気味なまでに静かだった。

「・・・」

そんな中を、悠然と歩く存在がいた。『それ』は、見事な紫のたてがみに、白く長い尾のようなものを持ち、額の水晶のようなものが荘厳な雰囲気醸し出している。

と、森がひらけ、湖が現れる。『それ』はしかし、歩みを止めることなく湖に足をつける。普通であればそのまま水面の下へと沈むであろうが、『それ』は水面をまるでただの地面のように歩く。そうして、対岸まで歩き切った『それ』は、歩みを止める。

見つめる先には、巨大な洞窟があった。そこからは季節に合わない絶対零度の冷気が漏れ出る。それをひたすら見続けた『それ』は、力を込め足を鳴らす。

「・・・っ！」

勢いよく足を下ろすとともに、氷が足元からつたい、洞窟の入り口まで広がるとそこから氷塊が迫り上がる。

「・・・」

そうして完全に洞窟の入り口がふさがったことを確認すると、『それ』は再びどこかへ歩いて行くのだった。

第14話

「……よしー！」

配信にて釣り師ニキの元へと向かうことを宣言したうみは、翌日になり、病院へと赴いていた。おじいちゃんことガンテツへとそのことを報告するためである。

「おお、うみちゃん。いつもすまんな」

病室に入ると、いつも通りガンテツや他の患者に甘やかされる。ガンテツのベッドの横に座ると、うみは真剣な顔でガンテツに相談する。

「……おじいちゃん。お願いがあるんだ」

「……なんだ？」

真剣な顔のうみを見て、重要な話だと分かったガンテツは真面目な顔で向き合う。空気を読んだ他の患者も、動ける者は病室を出て行き、動けない者は寝る体制に入る。

「色々と用事ができて、どうしても遠出をしなきゃいけなくなった」

「……それはどこまでなんだい？」

「東京」

そこで黙り込み、考える仕草をするガンテツ。東京は現在いる場所からは新幹線でもかなりの時間がかかる。黙ってしまったガンテツを見ながら、うみは祈るだけだった。

「……それは」

少しして、ガンテツがおもむろに喋る。

「誰かを助けるためなのかい？」

「……！」

驚くうみの表情を見て、くつくつと笑うガンテツ。

「一緒の期間は長くなくても、うみちゃんが誰かのため……他人の為に頑張る子だったのは分かっているさ。今回のその東京に行くのも、誰かを助けたいからだろう？」

ガンテツの言葉に気恥ずかしげに頷くうみ。そんなうみの頭を撫でるガンテツ。

「行ったらええ。もしダメじゃったとしても行かんと後悔するよりは行つて後悔する方が納得できるじやろう。わしもまだ完治には時間がかかる」

そう言つて笑うガンテツを見て、はにかみながらありがとう、と言ううみ。

見えないところでは、他の患者がうんうんと頷いていた。

「よーし、みんな集まつたね？」

お見舞いから戻つたうみは、庭に今家にいるポケモン達を集めていた。なんだなんだ、と集まつたポケモン達の前で、踏ん反り返るうみ。「俺は明日、東京に行こうと思う」

そもそも東京というものを知らないポケモン達は、出掛けるのか、ということがなんとなくわかるくらいで、だからなんだ、という雰囲気である。

「ただ、みんなを連れていくことはできない。精々専用のボールがあるミロとライくらいだ」

うみの横では、面倒になる前に、とあらかじめ連れていくことを教えられていたミロがドヤつている。ライもなんとなくノリでえっへん、と胸を張る。

「そこでみんなに、ある仕事を頼みたい」

そう言つてうみが取り出したのは、ライのモンスターボールとキズぐすり。

「これと同じ、もしくは似たようなものをこれから山に行つて探してもらいたい。ついでにポケモンがいたら、うちに呼んで来てもいいよ」

モンスターボールやキズぐすりは、ゲームでは個数はそこまででもないが、ごく稀に道中や森の中などに落ちているものもあった。それを見つけられないか、ということである。うみ自ら探すよりも安全かつ効率的に探せるだろう、という計算の上での提案であった。

うみの言葉に対する反応はそれぞれで違った。

ここで役に立つことを姉御に分かってもらうぞ！とやる気に満ち溢れるスピアー軍団。

そんな事より一仕事してきてお腹すいた、と明後日の考えをしているサイドン。

あ、これ何か起きて面倒なことになるやつだ・・・と既に何かを察した表情のバンギラス。

「じゃあみんな、明日から頑張ろー！」

えいえいおーつと拳を掲げるうみと、それに同調するスピアー軍団となんとなく合わせるサイドン。その光景を見ながら、この主人についてきたのは間違いだったかも知れん、と目が死んでゆくバンギラスであった。

「じゃあ、行ってきます」

敬礼するスピアー達に見送られつつ、出発するうみ。Tシャツの上から羽織った赤いジャンパーに、下はジーンズ。

少し大きめの黄色いリュックを背負い、長い銀髪を赤い野球帽の中に詰め込んで動きやすくしたうみは、長時間の移動でも耐えられるよう購入した黄色い運動靴を履く。

「へへへ、一度はしたかったんだよな、この格好」

そう言って笑いながら腰にぶら下げた二つのモンスタールールを撫でる。

中にはライとミロが入っている。ライならば動かないようにしてもらって、ぬいぐるみだと言い張れば問題ないだろうが、ミロはもう大きさにアウトだ。公共交通機関を使う以上、ボールでの携行は致し方ない。

「大丈夫だとは思うけど・・・」

最寄りの大きな駅で新幹線を待ちつつ、配信中やその後のメールで届いた情報のメモを見つつ不安な顔をするうみ。釣り師ニキのミニリュウは画像を見る限り何かに引っ搔かれたような跡があった。ポ

ケモンであるミニリュウを傷つけることができるということは、すなわち。

「相手もポケモンだった・・・ってことだよね・・・」

急ごう、そう思いつつ到着した新幹線へと乗り込むうみなのだった。

「・・・あつ、これ途中で止まるじゃん！間違えた!？」

「・・・これで少しはマシだろう」

そう言つてミニリュウの包帯を取り替える釣り師ニキことワタル。ミニリュウは未だ警戒を解いたわけではないが、すでに暴れるほどの体力がなかった。今では精々ゆっくりと這うくらいしかできない。

「そろそろ届くはずだから落ち着いてくれよ・・・つと、樽をすれば」家のドアを叩く音を聞き、スレ民に頼んでいたきのみが届いたのだと思い、玄関へと向かうワタル。

「はいはい、つとなんだ。○○さんじゃないですか。どうしたんですか？そんなに慌てて」

しかし居たのは、ワタルの祖父の漁師仲間であった。走ってきたのか、青い顔で下を向き、肩で息をしている。

「はあ、はあ、ワタル君！大変だ！じいさんが山で熊に襲われた!」

「はあ!？」

あまりに予想外の言葉に仰天するワタル。奥の部屋でミニリュウが驚いてガタンと音を立てる。

「な、なんで!この間山に登ったばっかだろうが!?!なんでじいさんが山に!?!」

「その時に忘れてきた道具や重いから後で取りに行こうと思っていた物を取りに行ったんだ!そこで、見たことのないバカデケエ熊にであつて・・・。今は怪我したじいさんを連れて山の中腹にある川沿い

の小屋に逃げ込んでる！俺は命からがら逃げてきたが、あの熊化け物だ！警察も呼んだけど、このままじゃ間に合うか……！」

その言葉に頭が真っ白になったワタルは、急いで自室に戻り、リュックを引っ張り出す。中にはさまざまな応急処置用の道具や薬が入っている。

「こんなところでじいさんの日頃の備えが役に立つとはな……ん？」
必要なものを詰め、急いで家を出ようとしたワタルの背に、新たに重み加わる。後ろを見ると、ミニリュウが乗っかっていた。

「おい、降りろ！今はお前に構ってる暇はないんだ！というかお前、怪我してんだろ！大人しく……」

「フウー！」

「！」

している、と言おうとしたワタルを遮るように、連れてけ！と言わんばかりの鳴き声を出すミニリュウ。その真剣な目に何も言えなくなったワタルは、ため息を一つつき、家の前に止めていた車に乗り込む。

「どうなってもしらねえからな！」

「フウー！」

「キョウさん。通報が入りました。外来種対策課案件だそうです」

電話対応をしていた部下からの言葉に腰をあげるスーツの男性——キョウは、その凛々しい顔に真剣なオーラを纏わせる。

「内容は」

「〇〇県の山の中です。山で植林活動をしている団体の人間が、種類不明の大型の熊に襲われているとのことです。聞き取りで判明した外見的特徴が、〇〇県でのキャンプ場熊騒動の際の情報と一致しています」

「同個体か、それとも別個体の同種か・・・とにかく俺も出向く。もしキャンプ場と同じ個体なら通常の警官では役に立たん。SATにも応援を頼め」

「はいー」

慌ただしく動き出す職員達の間を抜け、未だにパソコンの前でフヒヒアババと奇声を発しながら情報を驚異的な速度で集めるタケシの首根っこを掴む。

「あいダア!?何するんすかキョウさん!」

「仕事だ。さつさと車に乗れ」

「ちよ、なんで俺なんですか!俺にはうみちや・・・公安のために外来種の有力な情報を集めるといふ重大な仕事が・・・!」

「もうすでに不純な動機が見えてるじゃねえか

。さつさと運転しろ」

「そして俺が運転ですか!」

あああんまりだああああ!と泣き喚くタケシを他所に、携帯で何処かへと連絡を取るキョウ。

「・・・マサキか。急いで〇〇県の〇〇山へのリアルタイムでの最短ルートを頼む」

新人配信者：うみちゃんについて語るスレ part 6

361：農家

おい、ヤベエことになった

362：名無し

どうした農家ニキ

363：農家

うちのコロがなんか様子がおかしい

364：名無し

どゆこと?」

365：農家

ものっそいアグレッシブになった。あと、なんかすげえ火吹き出した

366：名無し

ファツ!?

367：名無し

おいおい、まさか・・・

368：名無し

ポケモンにでもなったってのか!?

369：農家

わからん、でもその可能性は高い。性格は変わってないし俺になつてるとこも変わってないが、すげえ力が強え。それとやっぱり火吹いてる

370：名無し

ジーザス・・・

371：名無し

これはあれか・・・ひよつとしたら俺らの周りでもポケモンが現れるってこともありえるんじゃないか!?

372：名無し

お前天才かよ

373：名無し

スレやってる場合じゃねえ!

374：名無し

探せ!ポケモンをいち早く手なずけることが出来れば、うみちゃんのご対面も夢じゃねえぞ!

375：名無し

ポケモンか・・・?欲しけりやくれてやる・・・!探せ!その辺の草むらに置いてきた!

376：名無し

草

377：名無し

おい、人数だだいぶ減ってるが、ポケモンはそもそも野生だと結構危険で話じゃなかったか？

378：名無し

あ

379：名無し

あ（察し）

380：名無し

もういなくなってるし・・・ああ、いい奴だったよ

381：名無し

死んだ扱いw

382：名無し

取り敢えず死なねえといいな。割とマジで

スレ民が無謀な行動に走り、うみがワタルの元へ向かい、ワタルは祖父を助けるためミニリュウとともに山へ向かい。キョウとタケシも通報を受け山へと向かう。そんな三者三様に動き出す中。とある別世界からその様子を見ていた『それ』は、静かに、それでいて素早く行動を始めるのだった。

全ては力を取り戻すため。そして、

「・・・GURUKYUA-----!!!」

自身の力を『奪ったと思われる存在』を捕まえるために。

第15話

「くそ、ここまでかよ……!」

車に乗り、祖父の元へと急いでいたワタルだったが、山の途中で道が崩れてしまっていた。徒歩ならばいけるだろうが、車は通れない。

「走るしかねえ!ほら、急ぐぞ!」

「フウ!」

ミニリユウをリュックの上に乗せ、しっかりと背負うと、坂道を駆け上るワタル。

道中には巨大な力でなぎ倒されたような跡のある倒木が点在していた。

「これがポケモンの力かよ……」

普通の熊ではないことは想像していたが、いざ被害を目の当たりにするとゾクリと悪寒がする。太い幹を持つ巨木でさえなぎ倒されているのを見ると、祖父が負ったという怪我がより心配になる。

「くそ……じいさん、死ぬなよ!」

ワタルは祈るように呟きながら先を急ぐのだった。

「んん、着いたー!」

駅を出て大きく背伸びをする俺。目的地である釣り師ニキの家の住所をスマホで調べつつ、テクテク歩く。

「うわあ……人がいっぱいだあ……」

大都市の人の多さに目を回し、人の波に流されながら歩くこと10分。目的の住所へと辿り着いた。

「……よし!」

ぞいの構えとともに気合を入れ、インターホンを鳴らす。

「……留守か?」

しかし一向に誰も出てこない。すいません、と口だけで謝りながら

車庫らしき場所を除くも、車はない。

「どうしよう・・・」

少々予想外の状況にあわあわし、ライを抱いて落ち着きたい衝動に駆られる。そんな俺に対して、後ろから声がかけられる。

「ん？嬢ちゃんどうしたんだい？」

驚きつつ振り向くと、そこには長靴にツナギ姿で、ねじり鉢巻をした如何にも漁師風のいでたちの男性がいた。

「ワタル君に用があるのかい？」

「え、あ、はい。俺、今日釣り・・・ワタルさんに会いに来てて・・・時間通りにきたはずなんです、ワタルさんって今どこにいますか？」

一瞬ワタルというのが釣り師ニキの名前だと気づかず戸惑うも、とりあえず居場所を聞く。

「ああ、今はちよつと会えないと思うよ。今大変なことになってるからねえ」

「大変なこと？」

「ああ、ワタル君のおじいさんが山で熊に襲われたらしくてねえ・・・今ワタル君がその山に向かっていっちゃったし」

「！」

漁師風の男の話を聞いて、嫌な予感がするうみ。

「その熊ってどんな姿してたとか、分かりますか!？」

「ええ?・・・確か普通にでかい熊だって話だけど・・・ああ、目つきがすごーく悪くて、腹に黄色い輪の模様があるって、逃げてきたやつが言ってたなあ」

外見情報を聞き、顔が青くなるうみ。

(黄色い輪の模様がある、目つきの悪い熊・・・あいつか!)

「それ、いったいどこで起きてるんですか!？」

食いつくうみに怪訝な表情を向けつつ答える男。遠くに山頂付近だけ見える山を指差す。

「確か、あの山の中腹辺りにある川沿いの小屋だって話だよ。・・・ああ、見に言っても無駄だよ。もう警察も動いてるから、山の道は封鎖

されてるだろうし」

(遠いな・・・それに道路が封鎖されているんだったら、行ったところで無駄足だろう。・・・待てよ？川？)

必死に考え、とある策を思いつくうみ。

「おじさんありがとう御座います！それじゃ！」

「あーおい!？」

急いで走って行くうみを、なんだったんだろう・・・と呆然と見送る男であった。

「あつた！」

男と別れたうみは、スマホの地図機能で見つけたある場所へと来ていた

そこは、目的の山から流れている川だった。

「頼むーミロー！」

人がいないことを確認し、ボールを投げる。中からミロが飛び出し、川の中へと着水する。

「ミロ、あの山まで頼むー！」

「！キユウー！」

言葉短く叫んだうみに、力強く頷くミロ。その次の瞬間、濡れることも厭わず川に飛び込むうみを、ミロが受け止める。

そしてうみがしっかりと捕まったことを確認したミロは、ものすごい勢いで川の上流へと泳ぐ。

(ぐぐぐぐぐぐ！)

水の勢いに引き剥がされそうになりながら、必死にミロに掴まるうみ。と、途中息継ぎのために浮上し水面から顔を出しつつ進んでいると、巨大なダムが目に入る。

「ガボゴバ!？」

(まじかよ!?)

急いで止まるようミロを叩くが、ミロは速度を緩めない。慌てたうみが思いつきりバシバシと叩くが、それでもミロは止まらない。

(ぶつかる〜!?)

さらに運悪く、ダムの放水が始まる。ものすごい勢いの水流が迫る中、ミロは後で叩く。と誓いつつ目を瞑るうみ。

「キユォー！」

「!？」

すると、激流が届く寸前。ミロが一旦水底まで一気に潜水したかと思うと、今度は一気に水面へ向けて加速する。

(飛ん・・・!?)

次の瞬間、ミロとうみは空を舞っていた。そのままトツプスプードで飛び上がったミロは、まさかのダムを飛び越え湖面へと着水したのだった。

「えっほ、えっほ・・・ミロ、やりすぎ！」

「キユウ？」

キョトンとした顔のミロにジト目を向けつつ、ため息をつくうみであった。

「・・・急ごう」

「キユウ！」

「・・・! あった! あれか・・・!」

一方のワタルは、祖父の隠れているという小屋を見つけいていた。どうやら例のポケモンは小屋を襲っていないかったらしく、どこも壊されてはいない。

(・・・そつとあの小屋まで行く。静かにしとけよ)

(フウ)

小声でミニリュウに確認を取ると、なるべく音を立てぬよう慎重に歩くワタル。

「・・・っ、・・・っ」

緊張感と恐怖に苛まれながらも、どうにか小屋へとたどり着くワタル。そつとドアを開け、中へと入る。

「誰だ！」

「！おやつさん！俺だ！ワタルだ！」

「ワタル!? どうしてここに!？」

小屋に入るなり静かながらも鋭い声で問いかけてきたのは、漁師仲間でありおやつさんと呼ばれる男だった。傍らには棒や鉈で武装した同僚もいる。

「じいさんは!？」

「ごつちだ。結構出血してしまっている」

その言葉に慌てながらも外に在るであろう熊にバレないように静かに奥の部屋へと向かう。

そこには、寝室のベッドのシートで止血した右腕を抑えながら苦しそうに肩で息をする祖父の姿がいた。

「じいさん！」

「おうワタル、なんで来た。熊はどうした」

「今は見あたらねえ。とにかく包帯と薬持ってきた！静かにしてろ、あと腕出せ！」

そう言つて祖父の腕をゆっくりと取り、他の仲間とともにシートを取つて包帯を巻く。

「ごつちからどうする?」

「あの熊が今どこに在るか分からない。下手に動くよりはじつと警察の救助を待とう」

祖父の応急処置が終わり、今後の方針を話し合つていた時だった。

「……おい、なんか音しないか?」

仲間の1人が物音に気づく。全員が静まつた次の瞬間。

「グアアア！」

「！逃げる！」

小屋の壁を破壊して、件の熊が襲いかかってくる。咄嗟に祖父を背負い走る仲間達。ワタルも逃げようとするが、背後からミニリユウが飛び降りる。

「あつ、おい!？」

「フウ！」

ミニリュウは熊に対して威嚇する。それを見た熊は、怒りの形相で飛びかかろうとする。

それを見たワタルは慌てながらミニリュウを抱え、全力で横っ飛びする。

「うおおおお!?!」

「フウ!?!」

「ガアアア!!」

圧倒的パワーのパンチを放つ熊。横っ飛びしたワタル達がいた場所の床が完全に破壊され、その衝撃で小屋が半壊する。

「フウ!フウ!」

「冗談じゃねえ!お前今怪我しているんだぞ!今は逃げるんだよ!」

暴れるミニリュウを抑えながら走るワタルだったが、背後から追撃をする熊。その一撃の風圧に飛ばされ、ミニリュウ共々地面に倒れる。

「いって・・・!?!」

そして次に熊が狙いを定めたのはワタルだった。目の前まで迫った熊に、思わずワタルは固まる。

『基本的には仲良くなれば心も通わせられる』

いつかの配信でうみが言っていた発言を思い出すワタル。

(いや、これはダメだ。無理だ。こんなのと心を通わせる?冗談きついでって・・・)

もう助からないという状況に返って冷静になったワタルは、ははは、と乾いた笑いをこぼす。

完全に心が折れたワタルに向けてゆっくりと腕を振りかぶる熊。

「フウ!」

「グ!?!」

「なっ!?!」

その時、横から電気の塊のようなものが飛んできて、熊に当たる。すると熊は、さしてダメージは受けてないものの動きが鈍り、振り下ろした腕がワタルをかすめ、地面に突き刺さる。

「お前・・・!」

そこには、俺を忘れるなという表情のミニリュウがいた。攻撃を受けた熊は、ギロリとミニリュウに視線を移す。怒り心頭の熊はそのままミニリュウを襲う。

「やめろおおおー！」

それを見たワタルは、思わず叫ぶ。ミニリュウは怪我を負っているのだ。やめろ。そいつに手を出すな。そんな願いも届かず、先の攻撃で体力を使いきったミニリュウは動けず、熊が腕を振り下ろす。

もうミニリュウは助からない。思わず目を閉じた時だった。ワタルの横を一陣の風が吹きすさぶ。

「そこまでだ」

凜と透き通るような声が響く。その何処かで聞いたような声を聞き、驚いて顔を上げたワタルは、目の前の状況に目を見開く。

熊の一撃は、ミニリュウに届いてはいなかった。巨木すらなぎ倒し、小屋をほぼ一撃で半壊させるほどの一撃は、間に割って入ったなにかの尻尾で軽く受け止められていた。

「なるほど、やっぱリングマでしたか。それにどうやら『でんじは』で麻痺状態。結構パワーがあるけど、これはとくせい『こんじょう』が発動しているのかな？」

背後から聞こえたその声に振り返るワタル。

赤い帽子を被り、これまた赤いジャンパー。下はジーンズに黄色いシューズと、活動的な格好ではあるが、体格で女の子だと分かる華奢なその姿には、どこことなく凄みのようなものを感じた。

「あ、どうも、釣り師ニキですよ？生で会うのは初めまして。うみと言います」

そう言っって帽子を取ったことでたなびく銀髪。後ろから日の光を浴びるその幻想的な姿に、ワタルは思わず状況を忘れ見とれるのだった。

「動けますか？」

水浸しで川から上がり、半壊した小屋を見つけたうみは、その少し先で今まさに襲われようとしていたミニリュウとワタルを見つければ、間に合ったことに安堵していた。

「あ、ああ……でもミニリュウが」

ワタルを立たせ、逃がそうとするうみ。しかしワタルはミニリュウを気にして逃げようとしないうみ。そんなワタルに、うみは安心させるように

笑いかける。

「大丈夫です。……俺の相棒（家族）は強いので」

ミニリュウと、巨大熊ことリングマの間に入りリングマの一撃を受け止めたミロ。怒りの表情で睨むリングマに対して、まるで興味ないというかのようにあくびしてみせるミロ。

そんなミロの様子を見てさらに怒ったリングマは、もう片方の腕でもって自身の自慢の一撃『アームハンマー』を繰り出す。

「……キュウ」

「!?」

それをもろに食らったミロ。しかし、煩わしそうにするだけで全く応えていない。流石に驚いたリングマから初めて怒り以外の表情が出る。それを流し目で見つつ、ミロはゆっくと、優雅な動作で尻尾を立てる。その美しい尾は、夕日の光を浴びて七色に輝く。

「ギユアアアアアア!!」

「!?グッ、グアアア!?」

その美しい尻尾が水を纏う。ニッコリと笑みを浮かべたミロは、その尻尾での一撃、『アクアテール』でもって、リングマを滅多打ちにする。そのあまりの早さに反応できなかったリングマがボコボコにされる。

「……キュウ！」

ミロが一鳴きしつつかうみの元に戻る。リングマはその頭を地面にめり込ませ、まるで犬○家の一族のような状態である。

そんな一部始終を見ていたワタルは、口をポカンと開けて絶句する。

「・・・ね？スゴイデシヨウ？」

やや目からハイライトが消え、ミロの頬ずりを受け続けているうみを見て、アツハイと答えるしかないワタル。

「！そうだ、ミニリュウ！」

はつとして走り出すワタルを慌てて追いかけるうみ。怪我をしたまま無茶をしたミニリュウは、すでに限界だった。

「うみちゃん！頼む！こいつもう限界なんだ！」

必死の形相で言うワタルを見て頷くと、うみはリュックからオレンジ色のキズぐすりを取り出す。

「それは・・・？」

「ポケモンの傷を治すスプレー式のくすりです。これは効果の高いもので、言うならば『いいキズぐすり』ですね」

そう言いつつ包帯を取り、川の水で傷口を洗い怪我をした部分にスプレーを噴射する。普通のキズぐすりの残りをチェックしていた時に3つだけ見つけたものだ。初めは痛そうにしていたミニリュウだったが、次第に表情は和らいで行き、力尽きたのか眠ってしまう。

「これで最悪の事態は免れたと思います」

「そうか・・・」

ホッとした様子でミニリュウを抱え、おっかなびつくりながら撫でるワタルを見て、美しいものを見るように微笑むうみ。

「・・・そういえばちゃんとは挨拶できなかつたな。どうも、ワタルって言います。配信では釣り師ニキと呼ばれています。ありがとう、うみちゃん」

「いいえ、間に合ってよかったです。・・・ええと、うみって言います。本名です。こっちは、俺の家族のミロって言います」

海の挨拶と紹介に合わせ、尻尾だけフィツとふって挨拶するミロ。その後、2人はミニリュウにあまり負担を与えないようゆつくりと

下山するのだった。

山を降りると、当然のことながら、警察が山の入り口を封鎖しており、あつという間に俺たちは囲まれた。

「大丈夫ですか！・・・そのご老人は・・・！」

「負傷者です、救急車お願いします」

「分かりました。おい！」

警官たちが慌ただしく動き、ワタルや漁師の人達に事情聴取をしている。その光景を、ガードレールに座って足をぶらつかせつつ見ている。当然ミロはボールの中であり、事情聴取の順番を待っていた。

「だから、ポケモンに銃なんか効きませんって！」

「うるさい、やっても見ないで言い切るな」

すると後ろから、騒ぐ声が聞こえる。声のする方を見ると、警官服の人に混じり、スーツ姿の2人の男性が話し合っていた。1人は細い目に逆立った髪の毛の、ワイワイと騒ぎながらもう1人になにやら話している男。

もう1人は、凛々しい眉毛が特徴的なダンディズム溢れるナイスミドル。

「誰だろう・・・」

眩きながら眺めていると、ダンディな方の男がうみに気付き、もう1人を連れてやってくる。

「・・・おお、ちようどいい。あそこにいる女の子にも事情聴取をしよう。ちようどまだ終わっていないようだしな」

「んな糞真面目にやんなくても他の警官がやってくれ・・・んん!？」

近づいてくる2人に少しだけ怯えるが、まさか警察がたくさんいる中で事案発生はないだろう。

「やあ、私たちは警部と言って、警察官の人なんだ。よければなにがあったのかをきかせてくれないかな？」

「は、はあ・・・」

警察手帳を見せつつしやがみ、そう聞いてくる男に、なんだ警察か、と一安心するうみ。すると、片割れの騒がしかった方の警官が叫びつつうみに詰め寄る。

「う、う、うみちゃん!? 本物だああ!?」

「ぎゃああああ!?」

「ライー!」

「うばばばばばば!?」

突然詰め寄られ、思わず悲鳴をあげるうみ。うみの悲鳴に反応したライが自力でボールから飛び出し、電撃を放つ。感電し黒焦げで倒れる部下を見ながら、警部ローキョウはため息をつくのだった。

「・・・その生き物についても話がしたい。ここでは人目がありすぎる、仮設だがテントがある。そちらに行こう。・・・タケシ、来い」

そう言っつて唾うキョウの額には青筋が浮かぶのだった。

—————

うみ達が山を降り、警察の人間が感電している頃。

結局ミニリュウを優先して放置されていたリングマがようやく地面から体を出すことに成功していた。

「グルアアアアア!!」

怒りMAXで叫ぶリングマ。その背後、綺麗に夕焼けを映す波一つない川から、音もなく何かが現れる。

リングマはそれに気づくと、怒りのままに『アームハンマー』を繰り出す。

もし、リングマが怒りに染まっていなければ。

ほんの少しでも理性的に判断が可能ならば。

それに害意を持って迫ることなどしなかっただろう。

「!?」

しかしどこまで行こうと仮定の話。リングマの『アームハンマー』はそれを捉えることはなく、それはまるで血のようにあたりへ飛び散

る。異様な感触に戸惑うリングマの目の前、それはまた不定形に蠢きながら形を元どおりに形成する。

ここへ来てようやく正気になったリングマは、恐怖でおののきながら脱兎のごとく逃げる。

「……………」

しかしそれは遅すぎた。それは黒い翼を掌のように広げ、恐るべきスピードでリングマを捉える。

「グア、ゴアアアアア!?!」

暴れ逃げようとするリングマだが、決してそれは離さない。掴み、引き剥がそうとするも、その部分だけ弾け、手を離すとまた元に戻る。

悲鳴のように喚くリングマを掴んだその手は、次の瞬間また超スピードで川へと引き込んでいった。

後に残ったのは、静かな川の水が流れる音だけであった。

第16話

「さて、それじゃあ少し話を聞かせてもらおうかな」

キョウに案内され、仮設テントにやってきたうみ。キョウと机を挟んだ対面にある椅子に座り、緊張の面持ちである。一方でうみと対面するキョウは内心でかなり警戒していた。

『それでポケモンってのはなんだ』

『うみちゃんって言う動画配信者がいるんですけどね？その子が言うには最近の外来種案件の殆どがそのポケモンっていう生物らしいんですわ。何でも火を吹いたり水を放出したり、果ては山を1匹で崩すようなバケモンもいるとか』

『馬鹿馬鹿しい。そんな話を信じているのか？』

『ほんとなんですって！あの子のペット・・・家族だっていうネズミも電気を放ったりするんですよ！』

道すがら最低限の情報としてタケシから聞いた話を思い出す。当初はなんらかの仕掛けなどで行われた、配信での作り話だと思っていたキョウだったが、先のタケシへの電撃を放った生き物――ライを見る。こちらを不安そうに見上げるうみの腕の中で、のほほんとした顔でこちらを見ている。

(・・・いや、あの目。おそらく今うみちゃんに近付けば俺もタケシのように攻撃されるだろう)

ライの目の奥底にある若干の敵意を感じ取るキョウ。後ろの方では黒焦げになったタケシが腕を組み立っているが、顔を見るとデレツデレである。反省のはの字もない。

「えと、その・・・どこまで話せばいいですか？」

「ああ、基本的な話はこの馬鹿から聞いている。今回何が起きていたのかを君の主観で構わない、教えてくれ」

後ろのタケシを親指で指しながら、不安げな表情のうみを安心させるように微笑む。数瞬の間の後、ライを抱きしめつつリングマとの戦闘について離す。

「・・・そのリングマというのは今どうなっている？」

「すいません、放置してきてしまいました」

「いや、構わない。人命が優先だというのは当たり前だ。むしろそんな状況でよく動けたね」

うみと会話しつつ、タケシに目配せする。仕事モードの表情に戻り、テントを駆け足で出て行くタケシ。

「では、次にその・・・君の持つというポケモンや、腰に下げているボールについて説明してくれないか？」

「・・・」

そこであみは少し逡巡する。ボールについての説明やライとミロの説明については問題ない。むしろ、ボールに関してはうみ単独では実現不可能だった「ボールの量産」のための伝手を手に入れられるかもしれない。ただ一つ、うみには懸念していることがあった。

「説明するのは構いません。・・・ただ、一つお願いがあります」

「何かな？」

「ライとミロ・・・俺の家族に関して、一切の干渉を『どんな理由があるろうとも』しないと確約してください」

「・・・！」

それは、ライとミロ、そして未だボックス内に眠る相棒達への心配だった。もしもボールに関する研究が開始されれば、その流れからポケモンに関する研究も始まるだろう。しかし野生のポケモンは決して言うことを聞かない上に、何より捕縛が困難だ。

そうなるとう必然的に、より御しやすい「すでに捕獲されたポケモン」を対象とするだろう。そうなるとうみのポケモンが現在最もその標的にふさわしい状況だ。

（・・・最低だ、俺）

うみの表情は暗い。先ほどの条件にはあえて作った抜け道がある。簡潔にいうと、要求の内容はうみのポケモンには手を出すな、ということである。

即ち、『他の人間が捕獲したポケモンや野生に関しては何問題ない』ということである。

もしもポケモンが実験として使われることになったなら。その研

究というのがポケモンの命に関わるものだとしたら。どんな場合であれ、うみに関与する権利はない。うみは、自分の家族のために他のポケモンを切り捨てた、と言っていい。

「・・・そうか」

若干の間をおいて、キョウがそう言って考え事を始める。沈む気持ちから俯くうみ。そんなうみに対し、キョウはボソリと呟く。

「別に君は悪くない」

「！」

心を読まれたことに驚くうみ。思わず顔を上げると、キョウの視線とぶつかる。

「君の想像する通り、ポケモンに関する研究はこれから始まっていくだろう。そこには君が不快に思うこともあるかもしれない。でも、君に罪はない。家族を守りたいという思いは至極当然のことだ。君に非はない」

真剣な顔でそう言うキョウに、うみは最初ポカンとした顔をするが、すぐに微笑む。

「ありがとうございます・・・優しいんですね」

「優しいのは君だろう。しかし、そうだな・・・もし君がポケモンの立場について思うところがあるのなら・・・」

「？」

そこで一旦切り、迷うような表情のキョウ。どうしたんだろう、と思いつつうみは次の言葉を待つ。

「・・・我々に協力してくれないか？」

「え？」

「・・・失礼します」

少しして、タケシに連れられたワタルは、元気になりアグレッシブさを取り戻し（てしまっ）たミニリュウをなんとか抑えながら、仮設

テントに入る。そこには、キョウとうみがいた。

「やあ、来たね。とりあえずそこに座ってくれ」

キョウに促され、うみの横に座るワタル。ワタルを見て一瞬羨ましそうにしたタケシだったが、すぐに仕事モードを再起動し、資料を2人に配る。

「・・・あの、事情聴取はもう終わりましたよね？俺早く爺さんどこに行きたいんですが・・・」

ワタルがそう言うが、キョウは申し訳なさそうに首を振る。

「すまない、君たちにはどうしても言わなければならぬことがあつてね。・・・まずは一つ。今回の騒動に対して、マスコミには報道規制がかけられる。それにあたって、君たちには守秘義務が課せられる事になった」

「はあ・・・」

気の無い返事をするワタルと、無言で頷くうみ。その様子を見ていたキョウは、おもむろに切り出す。

「ワタル君。君は、今回の件でポケモン、と言うものに対してどう思った？」

その言葉に一瞬躊躇いながらうみをチラ見し、意を決したかのように喋り出す。

「・・・正直、怖いな、と思いました。あのポケモン・・・リングマに目前まで迫られた時は、本当に死ぬかと思いました。ミニリュウに対しても、暴れたりしてた時は少し恐怖でしたね。パソコンを尻尾で両断ですから」

ワタルの言葉に、ピクリと反応し、悲しそうな顔になるうみ。しかし、次のワタルの言葉に驚いたような顔をする。

「でも、もっと知りたいとも思いました。もっとこいつや、他のポケモンについて知って、理解したいと思いました。リングマを見た時、俺はこんな奴を理解なんてできるはずがないと感じました。それが今、無性に悔しい。こいつは、ミニリュウにはこうしてある程度お互いに気を許し合うことが出来たんです」

そう言っつて膝の上のミニリュウを撫でるワタル。ミニリュウは、暴

れる事なく、静かにワタルに撫でられつつ、キョウやうみを見ている。「だから、俺はもつとこいつらと関わっていきたいと思います」

「・・・そうか」

ワタルの言葉を聞き、頷きながらそう呟くキョウ。うみも心なしかルンルンである。タケシはもううみしか見てない。・・・仕事モード解除してない？とワタルは思った。

「君の意見はよく分かった。そこでワタル君と、そしてうみちゃんに一つ提案がある」

そう言つて資料を見るよう促すキョウ。2人は自分の前に置かれた資料を手に取り、捲つていく。

「・・・『外来種対策用特別捜査課』？」

そこに書かれていた名前を読み上げるワタル。それにキョウが頷く。

「そうだ。最近多発している外来種事件への対策として、警察の方で設立を予定されている。君たちへの提案とは他でもない。外来種：つまりポケモンに関するこの課での捜査への協力を要請したい」

「俺たちに？」

驚き、思わず繰り返すワタル。うみは未だ真剣に資料を読みつつ、話を聞いている。

「でもそれって、警察じゃない俺らがしてもいいんですか？」

「むしろ君たちでなければダメだろう、と私は考えている」

そう言つて真剣な顔で語るキョウ。

「これはマスコミにも流れていない話だが、実は昨日、外来種捕獲のために山に入った武装した警察数十名が、全員重傷になって戻ってくるという事態が起きた」

「!？」

思わずうみはキョウの方を向く。まさかそんな事になつていようとは考えもしなかった。何かあれば、きつとニュースやネットに情報が流れると思つていたが、その情報は流れていない。

「これに対し事態を重く見た上は、特別な課を設立し事に当たるとしている。俺はその課の責任者に任命されている。人事に関しては問

題ない。今君達は、分かっている中で唯一ポケモンを所持している人間だ。もし今後ポケモンが暴れるという事態になれば、君たち以外に対処するすべはない。どうか頼む、我々に協力してくれ」

そこまで話し、机に手をつけて頭を下げるキョウ。それを見たタケシも頭を下げる。警察に頭を下げられるという事態に混乱しつつ、ワタルはちらりとうみを見る。

「・・・分かりました」

「！」

「協力します。俺はもともとポケモンと人との共存を目指しています。その手伝いができるのなら願ったりです」

「・・・そうか」

うみの言葉に驚くワタル。キョウはそれを聞き安堵するように息を吐きつつ頭を上げる。

「・・・俺もやります」

躊躇いながらも、ポケモンを知るために、とワタルも名乗り出る。2人ともが協力を約束してくれた事に喜びつつ、キョウが今後の方針について話す。

「・・・では今日はもう一旦帰ってもらって構わない。うみちゃんは、どうやら○○県から来たようだね。今車と新幹線のチケットを手配した。今日は一度帰りなさい。また今度親御さんとお話するから」

「あ、俺親いませんよ?」

「?いや、仕事から帰ってきてからでいいから、また連絡をくれれば・・・」

「いえ、仕事とかじゃなくて、俺多分捨てられてるんで親とかいませんよ?」

話の最後の最後でぶち込まれた唐突の爆弾発言に、場の空気が一瞬で凍る。一体何が、とオロオロするうみを見上げつつ、やれやれとライは首を振るのだった。

新人配信者：うみちゃんについて語るスレ part 10

1：名無し

さて、記念すべき10パート目に突入したわけだが

2：名無し

人少なねえな

3：名無し

無茶しやがって・・・(AAA略

4：名無し

勝手に殺すな。まあ死にかけたが

5：名無し

おっ？ってことはポケモンいたのか？

6：名無し

ああ、鳥みたいのがいた。凜々しい顔した鳩みてえな奴

7：名無し

で、どうだった？

8：名無し

砂かけられたり、突進されたりで散々な目にあつた。あと突進で俺のバイクが逝かれた

9：名無し

おま・・・バイク逝つたか・・・

10：名無し

他のやつは？

11：名無し

こっちは紫色の蛇みたいなのいたわ。流石に明らか毒ありそうだから遠くから観察して情報集めるだけにしたけど、そいつが紫の煙吐いたと思つたら木の上からリスとかスズメとかが落ちてきた。明らか毒だったわあれ

12：名無し

俺は例の研究所にいたっていう紫ネズミ見たぞー！すげえ早くて、ネズミ捕りシート置いてたのに歯で器用にひっぺがして逃げつた時は口あんぐりなつたわ

13：名無し

なんだ結局全員ダメだったか

14：名無し

情報共有してた奴らもいたんだが、今そいつらは病院だな。なんでも山の中を集団で探してたらでっかい蛾に襲われたらしい

15：名無し

まじで無茶しやがって・・・ところで農家ニキの方はその後どうなった？

16：農家

：ポケモンヤベエわ。うちのコロ、他の奴が言ってた紫の蛇、あれを普通に火だるまにして撃退してた

17：名無し

はい有能

18：名無し

これは農家ニキの一人勝ちか・・・？

19：農家

勝ったな、コロと風呂入ってくる

20：名無し

フラグ立てていくなしw

21：名無し

にしてもまじでどうやって手なずけるってんだよ

22：変態警察

うみちゃんが配信で説明してた内容をwikiにまとめてきた。

これ見て気をつけて調べてこい

23：名無し

でかした！

24：名無し

流石の有能ぶりである

25：変態警察

それとお前ら、次の配信は絶対見とけよ。まじでやばくなると思うから

26：名無し

?どゆこと?

27：名無し

言われなくてもうみちゃんのご尊顔を見にいっせ!

28：名無し

当たり前だよなあ?

29：名無し

そうだよ(便乗)

30：名無し

ホモは帰って、どうぞ

31：名無し

お前もホモじゃねえか

「・・・ミロ、ありがとうね」

『キュッ!』

帰りの新幹線に乗り、ボール越しにミロにお礼を言ううみ。窓の外を眺めつつ、キョウからの提案について考える。

「外来種対策課・・・か」

(ポケモンに関する情報は集めやすくなるだろうな。それと、ボールに関して量産について聞くと、キョウさんは「確認する」と言ってくれた)

少なくとも今のところ死者の情報はない。全ては順調とまでは行かないまでも、良い方向に進んでいる。そのはずだが、うみは言いようのない不安を感じていた。

「考えても仕方ない!やれることをやろう!」

自身に言い聞かせるようにそう叫び、新幹線内だと気づき慌てて口をふさぐ。しかしそこで、さつきとは別の違和感を感じる。

「・・・人がいない?」

さつきの駅までは載っていた人々が影も形もない。降りたのかと

も思ったが、しかし席にはいくつかバッグや弁当などが置きっぱなしである。

なにかがおかしい、そう思ううみが席を立った瞬間だった。

「……………」

「!？」

新幹線がトンネルに入った。すると突如、うみの席の鏡から黒い何かが這い出てくる。とつさに通路に逃げるうみだったが、何かはそのままうみを追う。

「ライ！お願い！」

「ライ！」

とつさにライを呼び、黒い何かを迎撃するうみ。勢いよく突っ込んだライだったが、そのなにかに触れた途端、ライが飲み込まれる。

「ライ!？」

「そんな！ライ！」

ライを捕まえたまま窓に戻って行くなにか。慌てて追いかけようとした隙を突き、背後から来たもう一つのなにかが腰のミロのボールを奪い取る。

「しまった!？」

そうしてライとボールを奪ったなにかは、そのまま窓の向こうに消えていく。

「かえせ！」

うみは一瞬躊躇うも、ライ達を助けるために、黒いなにかに突っ込む。

こうして、うみとその相棒達を取り込むと、なにかはゆつくりと窓の向こうに消えていった。

トンネルを抜け、車両にはいくつかの荷物と、うみの赤い帽子だけが落ちていたのだった。

現実世界とも異世界とも異なる場所。そこにいた『それ』は、なにかの気配を感じ動き出していた。

「――」
なにかの起こした空間の歪みを感じ取り、ゆっくりと腕を振り上げる。肩部にある宝石のようなものが光り、そのエネルギーが腕へと伝わる。そのまま勢いよく振り下ろされた腕から、エネルギー刃が発生し空間を切断する。

空間を司りし『それ』は、悠然と異世界へと向かうのだった。

――
一方、同じく異空間に潜む『それ』もまた、動き出していた。

なにかの引き起こした時間の歪みを正すべく、怒りのままに異世界へと走る。

「――!!!」

時間を司りし『それ』は、怒りの咆哮とともに異世界へと向かうのだった。

第17話

黒い手を追って窓の向こうへとやってきたうみ。

「わああ!?!」

窓を抜けた途端上へ落ちてしまいビタンと天井へとぶつかる。

「いったたたた・・・なんだここ」

新幹線の中のようなではあるが、不自然に歪んだ車内。人どころか、生命の存在すら感知できない。おっかなびつくり外へと出ると、

「まじでどこだ・・・?」

そこには異常な空間が広がっていた。うみの乗っていた新幹線は、ギリギリそれが乗れるだけの面積しかない浮遊する小島に乗っかっており、その周りに小さな島や足場が点在している。周りの小島にも、重力や物理法則を無視したような建物が建っている。

群青色の空に浮かぶ小島の上で、うみは呆然と眩く。

「そうだ!ライ達は!?!」

慌てて周囲を見渡すうみ。すると、少し上に浮いている足場から鳴き声がする。

「ライ・・・」

「!ライ!」

見上げると、ミロのボールを持ったライがそこにいた。ライに呼びかけると、嬉しそうにうみの元へと飛び降りてくる。

「ライー!」

「わあああ!?!・・・ああああ?」

急に飛び降りてきたライの慌てるうみだったが、ライはまるで宇宙にいるかのようにゆっくりと落ちてくる。そっと手を出し迎え入れるうみ。

「よしよし、ありがとうな」

「チュウ」

ライを抱きしめ、しっかりと撫でるうみ。嬉しそうに胸に顔を埋めるライを撫でながらボールをしまい、周囲を見渡すうみ。どうやら新幹線の他の乗客は周りの小島に気絶した状態で乗っているようだ。

「……ここは、なんなんだろう?」

記憶の中で若干引つかかるも、うまく思い出せないでいるうみ。すると、遠くの方から何かが飛んでくる。

「……!?あれは……!?」

その姿を視認した途端、うみは全身に鳥肌が立つのを感じた。ライも本能的に恐怖を感じたのか、素早くうみから飛び降り臨戦態勢に入る。

「GARUKYUAAAAAAAA!!!」

やってきたのは、異世界の支配者。灰色を中心とした配色の体に、棘のような足。背中から生える六本の触手のような羽は、うみ達を捕まえた黒い腕を彷彿とさせる。口の周りを黄色のツノのようなものが覆っており、真紅に光る眼がより不気味さを増している。

「ギラ……ティナ……じゃあここは、やぶれたせかい……?」

絞り出すように呟くうみ。ギラティナがいるという事から、異世界の正体について合点がいく。しかしそんな些細なことは、ギラティナと目が合う事で吹き飛ぶ。

「あ……ああ……」

「……ライ!」

ゲームとしてギラティナを目にしていた時。いや、様々な伝説級ポケモンを目にした時には感じるはずもなかったプレッシャー。神の持つ畏怖堂々としたその圧に、思わず心が折れかける。うみは全身から力が抜け、まるで底なしの闇に落ちていくかのような感覚だった。ぺたんと女の子座りでへたり込むうみに、ライが焦った様子で近寄る。

「GURURURU……」

呆然と見上げるうみに対し、ギラティナは口を覆っていた部分を開き、ゆつくりと近づく。ライはそんなギラティナにいつでも電撃を放てるよう準備するが、本能的恐怖からか放つ様子はなく睨み続けるだけである。

ギラティナが口を開き、うみの目前まで迫った時だった。

「……GA!?!」

どこからかエネルギーの玉がものすごい勢いで飛んできて、ギラティナの横つ面に直撃する。その衝撃でギラティナは怯み、うみから離れる。

「な、何が……」

ギラティナが怒りの声とともに来襲者を睨みつける。

その視線の先にいたのは、真珠のような宝石のような、不思議な物体を両肩につけた、背中に二対の鰓のようなものを持つ竜のようなポケモンだった。それを見たうみは驚愕する。

「パ、パルキア……!? あいつまで、なんで!?!」

うみが驚く中、パルキアが両手にエネルギーを集め、再度エネルギー弾、『みずのはどう』を放つ。高速で飛来するそれをギラティナが避ける。みずのはどうはうみ達がいる小島の横に直撃する。

「うわっ!?!」

余波が届き、思わず顔を覆ううみ。運良くと言っていいのか、乗客のいない小島を粉碎する。

「GARUGYUAAAAAAAA!!!」

「GAGYAGYAAAAAAAA!!!」

互いに怒りを咆哮に乗せ、そのまま戦闘に入る。

ギラティナが『りゅうのいぶき』を放ち、パルキアが『みずのはどう』を撃ち出す。両者の一撃がぶつかり合い、その衝撃波が周囲の足場を破壊する。

「そんな……なんでパルキアとギラティナが……!」

予想外の事態が続く、完全に混乱するうみ。そんなうみをよそに、二体の伝説は戦い続ける。

「GARUGYUAAAAAAAA!!!」

「GAGYAGYAAAAAAAA!!!」

それぞれにわざだけでなく、尻尾での叩きつけや拳での殴り、噛みつきなども使うなど、互いに相手への殺意に溢れている。

「とにかく、他の人たちを助けないと……!」

「ライ!」

どうにか伝説のプレッシャーから立ち直ったうみは、ライを連れ他

の小島にいる乗客を集める。周囲の重力が月面上のように極端に弱く、ふわふわと浮かぶ事で小島へと向かう。

「手を貸してくれ、ミロ！」

「キュウ！」

ボールを別の島へと投げると、ミロが飛び出し小島にいる人々を巻いて新幹線の窓へと放る。

「よし、まだ繋がってる！」

どうやらまだ入ってきた場所とのつながりは残っているらしく、気絶しているのをいい事に、ひたすらホイホイと投げ入れていく。

「GARUGYUAAAAAAAAA!!!!!!」

「！来た！ライ！」

「ラアアイ、チュウウウ!!」

救助中に飛んでくる流れ弾は、人を運ぶのに適していないライが迎撃する。いくつかこちらに飛んでくるが、ライは軽重力に慣れたのか、軽快なステップでの確にうみ達や新幹線のある小島に届くものだけを墮としていく。

(このままならもうすぐ全員を返す事が・・・！)

行ける、そう確信するうみ。しかし、突如上から多数の流星が降り注ぐ。

「!?ライ、『10まんボルト』！ミロ、『ハイドロポンプ』！」

「ラアアイ、チュウウウ!!」

「キュアアアアア!!!」

咄嗟に全部は無理だ、と判断し自分達へと降り注ぐ流星に狙いを絞って迎撃させる。

「しまった！新幹線が!?!」

どうにか助かるが、新幹線が一発受けてしまい、完全に出入り不可となってしまう。

「どうしよう、帰れない！」

焦るうみ。ギリギリでミロが最後の乗客を送り返したが、自分達が帰る術を失う。

「あれは・・・！」

流星の出所を探し上空を見上げるうみ。すると、空に空いたパルキアの攻撃が開けた空間の裂け目から、全体的に蒼く、突き出た頭部や胸部の鎧のような装甲、そしてその中心に輝くダイヤのような核。

「ディアルガまで・・・！」

予想外もここまで来ると慣れてしまうもので、絶望しつつも動きを止めないうみ。急いでミロとライを連れて被害を受けないところまで足場を使い逃げる。

「GUGYUGUBAAAAA~~~~~!!!」

怒りの咆哮をあげるディアルガに気付くパルキアとギラティナ。

「GARUGYUAAAA~~~~~!!!」

「GAGYUGYAAAAA~~~~~!!!」

三者が互いに間合いを取り、睨み合う。少し離れた位置でそれを見守るうみは、ようやく少し思考する時間ができた事で、なぜこんな事になったのかを考える。

「俺を狙ってきたのはほぼ確実にギラティナ・・・でもなんで俺なんだ？」

疑問は尽きず、答えもわからず困惑するうみ。

と、三体がほぼ同時に攻撃を再開する。

「GUGYUGUBAAAAA~~~~~!!!」

「GARUGYUAAAA~~~~~!!!」

「GAGYUGYAAAAA~~~~~!!!」

ディアルガが『りゆうせいぐん』を、パルキアが『きあいだま』を、ギラティナが『りゆうのいぶき』を放つ。それぞれのわざがぶつかり合い、余波がやぶれたせかいそのものを震わせる。

「やつ、べえってこれ！このまま戦わせたら・・・！」

三体は神と呼ばれる伝説のポケモンである。とくにディアルガとパルキアは、とある街を一つ消し去りかけたという前科もある。そしてこのやぶれたせかいは、現実の世界とつながっている。現実での破壊がこちらでも同様に起こると同じく、こちらの世界が破壊され

ば、現実にも影響を及ぼす。

「止めないと・・・！」

「GUGYUGUBAAAAA~~~~~!!!」

「GARUGYUAAAA~~~~~!!!」

ギラティナがパルキアに噛みつき、パルキアは悲鳴をあげる。二体が争う中、ディアルガが二体ともを巻き込み『りゅうせいぐん』を放つ。

「GAGYUGYAAAAA~~~~~!!!」

組み合っていたパルキアとギラティナは、避けるのが間に合わず直撃を受ける。パルキアは片腕を負傷し、ギラティナはきゆうしよにあたったのか、大ダメージを受け大きめの小島に墜落する。

「！ライ、行くよー！」

それを見たうみは、急いでギラティナの元へと向かうのだった。

「GUGYUGUBAAAAA~~~~~!!!」

「GAGYUGYAAAAA~~~~~!!!」

ギラティナが墮ちた地点までやってきたうみ。息を切らせつつ上を見ると、ディアルガとパルキアが未だ戦闘を続けている。

「・・・？」

しかしそこで、うみは少し疑問が出る。ディアルガはどうやら、こちらに向かつて来ようとしている。しかし、それをパルキアが立ちふさがり止めようとしているように見えた。

「ひよつとして、パルキアはギラティナが目的じゃなくて、ディアルガはギラティナを狙っている・・・？」

だとしてもパルキアがディアルガを止める理由にはならない。一旦それらを保留し、うみは慎重にギラティナに歩み寄る。

うめき声をあげるギラティナに触れられるくらいまで接近すると、うみはミロに指示を出す。

「ミロ、『アクアリング』」

「キュウウウウウウ」

ミロが力を込めると、水のリングが発生し、ギラティナの体を包むようにして回転を始める。

「・・・GU」

「落ち着いて。今直してるから」

そう言って真剣な顔でギラティナを見つめるうみ。しばらく敵意のこもった目で見返していたギラティナだったが、大人しくなる。

「・・・なあ、なんで俺を狙ったんだ？」

「・・・」

おもむろにそう尋ねるうみ。ギラティナは喋ることなく、ただうみを見つめる。

「お前がどんな理由で俺を狙っていたのか、ひよつとして狙いは俺じゃなくて複数人の人間でたまたま俺が目に入っただけなのか、そこは分からない」

おかまい無しに聞かせ続けるうみ。途中、ディアルガのりゅうせいぐんが流れ弾として降ってくるが、ライが迎撃する。ギラティナは言葉を発することも、鳴き声で返すでもなくうみを見つめ続ける。

「・・・でもなあ。もしも俺を狙っていたのなら、一つ言いたい事がある」

そう言っておもむろに振りかぶるうみ。次の瞬間、ギラティナの顔、頬の部分にペチンと弱い音となる。

「俺だけをねえよ！誰か無関係の人を巻き込むな！お前の行いは、お前だけじゃない、ポケモンという種と人の関係に影響する事だぞ！？」

殴られた事に驚いたのか、感情の見えない顔が心なしか驚愕の雰囲気纏う。

「それにここはお前の世界だろ!?もしこのままお前やあいつらが戦い続けたら・・・世界が壊れるんだぞ!？」

「俺は、お前ら伝説も含めてポケモン皆と人とを繋ぎたい！でもお前らがこんな事をしたら・・・世界にとって危険だと判断されたら・・・ダメなんだよ・・・」

だんだんと弱くなる声。うみは正直自分の言っている事がギラティナには分からないんだろうな、と内心では分かっていた。自分でもかなり人の都合ばかりな話だと理解している。ただ、それでもどう

しても、分かってもらおうと必死になる。

「人とポケモンの共存はこれからなんだ・・・もし俺が欲しいっていうのならくれてやる。だから・・・」

ギラティナの頬に顔を埋めるうみ。ギラティナはなおも黙って聞いている。ふと、うみの目から涙が流れる。ギラティナはそつと羽を動かす。うみを掴む。

「・・・ギラティナ?」

すると急にうみの体が光り始める。その光はうみから、羽を通じてギラティナへと流れていく。

「これって・・・?」

「……………」

よく分からない現象に戸惑ううみ。ギラティナはその光を受けつつ体を持ち上げる。

ミロのアクアリングが解除され、それと同時にうみから発せられていた光が収まる。

うみをゆつくりと自身の背に降ろすギラティナ。

「ギラティナ?」

「GARUKYUAAA」

うみを背中に乗せ、そのまま飛び上がるギラティナ。ライとミロが驚きつつそれを見送る。

「!GAGYUGYAAAAA……………!!!」

こちらに気づいたディアルガがりゅうせいぐんを放つ。しかしギラティナは、それをするりと躲していく。パルキアは、ディアルガに向けてはどうだんを放つ。直撃し、怒りからか滅多やたらにりゅうせいぐんを放ちまくるディアルガ。パルキアとギラティナは直撃弾だけをうまく躲し接近していく。

「!ギラティナ、左!」

「……………」

うみも自身が確認できる範囲で指示を出し、援護する。ギラティナはうみの指示に従いすいすいさけていく。パルキアも、空間を切り裂く事で自身の周りに異なる空間を作りバリアとして扱うという原則

じみた能力で防御している。

「GAGYUGYAAAAA~~~~~!!!」

業を煮やしたディアルガが、距離をとる。背中にある鎧のような装甲が伸び、胸の核が光り出す。

『ときのほうこう』!? まずい、今あれを撃たせたらこの世界壊れるかもしれないぞ!？」

既にこのせかいはディアルガとパルキアの戦闘によりボロボロとなっている。もしディアルガの切り札を撃たせてしまえば、限界がきているこのせかいが崩壊しかねない。

「・・・GU」

「・・・」

「?うわっ!?!」

ディアルガをにらんでいたギラティナは、横にやってきたパルキアにうみを放る。パルキアは片手で優しくうみを受け止めると、負傷していない方の腕にエネルギーを貯める。

一方のギラティナは、その身を一瞬にして影に落とし、その場から消え去る。

「!『シャドーダイブ』!?!」

パルキアの手からそれを見ていたうみが叫ぶ。もうすぐにも発射可能、という状況になっていたディアルガは、標的が消えた事に驚き隙が生まれる。

それが命取りだった。

ギラティナは突如ディアルガの背後に現れ、痛烈な一撃を決める。

「GA・・・!?!」

「GARUGYUAAA~~~~~!!!」

ディアルガは離れていくギラティナに向け、わざを放とうとする。しかし、そのタイミングで目の前にきているパルキアに気づく。

「いいつけえええ!! 『あくうせつだん』!」

「GUGYUGUBAAAAA~~~~~!!!」

パルキアは腕に集まったエネルギーを、思い切り振り抜くと同時に刃として発射する。

ギラティナにばかり集中していたディアルガには、それを避ける事ができなかった。

「GAGYUGYAA!?!」

あくうせつだんがクリーンヒットし、墜落するディアルガ。小島に落ちていくディアルガの元へと、ゆつくりと下降していく。パルキアとギラティナ。島へと降り立ったパルキアは、そっとうみを降ろす。

「ライライー!」

「キュウ!」

「ライ・・・ミロ・・・!」

うみの元へ、ライとミロがものすごい勢いで駆けてくる。2匹を受け止め、ぎゅっと抱きしめるうみ。

「・・・ごめん、心配かけた」

「ライ!」

「キュウ・・・」

嬉しそうに、しかし少し怒り気味に答えるライとミロ。そんな2匹を連れ、ディアルガに近づく。

「ミロ、『アクアリング』、頼める?」

「キュウ」

ミロに頼みディアルガにもアクアリングを使ってもらおう。そんなうみ達を見守り、ディアルガにも攻撃することのないパルキアとギラティナ。

「・・・どうして俺を助けてくれたんだ?」

ディアルガの治療中、パルキアに尋ねるうみ。しかしパルキアはそれに答えず、ディアルガを見て、そしてうみを見た後、ギラティナに近づく。

「・・・GUGYUGAAA」

「・・・」

なにかをギラティナに言い、そのまま飛び上がるパルキア。最後にうみを一瞥し、空間に穴を開け飛び去っていくのだった。

「・・・いや答えてよ・・・」

パルキアを見送りつつ眩くうみ。しばらくすると、ディアルガが目

を覚ます。

「・・・GA」

目を覚ましたディアルガは、ギラティナを襲うでも暴れるでもなく、うみを見ている。

「ディアルガ。なんでお前がここにきたのかは分からないけど・・・もう気も済んだら？なあ、どうしてこんな事になったんだ？」

うみの質問に対し、ディアルガは答えない。しかしゆっくりと起き上がると、ギラティナを見、そして崩壊寸前のやぶれたせかいを見る。

「GAGYUGYAAAA!!」

そしていきなり咆哮を放つ。至近距離すぎてうるさく、思わず耳を塞ぐうみ。ディアルガの咆哮が止むと、うみは周囲を見て驚く。伝説三匹の戦闘により崩壊寸前だったやぶれたせかいは、まるで時間が戻ったかのように元どおりとなっていた。

「ディアルガ？」

それを見届けたディアルガは、空へと駆け上がり、そのままパルキアの開けた空間の穴を通ってどこかへと消えてゆくのだった。

「・・・」

「・・・？ギラティナ？」

ディアルガを呆然と見送っていると、ギラティナがうみの目の前に何かを置く。

「これ・・・玉？」

置かれたのは、鈍い銀色に光る玉だった。なんでこれを、と思いギラティナを見る。最初に感じていた恐怖のプレッシャーはかけらも感じず、むしろなんとなく申し訳なさそうであった。

「・・・ぷっ、あはははははっ」

あまりにギャップがありすぎたのと、なんだか可愛く思えた事で笑ってしまううみ。それを見て少し不機嫌そうに呻くギラティナにごめんごめんと言いながら、うみはギラティナに近づく。

「まあ、なにがどうであれ・・・ディアルガを止めるのを手伝ってくれて、ありがとう」

そう言つてギラティナを撫でるうみ。少し目を細めそれを受ける

ギラティナ。しばらく撫でられた後、ギラティナはうみからはなれ、力を行使する。

「これって・・・帰るための?」

うみの目の前には、新幹線の中を写した鏡のようなものができていた。ギラティナはそつと頷く。

「GARUGYUAー!!!」

ギラティナはうみを見送るように咆哮を上げ、空の向こうへと消える。それを見上げながら、うみは嬉しそうに笑う。

「じゃあね、ギラティナ。また会えたら、今度は一緒に遊ぼう?」

うみはライとミロを連れ、現実世界へと帰るのだった。

~~~~~

「・・・戻ってきた?」

気がつくくと、うみは新幹線の席に座っていた。他の乗客も無事であり、皆一様に首を傾げつつ新幹線を降りていく。

「ふう・・・色々あったね」

「ライ」

膝の上に座っているライと、腰のミロの入っているボールを撫でつつ、うみは笑う。

「次は、ちゃんとあの三匹とお友達になりたいな」

そう言つて窓の外に出た月を眺めるのだった。

「つてもう降りる駅じゃん!? あああ待ってええええ!? 降りますううううう!?」

~~~~~

やぶれたせかいを悠然と飛ぶギラティナ。力を取り戻した彼は、先程出会った人間について考えていた。赤いジャンパーにジーンズ。傍らには電気を扱うポケモン。性別というものは違うようだが。

——まるであの時の人間のような奴だったな——

ギラティナは遠い記憶、花のようなポケモンとある少年との出会いの記憶と、少女との会話を思い出しながら久しく感じた『楽しい』という感情を噛みしめるのだった。

異世界とも、異空間とも違うどことも繋がっていないなぞのばしよ。そこにいるポケモンは、先の一部始終を見ていた。

『ふむ・・・何かと思えば、また奴らか。懲りないものだ、また世界を壊そうというのか』

三匹の争いを見てため息をつくポケモン。

『しかし・・・あの三匹を、まさか人間が止めるか』

そう言ってポケモンはうみを見る。その声には、若干の喜色が込められる。思い出されるのは、「遠い過去の記憶」

『ふふ・・・まるで○○○のような少女だな』

そう言って笑うと、ポケモンは眠りにつくのだった。

唐突な人物紹介イ!!

● ● うみ 性別 女 身長140cm 体重○○キロ

主人公。TSした元男。ツルンペターンストーン。よく分からないうちに女になっていたが、最近慣れ始めた(つもりでいる)。ライやミロなど、自身がゲームで使っていたポケモンを所持している。現在は他にも、バンギラス、サイドン、スピアーなどを保護している。性格はズボラでいい加減。結構私生活でもドジをする。料理は人並み(○)で、自炊はやろうと思えばできるが、自宅の台所が身長に合っていないため、諦めて他人任せにしている。生活費を稼ぐために配信をして有名になろうと考えていたが、ぶっちゃけ配信そのものが趣味と化している。ポケモンに関しては廃人でないと自負しているが、結構詳しい。さらにポケモンに対して盲目的な愛着を持っており、ぶっちゃけポケモンと人とどっちを取る?と聞かれたら僅差でポケモンを取る

くらいにはいかれている。また、○○タイプのパokemonに対する○○
○○○○を持っており、条件さえ達成すれば全ての○○に住むポケモ
ンを従えられる。現在使用不可。

第18話

三匹の伝説との遭遇から一夜明け、うみの家の庭には電撃と水流が飛び交っていた。

「ライ、『ボルテッカー』！ミロ、『アクアテール』！」

「ライ！」

「キユウ！」

俺の指示により、二匹がそれぞれにわざを繰り出す。タイプ相性的に不利なミロだが、わずかなレベル差とぼうぎよの高さでその不利を覆している。

ライがすばやさで攪乱すれば、ミロは圧倒的な火力でもって近づかせない。互いに指示した以外の技も使いつつ互いを攻略しようとする。

「……そこまで！」

うみのストップで互いに離れるライとミロ。二匹がやっていたのは、いわゆる特訓である。

昨夜の三匹の伝説の戦いに巻き込まれて、二匹とも思うところがあつたようで、こうして無駄に広い庭を活用して特訓に精を出している。

「2人ともお疲れ様。朝ごはん置いとくよ」

「ライ！」

「キユウ！」

元気に食べ出す二匹を見つつ、うみ自身も伝説三匹のことを思い出す。

（あの三匹だけじゃない。他の伝説ポケモンもいつ騒ぎを起こすか……このままじゃダメだ。もつと、もつと力をつけないと……。俺にだってできることはあるだろうし）

今後のポケモン関連の対策も考え、気合いを入れ直すうみだった。

「……グウ」

「あれ!? バンギラス!? なんで黒焦げ!?!」

ミロとライの流れ弾をくらい黒焦げ水浸しのバンギラスからの冷

たい視線に、二匹は明後日の方向を向くのであった。

「はいども、うみです」

『わこつ』『来たー！わこつ』『待ちながら舞ってた』『舞うな、座れ』『座るな、舞え』『!?!』

出かけていたので昨日出来なかったが、配信に来る人の数が増えていくように感じる。実際に、配信画面に表示されている視聴者数は4桁にまで達していた。

「なんだか一気に見てくれる方が増えたように感じるんですが・・・」
『まー最近不思議な生き物関連の事件増えてるしな』『俺も変なやつ見たぞ』『オカルト関連の方と迷ったけど、昨日新幹線に乗ってたら意識飛んでたわ』『それポケモン関係なくね?』

「へ、へー・・・」

複雑な表情になるうみ。気を取り直し、さまざまポケモンらしき生き物の悩みをバツサバツサと切り捨てていく。

『ところでうみちゃんって、ゲーム実況とかのよくある配信はしないの?』

「ん?・・・あー」

配信での質問受け付け中、とあるコメントが目に入り眉をハの字にするうみ。

「自分的にはそういうのには興味が薄くて・・・ポケモンに関するお話ならいくらでもできるんですがねー・・・」

『えーでも面白そうなのに』『まあ、人気になるっていうなら通るべき道だよな』『ゲーム実況って言われたら配信者、つくくらいにはみんなやってるしな』『でもゲーム画面がメインになると、うみちゃんが見れなくなるぞ』『あ、それは困るわ。やっぱ無しで』『おい!?定番はどうした!?!』『あん?あんなクソつまらんもんよりうみちゃんだろJK』『手のひらドリル大回転w』『わかるマーン!』

「そ、そうですか・・・」

コメント欄の怒涛の意見に少し気圧されるうみ。

(うーん、ポケモンの情報を集めるっていう理由も含めて配信やってくるし・・・ゲーム実況とかその辺はあまり意味ないかなあ・・・でも人気になれば念願の収益化も・・・)

『なんか唸ってるな』『考え事うみちゃん可愛いな』『変態警察ニキー？お仕事の時間ですよ』『・・・こねえな』『なん・・・だと・・・!?!』
今後の活動について少し考え始めるうみ。ウンウン唸っていると、コメント欄が変態警察ニキーが出てこないことで騒ぎ出す。

「あ、多分警察ニキーと釣り師ニキーは今日来ないと思いますよ」

『うみちゃん事情知ってるの?』『そうだよ、そーいえばうみちゃん釣り師ニキーのところ行ってたんだっけ』『なんとうらやまけしからん』『なんで?』『釣り師ニキーがポケモンゲット↓怪我がひどいから助けよう↓じゃあ私が行きますとうみちゃん出動』『なるほど』
「そうだ、その結果報告がまだでしたね」

釣り師ニキーがどうなったかを視聴者に言うという約束だったのを思い出すうみ。ついうっかり、と手をポンと打つ。

「結論から言うと、釣り師ニキーのポケモンは無事でした。今は釣り師ニキーの家で一緒だと思いますよ」

『やったぜ』『これで農家ニキーに続いて2人目かー』『いや、釣り師ニキーの方が発覚早かったし、こっちが一番よ』『いやいや、そもそもうみちゃんが原点だろ』『原点にして頂点だろ』『それだ!』

「え?ちよ、ちよっと待ってください。釣り師ニキー以外にも、ポケモンゲットした方がいたんですか!?!」

危うく流しそうになるも、予想外の情報に面食らううみ。

『あれ?知らない?例のきのみの栽培を請け負った農家のやつ、あいつペットがポケモン化したよ』『そういえば経過報告はスレでしかしてなかったな』『ああ、うみちゃんにはきのみしか報告してないんか』『これは裁判では?』『判決、死刑』『裁判官!?!弁解の余地を!?!』『あ、農家ニキーだ』

うみの驚きように戸惑うコメント欄。すると、件の農家ニキーが現れ

る。

「ど、どうも農家ニキ、ポケモンをゲットしたって言うのは本当ですか？」

『あー、ごめん、報告メールしてなかったな。うん、多分ポケモンだよ。火吹いてるし』『来たー！』『報告はしたぞ。裁判官！これは執行猶予ありでは？』『判決、終身刑』『よくなったようで何一つ変わってねえ!?!』

「火を吹く・・・ですか。すみません農家ニキ、画像を送ってもらえませんか？もし危険なポケモンだとまずいので」

『おけ』

そうして農家ニキから送られてきた画像には、農家ニキと思われる男と、抱きかかえられ満面の笑みを浮かべるポケモンの姿があった。

「ああ、この子は大丈夫です。ガーディっていうポケモンですね」

『ガーディってのか』『めっちゃいい笑顔』『農家ニキも結構いい顔してんねえ』『ウホッ、いい男』『ホモはカエレ！』

「忠実で縄張り意識が強くて、縄張りに入る存在には勇敢に立ち向かいます。それと、心を許した存在にはかなり尽くすタイプですね」

『まんま犬やんけ』『しかも可愛い』『しかも脳波コントロールできる！』『それ違うやつや』

コメント欄では、ガーディの見た目が気に入っている人もちらほら見える。

「それとガーディは進化するととてもかっこよく、大きくなるんですよ」

『ん?!』『え、何それ聞いてない』『かっこよくはともかく、え、こいつ大きくなんの?』『進化?..』

「あれ？進化について話してませんでしたっけ？」

キョトンとするうみに対し、視聴者からは疑問と驚愕のコメントが上がる。

『いんや、初知り』『最初期からの古参勢だが、聞いてないぞ』『進化とかあるんか』『ますますポケモンが分からなくなってきた』

「す、すみません・・・ええと、進化っていうのはですね。まず、特定

の条件を満たしたポケモンに起こる現象です。進化すると基本的にステ・・・力だったりすばやさだったり上がります。見た目や大きさが進化前と全然違うようになる子もいますね」

『ほーん』『特定の条件って?』『進化っていうよりかは、生物学的には変態に近い感じか』『ん?呼んだ?』『カエレ』『木村』『カエラ』『おい話それてんぞ』

「進化の条件は大まかに言うと三つあります。レベル・・・ええと、経験を積むこと、特殊な道具を使うこと、他の人とポケモンを交換すること、ですね」

『経験を積むってのと道具ってのはまあ分かんなくてもないが、交換て・・・』『だめだ、分からなくなってきた』『俺のコロはどうしたら進化するの?』

「あ、ガーディはほのおのいしっていう道具を使わないと進化しないです」

『道具タイプか』『また新しい情報やな。ほのおのいしねえ』『ひよっとして、他のタイプに関連するいしもあるんじゃないか?』

「お、いい勘してますね。他にも、みずのいしやリーフのいしといった物もありますよ」

『やっぱりか』『俺ちよつといし探してみるわ』『おう、頼んだ。俺はちよつとコロと畑の様子見てくるわ』『なんで農家ニキはそう死亡フラグを立てたがるの・・・?』

コメントでは既にガーディがどんな姿になるのかを議論し始めている。他にも、いしを探すという者まで現れ始め、何を見つけよう、何を探そうと言ったコメントが増える。

「ええと、とりあえず話を戻しますと、農家ニキにはそのままガーディ・・・コロちゃんを育ててもらおう方針で。もし何かおかしいと思っただこととか、異変が起きた時はメールで知らせてください。それと、いしやポケモンを探す方々は、くれぐれも気をつけるようお願いします」

『おk』『把握』『まー前回無茶した奴らもおるし、流石にもう無謀な奴はおらへんやろ』

視聴者への注意喚起をし、配信を終わる時間が近く。

「あ、もう時間ですね。それでは今日の配信はここまで。ありがとうございます
ございましたー。スレも今度のぞいてみますね」

『おつー・・・え?』『え?』『あ』『あかん』
「え?」

最後のうみの発言に、コメントがなぜか慌てるのだった。

—————

新人配信者：うみちゃんについて語るスレ part15

54：名無し

やはりうみちゃんの魅力といえばあの銀髪だろおおん!?

55：名無し

全くこれだから・・・あのキーボードを必死に叩いてるおてでだろ
うが。異論は認めん

56：名無し

馬鹿め、時たま立った時に見えるあの白いおみ足だとなぜ気づかな
い・・・!

57：名無し

お前ら揃いも揃ってアホか?あの真っ白なワンピースからのぞく
それに負けない白さを誇る肩に決まってるだろ!!いい加減にしろ!

58：名無し

おいお前ら、大変だ!

59：名無し

なに?今うみちゃんのココスキポイントの熱き語り合いしてると
こなんだが。俺は足派

60：名無し

んなことしてる場合じゃねえ!うみちゃんがこのスレ見ることに
なった!あ、俺はおてて派

61：名無し

なん・・・だと・・・!?

62：名無し

まずいですよ！

63：名無し

こんな変態どもの性癖暴露大会に居られるか！俺はさつさとRO
Mる！

64：名無し

くそう、警察ニキいないからBANされねえ今のうちにと思ったの
に・・・！

65：名無し

急いで消せ！うみちゃんにこの童貞どもの闇を凝縮したかのよう
なスレを見せるわけにはいかん！

66：名無し

k s kしろ！

67：名無し

いやもう遅い気がする

68：名無し

俺が遅い!?俺がスロウリイ!?

69：名無し

世界三大兄貴の1人はこんなとこいないでさつさと走ってきて

70：名無し

k s k

71：名無し

k s k

72：名無し

k s k

73：名無し

ちくわ大明神

74：名無し

誰だ今の

「まあもう遅いんだよなあ・・・」

慌てて加速していくスレを見つつ、うみは複雑な表情を浮かべる。

「いやまあこの容姿がどう捉えられているかは分かっていたつもりだが・・・結構くるもんがあるな」

そう呟きながら自身の体を見下ろす。

ツルーン

ペターン

ストーン

そんな擬音が聞こえてきそうなスタイルである。ただし、顔は将来美人になるであろう童顔、流れる銀髪とパソコンの画面に映る蒼い目。控えめに言って美少女である。

「なんというか、元男として気持ちはわからんでもないが、それを向けられるとなるとな・・・」

ため息とともにそうこぼしながら、うみはSAN値を時折削りつつスレを確認していくのだった。

――――――――――

うみが配信とスレの確認を行っている頃。釣り師ニキことワタルはキョウウと呼ばれ、外来種対策課へとやってきていた。

「で、話ってなんですか?」

キョウウと向かい合いソファに座り、ミニリュウを撫でるワタル。例のリングマ騒動以降、ワタルの後をついて回るようになったミニリュウ。完全に懐いている。

「それがだな・・・うちのお偉い方が、ポケモンを実際に確認したいと言い出してな」

そこまで聞いて既に嫌な予感がするワタル。

「野生のポケモンを相手に視察するのは少々危険が過ぎる。そこで、君のミニリュウを視察で会わせて欲しいんだ」

申し訳なさそうに伝えるキョウに対し、ワタルの顔も渋い。ミニリュウに負担になるのは当然の事、場合によってはミニリュウが暴れる可能性もある。

「・・・結構危険ですよ?こいつ」

「重々承知している・・・と言いたいところだが、あいにく私はまだポケモンに関して君以上に無知だ。そういうわけで、ミニリュウの精神安定や視察する方々への説明役としては是非働いてもらいたい」

キョウの頼みに、ワタルはさらに悩む。力を貸すとは言っていたが、まさか最初のそれがこのような形になろうとは。リングマに襲われた時とはまた違う緊張感と絶望を感じるのだった。

「・・・わかりました。ミニリュウに負担にならないレベルでの仕事と
いうのならやります」

「・・・ありがとう」

頭を下げるキョウに慌てつつ、ワタルはうみの言葉を思い出す。

『俺はポケモンと人との共存を目指しています』

「ならこのくらい、俺ら大人がするべき・・・だよな」

眩きつつ、覚悟を決めるワタルだった。

「それではとりあえず挨拶での格好なんだが、一応要人と会うんだ、一旦帰って、スーツに着替えて来てくれ」

「・・・私服じゃダメですか?」

「警視総監が来るが?私服でいいと思うかね?」

はやくも胃がキリキリと音を立て始めるワタルであった。

――――

とある森の中を、1人寂しく歩くポケモンがいた。

体毛は紺色。頭のとっぺんの毛は赤くなっており、首の周りには黒

色の毛がマフラーのようになっていた。

『ううう、お腹が空いたぞ……』

珍しいことにテレパシーを使うことで人と会話できるそのポケモンは、どういうわけかこの世界へとやってきてしまい、親と離れ途方に暮れていた。

『……！誰だ!?おいらは強いんだぞ?ほんとだぞ?来るなら来い!』
突如背後の草むらが揺れ、威嚇するポケモン。しかし、ゆっくりと歩み出てきた『それ』を見て震え上がる。

『……きゆうう』

『それ』は虎のような姿をしていた。勇ましく蓄えた鬃に、背中であなびく紫色の体毛。牙は鋭く、爪も月夜に光っている。『それ』はポケモンに気づくと、体から電気を放ち威嚇する。ポケモンは完全に怯えて縮こまる。それを見ると、特に何かをするでもなく、電気を収めポケモンのそばを通り、悠然と去って行く。

『……怖いやつだったぞ……』

ポケモンはそう言って震えながら、『それ』が去っていくのを見送った。

『……まあ、どこ行ったんだぞ。おいら寂しいぞ……』

月を見上げ、不安げにそう漏らすと、ポケモンはトボトボと歩き出すのだった。

夜の都心のど真ん中、高層ビルのでっぺんにそのポケモンはいた。

「グウウウウ……」

黒を中心とした色の体に、赤い大きなたてがみ。同じく赤い隈取りのあるその目からは、不安と憂慮が混じった青い瞳が街を見下ろしている。

「グアアアアアアアア!!」

突如そのポケモンが叫びをあげると、少しずつその体が変わっていく。

体は茶色い毛で覆われ、背中からは噴煙のようなたてがみが伸びる。四つの足全てに金属のリングがあり、背中からは突起物が伸び

る。口周りのそれはヒゲを思わせる形をし、その見た目は獅子のようだった。

「グオオオオオ!!」

姿が変わったそのポケモンは、悲しみの雄叫びをあげるのだった。

第19話

スレの発見から数日が経過した。

50：名無し

で、こういうわけなんだが、うみちゃん的にはどんな感じ？

51：うみちゃん

あー、多分コラツタですね。諦めて、とは言えない状況ですが：

52：名無し

飲食店にまで出るのは結構まずいよなあ

53：名無し

でもコラツタやろ？普通の方法ではどうにもならんやろうなあ

54：うみちゃん

ですね。とりあえず直近の対策としては、食料品の匂いとかをどうにかして、コラツタが居着かないようにしてみてください

55：名無し

わかった

56：名無し

忌避剤とか使ってみたか？あれも効果あるかもしれんぞ

57：名無し

なるほど、その手があったか

58：うみちゃん

へえ、そんなものもあるんですね

59：名無し

まあ基本的には毒エサとかネズミ捕りシートとかの方が使われるっぼいな

60：名無し

なあうみちゃんに聞きたいんだが、うちの庭の裏手に最近たぬきっぼいんだが若干たぬきじゃない生き物が来るんだが。うちの子どもが餌付けしちゃってしよつちゆう来るんだ

61：うみちゃん

画像とかありますか？

62：名無し

待っててくれ、今送る

63：うみちゃん

ああ、ジグザグマですね。まめだぬきポケモン、好奇心が旺盛で何にでも興味を持つんです。この子は多分、人懐っこいみたいなんで世話してあげればそのままゲットできるんじゃないでしょうか

64：名無し

まじでか、新しいポケモン持ち誕生!?

65：名無し

おお！

66：名無し

待って待って、このジグザグマって、危険だったりしないのか？

67：うみちゃん

多分大丈夫かと。好奇心が強いので家具とか壊さないように、っていう点には気をつけたほうがいいでしょう

68：名無し

さて、傷も癒えたし、そろそろまたポケモン探してもしうか

69：うみちゃん

気をつけて下さいね。あまり無闇にポケモンを探していると怪我では済まない可能性もあるんで

70：名無し

ああ、そこは分かってるよ。前回結構痛い目にあっただしな

71：名無し

にしてもこのスレ結構爆発的に増えたよな、人

72：名無し

まー最近のポケモン騒動の増加でニュースにならない事件も増えたしな

73：名無し

間違えるな、外来種だよ。初見じゃポケモンって言われても分からんだろう

74：名無し

つつてもここのスレの住民ポケモンとしてしか認識してないし

75：名無し

そのくらいは分かってもらうべきだろ

76：うみちゃん

俺としてもその方がありがたいです

—————

スレへと書き込みながら、んーつと伸びをするうみ。

「盲点だったなあ。こういう方法もあったとは」

配信でスレの存在を知ってから、うみはスレを使用しての情報収集も行うようになった。それにより、また新たな情報源ができたことで有力な情報も増えた。

「にしても、これはこれで困るなあ・・・」

そう言ってパソコンを閉じリビングを通り、庭へと出るうみ。そこには、山のように積まれたきのみがあった。

「確かに頼んだけどさあ・・・」

出かける際にスピアー達に頼んでいたきのみやアイテムの収集だが、予想外にも大量に発見されたのだ。チーゴのみ、オボンのみ、キーのみ、カゴのみ。オレンのみにモモンのみと、もはや異常と言えるレベルで集まり、今なお山から戻ってくるスピアー達が置いていく。

「あー、もういいと思うから全員いつも通りに過ごしていっていいよ?」
「スピッター!」

ビシツと敬礼するスピアーA。ブンブンと元気よく飛びながらスピアーBになにやら話し、そしてさらにスピアーC、Dと飛んでいき、話をする。そうこうしているとうみの周りにはスピアーが集まる。その手には、きのみでないものがある。

「これって・・・!」

それを受け取り、驚愕するうみ。それは、うみも持っている重要で、しかしとても貴重なものだった。

「ボール!? こんなに・・・一体どこから!？」

うみの前には、十個にも及ぶモンスターボールが置いてあった。六

個は通常のボール、二個が青いスーパーボール、残り二個はなんとハイパーボールだった。

「これどこにあったの!?すごいじゃん!」

嬉しそうにはしゃぐうみだが、スパイアー達は若干申し訳なさそうに目をそらしている。

とあるコンビニ

「あつれー? センパイ、ここに置いてあつたボールみたいなの、どこに置きました?」

「ああ? ああ、あれか? 知らねーぞ? だれか持ってたんじゃない?」

「つかしーなー・・・あれ、窓開いてら。閉めとけよな全く・・・」

「これがあれば、キョウさんに頼んでボールの研究ができる!」

喜び勇んでキョウウに連絡を取るうみ。スパイアー達はまあ姉御が喜んでるならいいか、と気を取り直して巢へと戻る。

「あ、少しならきのみ食べてもいいよ。でも食べすぎないでねー」

『もしもし、うみちゃんかい?』

「あつ、はい! キョウウさん、いい知らせがあるんです!」

「そうか・・・ありがとう、少ししたら人を寄越すよ。・・・ああ、すまない、そうしてくれ。じゃあまた今度」

「どーしたんすか、キョウウさん。奥さんと娘さんですか?」

キョウウをからかうように笑うタケシ。そんなタケシに対して軽く小突きながらジト目を送るキョウウ。

「アホ抜かすな。仕事中だ、しゃきつとしろ」

「へーい。・・・で、実際のところは?」

「うみちゃんからだ。モンスターボール。発見されたそうだ」

「くうーっ、なんで連絡先交換しなかったんだー俺え! 羨ましいっす

よキョウウさん！」

「そこじゃないだろ今は」

「はいはい・・・で、個数は？」

「十個だそうだ。自分のポケモンに探させたらしい」

「ほえー、そりやすげえや。うみちゃん以外にはできねえ芸当ですね」

前を向いたまま話す2人。現在2人の前では、警視総監やその他警察の上層部の人間とピツシリとスーツを着込んだワタルが話し込んでいる。

「にしてもワタル君にはとんだ災難ですね。完全に目が死んでますわ」

「それでもうみちゃんを出すよりはマシだろう」

「ですね」

(あんの2人イイ！ヘルプしてくれるって言ったのに何のんきに電話してんだあ!?)

お偉いさんへと自分が知る限りのポケモンの情報を話しながら、それとなく警部2人へと殺意を向けるワタル。

「それで、そのポケモンとやらの情報は一体どこから得たのかね」

(・・・来た!)

一通りの説明を終えたところで、ついに警視総監から本日屈指のキラードラスがくる。事前にキョウウやうみと話し合った結果、下手に隠さず情報元をはつきりさせるほうが良いという結論にはなった。しかし、ワタルとキョウウにはある懸念があった。

「・・・それは、とある少女からです」

「少女？」

先程まで真剣に聞いていた人達の顔が曇る。最近問題となっていた事件の重要な情報の出所が少女だと聞いては、仕方ないのかもしれない。

「それでその少女とは一体何者かね？」

「俺が知ることはあまり多くないですが、一言で言うなら、動画配信者の少女です」

「動画配信者・・・か」

その言葉に今度こそ鼻で笑う者が出る。配信者が情報元ということで、なんだガセか、と話をまともに聞こうと言う空気が薄れる。

「ですが、皆さまはきつと情報の確度について疑問をお持ちでしょう。そこで、俺のポケモンを見てもらいたいと思います」

「・・・なに？」

そう言うと、自身の横に置いていた動物用ケージを持ち上げるワタル。入り口を開けると、中からスルスルとミニリュウが現れる。

「な・・・!?!」

「これは・・・」

「こいつが俺のポケモン、ミニリュウと言います」

ワタルの紹介に、元気に「フウー!」と挨拶するミニリュウ。それを見ていた者達は啞然とする。唯一警視総監1人がミニリュウを見定めるかのように黙って見つめる。

「・・・おもちゃや、ただの蛇をペイントしたとかではないのか?」

「いいえ。蛇がこのように鳴くことがあると言うのなら話は別ですが。それに、おもちゃとは言えないくらいには生物的に動いてますよね?」

「う、うむ・・・」

ミニリュウを偽物扱いされ嫌な気分になったのか、少し言葉に棘があるワタル。ミニリュウの驚きでそれどころではない発言者が唸りながら座る。するとずっと黙っていた警視総監がおもむろに喋り出す。

「そのポケモン・・・ミニリュウといったかな。具体的にそのポケモンぐらいではどのようなことができる?」

その言葉にワタルが目配せをすると、キョウとタケシが頷く。

「実際に見てもらった方がわかりやすいでしょう」

失礼、と言ってミニリュウを連れ少し机から離れるワタル。するとキョウとタケシが警察で使用されるライオットシールドを持ってくる。

「ミニリュウ、『たたきつける』!」

「フウー!」

ミニリュウがその尻尾でシールドを叩く。すると、バットで殴ろうとも大丈夫なライオットシールドが、思い切りへしやげる。

「!?」

「な・・・!」

これには流石に警視總監も眼を見張る。

「このように、ミニリュウ程度ならこのくらいの力があります」

ワタルが席に着くと、ミニリュウが膝の上にさっと飛び乗る。その動きにさえ反応し、ビクツとなる。

「ポケモンは今見ていただいたように、状況によっては非常に危険です。ですが、今俺の膝の上にミニリュウがいるように、心を通わせることで良きパートナーとして接することも可能です。どうか、この事実も、今後の考慮に入れていただきたいと考えます」

「・・・」

ワタルの説明が済み、一礼して席を立つワタル。ミニリュウを抱え部屋を出ると、へたり込んでしまう。

「・・・はああああ疲れたあああああ〜」

「お疲れさん」

「本当に疲れましたよ。助けしてくれるんじゃないんですか」

「はっは、すまん。にしても、最後の言葉はアドリブだったがいい言葉だったぞ」

「・・・まあ素直に受け取るとききますわ」

ため息とともに魂まで出て行きそうなワタルに、缶コーヒーを渡しながら隣にくるキョウ。缶をもらいながらワタルは問う。

「これでいいんですかね」

「ああ。少なくとも、ことは急を要するってことくらいわかってもらえただろうさ。あとは俺らの仕事だな」

そう言つて笑うキョウを見ながら、ワタルはふと疑問を口にする。

「キョウさんって、なんですすぐにポケモンを信じたんですか?」

「ん?」

「ああいや、ライくんを見ていたつてもあるだろうけど、さっきの偉いさんみたいにおもちやだとか考えなかったんですか?」

「んー・・・」

ワタルの質問に少し考えるキョウ。缶を手慰みにしつつ話し出す。

「目、だな」

「目?」

「ああ、うみちゃんの目だよ。あの子、育ちが関係してるのかもしれないが、結構真面目な話の時は無表情だろう?」

「まあ、はい・・・」

「でもよく見たら、目に内心が結構出てるんだよ。事情聴取の時もしっかり出てた。こちらに何かをわかってもらおうと言う真剣な熱意。わかってもらえるのかっていう不安。そんな目で見られたら、大人として嘘だーなんて言えねえよ」

そう言つて缶のプルタブを開け一気に飲み干すキョウ。完全に飲みきると、缶を放り投げる。缶はジャストゴミ箱の穴に入り、それを見ながらキョウが呟く。

「そう言う子どもの願いつてのは、叶えてやるのが大人の務めつてもんさ。さて、お仕事しますか。ワタル君はもう家に帰つても大丈夫だ。お疲れ様」

肩を叩き、不敵に笑いながら歩いていくキョウを呆然と見つめながら、ワタルとタケシは呟くのだった。

「・・・かつけえ」

「フウ・・・」

そんな事はつゆ知らず、うみは現在海に来ていた。

「・・・あーいたーおーいー!」

水平線を見渡し、何かを見つけ飛び跳ねながら手を振るうみ。そんなうみの元にやってきたのは、いつぞやのタマンタだった。

「タマー」

「よーしよしよし。元気にしてた?」

擦り寄ってくるタマンタに癒されながらなでなでするうみ。ひとしきり撫でると、とあるものを取り出す。

「ねえタマンタ、少しお願いがあるんだ」

「タマー？」

「実は、少し知りたいことがあるから、これを探して欲しいんだ」

そう言って取り出したのは、メモ帳。そこには、不思議な模様の描かれた青い石が描いてあった。

『あいのろのたま』っていうんだけど、見たことない？」

「タマー」

申し訳なさそうに首を振るタマンタ。そうかー、と呟きながらもモンのみを取り出す。

「ありがとうね。これお礼。もし見つけたらまたここにくるからその時教えてね」

「タマーー！」

はい！という風にヒレをあげるタマンタ。天使か。連れてきていたライとハイタッチして海へと帰っていくタマンタを見送ると、真剣な顔になるうみ。

(もしもカイオーガやグラードンといった伝説の中でも厄介なのがこつちにきてしまったら・・・おとなしくしてくれればいいんだけど、暴れば大変だ。せめて存在だけでも確認して『たま』を確保できれば・・・)

「・・・行くよ、ライ」

「ライー！」

ライを連れ家へと帰るうみ。ポケモンと人との共存。そのための長い長い過程が、ようやく動き出しつつあった。

『もうだめだ・・・お腹すいて死んじゃいそうだぞ・・・』

森をさまよっていたとあるポケモンは、もう空腹が限界だった。どこかにあるだろうと探していたきのみはなぜかどこにも無く、当て所なく彷徨い続け既にふらふらである。

『・・・！』

ふと、何かの匂いを嗅ぎつけるポケモン。その方向を確認し力を振り絞り駆け出す。

『この匂いは・・・きのみの匂いだぞ!』

そうして駆け続けると、森を抜けひらけた場所にたどり着く。

『きのみだ!』

「キヤウキヤウウウー!」

そこには山のように積まれたきのみがあった。ようやく見つけた食料に歓喜の声をあげつつ、貪り食らうポケモン。

夢中でがつつくが故にポケモンは気づけなかった。

背後に、巨大な影が立ち、その爪を振り下ろすのを。

「ガァ!」

「キャン!」

吹っ飛ばされたポケモンは空中で態勢を立て直す。数mほどズザーっと地面を滑り、相手を見据える。

「ガァ!」

『おいらの食事の邪魔するな!』

その相手ローバンギラスに威嚇しつつ、ポケモンは戦闘態勢に入る。バンギラスもきのみをこれ以上食べられないために、仁王立ちで立ちふさがる。二匹が睨み合いをしていた時だった。

「ただいまー。バンギラス?騒がしいけど何かあったー?」

『だれだ!』

「グウ・・・」

「どうしたの・・・って、え?」

こうして、少女とポケモンは出会うのだった。

「えー、それでは今日はこの廃墟に出ると言われている幽霊は本当にいるのか!?って事で、○○と一緒に入ってみようと思いまーす!」

数日前、うみがワタルの元へと向かった日の夕暮れ時。とある廃屋の前、カメラ片手に笑う男が2人いた。1人はカメラを持って片方を映し、もう片方は廃屋の壊れた壁から中に入っている。

「やべー、結構雰囲気あるわー」

「おー、これはマジで期待できんじゃないかね?」

笑いながら奥へ奥へと入っていく2人。ふと、カメラを持つ方の男

が何かに気づく。

「・・・なあ、なんか寒くね？」

「あん？ひよつとしてびびった？」

「ちげーよ！ただなんか寒くなってきた・・・」

「かぁー！聞きましたかみなさん！こいつやっぱビビりつすわw」

カメラに向かってオーバリアクションでそう言う男。カメラの方は不機嫌になりながらも、気のせいだとしてそのまま進む。

そんな2人を、キシシと笑う紫の影とガスのようなもので出来た球状の存在が見ているのだった。

その後その2人は行方不明となっており、未だ見つかっていないとのことだ。

第20話

「・・・」

「・・・」

バンギラスと戦っていたポケモンをとりあえず家にあげ、互いに対面して座るうみ。ポケモンは警戒しているのか黙ったままで、うみもなんと言えばいいかわからず無言である。

(うーん、この子：多分ゾロアだよなあ。テレパシーが使える子だったりしないかなあ)

「ねえ、ゾロア。君はどこからきたんだ？」

『!?なんでおいらのことがわかるんだぞ!?』

「あ、やっぱり喋れるんだね」

うみに話しかけられ、驚きのあまりついテレパシーで答えるポケモン。ゾロア。

『なんでおいらのこと知ってるんだ？おいらはお前に会ったことないぞ』

「うーん、なんていうか・・・俺は君と同じゾロアに会ったことがあるんだ。だから君がゾロアだってことは分かるんだよ」

『そうなのか？おいらまあ以外の仲間に会ったこと無いからわかんないぞ』

あっさりと警戒を解いて近寄ってくるゾロア。ちよろい、と確信しつつも可愛いからいいか、と黙っておくうみ。

「それでゾロア、君はどこからやってきたの？」

『おいら、まあと一緒に森の中で暮らしてたんだぞ。でも、ちょっと前に寝て起きたら、まあがいなくて、おいらはあの森に1人だったぞ・・・』

そう言っつてしよぼんと俯くゾロア。そんなゾロアを撫でながら、うみは冷や汗をかく。

(ゾロアのまあって・・・ゾロアークのことか？確かイリユージュンっていう強力な幻術を使える・・・まあ好戦的ってわけでもないだろうし見つけてゾロアを返すって感じでいいか)

「ゾロア。俺がまあを探すのを手伝ってやるよ！」

『本当か!?!』

「ああ、だからとりあえず今日はここで過ごしてくれ。俺は探しに行く準備をするから」

『分かったぞ！お前いい奴だな！』

「お前じゃなくてうみ。よろしくな、ゾロア」

『おう！よろしくうみ!』

「さて・・・とりあえずは風呂かな」

嬉しそうにしつぽを振るゾロアを見て取り敢えず風呂へと連れて行く。森の中をさまよっていただけあって、結構泥だらけだ。

「じゃあゾロア、まず体洗うぞ」

『なんだ？いい匂いだぞ!』

「食べれないから舐めちやダメだぞー」

「キュウ〜」

気持ちがいいのか、テレパシーを解除して唸るゾロア。そんなゾロアを泡だらけにしながらかわしゃわしゃしていると、

「ラーイ！」

「うわあ!?!ライ、お前はまだ風呂じゃないだろってぎやあああ!?!」

『!?!なんだ!?!目が痛いぞ!』

「ジュツ!?!」

なにやら楽しそうなことしてるー！っとライがフライアウエイイしてきたことでうみは風呂のバスタブへと落ち、ゾロアは目に犬用ボディソープが入り、ライは勢い余って壁に激突するなど、どつたんばったん大騒ぎとなるのだった。

「キョウさん！都内より通報です！」

「内容は！」

「市民からの通報、〇〇区にて正体不明の生き物が炎を出しつつ疾駆

しているとのこと！」

「・・・どう考えてもポケモンだな。ワタル君とうみちゃんに連絡を！」
「もうやってますよ！ワタル君は現在こっちに向かっています！うみちゃんはつながんないふえす！」

「飯食ってる場合かタケシ！とにかく今は急ぐべきだ。車出せ、ワタル君と一緒に俺も出る！」

「ほーはい！（了解！）うみちゃんには間をおいて連絡し続けます！」
うみがゾロアを保護していた頃。都内の外来種対策課はにわか慌ただしくなっていた。都内に現れた炎を纏ったポケモン。ついになってしまったポケモンによる大規模災害の予感に、渋い顔をするキョウ。

「・・・頼むから死者だけは出ないでくれよ・・・！」

「キョウさん！」

「ワタル君か！」

駐車場にやってきたキョウに、既に到着していたワタルとミニリュウが声をかける。2人が合流すると同時にタケシの車もやってくる。

「乗ってください！飛ばしますよ！」

「キョウさん、今回の事件って・・・」

「・・・ああ、まずいことにならない方がいいが」

3人の乗る覆面パトカーは、サイレンを鳴らし飛ばして行くのであった。

「グオオオオオ!!」

〇〇区。通報にあったそのポケモンは、今なお区内を炎を纏って走り回っていた。走行していた車は止まり、その異様な生物に恐れをなした通行人達は逃げ惑う。しかし、そんな人間たちのことは御構い無しに、何かを探すようにして必死に走るポケモン。上空では、その様子を追いかける一台のヘリコプターがあった。

「全くもう・・・ダメだろ? ライ」

「チュウ・・・」

『そうだぞ! おいら目がすっごく痛かったんだぞ!』

反省のために1時間耐久おすわりを命じられたライに説教するうみ。申し訳なさげにするライに、ゾロアとうみはプンプンと怒る。

「・・・まあ、ちゃんと反省したならいいよ。今度からは気をつけるように!」

「ライ!」

「・・・あ、でもおすわりは継続ね」

「ライ!」

『なあうみ。おいら腹減ったぞ』

「きのみ食べてたのに!? もうちよつと待ってて。何か用意するから」

そう言つてテレビをつけるうみ。ちようどなにやらニュースの速報を流しているようだった。

『ごらんください! 真つ赤に燃えております! 突如現れた謎の未確認生物は、○○区内を疾走し炎をばら撒いてます! 付近の住民には幸いにも死傷者はいない模様ですが、現在○○区を通る道路は全て閉鎖、警察機動隊による必死の捕獲作戦が行われて・・・あつ!? 機動隊の車両が横転しました! 火の手が上がっております! みなさん、先程も言いましたがこれは決してCGなんかではありません!・・・えっ!? うそ!? こっち見てる、ちよ、急いで逃げ、きやあああああ!?』

「・・・な!」

ニュースキャスターの乗るヘリコプターからの映像が途切れると同時に再起動するうみ。

「なんなんだ今の・・・!? というか今のポケモンは・・・!」

映像が切り替わり、ニュース番組の報道ステーションになる。キャスターの横に表示された画像には、茶色の毛に覆われ、足に金属のリングをつけ、立派な白いたてがみを揺らし走るポケモンの姿が映される。

「エンティ・・・! そんな、なんでエンティが暴れて・・・!」

画像を見て愕然とするうみ。すると、おとなしく画像を見ていたゾ

軽い爆発音とともに、装置の中にボールが置かれる。

「……まじで頼むぞ」

うみはそのボールを引つ掴むと、帽子の中に長い髪を押し込みつつ、階段を駆け下りていくのだった。

「!うみちゃんからの連絡だ!」

「!」

車で現場へと急ぐキョウ達は、現在〇〇区の隣の区を走っていた。

「もしもし!?うみちゃんか!」

『はい!状況はニュース見たんで分かっています!あのポケモンは恐らく幻影です!』

「幻影だと……?」

うみからの情報に驚くキョウ。うみははい、と答えつつ続ける。

『あのポケモンはゾロアークと言います。今変身しているのはエンテイという別のポケモンですが、タイプはあく、幻影には相手を騙す効果はあっても実際の炎とは違うので、現在火の海になっている区内は多分偽物の炎なので大丈夫だと思います』

「そうか……それで、どうすれば止められる?」

『……今自分のところに、ゾロアークの子供がいます』
「なに!?!」

『推測ですが、ゾロアークは子供を探して暴れているんだと思います。だから、止めるにはこの子を引き合わせるしかない』

「くそ……急いでそちらに人をやる、なるべく急ぐが、時間が……!」

『それに関しては大丈夫です。こちらから行きます』

「し、しかし新幹線も電車も……!」

慌てるキョウに言い聞かせるように、それでいてどこかとおきのおもちやを見せびらかす子供のような声色で答えるうみ。

『大丈夫です、あと10分で着きます』

121：名無し

なんかヤベー事になってるな

122：名無し

俺避難させられたんだが

123：名無し

俺も。ポケモンヤベーって、なにあいつ

124：名無し

ヘリが炎で追い払われてたな

125：名無し

まじでどーすんだこれ、警察もダメだったんだろ？

126：名無し

未確認情報だが、自衛隊が動いてるらしい

127：名無し

まじで!?

128：名無し

まあそこまでするだろうなあ。これ自衛隊初のポケモン遭遇ってことになるのかなあ

129：名無し

いやー、何にせよ自衛隊動けばどーにかなるでしょ

130：変態警察

自衛隊はうごかねえよ。今は釣り師ニキと俺が動いてる

131：農家

?!?!?警察ニキ!?

132：名無し

おいおい、変態警察ニキはまじモンの警察か何か？

133：変態警察

まあな。そこはまた今度説明・・・できるかなあ。それは置いといて一つ、お前らに頼みたいことがある。○○区に近いところに住んでる奴限定で

134：変態

呼んだ？

135：名無し

帰れ！

136：変態警察

いや、今は時間も人手も足りん、守秘義務とかが守れるだけのモラルがある奴ならこの際変態でも構わん

137：名無し

なん・・・だと・・・!?

138：名無し

冗談はこの辺にして、警察ニキ、説明頼む

139：変態警察

協力感謝する。まずお前らにやってもらいたいことが一つ。お前らには、ポケモンを持ってもらおうぞ

140：名無し

・・・はい？

141：名無し

え？

—————

〇〇区。人が完全に避難し、今回の事件を起こしたポケモンだけが佇んでいる。

「本当にどうにかなるんですか？」

「やるしかないだろう。タケシに頼んで苦肉の策を進行中だ」

「はあ・・・胃が痛くなってきました」

「頼む。うみちゃんはあと10分で来ると言っていた。10分だ。それだけ持ちこたえてくれ」

「・・・まあ、やれるだけはやりますよ。・・・行くぞ、ミニリュウ」
「フウ！」

ポケモンが聞こえてきた声に振り返ると、2人の人間と一匹のポケモンがやってきた。ポケモナーゾロアークの変身したエンテイは、それを認めると、邪魔者だと判断し、幻影の炎を纏い威嚇する。

「・・・グルルル！」

その威嚇を見つつも、2人は止まらない。

「・・・来るな」

「ええ、来ますね」

「ガアアア！」

ゾロアークが自分にとっての許容できないラインまで近づいた人間達を襲う。

「そりゃあお前、悪手だろう」

「ガツ!？」

しかし、突如いつのまにか突っ込んでくるゾロアークの横に回り込んでいたミニリユウが放った電気の玉・・・『でんじは』が直撃し、まひから動きが鈍るゾロアーク。反撃を警戒して後ろへと飛ぶ。

「後方へ飛び退きからの幻影の炎を噴射。・・・ドンピシャ！ミニリユウ、『たたきつける』」

「グオ!？」

後ろへ飛ぶと同時に幻影の炎で距離をさらに取ろうとするゾロアーク。だが既にその背後にはミニリユウがスタンバイしており、そのまま尻尾で横つ面をはっ倒す。

「まあ、10分くらいなら頑張って保たせれないでもないかな?」

ゾロアークを見据えつつ、ワタルは自分を励ますようにニヤリと笑うのだった。

「○○空港管制塔、こちらB747。まもなくそちらへ到着する。指示をどうぞ」

『こちら管制塔、B747、三番滑走路へ』

「B747了解。・・・副機長?どうした?」

高高度の上空を飛んでいたとある旅客機。空港も近づき、着陸準備に入った操縦士である機長は、副機長が窓の外を見て呆然としているのに気づく。

「・・・き、機長!人が、人が飛んできます!？」

「はあ?なにを言っているんだ君・・・は・・・」

呆れる機長だったが、窓の外を見て同じく呆然とする。

「な、なんだあれは・・・!?」

そこには、赤と青を中心とした色をした体を持ち、腕が片腕が赤、もう片方が青の触手のようになった謎の存在が飛んでいた。なんと腕には銀髪蒼目の少女を抱えている。頭は後ろに突き出ており、感情の見えない顔をじっとこちらへと向けている。その飛行体を見上げ首をかしげる少女。こちらをちらっと見ると少女はギョツとして、その謎の飛行体になにやら指示する。すると、急にものすごいスピードを出し、旅客機を抜き去り飛んで行ってしまった。その際、背中に黒い犬のような妙な生き物が必死にひっついてるのが見えた。

「・・・」

「・・・」

「・・・副機長。私はこの仕事が終わったらゆっくり寝ることにするよ」
「奇遇ですね、自分もそうしようと思います」

目が死んだような状態でそう呟く2人は、その謎の飛行態が残した白い一筋の線をぼーっと見ているのだった。

成層圏と宇宙空間のギリギリ間に潜むとあるポケモンは、閉じていた目を開き、何かを感じたのか、一方向を見つめる。

「・・・」

その目には、少しずつ怒りが込められていく。そのポケモンに思い出されるのは、過去に自身の縄張りを犯した存在。自身の縄張りにかつて勝手に入ってきたその存在と同じ存在を感じ取る。

「・・・!!!」

怒りのままに咆哮したそのポケモンは、その緑の長い東洋龍のような体をくねらせ、感知したその存在の元へと向かうのだった。

暗い深海、そこを流れる深層海流の中を泳いでいたポケモンは、龍の気配を感じ、上を見上げる。

『・・・』

そして、何かを感じたのか、口元に笑みを浮かべると、凄い勢いで

海面へと泳ぐ。海面を出ると、翼を広げ、空を飛んで行く。
『・・・』

そのポケモンは、日本の方を少し見た後、自身に出せるだけの最大速で、龍の元へと向かうのだった。

第21話

「ちよつとデオキシス!? 人に会わないように飛んでって言っただろ!?」

「……………」

飛行機から逃げるように飛び去ったデオキシス……. に対して少し慌てたように怒るうみ。何が悪かったのか理解していないデオキシスは、首を傾げながら飛ぶ。

「全く……! 急ぐぞ!」

状況を考え今はしようがないとデオキシスへの説教を後回しにするうみ。スピードフォルムのデオキシスは、うみがなぜため息をついているのか分からず、とにかく運ばねば、とさらにスピードを上げるのだった。

「……………」

「グオオオオオオ!」

「ミニリュウ! 横回避!」

「フウ!」

うみが空を飛翔している頃。ワタルはミニリュウとともに、必死になつてゾロアークを足止めしていた。

「ミニリュウ! 『でんじは』!」

「フウ!」

「グルルル……」

流星に真っ向勝負をするには、ワタルとミニリュウの経験もレベルも足りない。そこでうみは、ミニリュウの使えるワザを聞き、バトルを延長できるだけの策を与えた。

『いいですか。ゾロアークがどのくらい強いのかは分かりません。ただ一つ分かることは、ミニリュウでは到底勝つことはできないということでしょう』

『じゃあどうすれば?』

『簡単です。「勝たなければいい」』

「つても簡単に言ってくれるよな、うみちゃん！」
そう言うワタルだが、口元には笑みが浮かぶ。

「グアアアアアア!!」

未だエンテイに化けているゾロアークだが、現在は幻影ではなく、『つじぎり』や『こうそくいどう』など、自身の使えるワザを用いてミニリュウを狙う。

ミニリュウは、当たれば致命傷になりうるそれらのワザを、ワタルの指示で的確に避ける。

「・・・なかなか上手いもんじゃないか」

「そりやどうも・・・左回避!」

キョウの軽口に答えながらも、指示を切らさないよう注意するワタル。5分ほどが経過した現在、ワタルは集中力の限界が近づいていた。

(俺自身は特に何もしていないのに、この緊張感・・・うみちゃん、バトルは簡単なんてよく言えるよ!)

自分の指示のミスがパートナーの敗北につながるという責任感。パートナーのみならず、周囲の状況、相手の出方、そういったものすべてを考慮せねばならない状況に、頭が痛くなる。

「!ミニリュウ!後方回避!」

「フウ!」

ゾロアークが繰り出した『きりさく』をすんでのところで回避するミニリュウ。エンテイ(ゾロアーク)の前足が地面にめり込む。

「!?!」

「!フウ!」

「ガアアア!!」

しかし、ゾロアークはそのまま地面ごと前足を振り抜き、道路のアスファルトや下の地面をミニリュウに向けてぶちまける。

視界を塞がれたことで一瞬動きが止まったミニリュウへ、ゾロアークが死角を縫うように接近する。

「まずっ?!ミニリュウ!」

ミニリュウがワタルの声に反応し下がろうとするが、すでにゾロアークは目前。

(しまった！ミニリュウ！)

思わずミニリュウへ手を伸ばすワタル。まさにゾロアークの一撃がミニリュウに入ろうとしているその時。

「『たいあたり！』」

「!?」

ワタルの後ろから声がする。ゾロアークの横から、ポケモンが二匹突っ込んできて、ゾロアークを怯ませる。

「『ちようおんぱ』！」

追加で響いたその指示で、ゾロアークの上空から別のポケモンが不快な音波をぶつける。

「?!?グ、ガアアア?」

その音波を浴びた途端ふらつくゾロアーク。目の焦点があつておらず、どうやらこんらんしているようだった。エンテイの姿だった体が少しずつ、ゾロアーク本来の姿へと戻っていく。

ワタルが驚いて後ろを見ると、ちようど車から3人の男が降りてくるどころだった。

「遅いぞタケシ！ギリギリだ！」

「んな無茶なこと頼んどいてそれですか!?初めてだったんですよ、ポケモンのゲット！」

「すげー、マジで戦ってる！」

「いけーコロー！ぶちかませー！」

降りてきたうちの2人は、見たことのないまだ大学生くらいの男だった。運転席からは、タケシがやけにやつれた顔で這い出てくる。

「あんたらは・・・」

「おつ、釣り師ニキでしょ?どもー、俺一応うみちゃんリスナーの1人です！スレの方ですけど、チャラ男って言われてました！あそこにいるコラツタのパートナーっす！よろしくっす！」

そう言っつて元気に手を取りブンブン上下させるのは、快活そうな表情にやや天然パーマ気味の男だった。もう1人、やや大人びた風なメ

ガネをかけた男も、ワタルの前に立ちお辞儀する。

「どうも、同じくうみちゃんリスナーで、あそこのガーディ・・・コロのパートナーです。農家ニキって呼ばれてるって言えば分かりますか？」

「あつ・・・！」

メガネの方に見覚えがあるな、と思っていたワタルはその自己紹介で納得する。しかし一体なんでポケモンを、と思っているとキョウがやってきてニヤリと笑う。

「こちらでも一応2個だけはボールを確保していたんだよ。本当は俺とタケシで使いたかったんだが、俺は俺で動く必要もあつたしな。タケシにうみちゃんの配信に来ていた人間を厳選させてボールを渡して、人員を増やしたのさ。・・・ポケモンを扱える人間は多いほうがいいからな」

そんな風話していると、ゾロアークがこんらんから復活する。元の姿に戻ったゾロアークは、怒りの形相で四匹を見る。

「・・・そういうことなら、力を借ります」

「よっしゃー！いけコラツタ！」

「コロー！怪我しないようになー！」

「えーと・・・よくわからんがコウモリ！気張れ！」

それぞれのパートナーの声に、やる気満々でゾロアークを睨む四匹・・・いや、コウモリと呼ばれた『ズバット』だけは不服そうだ。

「・・・グアアアアアアア！」

「来たぞー！」

「おっしゃー！コラツタ、『たいあたり』！」

「あ、バカ！」

突っ込んできたゾロアークに、意気揚々とたいあたりを指示するチャラ男。しかし、馬鹿正直な前からの突進にあたるほどゾロアークもバカではなく、突っ込んできたコラツタをむんずとひっ掴み、ポイと放り投げてしまう。

「コラツター!?!」

「そりやそうなるだろ・・・」

「コロ、ええと、そうだ！火吹いて近づかせな！」

農家ニキの指示で『ひのこ』を放つコロ。しかし、今度はそのまま火に突っ込んできて、コロの首元を地面に押しさえつけられてしまう。

「ギャン!？」

「コロ！」

「くそっ……！ミニリュウ、『たたきつける』！」

「コウモリ、『ちようおんぱ』！」

なんとか助けようと、パートナーに指示を出すワタルとタケシ。しかし、ゾロアークは迫り来る二匹を見ると、すぐにコロをつかみ、ミニリュウに向けてぶん投げる。

「フオ!？」

「ガウ!？」

慌てて急制動するミニリュウだったが、コロは空中ゆえ止まれず、ミニリュウも避けきれず互いに激突してしまう。ズバットに至っては、ちようおんぱが外れ、ゾロアークに蹴っ飛ばされる。

「ズバット!？」

「お、おい！コウモリ！」

「くそ……数は増えたのに、抑えられなくなってる……！」

ゆっくりとこちらに向かってくるゾロアークに、冷や汗を流すワタル。

連携不足というのもあったが、それぞれのポケモンのコンディションも影響していた。捕獲の際に散々暴れており、捕獲時には体力もスタミナも消耗していたコラツタとズバット。殆どの間一匹でゾロアークを相手取っていたことすでに限界に近いミニリュウ。飼いだった頃から温厚な性格だったこともあり、どこか闘争心が弱いガーディ。四匹ともが、何かしらの不具合や欠点を抱えていた。

一方のゾロアークも、内心ではかなり四匹に苦戦していた。ミニリュウに関してはゾロアークと練度の差があるにもかかわらず渡り合い、他の三匹も、ミニリュウ以下の実力とはいえ数の利はあちらにある。我が子を探すためにも体力をあまり消耗したくないゾロアークとしては、可能であればすぐに逃げ出したい状況であった。

「グアアアアア!!」

「まづい、来るぞー!」

ふらつく四匹に、早く決着をつけようと襲いかかるゾロアーク。鋭い爪での一撃がミニリュウへと迫り、今度こそ絶体絶命、というその時だった。

「・・・!」

「ミニリュウ・・・!」

ミニリュウとゾロアークの間に、上空から物凄い勢いでなにかが飛来し、ゾロアークの爪を受け止める。

「!?」

「あれは・・・!」

ゾロアークはその相手に目を見張った。ゾロアークの爪を止めたそのポケモンは、全体的に丸いフォルムであり、赤と青のみの非生物的な配色をしていた。ヒラ麺のようになった腕を交差し、そこから半透明の膜を形成している。

ワタル達は、そのポケモンの背後に立っている者を見る。例によって赤いジャンパーにジーンズ。黄色いリュックを背負い、赤い野球帽を被ったその人物は、振り返ると儂くも何処か幻想的な笑みをふわりと浮かべる。

「ありがとうございます。もう大丈夫です・・・私が来ました!」

ワタルとキョウはその少女の登場にニヤリと笑い、チャラ男とタケシは外人4コマのごとく腕を上げ喜び、農家ニキはぽかんと口を開けている。

そんな大人達の様子を見て微笑みを苦笑に変えつつ、少女・・・うみは、ゾロアークに向き直るのだった。

「さて・・・ゾロアーク」

「・・・っ!」

デオキシスディフェンスフォームを挟んでゾロアークと向かい合い、話しかけるうみ。得体の知れない少女と、明らかに強者の雰囲気纏うデオキシスに警戒するゾロアーク。しかし、次のうみの言葉に耳を疑う。

「あなたの子ども・・・ゾロアを連れてきたよ」

「・・・?!?!」

思わず力を込めていた腕を下ろし呆然とうみを見るゾロアーク。動きが止まったことで展開していた『まもる』を解くデオキシス。

デオキシスが一步退くと、刺激しないようゆつくりとゾロアークへと近づくうみ。その様子を見て思わず止めようとするキョウ達だったが、そんな男達を手で制するうみ。ゾロアークの前まで来ると、そのまま背負っていたリュックを下ろし、ジッパーを開ける。

「・・・プハッ、キャン！」

「・・・！ガ、グア・・・」

そこから出て来たのは、あまりにもスピードが出すぎて落ちそうになったのでリュック内に入っていたゾロアだった。出てくるとともにゾロアークを見とめると、嬉しさから一声鳴く。ゾロアを見たゾロアークは、手を前に出し、口をわななかせながらゆつくりと膝をつく。

『まあ・・・まあ・・・！』

「グアアアアア！」

感極まり、ゾロアークへと走り寄るゾロア。ゾロアークも、手を広げそれを受け止め、二度と離さないと言わんばかりにぎゅっと抱きしめる。二匹の目には、うつすらと涙も浮かんでいた。

二匹は、離れていた時間を埋めるかのように、しばらくの間涙を流しつつ抱き合っているのだった。

そんな二匹を、美しいものを見るような優しい目で見守っていたうみ。今はそつとしておいてあげよう、とゆつくりと静かにキョウ達の元へと向かう。

「・・・すいません、遅くなっちゃって」

「いや、むしろ迅速だったと言えるだろう。何にせよ、これで解決だ」

「ほんどによがったよ！いいがぞぐだばあ〜！」

「うおおお、感動つす！泣けてくるつす！」

「・・・お前ら少し静かにできないのかよ・・・」

「まあまあ。・・・にしても良かったです。ちゃんと家族に会えたように」

ゾロアーク達の姿を見て感動し、滂沱の涙を流すタケシとチャラ男。そんな2人を見て少し引いているが、否定はしないワタル。コロというポケモンの家族を持つが故に、二匹が出会えたことを純粋に嬉しく思う農家ニキ。それぞれの感想を持ちつつ二匹を見守るのだった。

「・・・でも、この後どうすればいいんでしょう」

「・・・幸いと言つていいのか、マスコミは現在周囲にいない。今のうちにあの二匹を保護し、人目につかぬよう森に返すことができればいいんだが」

「でも、被害は結構出てますよね？流石にこのままお咎めなし、は難しいかと」

「そんな！なんとかならないっすか!？」

ゾロアはともかく、ゾロアークは区内にて暴れすぎた。炎による被害は幻影だったので実質ゼロと言つていいが、パニックによつて発生した事故や人身事故に関しては言い逃れできない。

ゾロアーク達に対する同情はあるものの、しっかりと罰は与えるべきである。しかし、ポケモンによる被害を裁く法もなければ、そもそもゾロアークには責任を負うパートナーがいらない。どうしよう、と悩む大人達の中で、うみがはいつと手をあげる。

「・・・一つ、提案があるんですが」

「なにかかな?」

「あの二匹を、うちで保護してはダメでしょうか?」

「」「・・・え?」「」

—————

太平洋・日本近海。デオキシスの気配を感じ日本へと迫る緑の龍・・・レックウザは、別の気配を感じ洋上で停止していた。海面をじっと睨みつけるレックウザ。

「・・・GURUAAA!!」

何かに反応したのか、口を開き、『はかいこうせん』を海面に向け打ち込む。海面に命中したはかいこうせんは、激しい水しぶきを起こし、海面に白い水滴の壁ができる。

「……………」

と、そのしぶきを突き破り、ポケモンが姿をあらわす。そのポケモンは白い体に、先が手のようになった翼を持ち、背中には青い三対のフィンのようなもの。

まさに白い翼竜とも言えるそのポケモンは、レックウザへとテレパシーを送る。

『落ち着くのだ。貴方の持つその怒りはただの八つ当たり過ぎない』

「GURUAAA!!」

『いけない。「あの子」に手を出すということの意味を分かっているのか』

必死に説得するポケモン・・・ルギア。しかし、レックウザは意に介さず、怒りをルギアにすら向ける。

「GURUAAA!!」

ついにしびれを切らしたレックウザは、そこを退け、と言わんばかりにはかいこうせんを放つ。ルギアはそれを躲し、海中へと潜りフィンを畳むと、自身の周りに海流を纏いながら飛び出し、レックウザへと迫る。

「……………」

「GURUAAA!!」

迎え撃つレックウザも、『げきりん』を発動し真つ向からぶつかる。

二匹のぶつかり合いにより海流は乱れ、周囲に嵐が発生する。付近の海中にいた生物達は皆より深く、もしくはより遠くへと逃げ出す。

二匹は互いにブレス技を撃ち合い、体をぶつけ合う。レックウザがその長い体を活かしてルギアに巻きつこうとすれば、ルギアはそれを身軽に躲し、海中から水の柱を生み出しレックウザを飲み込む。しかしレックウザはそれを素の力だけで振り払うと、ルギアへと襲いかか

る。

『どうしても退かないというのか……!』

「GURUAAAAA!!」

ルギアはなおも説得を続けるが、レックウザは止まらない。しばらくの間二匹の攻防が続く。と、業を煮やしたレックウザが無理やりルギアへと迫る。ルギアのブレス技が直撃するも、御構い無しに接近するレックウザ。ルギアの目前まで迫り、口を開き至近距離での一撃を狙うレックウザ。

すると、突如海面と上空からブレスが飛来する。どちらもレックウザへと直撃し、たまらず後退するレックウザ。爆煙を振り払い不屈き者を睨むレックウザ。

「……………」

海面から浮上してきたのは、海を作ったとされる伝説のポケモン——カイオーガ。青いその巨体に見合わないジャンプを決め、レックウザへと襲いかかる。それを躲したレックウザだったが、今度は上空からエネルギー弾が襲いかかる。

「GURUAAAAA!!」

「GAGYAGYAAAAA!!」

上空を見上げたレックウザ。そこには、空間を切り裂き飛んでくるパルキアの姿があつた。

パルキアは両手にエネルギーを集中させ、『きあいだま』を放つ。レックウザはそれを避けるが、今度はルギアが自身の奥の手である『エアロブラスト』を放つ。

三体の伝説の猛攻に、流石に分が悪いと悟ったレックウザは、置き土産とばかりに『りゆうせいぐん』を放ち、縄張りへと帰って行くのだった。三匹はそれぞれにそれに対応し、気づくとレックウザは遠くの空へと消えていた。

『……やれやれ、どうにかなったか』

ふう、とため息をつくルギア。事が済み、カイオーガは海の底へと戻って行く。

パルキアも、一瞬だけ日本の方角を見て、直ぐに空間を開き自身の世界へと戻って行く。

1匹残ったルギアは、日本へと向き、微笑む。

『・・・さて、これからどうなることか』

そう呟くと、ルギアも深海の底へと戻って行くのだった。

――

「・・・では、例の『○○区炎上事件』に関する君の報告を聞こうか」
事件から数日後、事後処理等がある程度終わり、キョウは報告書を持って警察上層部・・・トップである警視総監の元を訪れていた。

「は！数日前発生した○○区における謎の未確認生物、仮称ポケモンによる火災事件について報告します。現在確認されるだけで、およそ120件ほどの事故・および建物の倒壊を確認しております。それらに関する対応は、現在進行中です」

「・・・それで、今回の件に関わったという民間人については？」

「現在、我々外来種対策課にて保護しております」

「・・・暴れたというポケモンについては？」

「残念ながら、ポケモンは逃走。今のところ足取りはつかめておりません」

「・・・報告ご苦労、あとは書類にて確認する」

「はっ」

敬礼し、部屋を立ち去るキョウ。ドアノブに手をかけたところで、警視総監が呟く。

「ポケモンとは、なんだと思うね」

その呟きに、キョウは一瞬の間の後、答える。

「自分は、人と寄り添う隣人であると考えます」

「・・・そうか」

そう言って黙る警視総監。もう言うことはない判断し、部屋を出る。1人となった部屋の中で、警視総監は窓の外をじっと眺めている

のだった。

「お疲れーっす。どーでした？」

対策課の部屋へと戻ってきたキョウに、机でパソコンに向かいながら声をかけるタケシ。

「なんとも言えんな。・・・お前のポケモンはどうした？」

タケシが捕まえたはずのズバットが見当たらず尋ねるキョウ。ぶすつとした表情で、タケシは部屋の隅を指差す。タケシの指差す先では、対策課のメンバーにひたすら弄られるズバットがいた。

「へえー、これがポケモンかあ」

「話では聞いてたけど、本当に普通のコウモリとは違うのね」

「目とかないんだな。やっぱ超音波で周囲を見て飛ぶのか」

「ズツ、ズバツズバツ」

ズバットの周りを囲むようにして集まり、頭を撫でたり全体を眺めている職員。ズバットは眠たいのか、少し嫌そうにしている。

「・・・なんだあれは」

「ポケモンを見るのが初めてですからね。そりゃあありますよ。はあくまったく、あいつには女が寄ってくるのに、なんで俺には・・・」
ブツブツと呪詛を垂れ流すタケシを見てため息をつくキョウ。ふと、タケシのパソコンの画面を見る。

「それは何を見てるんだ？」

「あつ、そうだそうだ、見てくださいよこれ」

そう言つて横にずれるタケシに変わりパソコンの前に座るキョウ。画面に映し出されたものを見て一瞬驚き、次いで微笑ましそうに笑う。

「なるほどな。うみちゃんからか？」

「ええ。これが見れたんなら、報告書の偽造もやった価値がありますよ」

「・・・通常の報告でやったらただじゃおかんぞ」

「いや分かっていますって！」

そう言っただけで合点2人。パソコンには、うみからのメールと、それに添付されていた幸せそうに寄り添って丸まり眠るゾロアとゾロアークを写した写真画像が表示されているのだった。

閑話 うみちちゃん家の日常

ゾロアとゾロアークを引き取り、家で世話をすることになったうみ。今日は、そんなポケモン預かり所と化したうみの家の日常をご覧いただく。

ライ

「・・・チャア〜」

とある朝。ライは窓から差し込む日差しで目を覚ました。ふと見ると、いつもは自分より早く起きているはずの主人が未だ寝ている。

「ライ、ラ〜イ〜」

「・・・んう、あと五分・・・」

「チュウ・・・」

どれだけゆるすろうとも起きる気配のないうみに呆れた声を漏らすライ。だらしなく口元から垂れるヨダレだけティッシュを持ってきて拭うと、ライはベッドを飛び降りる。

「・・・ライー！」

主人が起きない以上、他のポケモンの分も朝食を用意するのだと、気合いを入れるライ。部屋の扉のドアノブに飛びつき、そのまま体重でノブを下ろし扉を開く。

「ライツ、ライツ、ライツ、ライツ」

階段を降り、リビングへと向かうライ。

「ライー！」

「キュウ」

リビングにてソファを占領して眠るミロへと挨拶するライ。寝ぼけながらもそれに答えるミロだが、目はトロンとしており、すぐにまたとぐろを巻き眠ろうとする。

「ラーイーー！」

「・・・ギユウ」

尻尾を引っ張り無理やり起こそうとするライだが、ミロは煩わしそうにするだけで起きようとしなない。むしろ物凄い嫌そうにしてだ

んだん攻撃的な声になってくる。

「ライ・・・」

全く動く気のないミロに諦めたライは台所へと向かう。

「ラーイッ、ラーイッ」

台所にあるドッグフード・・・が変質して出来たポケモンフーズの袋を引きずり、庭へと向かう。

「ラーイー！ラーイー！」

「・・・グルウ」

「グオツ」

「スピツ」

ライが呼びかけると、朝食を食べにやってくるポケモン達。バンギラスやサイドンは家を壊さぬよう少し離れた所から皿を持って待ち、スピアーは3、4匹が代表でやってきて麻袋に大量に詰めてもらう。

そんなこんなで全員に食事を渡したライは、いい仕事した、と汗を拭うと家の中へと戻っていく。

ちなみにゾロアークとゾロアは朝はあまり起きてこない。

「ラーイー！」

ポケモン達への食事配給を終えたライは、自分の分を皿に盛り少し遅めの朝食を摂るのだった。

「チャア〜」

ライは、朝の食事後は基本的にゴロゴロしているか、バンギラスと遊んでいる。今はバンギラスが食事中なのでのんびりと日向ぼっこ中だ。

するとようやく起床したミロがソファから降り、ズリズリと這いながら庭へと向かう。ミロは大体の時間をうみと一緒に家で過ごすのが、流石に水辺の方が居心地が良いのか、たまに庭の池へ泳ぎに行くことがある。

そんなミロを横目に見ながら、これ幸いと空いたソファへと飛び乗ると、テレビのリモコンを器用に尻尾で押すライ。テレビで朝のニュースを見るライ。しばらくすると、寝ぼけ眼のうみがあくびを嚙

み殺しながら降りてくる。

「・・・あふ。おはよーライ」

「ライー！」

ソファを飛び降り、元気に挨拶するライ。うみの周りを元気に走り回るライに微笑み見ながら、朝ごはんを用意するうみ。こうしてライとうみの1日は始まるのだった。

—————

バンギラス

バンギラスの1日は朝食後、鍛錬から始まる。庭から入ることのできる森に入り、どこかを目指すバンギラス。少し歩き、ひらけた木の無い場所に出る。そこには、拳の後が残る大きな岸壁があった。

「・・・グル」

そこにやってくると、バンギラスは目を閉じ、精神を集中させる。木々のざわめき、鳥のさえずり。そういつた自然の音だけの空間の中で、ひたすらじつと佇み動かないバンギラス。一羽の鳥が、さつと木から飛び立つ。その衝撃で落ちた木の葉が、ヒラリヒラリとバンギラスの前へと舞い落ちてくる。

「・・・！」

バヒユツと尋常では無い音とともに繰り出される貫手。その手の爪には、落ちてきていた木の葉がしっかりと貫かれていた。

木の葉を払いつつ、今度は手をそつと体の前に持つてくる。手を合わせ、拝み、その後片方を腰だめに構え、撃ち出す。

「・・・ツ、・・・ツ」

ひたすらに拝み、構え、放つという作業を機械的に続ける。思い出されるのは、数週間前に、伸び悩む特訓の気晴らしにとうみから聞いた話。

『最終的に音を置き去りにできるようになればライも驚くくらいになれると思うよ？なににせよ、一日一万回！感謝を込めるのを忘れないこと！』

その特訓法について初めて聞いた時、バンギラスは天啓を得た気分

だった。常に戦い続けることで浮き彫りとなるライやミロとの明確な差。ライには速度、そして技の威力で負け、ミロには自身の自慢の一撃を受けてもなおそよ風のように気にしないタフネス。

部分的に見ても総合的に見ても、どうあがいても二匹には勝てなかった。それは、ひたすら強さを求めるバンギラスにとって容認し難い事実であった。

「……超える。あの二匹を……」

信念と意地、そして超えるべき目標を見据え、今日もバンギラスは拳を振るう。

始めて3日後、まさかただの冗談だとは死んでも言えなくなったうみは、まあ本人がいいならいいか、と影から覗きつつ全てを諦めるのだった。

「……」
スピアー

うみの舎弟状態となつているスピアー軍団だが、基本的には指示がなければ自由に過ごしている。巨大な巣にいるコクーンやビードルを育て、世話をし、新たなスピアーへの進化を促す。

「スピッ！」

「ス、スピッ!？」

しかし今日の朝、巣から何匹かのビードルが消えるという事件が起きていた。スピアー達は上へ下への大騒ぎで搜索するが、庭の何処を探しても見つからない。慌てたスピアー達は、巣に残るもの以外で分隊を作り、森の中へと搜索に入る。

高度を上げ上空から探す部隊、低空飛行で木の下を探す部隊、そして地面に下り、歩いて搜索する部隊。それぞれがそれぞれの搜索法で森中を探す。

「ビー、ビー」

「!・スピッ」

すると、ビードルが一匹、木の上でブラブラと垂れ下がっているのを発見する。すぐさまスピアーが回収し、巣へと運んでいく。その

ビードルがいた付近を中心に、残ったもので捜索を続けていると、
「ビー・ビーッ！」

何処からかビードルの悲痛な叫びが聞こえてくる。慌てて探すと、上空を飛ぶ鳥・・・いや、ピジョットがビードルを一匹足で掴み悠々と飛んでいくのを発見する。どうやら、ビードルが運悪くピジョットに見つかり餌として捕まったようだ。

「スピーッ！」

「スピーッ！」

リーダー格のスピーアーに続き、部隊総出でピジョットを追いかけるスピーアー達。それに気づいたピジョットは、飛ぶスピードを上げ、振り切ろうとする。

マツハ2で飛ぶことも可能なピジョットに追いつくことができな
いスピーアー達。必死に追いつがるも、結局ピジョットについて行け
ず、根を上げてしまう。それを見たピジョットは、ニヤリと笑うと、悠
然と飛び去ってしまうのだった。

「・・・」

スピーアー達を撒き、巣へと戻ってきたピジョット。ビードルを巣に
放り込み、羽繕いを始める。いつ食われるか、とビクビクするビード
ルを捕食者の目で見つつ、ピジョットはゆっくりとビードルに迫る。

「・・・?!?!」

殺気を感じるピジョット。咄嗟に巣から飛びのくと同時に、無数の
針が巣に突き刺さる。近くの枝へと掴まったピジョットは、それがス
ピアーの針であることがわかる。偶然なのか狙ったのか、ビードルを
避けるように突き刺さる針を見て、先ほどのスピーアー達であると確信
する。

「・・・」

「ビーッ、ビーッ」

喚くビードルを無視して周囲の気配を探るピジョット。先程の針
攻撃『ミサイルばり』を受けた時から感じていたこと・・・「羽音が

聞こえない」。

「・・・ピジョットオオー！」

翼をはためかせ、『ふきとばし』を繰り返すピジョット。吹き荒れる暴風で木々や草が激しく揺れる。ビードルも必死に巢の残骸にしがみつき飛ばされないようにしている。しかし、それでも周囲にスピアーの気配も影もない。

困惑するピジョット。すると、またしても背後から殺気を感じる。素早く飛ばたき、このままではまずいと野生の勘から上空へと逃げる。

「!?」

ところが、木々の間を抜け上空へ出てピジョットは愕然とする。ピジョットを囲むようにして、無数のスピアー達が空を埋め尽くしていた。

「・・・ピジョットー！」

しかし相手はたかがむしポケモン、己の方が強さでは上だと、ピジョットは戦闘態勢に入る。が、スピアー達は動かない。来ないならばこちらから、とピジョットが飛ばたい時だった。

「ピジョット!?!」

背後から三度針が飛んできて、ピジョットに突き刺さる。最悪なことに、無数の『ミサイルばり』の中に一つだけ『どくばり』が紛れており、ピジョットの体の自由を奪う。

地面へと落ちて行くピジョット。落ちる最中、木々の間を落ちる際、ピジョットは見た。

そこには、木の葉を身体中に貼り付けなんらかの木の樹液で匂いをごまかし張り付くもの、地面を這い回る草花を身に纏い黄色い派手な体を上手く森に溶け込ませたもの。

地面に倒れ伏し、這い寄ってくるスピアー達を見ながら、ピジョットは最後まで自分がなぜやられたのかを理解することはなかった。

一方のスピアー達。彼等はピジョットが動かなくなったのを確認すると、そつと飛び上がり、周囲の安全を確認する。

「スピッ」

「スピッ」

針のような手を空へ向けて降ると、上空にいたスピアーが陽の光を針で反射させチカ、チカチカツと光信号を送る。

それに答えるように同じく太陽の光で信号を送ると、上空の部隊が巢へと戻る。それを確認し、ビードルを回収すると、スピアー達はピジョットを抱え帰って行くのだった。

後に残されたのは、壊されたピジョットの巢の残骸だけだった。

『え？スピアー達も強くなりたい？．．．んゝ、例えば、森の中がスピアー達の戦場でしょ？なら、これ見てみる？ゲームだけど、結構面白いし、森林の中での戦闘のヒントが得られると思うよ！特にこの主人公の老蛇がすごく渋くてかっこいいんだよねゝ！あ、でもこのリボルバー使いの人もいいなゝ』

サイドン

サイドンは、朝食事を終わると、誰よりも早く動き始める。

「おお、うみちゃんところのー、ええと．．．サイドンだったかな？」

「グオツッ！」

畑へとやってきたサイドンに、畑仕事をしていた老人が声をかける。老人へと手をあげつつ挨拶するサイドンは、かつて人を襲っていたポケモンとは思えない。

「今日はうちの畑だったか？しかしサイドンが来てから仕事が楽になったよ。さて、今日はよろしく頼むよ」

「グルッ」

バシバシと背中を叩く老人に、気合十分の鼻息で答えるサイドン。サイドンは現在、付近の畑を持つ住民の元で仕事の手伝いをしているのだった。なぜそうなったかというと、

『ああ！あの夜のー！』

『?・・・あっ』

サイドンがうみの家にやってきた頃。サイドンを家に連れて帰る際、サイドンが襲っていた男に出会ったのだった。

『そ、そいつ人を襲うだろ！なんでそんな奴を連れてるんだ！』

『え、ええと、違うんです！』

うみは必死に男へと事情を説明した。うみの家から決して出ない、人は襲わせないと説得するうみ。しかし男は、少し考えた後、ある提案をした。

『・・・なあうみちゃんや。一つ考えがあるんだが』

『?』

そこで男が提案したのは、サイドンを自分の持つ畑の仕事の手伝いに使わせてくれ、というものだった。自分を襲ったような化け物だが、その時体験した物凄いパワーは、重機以上に働くことも可能だろう。また暴れるのでは、という恐ろしさはあるものの、それでも畑仕事に楽になるならそのくらいリスクは気にしない、と言った。

少し悩んだうみだったが、当のサイドンがお試しで手伝いに行つたところ、とても楽しそうにしていたためまあいいか、とg oサインを出したのだった。

そうして畑仕事を手伝い始めたサイドンだったが、その噂を聞きつけた他の住民も、「ぜひうちの畑も手伝って欲しい」と言うようになり、結果日毎に交代制で畑仕事を手伝うのが、サイドンの仕事のようなものになっていた。

「おー、あいかわらず早いなあ」

感心する老人の目の前では、サイドンが専用を用意してもらった合金製の鍬を持って畑を耕していた。その有り余るパワーでズンズンと耕すサイドン。結果、1日どころか、お昼頃には全ての仕事が終わっていた。

「いやー、さすがだねえ。これ、少ないけど持ってってよ!」

そう言つて老人が差し出したのは、野菜が詰め込まれた大きなカゴだった。喜んでそれを受け取ったサイドンは、老人に手を振りながら、カゴを抱え帰路につく。

「グツ、グツ、グルル〜♪」

鼻歌を歌いつつうみの家に戻るサイドン。カゴを抱えたまま庭へと向かう。

「グルアアアアア!!」

「ライー!」

そこでは、いつものように遊びと称したバトルを行うバンギラスとライの姿があった。バンギラスの腰の入った正拳突きを華麗にかわし、顔面へとケリを叩き込むライ。

奥の方ではスパアー達が何か鳥のようなものを、うみが趣味で用意した肉焼きセットで焼いている。サイドンにはよくわからない音楽を流し、リズミカルに回しているスパアー達。・・・針でどうやって持つてるんだろう。ミロは池で優雅に泳ぎ、たまに池に落ちるビードルを尻尾で外へと弾いている。

そんないつもの光景を眺めつつ、労働後の昼寝に入るサイドンだった。

一方ゾロアークは、蝶々を追いかけて回すゾロアを、微笑ましいものを見る目で一日中眺めているのだった。ここだけが一番平和である。

第22話

「そうだ、海行こう」

ある日、うみは唐突にそう言った。

夏であるというのに、釣りには行ったのに海で泳いだり遊んだりといったことをしていない。それに、ちょうど配信で何かに使うかも、と購入した耐水性の高いカメラが届いたこともあって、折角なので海で遊んでみようと思いついたのだった。

「ライ、ミロを呼んできて。面白くなるぞー」

「ライ?」

ウキウキで準備を始めるうみ。そんなうみを見つつ、まあ楽しそうだしいつか、とミロを呼びに行くライなのであった。

「あつ、そうだ・・・もしもし、今大丈夫ですか?」

・・・

「すうー、海だー!」

「ライー!」

ライとともに両手をあげ、楽しそうに絶叫するうみ。ライもノリノリで真似をし、ミロはそんな2人を呆れた様子で見る。流石に普段釣りをしている場所は危険もあるということ、バスに揺られ数十分、公共の海水浴場へとやってきた。どうやら海水浴シーズンから少し外れているため、人はかなり少なくライ達を見られる心配もない。

「よし、泳ぐぞー!」

「ライー!」

そう言っとうみはライとミロに荷物番を頼み、更衣室へと向かう。

「どーも、うみです。今日は海水浴場にやってきました。今日は特に企画モノとかではなく、ただ遊んでいこうと思いますー!」

『わこ・・・?!』『ちよつと待て、水着だとオオ!?』『わが世の春・・・いや夏が来た』『特定班!急いでこの海水浴場を特定せよ!』『やらせねーよ』『しまった!警察ニキ!?!』

なにやらコメント欄が荒れているようだが、変態警察ニキことタケシが面倒な輩をことごとくシャットアウトしている。そんなコメントの荒れ具合は意に介さず、うみはむふーと偉そうに胸を張る。

ブルーのスポーツブラタイプの上に、同色のトランクスタイプのジーンズ風の下。ボーイツシュな水着ながら、流れるような銀髪をポニーテールにまとめたうみの可愛らしさを強調している。太陽の光を反射してきらめくその銀髪と青一色のシンプルなデザインの水着を見て、コメント欄が歓喜の絶叫に染まる。

「ふっふっふー、今日は俺の超絶水泳テクニクをご覧に入るとしましようか!」

『どやうみ来たー!』『そんなに張つても胸は無いよ?』『オイオイオイ』『死んだわあいつ』『でもうみちゃん1人ってヤバない?』『あー、ロリコンとかロリコンとかロリコンとかな』『変態しか選択肢ねえ!』『ふーん、そんなこと俺が考慮していませんとも思いましたか?』

『なに・・・?!』『まさか・・・?!』『知ってるのか雷で・・・警察ニキ!?!』

「じゃーん、今日は保護者枠で釣り師ニキに来てもらいましたー!」
『絶許』『おのれ釣り師ニキイイツ!!』『信じてたのに・・・』『失望しました、那珂ちゃんのファンやめてうみちゃんリスナーになりました』『うほっ、いい男』『ホモはカエレ!』

「えー・・・どうも釣り師ニキです」

コメントからの大バッシングを受け口元が引きつり気味のワタル。キョウからの依頼でうみの持つモンスターボールを回収にやってきたワタルだったが、こうしてうみの保護者として海水浴場に行っていた。

それなりに引き締まった体で、履いている炎柄のトランクスタイプ

の水着が派手ながらもワタルの漢らしさを際立たせる。

「来るときに水着を持ってきてくれと言われた時は何をするのかと思っただけども・・・まあ海は嫌いじゃないんだが」

「でしよう？それに、ミニリユウだったまにはのびのび泳がせてあげないと。ねー？」

「フウー！」

ため息をつくワタルに笑いかけながら、ミニリユウを抱きかかえるうみ。大人しく抱かれているミニリユウにお前もつとアグレッツブだったろ、と目を細めるワタル。

『羨ま尊死』『うみちゃんは尊いが釣り師ニキそこ代われ』『今から速攻で向かうから海水浴場の場所おなじやす』『警察ニキ・・・』『とうとう変態警察の意味が変わってしまった・・・』

「じゃあ行きますか！」

「ライー！」

「ああ、ほら行くぞ、ミニリユウ」

「フウ」

「お前ほんとに俺のポケモンか!? うみちゃんとのテンションの差はなんだ!？」

『草』『まあ残当』『俺もうみちゃんに抱きかかえられたいわ』『ポケモン化願望ニキ怖いわあ』

「いきますよー、そりゃあー！」

「ぶわっ!? くっそ、くらえ！」

「わぶっ!・・・やりましたね〜? 行けミロ! 『ハイドロポンプ』(対人用低威力ver)！」

「ボボボボ!？」

「ライライー！」

「フウ!？」

水際で水の掛け合いをするうみとワタル。うみが水をかければワ

タルが水をかけ、そしてうみの仕返しとしてミロがハイドロポンプでワタルを吹っ飛ばす。やや沖の方では、器用にも尻尾でサーフィンをするライと、それを見て驚きながらゆったりと泳ぐミニリユウ。

『くっそ、まじで羨ま死するわ』『こうしてみると・・・似てない兄妹？もしくはカツプル？』『おま・・・全リスナーが考えながらも決して言わないようにしていたことを・・・!』『判決、死刑』『裁判官ニキ!?!結論が早すぎる!?!』

防水カメラをさらにジップロックの袋に入れて配信されるその光景を、恨みの呪詛を垂れ流しながら見る視聴者。

・・・イチャイチャを見せつける配信とか誰得だ?とも思える状況だが、むしろ視聴者は増えているようだ。

「ふう、結構遊びましたね・・・じゃあここからはコメントでやってほしい遊びを聞いてみます!」

『釣り師ニキを海に沈める』『釣り師ニキを砂浜に頭を下にして埋める』『スイカ割りならぬ釣り師ニキ割り』

「お前ら俺に何の恨みがあるんだ!?!」

殺意の高い視聴者にワタルが突っ込む。うみは、コメントの一つを見てポンと手をつく。

「それじゃあ、スイカは持ってきてるんでスイカ割りしましょう!」

そういうと、海辺を探し木の棒を持ってくるうみ。目隠しがわりにタオルを使い、ぎゅっと目を隠すと、棒を持ち仁王立ちする。

「よし!釣り師ニキ、お願いします!」

「おう。置いたぞ」

ワタルがスイカを砂浜に敷いたシートの上に置くと、少し離れる。コメントの読み上げ機能をオンにし、視聴者から指示を受ける。

『もう少し左』『まっすぐ3歩』『10時の方向、今だ叩け』

「そおい!」

「うおおお!?!お前ら俺の方に誘導すんじゃないやねえええ!?!」

なにやら釣り師ニキの悲鳴が聞こえる。しかしスイカの手応えはない。

「あちや、失敗しましたか。すみません皆さん、もう一度お願いします

！」

『任せろー(バリバリ)』『そのまま走ってみようか』『振り回しながら行けば当たると思うよ』

「えっ、そんなに遠くに行っちゃいました？わかりました、そりやああああ！」

「お、お前らあああ！うみちゃん止まってええええ！」

砂浜に、少女に追いかけて回される男の悲痛な叫びが木霊するのだった。

「あはは、すいません釣り師ニキ……」

散々追いかけて回されたワタルだったが、どうにか読み上げ機能をオフにし、説得することによってやくうみを止めることに成功した。互いに走り回り疲れたため、パラソルを立て影で休む。

ライ達ポケモン組はまだ海で泳ぎ、波に乗り遊んでいる。

「まったく、すげー疲れたわ……あいつら元氣すぎるだろ……」

「まあ、結構行動力高い子達ですもんね」

『いやー笑ったわ』『ざまあでした本当にありがとうございます』『でもなんかマジモンのカップルの絡み見せられたみたいで草枯れる』『やめろ……やめて下さい……』

コメント欄も落ちて着いてきたのか、先ほどのような大騒ぎではなくなっている。

「にしても、うみちゃん結構アクティブだったんだな」

「別に外で遊ぶのは嫌いじゃないですからね。それにライ以外にもポケモンが結構いるんで、外に散歩に行くことも多いんです」

『まー現状一番強いポケモン使いだもんな』『最弱は？』『チャラ男』『本当のこととはいえ酷くないっすか!』『2番手は釣り師ニキかな?』『じゃあワンツートップの海水浴か』

コメント欄では誰が一番強いポケモントレーナーかという談義に入る。それを見ながら、ワタルはうみにボソリと呟く。

「・・・ありがとな」

「え？」

「ミニリユウ。俺じゃあ助けられることはできなかつただろうし。何より、あの時うみちゃんがいなければ俺死んでただろうし」

『え、どゆこと？』『うみちゃん上京の時になんかあつたっぽい？』『マジかよ、俺もポケモン探してくるわ』『また死者が出るぞー』『119にはあらかじめ連絡しとけよ？』

ワタルはミニリユウの方を見たままうみにありがとうと呟く。改めて感謝を述べるワタルに一瞬キョトンとしたうみだったが、すぐにふわりと笑う。

「ありがとうはこっちのセリフですね」

「え？」

予想外の言葉にキョトンとするワタル。うみはライとミロを見ながら、嬉しそうに呟く。

「最初は俺以外にポケモンを持つてる人どころか、ポケモンを信じてくれる人もいなかっただすからね。正直、結構心にきてましたよ」

そう言つて笑ううみだが、ワタルは複雑な顔になる。

かつて配信を見ていた者達の中でも、その頃はうみを何か闇を抱えて何処かおかしくなつた少女程度にしか考えていなかった。ポケモンを実際に見て、配信でもライを見てようやく信じることとなつた身としては、それまでのうみの孤独感は他人である自分にはわからないだろう。

「でも今は、俺以外のポケモンを持った人もいますし、コメントでも信じてくれる人が増えてます。わかってくれる人が増えて、配信をして、新しいポケモンに会つて。そういうった毎日が何より楽しくてたまらないんです。理解者つて、本当に大事なんですよ」

『俺たちもいるぞ』『俺も今は信じてるぞ』『俺も、もううみちゃんのファンやで』『俺はライニキのファン（異端）』『お、ナカーマ』

「・・・へへへ、ありがとうございます」

視聴者が海の発言を聞いてコメントで励ます。照れ臭そうに笑ううみを見て、ワタルも無意識に微笑む。

「ラーイ！」

「あ、ライが呼んでますね。釣り師ニキはどうします?。」

「俺はもうちょい休んでくわ。うみちゃん先に行つていいよ」
「わかりました」

ライ達の元へと走っていくうみを見送るワタル。

『今更だがポニーうみちゃんも可愛いな』『それな』『わかるマーン!』
『銀髪美少女と海に2人きり...』『何も起こらないはずがなく...』
!』『その場合俺は仲間を1人しよつぴかなければならなくなるんだ
が』『警察ニキ殺意高いな今日』

「ああ、うみちゃん忘れてったのか・・・」

ワタルがふと横を見ると、カメラが置きっ放しとなっていた。カメラを手に取りじつと見るワタル。

(・・・恩返しというわけでもないが、せめて俺は何があっても味方でいてあげたいな)

心の中でそう決意しつつ、うみ達の元へと向かうのだった。

「今日はありがとうございました!今日の配信は終わります!次回もお楽しみに!」

『乙』『乙カレー』『うみちゃんが楽しそうで何より』『釣り師ニキ覚えとけよ』

配信を終わり、機材とカメラを片付ける。ライ達はまだ遊び足りないのか、海から全然帰ってこない。

「おーい、帰るよー...今日はありがとうございました、釣り師ニキ」
「いや、こっちも結構楽しめたからいいよ」

ライ達を呼びつつワタルへと礼を言ううみ。ワタルは手を振りながらにへらと笑う。

そんな2人の元に、ライ達がやってくる。しっかりと遊んで満足げなポケモン達を連れ、砂浜を歩く。

「じゃあここで。今日は楽しめたよ、また今度、対策課で会おう」

「はいーじゃあ、気をつけて！」

更衣室で着替え、駐車場でワタルと別れるうみ。バイクに乗り、ヘルメット越しに笑いながら手を振るワタルとその背中で尻尾を振るミニリュウに見えなくなるまで手を振り、バス停でバスを待つ。

「・・・今日も楽しかったね」

「ライ」

ベンチに座り、ライを撫でつつしみじみと呟くうみ。気持ちよさそうに目を細めるライを撫で続けていると、バスがやってくる。

「・・・？」

バスのドアが開き、足をタラップにかけた時だった。

(・・・声?)

どこか悲しげな、それでいて綺麗な鳴き声のようなものを感じ海を見て立ち止まるうみ。

「どうしましたかー？」

「あ、いえ・・・乗ります」

バスの運転手に声をかけられ我に帰ったうみ。なお海が気になるが、すでに声は聞こえなくなっていた。

ただの気のせいかな、と思いながらバスに乗り込むのだった。

—————

配信者うみちゃんを布教するスレ

123：名無し

いやー、今日は神回だったわ

124：名無し

水着！うみちゃんの水着！

125：名無し

ポニーテールという普段しない髪型だったということも忘れるな

126：名無し

とにかく可愛かった。今回たまたまはいえリアルタイムで観れ

てよかったわ

127：名無し

くそう！仕事が入らなければリアルタイムで観れたのに・・・！

128：名無し

リアルタイム視聴者勢の俺高みの見物

129：名無し

散々遊んだ後にポニーテールを結びなおしてるうみちゃん>>2

3：45

130：名無し

有能。いやまじで

131：名無し

首筋！最高ですありがとうございます（死去）

132：名無し

口にくわえたヘアゴムとかちよつと上目遣いなところとか、ここ好きポイントの宝庫やないかい（歓喜）

133：名無し

ところでこのイケメンは誰ぞ？

134：名無し

釣り師ニキ。古参の一人で、今は貴重なポケモン持ちの一人。うみちゃんを除いてはじめてポケモンを手に入れた人でもある。

135：名無し

クツソ羨ましいんだが

136：名無し

他のスレから興味惹かれてきた勢だが、何このてえてえの塊

137：名無し

それがうみちゃんやで・・・

138：側溝ピエロ

ハイ、ジョージイ・・・うみちゃんの動画、観てる？

139：ジョージイ

（首を振る）

140：側溝ピエロ

oh・・・面白いから、ぜひ観てきなよ

>>URL「うみちゃん動画総集編」

141：ジョージ

・・・そうやって実は可愛いだけで動画は微妙なんやろ。

騙されんぞ

142：側溝。ピエロ

たしかに最初期のうみちゃんは口下手でお世辞にも上手いとはいえない。でも、回を追うごとに成長していくうみちゃんはとてとてもえてえし、何より彼女は可愛い。

143：ジョージ

ああそう、有名配信者見てくるわ

144：側溝。ピエロ

待てや！

145：側溝。ピエロ

ほら、この画像をご覧

>>水着画像

146：ジョージ

なんやこれ！くそ可愛いやんけ！

147：側溝。ピエロ

exactly！（もちろんでございます！）

ほら、可愛いだろう？こんな子の面白トークが見れるんだぞ？さあ見て

148：ジョージ

（疑わしいものを見る目）

149：側溝。ピエロ

oh・・・まだ疑ってるね？

おほっ、すごい顔。

150：側溝。ピエロ

でもうみちゃんは基本視聴者とお話する相談配信がメインの配信者だから、実は最初期とは比べ物にならないくらいおしゃべりしてくれるんだよ。しかも初見にこそ優しいし、最初から変わらずずっと

謙虚だ。

151：ジョージ

初見でも相談しやすい？

152：側溝ピエロ

えっ、うん・・・。

とにかくうみちゃんはいいぞジョージ・・・

153：側溝ピエロ

そうだ、手を伸ばして・・・

154：側溝ピエロ

かかったな！お前もうみちゃんの沼にハマるんだよ！

155：ジョージ

あああああああ!!!

156：名無しの神父

そうして、>>155はうみちゃんリスナーとなった。

157：名無しの神父

動画の周回から永遠に抜け出せないループに陥ってしまったのだ。

158：名無しの神父

そうしてどうやっても抜け出せないのです、そのうち>>155は、
考えるのをやめた。

もうやだ

159：名無し

なにこれ

160：名無し

ただのおふざけだろ。気にしないでいいぞ

161：名無し

そんなことよりうみちゃんについて語ろうぜ

—————

とある北欧の森の中。夜になり、暗くなったその森では、今までにないほど凍てつく寒さが森を支配していた。異常なまでの気象に、既存の獣は皆逃げ出し、残っているのは逃げ遅れたもの達のみだった。

そんな極限の環境と化した森の中を、悠然と歩く影があった。その姿は、まるで鹿のようでありながら、青を中心とした体色はただの生物でないことを示していた。そのツノは無数に枝分かれしており、そのツノは水色をしていた。

『……』

と、歩いていたその影は立ち止まる。目の前には、寒さに耐えられず弱り、瀕死となったトナカイがいた。それを見た影のツノが金色となり、さらには無数の宝石のようなものが増え始める。

『……！』

そうして影は力を高め、そのエネルギーを解放する。すると、死にかけていたトナカイが光に包まれる。光が収まると、突如そのトナカイは先程までの様子が嘘のようにガバリと起き上がると、一鳴きしてものすごい勢いで走り去る。

『……』

それを見送った影は、ツノから漏れていた光を消し、もとの水色へと戻す。

そうしてしばらく空を眺めていた影はやがて、森の奥へと消えて行くのだった。

第23話

翌日の朝。配信を夜から行うことにし、その旨をSNSで事前に通知していた時だった。

「……ん？」

メールのアイコンが点滅し、新着受信があることを示していた。

「どれどれ……って誰だろう。この人」

メール画面を開くと、見たことのないアドレスからの受信だった。

普段から配信を見た人や配信では時間がなくて語れなかった人などからメールを受けることがあるうみ。しかし最近は古参の視聴者からのメールが多かったため、見慣れないアドレスに首をかしげる。

「うーんと……相談ではないのか……って、え？」

そこに書かれていた内容は、ポケモン関連の相談というわけではなかった。しかしうみはその内容に驚愕する。

「配信者グループへのお誘いとコラボ……？」

そこには、うみですら知っているような知名度の高い配信者達が所属しているグループへのお誘いが書かれていた。

「詳しくは、折り返しのメールでの返事の後で説明します、返信お待ちしております。う、うーん……」

悩むうみ。配信者としての活動を続けてだいぶ時間が経ち、少しずつリスナーを増やしてきたことで、最近ようやく収入が僅かながら入り始めたうみ。ここでこのグループに参加することができれば、より円滑に活動できるだろう。

「でもなあ……俺コラボとかしたことないしなあ。色々不安もあるというか……」

そう言つて椅子の背もたれに顔を寄せ、くるくると回るうみ。

「……！ そうだ、とりあえず返事は後にして、今日の配信で視聴者にも聞いてみよう！」

とにかく今は配信の用意！と気分を切り替え、リュックへと荷物を詰めていくのだった。

「はいどーも、うみです。今日は、ネットで有名な心霊スポットへとやって来ました」

『わこつ』『今日は相談室休みか』『なんかアクティビティで新鮮』『舞ってた』『そのまま舞ってろ』

配信を開始した直後に既に視聴者が100を超える。最近になって加速度的に配信の視聴者が増えておりホクホク顔だ。

「はい、今日は相談室ではなく、いわゆる肝試しってやつをやるうと思
います」

『肝試しかー』『夏の終わりが近いからか、色々やるなあ』『いいぞいいぞ、面白ければなんでも』

「はい、今私がいるのは、〇〇県で有名な幽霊が出ると噂の廃墟となつた別荘にやってきました」

『あーあそこか』『え、怖・・・』『今日は見ない方がよさげな気がしてきました』『うみちゃんの悲鳴聞きたさでワイは残るで』

何人かの視聴者は怖さでみるのをやめておくようだ。そこでうみは、ニヤリと笑うと大げさにためいきをつく。

「そうですね・・・はーああ、残念です。皆さん男らしい度胸のある人たちだと思っていたのに、実はお化けや心霊が怖くてネット越しでも見ることに出来ないような人たちだったなんて。ああ、気にしないでください。誰だって怖いものは怖いですよ。すいません、俺の配慮不足でしたー・・・では今日の配信はやめにして俺だけでちよつと見てきますかねー」

明らかな棒読みのセリフだったが、その効果は絶大だった。

『別荘に・・・行こうぜ・・・ひさびさに・・・キレちまったよ・・・』『初めは今日も尊いと思ってたけど、なんかだんだん腹たってきたわ』『いくらうみちゃんでも言っていることと悪いことがある』『野郎オブクラツシャー!!』『こいよ亡霊、存在感なんて捨ててかかってこい!』『こいで燃えなきや男じゃねえつてなあ!』

コメントが怒りとやる気に溢れる。一部冷静な人もいるようだが、大体の視聴者はうみのかけた発破でやる気MAXだ。

そんな視聴者を見てくすりと笑ううみ。

「……流石ですーさあいきましようー幽霊を見るために！」

『ところでうみちゃん、本当の目的って何なの？』

「ん？」

しばらく歩いたところで、コメント欄にそんな書き込みがでる。

「……何のことでしょう？警察ニキ？」

その相手、警察ニキことタケシのコメントに笑みを絶やさず答えるうみ。

『なんだなんだ？』『警察ニキ？』『どーいうことだ？』『いや、やっぱり何でもないや』

「……！」

と、突然スマホに着信が来る。配信中であるため一度お花摘みに行っていくると言い、連れてきたライにカメラを渡し離れるうみ。

「はいもしもし」

『何が目的なんだうみちゃん』

電話に出ると、開口一番質問するタケシ。いつものおちやらけた声ではなく、真剣な声だ。

「ただの肝試しですよ？別に警察のお世話になるようなことはしないのでいいでしょう……」

『そこで人が二人、行方不明になっていることを分かって言ってるのか？』

「……」

『凶星か』

そう、現在うみがやってきている別荘はごく最近、行方不明事件が発生した廃墟なのだった。タケシは少し怒りの混じった声色でうみに問い詰める。

『もしうみちゃんも同じように行方不明になったらどうするんだ？ライがいるから安全か？』

もし何か危険が起きたとして、それをライや他のうみちゃんの持つポケモンで全て対処できると？そもそも廃墟への侵入なんでもつてのほかだ。今すぐやめて、家に帰りなさい』

「その行方不明事件が、ポケモンの仕業の可能性があっても、ですか？」

『・・・何だと？』

驚くタケシに、今度はうみがまくし立てる。

「ネットでこの廃墟については調べました。病気の子供を持つ富豪が住んでいた別荘で、子供が死去した後は手入れもされず、土地の相続権も曖昧になっていること。なぜかこの土地を買い取った人が皆原因不明の事故で大怪我をしていること。それらを調べたうえでの行動です」

『だとしても危険だ、せめてこちらとの連携を・・・』

「・・・まだ対策課の方にも言ったことのない話ですが、ゴーストタイプのポケモンに共通するものって何か分かりますか？」

『・・・いや』

「簡単に人を殺せるということですよ。・・・一応言いますと、能力や技といった話ではなく、殺害に対して躊躇しないポケモンが多い、ということです」

『・・・!?!』

これはゲームでも凶鑑で示唆されていた話である。初期の頃からいたゴーストタイプポケモンに、「ゲンガー」がいる。凶鑑によると、「突然寒気に襲われたらゲンガーに狙われた証拠。逃げる術はないので諦める」「実は人の成れの果てで、道連れを作るために人を襲う」と言った記述がある。

これが意味するのは、すなわちゲンガーは人を当然のように襲い、尚且つ殺してしまうということだ。

「そういったポケモンの存在を秘匿するのは、むしろ危険です。隠してしまったことで被害が拡大しては後の祭りです。早期発見と迅速

な対応が大事なんです・・・もしこれがただの遭難だったり事故で意識を失っているとか、ポケモン以外の要因ならそれはそれで良いことです。ですが、もしこれがポケモンによる事件だったら？もしそのポケモンが都市部へと移動してしまったら？」

『・・・』

うみの言葉に黙り込みタケシ。そんなタケシに、うみはダメ押しという言葉を告げる。

「何より、・・・あまり言いたくないですが、警察ニキや釣り師ニキは、まだポケモンバトルの面で弱い」

『・・・っ！』

携帯越しに息を飲む気配がする。実際のところ、ゾロアーク相手に時間稼ぎができたといっても、所詮それはあくまで時間稼ぎであり、勝利するのは不可能だった。

「なら俺が対応できる範囲にいるタイミングでどうにか捕獲、最低でも撃退からの説得くらいするべきでしょう？」

『・・・』

うみの言葉に、黙ったままのタケシ。内心ではうみに危険を冒して欲しくないし、できることなら直ぐにでも向かいたいところだが、タケシにも自分の仕事がある。

『・・・なら配信でそれを視聴者に見せる理由は？』

「最近リスナーのポケモン探しがエスカレートしてるんです。ポケモンだけじゃない、むやみに森だったり廃墟だったり危険な場所に行くような人が増えるのは、純粹に危険です。それに、『ポケモンにはこういった危険な面もある』ということをしつかりと理解してもらいたい機会だと思ってます」

うみの主張に何も言わないタケシ。と、ため息とともにゆっくりと喋り出す。

『・・・ゴーストタイプポケモンについての話はまたゆっくりと聞かせてもらうよ。・・・一応こっちで配信を見ておくから、何かあったらすぐに向かう。それと・・・気をつけてな』

「・・・はい！」

タケシとの通話を切り、ライの元へと戻るうみ。パソコンを受け取ると、配信が終わってないことを確認する。

「すみません皆さん、遅くなりました」

『おつ、放送事故終了?』『帰ってきたー!』『大丈夫?』『ちくわ大明神』『気分悪かったらやめてもいいんだぞ?』『おい誰だ今の』

視聴者も若干減っているものの、残った人達の心配の声を聞きつつ、うみは微笑む。

「それでは行きましようか」

「中は思ったより綺麗ですね」

廃墟となった別荘へと入ったうみ。どうやら本格的に壊れていたのは玄関までだったようで、中はとても廃墟とは思えないくらい綺麗だった。

『おい、もう帰ろうぜ』『なんだよ、ビビってんのか?』『いやそういうわけじゃねーけどよ』『おばけ嫌いマンか!?!』

「俺は幽霊やおばけはあまり信じないですけどねえ。いるかもわからないものに怯えることないですよ」

『いまだに存在が不思議すぎるポケモンの第一人者がなんか言ってるよ』

コメントと会話しつつ周囲を見渡していると、玄関正面の廊下の奥から、何かの割れるような音がする。

『!?!』『なんか居るのか!?!』『やっぱ帰ろうやうみちゃん。なんかやばいって』

「・・・いえ、行きます」

まじか、とかやめたほうが、というコメントを無視し、突き進むうみ。ライは廃墟に入った時からなにやら戦闘態勢になっている。

(・・・)、本当に廃墟か?)

うみは廊下を進みつつある違和感を覚える。

調べて分かったことだが、この廃墟は少なくとも10年は貫い手が

おらず、土地を持っている者も手をつけていない。にもかかわらず、廊下にはポツポツと小さな明かりを灯す蠟燭が光源として配置されており、埃や塵一つなく掃除の行き届いた廊下。

それらの不審な要素を鑑みて、うみは確信する。

(ここには「なにか」が住んでいる)

少し垂れてきた汗をぬぐい、うみは奥へ奥へと進んでいくのだった。

—————

「・・・誰からだ？」

「うみちゃんです」

スマホで動画を見ていたと思ったら真顔で部屋を出て行ったタケシ。戻ってくると、キョウに話しかけられる。

「なにがあった？」

「うみちゃんが現在、ポケモンがいると思われる廃墟へ単身乗り込んです」

「・・・」

その言葉に険しい顔になりながら目元を押さえるキョウ。

「あの子は自分の立場つてものを理解しているのか？」

「少なくとも俺らの考えてることよりは考えてないでしょうね」

自分のデスクに顎を寄せ複雑な表情を浮かべるタケシ。先程許可を出したばかりであるが、すでに撤回して帰らせたいところである。

「今あの子に何かあれば、ポケモンとの共存どころか、ポケモンに滅ぼされるぞ」

そう言つてタバコを啜えるキョウ。現在ポケモンを持つ存在、つまりはポケモンへの対抗策と言える人物は数名いるが、うみはその中でもダントツの実力を誇る。更には他のどの人材、科学者でもわからないポケモンの生態に通じているのも彼女だけである。

「そんなあの子がいなくなったなんてことになったら、まじでこの先地獄っすねー」

そう言つて傍らにやつてきたズバットを撫でるタケシ。未だ険しい顔をしていたキヨウだったが、スーツをひっ掴み立ち上がる。

「やはり危険だ、俺がうみちゃんを連れ戻してくる」

「・・・言つて聞くような子でもないでしょう？」

「力づくで連れてくる」

ライという存在を加味してなおそう言い切るキヨウにある種の尊敬の念を抱くタケシ。対策課を出て行くキヨウを見送りつつ、パソコンを起動してうみの携帯の位置情報を調べ始めるのだった。

—————

「なんだこのふざけた報告は?！」

机をバンと叩きながら、男は怒りのままに絶叫した。その手に握られているのは、ゾロアークが暴れたことによる被害と現在の復旧状況、そして警察——外来種対策課から送られてきたポケモンに関する報告書であった。

「警察はいつから妄想癡を患うようになった!?ポケモンだと?冗談にしても馬鹿馬鹿しい!それに関する取り締まり法案を検討してくれだど?ふざけるな!まずポケモンがなんなんだ!私はこのような報告書を読むためにここにいるのではない!」

もはやおこを通り越して激おこである。そんな男に、恐る恐る秘書が進言する。

「で、ですが・・・実際にこの報告書と、目撃されたという謎の外来種に関する情報は一致しております」

「だからなんだ!外来種が火を吹いたとか、その火が実は幻影だったとか、そんなタチの悪いSFじみた話が本当にあるとでもいうのか!」

「しかし、たしかに実際の火事被害と、確認されていた火の回っていた地帯との違いは明らかです。まるで最初から火なんて点いていなかったかのような・・・」

そんな秘書の言葉に黙り込み座り直す男。

「・・・だがどうしろというのだ。実際にそのような生物がいたとして。火を吹く怪物をどう取り締まる!どのように法案を作ればそれが出

来る！いやそもそも、警察程度の装備でどうにかなるのか！」

そう言つて頭を抱える男。すると秘書が一枚の報告書を取り出し読む。

「あ、その件に関する報告も上がっています。『検証の結果外来種、仮称ポケモンに対抗するには、警察の装備ではまず不可能である』」

「ダメじゃねえかあ!!」

もう頭を机にバンバン打ち付ける。そんな激おこぶんぶん丸な男にオロオロしつつ、何か朗報はないかと書類を漁る秘書。

と、ある報告書にそれらしき情報を発見する。

「・・・あ！で、『ですが、現在対策課の設置に伴い、ポケモンに関する見識者との協力関係を結ぶことに成功している』、とのことですよ！」

「本当か！」

ガバリと起き上がる男。その道のプロがいるというなら、その話を元にどうすれば良いかを考えられる。一筋の光明を見出した男は、オーバーなくらいに嬉しそうにし、秘書から書類を受け取る。

「なになに、『見識者名：うみちゃん』・・・ちゃん？げ、『現在動画配信者として活動中の推定年齢13歳』」

そこで男は再度机に突っ伏したのだった。

その夜、男のいる事務所に怒りの叫びが響くのだった。

—————

「・・・はいそれでは、街を歩く若者に、現在起きている外来種事件について聞いてみましょう！あ！その男性の方ー！」

「・・・え？俺ですか？」

『はい！最近外来種による事件事故が多発しておりますが、そのことについてどう思います？』

『え、あ、えーとポケ・・・外来種の事件やら事故の被害者には申し訳ないですけど、外来種にだつてきつと人と仲良く出来る奴がいると思えますよっ。』

『なるほどー！おや、ずいぶんかわいいぬいぐるみですね！彼女へのプレゼントでしょうか！』

『い、いやー、自分がこういうの好きで。あ、あははは・・・』

『ほうほう、意外な一面。それではありがとうござい……え、なにこれ！動いてる?!』

『あつ、やつべー！ミニリュウ落ち着け!』

『な、なんですかそれ！おもちゃ!?!』

『フウ!』

『嘘！鳴いた!?!』

『えーと、あ、あーもう！すいません失礼します!』

『あ！ちよつと!…さ、先程のあれは一体なんだったのでしょうか、彼を追ってみましょう!』

とあるニユース番組収録より

森の中、うみが入っていった別荘の外。暗い夜の帳が下りたその中を、縦横無尽に飛び回るポケモンがいた。そのポケモンは、夜の森を楽しげにフワフワと飛び回る。

ふと、そのポケモンは別荘を見つけフラフラ入って行く。そのポケモンは、中に入ると姿を変えてゆく。

薄いピンク色だった小さな体は全体的に黄色くなり、長く細かった尻尾は根元が茶色で残りが黄色の稲妻のような形をした尻尾となる。耳も伸び、これまた黄色く、先の方だけ黒くなる。頬には赤い電気袋ができ、もはや元の姿の名残は透き通るような青色をした瞳だけだった。

「ピツカア!」

嬉しそうに一声鳴くと、そのポケモンは奥へと進むのだった。

時を同じくして、森の中から更にポケモンが別荘の前へとやってきていた。

全体的に緑色の体に、背中に生えた虫のような羽。ヒラヒラと飛ぶ姿は、まるで緑の妖精である。じっと別荘を見つめるその顔には、憂慮の表情が浮かぶ。

「レビー!」

そのポケモンは、何かを感じたのか慌てて別荘の中へと入って行くのだった。

――
そんな二匹のポケモンが別荘に入って行く姿を、そっと見ているポケモンがいた。

星のような黄色い頭に、青い短尺のようなものをひっつけ、振袖のような手をモジモジとさせながら別荘を見ている。

「~~~~~！」

しばらく別荘の前をうろうろしていたポケモンだったが、ふと背後から騒音が近づいてくる。

「!?」

慌ててポケモンは木の陰に隠れる。やってきたのは、黒い車だった。車が停車すると、中から男が一人下りてくる。男は廃墟となり、不気味な雰囲気醸し出している別荘を険しい顔で見上げると、やや早足で入って行く。

それを見送ったポケモンは、なおも躊躇い玄関でオロオロしていたが、やがて決心がついたのか、フワリと中に浮かび、別荘へと入って行くのだった。

第24話

森の中に立つ廃墟と化した別荘へとやってきたうみ。中に入り、物音の原因を確かめるため奥へと進んでいた。

「ここは……」

廊下の突き当りのドアを開けると、そこはまるで中世の世界に入り込んだかのような豪華な部屋だった。長いテーブルに燭台が等間隔で置かれ、上座の後ろには立派な暖炉がある。

「貴族みたいな暮らしでもしてたのかな……にしてもこれは流石にどうなんだ？」

テーブルを撫でながらうみは困惑する。テーブルクロスが敷かれた机には、埃もチリもなく、すぐにでも使えるような状態だった。

「……次に行こう」

食堂を抜け、先に進む。ドアを開けると、すぐに廊下があり、またしても蠟燭で照らされ、不気味な雰囲気ながらも先が見えるようになっていた。

「ライ、何か感じる？」

「ライ……」

横を歩くライに尋ねるも、申し訳なさげに首を振るライ。

『なんか結構綺麗だな』『これ本当に廃墟か？』『実はだれか住んでるとかじゃね？』

「個人的に調べた範囲の話ですが……ここは10年ほど前から買い手もおらず完全に放置されています」

そう言って廊下の中程まで歩いた時だった。軋むような音を立て、前方のドアがゆっくりと開く。

息を飲むうみと警戒心を強めるライ。一方のコメント欄は、阿鼻叫喚だった。

『!』『気のせいだよな？今勝手に開いたが』『ハハハ、やっぱいるんじゃない誰か。なあそうだろう？そうだと行って……』『こ、こんな配信見てられるか！俺はコ口と戯れてくる！』『農家ニキエ……』『まあ、

いい奴だったよ』

「・・・行きましよう」

ゆつくりと近づき、開いたドアの向こうへと行くうみ。するとそこには、立派なソファと、大理石の彫刻や何やら高そうな絵画の飾られた部屋があった。

「ここは・・・見た感じ応接室のようなものですかね」

『やっぱここも綺麗なのな』『なあ、ここまできたら流石におかしいと思うんだが、これ本当にヤラセとかドツキリとかではないんだよな？』『ばつかやろうお前、うみちゃんがそんなことするわけねえだろ』

『だよなー。そもそも俺らにドツキリ仕掛けたところでって話だし』

「はい、まあヤラセじゃないです。実際見に来たのは初めてですが、まさかここまで綺麗なままとは思いませんでしたけど」

(ドツキリ・・・っぽいことはしようとしてるからなんとも言えないけど)

応接室の中に入り、一通り周囲を見渡した時。

「っ、びつくりした・・・」

『うおおおおえええああああ!!』『おいうみちゃんドア閉まったぞ!!』

『幽霊に閉じ込められた!』

流石に急に閉まる扉に驚くうみ。コメントが慌てているが、それを見てキョトンとするうみ。

「?でもライが居るから最悪の場合ぶち壊せば出れますよ?」

「ライー!」

『あ』『あ』『あ』『あ』『あ』

コメントが「あ」で埋まる。そんなくだらない事をしつつ応接室を調べていると、ライが何かを見つける。

「ライー!」

「どうした?・・・これは」

『なんだなんだ?』『写真立てか』『見えね』『うみちゃん何が写ってる?』

ライが持ってきたのは相当古くなった木製の写真立てだった。そこに写っていたのは、ベッドの上で微笑む少女と、家族と思われる男

女二人と男の子だった。少女は笑っているが、他の人達は何故か笑い
つつも泣いているような表情だ。

「ここに住んでいた人でしょう。でもなんでこんな写真が残っている
んでしょう?」

『何らかの理由で持って行けなかったとか?』『夜逃げとか?』『こんな
でかい家住んで夜逃げとかある?』『そもそも家族写真って人にも
よるけどかなり大事なものの部類に入らね?』

コメント欄でも色々と考えられているが、全く見当もつかない。

「……とにかく後にしましょう。このまま考えていたらちがあきま
せんし」

そう言って写真立てを目の前にあったテーブルの上に置き、カメラ
を持ち直す。

『……で……おい……で』

「!」

立ち上がった瞬間、背後から聞こえたか細い声に驚き、振り向きな
がらバックステップで距離を取る。そこには誰もおらず、先程と変わ
らない室内が広がるのみだった。

『うみちゃんどした?』『なんかあったっぽい?』『幽霊か!』

(……視聴者には聞こえていない。映像越しでは気づけないのか、小
さすぎて声カメラに入っていないか。それよりも……)

うみは頬を伝う嫌な汗を拭いながら、入ってきたドアの対面にある
ドアへと向かう。

ノブを回すが、ドアが開く様子はない。

「……ここは開きませんね。一旦玄関前まで戻りましょうか」

『ありゃ』『壊していくのかと思ったわ』『まあ最終手段って言ってたし
?』『それよりこんな廃墟を夜に探索できるうみちゃんのつよつよメ
ンタル俺も欲しいわ……』

そうして、玄関前まで戻ってきたうみ。そこで立ち止まると、真剣
な表情で息を吐く。

「……どう思いますか?」

『これは……』『まずいですよ!』『いやああ増えてるうううう!』

うみが見下ろす先には、自身が入ってきたときについた靴の泥跡。その横には、入ってきたときにはなかった靴跡が増えており、またなにかの動物が通った足跡までできていた。

「……二階に行きましよう。やはりここには何かあります」

『やはり……?』『いやああ幽霊いやああああ』『まじでやばくなってきたなこの配信!』

軋む階段を気をつけながら登るうみ。二階に上がるとまず見えたのは、二つのドア。そして、突き当たりを曲がると今度は他のドアよりもだいぶチープなドアがあった。そのドアだけは、なぜかピンク色であり、小さな木の看板が垂れ下がっている。

「……『ゆかのへや』、ですか」

『ゆかつてあれか、写真にいた……』『ああ、あの幸薄そうな美人の女性か』『ちげーだろうが。ベッドで微笑んでた少女の方だろJK』『ワイトもそう思います』『さまよえる亡者はそう思いません』『お前ら出てくると本当に亡霊出てきそうで怖いから来ないで』『ワイトキングもそう思います』『カエレ!』

「……とりあえずまずは手前の部屋から調べてみましょう」

そう言っとうみが振り返ったときだった。

「……」

「……」

「……!?!な!?!」

『出たああああ!!』『まじか!?』『二体いるうう!?!』

階段を上がりきったところ、廊下の向こうに、二人の男が立っていた。無表情で、感情の見えない瞳がこちらを凝視している。

「だ、誰でしょうか?この別荘の管理者でしょうか?」

万が一、一般人であった場合のために一応確認をするうみ。ライもまだ電撃を放つ寸前で止まっている。

「……」

「……」

「……何か言ってくれるとありがたいんですが」

うみが、黙り続ける二人の男にそう言うと、男たちが突如笑い始め

「むーっ、むーっ！」

「しっ、うみちゃん、俺だ」

捕まったことでパニックになり、逃げ出そうともがくうみ。すると、聞き覚えのある声がする。落ち着いて見上げると、そこにいたのはキョウだった。

「キョウさん!? どうしてここに?」

「それは・・・! 静かに、奴らがくる」

い二人が息を潜めたタイミングで、ゴース達に操られた男達がドアを蹴破って入ってくる。

「あー」

「うー」

(たのむ・・・! そのまま行ってくれ・・・!)

必死に息を潜める二人。すると男の一人がうみ達の隠れるダンスへと近づく。

(・・・!)

男がダンスの取っ手に手をかけ、うみをかばいながらキョウが体当たりする準備をした時だった。

『こつちだ変態!』『うみちゃんに手を出すな!』『児ポ法で捕まれ!』

『お前のかーちゃんべそ!』『しょーもないな!』『ちくわ大明神絵巻』『だれ・・・なんだ今の!?!』

キョウに引つ張られたタイミングで落としたスマホから、コメントの読み上げが聞こえる。

それを聞いた男達は、ダンスを離れスマホを拾うと、どこかへと行ってしまった。

「・・・ふう、もういいだろう」

「あの・・・ありがとうございます。でも、なんでキョウさんが?」

ダンスを出て、まずお礼を言ううみ。うみの質問に顔をしかめたキョウは、軽くうみを小突く。

「いたっ!」

「なんでじゃないだろう。全く危険なことをして」

「うう・・・すいません・・・」

自分に非があることを自覚しているうみはすぐに謝る。キョウもそこまで説教をするでもなく、よし、と頷く。

「俺が来たのはうみちゃんを迎えに来ただけだよ。それで玄関に入ったところで、あの様子がおかしい二人組に出くわしてね。残念なことに銃を車においてきていたもんで、仕方なくここに隠れていたってわけだ」

「なるほど・・・」

「それで、ここにポケモンは居たのかい？」

説明を終え、うみへと尋ねるキョウ。うみは頷くと、眉をハの字にする。

「はい、ゴース・ゴーストという、かなり危険な部類のポケモンを確認しました。・・・でも、なんであんな回りくどいことをしているんでしょう？」

「回りくどい？」

はい、と言いながらうみはドアの向こうを探る。

「そのポケモンは人間を操っているんだろう？ならそれは相当危険じゃないか。回りくどいも何もないと思うが」

「ええ、でもあのポケモン達なら、そんなことをしなくても人を殺すことが出来るんです」

「なんだと・・・？」

予想外の言葉に驚くキョウ。ドアを開け、外が安全なことを確認するとライを先頭にして廊下へと出る。

「でもあの二匹は男達を殺すわけでもなく、操ってこちらを襲わせています。・・・どうしてそんなことをしているのかは分かりませんが、少なくとも俺たちへの危害の意志だけはあるみたいですよ」

「・・・とにかく、ひとまずここを出るべきだろう。一階へ向かうぞ」
そう言つて歩き出すキョウをうみが止める。

「待つてください。俺は、まだ帰れません。あのポケモン達がなぜ人を襲っているのか、それを調べるためにここへきたんです！」
「だめだ。どんな理由があれ、まずは此処を出るべきだろう」

そう言うキョウに、ですが、となおも食い下がろうとするうみ。す

ると、耳をピンと立て、ライが奥へ向かって走り出す。

「！ライ!?待って！」

「あ、おい!?!..くそつ、しょうがないか...!」

ライを追いかけるうみを、諦めてついていくことにして追うキョウウ。

ライは階段ではなく二階の奥へと進む。そこには最初に確認したピンクの部屋があった。

「ライ！待って！」

ライはそのままそのドアを蹴り飛ばし、中へと入る。慌ててうみとキョウウも入り、驚愕した。

「...なんだここは？」

「ありえない...他の場所以上に劣化がない...」

そこは、見るからに女の子と言った趣味の部屋だった。置かれている小物は少し前の流行りものばかりだったが、それ以上に驚いたのは、建物自体は経年劣化で朽ち始めていたのに、この部屋だけはまるで今なお住み続けているかのように綺麗だった。

「これまで見てきた場所も大体は劣化が少なかったが...これは不自然すぎる！」

キョウウもタンスやその横に飾られていた花瓶などを触りつつおどろきの声を上げる。一方のうみは、ある場所を凝視して動かない。

「...うみちゃん?...っ!?!」

うみの見ている方を向き、キョウウはこの廃墟に来て一番の驚きを表した。

そこにあつたのは、白骨死体だった。すでに死んで何年も経つだろうそれは、骨となつている以外に劣化が見られず、なおかつ綺麗な服を着せられ、手にはぬいぐるみを持たされている。ベッドの上で眠るように安置されているそれは、ひどく異質で、それでいて不可侵の領域のように思えた。

その異常な光景を目の当たりにし、二人とも言葉を発せない。と、うみがゆつくりと歩き出し、そつとベッドの横にある椅子に座る。

「!・・・キョウさん」

「!」

うみがふと横の机に目をやり、あるものを手に取る。呼ばれたキョウが近づき、手袋を素早く装備し手に取る。

「・・・日記のようだ。おそろくこの白骨死体の子の物だろう」

そう言つて少しずつページを開き、読み進める。

『○○月○○日』

私のせいでお父さんお母さん、それに弟にまで迷惑をかけてしまっている。そんな私自身が許せない。でもみんなが私を治そうとしているのに、私がそれを諦めるわけにはいかない。頑張るのよ私』

『○○月○○日』

今日は片目が見えなくなつた。白く濁つた目玉を鏡で見えてしまい、悲鳴をあげてしまった。みんなが慌てて私の元へとやってきて、ずつと看病してくれる。

ごめんなさい。こんな子に生まれてごめんなさい』

『○○月○○日』

両目が見えなくなつて一ヶ月。とうとう耳までもが聞こえなくなつた。家族の声まで届かなくなるなんて。もう嫌だ、死にたい。これを書かせている代筆のメイドが体にすがるけれど、私にはもうその声が届かない』

『○○月○○日』

ーーーーー どうしてーーーーー もうやだ

ーーーーー ごめんなさいーーーーー ごめんなさい』

『○○月○○日』

弟がとても素敵なものを教えてくれた。点字というもので、これを使えばまたみんなとお話ができる。初めてお母さんに試した時、一緒にお話をした。とても嬉しかった。弟に感謝したし、また希望が持てた。ありがとうと言ったら、「何があつても守るから。みんなで姉様を守るから」と点字で言ってくれた』

『○○月○○日』

今度は声が出なくなつた。その次に指先の感覚が消えたらしい。

ている」

「え!？」

思わず日記を受け取り読み直すうみ。

そんなうみを見つつ、キョウは悲しげな表情を浮かべる。

「うみちゃん。ゴーストタイプのポケモンというのは、ひよつとして幽霊的側面もあるのかな？」

「え? あ、はい、一部のポケモンにはそういうのもあったと思います」
そうか、と言って頷くと、キョウは懐からボールを取り出す。

「・・・成仏させる、というのは難しいかも知れんが、やってみる価値はあるか」

「あ・・・それ、ひよつとして」

ニヤリと笑うと、キョウがボールを投げる。中から光が飛び出し、形を取り始める。

紫の炎を灯した溶けかけのロウソクのような姿のそのポケモンは、うみとキョウを見ると、「ヨツ」と言うように手をあげる。

「最近俺にもポケモンが必要ということで適当に捕まえたんだが、どうだ?」

キョウが振り向くと、物凄い近くで目をキラキラさせたうみがいてギョツとする。

「すごい! ヒトモシじゃないですか! 最後まで進化させれば特殊タイプ一致『オーバーヒート』で全てを焼き尽くすこともできる子ですよ!」

興奮気味のうみに、自慢で見せたのに若干引いているキョウ。そ、そうか・・・とよく分からないながらもスルーする。

「それで、なんでこのタイミングでヒトモシを?」

「ああ、捕まえてしばらくした時に分かったんだが、こいつどうやら道案内をしてくれるみたいなんだ。ここの騒動の元凶の元まで連れて行ってもらおうと思ってな」

その言葉に若干グギギギ、と悔しそうなヒトモシ。

(・・・ひよつとして、ヒトモシとしては生命力を吸い取ろうとしているのにキョウさんが色々(心技体)強すぎてそれができてないから実

質道案内しかしてないオチじゃ・・・)

ヒトモシの情報を読み出し、戦慄するうみ。まさかの可能性に、キョウだけは絶対に怒らせないようにせねば、と意思を固めたうみであつた。

「さて、じゃあ行くか」

「行くって・・・目星とかはついてるんですか？」

うみの質問に、ニヤリとしながら答えるキョウ。

「ああ・・・この少女の弟の部屋。おそらくそこに元凶、もしくはそれに近づくヒントがあるはずだ」

一方、別荘の中に入っていたピカチュウ(擬き)は、のんきに廊下を歩いていた。

「あー」

「!」

と、前方からやってきたのはゴース達に操られた男。慌ててピカチュウ(擬き)は物陰に隠れる。男が通り過ぎ、一安心したピカチュウ()はそつと近くの部屋へと入り込む。

ドアを器用に閉め、ほつと一息つく。その後後ろを向くと、紫のシルエットが目に入る。

「ミュツ!」

あまりの驚きに素の鳴き声が出てしまう。その鳴き声にゆっくりと振り返った紫の影は、ニタニタを笑いながらピカチュウ()を見る。

「ゲツゲツゲツゲツ!」

「!」

その笑いに身震いし、ピカチュウ()は逃げ出す。開け放たれたドアの向こう、逃げて行ったピカチュウ()を追いかける男達を見つつ笑う。

『侵入者・・・捕まえる・・・家族・・・守る・・・姉様・・・マモル』

長い夜の中、戦いの時が迫っていた。

第25話

「うみちゃんはあの日記を読んでいて何か気づかなかったか？」

「操られた男達に警戒しつつ廊下を歩くキョウとうみ。ふと、キョウが尋ねるとうみは首を横に振る。」

「いえ・・・なんで日記の筆者が変わっているの？」

前方を歩くヒトモシを見つつ、キョウが説明する。

「・・・あの日記、最初の記録からあの少女、ゆかという子は一人称が『私』であることはわかった。だが、あるタイミングで一人称表記が『わたし』となっていたんだ」

「でもそれは・・・途中でメイドが代筆している様でしたし、一人称くらいなら変わるのでは・・・？」

「その可能性はまあある。だが、一つ、俺が読んだから分かっていると思うが、発狂文の前の記録を見てみなさい」

「・・・？キョウさん、最後に読んだ文、『みんないる』って・・・どこに書かれてるんですか？」

『○○月○○日』

今度は声が出なくなった。その次に指先の感覚が消えたらしい。もうみんなからのこえも言葉も聞こえない。暗いところに行つてしまいい、わたしから話しかけることしかできない。唯一出来るのは、まだそばにいるか確認することだけ。』

うみが読み返していると、この文で違和感を持つ。キョウが読み上げていた時の最後の一文が見当たらない。

日記を見返しているうみの上から、キョウがページの一番下をなぞる。

「ここをなぞってみろ」

「・・・？あつ！」

そこには、意味ありげな間隔でザラついた汚れがあった。よく見ると、汚れではなく、裏から何か鉛筆のようなものでつついたように盛り上がっている。

「聞いたことくらいあるだろう？点字だよ」

「これが・・・？」

「普通に読んでいればただの汚れやしわと同じようにスルーされるだろうが・・・恐らくだがその前の日記でも言っていたように、弟や母親は点字を使えたんだろう。あえて普通の人ならば点字だとも思わないよう端に書いているところからして、秘密の暗号のような何かかも知れん。ひよつとしたら、これを書いた弟が何か伝えようとしていたのかも知れない」

「でもなんでわざわざ日記に・・・？姉の視力がないなら日常的に日記に触る可能性は低いと思いませんか・・・」

「よく文を読んでみてくれ。前のページでは自分の体のことに関しては「なった」と断定的に話していたが、この文からは声という他者でも判断できるものは断定的だが、なぜか感覚に関しては「らしい」と書かれている。

・・・自分の体のことなのになぜ断定できない？」

「・・・姉本人ではなかった？」

「おそらくそうだろう。弟が見た目だけで様子を書き留めておいたんだろう」

「で、でも、じゃあなんで弟の部屋を探すんですか？母親という線も・・・」

「じゃあ最後。最も俺が弟だと断定した証拠・・・とも言えないが、一つある。

日記の最後の方3ページ、これまで出てきた弟が一度も出ないのはなぜだ？両親は出てきたというのに。それと、その3ページだけ、必ず同じ人間の筆跡だった。メイドの代筆ではそれぞれがバラバラな筆跡だったというのに」

「あ・・・」

驚くうみをちらりと見て、廊下の先、一つのドアの前に立つ。ヒトモシはキョウの肩に乗り、ここで到着だと言うように指差している。「何故か変わっている一人称。点字で書かれた謎のメッセージ。日記から消えた弟。そして・・・先ほどのベッドに積み上げられていた白骨死体の山。そこにあった骨の中に、頭蓋骨は少女のものを除いて

『二つだった』。何故あれだけ家族思いの存在がいたのに弟はいない？

何があっても『みんなを守る』というその決意、少しやりすぎなんじゃないか？

「・・・なあ？ 弟さんよお」

そう言つてドアを蹴破るキョウ。入った先は、必要最低限の物しか置かれていない簡素な部屋。大きな窓から月明かりが差し込むその先に、それはいた。

独特なシルエットに、紫の体。血走つたような赤い目に不快にニヤつく笑みを浮かべた口元。

うみはそれを見て息を飲む。ゴース・ゴーストを見た時からいるのではと想定していたそのポケモンを警戒しながら睨む。

「・・・ゲンガー」

「ゲツゲツゲツゲツゲ!!」

うみのつぶやきに反応したのか、不気味に笑い出すゲンガー。思わずキョウの後ろに隠れ、キョウもうみをかばうようにしてゲンガーを睨む。するとゲンガーの背後に突如人影が見える。その人影は痩せ型のやつれた男性の姿で、足は透けて先がなく浮いているようになっていた。その表情は憤怒に染まり、こちらを睨みつけている。

「あれは・・・弟の霊か？」

キョウが睨みつけながらボソリと呟くと、幽霊がゆらりと揺れる。

『・・・いけ・・・でていけ・・・姉様もみんなも・・・守る・・・出て行け・・・』

シネ』

幽霊がそう呟くとともに、ゲンガーが襲いかかる。ライが迎撃のために飛び出すと、『10まんボルト』を放つ。すると突然横から何かか飛んできて、電撃にぶつかり軌道をそらす。

「ライ!？」

「キュイイイイ・・・」

ライが脅迫しつつ襲いかかるゲンガーの攻撃を避けると、今度は足元から手が伸び、ライを捕まえる。うみとキョウから離すようにその

まま放り投げると、壁を突き抜け隣の部屋へと飛ばされるライ。床から現れたのは、先ほども見た紫の幽霊。そして家具が飛んできた方を見ると、これまた見たことのある球体。

「ゴースト．．．！それにゴースまで！ライ！大丈夫!?!」

隣の部屋から元気な声がし、ほつとするうみ。するとゴーストとゴースがライのいる部屋へと突撃する。隣の部屋からドタドタと戦う音と雷鳴が聞こえる中、ゆらりとゲンガーがこちらを向く。

「！来るぞ、ヒトモシ！」

「ッ！」

ヒトモシがファイティングポーズを構え、迎撃体制に移る。すると、それを見たゲンガーがゆびをくるくると回す。

「なにを．．．!?!」

すると今度は背後に操られた男二人が現れ、うみに襲いかかる。

「しまっ．．．!?!」

「うみちゃん！」

咄嗟にキョウがうみを庇うと、男の一人が持っていた割れたビンで殴りかかる。

「グッ！」

「キョウさん！」

うみの代わりに殴られ、片腕の肉がえぐれる不快な音がする。キョウのうめき声を聞き慌てるうみを突きとばし、キョウは男二人を抱え部屋の外へと放り出す。

「うみちゃん！すまないが、俺はこいつらを相手する！そのポケモンを頼む！」

「！はい！」

キョウの言葉に気合を入れ直したうみは、真剣な表情でゲンガーと向き合う。

そんなうみを見つつ、ゲンガーは笑い背後の亡霊は睨みつける。

「．．．ごめんけど、力を貸してくれ」

「．．．！」

ライ以外のポケモンを置いてきてしまっているため、ヒトモシだけ

が頼りだ。幸いにもヒトモシは気合十分なようで、ゲンガーを睨みつけている。

「ゲツゲツゲツ」

「覚悟しろよ……！お前にこれ以上いいようにさせるかってんだ！」

—————

「ライー！」

一方、ゴース・ゴーストのコンビを相手しているライは、戦いながら一階のエントランスへと戦いの場を移していた。天井に吊り下げられたシャンデリアの上に飛び乗ったライへ向けて、二匹のゴーストポケモンが禍々しい色をした球状のエネルギー弾、『シャドーボール』を放つ。

即座に飛びのくライ。シャドーボールはシャンデリアに直撃し、天井から落ちてくるシャンデリアにゴースト達が慌てる中、壁を走り高速度で接近するライ。

「ライー！」

「!?」

「——！」

その勢いのまま、壁を蹴りゴースト達に飛びかかるライ。ゴーストは驚愕して硬直するが、ゴーストはいち早くそれに気づき、『シャドーパンチ』で応戦する。ライの尻尾の一撃と、おどろおどろしいゴーストの拳がぶつかる。

衝撃波が周囲に広がり、窓ガラスや、花瓶などが割れ散らばる。しかしゴーストは一步も退かず、拳を振り抜く。空中で一回転し地面へと降り立つ。

「……チュウ」

「ケケケケケ！」

苛立つように唸るライに、不快な笑いで煽るゴースト。再度飛びかかるようにしたライだったが、突如視界が歪む。

「!?……!?」

「ケケッ」

一体何が、と周囲を見渡したライは、若干離れた位置にいたゴーストを見つめる。そして即座に、自身が『こんらん』の状態異常であることを認識する。

「ケケ、ケケケケケケケケケケ!!」

「・・・っ、っ、っ」

ここぞとばかりに『シャドーボール』や『シャドーパンチ』、はては『あくのはどう』などさまざまなわざで滅多打ちにする。

時折ゴーストが遠隔で『あやしいひかり』を放ち常時こんらんハメをしてゲラゲラと笑っている。

「ゲゲゲゲゲゲゲゲ!!」

「キユイイイイ!」

ゴーストやゴーストの笑い声を聞きながら、ライはひたすらに嬲られた。そんな中、朦朧とする意識の中でライはそんな自分を他人事のように感じていた。

「・・・なんだこれ。なんでこんなことになってるんだっけ・・・」

「・・・痛い。頭グワングワンする・・・」

「・・・〇〇は・・・どこだろうここ・・・」

「・・・さつきから痛つてえなあ。なんだこいつら・・・」

「・・・こいつらか・・・?こいつらが〇〇をどっかへやってしまったのか?・・・」

「・・・?コロス・・・」

「・・・?!?!」

ひたすらに攻撃していたゴーストが、突如固まり距離をとる。

「・・・お前か・・・」

どこからか聞こえる・・・いや、感じる声に恐怖するゴースト。ゴーストも、本能から危機を感じる。ゆらり、とライが立ち上がる。ゴーストが散々殴り倒したはずなのに、まるで効いてないかのように首をコキコキ曲げる。

『なんで!?あれだけ殴ったのに!?』

『なんで!?こんらんしてるはずなのに!?』

あまりに異質な光景に戸惑うゴースト達。そんな二匹を、ライはハイライトの消えた目で睨む。

「――お前らが、俺の邪魔するのか――」

聞こえてくる謎の声。幻聴だと、おぼけみてえなこととしてんじやねえと心で叫ぶゴースト達。

「……いや、おぼけはお前らやろ。」

「――〇〇して〇〇〇〇にして二度と〇〇〇〇たりできないようにしてやる――」

「~~~~~!?!」

ライの背後に揺れる殺意を幻視したゴースト達は、その後どうなったのかは誰も知らない。

そして、二度とその姿を見たものはいない。

~~~~~

「つと……随分と派手に壊すなお前ら」

二階の廊下にて、男達と対峙していたキョウ。

男達は、普通の人間ではありえないパワーを発揮し、壁を拳で突き抜き、握撃は近くにあった花瓶や甲冑を砕く。

「催眠状態と同じってことか。リミッターが外れてるから常時火事場の馬鹿力を発揮し続けてるってところか」

キョウは襲いくる男達をさばきながら、そう呟く。男達はそれでもなお愚直にキョウに襲いかかる。

「グエアアアア！」

「やれやれ。銃を持ってくるべきだったかな」

キョウの背後にまわった男が襲いかかり、前からは別の男が手近にあった箒をもって殴りかかる。

「甘い。そんなもんで俺をどうこうできると思うなよ?」

後方を確認せず襲いかかる男の顔面をアイアンクローで鷲掴みにする。

「!?!」

操られて意識はないはずの男が「えっ?」というような表情を浮かべる。

「そらああ!!」

「グエエエエ!?」

そのまま驚愕する男を、腕力のみで持ち上げ前方で箒を振りかぶっていた男へとそのまま振り下ろす。まさかの事態に固まってしまった男は、そのまま頭部へと人間凶器と化した片割れをぶち込まれ廊下に倒れる。

完全に意識が飛びぶつ倒れた男達を見下ろし、軽く腕を回すキョウ。

「ふん・・・おまわりさんをなめんなよ?」

いやあんたのようなおまわりさんはおかしい。

「さてと、うみちゃんを助けにいかねえとな」

男達を縛り上げると、うみがいた部屋へと急ぐキョウ。ドアが閉まっていたその部屋へとたどり着き、蹴破り入るキョウ。

「うみちゃ・・・!?!」

そこで見た光景に愕然とするキョウ。そこには、倒れ臥すうみと、その前でニヤニヤと笑いながらうみの頭を掴んだまま身動きしないゲンガーがいたのだった。

—————

ここはどこだろう。

うみが最初に思ったことはそれだった。体は若干透け、周囲は見たことのない・・・

「いや、ここは・・・廃墟?」

周囲を見渡し、見覚えのあるエントランスだと気づくうみ。すると、玄関から声が聞こえる。

『ただいまー』

『お帰りなさいませ、弟様』

振り向くと、そこには快活な少年と執事服の老人がいた。元気に挨拶をする少年に微笑みかける老人の後ろからじっと眺めていると、少年が写真に写っていた青年だと気づく。

「この子が・・・じゃああの亡霊は?」

先ほどの亡霊とは全くと行っていいほど雰囲気の違い少年に戸惑

ううみ。すると、少年は手にいっぱいの花を持ち、二階へと上がって行く。

なんとなくそれについて行くうみ。すると例のピンクの扉の部屋へと行き着く。

『姉様！どうぞ、今朝咲いた花です！』

部屋のベッドでは、白骨死体ではない少女が本を読みながら座っていた。少女・・・ゆかは、弟へと微笑みかける。

『・・・ありがとう、いつも持ってきてなくてもいいのに』

『いえ、外に出れない姉様にも見てもらいたいから!?!』

そう言ってベッドのそばまでやってくる弟を撫でるゆか。

『そう・・・じゃあ、今度はこのお花をお願いしようかしら』

『！うん！明日はそれを持ってくるね！』

微笑ましい光景に思わず頬が緩むうみ。しかし、景色が早送りのように進み、次に止まった時には、ゆかはベッドで苦しそうに呻いていた。

『・・・』

『どうですか、先生！』

『・・・申し訳ありませんが、もう長くないかと』

『そんな・・・!』

医者 of 言葉に嘆きながら座り込む女性と、肩を支えている男性。写真と同じ顔から、ゆかの両親だと気づく。

泣き崩れる両親を、弟が無表情で見つめている。

『・・・』

『どうしたの? ●●』

姉の元へと向かう弟だが、黙ったまま動かない。そんな弟を訝しむ姉に対し、いきなり手を取ると叫ぶ。

『姉様・・・姉様はわたしが、わたしが守ります!』

驚き目を見開いていたゆかだったが、すぐにふわりと笑う。

『・・・ありがとう』

その後の生活は目まぐるしく進んでいった。

片方ずつ目が見えなくなり、絶望する姉に必死になって勉強した点

字を弟が教え、やがて皮膚の感覚を失った姉は目を開くことはあれど何に対しても反応することがなくなる。

そんな姉の様子を、涙を流しながら日記に書き続ける弟。やがて姉は目を開くことすらしなくなり、世話をするメイドと弟以外は部屋にすらくることがなくなつた。

『・・・姉様。わたしが、わたしが守ります。ずっと、ずっと・・・』  
そう言つて手を固く握りしめる弟。ゆかの手は、すでに冷たくなつていた。

『・・・!?!』

するとそんな弟の背後に突如、ゴースが現れる。いきなり現れた幽霊のような存在に驚き立ち上がる弟。するとゴースは弟に対して『さいみんじゆつ』を使う。

『あ・・・あ・・・ねえ、さ・・・まも・・・る』

『キュイイイイ』

そこからの弟ははつきり言つて異常の一言に尽きた。突如発狂したかと思うと、別荘に住む全ての人を、両親から使用人に至るまで全て殺害し、両親の骨をゆかの側に、使用人も庭に埋め、その後自分の部屋へと向かう。

『守るんだ・・・いつまでも・・・姉様を・・・家族を・・・』

そうして、自らの首を掻き切つた弟も息をひきとる。そのそばで浮いているゴースは進化し、ゴーストへと変貌する。

「・・・」

その、ゆかの弟のものであろう記憶を見たうみは、なんとも言えない気持ちとなつた。姉と家族を愛した弟が、ゴースと出会つてしまつたが故の悲劇。記憶の旅を終え、暗い空間へとやってくるうみ。

「ゴースが悪い・・・とも言えるような状況、そもそもそんな昔からポケモンがいたなんて・・・」

少なくとも10年以上前から存在していたと思われるゴース。現在だけでなく、過去に遡つて情報を得る必要があるな、と感じたうみは、そのまま意識を覚醒させて行く。

「・・・っ!?!なん、だこれ・・・!?!」

すると突如、強烈な頭痛がうみに襲いかかる。頭を押さえて悶えるうみの脳内に、覚えのない記憶がフラッシュバックしてくる。

『……なさい! どうして言うことが聞けないの!』

「ご、ごめんなさい……」

『早くしなさい!』

「これは……一体……!」

今度の記憶は、一人称視点の記憶だった。目の前にはなぜかは分からないが猛烈に怒っている女性。当然見覚えはない。

画面は変わり、段ボール箱の中へと至る。

『ここに居なさい。いいと言うまで出ないこと。いいわね!』

「嫌だ! まって、置いてかないで! お母さん! お母さん!!」

喚くような聞き覚えのある声を無視して素早く閉じてしまう母親なのだろう女性。その後しばらくの間揺れる暗い視界とすすり泣く声、そして言いようのない不安と悲しみの感情がうみを襲う。

(これは、もしかして……)

しばらくして、振動が止まる。少しだけ不安の感情が薄れるが、次の瞬間に今度は先ほどの振動を超える荒々しい振動がやってきて、またしても恐怖がやってくる。

しかし今度はあまり長い間振動は続かず、どこかへと乱雑に落とされる感覚が来たのを最後に振動が止む。

「……お母さん?」

恐る恐る外へと出る。するとうみは見覚えがあるどころじゃない衝撃を受ける。

(こっつて……! 俺の家!?)

そこは現在うみの住んでいる家のリビングだった。少女はゆつくりと段ボール箱から出ると、母を呼びながら家の中をさまよう。一階を探し、二階へと向かう。うみが自室として使っている部屋へとやってくると、立て鏡の前に立つ。

「お……れ?」

そこに立っていたのは、最初に目を覚ました時に来ていた白いワンピースを着た、今の俺にそっくりな少女が、泣き腫らした顔で立って

いた。しかしその髪と瞳は黒で、一般的な日本人らしい美少女で、今の俺とは身長や雰囲気若干異なっていた。

「・・・ひっく、うぐ・・・お母さあん・・・」

立て鏡を見ながらまた泣き始める幼女。それを見て戸惑ううみ。なんで自分と同じ顔立ちの幼女がいるのか、そしてなんで自分の家にいるのか。薄々気づいてはいても信じたくないと脳が理解を拒む。

「お母さん・・・置いてかないで・・・私、いい子にするから・・・」  
そこからの光景は見るに耐えなかった。まだまだ家事どころか食事すら難しいであろう幼女だ。たった一人見知らぬ家に取り残され母親にすら見捨てられた。そんな状態で生きていけるはずもなく、最初は家の外へ出ようとしたり、リビングをうろついたりしていた幼女だが、やがて疲労と空腹で動くことすら困難になった幼女は、自室の床に倒れたまま過ごしていた。

「・・・お母さん・・・」

動けなくなった状態でも変わらず母を呼び続ける幼女。目を開けることすら出来なくなつた幼女の心から、悲しみと恐怖、絶望の感情が流れてくる。うみはその感情に引つ張られ、涙が溢れてきて止まらなくなる。

(これ・・・やっぱり、俺・・・なんだな)

すると、すでに夜であり真つ暗なはずの部屋が光に包まれる。

(なん・・・)

光がある程度収まると、そこにはポケモンがいた。

『・・・人の子よ。何を求める』

「・・・」

『何を願う』

そのポケモンはなぜか俺の頭の中から情報が一切出てこない。分からないのではなく、「思い出せない」。まるで脳内にフィルターでもかかっているかのような靄があり、名前すら出てこない。

そんなポケモンの言葉に、絞り出すようにして出てきた言葉は、たった一つだった。

「・・・お、かあ・・・さん・・・」



『・・・母か。いいだろう。ならば生きよ。生きて探して見せよ、その願いを』

そう言ったポケモンの背後に無数のプレートが浮かび上がる。その中から一枚のプレート、海のように深い青のプレートが少女の中に吸い込まれるようにして入り込んでいった。

『・・・人よ、我にできるのはここまでだ。・・・あとは貴様たち次第だ』

(こつちを・・・)

そのポケモンは少女ではなくうみの方を見てそう言った。最後に記憶は遠くへと消えて行き、光が体を引っ張って行く。記憶の向こうでは起き上がった少女がこちらへと微笑んでいる。

「待ってくれ！お前は――――」

ようやく声が出せるようになり、手を伸ばすうみ。そんなうみに少女は、銀に変わってゆく髪をたなびかせながら、一筋の涙を流していた。

「・・・私の代わりに・・・お願い」

その言葉を最後に、うみの意識は現実へと戻ってゆくのだった。

「・・・みちゃん！うみちゃん！しっかりしろ！」

「・・・キョウさん？」

「良かった！起きたか！」

目を覚ましたうみは、走るキョウに背負われていた。意識を取り戻したうみを背負いつつ、キョウは全力で走っている。その横ではライが心配げにうみを見上げながら並走し、その背には目を回したヒトモシを背負っている。

「こっちは・・・キョウさん、いった」

一体何が、とうみが尋ねようとした時だった。背後から大きな破碎音が響く。

「ゲギャギャギャギャギャギャギャ!!」

「なっ!?!」

背後を見ると、そこにはゲンガーがこちらを追ってきていた。しかしその様子はどこかおかしく、頭のつや尻尾、腕などがより尖った形状で、より凶悪な姿となっていた。目からは理性が消え、完全の暴走状態となっているのだった。

「起きたばかりですまないうみちゃん、あの化け物はなんなんだ!?!」  
「わ、分かりません・・・あれはゲンガーというポケモン・・・のはずなんです・・・」

戸惑いつつ答えたうみだったが、容姿があまりに変わりすぎていて断定できない。ゲンガーはひたすらうみ達を追いかけており、段々と廃墟が壊されてゆく。

「・・・どういう理由でこんなことになっているのかはわかりませんが、とにかく逃げましょ・・・!?!」

突如固まるうみ。その視線の先では、涙目でこちらとふわふわ並走しているポケモンがいた。そのポケモンをみて怪訝な表情のキョウウは、背後のゲンガーを見てああもう!と叫ぶと、そのポケモンをひっ掴み小脇に抱える。

「!?!」

「大人しくしてろ!とにかく逃げるんだ!」

そう言って走り続けるキョウウ。

キョウウに抱えられジタバタする涙目のジラーチを見て呆れた表情のライ。

「・・・なんでこんな所にジラーチが!?!」

廃墟の夜は、まだまだ続くのだった。

—————

うみの家。ほかのポケモンが寝静まった家で、一つのモンスターボールがカタリと動いた。

P O ————— N

ひとりで動いたそのボールから、デオキシスが出てくる。出てくるや否や、うみのいる廃墟の方を見たデオキシス。おもむろにミロの

ボールを手にとると、リビングで寝ていたミロをボールに入れる。

『・・・!?!?・・・!?!』

いきなりの行動に驚いたミロがガタガタとボール内で揺れる。それを見たデオキシスは、体を変化させていき、スピードフォルムへと変わる。そして窓から飛び出し、超絶スピードでうみの元へと向かうのだった。

「・・・」

『~~~~~!!』

ミロは結局訳がわからず、とりあえず帰ったらバンギラスしばらく、と心に誓うのだった。

## 第26話

「・・・」

「ええつと・・・タケシさん？」

「タケシでいい。あまり年も離れてねーんだし」

暗い森の中を進むパトカーの中、恐る恐ると言った風にタケシに話しかけたのは、配信を見ていたワタル。助手席に乗ったワタルにチラリと目だけを向けながらヘラヘラ笑うタケシ。

後ろの座席には、完全に寝ぼけ眼のチャラ男と農家ニキがいた。

「・・・ふあああ、なんでこんな山奥に・・・わざわざ俺らが行かなくてもうみちゃんならなんとかするんじゃないですか？」

チャラ男は正直連れてくるか迷ったが、人手は大いに越したことはない。・・・チャラ男本人は乗り気でないようだが。

「うみちゃんの配信を見ていたんだが、突然切れた。その前に映っていた状況を考えると、キヨウさんだけじゃマズい」

そう、うみがキヨウと合流した際、スマホなどの配信機材は完全に放置されてしまっていた。その上スマホは操られた男が手に取った際に割れてしまっており、突然配信が終了したためどうなったのかがタケシや視聴者にはわからない状態にあった。

「でも、うみちゃんにはライくんがついてますし、ここまでの人数はいらないんじゃない？」

「・・・」

膝の上で微睡んでいるコロを撫でつつ、農家ニキが言う。ワタルは黙って何かを考えているようだった。

「・・・とにかく急ぐ」

そう言うと、タケシはアクセルを更に踏み込むのだった。

-----

「うみちゃん！どうする?！」

「ライ！『10まんボルト』！当てなくていい、足止めして！」

「ラアアイ、チュウウウ！」

一方のうみ達は、未だ暴走しているゲンガーに追われていた。既に

廃墟は半壊状態であり、ライの放った電撃もうまく当たらないほどに素早くなっていた。

「ゲアアアア!!」

しかしどうにか視界から外れることに成功し、周囲を探し回っているゲンガーから隠れ、壁越しに様子を伺う。

「・・・くそ、なんて奴だ。もう手に負えん」

「どうしてこんなことに?」

散々暴れまわったことでグツタリとしているジラーチを抱えたままのキョウにうみが尋ねる。キョウは自身も訳がわからないと言った表情で説明する。

「それが・・・」

—————

倒れるうみとその頭をつかんでいるゲンガー。その光景を見たキョウは、怒りのままにゲンガーを蹴っ飛ばす。

「どけえ!!」

「ゲッ」

弾みながら転がって行くゲンガーを尻目に、うみを抱き起す。

「うみちゃん!しっかりしろ!」

必死に揺さぶりながら声をかけるが、反応を示さないうみに焦るキョウ。

「ゲッゲッゲッゲッゲッゲ!!」

「!・邪魔を・・・!」

復活したゲンガーがその後ろから襲いかかる。すると今度はその顔をアイアンクローで捕まえるキョウ。怒りのままにその顔を床に叩きつける。

「するなあああ!」

「ゲゲエ!」

床が破碎されめり込むゲンガー。急いでうみを担ぐと、キョウはそのまま走り出す。

しかしキョウが部屋を出る前に、ドアがひとりでに閉じる。ゲンガーはゆつくりと起き上がると、両手に『シャドーボール』を構えて

ジリジリと近づくと。

「……！」

「ゲツゲツゲツ」

必死にドアを開けようとノブをガチャガチャと動かすキョウだが、全くビクともしない。そんなキョウの焦りを見て嗤うゲンガーは、ゆっくりじわじわと近づき恐怖を与えようとする。

「くそー早く開けー！」

ゲンガーがすぐ背後まで接近し、万事休すとなった時だった。

「ラアアアア!!」

「ゲゲゲエエ!？」

「ーライ!？」

ライがゴーストに吹っ飛ばされてできた壁の穴の隣から、新たに穴をブチ開けながら猛スピードで突っ込んでくる。勢いそのままに、ゲンガーの横つ面をドロップキックし、ゲンガーは予想外かつ視覚外からの一撃で反対側の壁にめり込む。

「ラ、ライ……?」

「フーツ、フーツ」

普段と様子の違うライに戸惑うキョウ。目はハイライトが消え、周囲に電気を纏いゲンガーを睨みつけている。

「ゲツゲツゲ！」

「ヂュウ！」

壁から抜け出たゲンガーが、そのままライへと襲いかかる。対するライも、ためらいなく突撃していく。二匹がぶつかる、そこを中心に衝撃波が広がり、キョウは吹き飛ばされドアにぶつかる。

「いっ……なんだこれは」

一瞬間をしかめ、ライとゲンガーの方を見てキョウは愕然とする。

二匹共速度を誇るが故に、互いの攻撃を受けるより避ける方が多い。それは人の目には決して捉えられない状態へと移行する。

「ゲエツ！」

「ヂュウ！」

……一言で言うなら、キョウは完全にヤムチャ視点に立たされて



要するに、本気を出したライとの戦闘でハイになり、より戦えるように霊やポケモンを取り込んで無理やり自身を強化したというわけだった。

「道理であのゲンガー理性を失うわけで・・・あの子、レベルが70+25くらいに強くなってるし・・・」

「?レベルだと?」

「ああいえ、実は目を覚ましたあたりからなんか見えるようになってちやつて」

そう言いながらライを見つめるうみ。既にマジギレモードを解除しているライの頭の上に、『100(+20)』というような数字が見える。そして暴れるゲンガーを見ると、同じく頭の上に『70+25』という数字が浮かび上がる。

(これどう見てもポケモンのレベルだよなあ・・・。きっかけはやっぱりあれかあ)

なんとも複雑な表情でそれを見つめるうみ。レベルだけを見ればライの方が上だが、その差はほぼ無く、また互いにタイプ相性は良くも悪くもない。ヒトモシならわざ次第では相性は良いが、レベル差がありすぎる。(ヒトモシは20と出ている) 決定打に欠ける上に相手は暴れており、もし街へと下りてしまえば危険であり、ここで止めなければならぬ。

「・・・とにかく、なにか、なにか打開策は・・・」

懸命に考えを巡らせるうみ。ふと上を見上げた時だった。

「・・・ん??」

夜空に流れ星のようなものが見える。こんな時でなければ、と思っ  
ていると、その流れ星がこちらへと降ってくる。

「ちよちよちよつ!!キョウさん、あれ、あれ!」

「ん??うおあああ!!」

ドゴシャツという音と共に落ちてくる流れ星。舞い上がる砂けむりにむせながら一体何が、と見てみると、そこには家に留守番で置いてきたはずのデオキシスがいた。

「デオキシス!?なんでここに!」



「――」

うみの質問には答えず、そつとボールを差し出すデオキシス。うみが戸惑いつつ受け取ると、勝手に中からミロが出てくる。

「ギユア！」

「うわっ!？」

出てくるや否やデオキシスへとメンチを切るミロ。後ろ姿だけ見えているキョウには綺麗なポケモンだな、と思われているが、うみからは角度的に見せられないような顔が丸見えである。

ミロにメンチを切られながらも知らんぷりなデオキシス。ますますミロが怒る中、うみが慌てて抑える。

「あーもう、取り敢えず落ち着いて・・・」

ふと、そういえば破壊音が止んでるな、と思いつつ振り返るうみ。

「あ」

「あ」

「ラッ・・・」

「キユウ？」

「――?」

廃墟の破片を持ちながらこちらへと振り返るゲンガーと目が合う。

両陣営の間に謎の間が生まれる。最初に動いたのはゲンガーだった。

「GE――!!」

「~~~~~!?!ライ』『10まんボルト』、ミロ『ハイドロポンプ』、デオキシス『リフレクター』!」

こちらへと突っ込んでくるゲンガーに、咄嗟に手持ち達へと指示を出すうみ。ライとミロのわざを躲し飛びかかるゲンガー。しかし、デオキシスのリフレクターが間に合い寸前で止まる。

「デオキシス、そのまま維持!」

「――」

「キョウさん!」

「なんだ?」

「今はとにかく、ゲンガーを倒すことだけ考えましょう。うちの三匹

で倒しますので、キョウさんは操られていた人達を回収、お願いします！」

「・・・ああ、わかった！」

頷き、走り出すキョウを見送ったうみは、再度ゲンガーと対面する。

「・・・GEGEGE」

「・・・？ジラーチ、お前・・・」

ふと、うみの肩になにかが乗る。それは、何やら悲しげな表情を浮かべたジラーチだった。ジラーチはうみになにかを伝えようと必死に手を振り回す。

「な、なんなんだ？」

ジラーチの意図が読めず困惑するうみ。と、ライとミロが同時にゲンガーへと仕掛ける。『ボルテツカー』で電撃を纏い突撃するライを、巻き込むようにして『ハイドロポンプ』を打ち出すミロ。背後からのハイドロポンプに巻き込まれながらもライが走る。するとハイドロポンプにライの電撃が混ざり、その勢いのままにゲンガーへと向かう。

それを見たゲンガーはまた狂ったように笑いながら受け止める体制に入る。

「GEGEGE！」

「!?」

「な!?受け止めた!?!」

まさかの光景に驚くうみ。ゲンガーはミロとライの連携技を真正面から受け止めてしまった。ありえない、と目を見開くうみは、ゲンガーの頭の上の数字に驚愕する。

『78+30』

「バカな、レベル合計が100を超えてる!?!それに自身のレベル自体が上がって・・・!」

(まさかこの短時間でいけんちを蓄えてレベルアップしてるのか!?)

そんなうみの最悪の予想を裏付けるように、ライと近接戦に持ち込んだゲンガーのレベルが更に1上がる。

「冗談じゃない、なんでこんな急激に……！」

すると待機していたデオキシスが、アタックフォルムへと変化してライの加勢に入る。二匹の猛攻を笑いながら捌くゲンガー。ミロも攻撃のチャンスを伺うが、ライ達が射線に入ってしまうため攻撃できない。

（どうする……！このまま際限なく強くなるとしたら、このままじゃライ達ですら手に負えなくなる……！）

必死に思考を巡らせるうみ。すると、足元からズボンの裾を引っ張る感触がする。

「……？」

「ピツカアー！」

そこにいたのは、目の青いピカチュウだった。そのピカチュウは、うみが気づくと嬉しそうに笑い、そのまま肩まで登ってくる。

「うわっと、な、なんだ？」

「……」

「ピカピーカ、ピカツチュウ！」

やたら嬉しそうなピカチュウと、なぜか自身のいる方に登ってきたピカチュウに圧迫され肩から追い出されてしよげこんでいるジラーチ。

すると突然、ピカチュウの体が光り始める。

「これは……!？」

「……。ミュウ！」

「ミ、ミュウ!？」

光が収まると、そこには幻のポケモン、ミュウがいた。ミュウは驚くうみを見ると、プクク、と笑いながらその周りをクルクルと回る。

「レビィー！」

「せ、セレビィまで!?!一体どうなってるんだ!?!」

どこからともなく現れたのは、時を旅するポケモン、セレビィ。ミュウにセレビィにジラーチ、突如集結した幻のポケモン達に驚くうみ。

「レビィ〜！」

「ミュウミュウミュウ！」

「……！」

すると三匹は、ふわりと宙に浮き、未だ戦いを続けるゲンガーの元へと向かう。

「……！」

「……？」

「GEGEGE GEGEGE!!」

三匹に気づいたライとデオキシスは呆然と三匹を見上げる。暴れ続けそれに気づかないゲンガーだったが、三匹から何かのエネルギーが放たれ動きが止まる。

「GU!?GE、 GEGEGE!?!」

「!ライ、デオキシス、ミロ、ストップ！」

チャンスとばかりに攻撃しようとした相棒達を止め、ゆつくりとゲンガーに近づくうみ。ゲンガーはそれに気づきながらも、身動きできず睨みつけるだけである。

「……」

目と鼻の先までうみが近づくと、三匹がより強い光を放つ。

視界が真っ白に染まり、目を細めていたうみは、遠くの方でなにかの映像が流れてくるのに気づく。

そこは農場のような場所だった。そこには、沢山の種類のポケモン達がのんびりと暮らしている。と、顔が黒く塗りつぶされており見えない男が一人、ボールを持ってそこから出てくる。

『……なんだ、6Vじゃねえか。いらね』

そう言っつてボールを放る男。出てきたのは、まだレベルも低く子どもゴースだった。

『お前もういいわ、行っていいぞ』

『……?』

そう言っつて歩き出す男。ゴースは訳がわからないらしく、慌てて男についていく。

『……ああもう!だから、お前はもう来なくていいって!野生に帰れ!』

ビクツと怯えるように立ち止まるゴース。男はそれつきり振り返ることはなかった。

そしてしばらくの間森の中を一人浮いていたゴース。やがて朝日が照らし、逃げるように洞窟へと入る。しかしそこにはニドキングがいた。

『ゴアアアアア！』

『!?!』

威嚇され、怯えながら逃げるゴース。

その後も、さまざまな場所を転々とするが、どこにいつても気味悪がられ追い出される。

そんなある日必死に日の光を避けながら飛び回っていると、突如謎の穴を見つける。その穴は先の見えない、真っ暗な穴だった。一瞬ためらうも、そこへ飛び込むゴース。

そして、その穴の先で別荘へと転移し、弟と出会う。弟の言葉を聞いたゴースは、弟と少しの間話をして、弟へと『さいみんじゅつ』をかける。

『キュイイイイ』

『あ．．．あ．．．ねえ、さ．．．まも．．．る』

その時のゴースの感情が流れてきて、うみは呟く。

「．．．そうか、『居場所が欲しかった』のか、お前」

気がつくのと、真っ白い空間に立っていたうみ。

目の前にはゴースが一体。ゴースはうみを見つめながら、申し訳なさげに黙っていた。

「暴れたんじゃないなくて、弟さんの願いを．．．『ここを守りたい』って願いをお前なりに叶えたかったんだな」

うみの言葉を聞き、ポロポロと涙を流すゴース。うみはそんなゴースにゆつくりと近づき、その触れるだけで寒気を感じさせる体を撫でる。

「．．．!?!」

「辛かったろうな。寂しかったんだろ？だから、弟さんの手助けをして、自分を仲間だと認めてほしたかったんだな」

ひたすら撫で続けるうみに呆然とするゴース。やがて現状を理解すると、滂沱の涙を流す。

「・・・キュイイイ」

「もう、いいんだ・・・弟さんを、もう解放してあげないか？」

ゆっくりと頷くゴース。現実のゲンガーの体から、靄のように弟の魂が出て行く。ゲンガーの体は段々と元に戻り、ゴーストに退化し、やがてゴースへと戻っていった。それを見たセレビィがすかさず『時渡り』で穴を開け、弟の魂を姉・・・ゆかの死んだ時間へと送る。ジラーチは手を組み、祈りを捧げる。祈りにより願いは叶えられ、弟の魂は、時を超え、姉の魂とともに天へと登って行くのだった。

「・・・お前は どうするんだ？」

白い空間の中、ゴースにそう尋ねるうみ。崩壊が始まった空間の中、どうしていいかわからず黙り込むゴース。

「・・・うちに来いよ。流石に廃墟つてわけじゃないけど、色んな仲間が居るんだぜ？」

「・・・!？」

惚けた表情で顔を上げたゴースに、満面の笑みを向けるうみ。そんなうみの表情に、再度涙を流しながら必死に頷くゴース。

「・・・じゃあ、帰ろうか。一緒に！」

そう言つてうみはゴースに手を伸ばすのだった。

「うみちゃん！」

男達を回収し、崩壊音が途絶えたことに不安を抱きながら戻ってきたキョウ。しかし、そこにある光景を見て絶句した後、全てを察しゆっくりと車へと帰っていった。

そこには、月明かりに照らされる廃墟の中、膝の上で眠るゴースを撫で続けるうみと、その相棒達。その周囲で三匹の幻のポケモン達が、嬉しそうにその姿を見ているのだった。

「……うみちゃんは？」

「……もう少しかかるかもな」

戻ってきたキョウを見ながら、タケシがうみの安否を訪ねる。

「にしても、ポケモンに操られた人間ねえ……最悪ですなこりや」  
「ああ」

二人の目の前には、縛られた状態の男が二人。ゴースト達に操られた人達だった。完全に記憶はなく、ただ別件の前科持ちだったためこうして捕縛しているのだった。……彼ら自身は、捕まったことよりもなぜか激痛の走る頭部を気にしていたが。

「キョウさん、一応見つけましたけど……」

「おう、すまねえな、こんなこと頼んじまって」

半壊した廃墟から、ワタル達3人が出てくる。手には布に包まれた頭蓋骨が四つあった。

「ほんとつすよ！俺初めてつす、人の頭の骨触ったの！」

「逆に初めてじゃなかったらキョウさん達のお世話になるんじゃないかな……」

プンスカと怒るチャラ男に対し、そう呆れた言葉を呟く農家ニキ。

ワタルは黙ったまま深刻な表情で手に持った頭蓋骨を見つめる。

「……配信が途中で終わったことはある意味僥倖だったのか」

「ん？どういふことつすか？」

ワタルのつぶやきに首をかしげるチャラ男。するとタバコを加えながらキョウがそれに答える。

「ポケモンのせいで人が死んでるんだ。もしこれをそのまま公開すれば、ポケモンは一気に危険生物として駆除対象待った無しだったろうな」

「うっわ、スツゲー危なかったんすね」

「だからこそ困ってるんだよ……報告書どうしよう」

頭を抱えるタケシの肩を叩き、苦笑いするキョウ。ワタルだけでな

く、農家ニキやチャラ男も今回の件の問題とその深刻さに顔をしかめる。

「でも・・・俺、こいつと離れる気は無いつすよ」

そう言つてコラツタの入つたボールを握りしめるチャラ男。農家ニキも、コロを抱きしめながら頷く。

「俺も、コロを駆除するなんてことになったら絶対抵抗します。命かけてでも」

そんな二人を見て懐かしいものを見る目をしながら歩き出すキヨウ。

「・・・なら、頑張んねーとな。ポケモンの為に、人間のために」

そう言つてキヨウは、うみを再度呼びに行くのだった。

(・・・未知。不可思議。それらを体現したかのような存在であるポケモン。そしてそれに関する知識が異様に豊富な少女。そしてそれを守るようにして鍛えられている相棒の存在。それに加えて今回の暴走的行動・・・)

「うみちゃんや・・・おじさん根が腐つてるからよお。どうしても考えちまうんだわ」

「――君は・・・一体『何』なんだ？」

タバコの火を消えしながら、いくら考えても答えの出ない思考を振り払うキヨウだった。

「・・・どうしてこうなった」

うみは、あまりにもいろいろありすぎて思考能力が低下した脳内でそう呟いた。

三匹の幻のポケモン達はそれぞれにどこかへと去つていった。・・・一匹を残して。

「・・・?どうしたんだ?」

「――!」

セレビィ・ミュウが手を振りながら去つていったのに対し、何故か涙目でうみの服の裾を引っ張りながら何かを伝えようとするジラーチ。



何が言いたいのかさっぱりなうみは、取り敢えずジラーチを落ち着かせようと試みる。

「取り敢えず落ち着いて。何か言いたいことがあるのか？」

そう言つて裾を引つ張る手を取つてゆつくり言い聞かせる。するとジラーチは、なぜか瓦礫の下から無事なペンと紙を引つ張つてくる。

「・・・？」

何かを必死になつて書き始めるジラーチ。数分後、涙目のジラーチが見せてきた紙を見て愕然とする。

『おうち つれてつて』

ねるところ ない』

「・・・えー・・・」

ポケモンを保護し始めてしばらく経つが、問題を起こしていないポケモン自ら保護を求めてきたのは、これが初めてだった。

## 第27話

「おはよう。眠れたかい？」

廃墟でゴースを保護し、ジラーチを連れてキョウの車に乗っていたうみ。疲労感から眠気に襲われ意識を手放していたが、眼が覚めると対策課の部屋にいた。

「……んこは」

「外来種対策課の部屋さ。完全に寝てしまっていたし、距離的にも家よりこっちの方がいいかと思つてな」

キョウの言葉を聞きながら起き上がるうみ。外はすでに明るくなつており、朝日が窓から差し込む。

ふと、朝日に目を細めていると掛けられている毛布の中、お腹部分に違和感を感じる。毛布をバツと取り払うと、そこにはなんとジラーチがひつついたままスヤスヤと寝息をたてていた。

「……」

「……離そうとすると泣きながら首を振るんな」

申し訳なきげにそう言うキョウに、大丈夫です、と答えながら立ち上がるうみ。ジラーチは全く離れずひしつとしがみつきながらぶつぶつと言っている。

「おつ、うみちゃん起きたか？」

「大丈夫だったか？大変だったらしいじゃないか」

「うおお、なんか可愛いのがいるつすね！」

上からタケシ、ワタル、チャラ男である。農家ニキは家に帰ってしまったが、3人はうみ達の体験したことについて興味があり、キョウから話を聞いていたのだった。3人もうみとうみにしがみついているジラーチを見ている。

「お騒がせしてすみません……自分が浅慮でした」

そう言つて頭を下げるうみに、オロオロするチャラ男。しかしキョウとタケシ、そしてワタルはうんうんと頷いている。

「そうだな。もつと俺ら大人を頼つてもらいたいもんだ」

「ですねー。俺らだつて一応はポケモンに関与する人間なんだしな」

「一般人寄りの俺だけど、ポケモン持ちの中ではうみちゃんの次くらいには役に立つと思うし、俺を頼るんでもいいぞ」

3人から滅多打ちにされしよげるうみ。散々言っている大人組だが、それでもうみが心配ゆえの言葉であることはうみも理解しているので、ぐうの音も出ない。

「ところでうみちゃん、申し訳ないんだが・・・」

言いづらそうにしているキョウウの方を向くと、横に女性警官が一人立っている。

「キョウウさん、その人は？」

うみの言葉にキョウウが答えるより早く、敬礼する女性。

「アンズって言います。よろしくね、うみちゃん？」

快活に笑うアンズにとりあえず会釈するうみ。そんな女子二人の挨拶もそこそこに、キョウウが用件を伝える。

「実は今うみちゃんが署に知っていることを知った警視総監・・・まあ言うなれば警察のトップの人だな。その人が会いたって言っててな・・・」  
「つまり、ポケモンに関する説明ってことですね？」

「・・・ああ。流石、話が早くて助かる。しかし、まだ疲労が抜けてないんじゃないか・・・？」

心配げな大人組に微笑むうみ。

「いえ。大丈夫です。・・・ところでライは？」

その言葉にあり・・・という空気が流れ、部屋の隅の方を指差す。

「わあー、可愛いー！」

「見てこれ、ほっぺプニプニよ」

「ほおー、マジでこんな色なんだなあ」

「あーあ、私もこんなポケモンだったら欲しいなあ」

「・・・」

「あー・・・」

そこでは、ライが対策課の職員によってひたすらに観察され撫でられ続けていた。ライ自身は目が死んでおり物凄いうつとおしそうだが、どうやら手は出してないようだ。

「すまない・・・どうやらうちの職員は探究心というか好奇心という

か・・・そう言ったところが強いみたいでな・・・」

「ズバットもやられてたしな」

「ミニリユウもな・・・」

遠い目でそう言う二人のパートナーは、反対側の部屋の隅でグツタリとしていた。散々撫でられてライもそろそろ怒りそうだ。

「とりあえずライに電撃やられたくなかったらそろそろ止めるべきなんですけど・・・」

「もしそうなくてもあいつらの自業自得さ。それはともかく、とりあえず問題がないようならこれから警視総監の元へ行くでしょう」

そう言って歩き出したキョウだったが、アンズに腕を掴んで止められる。

「ちよおーつと待った!」

「・・・なんだ、アンズ」

鬱陶しそうに睨むキョウに、ビシツと指差しながらアンズが言う。

「あのね、折角の美人さんなのにこんな格好で人前に出す?普通」

「?どういうことですか?」

頭に?マークを浮かべるうみ。今のうみの格好は、上は無地のパーカー、下はジーンズ。廃墟へ向かった時の格好のままである。

「あのねえ、昨日の夜から動き回った挙句着の身着のままとか、可哀想にもほどがあるでしょ!」

まくし立てるアンズに面食らううみとキョウ。キョウはともかく、うみまでも同じような反応をするため、アンズは怒り心頭だった。

「もういい!父さんは先行ってうみちゃんは遅くなるって伝えといて!私がうみちゃんの身支度するから!」

「え?!父さん!?!」

驚愕の事実には驚くうみの手を引っ張り、アンズはズンズンと部屋を出て行くのだった。

「・・・キョウさんの娘さんだったんですね」

「・・・ああ。あんな性格なもんで手を焼いている」

そう言っただけ息をつくキョウを、いつもとは真逆なことにタケシが慰めるように肩を叩くのだった。

「さあうみちゃん、着いたよ」

「こ、こは・・・」

署を出て、アンズに連れられたうみがやってきたのは、服屋だった。問題なのは、そこがただの服屋ではなく女性物オンリーの服屋であった事だった。

（いやいやいやいや!? 流石に風呂やトイレは慣れたし、家にあったワンプースとか水着も覚悟を決めたけどこれは流石に!?)

「あ、今持ち合わせ無いのでこのままでも・・・」

「それくらい私が出すわよ。遠慮しないでいいの!」

（なんであんたがそんなウキウキなんだよ!?)

上機嫌のアンズに引き摺られるようにして入店するうみ。

「いらっしや・・・!こちらなどうかでしよう!?!」

「早っ!?!」

入店するやいなや高速で服を手にとって迫る店員。その目には「可愛い!着せ替えたい!」と出ている。

そのままうみは、アンズと店員の二人に試着室に放り込まれるのだった。ちなみにジラーチは、腕がされたうみのパーカーにくるまってスヤアしていた。

「なんか随分長いつすね」

対策課の部屋でのんびりと待っていたワタル達。チャラ男の言葉にタケシがドヤ顔をする。

「あのなあ、こういう準備ってのは女性の方は時間がかかるもんなのさ。んなことで遅い遅いって言ってたら彼女できねーぞ」

「タケシさん彼女いたことありましたっけ?」

「グフツ!?!」

容赦のない職員の言葉に机に突っ伏して妙な声を上げるタケシ。そんなくだらない話をしていると、ドアが開きアンズが入ってくる。「ほらうみちゃん、恥ずかしがらなくていいって、可愛いよ?」

『だ、だから嫌なんですって．．．あ、ちよつ、引つ張らないでください．．．!?!』

「おー、戻ってきた．．．か」

「お疲れーっす。どんなかん．．．じ」

「おかえり、あんまり無理やりするの．．．は」

各々が帰ってきたアンズとうみに声をかけ、固まる。

ドアの陰から出てきたうみは、今までとはだいぶ違う姿だった。青い薄手のカーデイガンを羽織り、中には真っ白なシャツ。下はジーンズから黒いスカートへと変わり、羞恥から真っ赤になっている顔を隠すように、ポニーテールにした長い銀髪で顔を隠している。

「か、かわつ．．．!?!」

「ぐつ．．．!」

「ヌツ．．．!」

「あら、可愛い!」

女子職員が歓声をあげ、男性職員とポケモン持ちの野郎共は皆妙な声をあげてはいけないものでも見たかのようによそを向き、必死に何かに耐えている。

「うみちゃんやっぱ綺麗じゃない!アンズもいい仕事してるわ」

「いやあ、うみちゃんという良質の素材があつてこそでしょうよ。にしても我ながら働いた感あるわ」

「もう．．．好きにしてください．．．」

もみくちやにされながら死んだ目でそう呟くうみ。そんな局所的カオスな状況の中、キョウが戻ってくる。うみを見て一瞬目を見開くも、すぐに元の表情に戻る。

「準備はできたみたいだな．．．うん、恥ずかしがらなくてもいい、一層綺麗になつてるから」

「くそう!あれが既婚者の姿だ!」

「俺らとは年季も経験も違う．．．!クツソ羨ま妬ましい!」

「．．．否定はしないがお前らなあ．．．」

理不尽な恨みのこもった呪詛が独身職員及びタケシ・チャラ男から漏れ出ている。それを見ながら、否定しないし同感ではあるがなんと

も、と呆れた表情のワタル。

「あ、はい。もう行けますよ」

「うむ、じゃあ着いてきてくれ」

そう言つて歩き出すキョウウにこれ幸いと着いて行くうみ。後ろからは野郎共の呪詛と女子職員の残念そうな声が聞こえるが、努めて聞こえないふりをする。ライはすかさずうみについていくことで職員から解放される。

「・・・疲れた」

「まあ悪気はないからな。すまないが許してやってくれ」

「服買ってもらつたし、まあこれで差し引きゼロつてことにしときます」

廊下を歩きながら話すキョウウとライを抱きかかえぬいぐるみの振りさせるうみ。通りすがつた男性職員がたまにうみを見て驚き、その後見惚れて壁に激突するという事態が多発している。

「この部屋だ」

そう言つてキョウウが立ち止まる。いざとなると急に緊張してくるうみ。深呼吸を一つして、そつと扉を開く。

「やあ、待っていたよ。掛けたまえ」

中にいたのは、威圧感のある初老の男性だつた。着こんだ警察の制服がその威圧感をましている。

「失礼しますー!」

キョウウが敬礼をしてサツと部屋に入る。うみも慌てて着いていき、部屋の扉をキョウウが閉じる。

「はじめまして・・・うみちゃん、だつたかな。私は警視総監をしている後藤というものだ」

「は、はじめましてー!うみと言いますー!」

特に怒られているというわけでもないのに威圧感から直立不動で答えるうみ。そんなうみを見て苦笑する男二人。

「そんなに緊張する必要はない。ただ今回の事件とポケモンについて聞きたいことがあるだけだ」

座つて、と言つてソファを促す警視総監。恐る恐る座るうみとさつ

と隣に座るキヨウ。

対面に警視総監が座り、対談が始まる。

「にしても、うみちゃんが警察のトップと対談とは、一配信者とは思えない話だな」

対談が始まった頃、対策課ではうみについての話で盛り上がっていた。

「過去動画見ると本当にポケモンばかりなんだな」

「ああ、だからよほどの物好きじゃねーと定期的に見てる視聴者にはなんねーんすよ」

「うみちゃん自体は実況とかゲーム関連の配信はしないって言ってるしな。まあ相談室のお陰で俺は助かったんだが」

ワタルがそう言いながらミニリユウを撫でる。その様子を見ていた職員の中には、ポケモンだけでなく、うみの出自に関しても興味を持つ者が現れる。

「でも、なんでうみちゃんはポケモンについて詳しいんだろうか？ 科学者連中や動物学の権威とやらもお手上げなのに」

「うーん・・・配信でそれとなく聞いた奴も居たんだがなあ」

「そうっすね。なんか、『申し訳無いのですが、親については覚えていなくて』とか言うんすよ？ もうなんか色々察して聞けないじゃ無いっすか」

下手な声真似をするチャラ男にくすりと笑いながらも、少し空気が重くなる。

「・・・今うみちゃんはどうかやって暮らしているの？」

「他言は無用ですが、現在は口座にうみちゃんの名義で残されていた金で生活してるらしい。隣に住んでいる老人が中心となって住民で生活を助けているそうだ」



うみの置かれている境遇を聞き、少ししんみりした空気になる。そんな中、ふとチャラ男が気づく。

「……そういえばうみちゃんが連れていたあのちっこいの居なくないつすか？」

『……え？』

――――

「……俺からは以上です」

「……」

一方その頃、警視総監――後藤へのポケモン及び今回の事件に関する説明を終えていた。

聞き終わった後藤は黙ったまま何かを考えているようであり、キョウも初めて聞いたポケモンの情報について考えている。

うみ以外の大人二人が放つプレッシャーに押しつぶされそうなうみ。ライを撫でながら必死に心を落ち着かせている。

「……君は」

するとおもむろに後藤が喋り出す。うみをしっかりと見つめる瞳には何も感情が見えない。

「一体どこからその情報を得たのかね？」

「……っ」

ついに来たか、というのがうみの中での感想だった。後藤だけでなく、横に座るキョウからも注目されているのがわかる。

（実はゲームのキャラクターなんです……って言えばどれだけ良かったか）

仮にそう言ったとして、この世界にないゲームの話をしても何を言っているんだこいつは、と思われるだけだろう。

「……言えません」

「……ほう？」

二人の大人が怪訝な顔をする。そんな中、うみは「話さない」ことを選んだ。

（俺がなぜこの世界にきたのか、なんでこの体に俺が入ったのか。そ

れがわかるまではまだ何も言えない……)

うみが俯く中、後藤とキョウの視線が突き刺さる。と、先にキョウが喋り出す。

「・・・警視総監殿。報告書でも書いてましたが、うみちゃんを親を覚えておらず、親戚等もいません」

「分かっている。だがなおのこと何故このような知識を持つのか？ 問題なんだ」

若干のフォローを入れるが、後藤の言葉に黙り込むキョウ。すると後藤は立ち上がり、窓から外を眺める。

「・・・だがまあ、そうも言っておれん状況だ。最近の外来種関連の事件の件数は、増加の一途をたどっている。早急な対応が必要とされるのだ。故に私は、君達対策課を容認した。・・・しかし結果は先の○区の事件だ。今の警察ではポケモンには勝てん」

そう言っって振り向く後藤。

「・・・君の名前、そして君の住んでいる住居に登録されていた名前を調べた結果、君の戸籍は見当たらなかった」

(え・・・?)

突如知らされた衝撃の真実。思わずぽかんと口を開け惚けてしまいううみに、後藤は続ける。

「きみが一体何者なのか、それは未だ分からない。扶養者もおらず身寄りもない子供を放っておくわけにもいかない。・・・しかし、君以外に対処できる者も居ないというのが現状だ」

そこまで喋った後、後藤が頭を下げる。

「え、ちよ!?!」

「頼む。我々に力を貸して欲しい」

慌てふためくうみだが、キョウは後藤を見つめたまま、後藤は頭を下げたまま動かない。

「ちよつと待つてください！でも、警察にはキョウさんもタケシさんも居ますし・・・」

「彼らだけで、本当にポケモンに対応できると思うかね?」

後藤の言葉に次の言葉が詰まるうみ。はつきりと言うならば、二人

だけではおそらく対処は不可能だ。

「現在でさえ、君を含む一般人の手助けでようやく動いている状態だ。私には何もできない。守れないんだ。市民の安全も、君の言うポケモンの安全も、何も・・・」

そう言つて頭を下げ続ける後藤。その手は固く握り締められ、震えている。

「警視総監さん・・・」

予想外の人物からの要請にどうしていいか分からなくなるうみ。キョウはそんなうみを横からじつと見ているだけである。

「・・・分かりました」

しばらくの間の後、うみの方が折れた。その言葉に顔を上げる後藤。うみは、眉をハの字にしながら苦笑していた。

「俺だけの活動では心もとないとは思っていたんです。・・・協力します、警察に」

後藤はそう言つて真剣な目でこちらを見るうみに、少しだけ微笑みながら頷く。

「・・・ありがとう。今後ともよろしく頼む」

そう言つて差し出された手に、うみが手を重ねる。固い握手をする二人を見ながら、キョウはウンウンと頷いている。と、そのタイミンで扉の向こう、廊下が騒がしいことに三人が気づく。

「・・・何やら騒がしいな」

「失礼します。・・・おい、何が」

「—————!」

「うわっ!」

「!? ジラーチ!」

「ま、待て! あの謎の生物を捕まえろ!」

キョウが確認のために扉を開けた途端、そこから涙目のジラーチが飛び込んできて、うみの懐に飛び込んでくる。その後、警官が数名ジラーチを追って雪崩れ込んでくる。

「け、警視総監!?! し、失礼しました!」

哀れなことに飛び込んできた警官たちは警視総監を見て震えなが

ら敬礼する。

「この生き物に関しては良い。君たちは通常業務に戻りたまえ」  
「はっ！」

警視總監の言葉に再度元気な挨拶をすると、警官たちは綺麗なフォームで走り去っていった。

「・・・ふう、うみちゃん、そいつどうしたんだ？」

一部始終を黙って見ていたキョウは、うみの無い胸に顔を埋めているジラーチを見る。

「よしよし・・・多分、寂しがり屋なんだと思います」

「ー、ー、ー！」

「つてあああ!?服シワになっちゃうから、ぐりぐりはダメエ!」

慌てながらジラーチを落ち着かせようとするうみを見て微笑みから笑いにシフトした後藤が書類を取り出す。

「取り敢えず、うみちゃんは特別捜査員という立ち位置を用意する。外来種・・・おっと、ポケモンだったか。ポケモンに関する事件があった際はこちらで知らせよう。この書類と、後これを持っていたまえ」  
そう言つて差し出された黒いケースを手に取り開く。すると、そこに入っていた物に驚愕する。

「これって・・・!?!」

「ああ、そういうことだ」

应用到領く後藤を見た後、再度ケースの中の物を見つめるうみ。

そこに入っていたのは、旭日章があしらわれた下面に、上面には写真を入れる場所と『特別捜査員』という階級と、所在が書かれた二つ折りの手帳のようなものが入っていた。

「警察手帳?!」

「に、似たものだ。基本的には使わない方が良いが、どうしてもポケモンに関する事件で使うべき時があれば使うといい。・・・ただし、責任の所在は森本警部にあるからな」

「えっ」

ふと後ろからキョウさんの驚く声が聞こえた気がしたが、そんなことを超える驚きがあるのでうみは反応できない。ジラーチを背中に

移動させつつ恐る恐る手帳をとる。

「後日写真を撮りにきてもらうから忘れずにね」

「あ、はい！」

「それと給料に関してだが・・・」

「きゅ、給料出るんですか!？」

本日何度目かの驚愕がうみを襲う。いたずらが成功した子どものように笑い、片目をつぶりながら後藤が指を立てる。

「取り敢えず普通の公務員と同じように渡すわけにもいかないが、君は親もおらず一人で生活するということも鑑みて、これくらいは提示させてもらおう」

「・・・」

サラサラと書類の中から給料に関する書類を取り出し見せられる。それを見たうみが口をぽかんと開けて目を見開くのを見て、今度はキョウが笑う。

「あとは君がお世話になっているというご老人にも挨拶せねばな。ちようど明日退院だっただろうから、うみちゃんの家に出向くよ」

「は、はい・・・」

書類をまとめて手渡されたうみは、いまだに惚けながらふらふらと扉まで歩く。

「では、君の奮闘を期待する」

「し、失礼します!？」

後藤の敬礼に慌てて自分も敬礼するうみ。その後ライとジラーチ、書類を抱えたうみが退出すると、キョウの顔から笑みが消える。

「・・・やれやれ。うみちゃんが独自に動く為の身分を作りつつ、生活保護を建前にうみちゃんに給料を与えることで警察組織から逃げ出さないようにする。そういうことですか、警視総監殿?」

「さて、何のことだか」

キョウがしかめっ面で問い詰めるが、警視総監は椅子に座り微笑むだけである。

「・・・一応言っておきます。俺はもしうみちゃんが辞めたいというなら俺がどうなろうとも辞めさせますからね」

「・・・対策課の人事は君に一任している。好きにするといいさ」

その後しばらく警視総監をにらんでいたキョウだったが、やがて失礼しました、と言って退出する。

「・・・日本、いや世界はもう動き出しているんだよ」

そう言う警視総監の手元には、『極秘』『ハワイ島 キラウエア火山内にて発見された未知の生物に関する報告』と書かれた英字の資料が置かれていた。

「うみちゃんが正式に対策課に配属うう!？」

「あ、あはは・・・」

対策課の部屋へと戻ってきたうみの言葉に驚く面々。そんな中タケシとアンズは少し後ろで天に向かってガッツポーズを決めている。「で、でも大丈夫なのか？法律的に」

「その、書類の中に『なお、あくまで特別顧問としてその道の権威からの助力である』ってあって・・・」

「・・・つまりは書類上はうみちゃんが女兒だとは書いてない、って事か?」

「いやまあ書いてはないけどさあ・・・」

「いいんです、俺としては願ったりいな状況なので!」

やる気十分なうみを見て、じゃあいいかと一瞬で和んだ空気となりスルーされる。

一方でこの後の書類処理の矛先が来ることを悟りタケシは後方でorzしていた。

「――?」

「つと、大丈夫、もう少ししたらお家行くからな」

「――!」

また少し眠たげなジラーチをあやしていると、ふと疑問に思ったワタルが話しかける。

「そういえば、配信は今後どうするんだ?」

「あ、それに関しては営利目的での活動は無理ですけど、趣味の範疇としてならオツケーだそうです」

うみが指で輪っかを作りオッケー！と言うと、ワタルは心なしか嬉しそうにそっか、と呟く。

「うみちゃん。準備ができたよ」

そのタイミングで、キョウがうみの新幹線チケットを持って入ってくる。急いで荷物をまとめ、腰にボールが付いているか最後に確認してから職員に頭を下げる。

「ええと、昨夜はありがとうございます！また来ます！」

「いつでも来てねー」

「またね」

「くっそー！書類が案の定来やがった！うみちゃんまたね！」

「ライー！」

ライが職員とハイタッチしている。なんだかんだで仲良くなれたようだった。

「お疲れ様です！」

元気に挨拶した後、うみは家へと帰って行くのだった。

-----

「おやおや、おっさん久しぶりやん」

うみを送った後。キョウはマサキの元を訪れていた。

「にしても前の配信見たで。途中で終わってもーたけどえらいことになっとなつたやん」

「そこに関してはいい。それで、何か分かったのか」

世間話を楽しもうとするマサキを急かすキョウ。そんなキョウにニヤリと笑いながら、マサキがパソコンに向き直る。

「分かったも何も、この天才ハッカーのマサキ様に入れんサーバーなんざない。ペンタゴンでもお茶の子さいさいやで・・・見てみ」

「・・・これはまた。まづいもん見たな」

「ああ。わいも初めて見たときはごっつ驚いたわ」

調子のいいことを言っていたマサキだったが、キョウに問題のデータを見せながら冷や汗をかく。

そこにあつたのは、とある海外の研究データだった。極秘を表す文

字とともに、多重のセキュリティで守られている。

『謎の生命体に関する研究報告』、『謎の生命体の解剖結果』……加えてこれか」

「うみちやんとやらに教えんでええんか？」

「むしろ教えるべきじゃない。こんなモノ、間違っている」

「どーする？」

「引き続き調べてくれ。今は情報の鮮度と確度が最も重要だ。……許されるものではないな」

心底嫌悪する、と顔を鬼の形相にしながら吐き捨てるキョウ。

そこには最後の資料、

『謎の生命体に対する拷問・薬物による軍事的利用の可能性』  
と書かれた資料が映されていた。



## 第28話

「ライー！」

「・・・ああ、ライちよつと待ってて」

翌日、自宅へと戻ってきたうみは、目覚ましを持ってきたライにお札を言っけ起き出す。

廃墟でのゴースの一件から2日。解決後、警察署にて自身の立ち位置を確立したうみだったが、ひとつだけ問題が残っていた。

「・・・おじいちゃん、怒るかなあ」

「？」

ベッドに腰掛け、ライを撫でながら呟く。今日はおじいちゃんことガンテツの退院の日だ。そして、事情説明のためにキョウが訪ねてくる日でもある。

「もしやめろって言われたらどうしよう・・・いやでも、こんなチャンスがまだあるとも限らないし・・・」

ブツブツ呟きながらライを撫で続けるうみ。

結局ポケモン達が朝ごはんを催促しに来るまでずっと悩み続けるのだった。

「・・・あつ」

時は過ぎ、昼頃の病院。ガンテツの病室へとやってきたうみは、ガンの腕のギプスが外されているのを見て嬉しそうに駆け寄る。

「おじいちゃん！」

「ん？おお、うみちゃんか。これでもう大丈夫だぞ」

そう言っけやや筋肉の落ちた腕を振るガンテツ。元気そうなその姿に嬉しそうに頷くうみを、他の患者が取り囲む。

「いやー、もううみちゃんは来なくなるんかあ」

「寂しゆうなるなあ」

「ガントツ爺さん、うみちゃんしつかりと守りんさやね」

「分かつとるわ。そがなこと言われんでもようわかちよる」

「ライちゃんももう来んくなるんかねえ・・・」

「ライ！」

「大丈夫ですよおばさん。また今度見舞いに来ますから！」

「本当かい？最近はずがれも忙しいみたいで見舞いに来てくれる人なんていなかったから嬉しいよ」

ひたすらに撫でられ、飴をもらいながらお別れの挨拶をしていくうみとガントツ。病室を出て、最後の検査の後に病院を出る。

「わしがおらん間ちゃん和生活できとったか？」

「うん。食事はお隣のおばあちゃんに作ってもらったけどね」

日々のなんてことない日常やガントツの病室での話など、両者の近況を話しながら歩いていると、病院を出てすぐのところできョウが車の横に立っていた。

「・・・うみちゃん、この人は？」

若干不審な者を見る目できョウを睨むガントツ。きョウはガントツに一礼すると、手帳を取り出す。

「どうもはじめまして。自分は森本警部補・・・警察の者です。本日はうみちゃんの現状と行っている仕事についてご説明をと思い伺いました」

きョウが手を出すと、ガントツも黙って手を差し出す。二人がガツチリと握手すると、そこからミシミシメリメリと嫌な音がする。

「・・・お話は帰ってからにしましょう」

「そうしましょうか」

(な、なんでこんなにピリピリしてんだ・・・?)

二人の只ならぬ雰囲気、一人ビクビクするうみだった。

「全くこのバカモンが!!」

「す、すいませえん!?!」

ガンテツの家へと移動した三人。現在うみは、ガンテツから相当なお叱りを受けていた。

「うみちゃんは人にために動く人間じゃからあつちこつち行くのはしょうがないとは思っていた。しかしな!自分のことをもつと大切にせえ!」

「・・・はい」

畳の上で正座状態でこつてりと絞られるうみは、すでに半分真っ白に燃え尽きている。キョウはと言うと、机を挟んで向こう側で繰り広げられているお叱りとガンテツの勢いに驚きの表情を浮かべている。

「・・・つと、すいませんお客がいるのに」

「い、いえ。お気になさらず。本来なら私が行うべき説教ですの  
で」

大人として、うみを止めるべき立場だったと自覚しているキョウはうみを助けることはない。ライも主人が悪いことをしたと言うのは感覚で分かっているためあえて無視して昼寝中である。

「・・・これ以上言っても仕方ない。今日はここまでにしよう」

「はい・・・。あばばばばば!?!」

ガンテツの言葉にようやくか、と息を吐きながらぶつ倒れるうみ。正座の時間が長過ぎて足が地獄のような痺れを引き起こしていた。

「それで、うみちゃんが警察の方と働くと言うのはどういうことです」  
キョウに向き直って座り直すガンテツ。キョウは真剣な表情のガンテツにうみにも話した内容を事細かく話す。

「・・・というわけで、うみちゃん自身の意思を尊重しつつ、このような結果となりました」

「・・・」

説明を終えたキョウは、黙り込んだままじつと床を見つめるガンテツの返事を待つ。

「・・・うみちゃん」

「あばばば・・・あ、はい！」

未だ呻いていたうみにガンテツが話しかける。

慌てて座り直し返事をするうみ。そんなうみに対し、ガンテツは不安のこもった言葉をかける。

「うみちゃんとは分かってているのか？警察とともにライクンのようなポケモンに関わることの意味を。きっと君が見たくもないもの、信じたくない事実。そう言ったものがうみちゃんを苦しめるぞ」

ガンテツの言葉にはつとずるうみ。キョウも苦い顔で事の成り行きを見守る。

うみは、今までのポケモンのトラブルや事件を思い出していた。

（ゾロアークも・・・ゴースも。もつと最初ならサイドンの時も。そうだ、この世界にポケモンが来るつてことは、ポケモンと人との対立を目にし、実際に体験するつてことなんだ）

うみは少しの間考える。やがて、その顔には微笑みが生まれる。

「・・・大丈夫、わかっているよおじいちゃん」

「・・・！」

「確かに、俺はポケモンをと人との共存を目指すつて言ってるし、そのために警察とも連携する。・・・そりゃあ多くの人がポケモンを否定するかもしれないし、ひよつとしたら俺が信じたくないような事件も立ち会うかもしれない。でも、だからこそなんだ。おれはそういう事件を、そういうことに関わってしまったポケモンと人との関係を直せるような仕事が見たいんだ。」

・・・だから大丈夫。俺、逃げないし、折れないよ」

キョウはうみのその言葉を聞いて少しだけ驚く。ガンテツはしばらくうみの表情を見て、決心が変わらないことを悟るとため息をつく。

「はあ・・・全く、わしが病院で寝とる間に随分とまあ。・・・分かったよ、やりたいようにやりなさい」

「！ありがとうございます！」

「ただし。・・・どうしても辛くなったら、わしのとこに来んさいな」  
満面の笑顔でガンテツに飛び込むうみ。ガンテツはそんなうみを

受け止め、目を細めて頭を撫でる。そんな二人の姿を見ながら、ふつと微笑むキョウ。

「・・・ところでキョウさんや」

「?何でしょう」

「うみちゃんを任せることとなっておるんじやが、どれ。一つ手合わせしようか」

「・・・あ?」

—————

キョウが何やら雲行きが怪しくなった対談に冷や汗をかき始めた頃。

警察署の中に作られた対策課の部屋で、ワタルとタケシが話し込んでいた。

「・・・それは本気なのかい?」

「ええ」

真剣な表情のワタルに、そうかー、と頭をガリガリ搔くタケシ。普段から細かい目をハの字にしながらワタルの持ってきた資料を手にする。

「にしても、君のとこの親御さんは、これどう考えても反対されたんじゃないの?」

「ええ。爺さんからいいの一発もらいました」

そうだろうな、と右頬を真っ赤に腫らしたワタルを見つつ呟くタケシ。

ワタルは、なんと通っていた大学を休学してまで、対策課で働くと言いだしたのだった。

「にしてもなんでここまでやるの?やる気満々の俺がいうのもなんだけど、君一応一般人だし、これ警察案件だからね?」

タケシは書類をバツサバツサと仰ぎ、言外に辞めとけよ、とワタルを説得する。しかし、ワタルは意思を変えることなく真剣な目で答える。

「・・・俺だって最初はあんまり首突っ込まないつもりでしたよ。でも、

ミニリユウと出会って、うみちゃんに会って、ポケモンってのを知って。・・・もう部外者だとか言つてられないんです。俺、ポケモンと人が分かり合える世の中にする、っていううみちゃんの願望と同じ思いを、もう持ってしまいましたから」

そう言い切るワタルを見てため息をつくタケシ。

「・・・それに、ポケモンを持つてる人材は貴重でしょう？俺みたいに協力的なやつは特に」

「・・・かあー！全くだい性格してるよワタル君。いいぜ、キョウさんに掛け合ってみよう」

「・・・！」

ありがとうございます！と立ち上がって頭を下げるワタル。いいよいいよと手を振りながら、タケシも立ち上がる。

「それじゃあ、とりあえず準備しよっか！」

「？何をですか？」

頭に？マークを浮かべるワタルにニヤリと悪戯つ子のような笑みを浮かべるタケシ。

「実はさっきうみちゃんから連絡があつてね・・・ポケモン持ちで時間空いてる奴集めてやるらしいぜ？ポケモンバトルの特訓合宿」

「・・・！」

「なんせ現在確認されている中で一番強いうみちゃん直々の特訓だ。もう農家ニキとチャラ男君は参加するって言ってるよ。・・・答えは聞いたほうがいいかな？」

タケシの言葉に、ニヤリと笑い宣言するワタル。

「もちろん・・・やります！」

タケシはその言葉に一層笑みを深め、ワタルの肩を叩きそのまま準備に連れて行くのだった。

「あ、一応言っとくが泊まるここはうみちゃん家だから。なんかポケモンがめっちゃいるらしいぞ。機嫌損ねたら握りつぶされて毒針で刺されるらしい」

「・・・は!?!」

一瞬の間の後、ワタルの驚愕の絶叫が廊下に響くのだった。

「・・・あの、本当にやるんですか?」

「?・おう、気にせんでええぞ。こう見えて昔は結構動けたからな」

ガントツからの突然の決闘の申し込みを受けたキョウ。現在はいみの家の裏庭で二人が相対していた。病み上がり、それも老人であるということに気が引けているキョウ。そんな相手の事は意に介さず、甚平姿で素足となった足を踏みならしているガントツ。

「まあ、わしも結構なまっとするし3分。その間に一本取った方の勝ち、どちらも取れなんだ時は・・・まあうみちゃんを任せるにたると認めよう。及第点としてな」

要するにうみが世話になるとして、うみをしっかりと守れるのかを知りたいという事だった。

・・・だとしてもなんで格闘?と思いつつもその場の流れで行われることとなった。

「えーと・・・じゃあ、お互い怪我なく終われるようにしましょう。・・・出来るだけ」

二人が準備完了したところで、うみがホイッスルを持って少し離れたところに立つ。一応審判役としてである。

「では、どうぞー!」

piiiiiiiii!

うみが笛を吹き、乾いた音が鳴り響く。

「遅い」

「ー!?!」

きつと構えたキョウだったが、いつのまにか目前まで迫ってきたガントツに驚愕しながら左に躲す。すると先程まで顔のあったところをガントツの貫手が通り過ぎる。

たまらず背後に飛びのくキョウ。しかしガントツはまるで予知していたかのようにスイーツとついて動き、ぴったりとくつついて離れない。

「ちよ、ガンテツさん……!あんた一体……!?!」

「喋つとる場合か!?!ほれ足!」

未だ驚愕が抜けきらないキョウの隙をつき、ガンテツが足払いを仕掛ける。しかし、キョウは素早く飛び上がり、そのまま空中で回転してのかかと落としを仕掛ける。

「……ッしい!」

「ほう……!」

それを両手をクロスして受け止めるガンテツ。互いに相手を振り払い距離を取る。余裕、というよりいたずらの成功したかのような笑みを浮かべるガンテツに対し、キョウは冷や汗が垂れる。

「ガンテツさん、あんた格闘技の経験でもあったのか?」

キョウの質問に、よくぞ聴いてくれた、と嬉しそうに語り出すガンテツ。

「いやあ、昔から色んなものに手エ出してのお。カポエラムエタイ柔道柔術空手合気道剣道サバットキックボクシング少林寺その他諸々、色んなもんを少しだけかじってはやめを繰り返しておったわ。なんせ家柄なのか武道には目がなくてな。それに、昔はこう見えて戦艦乗って戦ってたくらいじゃからなあ、海軍式格闘術も少しは覚えとるぞ」

「……なるほど」

(いやなるほどじゃなくないですか?)

ツッコミ不在で睨み合う二人に心の中でツッコむうみ。ガンテツの予想外な一面や、初めて見た映画のような戦闘に色んな意味でドキしてくるうみ。

「じゃあこちらも行きます……よ!」

「……ふふふ、いいねえ!」

今度はキョウの方から距離を詰め、上段蹴りを仕掛ける。ガンテツはそれを上体そらしでよけ、蹴りの勢いのままに一回転して襲ってきた拳をそのままバク転で回避する。

少々離れた距離を埋めるように互いが接近し、今度はボクシングスタイルの拳の応酬が始まる。両者共にガードなどと言う考えを廃し、



拳をよけ、繰り出し、相手と拳を打ち合いながら一步も譲らない。さながらラツシュの早さ比べでもしているかのような光景だった。二人の後ろに見えないはずの人型の何かが見える・・・ような気がする。「・・・?!?!」

そんな二人の攻防を見た通りすがりのバンギラスは、お手本のような二度見をしてその後うみの横で食い入るように二人の戦いを観戦するのだった。

「そこお！」

「なんの！」

今度は足技まで入り、より激化する戦闘。キョウが上段下段と蹴りを連続で繰り出し、その後飛び上がり足で相手の腕と顎をはさみ粉碎しようとしたり、それをすると躲したガンテツが甚平姿とは思えないくらい機敏に懐に飛び込み、腕を顔の前で構えて無限の螺旋を描くようにしてパンチの嵐を繰り出したりするのを眺めながら、3分などとづくに過ぎてしまっているタイマーを持ちつつ、

(・・・いつからバトル漫画始まった?)

と心の中で呟くのだった。

—————

「いやあ、なかなかいい試合だった。やるじゃないかキョウ君」

「いえいえ、俺なんてまだまだです。またいつかしましょうガンテツさん」

その後10分経ってようやくうみが現実逃避から戻り、ストップをかける。二人はどうやら拳を交えた事で友情のような何かでも芽生えたらしく、熱い男らしい握手をしている。・・・ガンテツ的には合格のようだ。

「これからもうみちゃんをよろしく頼むよ」

「ええ、きつちりと世話します」

「・・・あの、もういいですか?」

話がついたようなのでうみが恐る恐る話しかける。

「ああ、どうしたんだいうみちゃん」

「いえ、取り敢えずタケシさんには伝えたんですけど、キョウさんにも

言つとくべきかなあつて思つて」

そう言つて特訓合宿の提案を説明するうみ。キョウはうみの提案を聞きふむと頷く。

「なるほど、ちょうどいいだろう。たしかに個々のポケモンの練度向上は最優先事項だ。・・・任せてもいいのかい？」

「はい！俺自身そんなバトルに自信があるつてわけじゃあないですけど、少なくとも最低限のことは教えられると思うんで」

そうして、後日うみの家における特訓合宿が決定するのだった。

「ああ、そうだろうみちゃん。一人、ポケモンに関与する人物として会つて欲しい男がいるんだが」

キョウの言葉に首をかしげるうみ。

「？分かりました。その人つて何をしている人なんですか？」

「マサキ・・・俺の仕事の手伝いをしてきている、少し訳ありの学生なんだ」

とある研究所。マサキが盗み見たさまざまな研究データの出どころの一つであるその場所では、有名な科学者達が集まり、ポケモンに関する研究をしていた。

「・・・ダメです博士、この個体も完全な収容は不可能です。どうやら身体中が毒性の強いヘドロで出来ているようです」

博士と呼ばれるその男は、助手を務める男の言葉に顔をしかめる。

「・・・見れば見るほど醜悪な姿だ。これで生きている生物だなんてな」  
その視線の先、二重構造の強化ガラスの先の白い部屋では、紫色のどう見ても触れてはいけない類のものに見えるヘドロが鎮座していた。

そのヘドロの周囲や下の床は、今なおそのヘドロで溶け始めている。

「ベアアアア・・・」

「・・・ふん、バケモノめ」

動き出したそのポケモンにゴミを見るかのように吐き捨てる博士。するとその時、慌ただしい部屋の中に、血相を変えた研究者が入つて

くる。

「何事だ」

「報告します！未確認生物一型が、脱走しました！」  
「！」

その報告に、今まで気味悪いほどに無表情だった博士が目を見開く。

(いかん、『あれ』はある程度こちらの言う事を聞く丁度良い研究対象だったと言うのに・・・！早く捕縛せねば・・・！)

「急いで通路を一部封鎖、一型を確保しろ」

「は、はい！」

博士の言葉に頷くと、慌てて走り去って行く研究者。再度ヘドロ状のポケモンを見つめる博士の顔には、凶悪な笑みが浮かんでいた。

「・・・貴様らの秘密、私が全て暴いてやるからな」  
「どんなことをしても。」

そう言っただけで博士はその部屋を後にするのだった。

## 第29話

「・・・何故だ」

完全に崩壊した都市のビル群の中、ワタルは灰色の煙に包まれた空を見つめ呟いた。その顔には焦燥と怒り、そして言いようのない悲しみが浮かんでいる。

「・・・っ！何でなんだ・・・！うみちゃん！」

怒りのままに叫ぶワタル。その見据える先にいるのは、無表情のうみ。傍には倒れ臥すキョウ。うみが無造作に腕を振るうと、とつさに避けようとしたワタルの体がゆっくりと地面に倒れる。

「・・・しようがないんですよ、釣り師ニキ。これがみなさんが望んだ結果です」

無慈悲に、かつ無関心なその言葉とともにゆっくりと歩き出すうみ。

「・・・！ま、待ってくれうみちゃん！俺たちが、俺たちが悪かった！だからなあ、もう勝負はついてる、だから・・・！」

ゆっくりと近づいてくるうみにタケシが必死の命乞いをする。手に持っていたものを捨て、抵抗の意思がないことを示している。それでもなお、うみは止まらない。

「ダメですよ・・・警部ニキも釣り師ニキも農家ニキも、チャラ男さんも。みーんなもう先に行っただからです。警察ニキで最後ですよ」  
遠く離れた場所で、ビルに背中を預け死んでいる農家ニキや、一番最初に強襲されたチャラ男を指しながら、嬉しそうに笑ううみ。そんな相手にタケシは、もはやこれまでと覚悟を決める。

「・・・いくら推しとはいえもう看過できませんぞ・・・！うみちゃん！」  
「あはははははっ！良いですねえ、そそりますねえその覚悟！来てください、俺のすべてでもって受け止めますから！」

狂気の笑い声をあげるうみに、やけくその特攻を仕掛けるタケシ。勢いよく突っ込む中で、右手に持った最後の武器を突き出す。

「・・・!?!」

タケシの一撃をなんでもないもののようにひらりと躲し、両手に

持った特徴的な武器を構えるうみ。

「そんな馬鹿正直な攻撃じゃあダメですよ・・・さよならです」  
最後にタケシが見たのは、鉄色の杭だった。

「だあああああ!?!」

「ふっふーん、甘いですよ警察ニキ!」

『草』『うみちゃん強強じゃねーか』『どうかゲーム選びのセンスよ』  
『四脚パイル月光とかなんともまあ・・・』『にしても警部ニキに関してはアセン全くわかってないっばいし』

「いやあ、難しいな・・・」

「まさかここまでうみちゃんが強いとは」

「・・・いや、そもそもなんで俺らゲームしてんの!?!」

ツツコむワタルの叫びに、人間達の横で遊んでいたポケモン勢がやれやれと首を振る。

ワタル達がうみ家にやってきたのは数時間前のことだった。

「いらっしやいませ! お疲れ様です!」

「やあ、お世話になるよ」

「う、うおおお、おれ女の子の家にお邪魔するの初めてっすわ・・・」

「よろしくね、うみちゃん」

「・・・思ってたより普通なんだな・・・」

「ワタルさんは一体どんな家だと思ってたんですか・・・」

玄関で出迎えたうみに連れられ、二階の空き部屋に荷物を置く野郎ども。

「よし! それじゃあ、特訓について説明を・・・」

「あ、待ってください。えーつとですネ・・・」

気合いとやる気十分のワタルに、うみがストップをかける。ゴソゴソと押入れの中を探ると、黒い箱のようなものを取り出す。

「ゲームー！しましろうー！」

「「「・・・え？」」」」

「・・・で、今に至ると」

「そんなに張り詰めても良いことないし、まあ気楽にいこうや」

「一人、まだ来ていないしな」

『釣り師ニキ負けまくって不機嫌か？』『ワロスw』にしても初代からVDまで全部のシリーズでやってるのに誰もうみちゃんに勝てないのか・・・』

「まあ粗製の鴉じゃあ山猫には勝てないってことですよ」

『はい本日のドヤうみ出ました』『可愛い』『ない胸張ってるのが微笑ましい』『ないのが良いんだるおおおん!』『次なにやる?』

コメント欄はうみのドヤ顔をいじりながら、既に次のゲームに興味津々だった。うみは、前回意図せず強制終了してしまった配信の謝罪と事情説明も兼ねて配信をしていた。うみ以外の人間が映らないよう、テレビのゲーム画面固定である。うみ以外はそこを通らないようにし、それぞれにネットでのニックネームで呼び合うよう男性陣には注意している。

「それにポケモン達も少し長旅してきたんですから、今日1日は休ませるのは予定に入れましたから。あんまり無茶させても強くはなりませんよ?まあ、なんか調子良さそうですし、午後からやるのもアリですが」

「・・・なるほどね。分かったよ、その辺に関してはやっぱり俺よりうみちゃんの知識だな」

『当たり前だろおおおん?』『特訓って?』『タイトル見てこいアホ。今

日の配信はヤベーぞ』『現在日本でポケモンを持っている奴らが全員集合してるんだぜ？ヤベーだろ』『まじかよ。うみちゃんのファンになるんで那珂ちゃんのファン辞めます』

「まあトレーナーの皆さんには今夜しつかりとポケモンとの戦いについてレクチャーしますけどね。視聴者の方も、今夜の配信を見ていただければもしもポケモンに出会ったりした時に役立つ可能性ありますよ」

『まじかあああ』『ちよつとその辺の山行ってくる』『コラツタってやつはネズミらしいからおれ下水道探してくる』

「あ、待ってください。前回の配信見ましたか？」

『？ああ、肝試しか』『あれはビビったな』『あのポケモン怖すぎね？』  
前回の配信を見ていた視聴者がいたことに安堵しつつ、うみは全員へ警告する。

「あの配信を見てくれた方には想像がつきやすいと思いますが、本来ポケモンっていうのは危険な生き物なんです。例えば俺の相棒のライなんかも、やろうと思えば少し電気を流すだけで俺を殺せます。警部ニキのヒトモシというポケモンも、本来の習性では人の生命力を吸い取ってしまうという恐ろしい能力も持っています」

『怖!』『そーいえば確かに、ライニキとかうみちゃんにべつたりだから気にならなかつたけど、あの電撃とか危険すぎるよな』『コラツタでさえやばそうなんだけど』『ポケモンやばくね?』『これからも増えるんだろ?なんか怖ええな』

コメント欄が少しだけ大人しくなる。うみはそこですかさず自身の主張を述べつつ視聴者に訴える。

「ですが、彼らとの付き合い方を覚え、むやみに刺激しなければ、良き隣人として接することはできるんです。現にいま、俺以外にもこんなにポケモンと仲良くなった人たちがいます。みなさん、ポケモンは確かに危険な力を持つものかもしれませんが・・・ですが、分かり合い、助け合うこと。友人や家族として一緒に生きることでもできるはずなんです。

ですからどうか、俺達がそれを証明していくので、それまで無茶な

ことは控えてください。もしポケモンで困っているようなら、俺はそれをあらゆる形でお助けします。どうか、よろしくお願いします」

そこまで言ってから、深々と頭を下げるうみ。

そんなうみの様子を見ながら、キョウは感心する。

(なるほど、動画投稿者という形での注意喚起か。行動力のある10代前後の人なら配信という形での情報の方が効くだろうな。ニュースを見ない輩もいるだろう。・・・うみちゃんがそこまで考えてやっているのかはわからんが)

『まー命が惜しいしな』『確かに。あれ見て無闇に近づこうとするほど死にたがりじゃねえなあ』『でもポケモン持つのは憧れるわあ・・・』『今後次第じゃね?』

視聴者も一定数納得してくれているようで、うみもホツとする。

「・・・では午前の部はここまで。次は午後にもまた配信しますね。明日は特訓なので配信はお休みです。また明後日、お会いしましょう。ありがとうございますございました」

『乙』『おつー』『さーてポケモンで日本が忙しくなるぞー!』『午後の部はうみちゃんリスナー必修だな』『誰かスレの方にもURL貼つていて』

配信を終え、うみがパソコンを閉じる。ワタル達もゲームを片付けると、裏庭へと移動する。

「・・・では、これから配信では決して言わないことをお伝えしときます」

「おう。・・・でも、ポケモンに関して何かいうことがあるなら一般のやつにも周知しとくべきじゃないか?」

タケシの言葉に首を振るうみ。他の面々の顔を見つつ、うみは背中に背負っているリュックを開ける。

「・・・こいつは、廃墟で出会った・・・?」

その中にいたのは、スヤスヤと眠るジラーチだった。唯一見たことのあるキョウがそれに気づく。

「・・・この子の名前はジラーチ。・・・数あるポケモンの中でも、特別希少な『幻のポケモン』と呼ばれる個体です」



「・・・幻？」

全員がピンとこないという顔でジラーチを見る。うみの腕の中で気持ちよさそうに寝息を立てている様子は愛らしいが、全員何がどう幻なのか分からない。

「この子は、およそ1000年のうちに七日間だけ目を覚ますと言われていました」

「せ・・・!？」

驚くワタル達を気にせず、うみは説明を続ける。

「本来は『眠り繭』と呼ばれる状態になって地脈や水脈の中で眠るんですが・・・この子に聞いて見たところ、最近眠りが浅くなつててしよつちゆう起きてしまうそうです」

「それで幻か・・・だが、それなら一般人に周知しても問題ないのでは？そもそも見つけることが困難だろうに」

キョウの言葉に、うみは首を振る。

「いいえ。この子に関する情報は、本当に信頼できる相手にだけしか話せません。・・・このこの最も恐ろしい点。それは、『どんな願いも叶える能力』です」

全員の間で静寂が訪れる。最初に再起動したのはタケシだった。

「・・・うみちゃん、それってあれか？神龍的な何かか？」

タケシの言葉に頷くうみ。啞然としつつも、一瞬の間にチャラ男以外の全員がその能力について思考を巡らせる。

「・・・そういうことか」

「え？何が？」

「なんでも願いを叶えるポケモン。んなもんどう考えても危険な上に誰もかれもが狙って大変なことになるわ」

「・・・ああ！そういうことか」

「本当にわかってんのかよ・・・」

調子よく笑うチャラ男を見て不安そうなワタル。そんな中、キョウがうみへ尋ねる。

「でもそれを俺たちに教えたのはなぜだ？そんな危ないポケモンならば、誰にも教えなければいいんじゃないか？」

「・・・ぶつちやけまだまだジラーチレベルで危ないポケモンはいっぱいいます。この世界に現れているのかは分かりませんが・・・それでも危険なポケモンがいる、と言葉で曖昧に伝えるよりは、実際どのくらいヤバイのかの見本としてですね、教えた理由の一つは」

「・・・もう一つは？」

「もしも俺に何かあった場合に、ジラーチを守ってもらうためですね。俺自身いつ何があるかは分からないと思ってるんで」

そう言いながらうみの脳裏に思い出されるのは、『うみ』としての記憶。なんらかの制約の下でこの状況が成り立っているのだとしたら、いつ『○○』としての意思や人格が消えるのかも分からない以上、残されるジラーチに関して放置するのはマズイ。

「・・・あんまりそういうことは考えたくないな」

キョウのしんみりした言葉に、男性陣が頷く。うみはそんな様子を見て雰囲気切り替えようと微笑む。

「・・・じゃあ、お昼。食べましょう！材料は買ってきてるんで、今日はカレーです！」

「・・・おーいいね！じゃあ俺手伝うわ」

ワタルが料理の手伝いを立候補し、他の面々は食事の準備をする。ポケモン達は、それぞれのパートナーに着いて行き、準備を手伝っている。

(幻・・・ね。『願いを叶える』レベルがゴロゴロいると。それはまあゾツとする話だが・・・。それを知っている、いやおそらく実際にそんなポケモンを間近で見てもいるんだろうな。うみちゃんは。この世の誰も知らないはずのそんな存在を)

机を運びながら、キョウの頭の中には、うみの正体に関する考えがぐるぐると巡っているのだった。

「はいそれでは、午後の配信兼特訓の一環として、ポケモンバトルといきましようか」

昼食後、裏庭に集まったうみ達。庭には、スピアー達が忙しく岩を集めてきている。

『でっか!?』『蜂・・・だよな、あれ』『いやいやいや・・・あんな蜂に襲われたらタダじゃ済まんぞ・・・』『あんな蜂相手にできるかよ!?俺の仕事もう今後無理だろ!あんなの相手にできるかよ!』『蜂駆除業者ニキは強く生きろ』

配信の視聴者は飛び交うスピアーに驚いているようだ。中には蜂退治の業者の人間もいたらしく、コメントから慌てようが伝わってくる。

「うみちゃん。バトルは分かったんだが、あの岩は・・・?」

「ああ、即席のバトルフィールドにするんです。あの岩に囲まれた場所から出たら即アウトです」

「にしてもバトルは早すぎないか?」

農家ニキが心配げに告げる。しかしうみは首を横に振ると、説明を続ける。

「現状のポケモンによる事件の概要は資料から見てきたんですが、どうやらポケモンの習性が認知されていないがために怒らせてしまった結果という場合が多いみたいです。つまり、もし俺たち対策課が動くことになったとしたら、9割方戦闘が待っているってことです。だからこの特訓でしっかりと経験を積んだ方がいいと思うんです」

「うーん・・・なるほどな」

「あ、準備できたみたいですし、早速やって見ましようか」

誰から先にやりますか?とうみが聞く。すると、真っ先にワタルとタケシが手を挙げる。

「俺が行く。この中では一番経験があるはずだしな」

「俺もだ。折角の機会だ、より多く経験したいし、ズバットもやる気みたいだしな」

「分かりました。じゃあ、まずは釣り師ニキと警察ニキですね」

『この2人か!』『釣り師ニキどのくらいなんだらうな』『初めて見る

わ、楽しみ』

ワタルとタケシが、配信に映らないギリギリの位置に立ち、それぞ  
れのパートナーをフィールドに出す。

「いけ、ミニリユウー！」

「やってやれ！ズバット！」

気合十分のズバットとミニリユウ。対してうみは、腰に提げたポ  
ールには手を伸ばさず、スピアー達を暫く見つめた後、二匹ほど呼ん  
でくる。

「じゃあ、俺はこの二匹ですね」

「スピッツ」

『蜂だ』『見るからにむしタイプ』『いやいや、案外空飛んでるからひこ  
うってこともあるんじゃないかね？』『複合もあるんだろ？ならむしと何か  
だろう』

うみが連れてきたのは、レベル的にミニリユウとズバットとほぼ同  
じくらい、つまりは実力的に差があまりないポケモン同士での戦いに  
したのであった。

「本来野生のポケモンとのバトルにルールは無いですけど、今回は特  
訓なんで。勝敗は戦闘不能を俺の方で判断します。それと一度バト  
ルが終わったらあそこのスピアーに頼んできのみを貰ってください。  
スピアーはどくわざも持っているんで、毒状態にされることもあると  
思いますが、きのみで対処できるんで直ぐにリタイヤしてください」  
うみが指差した方には、何故か眼帯をしてタオルを首にかけたスピ  
アーがフィールドの囲いになっている岩を叩いている。まるでボク  
シングのセコンドである。

「了解だ」

「わかった」

「他の方は次の準備がてら見て研究してください。・・・では始めます」  
周りで見ているスピアー達の羽音が静まり、キョウ達待機組も真剣  
にフィールドを見ている。

緊張感の漂う空間の中、うみが手を挙げる。

「それでは・・・始め！」

「ミニリュウ、『でんじは』！」  
「ズバット！『ちようおんぱ』」

合図とともにワタル達がパートナーに指示を出す。ミニリュウが口から電気の球を、ズバットは超音波を放つ。

「スピアーA前方2メートル地面に『ミサイルばり』、スピアーB上空へ回避」

うみの指示でスピアーAが地面へと針をばらまく。ミニリュウのでんじはを受けるが、砂埃が舞うことでワタル達の視界から外れる。Bは素早く上空へ飛び、超音波を避けつつ砂埃の届かない位置へ行く。

「ズバット、『きゆうけつ』！」

「ミニリュウ！『たつまき』！」

上空へと逃げたスピアーに気づき、2人がそれぞれに指示を出しつつ攻撃を加える。

「・・・甘い。スピアーA、『ダブルニードル』」

「!?しまっ!?!」

「スピッ」

「フウ!?!」

「ズバット!?!」

ミニリュウ達の注意がスピアーBへと集まったと同時に、煙の中から猛突進してきたスピアーAの針が突き刺さる。勢いそのままに吹き飛ばされ、岩に叩きつけられるミニリュウとズバット。ワタル達は焦りながら起きると指示を出しているが、その上空から重力に身を任せスピアーBが襲いかかる。

「終わりですね。スピアーB、『みだれづき』、Aは『ミサイルばり』」

うみの指示で容赦ないトドメが降り注ぐ。

「ミニリュウ！」

「くっそ、ズバット！」

砂煙の向こう、パートナーの身を案じて叫ぶワタルとタケシ。砂煙が晴れると、そこには呆然とするミニリュウ達と、的確に傷つけないようミニリュウ達の周りに突き刺さる針と、スピアーBの腕の針が

あった。

「・・・はい終了です。お疲れ様でした」

うみが終了の合図を出すのが、ワタルもタケシも呆然としている。

『うおおお、強ええ!?!』『さすうみ!』『ライニキじゃないからいい勝負なるかと思っただがなー・・・』

「お二人共、事前に渡していたわざのリストをよく呼んでるみたいで  
すし、最初に状態異常で有利に持ち込もうとするのはいい戦術です。  
でも、相手の方が素早いとこういうことも起きますし特に『でんじは』  
のまひ状態は、相手の視界から消えることで機動力の低下を補えるの  
でその辺も注意が必要ですね」

「・・・ああ、分かった。全く、流石の強さだな」

「かあー！参った参った、完敗だわー・・・」

うみからのアドバイスを受けながら、パートナーを連れてきのみを  
受け取りに行く2人。一方バトルを見ていたキョウ達は、うみの戦い  
を見て冷や汗を流す。

「かなりの練度だなあ、あの蜂。毒もありで素早いって、マジで怖い  
な」

「・・・俺のコラツタ無事じゃ済まなそうなんですけど・・・」

「・・・」

「じゃあ次、どなたから行きます？さつきはいきなりタッグでバトル  
しましたけど、一対一でもいいですよ？」

うみがそう言うと、今度は農家ニキが手を挙げる。

「じゃあ次、俺が1人で行ってみるわ」

「分かりました。・・・ええと、じゃあ次はサイドンが相手します」

「・・・!?!」

まさかポケモンが変わると思っていなかったのか、驚愕する農家  
ニキ。

『今度はまたテックケーな』『サイドンっていうのか。固そうだな』『農家  
ニキの犬で勝てるのかこれ?』

視聴者は早くも無理と断じる者がいるが、農家ニキは眼鏡を押し上  
げ、ニヤリと笑う。

「・・・いや、手はある。・・・筈だ」

そんな農家ニキに微笑みながら、うみがバトルを開始する。

「では、始め！」

「・・・これは」

「まさかの状況だな」

『おいおい、すげーな農家ニキ』『善戦、っていうか押ししてね?』

開始から40分が経過し、状況は最初の予想を大きく上回る状態だった。動きが鈍くなり、息切れしているサイドン。対する農家ニキの相棒ガーディのコロは、狭いフィールド内を縦横無尽に駆け回りながら、近づくサイドンから逃げ回っている。

「サイドン、『がんせきふうじ』！」

「コロ!『ほえる』!」

サイドンが大きな岩を出現させ、コロへと向かって放つ。しかし、コロは素早く躲しながら大きな咆哮でサイドンを牽制する。

(・・・正解。サイドンはタメや振りの大きいわざしかないし、何より図体がデカイ分バトルでなら息切れさせるのは可能。それでいて「ほえる」でとりつかせないようにしてつかず離れず、「ひのこ」を織り交ぜながら地道に攻撃。・・・農家ニキは優秀ですね)

その後も、長時間のバトルとなり、最後にはひのこが出せなくなりながらも、相当にダメージを負ったサイドンへ『たいあたり』のヒットアンドアウトでコロが勝利したのだった。

「そこまで!勝者、農家ニキ!」

『勝ったああああ!』『期待の星や』『やんややんや』『すげー長かったな』

「お疲れ様です」

「いやー、うまく行ってよかったよ」

メガネを取り、汗だらけの顔を拭く農家ニキ。その横では疲労しているであろうに嬉しそうに農家ニキの周りをくるくる回るコロ。文句なしの結果ではあるが、念のためにと忠告するうみ。

「バトル自体は素晴らしい結果でしたけど、実際には突然別のポケモンに乱入されたりすることもありますし、引き際を見極める練習とかもしたほうがいいですね」

「ああ、そうだね。コロにあまり無理させたくないし」

コロを抱きかかえながら考え事を始める農家ニキに説明しながら、頑張ったサイドンをねぎらいきのみを渡すうみ。流石に日々畑仕事しかしていないサイドンには急にバトルは無茶だったか、と自省する。

「じゃあ次は、キョ・・・警部ニキとチャラ男さん、どっちから行きますか？」

「俺！俺から行きたいっす！」

「俺は後でいい。まだもう少しどういうもんか理解してからの方がいいだろうしな」

元気に手を挙げるチャラ男と、メモ帳を取り出しなにやら書き込んでいるキョウ。視聴者の方もどうやら勝利者が出たこともあり結構賑わい、ポケモンバトルに関心を持ってきている。

「俺ももう一回したいな」

「俺もだ。こうなったら勝つまでやるぞ！なあズバツト！」

「ズバツズバツ！」

きのみで回復を終えたワタルとタケシもやる気満々で戻ってくる。各々がポケモン・他のトレーナーとのコミュニケーションをとりながら、どうやって戦うのかを研究している。そして、バトルを通じてさらに絆を深め、それでいて視聴者は勝敗に一喜一憂し、どちらがどう強いとか、こつちのポケモンがすごいとか、コメントの交流も活気付いてくる。

そして特訓開始から数時間が経過し、ある程度戦術的駆け引きもでき、男性陣同士でのバトルも行い始めた時だった。

「ミニリユウ、『たたきつける』！」



「ヒトモシ、『あやしいひかり』！」

「しまった!？」

ワタルとキョウのバトル中、それは起こった。

ヒトモシがミニリュウへとあやしいひかりを使い、ミニリュウはフラフラとこんらんし、動きが止まる。

「いまだ、『ほのおのうず』！」

「ミニリュウ、回避だ!後ろへ飛べ!」

とつさに指示を出すワタルだったが、ミニリュウはこんらん状態でうまく動けない。そこへヒトモシの放ったほのおのうずがクリーンヒットし、大ダメージを受ける。

「ミニリュウ!」

思わず叫ぶワタル。無情にもキョウは追加で『おどろかす』や『スモッグ』などを使い、ミニリュウを追い詰めて行く。絶体絶命の状況に陥った相棒にいてもたってもいられなくなったワタルは、無意識に叫ぶ。

「ミニリュウ!勝て!」

「・・・!」

ワタルの叫びに、ミニリュウが目をカツと見開く。するとミニリュウの体が光に包まれ、直視できない状態になる。

「・・・なんだこれは!？」

「うみちゃん!様子が変だ!なんだこれ!？」

「これは・・・!進化!？」

『うおっ、まぶし!』『目があア!目があああああああ!』『ム●カニキうるさい』『進化つて、うっそだろおい!』

予想外の事態に、視聴者や男性陣のみならず、うみも驚愕する。その場の全員が固唾を呑んで見守る中、ミニリュウはゆっくりと形を変えて行く。細長い蛇のようなフォルムはそのままに、羽のようだったエラの他に新たに角が生え、首に一つ、尻尾に二つの水晶のような玉が現れる。

「・・・ヤベエなこれは」

「綺麗なもんだ・・・」

『かけえええ！』『しかも可愛い！』『マスコット系な感じだったのがかなりの美形になった!?!』

「・・・ドラゴンポケモン、ハクリュー。強力なドラゴン系ポケモンの一体です。その神秘的な姿から、神聖なポケモンとしても考えられているようなポケモンです」

もうすぐ日が沈むという段階、ハクリューを照らす夕日がよりその幻想的な姿を際立たせている。コメントでもカッコいいや可愛いと言ったコメントが大半を占める。

「・・・ハクリュー、か？」

「フウー！」

おうよ、というように元気な鳴き声をあげるハクリュー。ピンピンしている様子にニヤリと笑うワタル。ヒトモシに相對し、反撃を開始する。

「ハクリュー！『でんじは』！」

「ヒトモシ、回避だ！」

先手を打ったハクリューのでんじはを左に避けるヒトモシ。するとそれを読んでいたかのように素早く回り込み、目の前に現れるハクリュー。

ギョツとしたヒトモシが固まったところを、するりとその長い体で締め上げる。

『まきつく』！捕らえろ！」

「しまっ・・・!?!」

逃げられなくなったヒトモシが必死にばたつくが、進化したことでステータスが上がったハクリュー相手では逃げ出せない。その後きっちり5分間締め付けられたヒトモシは、グロッキー状態で戦闘不能となるのだった。

「そこまで！勝者、釣り師ニキー！」

『oooooooooooooooo』『やべー！進化だってよ進化！』『すつげー、マジモンのドラゴンじゃん！』『かっこかわいいポケモンとか釣り師ニキ裏山』

「いやー、指示を出すのはなかなか難しいものだな。ああ、進化おめ

でとう」

「ありがとうございます。俺自身びつくりですね」

「・・・おいチャラ男、農家ニキ！俺らも早く進化するぞ！とりあえずバトルだ！」

「はいはい、今日はもうポケモン達もいい加減きのみ使っても疲れてますから、終了ですよー」

「だあああ、うみちゃん！そこをなんとか！」

対抗意識を燃やしたのか、タケシがやる気に満ち溢れているが、流石にポケモンの疲労を考慮して終了とするうみ。必死に頼むタケシだが、パートナーのズバットは終了宣言にホッとしている。

「だめです。ポケモンの体調管理はトレーナーの重要な仕事ですよ？ちゃんと相棒の状態を鑑みて行動するんです」

「うう・・・了解」

『警察ニキ怒られてやんの』『はい無能』『勝率1割とかマ？』『警察ニキ雑魚乙w』

「クツソがあああ！見てろよお前ら、明日は絶対勝ちまくるからな！」

コメントに対して怒りながら家へと戻っていくタケシ。キョウや農家ニキ、チャラ男もそれぞれパートナーを連れて戻っていく。うみは配信を一旦終了し、パソコンを閉じるとワタルを呼ぼうと振り向く。しかし、ハクリューを撫でながら嬉しそうに戯れるワタルを見て、何も言わずに微笑みながら家に戻るのがあった。

—————特訓合宿1日目、終了

時は遡り、うみ達が合宿を開始した頃。○○空港にとある国の工作員が降り立った。

男は、人目につかない場所へと移動して携帯を取り出すとどこかへ連絡をする。

「—————。—————？」

(俺だ、予定通り到着した。それでターゲットはどこに?)

『—————。—————。—————』

(○○県の、○○町だそうだ。いいか、くれぐれも怪我させないように攫ってくるんだ)

「――」。――「――」

(分かっている。また何か分かり次第連絡する)

『――』

(了解)

通話を終えると、男は歩き出す。懐から一枚の画像を取り出す。そこに写っていたのは、銀髪に蒼い瞳と、顔立ち以外はおよそ日本人には見えない少女が、笑顔で笑う姿があった。

(・・・我が国を救えるのがこんな子供だけとはな・・・にわかには信じられないが、やるべきことをやるだけ、だな)

顔をしかめながら画像をポケットへと戻し、男はタクシーに乗り込むのだった。

## 第30話

特訓を開始し、ミニリユウがハクリューに進化するという目に見える成果が出た翌日。ついにキョウが呼んだ協力者がやってきていた。「どもー、すいませーん」

「あ、はーい」

朝だれよりも早く起き、ライとミロに手伝ってもらいながら朝食の用意をしていたうみ。玄関からの声に応えながら、ライにドアを開けてもらう。

「あ、うみちゃんやつけ？どもども、ワイがキョウのおっさんの紹介で来た、マサキ言います」

「あ、どうも。おれはうみって言います。とりあえず上がって下さい。もう少ししたら皆さんを起こして朝食なんです。宜しければご一緒にどうですか?」

うみの言葉に目を輝かせるマサキ。

「マジですか!?いやー、誰かの手料理とか久しぶりやねん、ご馳走になります!」

嬉しさのあまりうみの手を取りブンブン振るマサキ。ちよつと変な人だなあと感じながらリビングへと案内するうみなのであった。

「おはようございます、朝ごはんできてますよ」

「おーおっさん、お先に食うとるで」

「・・・おお、来てたか」

朝に弱いのか、夜遅くまで男性陣で話していたからなのか、少し眠たげなキョウさん。その後ろからはゾンビのようなうめき声をあげながら他の人もやってくる。

既に食べ始めているマサキにキョウ以外は驚くものの、まだ頭が働いていないのか反応が薄い。

「さっさと座りましょうやおっさん。この子の飯ほんまに美味しいで

！」

「・・・てめえええ！なあああに勝手に食ってんだコラアアア！」

「どわああああ!?!」

寝起きでかなり不機嫌そうなタケシがマサキに飛びかかる。騒がしくなってきたリビングを見ながら、うみはどことなく楽しそうに朝食を運ぶのだった。

「えー、改めて自己紹介します。ワイはマサキ言います。キョウのおっさんの紹介で対策課の情報・電子系統の担当に入りますわ」

全員が食卓を囲んだところで、マサキが自己紹介する。散々騒いでいい加減目が覚めた面々が黙って頷く。

「・・・こいつは色々と訳あつて俺が保護していた親戚なんだが、本人も言っていたように電子戦には無類の強さを誇る。今後さまざまな情報を得るために使ってやってくれ」

「よろしゅうに」

ニヒヒと笑うマサキに、各々が挨拶する。

「あ、そうだ。パソコンとかに強いのなら一つ調べて欲しいものがあるんですけど・・・」

「なんや？まあ、マサキ君はてえんさいですから？8秒で全部理解してやりますよー！」

鼻高々に自慢を始めるマサキ。周囲の面々がだんだんイラツとし始めた頃、うみが二階からとある機械を持ってくる。

「これなんですけど」

「はっはっは・・・待てなんだこれ」

「ブフォー！」

漫画のような笑いが引つ込み呆然と機械を見るマサキにタケシが吹き出す。マサキ自身はそんなことには気がつかず、ひたすらにうみの持ってきた機械を眺めている。

「ここは・・・配線と端子か。少しパソコンに繋いでもええか?」

「どうぞ」

うみからの許可をもらい、即座に持参したノートパソコンを取り出

すマサキ。電源を起動し、目にも留まらぬ速さでタイピングを始める。

食事を終えた全員がその背後に回り、なんだなんだと画面を覗く。「・・・内部データは基本プロトコルやプログラムに特別変なところは無い。でも記録されているのはなんだ・・・？配列が意味不明だ。特にこのデータ・・・この英語表記の名前はポケモンか？でも配信等では触れていない名前ばかり・・・いや、排出履歴にうみちゃんのポケモンの履歴があるのか・・・成る程、これはポケモンをデータ化して保存するための機械ってことか」

「・・・すごい、よく分かりますね」

感心したように唸るうみ。するとマサキが驚愕の表情で振り向く。「わいやあらへん、この機械とプログラム作った奴の方がやばいわ。なんやこれ、既存の科学力でこれ作ろー思うたら億じゃ足らへん金がかかんで!？」

「そんなにすごい代物なのか・・・!？」

横に鎮座している機械を見て恐れおののく男性陣。そんな中、マサキはうみから視線を外さない。

「・・・こんなやばいもんを、なんでわいに見せたんや?！」

「・・・これ、マサキさんが言った通り、ポケモンを預かったり、引き出したりする機械なんです・・・俺あんまりパソコンにも機械にも強くないんでわからないんですけど、一つだけ、この中に見たことのないデータフォルダを発見したんです」

「これやな」

片手間のようにキーボードを叩き、あつさりとフォルダを見つけ出すマサキ。フォルダ名も無く、パスワードのようなものでロックされている。

「そうです。・・・マサキさんは電子戦に強いんですよね?それを聞いた時から、解析を頼みたいと思ってたんです。・・・出来ますか?」

恐る恐る尋ねるうみに、ドヤア・・・とやる前からドヤ顔のマサキ。「・・・ええやないか。しばらくはつまらん情報集めだけや思うとったさかい、こんな歯ごたえある仕事あるなんて最高やんけ。ええでうみ

ちゃん。やったる！この仕事、天才ハツカーのマサキ様が請け負うで！」

「ありがとうございますー！」

うおー！っと叫びながら作業を開始したマサキに礼を言ううみ。そこへキョウが話し始める。

「・・・じゃあ今日はマサキがその機械の解析作業に入るとして、俺たちはどうする？」

「ああ、大丈夫です。とりあえず午前は昨日と同じようにバトルに慣れるための模擬戦ですね」

そう言って立ち上がるうみ。他のトレーナーおよびパートナーポケモンもやる気十分である。しかし次のうみの発言で全員凍りつく。

「でも昨日から結構いい感じなんで、今日のお相手は俺と相棒達でやりましょう」

(((((・・・それは早すぎないか!?!))))

「・・・冗談ですよ？」

やや暗い笑みを浮かべるうみと、その横で悪辣な笑みを浮かべるライ、ガン飛ばしているミロ、何考えているかわからないデオキシスを見て、早く午前が終わらないかな・・・と思う男性陣だった。

「どーも、本日もうみチャンネルではポケモン猛特訓の様子を配信していきます」

『おっはー!』『なんか野郎どもが元気なくね?』『ポニーテールうみちゃんきやわわ』『なんか昨日より辛そうなんだが・・・』

うみは今回手ぶらで、スピーカーにカメラを持ってもらい配信を始める。前日のうちに男性陣には別に気にしないで良いと許可を得て、本日から配信に顔出ししている。

その面々の顔色は何故か結構悪い。うみはというと、いつもと変わらない元気な姿で、今回は髪を束ねてポニーテールにし、ランニングシューズに長袖長ズボンの登山スタイルである。背中にはなにかが詰まったリュックを背負っている。



「とりあえず午前の方は、昨日と同じくバトルの練習を配信していると思います。・・・というわけで、本日のフィールドです！」

『山の中?』『フィールドってマジでただの森じゃね?』『急に広くなったな』

「今日は、俺の家の裏にある山の中に来ています。現在はその山頂ですわね」

『ああ、山登りしてきたから疲れてんのか』『農家ニキメガネずれてんぞー』『チャラ男の目が死んでる・・・』『・・・じゃあなんでうみちゃんには元気なんだ・・・?』

「・・・うみちゃん、なんでこんなところに・・・?」

男性陣の中で、唯一ピンピンしているキョウウがうみに尋ねる。ワタルやタケシは肩で息をしている程度だが、農家ニキとチャラ男はすでにひんしである。

「今後の活動では、やはり野生といえればこういった山岳部や森の中にも入ると思うんです。そこで、みなさんにはこれから、この山から俺の家までお昼までに山降りしてもらいます。」

「はあ!？」

疲労組が悲痛な叫びをあげる。ワタルとタケシは息を整えながら飲んでいた水を吹き出す。

「・・・昼までかい?」

「はい。ルートは3つほどの地図に書いてます。好きなコースを選んで降りて下さい。あ、ちなみに途中でライ達がエンカウントしてくとと思うんで、勝つか、ライ達が諦めるまでバトルして下さい。負けたらその道は1時間は通るの禁止です。」

・・・別にコースを無視しても構いませんが、その場合はスピアー軍団が奇襲をかけてきますのでご注意ください。パートナーのポケモンがバトルに負ける、スピアーの奇襲でどくの状態になる、皆さんの肩に巻いたバンダナをスピアー軍団に取られる、これらの場合は一度山頂に戻ってもらいます。バンギラスがここを野生のポケモンから守るんで、ここできのみを使ってポケモンを回復後、別コースから降りてください」

何か質問は？と一通りの説明を終えたうみが尋ねるが、全員が絶句したまま喋らない。

「・・・じゃあ俺は下に先に降りてますね。お昼はカレー用意してるんで、頑張ってください。・・・あ、配信はスピーカー撮影班が撮ってますんで、ズルしたらすぐに分かりますよー」

じゃ、と手を振りながら軽やかに山を降りていくうみ。残されたリュックにはきのみがパンパンに詰まっていた。

「・・・」

残された男性陣は、しばらくフリーズしており視聴者もコメントを忘れ呆然とする。

「・・・一つわかったことあるんすけど」

「・・・なんだ」

そんな中、チャラ男が呟く。

「うみちゃんて、結構DSっすよね」

「『『分かる』』』』」

視聴者、男性陣、バンギラス、全員の意見と意思が一致した瞬間だった。

「っと、戻ったー」

山を降りたうみは、その足で隣のガントツの家を訪れていた。

「・・・おお、うみちゃん。どうした？」

チャイムを鳴らし、ガントツに挨拶して居間へと上がる。そこで正座すると、うみは真剣な表情でガントツに頭を下げる。

「おじいちゃん。相談があるんだ・・・」

「うおおおおお!?コラツタ、急げえええ!」

現在特訓開始から10分が経過。チャラ男は、コラツタとともに早速コースを外れたルートで一直線に降りようとして、スパアー隠密部隊に襲われていた。

「ちよっ!? こっちにもってくんない!」

哀れなことに、進行方向には農家ニキもいた。2人はスパアーに背後から針で狙われながら山頂へと戻っていく。

「・・・農家ニキ達が見つかったようですね」

「・・・ああ。俺たちもそろそろ遭遇する頃だろう。気を引きしめろ」  
一方のキョウとタケシは、コースの一つを選び地道に下っていた。すると前方に、ひらけた空き地が見えてくる。

「・・・来たな」

「ライ!」

「よりによつてライニキかよ・・・」

『頑張れ警察ニキコンビ!』『げえ!? 関羽!』『ライニキか、終わったな、風呂食ってくる』

コメントでは早くも終わったムードである。

「お先に行きますよ! いけ、ズバット!」

「ズバット!」

タケシが先陣を切り、ズバットを前に出す。ライとの戦闘に入ったタケシを見ながら、キョウは少しでも参考になればと観察する。

「ズバット、『ちようおん・・・』」

「・・・」

「ズバット!」

「・・・え?」

先手を取ろうとわざの指示を出すタケシ。しかし、その直後ライの姿がブレ、次の瞬間にはズバットが地に叩きつけられていた。

「・・・ライ!」

終わり! とばかりにズバットをタケシの元へと引きずってくるライ。呆然とそれを受け取るタケシを見ながら、キョウはこれはダメだな、と初戦を早々に諦めるのだった。

「ハクリューー！『たつまき』！」

「フウー！」

「・・・」

別のルートでは、ワタルがデオキシスとの戦闘に入っていた。ハクリューに進化したことで、戦闘と呼べるまでではないものの、ある程度相手に攻撃できるようになっているハクリュー。しかし、デオキシスはスピードフォルム、デイフェンスフォルムとフォルムチェンジを駆使して全ての攻撃を躲し、はねのける。

「くそ・・・！ハクリュー、まだまだ！『まきつく』！」

長引くバトルに業を煮やしたワタルは、まずまきつくで動きを封じようとする。しかし、デオキシスは今度はアタックフォルムへと変換し、『サイコブースト』を放つ。

「！ハクリューー！」

「フウ・・・!?」

サイコブーストが直撃したハクリューは、そのまま戦闘不能となってしまい倒れる。

「・・・くそー！」

悔しそうにしながらハクリューを連れて山頂へと戻るワタルを、デオキシスはじつと見ているのだった。

「くつそ〜！どうすればいいんだよー！」

一通り戦闘を体験して頂上へと戻ったワタル達。情報共有をしつつ休憩していると、チャラ男が悔しそうに呻く。

「スピアー達は森の中という地の利を生かして、かつ集団で襲ってくる。かといってライ達を相手取ると全くといっていいほど勝てない・・・どうすればいいんだ」

『まずライニキと他に見たことなかった二匹は無理じゃね？あれどう考えても勝てねーべ』『でも森の中であの蜂を相手するのもまず無理

だろ』『ポケモンだけじゃなくて釣り師ニキ達のバンダナとかも守らないといけないから進むのも一苦労だしな』

コメントも色々と考えを出してはいるが、打開策はなかなか出てこない。どんよりとした空気が場を包み込む中、ワタルが立ち上がる。

「……おい釣り師ニキ、どこ行くんだよ」

タケシが声をかけると、立ち止まり振り向かないまま答えるワタル。

「……もう一度、今度はライのところに挑戦してくる」

「……待て、なんの策もなしに行ってもダメだろ、まずは作戦をだな……」

タケシが止めるが、ワタルは聞く耳を持たない。

「こうしてじつとしていたってどうにもならないだろ！早く降りて、次の特訓へ進むんだよ！」

「だあーからあ！その降りるための作戦を考えねーといけないからこうして集まってるんだろ！何をそんなに焦ってるんだよ！」

ワタルとタケシが口論になり、キョウ達や視聴者が戸惑う。

『ケンカダメ絶対！』『というかなんでうみちゃんいないのに見てる必要あんだよ』『申し訳ないがむさい男だけの配信とか遠慮するわ』『私そういうの嫌いじゃないから！』『あ、溝口さんは帰って、どうぞ』『ホモもいらなんだよなあ……』

「あばばば、どーするんすか農家ニキ」

「……俺に言われても」

視聴者や農家ニキ・チャラ男など、周囲の人間にも険悪な雰囲気か伝播し始めた時だった。

「……一つ、策というよりも抜け道と言えるものだが作戦がある」

静かに場を静観していたキョウがそう言うと、全員の視線が集中する。

「……うみちゃんは、『山を降りろ』と言った。しかし、その際に『ライ達を倒せ』とは一言も言っていない。つまりは、倒すことが目的ではないということだ」

説明しながら歩くキョウの後ろを、ワタル達がついていく。草木を

かき分けて進むキョウは、しばらく進んだところで立ち止まり、ニヤリと笑う。

「それにこの特訓は、山の中での野生のポケモンへの対処だ。・・・なら、別にわざわざ一對一で戦う必要はないと思わないか？」

「・・・あれは」

キョウの見据える先には、開けた場所で不機嫌そうに待ち構えるミロだった。川が近くにあるわけでもなく、ミロは大きなタライに張られた水の中に半身を浸からせ、こちらを睨みつけている。

「俺のヒトモンだけでは勝てないが、全員で戦えば方に一つでも勝機はあるかも知れんぞ？」

「どうする？」と他の面子へ尋ねる。すると、真っ先にチャラ男と農家ニキが名乗りをあげる。

「願ってもねえっス！こちとら今一番弱いんでバトルになったら勝ち目なくて困ってたンスから！」

「俺も、集団戦なら可能性は高いと思う。参加します」

パートナーを出しつつミロに相對する2人を見つつ、ワタルへと目を向けるキョウ。

「・・・少し考えたんだが、多分君は今焦りすぎていると思う。俺たちにはたしかに早急に力が必要ではあるが、それでも連携が出来なければ今後まともに戦っていくことはできんと思うぞ」

「・・・」

何も言えず、俯くワタル。そんなワタルを見ながら、ため息を一つつき、タケシが肩を叩く。

「・・・まあ、強くなろうとするのは悪いことじゃねーよ。ただ、もつと俺らのことも頼ってくれや。年下だしな、お前」

ニヒツと笑うと、タケシはズバットを繰り出す。タケシを見て、そしてキョウを見て少しだけ微笑むワタル。

（・・・俺、何を急いでんだろうな。ハクリューに進化して、少しだけ強くなったただけだったのに、1人でなんとかできるような気がしてた）

ハクリューの入ったボールを握りしめ、視線を前にし、思い切り投

げる。

中から出てきたハクリューは、パートナーの心を読んだのかこれまでよりも少しだけ嬉しそうだった。

「・・・さあ、行きますか！頼むぞハクリュー！みんな！」

「バアツカお前、指揮するのは警部ニキだつつの！」

ハクリュー、ヒトモシ、ズバツト、コラツタ、ガーデイ。これまで一番白熱するシーンに、視聴者も段々と騒ぎ始めていく。それぞれのポケモンを静かに見据えるミロは、そんなポケモンと人の関係を見て、少しだけ、ほんの少しだけニヤリと笑うのだった。

—————

「・・・どう、かな？」

「・・・」

一方、先に山を降りたうみは、ガンテツの元を訪れ、とあるものを作成してもらっていた。

「・・・随分と無茶なお願いじゃなあ」

「やっぱり？」

「だが、面白い。少し時間をくれんか？」

そう言いながらうみから渡された青いきのみを握りしめるガンテツ。  
ツ。

そんなガンテツを見ながらうみは心の中で呟く。

(にしても、まさかきのみの中にぼんぐりが混じってるとはなあ・・・)

前日、山に持っていきのみを集めるためにスピアーの持ってきたきのみを山を漁っていた時だった。

「あれ・・・？これきのみじゃなくね？」

と思いつつよくよく見てみると、なんとぼんぐりだったのだ。

「さて、これをこのもんすたあぼうる、とやらと同じような物にしてくれ・・・か」

うみが山の様子を見に行き、1人になったことで呟くガンテツ。手に持ったモンスターボールとぼんぐりを見比べながら、ため息をつ

く。

しかしその顔には、頼りにされていることの嬉しさがにじみ出ている。た。

「・・・1日で出来るかねえ」

機材と道具を揃え、ガンテツはねじり鉢巻きをギュツとしめるのだった。

「コロー！」

水流により高く吹き飛ばされたコロに慌てる農家ニキ。しかしどうにか空中で態勢を立て直し、地面に着地する。どうやら直撃は避けようだった。

「ハクリュー、『こうそくいどう』！近づけ！」

「ズバット、『ちようおんぱ』！」

コロが飛ばされ、ミロの周囲が空いたタイミングでハクリューとズバットが仕掛ける。ハクリューが高速で接近していき、ズバットが空からミロへと超音波を飛ばす。しかしミロはその場を動かさず、超音波を受けつつもハクリューへ向けてハイドロポンプを放ちまくる。

『あの綺麗なポケモン見た目によらずこそ強え!』『どうかさつきから全く動かないんだが・・・』『あの水の中から出てこないし、水無いとマズインじゃね?』『そんなことより既にチャラ男のコラツタとかマズインじゃねーの!?!』

「・・・チャラ男くん、コラツタの様子は？」

「・・・判定員的にはギリセーフって感じっスね」

背後で緊急時に備えているスピアーを指差しつつ答えるチャラ男。その腕の中には、荒い息でどうにか意識を保っているようなコラツタがいた。

戦闘開始時、いの一番に特攻して行き、ミロの放った技ですら無い尻尾のなぎ払いにより一撃でここまで追い込まれたのだった。現在はコラツタが狙われないよう、他のポケモンが気を引いている。



「なぜあんな無茶な特攻を・・・！コラツタはもうダメだ、一旦引き返し・・・」

キョウがチャラ男の手を取る。しかし、チャラ男はしゃがんだまま動かない。

「・・・チャラ男くん？」

「ダメっスわ、それだけは。・・・俺自身、今ここにいる中で一番弱いっつてのは分かってるんすよ」

そう呟くチャラ男は、肩を震わせていた。その目はいつになく真剣である。

「だから、ここで逃げるわけにはいかないんすよ。ここでまた他のやつに任せつきりなんてしたら、一生俺もこいつも強くはなれない。安全が確立されている今だからこそ、限界までやるべきなんです。・・・それにこいつもまだやる気ですからね」

そう言うチャラ男の腕の中にいるコラツタは、瀕死の様相ながらもミロを睨みつけている。そこには、未だ萎えない闘志があった。

そんなチャラ男とコラツタを見て、どうしても退きそうにないと判断したキョウは、ため息をつき、立ち上がる。

「・・・ならしょうがないな。どうにか隙を作るから、そこにありつたけ叩き込んできなさい」

「ありがとうございます。・・・行くぜ、コラツタ！」

「ヴァー！」  
コラツタがある程度動けるようになって、バトルに復帰する。

「大丈夫なのか？」

「はい！手伝います！」

ワタルが心配げに声をかけるが、チャラ男は元気よく答える。実際に、コラツタの動きもそこそこよくなっていた。

「『なきごえ』！」

「『ひのこ』！」

チャラ男と農家ニキがそれぞれに指示をだす。コラツタは大きく鳴き、ミロの攻撃力を下げる。コロは効き目が薄いながらも炎でどう

にか視界を遮ろうとする。

「・・・キユウ」

「・・・！全員伏せろ！」

しかし、そんなことは御構い無しにミロがタメを作る。嫌な予感がしたキユウの指示でポケモン達とパートナーが伏せると、その頭上を薙ぎ払うようにしてハイドロポンプが薙いでいく。

『こっわ!』『ミロネキやべえええ!』『ライニキと言いまろネキと言いまろ!』『うみちゃんのポケモンはばけもんばっかか!』『これ無理ゾ』

薙ぎ払いハイドロポンプによって周囲の木が倒れる。キユウ達はゆっくりと起き上がりながら、儼然として睨みつけてくるミロに冷や汗を流す。

「・・・ほんとにこのままでいけるんすか？」

「のはずだ。だが、ここまでデタラメなの見せられると少し怖くなってくるな」

あらかじめ立てていた作戦は、全員で交代制で立て続けに戦い続け、こっそり持ってきたきのみを使つての耐久戦をすると言うものだった。しかし、ここまで戦つて一切息切れしないミロに、段々と絶望が広がる。

「・・・俺とコラツタに任せてもらうことはできますかね？」

「？」

ポケモン達に戦ってもらい、ワタル達と密集して話し合いをしているとチャラ男がある作戦を考える。それを聞いた他の面々は、苦笑いする。

「正気かよ!？」

「失敗しか見えないんだが」

「まあ、無理だよな」

満場一致で否定され、しよげるチャラ男。しかしめげずに説得し続ける。

「で、でもこのまま戦い続けてもジリ貧っすよ！俺とコラツタ次第ではありますけど、これが成功すればみんな通過できます！」

「・・・やってみよう」

「まじっすか？」

賛成の意を唱えるキョウに、タケシが驚く。キョウは少しだけ笑いながら呟く。

「まだ昼まで時間はある。ここで失敗しても、また次があるさ。それに、俺はそこまで難しい作戦だとは思わんぞ？」

「・・・まあ、これで終わりってわけじゃないですしねえ」

農家ニキも肯定派になり、ワタルとタケシもダメ元でいいやと作戦を承諾した。

「さて、いつちようみちゃんのポケモンを驚かしてやるか」

（・・・動きが変わった？）

突っ込んでくるハクリュー達にハイドロポンプをぶっ放しながら、ミロは相手の動きの変化を感じていた。

今回の特訓では、ライ達うみのポケモン勢にもハンデ的扱いでの枷があった。ライは電撃技の禁止、デオキシスにはサイコブースト以外の技の禁止、一定時間は避け続けるだけしかしないなどの制約。そしてミロは、この中で一番枷が多くあった。

気性の荒いミロには、まず最も嚴重に言い聞かせた事が、『本気で戦わない事』であった。

その他、『水槽内から出ることの禁止』『近づかれるまではハイドロポンプ以外の技の禁止』『アクアリングでの耐久禁止』と言ったさまざまの制約があり、実は一番バトルでの突破で抜けやすい状態であった。

それでもミロはレベル100近い、現状最も強いポケモンの一匹。簡単に抜けることはできず、先程までもワタル達のポケモンは最初のコラツタの玉砕以降近づくことすらできていない。

（・・・ま、いいか）

そんな相手の動きが変わったことに気づくミロだったが、『あえて対策しない』。それは、他の三匹も含めたうみのポケモンに共通で与えられた制約だった。

『とりあえず今回はキョウさん達に限りなく野生とのバトルに近い体

験をして欲しいだけだから、何か仕掛けてきてもあえて泳がせてみて。野生でそこまで「できる」ポケモンはそうそういないし、今回で折れてもらっても困るから』

そんなわけでミロは、何故か一切突っ込んでこなくなつたハクリュー達に対してハイドロポンプを放ち続ける。本気ではない、されど当たればアウトの水流でさりげなく連携できないようにルートを塞ぎ続ける。すると、突然ズバットが低空飛行で突っ込んでくる。

「ズバット、『ちようおんぱ』！」

「・・・ッ」

不協和音を受け不快げに顔を歪めるミロだったが、それでも寸分の狂いなくズバットへと水流を放つ。

「コロ、『ほえる』！」

「キャウ!!」

ズバットが上空へと回避すると、反対方向からコロが大きな鳴き声を浴びせる。吹き飛ばされることのないミロにとっては脅威でないが、それでも邪魔な雑音であることに変わりなく、コロへ向けて水流を放ちながら、今度は薙ぎ払うように一周する。

「ハクリューー!!」

「・・・!?!」

必死に逃げるコロへと当たる寸前、射線上に大岩が落とされ、コロを水流から守る。ミロが岩の飛んできた方を見ると、ハクリューがその尻尾で近くにあった岩を引っこ抜き、今度はミロへと投げつける。

「ヒトモシ、『スモッグ』！」

ミロの背後では、ヒトモシがスモッグを放つ。周囲の地面に紫色の煙が充満し、苛立ったミロは水流でそれを薙ぎ払う。するとまたズバットとコロが、ハイドロポンプを避けれるギリギリまで突っ込んできて『ちようおんぱ』と『ほえる』を放ち、ハクリューは岩を、ヒトモシは『スモッグ』を遠距離からミロへと繰り出し続ける。そちらへ水流を放つても、距離ゆえに当たる前に逃げられる。うっとおしげにそれらを見ながら、もう一気にハイドロポンプで薙ぎ払おう、そう思いタメを作ったミロがふと気づく。

・・・一匹、見当たらない？

最初に突っ込んできて、つい加減を誤って慌てて外したハイドロポンプの余波でやられ、その後もパツとせず一番脅威になり得ないと判断したポケモン。ひよっとしてこの隙に逃げたのか。しかし、パートナーの人間はまだいる。

そこまでミロが考えた時、そのパートナー・・・チャラ男がニヤリと笑うのを視界の端で捉える。

「・・・かかったあ！」

「!?」

ハツとした時には、すでに勝負は決していた。スモッグの紫色の煙で見えなくなった地面を、なにかが這い近づいてくる。そこには、どく状態になり先程のダメージも相まってひんし寸前のコラツタがいた。

「いっけえええええええ！」

「今だ、やれ！」

「ここまでお膳立てしたんだ、決めろ！」

他のポケモンのパートナーが叫ぶ中、フラフラのコラツタの目に闘志が宿る。大きく開いた口の中、ギラリと光る前歯にミロがまずい、と感じる。

「コラツタ！『ひっさつまえば』！」

「ツヴァアアアア！」

「・・・ツ!？」

コラツタの一撃が直撃し、驚くミロ。その一撃は、ポケモンバトルで言うところの『きゆうしよにあたった』一撃であり、さらにキョウウ達は知らなかったことだが、技の追加効果でひるみが入ったうえに、コラツタのとくせいはこんじようだった。つまりは、スモッグによるどく状態からのこんじよう発動で、その威力は格段に上がっていた。大きくミロが仰け反り、もう少しで水槽から出てしまう、というところまで押し込んだのを確認して他のポケモンとそのパートナーが走る。

「今！全員撤収！」

「やったぜ、作戦成功オ！」

喜びながら走り去るワタル達に、まだ逃がさんとハイドロポンプを放とうとするミロ。

しかしその時、背後からコラツタの殺気を感じ取り振り向く。

「・・・俺らは弱いっすけど、こう言う言葉もあるんすよ」

「キユ・・・!？」

目前まで迫っていたコラツタに、思わず固まるミロ、その後ろを、口を布で覆いスモッグを抜けていくチャラ男がニヤリと笑う。

『窮鼠猫を噛む』・・・コラツタ舐めんなよ?」

「ヴァー！」

ひるみが完全に抜けない隙を逃さず、コラツタの『ダメおし』が決まる。ミロはその衝撃で後方へ仰け反り、

完全に水槽から投げ出されたミロを確認し、ニヤリと笑うと、チャラ男とコラツタは悠然と歩き去るのだった。

ポケモントレーナー男性陣、山降り特訓『vsミロ』、達成。

「ヴァ・・・」

「コラツター!?!あしまった、どく食らってるんだった!?!」

「しまんねーなお前!?!」

『行つたー!』『やったぜ』『コラツタが決めた!?!』

その一部始終を見ていた視聴者が興奮のコメントを残す。スピアーの謎に高度な撮影スキルでの飛行カメラの超最良アングルでの白熱したバトル中継により、最初は見るのをやめようとしていた視聴者も、興奮しながらそれぞれのバトルに対する意見を述べていく。

『随分あつけないな』『あのミロネキがなんであんな簡単に・・・』

『おそらくなんらかのハンデがあったのでは?ミロネキは終始その場を動こうとしなかったし、近づかれるまであのレーザーみたいな水流以外わざを使わなかったし。さらに言うと、最後の水槽から出てし

まった段階で追撃を諦めたみたいだった。おそらく水槽から出た時点で終わり、とか決められていたと思われる』

『解説ニキおつすおつす』『ハンデあったとしてもコラツタとチャラ男ニキ今回MVPやろ』『朗報・チャラ男、ニキ化決定』『いやー、最後の攻撃よかつたなー』

『ええ、かなり良かったです。今のコラツタができる最良の仕事だったと思いますね。チャラ男ニキのコラツタはとくせいこんじょうを持っていたようですね。スモッグに飛び込む前に『きあいだめ』をしたり、念のためにオレンの実を食べさせたりとなかなか慎重だったのもgoodです。ひっさつまえばのタイミングも良かったし、他のニキ達の連携も悪くなかったですしね』

『あれ!?このID、うみちゃんじゃね?』『mjk!?!』『どーも、少し気になりました、』『k t k r!』『我々の勝利だ』(大本営発表)

「・・・ふう、いい感じで終わりましたか」

コメントを終え、パソコンから離れるうみ。心配になり自分のパソコンで配信を見ていたが、結果はとても良い状態で終わり、ほっと一安心といったところだった。

「みなさんにこれ持って行って。それと、ライ達に戻るようお願い」「スピッツ」

側に待機していたスピアーに水筒を渡しつつライ達への伝言を頼む。敬礼をして飛んでいくスピアーを見送りながら、リビングへと向かう。

「・・・どうですか?」

そこには、栄養ドリンク片手に真っ白になったマサキがいた。マサキはうみに話しかけられて再起動し、ふらふらと手を上げしにそうな声でおーう、と答える。

「ま、まさかこのマサキ様がこんなに手こずるとは思わなかったわ・・・」

「何か分かったんですね!?!」

嬉しそうにパソコンの画面を見るうみに、マサキが弱々しくVサイ

ンを出す。

「あつたりまえやろ！マサキ様はてんつきいやで！……まあ8秒では出来んかったし、4時間以上もかかったけどな……こんな、某国の軍事衛星に入った時以来の大仕事やで……」

なにやら聞こえてきた聞いちゃいけない類の文字通りの爆弾発言をスルーし、うみはマサキに尋ねる。

「それで、なにが入ってました？」

「おう、わいには分からへんのやけどな……なんか、『わざマシン』とか言うのと、この預かりシステムの設計図、それと最後に、『リライブ』とか言うものについて書かれた資料がはいつとつたわ」

マサキの言葉に、うみは驚愕の表情を浮かべる。

『リライブ』……!?そ、その資料を見せてくだ……ッ!?」

慌てて詳しく聞こうとするうみ。すると突如頭痛が襲ってきて、うずくまり頭を抱えてしまう。そんなうみに慌ててオロオロするマサキを、どこか遠い出来事のように感じながら、うみは頭痛に耐える。すると、頭の中に見たことのない記憶が流れ込んでくる。

(なん……だこれ……!)

誰かの視界をのぞいているような感覚に、視界が二つになったような錯覚を感じ酔ったような状態になるうみ。増えた視界に意識を集中すると、どうやらその視界は森の中を歩いているようだった。と、その視界の主は森の先にあった湖を渡っていく。

湖を渡ると、暗い洞窟の入り口へとたどり着く。

「……ロス」

(……なんだこいつは)

その洞窟の奥、暗く先の見えない奥から、絞り出したような声が聞こえる。視界の主はその声を聞きながら、洞窟の入り口から動こうとしない。

と、洞窟の奥から重い足音とともに何かが歩いてくる。

洞窟の外から月明かりが差し込みその姿が照らされると、うみは愕然とする。

『……キュレム!?!』



「・・・コロス、コロス」

コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス・・・

そこにいたのは、灰色の体を覆うように水色の氷で覆われた姿のポケモン、きょうかいポケモンキュレムだった。しかし、その目は真っ赤に染まり、本来灰色なはずの体色が紫がかった黒へと変貌している。

(・・・このままでは危険だ。止めなくては)

視界の主は、様子のおかしいキュレムを確認すると、足を一步踏み出す。するとそこから氷がせり上がって行き、最終的には氷で洞窟の入り口は完全に封じられた。それを確認すると、視界の主はゆっくりとその場を去って行く。そこで、視界がだんだんと元に戻っていく感覚が襲う。

『ちよ・・・！待ってくれ！あいつは・・・！』

うみの叫びもむなしく、視界は消えて行き、視界の主は湖へと顔を近づけていく。

『！お前は・・・！』

その際湖面に映った顔を見て、うみははつとする。そこで視界は完全に元に戻ってしまった。

「・・・うみちゃん、大丈夫か!? ええっと、頭痛薬とか・・・」

「・・・すいませんマサキさん、大丈夫です」

どうやらそこまで時間は経っていないらしく、慌てるマサキにそう言いながらちらりと見た時計によるとせいぜい数分の出来事のことだった。

「本当か？でもえらい頭抱えて痛そうやったけど・・・」

「もう治りましたから。それより、データについて、説明お願いします」

お、おう。と頷きながらキーボードを叩くマサキの横でパソコンを見るうみ。

(・・・早く、早く他のトレーナーを育てないと。もしあいつが動き出したりなんてしたら、日本がやばい)

うみは無意識に机の上で拳を握りしめ、冷や汗を流すのだった。

「・・・正気か？」

とある政治家の邸宅。そこには、ポケモン関連の政策について警察から丸投げされた男がいた。その額には冷や汗が止まることなく流れており、そんな男の前には大物政治家である初老の男性がいた。間にある机には、警察とうみがまとめたポケモンに関する資料がある。「残念ながら。どうやらすでに警察ではこの生物に関する法規的措置が必要と判断しているようです」

滝のような汗を流しながら答える男を見ながら、初老の政治家は資料をめくる。目に入ってくるのは、人をばかにしたかのような世迷言ばかり。しかし資料に添付された警視総監のサインが、冗談だと断定させない。

「最近続いている外来種騒ぎか・・・あれには確かに議会の方でも早期対策を、と言う声が出ている」

「なら・・・」

「しかしだ。これが仮に事実のみで構成された資料だとしても。これを見せたところで与党も野党も鼻で笑うだろう。そのくらいこの『ポケモン』とやらは・・・そう、信憑性がない」

そう言っただけで資料を机に放る政治家。それに慌てた男が説得しようとして声を発する前に、政治家は続ける。

「・・・だが、一つ私の要望がかなうならこれを次の議会で提出しても良いと考えている」

「！・本当ですか!?!」

喜ぶ男だったが、次の政治家の言葉に驚愕する。

「この資料の作成者・・・うみちゃんとやらに会わせてくれ。もしそこで私がポケモンを信じるに足ると判断できれば、支援は惜しまないと約束しよう」

### 第31話

特訓2日目、山からキョウ達が戻り、現在全員で昼食をとっていた。

「うめえ……うめえよお……めっちゃ頑張った後のカレーエエエ……」

「なに泣きながら食ってんだよお前……取り敢えずティッシュ、ほれ」

「うみちゃん炊事出来たんだな。結構美味いよ」

「ありがとうございます。これでも一人暮らし長かったんですからね」

「……そうだな……うん」

モモンの実とキズぐすりをフル活用してコラツタを休ませている間、パートナーが心配で泣きながら食っているチャラ男に軽く引きながらティッシュを差し出す農家ニキ。その横では、うみの作ったカレーを褒めようとして地雷（うみ本人に自覚なし）を踏み抜き表情が暗くなるキョウ。そんな様子を見ながら、一人黙々と食べるワタルの横に、おかわりを持ってタケシが座る。

「何一人寂しく食ってんだよ、辛気臭せえ」

「……いや、少しだけ反省してた」

「さっきの一人でどうにかしようとしたことか？ばつかみてえ。んなもん気にする必要ないね、お前さんくらいの年齢ならそんなくらいの自信過剰具合が丁度いいよ」

そう言ってカレーをかきこむタケシ。そんなタケシの言葉に、ワタルも少し憑き物の取れた表情でかきこみ始めるのだった。

「……」

「キョウさん？」

「！何かなうみちゃん」

2人の様子を見ていて、安心した様子のキョウにうみが話しかける。さつきまで微笑んでいたキョウだったが、うみが真剣な表情をしていることに気づき自身も表情を引き締める。

「実は、少し気になることがあって……ご飯の後に説明はするんですが、先にキョウさんには教えて置こうと思って」

「なんで先に……ああ、『こつち』に報告しろ、ということかな」

黙って頷くうみに、キョウも頷き返す。

「・・・で、話ってなんだい？」

昼食を終え、全員を集めたうみは、自身が見たキュレムについて話し始める。

「・・・先程、少し頭痛を発症したのですが、その時に妙なものを見ました」

「頭痛？」

「ああ、さっきのやつやな。どしたん？やっぱマズかったか？」

マサキが心配げに聞くが、うみは首を振る。

「いいえ、それ自体はもう大丈夫です。・・・けど、その時に見たものがかなり厄介です」

「何を見たんだ？」

「ポケモンです。それも、特別強大な力を持つ、伝説とされている筈のポケモンでした」

伝説のポケモン、と聞いてピンとこない男性陣。其れもそのはず、伝説ポケモンとはポケモン世界において伝説になっているのであり、この世界では伝説どころか他のポケモンと同列に考えられるからだ。

ポケモンとして最も凶暴なものとしてはバンギラスしか見たことのないワタル達にとっては更に微妙である。キョウはゲンガーを見たことがあるためそれが基準となっているが、同じように伝説ポケモンの危険性というのがピンときていない。マサキに至ってはお察しである。

「・・・まあ、うみちゃんがそこまでいうほどだ、よっぽどマズいんだろう」

「はい。多分純粹に戦闘になれば俺だけだと勝てるかどうか、ですね」  
「うみちゃんが!？」

驚く男性陣に頷いてみせるうみ。実際レベル的にはこちらの方が上の可能性が高いが、ここはゲームの世界ではない。

(現実にバトルをするってなれば多分あの冷気とか、フォームチェン

ジに苦戦するんだろうなあ・・・)

「そ、それってどーすればいいんだ？うみちゃんが現場の最高戦力である以上、勝てないぞ」

不安げにそう聞くタケシに申し訳なきげにうみが答える。

「・・・これはもう皆さんにも強くなってもらうしかないでしょう。そのための合宿ですしね」

「でも今回の合宿って今日が最後ですよ？それももう午後ですし・・・」

そう言つて不安げにコロを撫でる農家ニキ。すると、不穏な空気が流れる部屋でキョウが手をパンパンと鳴らす。

「・・・とりあえず、今は俺たち自身の戦力強化に集中しよう。うみちゃん、別にそのポケモンは今すぐにも動き出すってわけじゃあ無いんだらう？」

「た、多分・・・」

「なら今するべきこと、出来ることをしよう。マサキ、お前はうみちゃんその装置をどうにか複製できないか調べてみてくれ。それがあるとないとはだいたい違うだろうからな。他の男性陣はうみちゃん指導のもと時間ギリギリまで特訓再開と行こう」

キョウの提案に全員が動き出す。とにかく今は時間の許す限り力をつけるのが先決。そういうわけで、全員が庭へと移動し昨日のように模擬戦を行うのだった。

「コラッタ、『ひつさつまえば』！」

「コロ、『ほのおのうず』！」

必殺の一撃を狙いながら攪乱するという自身の戦闘スタイルを確立したコラッタとチャラ男は、昨日までの弱さが嘘のように生き生きとバトルしている。農家ニキの方は、元々飼いだったコロとの連携が良いので的確な指示とそれに即座に反応するコロでいい具合に戦っている。

そんな模擬戦の様子を見ながら次はどの様にして特訓するか考えるワタルとタケシ。

「・・・ところで、うみちゃんどこ行った？」

「なんか、あのでかいやつ・・・バンギラスだっけ？のどこに行ったぞ」「ほーん。まあ、うみちゃんだって特訓したいだろうしなあ」

「・・・あれ以上強くなるのか？」

ライ達パソコン組の強さを思い出して身震いするワタル。同感だな、と苦笑いするタケシだったが、あることに気づく。

「そーいえば、キョウさん居ねーな」

「もしもし」

『あら。あなたがこんなに早く連絡をくれるなんて珍しいわね』

特訓中の裏庭から離れ、玄関先へと移動したキョウはとある相手へと連絡をとっていた。

「そんなことはどうでもいい。例の情報についてはどうなっている？期日はとつくに過ぎたと思っていたんだが」

『極東の情報なんてこちらにはなんのメリットも無いもの。集めるのも手間だし、何より使い道がない。それがたった1人のなんの噂もない少女の情報なら尚更ね』

「・・・」

相手方・・・声からして気の強そうな女性の「そんなすぐにわかるか」と言う言外の文句が透けてきて黙り込むキョウ。しばらく沈黙が流れたが、すぐに電話先から苦笑が聞こえてくる。

『・・・まあいいわ。それよりもビジネスの話しましょう。「ポケモン」なる生物・・・あなたの予想通りの結果だったわ』

「やはり・・・」

『ええ。ポケモンは、ヨーロッパ・アメリカ・アフリカ・・・日本どころか世界各国でその痕跡、あるいはその姿が確認されたわ』

その言葉に、キョウは予想していたこととはいえ重いため息をつかざるをえなかった。たつぷり3秒間、精神を落ち着かせる時間を有したキョウは電話先へと話し始める。

「そいつはまた随分とくそつたれな話だな」

『全くね。ここだけの話、うちのシマでもポケモンらしき姿が目撃されているわ』

さざりりと語られたその言葉に、ふと嫌な予感がしたキョウは恐る恐る尋ねる。

「・・・そのポケモンはどうした？」

すると、クスリと笑う気配がする。

『逃げられたわ。罨も銃も効きやしない。あんな生き物が今後増えるなんて、全く持って面倒ね』

「・・・それは災難だったな」

『ねえ、近々私は「そちら」に行くのだけど、あなたのご執心のうみと  
言う少女には会わせてくれるのかしら』

「・・・」

唐突な申し出に躊躇うキョウ。電話の相手は、そんなキョウの考えが分かったかのように話題を変える。

『・・・アメリカとドイツは既にポケモンに対して「相応の対応」を  
するみたいよ。こちらから教えられる情報はここまで』

「・・・ああ、すまない。恩に着る」

『それと・・・これは少し確度の低い情報。そちらの隣国が騒がしいよ  
うね。あなたの方でも調べてみるといいわ』

「なに？」

『さて、この借しはまた後日返してもらおうとしよう。失礼するわ』

その言葉とともに通話が切られ、キョウはゆっくりと手を下ろすと、渋い顔で呟いた。

「・・・面倒なことになってきたな」

「・・・」

キョウとの通話を切った女性は椅子にもたれかかると、ため息をつく。

「よろしかったのですか、大尉」

「同志軍曹。あれでもあの男は使える男だ、この程度の労力で良い関

係を保てるなら安いものだよ」

側に付き従う巨漢の男にそう返すと、女性はすくと立ち上がり、部屋を出る。男もそれについていき、やってきたのはとある部屋だった。

「しかし、この生き物・・・ポケモン、でしたか。一体どんな環境であればこんな生き物が成立するのでしょうか」

「どんなに考えても分からないことに思考を費やす必要はないぞ軍曹。どちらにしる情報は手に入った。あとはモンスターボールとやらさえ押さえればこいつもどうにかなるだろう」

そう言う2人の目の前、マジックミラー越しに見える部屋の中では、ここから出せと言わんばかりに暴れる灰色の犬のようなポケモンがいた。

「あれを制御出来るとは思えませんが」

「あの男の話ではボールさえあればどうにでもなるそうさ。無駄な嘘をつくような男でもない。期待しておくとしようじゃないか」

そう言つて葉巻を取り出した女性は、何かを思い出したように再度懐へ手を入れる。

「・・・そういえば、もう一つの情報を教え忘れていたな」

懐から一枚の写真を取り出す女性。そこには、黒いサングラスをかけ、白い口髭を蓄えた坊主の研究員と、怯えながらもその研究員に近づく茶色の犬のような姿で、複数のオレンジの尻尾を持ったポケモンがいた。

「それは?」

「・・・さあな」

男の質問には答えず、女性は写真をしまい部屋を出る。

「さて、この世界はどこへ向かうのだろうか」

男性陣が模擬戦を行なっている頃、うみはバンギラスが特訓と言う名の正拳突き修行をしている森の中へ入っていた。

普段はバンギラスが拝み、構え、放つという修行をしている筈のそ



ここでは、バンギラスと正対するライがいた。

「……」

「……」

「……はじめ!」

「……ッ!!」

「ライ!」

うみの合図でライが素早さを生かしてバンギラスの周囲を走り回る。以上なまでの速さに砂埃が加わり、ライの姿が完全に消えてしまふ。しかしバンギラスは、静かに佇むだけで動こうとしない。

「チュウ!」

「!」

そこへ、高速で走り続けるライが背後から襲いかかる。高速移動しつつの『かわらわり』がバンギラスに当たる、という瞬間だった。

「ゴア!」

「!?!」

「……へえ」

バンギラスが突如ライに迫るほどの速さを見せ、背後からの奇襲を躲す。そのまま突っ込んでくるライへと拳を合わせたバンギラスは、力の限り腕を振り抜く。

「……チュウ」

「グルウ……」

驚きの表情を浮かべるライと、ニヤリと笑うバンギラス。ライの頬には、バンギラスの拳が掠った跡ができていた。

（『しんそく』……いや、まだ『みきり』かな? 何にせよ、これで検証は一応成功ってことでいいかな?）

メモを取りながら頭の中で整理していくうみ。冗談から始まったバンギラスの特訓だったが、スピアー達への戦術の影響を知った頃からうみはバンギラス等ほかのポケモンにも何かしらゲームの頃には出来なかった何かが可能になるのでは、と検証を続けていた。

バンギラスが今回身につけた『みきり』も、本来なら習得することのないわざである。しかし、一定の修練を積むことで、習得不可能な

筈のわざを身につけることは可能であると証明されたのだった。

「・・・でもこれ、よりイレギュラーの発生もあり得る話になってきたってことだよなあ・・・」

そう呟くうみの目の前では、高速で攻めるライに対して『みきり』を使いつつ反撃を続けるバンギラス。

ゲームの頃の知識や情報が、今後自身の首を絞める要因になりかねない可能性が出てきた。

「今後の活動に際して注意・・・と。ライ、バンギラス。今日はそこまですらにしよう」

うみの言葉に、攻めを止め戻ってくるライ。バンギラスは肩で息をしながら戻ってくる。

「大丈夫？」

「グルウ」

問題ない、というようにそっぽを向くバンギラスだが、うみから見ても明らかに無理しているのがわかるくらい疲労していた。

（・・・負担とかが普通よりも大きいのかな？何にせよ、少し気をつけるべきかな）

バンギラスの様子を確認しながら家に戻るうみ達。すると、庭に作られたバトルフィールドから轟音が聞こえてくる。

「な、なんだなんだ？」

急いで戻ってみると、そこではワタルのハクリューとタケシのズバットがバトルをしていた。

『つばさでうつ』！

『たつまき』！

「ズバット！」

「フウー！」

上空から襲いかかるズバットを避け、即座に攻撃を仕掛けるハクリュー。しかし、ズバットは相手の攻撃の届かない上空へとすぐに飛び上がることで躲けていく。

「いくぜおらー！『ちようおんぱ』！」

「当たるな！『こうそくいどう』！からの『ドラゴンテール』！」

ズバットのちようおんぱを避け、今度はハクリューが強靱な尻尾での一撃を狙う。

「ズバット! 『あやしいひかり!』」

「!しまっ!?!」

素早さや火力ではハクリューが優勢であり、もしここがポケモンのゲーム世界であるならば、勝負はわかりきったものだっただろう。しかし、ここは現実世界。平面な世界でも、ターン制で進むバトルでもない。ズバットは制空権を取れるという強みを最大限生かし、ハクリューへとしつこくちようおんぱやあやしいひかりを放ち翻弄している。未だ遠距離攻撃を持たないハクリューは、必死になってそれかわしているが、タケシの指示の下戦うズバットは上手い具合に相手をコントロールしていた。

ワタルもハクリューへ必死に指示を出す、今ひとつ決定打が打てていない。

「・・・お? うみちゃん、おっおっ」

そんなバトルを観戦していたチャラ男が、戻ってきたうみへ手をあげながら笑いかける。

「どーも。・・・あの2人、どのくらい戦ってますか?」

「うみちゃんがバンギの方見に行つてからずっと。まじで凄いなー、2人とも」

「・・・あれ止めなくていいのかな」

ヘラヘラと笑うチャラ男の横で、眼鏡をクイッと上げつつ呟く農家ニキ。うみは、うーんと唸っていた。

「・・・とりあえず止めましょうか。あんまりやつてもらちが飽きませんし。・・・ワタルさん、タケシさん、そろそろ終わりましようー!」

「まだまだ! まだ、俺もこいつもいける!」

「・・・ダメですねこれ」

気迫のこもった叫びをあげる2人と、気合十分のパートナーを見つやれやれだぜと首を振るうみ。結局、その日は帰る時間になるまでずっと2人のバトルが続いていたのであった。

「いやーうみちゃん、今回はありがとう。いい経験になったよ」

特訓最終日の夜、うみの家の玄関には疲労困憊状態の男性陣がならぶ。ワタルとタケシは言わずもがな、農家ニキとチャラ男はうみを相手にバトルをするというハードな特訓でへろへろだった。キヨウだけがどうにか元気なため、代表して礼を言う。

「いえ。俺としても有意義な特訓でした！またいつかやりたいですね！」

うみの言葉に一部の人間がビクツとしているが、それには触れないでキヨウが封筒を差し出す。

「そうだ、これを渡しておく」

「？何ですこれ？」

封筒を手に取り、裏表を確認しながら首を傾げるうみに、キヨウは首を振る。

「すまないが、重要案件だと言うことしか知らされていないんだよ。中身はうみちゃんだけにしか見ることを許されていない。・・・さて、そろそろお暇しますか」

「じゃあね、うみちゃん。いい特訓だったよ」

「自分、もっと強くなるっすよ！」

「またやるときは呼んでくれ、今度はうみちゃんとも戦えるくらいにはなっておく」

「まー、仕事で会うだろうけど、とりま今日はありがとな」

キヨウ以外の面々からも言葉をもらい、帰っていく男性人を見送ったうみ。全員が見えなくなるところですぐ家に戻り、リビングへと向かう。

「・・・で何でワイは帰れへんねん!？」

そこには、タイピングの手を一切止めずに喚くマサキがいた。

「しようがないじゃないですか。預かりシステムの複製が終わってないんですから」

そう言つて苦笑いするうみ。マサキは、キョウから仕事として預かりシステムの解析及び複製を依頼されていたのだが、これが天才を自称するマサキですら音をあげるような難易度の仕事であったのだ。

「言うなれば『セーブ機能なしで常にデバフかかったままレベル1縛りで長編RPG短時間クリアしろ』って言われるくらい鬼畜なことやで・・・」

「つまりマサキさんがRTA勢になればいいんですよ？俺としてもシステムの複製は結構必要なんで、早めにお願ひしますね。3台くらい複製出来たらいいんで」

「・・・うみちゃん、綺麗な笑顔でそがいなこと言うのはやめてーな・・・」  
につこりと天使のような笑顔をするうみに癒されつつも頬がひきつっていくマサキ。

結局彼はその後、翌日の朝までキーボードとパソコンしか目にしていなかったと言う・・・。

「あ、そうだ。マサキさん、俺パソコンの使い方に興味があるんですが、教えてくれませんか？」

「この状況で!?うみちゃんDSにもほどがないか!？」

とある研究所。最高峰の設備と人員を持ちながら、あらゆる形で秘匿され非合法な実験すら行われるその施設は現在、けたたましく警報が鳴り響いていた。

「いたか!？」

「いいや!」

行き交う研究員や警備員は慌ただしく何かを探している。そんな中、無数のモニターが配置された監視ルームで、研究所の主任責任者の男はギリギリと爪を噛んでいた。

「まだ見つからんのか!」

「それが、カメラの位置は全て知られているようで、死角を上手いこと移動しているようです」

「くそっ！使えん奴らが！」

困り顔の警備員を罵りながら、主任は1人の研究員を思い出す。

「くそっ・・・カツラめ！貴重な実験台を持ち逃げしよって！研究の独占など、絶対に許さんぞ・・・！」

研究所の外、監視カメラと警備員があちこちを探し回っている中を、上手く隠れながら逃げる1人の男がいた。

「ハア・・・ハア・・・なんとか外へ出たか・・・！」

息切れしながらもその足を止めず研究所を覆っている森へと入っていく男。しばらくの間ひたすら走り続け、研究所から遠く離れた開けた場所まで来ると、一旦立ち止まり背負っていたリュックを下ろし、中へと語りかける。

「もう大丈夫だ・・・絶対助けるからな！」

「・・・」

中にいたポケモンは弱々しく頷くが、すぐに目を閉じぐったりとしてしまう。

「どうにかしないと・・・！」

リュックを背負い直すと、男はサングラスをかけなおし、白衣を翻して再び走り出した。

頭に思い浮かべるのは、助手が見せてくれた動画に出ていた1人の少女。

「うみ・・・どうにか彼女に会わなければ・・・！」

そう言つて男1人1人カツラは、背中にかかる重みを気遣いながら、最寄りの都市へと走り出すのだった。

### 第32話

「はいどーもです、うみです」

『ギター!』『遅かったじゃないか・・・』『興は帰って、どうぞ』『ホモもいらなんだよなあ・・・』

合宿が終了した翌日の朝、うみは久しぶりに1人での配信を行っていた。相談室用のメールが大量に溜まっており、中にはあらゆる形での配信に関する要望メールもあつたため、折角だからそれらを活用しようと思いつたのだった。

「今日は皆さんからのメールを見て、相談に答えていこうと思います。取り敢えずランダムでメールを開いていきますね」

『w k t k』『相談室復活ツツ!』『さーて、今回のお題は・・・!?』

「よし、これです!・・・えーとなになに?『うみちゃんのお兄ちゃんになるにはどうすればいいですか?』・・・いや、無理ですな」

『しよっぱなから草』『はいはいシベリア行きますよー』『(´・ω・´)ソナー』『でもその願いもわからなくもない』

「まったく、こういう質問のためにこの配信をしているんじゃないんですからね!では次!・・・『うみちゃんのお父さんになるためには年収がどのくらい入りますかね?』つていやだから!なんでこんな色んな意味でストレスなものがきてるんですか!」

『いや、そうしたい理由は分かるけどダメやろ』『もう大草原不可避』『私もうみちゃんを養育したい!』『久しぶりだな変態、ここがお前の死に場所だ』『警察ニキ今日は殺意高いな』

コメント欄は冗談まじりに和気藹々としているが、他のメールを開いて確認したため息をつくうみ。メールの大半は、何故かうみに関するくだらないものばかりであり、まともに質問しているものは3件のみだった。

「と、とりあえず絞り込みました・・・次からこの手のメール送ってきた人のメアドはブロックしますからね!」

『はい』『まあそうなるよな』『うみちゃんの可愛さの前に散れ』『それはもうしてるから』『散っていったニキ成仏してクレメンズ』

「えーっと、まず一件目は・・・」

「・・・取り敢えず様子見ですね。でも、あまりにもしつこいようなら虫除けスプレーとかで追い払うのも一つの手ですね」

『ありがとうございます』『もう終わりか』『そりゃアホみたいなメールばっかだまとも質問してるやつ少ねーもん』

「さて、質問メールも終わりましたし、雑談でもしますか」

『雑談！いいね！』『蘇る初期うみの記憶』『フヒヒアババ(ボソツ)』あれは笑った』

メール画面を消し、配信画面へと向き直るうみ。視聴者のからかいに若干むくれるも、すぐにドヤ顔になる。

「あの頃の俺とは違うんですからね！どれだけ配信してきたと思うんですか！」

『セヤナ』『ソヤナ』『ソレナ』『ほんま』『ワカル』『ワカル(確信)』『ワカル(認識)』『知らんけど』

「・・・それでは雑談というわけで、何か話題ある方質問どうぞ」

視聴者の適当な返事に少しジト目になるうみ。そんなうみの表情をからかう視聴者に、うみのむくれ顔がさらにプクツと膨らむ。

『うみちゃんって学校とか行ったことある？』

「ありますよ。楽しいところでしたね」

『急にぶっこむな、凹む』『闇が・・・』『いや、まだ大丈夫、そんなにやばいもんじゃない・・・』『うみちゃんって趣味何かある？』

「ポケモンの世話とかこの配信ですかね。色々ありましたけどやって楽しいですから」

『あんだだけポケモンに囲まれてればそりゃなあ』『可愛いのかもいるし』『可愛いけどヤベーやつばっかやんけ』『or・・・少女1人での暮らして大変じゃない？不審者とか』



「隣のおじいちゃんとかお世話になっているんでそこまでは。それに、ライ達もいるんで」

『あー、ライニキいるのは心強いな』『うみちゃん家は多分個人の家で日本一安全だろうな』『俺ならあんな魔窟には侵入しようとは思わんわ』『うみちゃんってゲームとか実況しないの?』

「結構聞かれますね・・・まあ気が向いたら実況つてのもいいかもしれません」

そうして他愛もない雑談を続けていたうみだったが、突然スマホに着信が入る。

「?すみません、ミュート入ります」

相手はキヨウだった。こんな時間に一体なんだろう、と思いつつうみが出ると、切羽詰まったキヨウの声が聞こえる。

『もしもし!?!うみちゃん、今大丈夫か!?!』

「え?は、はい何ともないですけど・・・」

『良かった・・・』

盛大にため息をつくキヨウにますます首を傾げるうみ。するとキヨウが、焦りつつも話し出す。

『現在滋賀県の琵琶湖で巨大なポケモンが発見された。幸いなことに一般人に被害が出る前に避難が完了しているようだが、それでも危険なことになりはしない。それと、マスコミの人間が居座ってポケモンの映像を生放送で流しているようだ』

「・・・!」

思わず息をのむうみ。湖、巨大という単語から瞬時に該当しそうなポケモンを脳内で探し出す。

しかし、キヨウからの更なる情報で驚愕が焦りへと変わる。

『それだけじゃない・・・!確認しているのは琵琶湖だけでなく、東京の上野動物園、広島宮島にもポケモンらしき謎の生物が出現している!東京の方は象のような形状の大型ポケモン、広島は鹿のようなポケモンの群れが現れている!』

「な!?!」

『うみちゃん、どうすればいい!?!』

時は遡り、騒動が起きる数十分前。署内の対策本部にて事務仕事をしていたキョウは、一通り終わった所でコーヒー片手に一息ついた。

「・・・ふう」

「だあああ！くっそまた読まれなかった！なんでだよおみちちゃん！」

「・・・」

優雅に過ごしていたキョウだったが、反対側の席に座りイヤホン片手にスマホを凝視しているタケシの叫びに少しずつ額の青筋を増やしていく。

「お!?読んでくれるか!?!・・・っだあああ!はっ、そうだ!今から連絡して読んでもラブハア!?!」

「やかましい」

「バイ、ぶみばせん」

((( )))

怒り心頭のキョウに顔をアイアンクローされ宙吊りになるタケシ。そんな2人を見ている他のメンバーももはや日常として受け入れているようだった。

「全く、なんなんだお前・・・仕事終わってないだろうが」

「ブハッ、死ぬかと思った!いやいや、おみちちゃんの久々の配信ですよ!?!ファンとしてはなんととしても見ないと!」

ドヤ顔のタケシにため息をつきつつ、スマホ画面を覗くキョウ。そこにはおみが楽しげに喋っている動画と、その下で流れていくコメントがあった。

「ほお・・・こんな風になっているのか」

「おみちちゃん、割と古い機材使ってるんで画質はやや荒いっすけど、それでも分かるくらい楽しそうですよね」

「・・・本当にな」

どこか眩しいものを見るように微笑むキョウと、嬉々として変態肅清文をコメントし、度が過ぎた視聴者を容赦なくBANしていくタケ

シ。

「お前そんなことやってたのか」

「さつきも言いましたけどどうみちやんのパソコンスペック低いんですよ。その関係上ウイルスとかハッキングには弱いんでこつちから遠隔でシャットアウトしてる状態ですね。こうでもしとかねーと特定厨がうざいですしねー」

「・・・はいてくな時代になったもんだなあ」

タケシの言葉によく分かんがまあうみに問題がないならいいか、と思考放棄しコーヒーを啜るキョウ。すると突然、他の職員の人1人が声を上げる。

「キョウさん、通報入りました!」

「場所は!」

「上野動物園からです!象の檻の中に正体不明の生き物が入っていて、興奮した様子で暴れている、檻付近に一般人多数、避難が遅れており被害が出る前に救援をとのこと!」

真剣な表情で自身のデスクに駆け戻るキョウと、即座にパソコンのタブを変更し高速でタイピングを始めるタケシ。にわかには騒めき動きが活発になる対策課。

「公安に連絡!それと、パトカー用意しろ!俺とタケシで行く!」

「了解!」

「それと、捕獲用にモンスターボールの使用を上申請!取りに行け!」

「はい!」

「!?キョウさん、これ!」

「・・・!?おい、何処だこれ!」

声を上げたのは、ポケモンに関する情報収集を仕事とするタケシの部下の1人だった。職員が指さしたのは生放送でどこかの湖を中継しているテレビ番組。そこには、興奮した様子で捲し立てるリポーターと、ズームで映し出される巨大なポケモンの姿があった。

『皆さま、ご覧になっていられるでしょうか!信じられません!まるで龍!それも水色の龍です!このような生物が、かつて見られたでしょう

か！世紀の大発見です！』

『ちよつと離れて！危険です！』

『ちよつと、どいてよ！いい絵が撮れないじゃない！……皆さん、これはCGではごいません！ご覧ください！真っ青な体表に、強面の凶悪な風貌！まさに、東洋風の龍です！』

『すげー、なんかの撮影？』

『良くできてるなーあれ。ネツシーみたいな奴？』

『ママー、あれ何ー？』

『もうちよつとこつちに来なさい、落ちたら危ないわよ』

「くそ、どこの局だ！急いで下がらせろ！映像も止めさせるんだ！」

「無理つすよ、生放送です！」

テレビでは、興奮したレポーターが喚くように喋る中、興味本位でスマホを向けている若者や恐怖からか泣き出す子どもを抱えて足早に去る母親の姿などが映し出されている。野次馬は増える一方で、誰も彼もがただのテレビの企画か何かだろうと考えているように特に深刻な感じではない。

通りがかったお巡りさんが慌てて避難を促しているが、レポーター達は意に介さず撮影を続行しているようだった。

肝心のポケモンはと言うと、体を水面から出して困惑しているかのように周囲を見渡しており、その後ろでは慌てて逃げるモーターボートが見える。

「……取り敢えずうみちゃんに連絡を。あのポケモンの正体を突き止めて、滋賀県警に対策を……」

「キョウさん！ヤベエつすよ、今度は広島だ！」

「!？」

一旦うみから情報を得ようとスマホを取り出したキョウだったが、タケシがパソコンから目を離さず焦りの声を上げる。

「三件同時だと……!?!どうなってるー！」

「どうなってるも何も、俺らには分からんすよ！広島の方はなんか鹿みたいなポケモンの群れが集まって困ってるってくらい軽いも

んです！でも、市民が刺激して暴れ出したらマジでやべーっすよ！」  
猛烈な勢いでキーボードを叩くタケシ。宮島の観光客からの通報を受けた付近の交番からきたお巡りさんが対応しようとしているが、見たことのない生き物に下手に手を出せず簡単な避難誘導しかできていない状態だった。

「！キョウウさん！テレビ！テレビ！」

とその時、琵琶湖を移していたテレビに異変が起こる。龍のようなポケモンがその大きな口を更に大きく開いたかと思うと、そこから水流を発射した。

『きやあああ!?』

『に、逃げろー!』

『機械とかじゃないのかよ！なんだよあの化け物!』

水流はレポーター達の近くに着弾し、湖の岸がえぐれる。えぐれた岸辺を見て、恐怖に駆られた野次馬がクモの子を散らすように逃げ出した。

『皆さん、見ましたでしょうか!?あの謎の龍は、なんと水流を放ちました!その威力も見ての通りです!あ!な、なんと龍は、またしても水流を放っています!信じられません!出鱈目に先程の水流を放ち、暴れています!』

『な、何をしているんだ!早く逃げないか!』

『カメラに入ってしまったので、ちよつと下がってください!』

『何バカなことしてんだこいつ・・・!?!』

ところが、他の人間が逃げ出す中レポーターとカメラマン達は逃げることなく撮影を続行する。興奮した様子のレポーターは、滅多やたらに水流を撃ちまくる青い龍の様子をカメラに向かってまくしたている。必死に避難を促しているお巡りさんがカメラに入るが、他のスタッフが引きずっていき、撮影が止まる様子はない。

『早く逃げろってバカどもが・・・!県警に連絡を急げ!』

『はい!』

「キョウウさん!上野の方も面倒なことになった!ポケモンが檻から逃げ出して動物園内を爆走してる!」

「!くそ、対応が追いつかん・・・!」

キョウが指示を飛ばす中、上野でも更に問題が発生する。てんやわんやな中、それでもできることを、と必死に指示を飛ばすキョウ。

「キョウさん!パトカー用意出来ました!」

「よし、タケシ!行くぞ!」

「ちよつと待ってください、なんか電話・・・もしもし・・・ふあ!?!」  
「どうした!?!」

急いで出て行こうとするキョウだったが、突然妙な声を出して固まるタケシ。またしても問題か、と慌てるキョウに、タケシが苦笑いしながら振り返る。

「・・・琵琶湖に、ワタル君いるそうです」

「・・・えっ?」

「もしもし、取り敢えず届けといたよ母さん」

『悪いねえ、帰って早々にこんなおつかい頼んじやって』

「別にいいよ、気にしてないし(おつかいってレベルの距離じゃねーと思うけど・・・)」

琵琶湖の騒動が起こる直前。ワタルは母親からの頼みを受け、琵琶湖の近くにある知人の元へとやってきていた。

・・・東京から滋賀までという長距離おつかいに少し思うところはあつたようだが。

「じゃあ帰るから・・・うん、それじゃ」

通話を切り、スマホを納めるとともにため息を溢すワタル。

「・・・まあ、こいつのためにもちょうどよかった・・・って事にするか」

そう言つてモンスターボールを手に取る。その中には、とぐろを巻いてふてくされていているハクリューがいた。

『……』

「すまないって。ほら、もうすぐ琵琶湖に着くから、人気のないところで泳げばいいさ」

タシンタシーンと尻尾の先でボールを中から叩くハクリューに、苦笑しつつ宥めすかすワタル。

ハクリューはワタルとともに家に帰った際、少しトラブルを起こしていた。

「まあそりや大きくなつたんだしなあ。ああなつてもしょうがないさ」

『……』

家に着いた際、ワタルはミニリュウの時と同じ感覚で何も考えずボールを放った。ここで補足しておく、ミニリュウは全長1.8 mであり、ハクリューは更に大きく、4.0 mもあるのだ。重さも16.5 kgになる。

『……そいつを家の中で出すのは禁止！いいね！』

『……はい』

代償は、ワタル家の床と一部の家財だった。涙目になりながら説教をする母親に何も言えなくなつたワタルとハクリューは、ただ静かに頷くしか出来なかつた。

そんなわけでハクリューは人目を避けるためと、家を壊さないためにモンスターボールの中で過ごすこととなつてしまったのだ。いくらモンスターボールがポケモンを長時間入れていても大丈夫だと言つても、限度がある。その為、おつかいのついでにハクリューのガス抜きとしてワタルは琵琶湖に来たのだった。

「さて、着いた……なんだ？」

琵琶湖に着くと同時に謎の光景を見つけるワタル。大慌てでこちらへ走ってくる大勢の人にギョツとするが、そばを通っていく男性を1人捕まえて、話を聞く。

「すいません。何かあつたんですか？」

すると、男性は手を離せばすぐに逃げ出しそうなほど焦りながらもくし立てる。

「変な龍みたいな奴が出たんだ！凶暴だし、青いし、口からなんか出すし……あんなの普通の生き物じゃねえ！君も早く逃げろ！」

「……！ありがとうございます！」

「お、おい！そっちじゃないぞ!?何やってるんだ！」

男性の話は滅茶苦茶で分かりづらかったが、断片的な情報で嫌な予感がしたワタルは人の逃げてくる方向へと走り出す。

(普通の生き物じゃない何か、青い、口から何か吐く……)

モンスターボールの中のハクリューを見て速度を上げるワタル。人が少なくなり、湖に近づいていくと、暴れる青い何かを見つける。

「見えた……！あれか！」

湖の岸にやってきたワタル。そこには、移動して岸に近いところまでやってきた青い龍のようなポケモンと、そこから少し離れた場所でお巡りさんに引っぱられながらもカメラに向かって喋り続けるレポーター達取材班を見つける。

「何やってるんだ……っ！不味い！」

ワタルが呆れながらレポーター達を見ていると、ポケモンがレポーター達へと大きな口を開けて襲いかかる。そこでようやく身の危険を感じたのか、レポーターの顔が恐怖で引きつる。カメラマン取材班も恐怖で動けないのか、足をガクガクさせながら見上げるだけである。

「まにあ……ええええ!!」

ワタルは咄嗟にモンスターボールを振りかぶり、全力で投げる。あの程度飛んだところでボールが割れ、ハクリューが光とともに現れる。

「ハクリュー！『ドラゴンテール』！」

「フウ!!」

ワタルの指示で力を尾に溜めたハクリューが鞭のようにしなるそれをポケモンの横っ面めがけて振り抜く。反応できなかつたポケモンがクリーンヒットを受けて吹き飛び、岸に体を強かに打ち付けられ



る。

レポーター達のポカンとした顔を横目に空中で態勢を整えたハクリューが着地する。

「・・・行けるか、ハクリュー！」

「フウ！」

ハクリューの元へと駆け寄り、ポケモンに正対するワタル。ハクリューはボールから出ることができて心なしか生き生きしており、好戦的に相手を睨みつけている。

一方のワタルは、その目線は青い龍のようなポケモンを見つつ駆け寄る際に見えたカメラを思い出し冷や汗をかくのだった。

(・・・ものすごくやらかした感じがすごい)

『・・・というわけで、今少し大変な事になっているんだ！頼む、うみちゃんの力を貸してくれ！』

事のあらましを上野へ向かっているキョウウから聞いたうみは、大慌てで動き出す。

「は、はい！少しでも時間ください！俺は広島の方を見てきましょう。釣り師ニキにはそのまま湖のポケモン・・・青くて龍みたいって言ったら多分ギャラドスかな・・・そのまま対応してもらって、キョウウさん達は上野をお願いします！」

『すまない！』

一旦切ります、と通話を切り配信部屋へ向かううみ。ミュートを切り、急いでいる為重要なことだけを捲し立てる。

「すみません！今ポケモン関連の問題が起きた為、その対応に向かいます！今日の配信はここまで、急で申し訳ありませんが、さようなら！」

『アイエエエ!?』『まじか』『せっかくリアルタイムで見れるいい機会だったのに!』『えー(´・ω・｀)』『よしその事件、今すぐ調べるぞ!』『スレに向かえ!』『不謹慎だが楽しくなってきた!』

配信を切った後も不平不満のコメントや視聴者間の情報交換が始

まっつていくが、うみはそれらを全て無視してパソコンの電源を落とし、タンスから帽子とリュックを持ち出す。

「ライ、ミロとバンギラス、それとゾロアークを連れてきて！」

「ライ！」

「スピアー達は、出かけてくるから防犯よろしく！」

「スピッツ！」

着替えつつ自身のポケモン達へと指示を飛ばすうみ。階段を駆け下り、マサキのいるリビングへと向かう。

「マサキさん！」

「おう、取り敢えず3個、試作やけど出来たで！ってなんや、出かけるんか？」

目の隈がすごいマサキがうみに生気を感じられない笑みで弱々しく手を振る。そんなマサキの横に置かれたやや小ぶりの機械をすぐにひつつかむうみ。

「出来たんですね！じゃあこれ持っていきます！」

「え、ちよ、まだ試運転が!？」

「緊急時です！仕方ないです！」

そう言っただけはリュックからボールを取り出すうみ。

「・・・頼んだよ、デオキシス！」

「状況は？」

「はい、現在目標はライオンの檻付近にいます！今のところは大人しいですが、数分前には突進で檻を破壊して周囲に甚大な被害を出していました」

上野動物園へとやってきたキョウとタケシ。先に到着していた警察官に状況を説明してもらいながら、バリケードテープをくぐり園内へと入る。

「現在地をドローンで追いながら監視を続けています。しかし、飼育員の話ではあんな象は見たことがないと・・・」

「ああ、問題ない。こちらで把握している」

「は・・・?」

疑問符を浮かべる警察官を置いて、防弾チョッキに身を包み、アタッシュケースを持ったキョウとタケシがポケモンのいる場所へと歩き出す。

「先輩、大丈夫なんですか?ただの警官2人であの妙な象を捕まえられるとは・・・」

「俺もだ。・・・だが、あの人は外来種対策課だ」

「えっ、あのよく分からない課ですか!」

「ああ。この手の事件は全部あの課で対応することになっているらしい」

「でも、今いた2人ってキョウさんとタケシさんですよ?『人間最終兵器のキョウ』と『ウィザード級もとい将来魔法使いのタケシ』のコンビですか・・・」

「そのあだ名、絶対本人達の前で言うなよ?」

心配そうにキョウ達を見送る警察官2人。一方のキョウは、そんな警察官達の眩きにため息を溢すのだった。

「はあ、うちの課はやはり妙なものとして扱われるか・・・というか俺のあだ名なんなんだ・・・」

「当たり前のように聞こえてるっぽいんですけどもう10メートルは離れてますよね?なんで聞こえるんすか・・・」

「鍛えたからな」

「鍛えりやあできるようになる次元じゃねえ!」

軽口を叩き合い少し空気が和む中、キョウがタケシにスマホを渡す。

「うみちゃんから情報が来た。一応見ておけ」

「うっす。どれどれ・・・?」

『送ってもらった写真から、ポケモン名ドンファン。よろいポケモン、タイプじめん。頑丈な皮膚を持っていて、並大抵の攻撃は弾きます。丸まったところがる攻撃は民家もバラバラにするくらい強力なので気をつけてください』

「うっへー、民家バラバラとか食らいたくねー」

嫌そうに表情を歪めるタケシ。すると、キョウが曲がり角の所で人差し指を口元に持っていき静かにするよう指示する。

2人がそつと曲がり角を覗くと、そこには動物園内をうろつく不機嫌そうなポケモンがいた。

象のようなシルエツトと、鼻から背中までを覆う黒い皮膚。口の横から出た鋭い牙が特長的なそのポケモンを見て、2人の雰囲気が変わる。

「・・・写真と一致。奴がドンファンだな」

「んじやまあ早速・・・」

タケシがボールを握りしめるが、キョウが手を押さえて止める。

「待て、もう少し様子を見る。このまま奴が歩いて行けば、上手いことこの袋小路に行つてくれそうだ」

園内の地図を見せながらそう言うキョウに、渋々タケシがボールを納めた時だった。

「うあ〜くん！かあさん、どこ〜！」

「!?!」

「な!?!」

「・・・」

キョウ達のいる場所とは反対、行き止まりの方から泣きながら男の子がやってくる。最悪だ、と真つ青になるキョウ達。泣き声に反応したドンファンは、ゆっくりと男の子の方へと歩き出す。

「不味いー！」

「くっそ、避難くらいしつかりさせろよ！」

悪態をつきながらも飛び出す2人。それぞれにボールを取り出すと、ドンファンの目の前に向けて放る。

「ズバッ！」

「・・・！」

ズバットとヒトモシがドンファンの前に立ち塞がり、それぞれに威嚇する。そんな二匹を睨みつけ、ドンファンが唸り声を上げる。

「ブルルウ・・・」

「ズバット、頼むぞー！」

「ヒトモシ、持ち堪えてくれ！」  
動物園でも、今まさにバトルの火蓋が切られたのだった。

――――  
【緊急事態】ポケモン、テレビ生放送【釣り師ニキ】

12：名無し

「すげー、まじで生放送だよ

13：名無し

あれなんて言うポケモンなんだ？

14：名無し

さあ、うみちゃんの紹介したことない奴だな

15：名無し

あれ見るからに何かの強化体みたいなんだけど、ひよつとして進化  
したやつなのかな

16：名無し

きつと進化前も凶悪な面してんだろうな

17：名無し

というかなんでこの生放送終わんねーの？

18：名無し

マスゴミのことだ、いいネタ程度にしか考えてねーんだろうよ

19：名無し

まあそのマスゴミのおかげで俺らも見れてるんだがな

20：名無し

うわ、カメラの方来てんぞ!?

21：名無し

流石に逃げろって！

22：名無し

レポーター根性すげーな!?! って思ったがこれ腰抜けてるだけか

23：名無し

カメラマンカメラブレブレ、無能

24：名無し

化け物みてえなやつに迫られててもブレが許されないとかプロカ  
メラマン涙目だな

25：名無し

ああつ！龍ポケモン、吹っ飛ばされたー！

16：名無し

ん？なんか見覚えある奴じゃね？

27：名無し

ハクリューじゃん！つてことは・・・

28：名無し

釣り師ニキキター！これで勝つる！

29：名無し

いやでも行けんのか？相手の方がでかいし怖いぞ

30：名無し

ハクリューニキはカツコいいから負けねーよ！

31：名無し

せや！カツコいいやつは負けないんだよ！

32：名無し

ええ・・・

33：名無し

というかこれ一応は全国放送で生放送だろ？この流れはポケモン  
害獣認定待った無しな気がする

34：名無し

あ

35：名無し

あ

36：名無し

あ

37：名無し

ま、待て！釣り師ニキが勝って捕獲すればワンチャン有耶無耶  
に・・・

38：名無し

その場合は解剖と研究のために科学者連中が動くんだろうなあ

39：名無し

あかん

40：名無し

詰んだ

41：名無し

いや、まだだ！まだうみちゃんという砦がある！

42：名無し

せ、せやな！

43：名無し

つてか、なんか広島の方でも騒ぎ起こってるんやけど

44：名無し

なんか宮島行きフェリーが欠航してるんだけど。しかも原因が未確認生物の群れって・・・

45：名無し

おわた・・・

46：名無し

諦めがはええよ！

47：名無し

ごくう・・・じゃなかったうみちゃん!!早く来てくれー!!

ポケモン騒動が連鎖し大事となっている頃。とある港町のとある建物に、黒服の日本人がやってきていた。

男が中に入るとそこには、当たり前のように酒やトランプの横に拳銃が転がる世紀末な酒場があった。当然そこに座る者達も一般人ではない。その目には狂気が宿っており、奥の方では殴り合いの喧嘩すら起きていた。まさに無法地帯である。

「へい、こつちだぜー!」

ふと、喧騒の中でも不思議と通る陽気な声が聞こえ、カウンターを見る。するとそこには、迷彩柄の軍服のような服を身に付けた欧米人の男が座っていた。躊躇いなくその男の元へと向かい、横に座る。黒

服の男が座るとともに欧米人の男は饒舌に喋り出す。

「呼び出しといて遅れてくるなんて随分ひでえじゃねえカ」

「仕方ないだろう。少々気になることがあったのでな」

「気になる事？」

「・・・火傷顔が日本へ向かったそうだ」

「oh・・・それは確かにビッグニュースだナ」

「全くだ。この街にしばらく滞在するつもりだったんだが、おかげで予定が狂ってしまった」

「Never mind。・・・ほら、折角だから一杯飲めヨ」

そう言つてグラスに注がれた酒を受け取ると、黒服の男はそれに口をつける。

「・・・ほう、たまにはこういうのも悪くない」

「だろウ？ここは結構気に入っているんだ。・・・じゃ、本題に入ろうカ。それデ、話つてのはなんだ？」

「そうだな・・・。現在起きている動物への異変には気付いているか？」  
「異変？あア、妙な生き物が増えていつてるっていうあれカ。知つてはいるサ、だがあれがどうしタっていうんだ？」

グラスを煽りつつ聞く軍服の男に、黒服の男はなんて事もないように告げる。

「アメリカ。君の祖国でその妙な生き物・・・ポケモンが多数出現し、今尚パニックが起きている事もか？」

「・・・何？」

終始笑つていた軍服の男の顔から笑みが消え、ポケットから端末を取り出し何処かへと連絡し始める。

黒服の男は、隣に座つていた中国系アメリカ人の女と日本人の男の喧嘩を見つつ男を待つ。

「・・・shit」

通話を終え、苦々しくそう呟いた軍服の男は、感情を済ませ立ち上がる。

「行くのか？」

「当然ダ。それで、何が目的ダ？」



「まさか。俺がどうこうしたわけじゃない。今回のこれは純粋な善意さ。……これを持っていくといい。きつと役に立つ」

黒服の男が懐から取り出したのは、赤と白の二色に分かれた丸い機械……モンスターボールだった。

「これは？」

「ポケモンだ。奴らに対抗するには絶対必要になる。これを君が使うのか、軍で研究するのは好きにするといい。ただ一つ、私から言えることは『ポケモンにはポケモンでしか対抗できない。普通なら』と言うことだけだ」

そう言つて黒服の男は酒を注ぐ。しばらくモンスターボールを手に取り眺めていた軍服の男だったが、ぐっと握りしめニヤリと笑う。

「……とりあえず礼を言つておくれ、サカキ」

「……礼はいいさ。また会おう、マチス」

軍服の男……マチスが去つていくのを横目に見つつ、黒服の男、サカキはゆっくりとグラスを傾けるのだった。

「……『次』は失敗しないさ」

その顔には、酷薄な笑みが浮かんでいるのだった。

### 第33話

「ハクリュー、『たつまき』！」  
「フウ！」

琵琶湖の湖岸。そこでは、現在ワタルとハクリューが青い龍のようなポケモンローギヤラドスを相手取っていた。ハクリューの『たつまき』によりその場に釘付けにされたギヤラドスは、怒りの表情でどうにか抜け出そうともがいている。

「グオオオオオ！」

「早く逃げろー！」

「!?あ・・・」

ギヤラドスが身動きができないのを確認し、レポーター達に逃げよう声をかけるワタル。すると、ポカンとした表情で見ていたレポーターが我にかえる。しかし、次の瞬間、逃げるところかマイクを手にし未だ現実に戻ってきていないカメラマンの持つカメラへと騒ぎ始める。

「みなさん！ご覧になっているでしょうか！龍です！新たな龍と、謎の人物が現れました！・・・あの青い二匹の龍は一体どんな関係なのでしょうか!?!」

「あんたアホか!?!今は逃げろって言うてんだよ！あいつが目に入らないのか!?!」

性懲りも無く撮影を始め、あまつさえワタルへと質問まで始めたレポーターに信じられないものを見る目で怒る。しかし、レポーターはそれでも怯まずワタルへとマイクを突きつける。

「あなたの龍が止めているじゃないですか！凄いですね、あれは一体どうなっているのでしょうか?！」

「ふぎげんな！あれだっていつまでも続けられるわけじゃあないんだぞ!?!早く逃げてくれないと巻き込まれるんだって!！」

「ああ!?!ちよつと何するんですか！弁償してもらいますからね!！」

「ああもう、それでいいから早く逃げろって言うてんだろ!?!」

「フウ・・・」

ワタルがレポーターの突きつけたマイクをひったくり、放り投げる。一瞬惚けた後、烈火の如く怒り始めたレポーターだが、ワタルの剣幕に押されて黙り込む。その後ろでは、たつまきを維持するのが辛くなってきたハクリューが苦悶の声を上げる。

「グオオオオオオ！」

「!?まずい！」

咄嗟にワタルがレポーター達を突き飛ばした時だった。ハクリューのたつまきから強引に体を振ることで脱出したギャラドス。その余波がワタル達を直撃し、全員後方へと吹き飛ばされたのだ。た。

「きやあああ!?」

「ぐっ・・・」

悲鳴を上げるレポーターを庇い、肩から地面に激突したワタル。嫌な音と共に激痛の走る右肩を押さえながら立ち上がると、少しだけ心配げにハクリューが戻ってくる。

「まだ行けるか、ハクリュー？」

「フウ」

「俺はいいから。とにかくあいつを止めるぞ」

「・・・フウ！」

俺よりお前はどうかんだ、と言うように右肩を見るハクリューに、問題ないと言い聞かせるワタル。実際には今尚激痛に目眩がするが、それを必死に押し殺す。

「・・・メール?うみちゃんからか！」

ズボンの左のポケットから鳴り出した着信音を聞き、素早くスマホを取り出す。届いたメールを最速で読み進めるワタルの頬に冷や汗が伝う。

「ハクリュー。・・・反撃だ、思いつきりやるぞ」

「フウ！」

(これは・・・上手くいくのか?というより、間に合うか・・・!?)

こちらを睨みつけ湖岸を突き進んでくるギャラドスを見ながら、ワタルは引きつった笑いを零すのだった。

「ズバット! 『きゆうけつ』!」

「ズバット!」

「ブオオオオオ!」

「ヒトモシ、『ほのおのうず』だ!」

「・・・!」

一方、動物園に現れたドンファンを相手取っていたキョウとタケシ。2人の相棒達は必死に技を繰り出すが、ドンファンを止められな  
いでいた。

「かつてええなああちくしろう!」

「タケシ、正面からは行くなよ!」

「了解つす!」

ズバットの牙もヒトモシの炎も、ドンファンの硬い表皮に阻まれ有効なダメージを与えられていない。しかし、注意を引き付けることはできたようでズバット達を追いかけるドンファンを横目に、男の子を  
タケシが素早く回収するのだった。

「どーします?これマズくないっすか?」

「・・・とにかくこれ以上人のいる場所に近づかせないことを最優先だ」

男の子を担いで戻ってきたタケシの言葉に、渋い顔でそう答える  
キョウ。その時、ポケットに入れていたスマホにメールが届く。

「・・・」

「まったく、あんなに硬い奴にどーすればいいって・・・キョウさん?」

メールを確認しニヤリと口角を上げるキョウに訝しむタケシ。  
キョウはそんなタケシに黙ってスマホの画面を見せると、ドンファン  
を見据え立ち上がる。

「見たな?その子連れて行つとけ」

「ういっす。にしても相変わらず無茶苦茶ですね、うみちゃんは」

キョウと同じくニヤリと笑うタケシは、不安げな男の子を担ぎ直し  
キョウへスマホを返す。

「全くだ。・・・こっちは抑えとく、2分だ」

「了解」

手短に言葉を交わすと、全速力で走り去るタケシ。残されたキョウは、ドンファンと戦うヒトモシとズバットを見据える。

「頼むぞ、うみちゃん……！」

『そつちはどうや、うみちゃん？』

「はい、問題ないです。メールは送っておきました！」

一方キョウ達へとメールで指示を出したうみはと言うと、ミロにかまって海を物凄いスピードで突き進んでいた。本来はデオキシスに頼んで飛んでいくところだが、彼には別の仕事を頼んでおり別行動中だった。

海面へと一度飛び出し、スマホで家にいるマサキからの連絡を受けるうみ。マサキは、今回の騒動を治めるためにうみが考えた作戦のため、必死にパソコンに向かっていた。

『しっかし、正気かいな、あの装置はまだ未完成なんやで？』

「あはは……まあ、今回必要な機能は使えるみたいですし今はあれで大丈夫ですよ」

自身の作った機械に不安げな様子のマサキと、それを笑い飛ばすうみ。うみの笑いに少しだけ不安が和らいだマサキは、真剣な口調に戻る。

『今ところうみちゃんの指示通りに準備はしとるで。あとはキョウさんらがあれを動かせばすぐや』

「了解です。……！こつちももうすぐ着くっぽいのでまた後で。何かあつたらメールでお願いします！」

『オツケーや！』

通話を終え、スマホを仕舞いミロにしっかりと抱きつく。通話中やヤスピードを落としてくれていたミロが一気に加速する中、うみは心の中で祈っていた。

（どうか、最終手段を使う事になりませんように……！）

「ハクリューー！『たつまぎ』！」

琵琶湖にてギャラドスを相手取っているワタルは、自身が劣勢に立

たされていることを自覚していた。

(こいつ……！さつきから俺と後ろの人らばっかり狙いやがって……！)

本能的にワタル達無力な存在を狙い攻撃してくるギャラドス。ハクリューが阻んではいるが、どうにも守りの戦いの経験が浅く、またハクリュー自身の戦闘スタイルに合っていないのかやりづらそうにしている。

「ハクリュー！らちがあかない！水中に引き摺り込め！」

「フウ！」

「ギャアア！」

ワタルの指示を受け、ハクリューがギャラドスへと絡みつく。怒りのままにそれを振り解こうとするギャラドスだったが、それより早くハクリューが自身ごと湖へと引き摺り込んだ。

「ギャアア！」

「フウ！」

水中でハクリューを振り解いたギャラドスは、そのままかみつこうと突進してくる。

それを躲しつつハクリューが尻尾での痛烈な一撃を与える。ギャラドスが苦悶の表情を浮かべるが、すぐにまたハクリューへと襲いかかる。

(本来は水中戦の方は相手の領分かもしれないけど、人的被害がない分こつちもやりやすいはず……！)

水中で戦うため指示を出せないという問題点はあるが、ハクリューならいけるはずと信じて湖面を見据えるワタル。激しい戦いに湖面が水飛沫で見えなくなる。

「ガアアアア！」

「!?」

(なっ!?)

その時、ハクリューが戦う水飛沫のあがる場所から少し離れた場所に、ギャラドスが現れる。

(ハクリューはまだ戦っている……じゃあさつきの奴じゃない!?)

ワタルは勘違いしていた。暴れているのが一体だけだったため、ここにいるギャラドスは今戦っている個体だけだ。

そして経験もしていなかった。突然の多対一戦も、野生ポケモンとの連戦も。

「！……くそ、逃げろ！」

「ひっ……！」

「お、おい！逃げるぞ！」

新たに現れたギャラドスがワタル達を睨み、突っ込んでくる。咄嗟に背後にいた報道陣へと逃げるよう叫ぶワタル。流石にまずいと分かっているようで、素早く報道陣が走り出す。だが、腰を抜かしたレポーターがいまだに立ち上がることができないでいた。

「っ……そー！」

突っ込んでくるギャラドスの前に立ち、庇うように手を広げるワタル。迫りくるギャラドスが上げる水飛沫を浴び、腕の痛みには耐えながらもこれまでか、と目を瞑る。

「……、……！」

「ギャア!？」

「……!あれは……！」

と、その時だった。上空から放たれたエネルギー弾が、突っ込んできていたギャラドスの脳天に直撃し、ギャラドスは盛大に頭を水面へとうちつけ気絶する。

突然の事態に逃げようと走り出していた報道陣や座り込んでいたレポーター、果てはワタルまでもがポカンと口を開けて目が点になる。

はっとしたワタルが空を見上げると、そこにはうみ家で見慣れたシルエットが浮かんでいた。

「うみちゃんとこの……えーと、宇宙人？」

「……！」

名前が思い出せず取り敢えずシルエットであだ名をつけるワタル。

なんとなくツッコミを入れるような感じに理解不能な言葉を喋るデオキシス

デオキシスは、うみの家からスピードフォルムで一気に琵琶湖のワタルの元へと飛んできたのだった。

ワタルの元へと降りてくるデオキシス。そして、腰に巻き付けられたやや大きいサイドポーチの中から機械を取り出す。

「—————」

「これか・・・サンキュー、指示はもう受けてる。あとは任せろ」

デオキシスが差し出した大きめのコーヒーマーカーほどの大きさの無骨な機械を受け取りそう言うワタルに、デオキシスは一つ頷くと来た時と同じ超スピードで飛んでいくのだった。

「・・・さて、と」

デオキシスを見送り、琵琶湖へと向き直るワタル。そのタイミングでギャラドスを倒したハクリューが湖面から飛び出しワタルの元へと戻る。ハクリューの後からは、きぜつしたギャラドスがプカーッと浮かんでくる。

「えーと、ここを押すんだっただか」

カメラに写るといろいろまずいか、とコソコソと自分の体で隠しつつ機械についていたモンスターボールの柄のボタンを押すワタル。

すると、機械から駆動音が響き、動き始める。一瞬光が出たと思うと、機械についていた円形の下皿部分に一つのモンスターボールが現れたのだった。

「うみちゃんが言うには、『引き出しシステム』だったか。よく分かんが、取り敢えずこれで解決できるかな」

そう言つて顔を上げたワタルの視界が青に染まる。

「のあああああ!?!」

「フツ!?!」

水流が突如ワタルとハクリューを襲い、押し流され吹き飛ばし一人と一匹。ずぶ濡れになりながらもガバリとワタルが飛び起きると、琵琶湖の湖面から顔を出す数え切れない数のギャラドスが睨み返していた。

「ははは・・・まじかよ」

ヒクヒクと頬を引きつらせるワタル。あまりの光景にとうとうレ



ポーターが泡を拭いてガクリと気を失う。カメラマン達に至っては、既に走り去ってしまっていた。

(まあいてもらっても困るんだが、せめてこの人を持ってってくれなかつたかなあ)

呑気にそう考えるワタルに向け、再びギャラドス達が水流を放とうと大きく口を開ける。それを見たワタルは、とつさに手に持ったモンスターボールを放り、ハクリュー指示を出す。

「ええい、もうどーにでもなれ！行ってくれ、『ミロ』！ハクリューは『りゅうのいかり』！」

ワタルが投げたボールから飛び出したのは、見る者を魅了する圧倒的な美しさを誇る七色の鱗を持つ尾に、赤みがかつたピンクの触覚が儂げに揺れる神秘的な姿をしたリウグウノツカイを思わせるポケモン。目を瞑りそこに佇んでいるだけで周りの空気を変えるほどの美しさ。今もしここに他の人間がいれば、あまりの美しさに声も出ないだろうその美の集大成のようなポケモンは、迫りくるギャラドス達をゆつくりとその視界に収める。

「・・・アアア？」

ペシン、という気の抜けるような音がした。ギャラドスの群れは、何が起きたのか分からないと言った表情でポカンとその大口を開けていた。ギャラドスが複数体で放った強力な水流は、ミロが尻尾を一振りするとともに呆気なく弾かれたのだった。

ギャラドスの群れがフリーズする中、ミロの美しく整った表情が段々と変化し、ちよつとお茶の間には見せられないくらい釣り上がった目が、ギャラドス達にありえないはずの『プレッシャー』を放っていた。

「ギユアアアアア!!」

「!!!「グエアアアアア!?!?!」!!!」

「・・・えええ・・・」

ミロが怒りの咆哮とともに放った『ハイドロポンプ』が、やや離れた位置にいたギャラドス達を吹っ飛ばす。慣れない形の戦闘とはい

え自分達が苦戦していたはずのポケモンが涙目で空を舞う光景に、ワタルはものすごく帰りたくなっていたのだった。

「フウー！」

「・・・よし、あつちはミロ・・・さんに任せよう。俺らはこっちな」  
ハクリューが心配げに顔を覗き込み、慌てて再起動したワタル。ミロが吹き飛ばしている方向とは別方向から襲ってくるギャラドスを相手するべく、ハクリューと共に気合を入れ直すのだった。

「キュアッ アアアアア!!!」

「!!!「ヴェアアアア!」!!!」

「・・・俺らもういらねえんじゃね?」

一方のキョウ・タケシチーム。タケシが離脱している間、ドンファンをなんとか二匹で誘導し被害を抑えていたキョウだったが、限界が訪れる。

「!?!」

「ヒトモシー！」

ヒトモシが回避しきれずドンファンの突進に巻き込まれてしまう。ここぞとばかりにドンファンがヒトモシへと迫り、慌ててズバットがそれを止めるべく上空から向かうが、明らかに間に合わない距離である。

「くそっ！」

キョウがヒトモシを回収すべくモンスターボールを向けた、その時だった。

「ブルルルアアアアア!!!」

「グルアアアアア!!!」

「!」

転がり迫るドンファンと倒れるヒトモシの間に突如緑の巨体が落ちてくる。その巨体は鎧のようで、背中には無数の背びれが覆っており、凶悪な顔つきだがどこか悟りを開いたかのような穏やかさもあつた。特徴的な丸まったの『ころがる』攻撃をするドンファンだが、そ

の緑の鎧のようなポケモンは両手でガッチリと受け止めてしまう。

「間に合いました！キョウさん、もう大丈夫ですわ！」

「！タケシか！」

その様子を呆気に取られて見ていたキョウの背後から、タケシが駆け寄る。その手にはワタルがデオキシスから受け取ったものと同じ機械と、モンスターボールがあった。

「あれは、うみちゃんの家には……確かバンギラスと言ったか」

「ええ、流石の馬鹿力ですね。いっけー！バンギラス！そのまま投げ飛ばしちまえ！」

「グルアアアア！」

「バモツ！」

タケシの指示を受け、ドンファンを持ち上げるバンギラス。まさか自分が持ち上げられるとは思っていなかったのか、予想外の事態に慌てて足をバタつかせるドンファン。

そんな足掻きを無視してバンギラスが全力で地面に放り投げる。ズドンという重い地響きと共に投げられたドンファン。怒りの表情でフラフラと立ち上がるが、バンギラスの姿が消えていた。

「!?…!?」

気配のかけらもないバンギラスに戸惑うドンファン。キョロキョロとあたりを見回していると、突然背後から痛烈な『きりさく』を受ける。

「ブルアアア！」

パニックを起こしたドンファンが、丸まって逃げるように転がっていく。しかし、その進行方向にまたしても突然バンギラスが現れる。それに気づくも、急には止まれないドンファンはそのまま轢き倒そうと加速する。

「バンギラス！かわせ！」

「……」

「バンギラス!？」

タケシが回避を指示するが、バンギラスは避けない。驚くキョウとタケシを他所に、バンギラスはおもむろに目を瞑り、手を腰だめに構

える。集中し、五感を高め、空気を切るドンファンの転がってくる音や地響きを感じながら精神統一をするバンギラス。

「・・・っ！グラァー！」

「バ、バモア!?」

振り抜かれた拳は、ドンファンにも、離れた位置で見ていたキョウ達にも知覚できなかった。

「——————パーン!!」

その場のあらゆる存在が置き去りにされ、さらには音すら遅れた。そんな、究極に極められた一撃を放ったバンギラスは静かに立っている。その横を通り過ぎるように転がっていたドンファンだったが、次第に勢いが落ち、完全に止まった時には、右頬に拳の跡を作り気絶した状態であった。

「・・・キョウさん、やっぱうみちゃんこのポケモンやばくないっすか?」

「・・・否定できないのが辛いところだな」

2人は現実逃避をするようにそう呟くと、ドンファンを捕獲すべく空のモンスターボールを取り出すのだった。

一方のバンギラスは、確かな手応えを感じた喜びからか、自身の拳を見つめつつ嬉しげに尻尾を振っているのだった。

「・・・」

「つちよ、バンギラス!?尻尾をそれ以上振るな、地面が、ヒビ、ヒビ入ってる!」

「——————」

「・・・そうですか、解決して良かったです。・・・ええ、こつちはたいたことなかったです。はい、はい。じゃあまた今度回収に向かいますね。それでは」

うみは、ワタルとキョウからの解決の連絡を受けながら、宮島に大量発生した鹿のようなポケモン・・・オドシシの群れを誘導し、森へと帰っていた。宮島へとついた段階でミロを一度マサキの元へと預

かりシステムで送り、ライと共に島中を巡ってオドシシを集めていたのだった。

ミロとバンギラスをマサキの作った預かりシステム（仮）を用いてキョウ達の元へと送り、対処にあてるといふ作戦がうまく行ったことに安堵したうみ。しかし、その表情は暗かった。

（・・・今回の件はこれからを思うと大打撃かな。幸いにもこっちは人的被害はなかったけど・・・）

最後のオドシシを山へと帰り、戻ってきたデオキシスに抱えられ帰るうみ。道中ずっと今回の事件による被害とポケモンへの世間の心象について憂慮していたうみだったが、突然デオキシスが速度を上げ急降下したことで思考が途切れる。

「うわあ!?!デオキシス、どうした!?!」

「……………」

「ライ!ライライ!」

「っ!?!」

慌ててうみが尋ねるが、デオキシスは上を見上げたまま何も答ええない。すると、リュック内にいるライが突然騒ぐ。いったい何が、と思いつつデオキシスの見ている方を向いたうみは絶句した。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

雲の切れ間、太陽の光に紛れるようにして現れたのは、体色が緑の、東洋風の龍のような体をしたポケモン。そのポケモンは、咆哮を上げつつ口元へとエネルギーを貯め、うみ達へと向かって『はかいこうせん』として撃ち出す。

「……………」

「うわあ!?!」

デオキシスがスピードフォルムへと変わり、うみをサイコキネシスで保護しつつトップスピードで逃げる。間一髪で躲したうみ達だったが、なおもポケモンは追いかけてくる。

「そんな、なんで……………」

背後から咆哮を上げ迫るポケモンを見つっうみは叫ぶ。

「なんでレックウザが襲ってくるんだよオオ!?!」

「GYAAAAAAAAAAAAA!!!」

「ふう、とりま一件落着やな」

うみが追いかけて回されている頃。うみの家のリビングでパソコンに向かい続けていたマサキは、騒動が解決の方向に向かい安堵のため息をこぼす。んーっと背伸びして机に突っ伏すマサキへ、スピアーが湯呑みをそつと差し出す。

「ん？おお、ありがとさん。・・・しかし、なんやえらいことになつてもーたなあ」

こりや一波乱あるで、と呟くマサキ。スピアーがお盆を持って出て行き、リビングに1人になったタイミングでマサキがおもむろにキーボードを叩き、とあるデータを開く。そこには、不定形のデータの塊のようなものがいた。

「・・・こいつが、切り札になるんやろうか、はたまた鬼札になるんか・・・さて、どないしようかな」

『k s け j く い じ c j d ん d j x ?』

「まあええか。これはわいの考えることやあらへんしな」

そう言つてマサキはデータを閉じ、パソコンの電源を切るのだった。

## 第34話

「デオキシスー！」

うみの叫びで一氣に加速するデオキシス。空の上からは原因は不明なれど襲ってくるレックウザ。

デオキシスに必死にしがみつきながら、うみはレックウザについて考える。

(なんだ．．!?なにが原因だ!?レックウザの縄張りに入ったのか!?)  
そんなうみとデオキシスに向けて、レックウザの『はかいこうせん』が襲いかかる。

「くっ．．．！デオキシス、海だ！海上を行ってくれ！」

はかいこうせんをギリギリで交わしたタイミングで、前方に見えた海を指差すうみ。デオキシスはうみの指差す先を見て、一氣に、しかしうみに負担がかからないよう加速する。

そんな2人を追いかけ、レックウザもスピードを上げていく。

「グルルアアアアア!!」

「ああもう、しつこい！デオキシス、急いでくれ！」

「ー」

海上へと出て、水面スレスレを飛ぶデオキシス。レックウザがなおもはかいこうせん連射を行うが、うみ達には当たらず水面に水柱を乱立させるばかりである。

「グルルアアアアア!!」

「くそう、どこまで追ってくるんだよあいつ．．．！」

段々とはかいこうせんの着弾地点が近くなってくるのをみて冷や汗を流すうみ。レックウザの口内にエネルギーが溜まり、うみが絶体絶命となった時だった。

「．．．！」

「な、なんだ．．．？」

突然レックウザが立ち止まり、口内のエネルギーも少しずつ小さくなり、やがて消える。

「止まった?．．．なんにせよチャンスだ、行けデオキシス！」

うみ達をじつと見つめるだけとなったレックウザを不思議に思いながらも、これ幸いと最大全速で逃げるのだった。

「グルルルル・・・」

一方のレックウザは、逃げていくうみ達を知覚しながらも、見逃していた。その視線が見据えるのは、先ほどまでうみ達のいた海面。

そのさらに奥の深海から感じる前回と同じ重圧に気づき、レックウザは止まったのだった。

「・・・」

ここで頭の冷えたレックウザは、しばらく思考する。デオキシスに對しての害意でうみ達を追いかけていたが、その過程で例の『3匹』と再度戦うことになれば、自身はタダではすまない。何より、縄張りを侵した「かもしれない」というだけのデオキシスを倒すのに、例の3匹を相手取るというのは――割に合わない。

「・・・グルウ」

そこまです数秒考え、レックウザは縄張りである成層圏へ登って行き、深海からの重圧も奥底へと戻って行ったのだった。

「ああびつくりした・・・」

レックウザから逃げ出したうみは、やつのことで自宅付近へと戻り、デオキシスを労ってからライと一緒に散歩しつつ帰路についていた。

「なんでレックウザが追いかけてきたんだろう？・・・なにもしてないけどなあ」

「ライ・・・」

横について歩くライと共に首を傾げるうみ。しばらくそうしてから、伝説ポケモンの思考なんて考えるだけ無駄か、と結論づけるのだった。



「よっし、ライ、家まで走ろっか！」

「ライ！」

嬉しそうに答えるライと共にうみは家へ向かって走るのだった。

「・・・目標を確認した。ああ、引き続き観察を続けル・・・」

その背後についてくる男に気づかず。

「これでラスト・・・！『りゅうのいぶき』！」

「フウ！」

「ゴアアア！」

時は遡り、うみがレックウザに追いかけて回されている頃。琵琶湖にて大量発生したギャラドスを相手取っていたワタルは、最後の1匹を倒したところだった。

「ふう・・・お疲れハクリュー。ミロもありがとうな」

「フウ」

「・・・キユウ」

ワタルが額の汗を拭い、やや疲れた様子のハクリューと平然としているミロへ声をかける。

琵琶湖の湖岸は、ミロとハクリューによって倒されたギャラドスが死屍累々（死んでない）と浮かんでいた。

「とりあえずこれで全部だろうけど・・・こいつらはどうするんだろうか。とりあえずキョウウさんに聞いてみるか」

疲労で頭の回らないワタルは、ブツブツと思考を口に出しながらスマホをタップする。そんなワタルを見つづちよつと休憩とどぐろを巻くハクリュー。ミロは、早くうみの元へと帰りたいのかそわそわしている。

『もしもし？ワタル君か』

「はい。こつちはとりあえずなんとかになりました。そちらはどうですか？」

『こつちも終わったよ。今、そつちの県警の友人に頼んでボールを持っていってもらってる。もう少しそこを警戒していてくれ』

「了解です。でも、こいつら・・・ギャラドスは結構な数いるんですが、

全部捕まえるんですか？」

「ちらりと目を回しているギャラドス達を見つつ言うワタル。しばらく考えた後にキョウが答える。

『・・・とりあえず捕まえられるだけ捕まえておこう。残りは、あまりやりたくはないが放すしかないだろう』

「放していいんすかね？これ」

『いいわけがないだろう？だが、こちらの件の1匹保護するのすら大変なんだ。何処にも受け皿がない、それに俺たちで所持するにしても』

「法律やら刑法やらを整理しないとイケないとかの諸々の問題がある・・・ですか。あああもう！もつと色々と準備ができてからこう・・・だめだ、もう頭まわらないです」

頭をガシガシと掻きながら項垂れるワタル。そんなワタルの声色に苦笑しながら、キョウが続ける。

『そうだな、取り敢えずこれが終わったら君とうみちゃんに何か奢ろう。今回のおつかれ会みたいなものだ。もう少しだけ、頑張ってくれ「キョウさーん!?!俺にはー?」お前は呼ばんぞ。「ちよっ!?!」・・・それじゃあ、また明日、報告の時に』

途中電話越しに聞こえたタケシの声にクスリと笑いながら、それじゃあ、と通話を切るワタル。

「悪い、もう少しだけここにいることになるわ。ミロとハクリューはボールの中で休んでるか？」

「フウ」

「キユウ」

了承を得てミロ達をボールに入れると、県警の人間を待つことにしたワタル。すると、そこへサイレンを鳴らしながらパトカーがやってくる。

「おーい、君がキョウの奴が言ってたワタル君か？」

パトカーから降りてきた警官が、手を振りつつワタルへと近づく。

「おれはシバ。キョウのやつに頼まれてきたもんだ。よろしく頼む」

やってきたのは、スーツの上からでも分かるほどガタイの良い男



少し残念そうにしたシバに、ワタルが続けて言う。  
「うみちゃん。彼女なら、シバさんの質問に答えられるはずです」

「というか、君、その腕折れてないか？」

「ん？・・・あ、いだだだだ!?再認識したら痛みが!？」

「お、おう、とにかく病院だな」

-----

「ただいまー!」

「ライライー!」

「おお、うみちゃんお疲れさん。キョウさんらのやつも一件落着やで」  
うみは、走ったことで上がった息を整えつつライと共に元気に家のドアを開けた。その音を聞いて、マサキが安心した様子でリビングから出てくるのだった。

「本当ですか!よかったです!」

「いやー、一時はどうなるか思うとったけどなあ。それもこれも、うみちゃんのおかげやな!」

「いやあ、俺は別に・・・あ、そうだ。システムの調子はどうですか?」

マサキの直接的な褒め言葉に照れるうみ。ふと、ポケモンの引き出しシステムの状況が気になり話題を逸らす。

「それなら問題ないで。今も少しづつ順長に調整しとる。せやけど問題はこっちやな・・・」

「?なにが・・・」

神妙な顔でパソコンに向かうマサキを見て、首を傾げながらディスプレイを覗くうみ。そこには、様々な掲示板が先ほどの事件についてのスレで炎上している様子が映し出されていた。

【緊急】ポケモン情報交換所【事態】

このスレはポケモンに関する情報をスレ民で共有する為の掲示板です。

123：名無し

いやほんまに、あれはポケモンって言う生き物なんだって

124：名無し

その根拠は？そもそもポケモンってなんだよ？それはどの研究所、どの生物学の権威が発表した事実だ？ソースも貼らずに嘘情報流すんじゃないよROMってろカス

125：名無し

だからさつきURL貼ったろうが。お前の方がカスだろ情弱。

126：名無し

アホみたいな妄言垂れ流すガキの動画なんぞが信頼できるか。少しは考えろ。

127：名無し

屋上へ行こうぜ・・・久々に、キレちまったよ・・・

128：名無し

てめーは俺を怒らせた。

129：名無し

俺らのことはともかくうみちゃんを貶すとか、こいつはめっちゃ許せんよなあ？

130：名無し

でも実際この動画の投稿者がなんの役に立つの？

131：名無し

うるせえ、信じてない奴はこの動画見ろ。in広島

URL

132：名無し

なんだこれ、鹿？

133：名無し

にしては随分とでかいな

134：名無し

というか車がひっくり返されてんじゃねーか！

135：名無し

これがポケモンだ。現在このポケモンの情報は映像だけだが、少なくともポケモンの中にはこいつ以上にヤベーのも確認されてる。

136：名無し

は？どうせCGだろうが、ここまでくると流石に清々しいなオタクども。

137：名無し

はいはい構ってちゃん構ってちゃん。ちなCGじゃないぞ、実際に見に行った。まじでこのまんまだった。

138：名無し

おい、少女が飛んできたぞ!?

139：名無し

あれがうみちゃん。現状日本で、いや間違いなく世界で一番ポケモンについて詳しい人物

140：名無し

あいたたた、さすがキモオタ、設定厨がすぎるわ

141：名無し

流石にこんな子供がそこまで・・・

142：名無し

アンチはROMってろ。ちなこれは別に誇張表現でもなんでもない。まじでこの子が一番詳しいから。上のリンクからとんで過去動画見てきた方がいい。今後現れるかもしれないポケモンについてめっちゃ教えてくれるから

143：名無し

え、今後も出るのか・・・なんか怖いな

144：名無し

○○テレビの生放送見た？あんなのがこれからも出てくると考えるとちよつと怖いな。

145：名無し

お前ら揃いも揃ってバカか？あんなのどうせ番組のやらせとかそれこそCGだろ。こんな茶番に付き合うとか人生の貴重な時間を無駄にしてんぞ

146：名無し

早口で一気に言つてそう。

147：名無し

アンチは消えとけ。そして今後のポケモン化社会に適応できず震えて眠れ。

148：名無し

wwwポケモン化社会wwwお前ら頭大丈夫か？

149：名無し

お前らよりはマシだよ。

150：名無し

あ ほ く さ

151：名無し

もちつけおまいら、ここのスレの題名読め。ここはポケモンの情報交換の場であつて喧嘩の場じゃねーんだよ。

152：名無し

というかそんなに言うならうみちゃんの放送聞けばいいんじゃない？

「荒れてますね」

「せや。他の掲示板も似たような状況やで。どこもかしこも『あの生き物はなんだ』『この映像はなんだ』やら大騒ぎしとる」

うみが難しい顔でパソコンを見る横で、スマホを使い別の掲示板を開いて見せるマサキ。その板も本物説を推す人とやらせやCGだと考える人の間での互いの主張の押し付け合いで炎上していた。

「んー・・・俺としてはどうにか本物って事を教えてあげたいとこなんですが」

「無理やな」

うみの言葉にバツサリと切つて捨てるマサキ。うみよりもネット

に詳しい故にその判断は早かった。

「ネットつちゅーのは案外隠し事よりも本音で喋る奴は多いんや、匿名性がある程度あるからな。せやから、齒に衣着せへん意見やらなんやらが飛び交つとる。特にこう言った掲示板は情報の確度よりも『面白い』『興味深い』事の方が信じられやすいんや。今ここでうみちゃんが書き込んで特に関手にされへんか面白半分には誹謗中傷の的にされるだけやろう」

「じゃあどうしたら？」

うみが首を傾げながら聞くと、マサキはニヤリと笑いパソコンに何かを打ち込む。

「簡単には二つ。一つは、そいつらの目の前でおもつくそ叩きつけてやる事。そしてもう一つは……」

「?……あ!」

未だ疑問符を浮かべていたうみはマサキが机から拾った物を見て声を上げる。

「自分より社会的に地位のある人間を使う、やな」

そういつてマサキがゆらゆらと揺らしたのは、うみ宛と言ってキョウウの置いていった封筒の中にあつた文書だった。

『○○省 ○○大臣 井口』

「どうも、みなさんこんばんは。うみです」

『ギター!』『大丈夫だった?』『滅茶苦茶騒がれてるな、例の事件』『第一次ポケモン事件同時発生』『第一次?』『どうせまた起きるだろうし?』『なるほど』

その日の夜。いつもどおりに配信を始めたうみのチャンネルには、



これまで以上の視聴者が来ていた。

「今日はたくさんの方が来てくれてるみたいですね」

『まーあれが何か知りたい奴多いだろうし?』『そして全員うみちゃんという沼にハマるんだヨオ!』『すいませんなんかもう首まで入ってるんですが』

いつも通りに流れていくコメントを見つつはじめての挨拶をしていたうみだったが、少しずついつもとは違うコメントが流れ始める。

『あの化け物はなんだ』『なにがわかるの?』『お前が犯人か?』『さつさと話してよ』

「…まず初見の方が多いと思うので基礎的なところから説明します。それと、一番理解してほしいこととして言いますが、今回様々な場所で現れたあれらの生き物はポケモンという生き物です。決して、話の通じない化け物ばかりというわけではないです。話し合い、接していけば心を通わせられるパートナーなんです」

うみのこれまでにない真剣な顔つきと話の内容のコメント欄が戸惑う。そんななか、うみが突然ガバツと頭を下げる。

「お願いします。俺にできる限りの説明はします。どうか、ポケモンを…彼らを恐れないでください。どうか、寄り添ってみてください。お願いします!」

頭を下げた事で見えなくなった画面から流れてくるコメントの音をしばらく聞き、目を上げたうみはそのまま説明を開始した。

—————

「…うみちゃん、もうええか?」

「ライ…」

うみが配信を始めて1時間後。配信が終わったにもかかわらず出てこないうみを心配して部屋のドアを叩くマサキ。その横では、同じく不安げな表情のライが耳を垂れてマサキの足にしがみついている。

「・・・入るで」

ノックしても話しかけても返事がなく、意を決してドアを開けるマサキ。部屋の中は真つ暗で、配信を終えて放置されたパソコンだけが鈍い光を放っている。

「うみちゃん・・・？」

「ライライ？」

「・・・」

うみはパソコンの光の溢れる机の反対方向、壁際のベッドの上で体育座りをしていた。顔を膝に埋めてじっとしており、顔色は窺えない。マサキが入ってきたのにも、ライが横までやってきたのにも無反応である。

「・・・うみちゃん。気にすることやない。あれは仕方ないんや」

「・・・」

「君はようやった。最後まで感情を抑えとったんは痛いほどわかった。せやけど、こればかりはしょうがないんや」

「・・・しょうがない。しょうがないで、すませるんですか？」

励ましの言葉をかけるマサキの言葉にも反応を示さなかったうみだったが、ふと顔を上げる。

「・・・！」

「しょうがないから・・・しょうがないから、ライを、ミロを、ポケモンを蔑ろにしていいますか？」

うみの顔には、なんの感情も浮かんでいなかった。全くの無、怒りも落胆も悲哀もなに一つ浮かんでいないその表情に怯んだマサキへと吐き捨てるようにうみが言う。

うみのパソコンには、配信が終わった今もなおコメントの履歴が表示されていた。

『嘘くさ』『どうせあれでしょ？突然変異とか』『どうかこんな妄想をよく配信で吐けるよね』『実際に見たとか映像あるとか言うけど、なんかのイベントとかでしょ』

様々な形での、様々な言葉での否定。ポケモンという存在の否定がそこには溢れていた。うみからの基礎的な説明を受けた視聴者達の

意見は、二つに分かれるだろうとうみは考えていた。ポケモンとの共存の、否定派と肯定派。しかし、うみの予想を超え新参の視聴者の意見は一つに絞られた。

『これもう駆除しかなくね?』

「!いえ、ポケモンは確かに接し方を間違えると危険ではありますが、決して共存できないわけではなく」

『でもテレビで見たやつとかめっちゃ水撃ってきてたけど』『というかそんな危険なやつが今後増えるとか嫌だわ』『これは駆除一択でしょ』  
「・・・!?ま、待つてくださ・・・」

『あんなの以外にもいるんだろ?他の奴らも早く処分した方がいいじゃん』『じゃあこの配信者の持つてるとかいう奴らもさっさと処分でしょ』

『おまいらしい加減にしろ』『うみちゃんの話聞いてねーのか。というか過去動画見なかったのか』『ポケモンとの共存しかこの先の混乱を生きる術はねーんだって!』『はいはい、ポケモンポケモン』『お前らこそこんな与太話をよく信じてるな』『実際にポケモンいるだろうが、与太話な訳あるかよ』

うみの配信のリスナーや古参勢がコメントでの説得を試みるが、効果はなかった。その後も何度か心に傷を負いつつもうみと古参勢による説得が続いたが、相手にすらされなくなっていく、最終的には初見の視聴者は激減し、コメントも古参からうみへの激励の言葉ばかりとなったのだった。

「結局俺は、なにもできなかつたんです・・・配信で、他の人にポケモンを知ってもらって。それで受け入れてもらえて、それで満足しちゃって」

ポツポツと、吐き出すように溢れる言葉には、諦観が宿っていた。  
「俺の・・・俺のやってきたことって、無意味なんですかね・・・?」  
「ライーライー!」  
「・・・」

必死にうみの手にすり寄るライに、無理やり微笑んで手を伸ばすう

み。悲しげな表情のライを抱き抱えると、また体育座りになる。すると黙って話を聞いていたマサキが突然うみの座るベッドへと大股で近づくと、一気にうみの胸ぐらを掴み上げる。

「っ!?なにを・・・!?」

「ええ加減にせえよおどりやあ・・・!」

腹の底から響いてくるようなマサキの怒気のコもった声に、文句を言いかけていた口を閉じるうみ。うみの胸ぐらを掴み宙ぶらりんにしたまま、マサキが一気に捲し立てる。

「無意味やと・・・?んなことあるかポケエ!少なくともここにおるわ、自分のやってきたことで変わった奴が!」

そう言って自身の胸を叩きながら、マサキが真剣な顔で吠える。

「ワイだけやない、ワタルはんやタケシはん、チャラ男、農家ニキ! キョウのおっさんだつて変わった! あんたと、ポケモンのおかげで変わったんや! それは決して無駄やないし、それでワイらは後悔したらん! それを、変えた本人が間違つとるつて言うなや! ワイらだけちゃう、」

自分の配信に來とつた古参共、あいつらがいつ自分の言うたことを無駄やゆうた!? たかが一度認められんかったくらいで、ウジウジ言うな! 少しは周りを見ろや!」

そこまで捲し立てて、肩で息をするマサキ。あまりの勢いに完全に押されてポカんとするうみを下ろすと、目線を合わせてしやがみこむ。

「・・・うみちゃんは結構しつかりしとるけど、たまにはワイらを頼ってくれや」

「・・・!」

「そりやあ、ポケモンに関してはどうみちゃんに頼るしかあらへんけど、ワイらはうみちゃんより長いこと生きとる分色々知つとるし伝手やコネも知識もある。・・・辛い時くらい、ワイらを頼りいや」

「・・・ふっ、ぐうっ・・・」

先程とは打って変わって優しげな表情になったマサキを見て、感情の堰き止めきれなくなつたうみは嗚咽を漏らす。

「ライ……」

「ライ！」

「……マサキ、さん」

「おう」

うみの横にちよこんと座ったライが、うみに話しかけると「俺もいるぞ！」と言うように元気に鳴く。ついでマサキの名を呼ぶと、ニヤリと笑って答える。

「俺……できると思っただよ……！配信で、せつめいして、それで、ポケモンのことしつてもらつて、それでみんなでなかよく……！」

「うんうん、せやな。みんなに知ってもらいたかったんやな」

「それで……！みんなにしつてもらおうとおもつてポケモンのえとかよういしてつ……こんなのもいるんだよつて……！」

「……せやな。また見てもらおうな？」

「……ぐっ……ううっ！」

暗い部屋の中、下を向いて俯き、涙をこぼし嗚咽しながら夢を語るうみと、それを見上げるライ。うみの頭を撫でながらその夢を聞き続けるマサキの姿だけがパソコンの光に照らされていた。

「見苦しいところを見せちゃつてすいません」

しばらくしてようやく落ち着いたうみは、恥ずかしそうにしつつマサキへとお礼を言う。その目はまだ赤く腫れており、耳も羞恥心で真っ赤である。

「かまへんて。それよりワイも柄にもなく説教なんかしてしもうたわ。なんかこっ恥ずかしいな」

「じゃあ、おあいこですね」

ふわりと笑ううみに一瞬見惚れ、マサキもつられて笑いつつそうや

な、と言う。

「それで、今後はどうすんや?」

「はい。もう吹っ切れました。ここからは使えるものはなんでも使いますよ」

「じゃあ、あれ行くんやな?」

いつもの調子を取り戻し、ニヤリと笑ううみはスマホを取り出す。

「ええ。…会ってやりますよ。政府のお偉いさんだろうがなんだろうが、ポケモンとの共存のためならやってやります!」

気合十分にそう宣言したうみの心には、もう諦観はなかった。

「さあ、始めよう!ポケモンとの共存への、最初の一步だ!」

『……………』

『……………』

『……………クロス』

閑話 うみ家の日常 part 2

ゾロア・ゾロアーク

『まあ、起きろ！朝だゾ！』

「・・・グルウ」

『うんーおはようだゾ！』

朝日がすっかり昇りきった頃、ゾロアークはゾロアの元気な鳴き声を目覚ましに起き上がる。寝ぼけつつも、最愛の息子の嬉しそうな姿にホッコリしながら朝の挨拶をする。

ゾロアも母親から頭を撫でられ嬉しそうに尻尾をブンブンと振っている。

「あ、2人ともおはよう、よく寝れたか？」

完全に眠気が飛んだところで、寢床としていた木に開けた大穴（スピアー軍団製作）から這い出すと、ちょうど洗濯物を干しているうみとその横で手伝いについて回っているライに会う。にこりと笑いながら挨拶をするうみに、テトテトとゾロアが近づいていく。

『おはようだゾ！うみ、オイラ腹が減った！』

「分かってる、分かってる。待ってないま持つてくるから」

キャンキャンと吠えるゾロアをなだめながら家へと戻るうみ。ふと、そんな2人を見守りながら微笑むゾロアークを見ると、複雑な表情で「グルウ」と朝の挨拶をしている。

「おはよう・・・お前も少しは慣れてきたか？」

「・・・」

ふい、と明後日の方を向いてしまうゾロアークに苦笑しつつ、家へと戻るうみ。台所で皿に朝ごはんを用意しながらゾロア達がやってきた時を思い出す。

「まあ、少しは心を開いてくれたのかな・・・」

「うみちゃん、大丈夫なのか？」

暴れるゾロアークにゾロアを会わせることでどうにか事態を収め  
たうみ達。一件落着、と言いたいところであったが、一つの問題が  
残った。それが、ゾロアとゾロアークをどこに保護するか、であった。  
ゾロアを抱きしめて泣いていたゾロアークだが、その目の中は人間  
への警戒心が渦巻いており、うみやキョウ達を睨み毛を逆立ててい  
る。

「大丈夫です。．．．と言えればよかったですかねえ。警戒されま  
くってるし、どうすれば．．．」

ゾロアークになかなか近づけずうーんと唸るうみ。そんな主人を  
見上げ尻尾を揺らしていたライは、何を思ったのかトテトテとゾロ  
アークへと歩いていく。

「ライ？」

「お、おい．．．」

ライの突然の行動にきよとんとするうみと刺激してしまうのでは  
と若干焦るキョウ。

そんな人間達を意に介さずズンズンと距離を詰めるライ。ゾロ  
アークもライの突然の接近にどう動くべきなのか戸惑っているよう  
だった。

「．．．ライー！」

「グ、グルウ．．．？」

「よっ」と言うように気さくに手をあげて笑うライに一層戸惑うゾロ  
アーク。ゾロアも母親の警戒心が少し収まったのを感じてそつと顔  
を上げる。

「ライ、ライライライ！ライ、ライイライ、チュウ！」

「グルウ、グラア。グラウガア」

「何やってんだあいつら．．．」

身振り手振りを使いながら何やら力説するライ。それに対してゾ  
ロアークも何やら答えているようだったが、何一つうみ達には理解で



きていない。

『あのポケモンは、なんかうみの家で一緒に暮らそうって言ってるゾ！まあの方は人間の世話になる気はないって言ってるゾ！』

「うお、喋った!?!」

「ああそっか、ゾロアなら分かるんだよな。できれば通訳……ええと、何話してるか教えてもらえないか?」

『オツケーだゾ!』

いつのまにかうみのそばまで来ていたゾロアが2匹の会話を翻訳する。

ライ「うみの家は楽しいよ?ご飯もあるし!」

ゾロアーク「……それでも人間はあまり信用できない」

ライ「?うみは悪い奴じゃないよ?」

ゾロアーク「それは……」

ライ「ご飯は美味しいし、遊び相手もいるよ!楽しいから一緒に住もうよ!ご飯も美味しいし!」

ゾロアーク「……しかし、それでも私たちを受け入れるのか?お前のパートナーは」

ライ「大丈夫!うみはいい子だもん!俺たちにも優しいよ?きつと君達も受け入れてくれるって!うみのご飯は美味しいんだよ!」

「……なんか俺のすべき説得をライが全てやってくれてるな」

「というか、飯のことばっかだな」

『言ってることは全部間違ってるぞ?』

大きな身振り手振りでアピールするライを見ながら複雑な表情で見守るうみとキョウ。ゾロアはいつのまにかうみに抱かれてモフられながらも通訳を続ける。

その後もライとゾロアークの話は続き、数分後。

「……グルウ」

「……あ、終わった?」

「ア!?!」

うみの前へ行きやや不安げに鳴くゾロアーク。一方のうみはもは

ヤライが説得をしていたためゾロアをモフるのに集中しており流石にゾロアークがキレる。ポカポカとゾロアを抱いているため弱めに叩いてくるゾロアークにうみが謝る。

「ご、ごめんごめん…取り敢えず、俺ん家に行こうか。キョウさん、すいませんがお願いします」

「おう、もう時間もない。さっさと行こう」

うみとともにキョウの車に乗りこんだゾロアークとゾロアは、猛スピードで進む外の景色を見ている。ゾロアは目をキラキラさせて外の様子を見ており、ゾロアークはゾロアを抱きながらうみをじっと見つめる。

「ねえゾロアーク、ちょっといいかな」

「・・・」

そんなゾロア達を微笑ましいものを見る目で見ていたうみだが、ふとゾロアークに質問する。うみの言葉に、なんだ、というようにフンと鼻を鳴らすゾロアーク。ゾロアはそんな母親を見上げながら「通訳いるか？」と目でうみに訴える。そつと頷くうみにフンと鼻息で返事するゾロアーク。

「ゾロアークは、人間を恨んでたりする?」

「・・・!」

『まあ・・・』

うみの質問に一瞬目を見開いたゾロアークは、黙り込んでしまう。そんなゾロアークを見上げるゾロアは不安げな表情を浮かべる。運転手のキョウはあえて気配をできるだけ消してゾロアークが話しやすいようにする。うみの横にはいつの間にかボールから出て来たライがおり、うみとゾロアークをじっと見つめていた。

「・・・グウ。グルア」

『!まあは、別に人間自体はそこまで恨んでないって言ってるゾ!ただコウダイって奴がいたらぶっ飛ばすって言ってるゾ』

「ああ、うん・・・」

ゾロアークの言葉を通訳したゾロアは嬉しそうに尻尾を振っており、うみもゾロアークが人を恨んではいないことにホッとした。ゾロ

アークの先程までの反応を考え最悪の場合を想定しての質問だったが、問題ないと判断する。

キヨウの方は「コウダイって誰だ・・・」と呟いていたが、そこはうみが気にしていないのでまあいいか、とした。

「それじゃあ、とりあえず俺の家に行くにあたって気をつけて欲しい事とかをいろいろ言っておこうと思うから。まず、庭のでかい木はスピアの巣があるから気をつけて・・・」

そうして、うみ個人が気にしていたことが解決したためゾロアーク達に家での注意事項を教えていくのだった。

「あれから人間に対して警戒はしても威嚇したりは抑えてくれるようになったし、こうして俺の指示も聞いてくれるし。仲良くなれてよかったな・・・イタズラは止まらないけど」

うみがはあとため息をつきながら用意した朝食を持って歩き出す。

「チュウウウウ!!」

「ガアアア!!」

「わああああ!!」

朝食を準備しつつノンビリと回想していたうみだったが、突如外から聞こえたライとバンギラスの叫び声と爆発音に飛び上がる。

「な、何やってんだ!?!」

慌てて庭へと飛び出したうみの目に飛び込んできたのは、いつもの日課となったバトルをするバンギラスとライ。しかし、これまでと違い互いの殺意が高すぎて一切加減がきいていない。

うみに禁止されている筈の「はかいこうせん」を躊躇いなくぶつ放しているバンギラスと、近くにミロの湖があるにもかかわらず電撃をぶつ放しているいつもよりキレたライ。

ライの手加減のない攻撃はレベル差にもものを言わせてバンギラスを追い詰めているが、素の耐久力の高さで耐えつつはかいこうせんや

鋭い爪でのきりさく攻撃でライへと迫るバンギラスも負けておらず、互いに盛大に暴れているため庭は酷い惨状となっていた。

ミロは朝の寝起きでライの電撃をくらい、湖にプカールと浮かび目を回していた。

「お、お前らー！こらー！やめろー！」

『う、うみく』

『ゾロア？どうしたんだこれ!?!』

止めようと叫ぶうみだったが、互いに興奮しているのか声が届いていない。途方に暮れるうみの横へと目を回しながらゾロアがやってくる。

『な、なんかライの朝ごはんにバンギラスが吹っ飛んできてご飯が台無しになったからライが怒ってるんだゾ・・・』

「は!?!じゃあなんでバンギラスも怒ってるんだ!?!」

『バンギラスの方は、ライに突然突き飛ばされたって言って怒ってるゾ。訳がわからないけど、オイラ達じゃ止められないゾ・・・』

「ん??!ど、どういうことだ?」

ゾロアの説明を聞いている間にも、庭は電撃でえぐれ、はかいこうせんでクレーターができ、酷い有様である。

『う、うみく。このままだとまずい気がするゾ・・・うみ?』

慌てふためくスピアール、家の中から聞こえるジラーチの泣き声、それと同時に窓から飛び出てきてどうにか被害を抑えようと洗濯物を避難させるゴース。阿鼻叫喚の地獄絵図といった状況にゾロアがうみのワンピースの裾を引っ張るが、うみからの反応がない。不思議に思い見上げたゾロアは「ピイツ!?!」と悲鳴を上げる。

うみのハイライトの消えた目の見つめる先には、喧嘩という名の戦争をしているバンギラスとライを爆笑しながら見ているライチュウがいた。ライはバンギラスと戦っており、うみはほかにライチュウを持ってはいない。

「・・・そういうこと、か」

『う、うみ・・・なんだか怖いゾ・・・』

怯えるゾロアににこりと微笑み、一撫でしてからライ達の元へと歩

き出すうみ。スピアー軍団やゴースがうみを止めようとするが、うみが睨むとビクリとしてそつと道を開ける。

怒りのままにバトルを続けるライ達のそばまでやってきたうみ。電撃やはかいこうせんのエネルギーが周囲に飛び交う危険地帯にもかかわらず、うみは一切臆さない。遠くで爆笑して見ていたライチュウがそんなうみの登場に驚き、慌てて駆け寄っていく。

「ラアアアイ、チュウウウ!!」

「ガアアア!!」

その時、うみの目の前でライとバンギラスが互いに自身の最強技をぶつけんと対峙する。電撃を周囲に撒き散らしながら怒りの表情で「ボルテッカー」を使おうとするライ。

一方のバンギラスも、怒りのままに最大威力のはかいこうせんを放つため口にエネルギーを貯める。両者の一撃がまさに放たれんとしたその時、スウーつといきを吸い込み、うみが叫んだ。

「ステイツツ!!」

「!!?!」

うみの声は先ほどよりも遥かに大きく、かつ彼女の鈴のような声とは違うドスの効いた声だった。その声を聞き、反射的にライとバンギラスが伏せの態勢になる。駆け寄ってきていたライチュウも、ハラハラしながら見ていたスピアー達やゾロアでさえも伏せの姿勢を取る。

『!?な、なんか体が勝手に動いたゾ!』

「!!「スピツ!」「!!」

「ー!?!」

戸惑いの声を上げるスピアー達外野と違い、ダラダラと冷や汗を流すライ・バンギラスペアと謎のライチュウ。

「・・・ねえライ」

「!・・・ラ、ライ」

「バンギラス」

「・・・グルウ」

「ゾロアーク」

「!・・・チュウ」

伏せから正座の体制へとシフトしたライ達と、すでにバレていたことに驚きつつ大人しく正座するライチュウ改めゾロアーク。

「周りを見てみな。ねえ、うちの庭ってこんな荒れてたっけ？」

「……」

「んん？ねえ、俺は質問してるんだよ？黙れとは言っていないぞ？」

「……」

そのとき、ゾロア達は「プチッ」という音を幻聴した。

「お前らやりすぎなんだよ！ライ！お前は飯のことになると考えなく暴れすぎ！バンギラスも冷静に考えるっていう頭を持ってや！ライが食事中にお前にちよっかい出すわけないだろ！お前ら2人は少し頭を使うってことを覚えやがれ！ゾロアーク！お前は一番アウトだよ！何少しホツとしてんだ！俺言ったよな！初めて家に来たときに『イタズラはしない』ってゾロアと一緒に言い聞かせたよな！何を母親のテメーから破ってたんだ！どうすんだこの庭！洗濯物も一部やり直しだし！戦犯はゾロアーク、次点でライとバンギラス！お前ら今日中に庭を直せ！休んでたら飯は抜くぞ！だいたいお前らは最近なあ……！」

その後、喧嘩したライとバンギラス、原因となったゾロアークは怒りで顔を般若のようにしたうみからの説教を長いこと受けるのだった。

『……決めたゾ、うみが怒ることはしないようにするゾ』

怒られるまあを見て、ゾロアは震えながらそう心に誓うのだった。

—————  
ゴース

『……お前は知らない』

『……！』

『じゃあな』『ついてくるな！』『知らない』『イラナイ』『いらな……』『~~~~!!』

朝の日差しが差し込む中、ゴースははっと目を覚ました。睡眠をあまり取ることのなかったゴースだが、うみの家に来てからはうみや他のポケモンに合わせて行動することが多くなっており、睡眠もちゃん

と取るようになっていた。

「・・・」

ゴースは基本うみの部屋の隅に用意された座布団の上で眠っている。目を開けたゴースは、うみの机の時計をチラリと見て、針が既にうみの起きる時間を過ぎていくことに気づく。そつと浮かびベッドの上でスヤスヤと寝息を立てるうみへと向かう。

「・・・ぐう」

「ーーーーー」

「んう？・・・あれ、ゴース。おはよう」

ゴースが恐る恐るささやきかけると、うみはすぐに目を覚まし微笑みかける。そんなうみにゴースも嬉しそうに笑うと、未だ眠り続けるライを起こしにかかる。

「ーーーー、ーーーー」

「ライ？・・・チャ〜」

ゴースがライを起こしている間にうみは下へと降り、早起きなスピアーとライ、ゴースの朝食を用意し始める。

ゴースはこうしてうみ家へとやってきてから、うみの家事炊事の手伝いを日課としていた。ライを起こすと、うみのいる台所を通り過ぎ、洗面所へと向かう。

洗濯機まで着くと、『サイコキネシス』で蓋を開け、そのまま中の洗濯物を全て取り出すと、器用に籠の中へと放り込み、頭の上でフワフワさせながらリビングへと戻る。

「あつ、ゴース。いつも悪いな」

「ーーーーー」

リビングにはちょうど朝食を用意し終えたうみがおおり、ゴースがカゴを置くのにっこり笑って礼を言う。ゴースも笑いかけながらそれに答え、2人で洗濯物を干せるよう準備していく。

「ふう、もう少しかな？」

庭へと出て、洗濯物を干しているうみとゴース。カゴを覗いてそう呟くと、うみはゴースを呼んでくる。

「おい、ゴース?」

「……?」

「もう洗濯物はいいよ、朝日は好きじゃないだろ? 悪いけど、二階のジラーチがちゃんと寝れてるか確認してきてくれ。そのあとは中で寛いでいいから」

「……」

うみのお願いに頷くと、二階の窓の中へと透過して入っていくゴース。

「……」

「……スヤア」

出来るだけ音を出さず入るゴース。そんなゴースの侵入には気づかず、うみの机の上に作られた木製のゆりかご(スピアー軍団製作)の中で心地良さそうに寝息を立てているのは、ゴースとの件で保護する運びとなったジラーチだった。その安らかな寝顔には、何故か隈ができていた。

「……」

「スヤア」

( $\square$ の $\square$ ) 状態のジラーチを確認し、ヨシ!と一つ頷くと、部屋を出ようとするゴース。

しかしその次の瞬間だった。

「……!?!」

「スヤア……ウゥンン?」

突然家全体が地震のように揺れた。そして外からは轟音が鳴り響く。ゴースは何事か、と窓の外へと出ようとする。その時だった。ジラーチがうなされてそつと目を開く。

「……」

「……」

ジラーチはうみの机の上、の窓のそばで寝ていた。そしてゴースはその窓から出ようとしていた。つまりは、ジラーチの真上にゴースがいる状態である。

「……」



「（。ム。）」

こちらを口をアングリ開けて見つめるジラーチに、何を言っているか戸惑うゴース。やがてそつとゴースは笑みを浮かべる。

「……、……？」

どうしたの、とジラーチに話しかけるゴース。するとジワリ、とジラーチの目に涙が溜まっていく。それを確認したゴースは、あやっべ、と躊躇いなく窓からすりぬけて逃げ出した。

「……！！?」

次の瞬間、ジラーチの絶叫がうみの家に響き渡る。外へと飛び出したゴースは、庭で起こっている惨状に目をみはる。えぐれた大地、吹き荒れる衝撃波、感電し池で白目を剥いて浮かぶミロ。

あまりにもあんなまりな光景にポカンとするゴース。ふと下を見ると、慌てふためくうみと衝撃波で揺れる洗濯物があつた。

「……！」

喧嘩するライとバンギラスを見て自分ではどうしようもないと判断したゴースは、被害を少しでも抑えるために急いで洗濯物を家の中へと移していく。

「ステイツ!!」

「!？」

途中うみのあまりにも威圧感のこもった言葉に固まってしまいがらも、結果ゴースが移動させたおかげで洗濯物への被害は抑えられたのだった。

ゾロアークによるライ・バンギラスの喧嘩事件が終わった頃。疲れた様子でリビングでソファに座るうみは、魂を口から吐きながら倒れ伏すライを撫でていた。

ちなみに外ではバンギラスがライと同じく魂を吐きつつサイドンと共に庭の整備を行っていた。湖への被害で怒ったミロからバシバシと尻尾で叩かれつつ地面をならしていくバンギラス。そのやや後

方では、これまた魂が口から吐き出されながらもクレーターに土を入れ続けるゾロアークがいた。

するとうみの元へ、フヨフヨとゴースがやってくる。

「……？」

「んん？ああ、大丈夫。もう怒ってないよ」

不安げな様子でやってきたゴースに一瞬首を傾げるうみ。しかしすぐに苦笑いしつつもう問題ないと告げる。

それを聞いてほっとしたゴースは、庭の整備を手伝おうとする。

「……ねえ、ゴース？」

「？」

うみに呼ばれ、なにかな？と再びそばに寄るゴース。ゴースを見上げ、うみは心配げに尋ねる。

「無理してないか？なんか家に来てからずっと働いてるけど……」

そんなうみの言葉に、少し考えてからゴースはそっとうみのおでこに自分の額（にあたるところ）をくつつける。

「ゴース？」

『ありがとう』

「！」

ゴースの行動に戸惑ううみ。すると脳内に、少年のような声が響く。驚いて咄嗟に顔を上げると、につこりと笑うゴースと目が合う。『なにかを任せてもらえるから。そばに居させてもらえるから嬉しい』

「ゴース……」

ゴースから流れてくるそんなテレパシーにも似た感覚に、呆けるうみ。そしてそのままゴースに微笑みかける。

「……ありがとう。これからよろしくな」

「……」

その言葉を聞き、庭の整備を手伝いにいくゴース。

その顔は、長年欲しかった言葉を得た喜びに満ちていた。

—————

ジラーチ

ジラーチは激怒した。

必ずかの邪智暴虐の「すまあとふおん」を討ち果たさんと。

ジラーチには人間の家屋のことはわからぬ。

ジラーチは幻のポケモンである。

ジラーチは純粋な性格で、様々な良き人々の願いを叶えてきた。

けれども睡眠の質には人一倍、いやポケモン一うるさかった。

「よし、できたよジラーチ。ここなら好きに使ってもいいよ」

「……！」

うみという少女？の家に行ったジラーチは、久しぶりに得た居心地の良い寝床に大満足だった。

暖かく自身を包んでくれる布（※タオル）、頭の置き場として申し分ない枕（※タオルを畳んだもの）、極め付けは木でできたゆりかご型のベッド（※タオルがマットがわり）という、まるで全てを包み込んでくれているかのような安心感があった。（全てスピアー軍団作製）

「じゃあ、おやすみな」

「……！」

『ありがとう』と書いた紙を見せながらベッドに横になるうみへと手を振るジラーチ。電気が消され、静かになったところでジラーチもゆりかごの中でタオルにくるまる。

圧倒的な居心地に、やはり来て良かった、と確信するジラーチだった。

うみ家へとやってきてしばらく経った。

しかしジラーチは、未だ完全に千年の眠りに入ることができないでいた。それどころか目元には隈ができており、普通に寝ることすらできていないのが一目瞭然だった。

「……！！！」

『なんでやー！』というジラーチの心の叫びは、誰にも届かないのだった。

問題は、うみ家にやってきた次の日の朝からすでに起きていた。



時には、寝ぼけたうみにライと間違われ抱き枕にされ。

「ぐう」

「フギユツ!」

時には、ここなら寝れるのでは?と隣の配信部屋へと移動し、うみの配信が夜までリスナーとの議論に発展し。

「ですから、電気タイプのポケモンと仲良くなればエネルギー面での利益がですね・・・いや機械のように酷使するんじゃないですね!」

「・・・」

またある時には、縁側で太陽の温もりと風を感じつつ眠ろうとして、ライ達の遊び(○)の衝撃波に吹っ飛ばされ。

「チュウウウー!」

「ガアアア!!」

「~~~~~!?!」

そして今日もまた、ライ達のガチ喧嘩の騒音で叩き起こされたのだった。その際、たまたま真上にいたゴースに驚いて気絶してしまっただが、ある意味少しでも寝れた事になるのだろう、とジラーチはポジティブに考えていた。

「~~~~~!!」

枕がわりのタオルをバシバシと振り回しながら、ジラーチはリビングへとフラフラと降りていく。

「あれ?ジラーチ、おはよう」

時刻はすでに昼を過ぎており、今まであまり降りてこなかったジラーチがふらりと降りてきたのに首を傾げるうみ。一方のジラーチは、目を擦りつつソファへとボスンと着地する。

「~~~~~」

「・・・」

クッションへと顔を埋め足をばたつかせるジラーチ。そんなジラーチにゴースがそっと毛布をかけていく。ジラーチは顔を上げると、一つうなずく。

「~~~~~!」 (きょうこそはちゃんとねかせろっというんだ!)

そう決意し、いぎ、と意思疎通用にと用意された小さなメモと鉛筆

を手にうみの元へと向かうジラーチ。するとちようどうみが台所から皿を持ってやってくる。

「おう、ちよつと遅いけどお昼作ったぞ。起きてるんなら晩ご飯食べるかもしれないし、少なめだけだな」

そう言つてジラーチの前に差し出された皿には、手製のサンドイッチが3つ乗せられていた。それを見たジラーチは一瞬固まり、そつとメモと鉛筆をしまうと皿を受け取り机の上に座る。

「どうだ？美味いか？」

黙々と食べるジラーチに、対面に座つて頬杖をつくうみが尋ねる。

「・・・」

「そうか、よかった。もし欲しかったらまだ作れるから言うんだぞ？」  
『おいしい、ありがとう』と書かれたメモをジラーチが見せると、嬉しそうに笑ううみ。

(・・・またこんどでいいかな)

ジラーチの頭を撫で、上機嫌で庭へと向かううみを見て、ジラーチはそう思うのだった。

「どうだ、ポケモンは」

「いやあ、もう驚きでいっぱいだよ。頭が追い付かん」

うみが家でいつもと変わらぬ日常を過ごしていた頃。キョウと、その友人でありギャラドスの騒動を担当していたシバは夜の琵琶湖を訪れていた。キョウの質問にシバは頭を掻きながら苦笑いする。

「で、いつになったらお前の姫に会わせてくれるんだ？」

「うみちゃんはそんなんじゃない。・・・もう数日待つてくれ。あの子も存外忙しいんだ」

「あいよ。別にそこまで急いじやいねえさ」

街灯のみが周囲に光をもたらす暗闇の中、気楽に話す2人。2人の腰には、光を受けて赤と白に輝くモンスターボールがぶら下げられている。

「お前結局あのポケモン・・・ギャラドスだったか、を持つ事にしたん

だな」

シバのボールを見つつそう呟くキョウに、シバは無言で頷く。

「琵琶湖でのギャラドスのその後は？」

「一応ボールが足りなかった分のやつは、近くの水族館の職員やら海洋研究家やらに頼んで発信器だけつけて放流だ。今んとこ被害はねえ」

そう言つてボールを手に持って眺めるシバ。

「ごーんな妙な玉やら化け物みてえな生物。全く、映画やらアニメの世界にでも入った気分だ」

「全くだ」

互いに苦笑いする2人は、どちらからともなく歩き出す。

しばらく無言での男2人の散歩が続いている中、徐にシバが喋りだす。

「……よかったのか」

「……何が？」

『『言わなくて』』

「……」

シバの言葉に立ち止まるキョウ。少し進んだところで振り返ったシバの顔は、真剣なものだった。

「あの子なら気づくかもな、お前の隠してる事」

「……」

「その時、お前はうみちゃんを切り捨てられるか？」

「……さあな」

そう言つてタバコを啜えたキョウを見て、シバはそつとその場を後にする。

残されたキョウは、タバコを手にそつと顔を覆うのだった。

「……切り捨てられるわけないだろ。そう簡単に」

その呟きをさらうように吹いた風で、キョウの腰で「2つ」のボールがカタタンと音を立てて揺れるのだった。

## 第35話

【情報戦】ポケモンに関する情報を集めるスレ【開始】

126：名無し

おまいら、どうなってる？

127：名無し

友人とかに話してみたりしてるけど、ぶっちゃけ信じられてないっぽいな。やっぱ無理があるんじゃないかね？ポケモンについて人に言ってるってのは

128：名無し

わかってたこととはいえ、これ以上はもうダメだな。潮時かもしれん

129：名無し

ばっか野郎！>> 128はうみちゃんの涙を見なかったのか！

130：名無し

せや！あんないい子をこれ以上泣かせられるか！

131：釣り師

お前ら、落ち着け。新情報だ

132：名無し

キターーーーーー！

133：名無し

釣り師ニキ！うみちゃんは大丈夫なのか!?

134：釣り師

そこに関しては問題ない。ここでは言えないが、うみちゃんは今大勝負に出てるらしい。今やってる案件が上手くいけば、少なくともポケモンによる被害は大幅に減らせるらしいぞ

135：名無し

お前ら聞いたな！うみちゃんが頑張ってるんだ、諦めてる場合じゃないぞ！

136：名無し

おお！ポケモンの確保でも情報収集でも、知り合いへの情報提供で



も何でもいい、今こそうみちゃんリスナーの力の見せ所だ！

137：名無し

戦いは数だよ兄貴！

138：名無し

そんなおまいらに朗報だ。新たなポケモン持ちの誕生を祝え

139：名無し

なんだって!?

140：名無し

何捕まえた！誰かポケモンのwiki見てこい！

141：名無し

こいつだ

>>画像

142：名無し

なん・・・だこいつ？

143：名無し

おいこれへび？岩？なんなんだこいつ

144：名無し

分かんねーけど、これも見る。こいつと俺自身のサイズ比較

>>画像

145：名無し

いやでつか!?!なんだよそのサイズ感！

146：名無し

蛇ってか、これ琵琶湖の青い龍みたいなポケモンくらいあるんじゃないか？

147：難波のオタコン

イワークやな。いわへびポケモン、タイプはいわ・じめん。地面の中に住んでいるはずやけど、よく捕まえられたな

148：名無し

ファツ!?

149：名無し

誰だ、関係者さん!?

150：名無し

おちけつ、まだ慌てるような時間じゃない

151：名無し

オマエモナー

152：難波のオタコン

うみちゃん公認のポケモン判定人や。質問には答へんで。とりま捕まえた状況頼むわ

153：名無し

趣味で登山してたら、地面が揺れていきなり出てきた。その時たまに確保してたボールをダメ元で投げたら上手く入ってくれた

154：名無し

祝い！日本の数少ないポケモン捕獲者、新たな誕生の瞬間である！

155：難波のオタコン

祝いとは言ってへんで。それにしてもようやったな。大事に育てるんやな

156：登山家

分かっています。流石に駆除とか曰う奴がいる手前、人前では出しませんが

157：名無し

これだけかいポケモンだ、すげー戦力だぞ！

158：名無し

警察ニキや釣り師ニキすら超えるのも夢じゃないんじゃね!?

159：難波のオタコン

そ、ソウデスネー

160：登山家

まじか、俺の時代きたか!?

161：難波のオタコン

あ、ちなみに言うとう登山家ニキは運が良かっただけやで。こいつが暴れば間違いなく死人が出るやろうな。他の奴もポケモンにあった場合、まずは逃げることを優先してくれな

162：名無し

過去の大搜索で入院した奴もいるんだ、そこはちゃんと自重するさ  
163：名無し

だな。流石に命が大事だ

164：名無し

それにつまらんことでうみちゃんのポケモン布教の邪魔になるのも駄目だしな

「……はあ、疲れるわあ」

ぐい、と背伸びをしてグダツと椅子の背もたれに背を預けるマサキ。うみ家から自身のねぐらへと戻ってきた彼は、現在スレや情報掲示板の様子を確認しポケモン関連の情報を集めていた。

『マサキさんには、ポケモンの転送機械の開発を急いでもらいたいです。ただ、情報もまだまだ必要になるので、無茶は承知ですが今後の情報集めの方もどうかお願いします！』

うみの家から去る際に頭を下げながら頼み事をするうみを思い出し口角を上げるマサキ。

「まったく、ワイ以外にももつと人手がおるやろうに、こーいうとこ全部任せるやなんてうみちゃんもひどいやっちゃ」

ぶつぶつと文句を言いながらもキーボードを弾く手は緩めない。しばらくの間パソコンに向かっていたマサキだが、流石に疲労感を覚えエナジードリンクの缶を片手に席を立つ。

「さて、と。今日の分は終わり、趣味に走るとしますかねえ」

そう言っつて缶の中身を飲み干したマサキは、チラリとパソコンの横に置かれた冊子を見る。

明らかな手作り感のある紙をまとめて縛っただけにも見えるその表紙には、『ポケモン名称・特徴・対策一覧』と書かれていた。

『まだ一部しかできてないですが、今後のポケモン捕獲者への説明に使ってください』

「うみちゃんがこれを作ってくれたから良かったものの……」

そう言っつてマサキは缶をゴミ箱へ放り、冊子を手取る。ズツシリとくる重さと、六法全書にも匹敵するであろう厚みを感じたため息をつ

く。

（これがなかったらどれだけポケモンを捕まえてようとどんなやつかもわからなかったし、対処もできなかったやろうな。その点だけ見ればこれは超重要なものや。けど・・・）

「つまりはこれからこの厚みの分ポケモンは増えるつちゆう可能性・・・いやもう確定つてことなんやろうな」

複雑な心境を表情と声色に出しながらパラパラと冊子をめくる。実在している生物に酷似したもの、機械にしか見えないもの、そもそも見たことのない形状のもの。様々なポケモンの姿が子どもらしい、それでいて丁寧な絵で描かれている。

「・・・？これは・・・」

パラパラとめくりながら適当に眺めていたマサキは、あるページで止まる。そこに描かれているポケモンを見て謎の違和感を覚えた。

（見たことなんてない・・・はず）

その、古臭いゲームのキャラのような角ばったデザインの、ぱっと見おもしろいしか見えないポケモン。マサキは、そのポケモンの絵に妙に胸騒ぎを覚えた。

「・・・まさか、やな」

冊子を閉じ、戸惑いを振り切るように頭を振って、マサキは部屋を出るのだった。

「・・・」

そして、その様子を窓から静かに覗く謎の影に、気付くことはなかった。

「ふう・・・」

掲示板の動向をスマホで確認していたワタルは、ため息と共にうなだれた。

「なんだなんだ、暗いぞ少年。折角若いんだから、もっと元気に生きようぜ」

「タケシさん、俺一応腕折れてるんですけど・・・？」

そーいやそうだったな、と笑うタケシを見て苦笑いしながらギプスで固められた片手をさするワタル。現在彼は、警察庁の上階にある対策課のオフィスに入り浸っていた。ソファに座るワタルの横には、とぐろをまいて眠るハクリューと、ひたすらに用意された菓子をバクバクと食い続けるポケモンがいた。

「にしても、一躍有名人だな。ある意味でうみちゃん以上だ」

「洒落になってないし、そもそも有名な理由が微妙ですよ・・・」

そう言っ窓のブラインドを指で開きそつと階下を覗くと、そこには人だかりができていた。

『これ以上の居座りはやめて下さい、ここは警察庁ですよ!』

『では例の琵琶湖の騒動で現れた謎の少年を出してください!』

『彼は警察関係者なのですか!?!』

『未成年者を働かせているんですか!?!』

『彼が連れていた謎の生物については!』

『とにかくお帰りください! 現在調査中です!』

必死に、そしてなるべく丁寧に帰れと声を張り上げる対策課の警官。その周りに集まっているのは、どこからかぎつけたのか、ワタルを追ってきたテレビ関係のレポーターや新聞記者だった。バレたらまずい、とすぐに窓から離れたワタルは、頭を抱える。そんなワタルに気の毒に、と言う視線を向ける対策課の人間。

「まさか全国区のニュースでワタル君が出るとは思わなかったからねえ」

「それよりもうちの所属ってことが漏れてる方が問題だよ。機密ってなんだっけ?」

そう、ポケモン同時多発出現の際琵琶湖で対応したワタル。その様子が生放送で垂れ流されてしまった。しかもハクリューに指示を出しながらレポーターたちを避難させようとしているところでバツチリとカメラに顔も写っていたため、簡単に特定され家に押し掛けられた。

そのため現在は対策課にて保護、テレビ局から逃れるため実質軟禁状態となっている。

「まあ大丈夫さ、ネットの方では割と好意的だぜ？」

そう言つてタケシが見せたパソコンに表示されている掲示板では、ワタルとギャラドスやハクリューといったポケモンたちに関する様々な意見や憶測が飛び交っていた。

『レポーターに暴言吐いてる、これだから若者は』『妙な奴連れてて怖い』みたいなコメもあるけど、大体は『勇気あるな!』『あの蛇みたいなのが可愛い』『ウホッ、いい男』とかの好印象っぽいコメが大半だな」

「おい、最後」

「まあ例の騒動自体はうみちゃんが動いたのもあつて被害はほぼゼロだったし、結果オーライだな」

「おい、最後!」

聞き捨てならない言葉にキレるワタルをよそに、カタカタとキーボードを叩くタケシ。先ほどまでは疲れ気味に笑っていた表情がだんだんと曇る。

「……うみちゃん、大丈夫かねえ」

「……」

うみを心配するタケシの呟きに対策課の面々の雰囲気沈む。うみの前回の配信を監視していたためどれだけうみが傷ついているだろうかと気が気ではない。

「うみちゃんなら大丈夫ですよ」

「ワタル君?」

そんな中、ワタルだけがうみは問題ないと断言する。訝しむタケシ達にニヤリと笑うワタル。

「あの元気の塊みたいな子が、いつまでもしよげてなんかないでしょ。それに、彼女には大きな目標があるんだ。そう簡単にはつぶれないでしょうよ」

ワタルの言葉に、やる気を出す職員。

「そうだよな、あの子が頑張るんだ、もつと俺達も尽力しないと!」  
「そうだそうだ、あの子うちの子に似てるからなんだか助けてあげたくなるし」

「お前の娘つてあんなに美人だったか?」

「んだとコラ」

「・・・うん、頑張ろう」

各々がやる気を胸に仕事に取り掛かる。その様子を見ていたワタルも、拳を握りしめる。

「早く治さないと。お前らを鍛えてやらないといけないし」

「フウ！」

「ガブガブガブ！」

「・・・ところでワタルくん、さつきからずっと気になってたんだが、そいつ何？」

「こいつですか？」

タケシが指差した先で未だ菓子を食べまくる謎のポケモン。ワタルはそんなポケモンを見ながらうーんと唸る。

「いや、琵琶湖の岸辺の砂浜で犬神家状態だったのを保護したんですよ。ギャラドスと一緒に警察の方で預かってもらおうと思ったんですが、なんか懐かれたみたいで離れなくて」

「ほーん、サメ？みたいだね」

「ちよつと可愛い・・・かな？」

職員が集まり、謎のポケモンを観察する。周囲の視線を意に介さず食べ続けるポケモンだったが、菓子が無くなるとワタルへとトテトテ近づいていく。

「ん？どうし・・・あだだだだだ!？」

ワタルが近づいてきたポケモンを撫でようとする、その手にポケモンがかぶりつく。突然の惨状にタケシ達職員が慌てて引き剥がす。

「うわああ!?!ワタル大丈夫か!?!」

「ちよ、これどこが懐いてるの!?!」

「ガブガブガブ！」

「誰か！うみちゃんからもらった図鑑的なもの持ってきて！早く！こいつの対処法探せ！」

「は、はい！」

その後、用事から帰ってきたキョウはドツタンバツタン大騒ぎをしつつもどうにか大人しくなったポケモンと、ぐったりとした職員を見

てポカーンとするのだった。

「ここかな？」

北海道中央南部のとある山脈。農家ニキと呼ばれる男は登山家のような姿で山の奥深くへとやって来ていた。片手にはメモを持ち、先導するガーデイのポチが周囲を警戒している。

「悪いなコロ、今日中にもう少し進みたい」

「ガウ！」

相棒の頼もしい返事を聞きながら、更に山の奥、頂上へと向かう農家ニキ。

(にしてもなんで急に・・・)

思い出されるのはうみから依頼された内容。大漁の登山用具とメモを渡され、うみから説明を受ける。

『農家ニキには、「ある場所」に行ってもらいたいです。正確には、「ある場所」が既にそこにあるのかどうかを確認して貰いたいです。あるかどうかも怪しいので3日ほど搜索して無かったらもう諦めま  
す』

『ある場所？それに登山するような場所？』

『はい・・・あ、農家ニキは山登りとか大丈夫ですか？』

『まあ、それなりに登ったことはあるけど・・・』

『良かった・・・あ、山に単独で行くのは危険だと思うのももう1人、チャラ男ニキも予定が合えば連れて行ってあげてください。なんか物凄いやる気に満ち溢れてたんで。どうか、よろしくお願いします』  
(あるかどうか分からないもの・・・どうしてそんなものが必要なのかは分からないけど、既に2日経過してる。今日中に見つかってくれば良いんだけどね)

「・・・大丈夫？やっぱりもう休む？」

「ハア、ハア、ま、まだまだあ！」

いったん思考の海から現実へ戻り、後ろを登ってくるチャラ男ニキへと声をかける農家ニキ。チャラ男ニキは既に息も絶え絶えで、横を追走するコラツタが心配そうに見上げている。



「いや、いったん休もう。ただでさえ慣れない山登りだろうに、もう2日も登りっぱなしだ。君が感じている以上にもう限界近いだろう」  
「で、でもまだうみちゃんを探してるやつのとこまで行ってないっすから！俺はまだまだ行けます！」

ふん、と歯を食いしばりながらズンズンと進んでいくチャラ男ニキを見てやれやれと肩を竦める農家ニキ。そのまま2人は時折チャラ男ニキがグロッキーになりながらも山を登って行った。

「っ、着いたー！」

「うん、ここが山頂だろうね」

その数時間後、2人は目的の山の頂上にたどり着いていた。チャラ男ニキは疲労感から地面へと倒れ、その周りをコラツタがくるくる走り回る。

その横でリュックを下ろして野営の準備をしつつメモを見る農家ニキが、水の入ったボトルを差し出す。

「あー、水がうめえ！・・・で、うみちゃんが探してたもんってありました？」

「・・・いや、それらしいものは無いね」

メモと睨めっこしながらうんうん唸っている農家ニキの横から、メモをチラツと覗き見るチャラ男ニキ。

「・・・なんすかこれ、遺跡？の絵ですか？」

「っばいね。ただ、こんなものは道中何処にも見当たらなかった。頂上にもないし周りにそれっばいものも・・・」

「?どしたんすか？」

突然一方向を見て固まる農家ニキ。その視線の先を見たチャラ男ニキも自身の目を疑う。

「・・・ミユウ？」

草むらをかき分け現れたのは、全身薄ピンクのポケモン。長い尾と透き通るような青い目を持ち、フワフワと少し浮かんでいるそのポケモンは、2人を見ると『誰?』と言うように首を傾げる。

「・・・っ！ポケモン!?コロ！」

「コラツター！」

我に帰った2人は即座にパートナーを呼ぶ。山を登っていた2日間、2人とそのパートナーは数え切れないほどポケモンと遭遇していた。時には相手の方から逃げてくれたが、バトルに発展することもあり、またその相手との力量差、すなわちレベル差もほぼ無く常にギリギリの戦いだった。そんな過酷な経験を経た2人のポケモンは忠実に、そして素早く2人の前に立ち、謎のポケモンを威嚇するように唸る。

「グルルル・・・！」

「ヴァッ！」

「・・・ミュウ〜」

そんな2匹の様子に困ったかのように顔を顰める謎のポケモン。ふと、何かを感じ取ったかのように何処かを見る。

「?何を見て」

「先手必勝!『ひっかく』!」

そんな様子を見て好機と捉えたチャラ男ニキが、コラツタへと指示を出す。素早く距離をつめ爪を振り下ろすコラツタ。しかし、ポケモンはふわりと宙に浮き攻撃を回避してしまう。

「くそ、当たらねえか!」

「落ち着け、まだ襲ってくるかわからないだろう!」

「ミュウ!」

「あ、待て!」

「ちよっ!?・・・ああもう!」

悔しがるチャラ男ニキを諫める農家ニキ。するとポケモンは2人を無視して登ってきたのとは反対の道へと降りていく。一瞬追うべきか迷う農家ニキだったが、チャラ男ニキが追いかけて行ったのを見て腹をくくり追走する。

ポケモンはスウーツと空を飛びながら山を降りていく。木々が増え、追いかけるのが困難になる中、農家ニキは時折現れる野生の動物達を見て違和感を覚える。

「・・・ポケモンが多くなってきている?」

登る途中に出会ったポケモンは多くても一度に2匹が最高だった。

しかし、ちらりと見えるだけでも4、5匹の群れが見える。そこから、段々とポケモンのテリトリーに入り込んでいることに気づいた農家ニキは慌てて先行するチャラ男ニキへと叫ぶ。

「緑君！ポケモンが多くなってきたよ！このままだと囲まれた時にマズい、一旦離脱しよう！」

「そんな、ようやく何か手掛かりになるかもしれないポケモンを見つけたんすよ!?あと俺は緑じゃなくてグリーンです！もしくはチャラ男ニキ!!」

「いや今はそう言うこと言ってる場合じゃ・・・くそッ！」

チャラ男ニキことみど・・・グリーンは農家ニキに答えつつもポケモンから視線を外さない。そうして結局ひたすら追いかけていると、木々が途切れ、開けた場所へと出る。ポケモンはそのまま空へと登って行き、最後には目視できないほど上空へと消えて行った。

「はあ、はあ、くっそ、逃げられた！」

「ふう、だいぶ山奥まで来たな・・・ここは何処なんだ？」

息を整えつつ農家ニキとグリーンは周囲を見渡す。岩だらけで、木などは一切生えておらず、山を下りたにもかかわらずどうやら何処かのタイミングでまた登っていたようで、先ほどよりやや標高の低い山の頂上のようなだった。

「・・・！農家ニキ、これ！」

「なに？」

周囲を見渡していると、グリーンが何かを見つける。指差す先にあったのは、明らかに自然にはできないであろう形状の遺跡だった。

「これって、あの絵と同じ・・・！」

「・・・ああ。まさか本当にあるとはな」

そこにあっただのは、いくつかの折れた柱だけの残る遺跡があった。そこになにかしらの建造物があったことは辛うじてわかるが、原型はない。

遺跡に触れながら周囲を確認した農家ニキは、携帯を取り出すと遺跡の写真を撮影する。

「・・・よし、俺たちのやることは終わった。帰ろう」

「うーっす……にしても、あのピンクのポケモンはなんだったんすかねえ」

「分からない。けど、案外本物のUMAとかだったんじゃないか？」

「あはは、んなら俺らはポケモントレーナーじゃなくて珍獣ハンターっすか？なーんて……」

「誰がイ●トだつての全く……」

容器に喋りながら歩き出した2人だったが、だんだんと口数が減り、黙り込む。

「……ねえ、農家ニキ？」

「……なんだい？」

「道、覚えてました？」

「……いいや」

その後2人はコロによって匂いを辿って下山すると言う案を思いつくまで数時間喧嘩するのだった。

――  
リスナー、対策課、一般ポケモントレーナーがそれぞれに出来ることをやっていた頃。

「それでは、早速で悪いが話を聞かせてもらおうか？」

「わざわざ君のために時間を作ったんだ、有意義な時間にしてくれたまえっ。」

「……本当に君のような子どもが……？」

「……ええ、よろしくお願ひします」

(ひいひい！無理無理誰かタスケテエエ!?)

1人の国務大臣との対談という話だった筈の会談で、うみは何故か同席している政府の高官2人からの威圧に心の中で悲鳴を上げていた。

『……』

煮えたぎるマグマの中で、そのポケモンは目を覚まそうとしていた。

『・・・GURURU・・・』

薄く目を開き、真上の火口を見上げるポケモン。そこに多くの小さな生物の気配を感じ、その気配の多さに不快感を感じる。

『GURURURUAAA!!』

「oh、shit!」

「ruuun!」

ポケモンが叫ぶと同時に、火口から生物の気配が遠ざかる。ようやく静かになった、とポケモンは再度の眠りにつく。

しかし、覚醒の周期はそこから少しずつ短くなっているのだった。

『ハワイ キラウエア火山噴火 活火山化が懸念される』

ーアメリカ〇〇紙ー

## 第36話

「落ち着けー俺、大丈夫頑張れ頑張れできる絶対いける頑張れ気持ちの問題だつていける俺ならやれるおちけつ、じゃないおちつけ……」

「……本当に大丈夫か？うみちゃん」

キヨウは、車の運転をしつつ後部座席に座るうみを見て呆れたように言う。

目のハイライトを失い、若干居心地の悪そうなライを抱きブツブツと呪文を唱えているうみ。

前々から会いたいという話を受けていたキヨウと縁のある政治家との会合。それに向けて準備してきたうみであったが、すでに満身創痍であった。

「大丈夫だつて父さん、私がコーディネートしたんだからバツチシよ！ちゃんとお偉いさんと会うためのドレスコードも考えてるし！何より素体が最高だもん！」

「そこじゃないんだよバカ娘……」

うみのとなりに座っているアンズがグツと親指を立てるが、ため息をつくキヨウ。

政府の高官という立場の人間に会うということ、前回の警視総監との対談時に服を選んでくれたアンズに再度コーディネートを頼んだのだった。

「にしても、なんでうみちゃんはそんなに緊張してんの？」

「いやいや、情弱の俺ですら知ってるような大物政治家に会いに行くのに一般人メンタルの俺が緊張しないわけじゃないですか……」

そんなもんかなー、と言い自身の頭の後ろに腕を回しあくびするアンズ。気楽でいいよなあと少しむくれるうみに対して、運転席のキヨウが声をかける。

「まあそこまで怖い人じゃないから、落ち着いてしゃべれば問題ないさ。平常心で行けばいいよ」

「そうは言いますけどお……」

「ははは……そうだ、うみちゃん今日はなんだか見慣れないものを持ってきてるみたいだけど、一体なんだい？」

話を切り替えようと、うみが抱えているやや小さめのトランクケースをバツクミラー越しにチラ見するキョウ。そんなキョウの質問にはつとしながら、うみはいたずらっ子のようににやりと笑うと人差し指を立て「静かに」のポーズをする。

「これについてはまあ、着いてからののお楽しみということで。交渉の場に手土産は必須でしょうし」

そう言つてトランクケースを抱えなおすうみに、また何か企んでるな、と思いつつスルーする。

(うみちゃんはそんな問題を起こすような子じゃないしな……いや、本人の周りが勝手に起こすか)

そんなことを考えるキョウをよそに談笑するアンズとうみ。そのまま車に揺られること数十分、目的の料亭へと着した。

「おお、なんかこう、ドラマみたいな感じですね」

「ほんと、まんまサスペンスものみたいね」

車を降りてすぐに料亭を見上げほえーと変な声をあげるアンズとうみ。都内にあるにもかかわらず質素な和風の建築物であり、読みづらい古文風の文字の看板や良さがよく分からない掛け軸と生花の置かれた土間などの異質な空間にやや気が引けるうみ。

「ほら、アンズはぼけっとしてないで車を見といてくれ。うみちゃん はさっさと入る」

「えっ!? あたしは残るの!?!」

「今回呼ばれたのはうみちゃんがメインだし、付き人で選ばれたのは俺だ。お前は外で待ってなさい」

「えー! あたしもうみちゃんともっと一緒にいたい! 父さん、変わってよ」

ブーブー文句を言うアンズだったが、段々と纏うオーラが濃くなってくるキョウを見て、いそいそと車の運転席へと乗り込む。

「さて、行くのでしょうか」

「アツハイ」

そうして料亭の人に連れられ、2人は奥の一室の前へと通される。  
(・・・ここに、政治家の人がいる)

土壇場でまた緊張してきたうみに、肩に手を置きながらキョウが微笑みながらそつとささやく。

「大丈夫、君ならいける」

「キョウさん・・・はい！行きますす！」

気合を入れ直し、とうとう覚悟を決めたうみは勢い良く・・・は失礼になるためそつと襖を開けお辞儀する。

「・・・失礼します」

「ああ、よく来てくれたね」

優しげな男性の声を聞き、頭を上げたうみは、にっこりと笑う。キョウも続いて部屋へと入室するが、声の主の方を見てうみとともに固まるのだった。

(・・・なんで3人もいるんでしょうか???)

〈井口〉

殺気。料亭の中でも最高レベルの個室の中は、殺伐とした空気に覆われている。息苦しい事この上ないが、こうなった原因が自分である以上誰かが言うまでは耐えるしかない。

「・・・で、今日わざわざ呼び出した訳について、話してくださいるんですよね、先生？」

神経質そうに机をトントン指で叩き続けながら眼鏡をキラリと光らせそう言うのは、防衛省で大臣を務める大和(やまと)と言う男だ。かけている眼鏡でも緩和しきれないほど鋭い目をしており、年齢的にはこの中で一番若いがお構いなしに意見を言える度胸がある。そして、実は私の元教え子である。

「こちらも忙しかったんです。少しは有益な情報をくれるんですよね？」

言外に「そうでなければ許さん」と言っているようにも聞こえる。私の呼びかけに答えてくれたのは、あくまで情報目的であり元恩師だからと言うわけではないようだ。・・・少し、少しだけ悲しいな。



「まあまあ大和君。言いたいことはわかるけど、少しは落ち着いたらどうだね。ほら、井口先生だつて忙しい中私たちにいち早くと情報を持ってきてくれたのだし」

そう言つて大和大臣を宥めているのは、同じく元教え子で現在は野党の〇〇党で一党首を務める鈴木（すずき）君。恰幅の良い体格をしており、滲み出す雰囲気も柔らかいものである。大和大臣より1つだけ年上ということもあり、少し心に余裕があるようだ。

「鈴木先輩。そうは言つても、こちらは例の謎の生物への対応で手一杯なんですよ、本来ならこの時間もまだ処理する仕事や受理しないといけない案がですね・・・」

あ、鈴木くんの呼び方が先輩になつている。少しは学生時代の彼に戻つてくれたのかな？

そんな大和大臣・・・いや、大和くんへ鈴木くんは朗らかに笑いながら言う。

「そりゃあそうだろうさ。でも、先生が私たちを呼ぶなんて緊急の用件以外では無かつたじゃないか。きつと今回もそういう類だろうさ。ね、先生？」

「・・・ああ、君達にはわざわざ足労かけてしまったね」

鈴木くんのフォロワーが身に染みる。しかし、まったりと話しているだけではないけない。この後の話し合い、そしてそこにくるであろう例の「専門家」について2人に説明せねばならない。未だ私自身半信半疑ではあるが。

時は戻り、うみがやつてきたところに戻る。

どうにか現実へと戻り井口に促され席へ座るうみ。その横にキョウが座り、うみ・キョウ、机を挟んで大和・鈴木、いわゆるお誕生日席となる上座へ井口、という状態になる。

予想外に多かつた相手に混乱するうみだったが、それ以上に剣呑な空気を醸し出す大和と、戸惑いの表情を浮かべる鈴木。そして、何を考えているのかわからない無表情の井口という3人の大人の視線に晒されるうみは、すでに心中「帰りたい」一色だった。

「……えー、とりあえず、私は森本キヨウと申します。警視庁の者で、こちらのうみちゃんの上司的立ち位置にいます。本日はよろしくお願ひします」

「え、あ、じ、自分はどうみと言ひます。本日はよろしくお願ひします！あつ！？」

キヨウがいい加減何か喋らねば、と自己紹介をする。それに慌てて追従したうみが名乗り礼をするが、勢い余って頭を机にぶつける。

目を点にするキヨウや政治家たちに見られ、プルプルと顔を真っ赤にしながらおでこを抑えるうみには、か細い声ですいません、というしか出来なかつた。

〈大和〉

「本日はよろしくお願ひします！あつ！？」

(なんなんだこの少女は……?)

うみが自己紹介で頭を強打しているとき、それを見ていた大和大臣は心の中の動揺を必死に隠していた。井口恩師からの連絡を受け、「現状を打破するための情報が手に入る」と言う話につられやつてきた。

恩師の事は信賴しているし、先程は疑つてかかっていたが内心期待していたのだ。謎の生物、それも対処不能の新発見としか言いようのない存在が日本中で見つかり、それに対応する現場からあげられる理解不能の報告。

体当たりで装甲車が凹んだ、体が流動的な毒性の強いヘドロでできている、銃がほぼ効果を出さない。そういつた子ども空想のような生物の報告と共にやってくる「自衛隊の出勤を」と言う要請。

諸々の今請け負っている問題への解決策。それがわかるかもしれないと無理にでも時間を作つてやつてきた。

(しかし、来たのは専門家……ではなく少女？一体先生は何を考えている……!?)

しかし目の前にいるのは日本ではなかなか見ない銀髪の小学生にも見える少女だ。どう好意的に見ても専門の研究者には見えない。

先生から説明を受けた時にも思っていたが、なぜ少女。

「・・・先生。これは一体どういうことですか！」

机を叩き、立ち上がりながら井口先生に詰問する。睨み付ける形になってしまったが、先生は動じることなく静かに、諭すように言った。  
「・・・座りなさい、大和くん。今は客人の前だ。それに、説明はしたはずだよ？」

「・・・っ、大和という。若輩の身ながら防衛省で働いている者だ」  
受け流されてしまった。だが、礼節を欠くのは確かにいけない。手短かに挨拶すると、今度は鈴木先輩が笑いながら挨拶していた。

「自分は鈴木つていいいます。〇〇党の者です、よろしくね・・・えーと、うみちゃん？」

「は、はい！」

「あつははは、緊張してるかな？まあこんなおっさんたちに囲まれたらそりや怖いよな！」

「は、ははは・・・」

鈴木先輩は何を考えているんだか。少なくとも自分よりは落ち着いて相手していると言えるが、本題はそこじゃないだろう。

「・・・ふむ、手紙のやり取りは少ししたが、会うのは初めてだね。私は井口という。今は一介の政治家もどきだよ。よろしく」

「は、はい！本日はお時間をいただきありがとうございます！」

「・・・」

「・・・ありがとうございます」

（しかし、見れば見るほどただの少女にしか思えない。こんな子どもが一体どんな情報を・・・？）

すると、井口先生が何やら鞆から資料のような紙束を出してくる。

「私はすでにこれは拝見させてもらった。この2人の分はあるかな？」

「あ、はい。もう渡してお話してもよろしいので？」

「ああ、構わないとも。それに話は早いに限る。」

そう言っ先生はこちらにチラリと目配せをする。・・・確かに急いではいきましたが、そんな皮肉っぽく言わなくても。相変わらずこ

の人は少し意地悪だ。

「どうぞ」

「・・・どうも」

気づくと、目の前に資料が置かれていた。・・・いかなな、どうも先生や鈴木先輩に会うと気が緩む。置かれた資料に意識を向け・・・(待て、なんだこれは？資料？・・・辞書の間違いじゃないか!?)

置かれていたのは、六法全書もかくやと言わんばかりの分厚い紙束であった。横を見ると、鈴木先輩も口をぽかんと開けてズッシリと重みを感じる資料を見ている。

「これは一体なんの資料だ・・・」

思わず小さく呟いてしまう。というか、普段見る仕事の資料をまとめても負けるんじゃないかこの量は。

「では、説明に入らせてもらいます」

目の前で座り直し、自分も資料を持ってそう宣言する少女・・・うみちゃんだったか？の声にはっとし、資料の最初のページを見る。

・・・そこからは終始、頭が理解を拒むほどの膨大な情報と、異常なその内容に開いた口が塞がらなかった。

へうみ

「・・・以上が、ポケットモンスター。縮めて、ポケモンに関する基礎的な情報です」

そう言って締めくくった俺は、チラリと3人の政治家の様子を確認してみる。井口さんという政治家へ頼み事をするためにこうしてポケモン説明会(仮)をしたわけだが、ちゃんと資料をたくさん用意しておいて良かった。3人とも真剣な表情で資料を読み込んでいるが、ある程度資料を先に読んでいる井口さんがいち早く読み終わり、ため息をついている。

他の2人の人ももう直ぐ読み終わりそうだし、そろそろ質問攻めとか来そうだ。

「・・・ふむ」

「・・・ふう」

「・・・はあ」

(・・・いや、なんか言ってるよ!?)

3人とも読み終わったのに、一切喋ることなく虚空を見つめている。いやなんか居心地悪いからなんか言ってるほしいんだが!?

「・・・うみちゃん」

「!はい」

すると、ようやく井口さんが口を開く。俺だけでなく大臣のお二人も顔を向け、静かにその発言を聞こうとしていた。

「・・・書いてあることは読んだ。しかし、分からない。ポケモン、と言ったか。なんなのだこの生物は?いや、そもそもこれは生物なのかな?」

その質問に俺は少し心が痛くなりながらもどうにか答える。

「俺にもまだ詳しいことは断言できません」

「なっ!?ではどうしてここまで!」

大和大臣・・・だっけ?が驚きの声とともに抗議しようとする。でも、ここで止まるわけにはいかない。今は俺のターンだ。

「でも、少なくとも人と無条件で敵対するような存在でないことも断言できます。・・・出てくれ、ライ」

「ライツ」

「こいつは・・・」

話の中で徐にボールを取り出し、相棒であるライを出す。ライは出て直ぐに元気に鳴きながら俺の横にやってきて、嬉しそうにスリスリと腕に頬擦りしてくる。

3人の高官の人たちは、ライを見てその見たことのない姿に驚いているっぽい。

「この通り、この子は俺の相棒です。それは決して、この子が特別な懐っこいとかじゃない。他の現在確認されているどのポケモンも、基本的に慣れれば人と共に生きることができ存在です」

ライを撫でながら話を続ける。さつきから驚いてはいるが、3人も話を理解しようとする真剣だ。

(この人たちになら・・・)

言いたい事を言う。これまでは押し付けるだけだった。今度は、開示できることは全部開示して『識ってもらう』。

「そして同時に、ポケモンはその個体によつて差はありますが、簡単に人を殺せるような存在でもあります。例えばこのライは、電撃を操り、しつぽの一撃で岩すら砕けます」

「電撃・・・だど?」

「さらに言うなら、先日琵琶湖に出現したポケモン・・・ギャラドスなら、水流のビームも撃てますよ。・・・ポケモンによつてはそれ以上のことも」

俺の発言に少し腰が引けた様子の大和大臣と鈴木大臣。しかし、そこで井口さんがふむ、と一声上げる。

「なるほど、大体分かった」

・・・!?

〈井口〉

異常。

頭の中に浮かんだのはまずその一言であった。すでにもらっていたものと合わせて読んだ資料を思い出す。ポケットモンスター、ポケモン。今こうして目の前で見ても、少し現実味が無い話だ。

(しかし、だからこそ最近の騒動にも納得がいく)

始まりは、都内で起きた謎の火災事件だった。結局通報された半分以下しか火の手が無く、目撃者の話でも突然消えたと言う話ばかり。しかもその後ポツポツと至る所で発生し始めた怪事件、その原因こそがおそらくポケモンなのだろう。

「つまり君が言いたいのは、ポケモンというのは危険な面もあるが、しっかりと管理して育てれば良いパートナーとなる、ということだろう?」

「・・・はい」

目を点にしている少女。。。うみちゃんを見る。話初めは緊張が見られたが、もうすでにそれは無く、あるのはただ知ってほしいとい

う意志を感じる姿勢のみ。それだけでもそれなりに良い子であり、信じるに値する存在だとは思う。しかも内容は、今最も得るべき情報だ。そして、この騒動・・・いや、苦境を乗り越えられれば、きつと日本は・・・。

「先生、信じるのですか？この荒唐無稽な話を」

「ふむ、君は彼女の話が嘘だと？」

静かに、大和くんは逆に質問を返す。すると大和くんは、苦い顔でメガネをクイっと上げる。

「・・・嘘だとは断言しません。実際に自分の関係する事案を考えてもこの話に当てはまる部分はありません。ですが、それを全て信用するというのは早計かと」

「いや、早計どころでは無い。むしろ遅いと考えられる」

「！な、何故でしょう？現在のところその・・・ポケモンによる被害について、目立った死傷者は一般には確認しておりません。下手に手を出すことさえなければ、野生の獣同様、近づかなければ問題無いと・・・」

「それじゃあダメです」

「・・・なに？」

大和くんの発言に、うみちゃんが待ったをかける。訝しむような大和くんの視線も気にせず、うみちゃんはライというらしいポケモンを撫でながら続ける。

「人に好戦的な人、温厚な人がいるように、ポケモンにだって大人しいもの、暴れるものがあります。例えば先のポケモン騒動。三つの箇所です。同時に起きたにも関わらず、ほぼ被害無しで収められました。先程まで俺や対策課のキョウウさん達が頑張ってくれたからです。先程どんなポケモンもしついたり、慣れれば人と共存できると言いました。犬や猫を飼うのと同じです。ただ、言い換えればそうでなければ死の危険すらあると言うことです。例外を除き、ポケモンは体当たり一つでも人を殺す、最低でも大怪我を負わせることができます」

そこで一区切りつけ、何やら躊躇うように顔を歪ませるうみちゃん。しかし、意を決したように再度言葉を紡いでいく。

「はつきり言います。現行の自衛隊や警察ではポケモンが万が一暴れたとして、まず対処は不可能です。対処するには、同じポケモンを扱うしか手はないです」

「……！」

大和くんが息を呑んでいるのがわかる。実際自分も「そんなバカな」と言ってしまった。しかし与えられた情報と自力で得た情報、そしてこれまでの騒動の流れを統合して考えることで分かってしまう。

この少女の言うことが正しいと。

「では、君はどうすべきだと考える？」

ゆえに聞きたかった。この自分たちの考えの及ばない域にいる少女の考える打開策を。

うみちゃんは、ちらりと隣に座る警察官ローキヨウと言っていたローキヨウを見て、そっとトランクケースを机に置く。

「これから見せるものについて他言及び他者への提供をしないようお願いいたします」

そう言っ手渡されたのは、先ほど渡された資料と比べれば半分にも満たない紙束。

「これは何かね？」

恐る恐る受け取りつつ尋ねる。

「それは……とびっきりの化け物です」

「っ、疲れた……」

「おつかれ。もうこのまま家まで送ればいいかな？」

「あ、はい。今日はありがとうございます」

ひ、疲労感で喋っただけなのに体がうごかねえ……。

俺の頼みを聞いてもらうためのとっしておきを渡したあと、想像以上にスムーズに話は進んだ。結果だけを言えば、あの場にいた3人の政府関係者に協力体制を築くことに成功した。対してこちらが切った手札は情報のみ。それに、もつとも重要なものは省いて今必要最低限のものだけ渡したから、情報アドは以前こちらにある。



(まあ、俺の予想が正しければそろそろヤバイんだけどなあ。・・・それよりも驚いたのは、大和さんの態度の変化だよなあ)

最初から「誰だお前」みたいな感じだった大和さんだけど、最後会合を終えた後は見送りまでしてくれた。

『これからの日本の為にも、宜しく頼む』

そう言つて頭を下げる大和さんは、すごい意外だった。

どんなに言われようと俺は見た目完全に少女だ。そんな俺にすぐ対応して頭を下げられる人だとは最初の感じからは思わなかった。

「これから、な・・・もつと頑張らねえと」

そう呟きながら、俺の意識は段々と暗闇の中へと落ちていくのだった。

「どう思った?」

見送りを済ませ、振り返った自分に井口先生がニヤニヤしつつ聞いてくる。

「・・・言わなきゃなりません?」

「いやすまんね。大丈夫、見れば分かったから」

カラカラと笑う先生と、その横で豪快に笑う鈴木先輩。なんとなく拗ねるような感じになるが、ジト目で睨んでいると2人とも笑いを引っ込める。

「・・・にしても、なんて少女だよあの子」

鈴木先輩の思わずと言った感じのつぶやきに、心の中で同意する。

まさかあれほどまでに情報を集めているとは思わなかった。しかも彼女はまだ未成年、子どもだ。

「最後の最後で、とんでもない爆弾を落としていったがね」

「・・・ええ、全く」

先生の言葉に同調しつつ、懐から資料を取り出す。最初にこれを見て、話を聞いた際のことを思い出す。

『なんなんだこれは!?!こんな存在があり得るのか!?!』

『はい。その中の一部は既に確認済み、既にこの世界にいます』

『ちよ、ちよつと待ってくれ!こんな化けも・・・ポケモンが、これからも・・・!?!』

『ええ、出てくるでしょう』

『彼らはポケモンであり、なおかつその枠組みを超える程の規格外。分類名としては、「でんせつ」と呼ぶポケモン。それはその種類と特徴のリストです』

『でんせつ』ねえ。どいつもこいつも恐ろしいことしか書いてないんだが?」

そう言つて引きつった笑いを浮かべる鈴木先輩。おそらく自分も険しい顔になっているのだろう。そんな自分達に、先生は静かに告げる。

「・・・あの子はこれからもっとも重要な存在。この国の存続に関わってくることになるだろう。2人とも、分かっているね?」

その言葉に、先輩と2人で頷く。

「ええ、分かっています。あの子を、うみちゃんを助け、力を合わせる」  
「まー、それしか現状を打破できる方法もないですね」

そうして決意を新たに、自分達は夜空を見上げたため息をつくのだった。

『・・・もしもし?』

「俺だ。今大丈夫か?」

『ああ、問題ない。それで、手に入ったか?』

「ああ、面白いくらいたくさん。そっちは?」

『こちらも問題ない。護衛や監視もいなかったから簡単だった』

「そいつは重畳。こつちも早急に渡せるようにする。あとは頼むぞ」



## 第37話

「うみちゃん、だいぶかかったが、とうとう出来たぞ」

「おお、ありがとうおじいちゃん！」

政府関係者との対談を終えた次の日。若干目元に隈のできたガンテツおじいちゃんが、3つのボールを持ってくる。それぞれこれまでに確認されている自然発生したモンスターボールとは大分気色の違うボールだった。

「こっちは『ダークボール』・・・これは『ネットボール』で、これは『クイックボール』・・・！これどうやって作ったの？」

「それがのお、自分でもよく分からんというのが実情なんじゃ」「わからない？」

話を聞くと、なんでも俺がスピアーたちに頼んで搜索し、やっと見つけたボングリを渡して作成を依頼して数日後、おじいちゃんがボールを作ろうと触った瞬間、頭にふわっとやり方が浮かんできたそうだ。まるで最初から知っていたかのようなその記憶を頼りにボールを完成させると、何故かそれからぱったりと記憶が消えて思い出せなくなってしまうのだと言う。

「なんでじやろうかのお？」

「うーん・・・俺にもちよつとわからないかなあ。まあ、出来ないことはない、って言うのが分かっただけでも良かったよ。本当にありがとうねおじいちゃん」

おじいちゃんは二カつと笑い、頭を撫でてくれる。

・・・なんだかおじいちゃんの撫で方って安心するな。

「ところで、そっちは新しいお友達かい？」

「あつ、うん。俺の大事なポケモンなんだ！」

ふとおじいちゃんの視線が俺の後ろに向く。そこにいるのは、赤い穴だらけの体に黄色い足と首がニョキツと出てきたような妙なポケモン。こいつこそ、俺のパートナーの中で最もたちの悪・・・テクニシヤンなポケモンだ。

「つぼっちって言うんだ。ほら、挨拶してみな」

「……」

「……寝とらんか？」

「え?!いつの間にも!」

気づくと、ポケモン名ツボツボことつぼつちはスヤアと心地良さそうに寝息を立てていた。お、おかしいな?!さつきは嬉しそうに俺とじゃれてたのにな!」

「まあええわ、挨拶はまた今度でいいじゃろう。それよりも、何やらまた東京に呼ばれとるんじゃないやなかつたか？」

「あ!そうだった、もう来ちゃう!ごめんねおじいちゃん、またあとで!」

「おうおう、気をつけてな!」

「すいません、うみというのですが……」

「ん?ああ、対策課の……どうぞ、通つていいですよ」

「ありがとうございます」

受付にいた婦警さんに礼を言い対策課へと向かう。何やら不思議そうな視線を受けるが、中にはあああの子か、というような顔の警官もいる。

(まさか警視庁内を歩くことになるなんてなあ)

そんなことを考えていると、対策課の部屋の前に到着する。

「すいませーん、うみですけどー」

そう言つてノックをしてガチャリとドアを開ける。中には前と同じように対策課の人たちがデスクワークをしており、応接用の曇りガラスの仕切りが置いてある場所からニユツとタケシさんが顔を出す。

「ああ、うみちゃんもう来たのか。入つて入つて」

「お疲れ様ですタケシさん。それで、今日はどう言つたご用件で？」

手招きするタケシさんに呼ばれ、応接室でソファに座る。机を挟んで対面に座るタケシは、困つたような顔で親指を背後に向ける。

「?……わあ!」

タケシさんの横を通り抜ける。するとそこでは、サメのようなポケモンとワタルさんが戯れていた。

「すごい、フカマルですね！」

「なるほど、フカマルってのか。今日きてもらったのは他でもない、こいつワタルくんのポケモンになってるんだが、やんちゃすぎていうこと聞かないんだよ。うみちゃんならなんとかできねえかなって」

タケシさんの言葉を聞きながらも、目はフカマルから離れない。ポケモンのタイプとしてはみずタイプとかの方が好きだが、やはり元男、カッコいいポケモンにはコーフンするもんだ。

「せいかくがやんちゃなんですか・・・なるほど、多分発散したい・・・オブラートに包まずいうなら暴れたいんだと思います」

ワタルさんの頭に噛み付いているフカマルと、それに慌てながら痛い痛い走り回るワタルさん。まあ、フカマルが本気で噛んでいたら速攻あの世行きだろうし、甘噛みだ。・・・多分。

「うーん、じゃあ一階の特訓場に行こうか」

「特訓場？」

「ああ、ホントはそこに武道系の鍛錬ができる畳張りの道場もどきがあっただけけど、対策課ができてしばらくしてから所長がポケモンをとっくんするため頑丈で開けた空間にしてくれてるんだ」

なんと、俺の家でいうところの庭みたいのに、ポケモンを戦わせられる場所ができたのか。それなら存分に遊ばせられるだろう。・・・あ、そうだ。

「なら、俺とワタルさんでポケモンバトルしましょうよ！ちょうど初対面の子を連れてきてますし！」

「ん？」

「お？」

「ガブツ！」

「・・・何があった」

うみが警視庁へとやってきている頃。キョウは突然連絡を受け、マサキの寝ぐらへとやってきていた。そこには、荒れに荒れた部屋と、腕から血を流し憔悴した様子のマサキと、見たことのないポケモンがいた。マサキは腕に包帯を巻いているが、出血が酷いのか血が滲んで

いる。ポケモンの方は心配そうにマサキに寄り添い、キョウを警戒していた。

「・・・おっさんか。ま、ざまあないわ、まさかあんなことしてくる思うとらんかったからなあ」

「・・・いつからだ!」

「・・・昨日の夜や。おっさんはうみちゃんとこいつとつたやろ、せやから連絡は控えとつたんや」

「アホ!」

部屋に入つて一瞬思考が飛んだキョウだったが、すぐに服を脱ぎ、マサキの腕をさらにきつく縛る。苦悶の呻き声を上げるマサキ。それを見てもう喋るな、と言うキョウだが、マサキは悔しげに呻く。

「電気を落とされて、暗闇やったからようわからんかったけども、多分相手は二人。暗闇に乗じて、窓割つて入つてきよつたんや」

「お前を狙つたのか?なんのために・・・」

「いや、うみちゃんが作ったポケモンの情報紙を持つてかれた」

「!」

マサキのその言葉に、驚愕と疑惑、そして戸惑いの感情がキョウの中に渦巻いた。

「・・・何故そいつらはその存在を知つていた・・・!?うみちゃんはまだそれを公にはしていないんだぞ!」

キョウですらその存在を初めて知つたそれを、的確に狙つた。様々な考えが頭によぎる中、ふとある可能性を思いつく。

目を見開くキョウにマサキは気づいたか、と頷く。

「そうや。多分ワイらかうみちゃんのどっちか、最悪両方ともが、」  
「何かからの監視を受けている」

最後の一言が重なり、一瞬の静寂が訪れる。

「・・・まあ、ワイも殺されそうになつたんやけど、こいつが来てくれたおかげでーになつたわ」

「そうだ、こいつは・・・?おそらくポケモンだろうが、見たことがない」

「f:jうf:j s f n x:j d:j f?f:j d:j f k s n g:j しえh x:j

！」

意味不明な鳴き声で鳴くそのポケモンを見て訝しむキョウ。薄い赤と水色の配色、角ばったそのフォルムは、まるで昔のゲームのキャラのようだった。

「連中が襲ってきたときに、パソコンから現れたんや。なんかよー分からんがワイに懐いてくれとるし、こうして夜が明けるまで一緒にいてくれるし、気性は荒くないみたいや」

「とにかく、お前は病院へ行け。こいつに関しては、今はお前が持っているといい。ほら、モンスターボール」

マサキにボールを渡し、119へと連絡を入れる。しばらくして救急車がやってきて、マサキは病院へと搬送されることとなった。

「おっさん。うみちゃんを、頼んだで」

「・・・ああ」

マサキの突き出した拳に自分の拳をそつと合わせたキョウ。救急車が去っていくのを見送り、自分の車へと戻りアクセルをふかす。

「・・・俺だ！大至急警視庁へうみちゃんならびにポケモン保持者、トレーナーたちを集めろ！うみちゃんは今どこにいる!？」

-----

『こちら黒星。そちらはどうなっている』

『こちら青星。ダメだ、持っている火器では突破できない！ぐあつ!?!』

『こちら赤星。総員撤退準備に入れ。目標Aは諦める。痕跡を残すなよー!』

『黒星、了』

『青星、了!』

「問題はない。既に十分な情報は得た・・・こちらも祖国へ帰投する」  
「了」

-----

「うみちゃん、本当にいいのか?」

「はい!」

警視庁、所長により作られたポケモン特訓場へとやってきたうみ達。ウツキウキのうみと、不安げなワタル、それを横で眺めているタ



ケシ。野郎二人組には何故そこまでテンションアゲアゲなのか分からないが、まあ美少女の笑顔が見れるんだから役得、と思うことにした。

「ルールは説明した通り、一体ずつ、三体までを用いるシングル戦。交換は任意で行なつてOK。戦闘不能は本来ジャッジが行いますけど、今回は俺が判断します。構いませんか？」

「問題ない。というか、うみちゃん以外にその資格持てる奴がないぞ」

「間違いねえな。俺だってまだ自分のポケモンを把握するので精一杯だし」

二人の言葉に一つ頷き、ボールを取り出すうみ。対するワタルも、ボールを手に取・・・ろうとしたところでフカマルが勝手に前に出る。

「あ、おい！戦いたいのわかるけど、今は戻れっ！」

「ガブガブッ！」

「・・・あーもう！いけ、フカマル！」

「ガブウツ！」

譲る気がないと分かり、やけくそで初手をフカマルとしたワタル。そんなワタルを見ながらニヤリと悪い笑みを浮かべたうみは、青いボールを取り出す。今日はライとつぼつちの他には家で保護しているポケモンの中からワタルさん達の相手にちようど良いポケモンをチョイスして持ってきたから、ミロとデオキシスは留守番中である。しかし、

「・・・建前でフカマルの為って言ったけど、ひよつとしたらフカマルは不完全燃焼で終わるかもな」

そう呟くとともに、思いつきりボールを放る。

「いけーつぼつちー！」

「・・・クオ？」

ボールから光とともに現れたつぼつちは、寝ぼけ眼で周囲を見て、首を傾げている。

「確かに見たことないポケモンだ・・・でも、強そうには見えないけどなあ」

「・・・油断はするなよフカマル。相手はあのうみちゃんだ」  
「ガブガブツ」

「では、始めましょう！ポケモンバトル・・・スタート！」  
俺の宣言で、久しぶりの対トレーナー戦バトルが始まった。

「・・・ダメだ、どうしたらいいんだ！」

一方その頃、うみと会いポケモンという存在を知った政治家、大和大臣。彼は今後の日本の為にもポケモンとは共存しないと知り、次期国会でその事について言及するつもりであった。しかし、

「どうあがいても頭がおかしくなったと思われかねんぞ・・・」

そう言っ頭を抱えてしまう。現在彼が作成しているのは、ポケモンに関する対処の予算を得るために必要な答弁の草案だった。普段なら一部だけでも部下に任せるところだが、内容が内容のため自身で作るしかなかった。しかし、ポケモンを知らない他の政治家に対し何を言ったところで響かない。

「全員が一度でいいからポケモンを見ていれば話は違うんだろ  
うが・・・待てよ？」

うんうんと唸っていた大和大臣だが、ある策を思いつく。しかし、彼は苦虫を噛んだような顔になる。

「・・・ダメだ、この手は本当に最後の奥の手だぞ。考えろ、もっと別の方法があるはずだ・・・」

頭に浮かんだその案を振り払い、再度思考の海へと落ちそうになったときだった。

「・・・私だ」

『大和さん、お電話です。森本キョウと名乗っていらっしやいます』  
「！繋げ」

鳴り響いた電話にワンコールで受話器を取る。相手はどうやらキョウという、うみという専門家の少女といた男だ、と思いつく。大和大臣は何があったのかと電話を繋いだ。

「もしもし」

『もしもし！森本です！緊急の用件でお電話いたしました！』

「何かあったのですか？」

『うちで預かっていたポケモン保持者が、何者かから襲撃を受けました！』

「なんだと!？」

思っても見なかった用件に思わず立ち上がる大和大臣。しかし直ぐに心を落ち着かせ、冷静に努める。

「それで、その保持者は無事なのですか!？」

『幸い、ポケモンが襲撃者を撃退したようです。しかし、負傷しておりますので病院に』

「そうか・・・」

ひとまず無事であるということがわかりホッとする大和大臣。

どんな流れになるにせよ、国内のポケモンを既に持つ人材は貴重である。そのためその報告に安堵する大和大臣だったが、気を引き締めざるを得ない言葉が続く。

『ですが、襲撃者はどうやらうみちゃんが作成したポケモンの資料を盗んで行ったようです』

「なんだと・・・?」

その言葉に、眉を潜める大和大臣。数瞬の間思考し、指示を出す。「とにかく今は、ポケモン保持者の保護を行うべきだ。中でも、うみちゃんの身柄は最優先しろ」

『了解です。既にこちらの人員を動かし、保持者の保護を開始しました』

「話が早くて助かる。それと、うみちゃんを含めた全保持者を集めたら再度連絡をくれ。私もそこに向かう」

『大臣がですか!？』

「今はポケモンに関する事で少しの憂慮も残せない。頼む」  
『了解!』

通話が終わり、受話器を下ろした大和大臣はため息をつき椅子へと倒れ込む。

「・・・どうなっているんだ。何が始まるうとしているんだ」

天井を見上げ、大和大臣は呆然とそう言ったのだった。

「フカマル! 『たいあたり!』!」

「ガブガブツ!・・・ガツ!」

『「からをやぶる」』

「くそ、あれをさせたらまずい・・・!フカマル、『すなじごく!』!」

「お、やりますね。じゃあつぼっち、『ねむる』!」

「なあ!?またか!」

「・・・ZZZ」

「くそお!」

そこには、異様な光景が広がっていた。周囲には重力を無視したかのように浮遊する岩。それらは決して攻撃とは言えない。しかしそのせいでワタルは視界を遮られ、さらにはその岩の持つ「効果」に苦しめられていた。

そんな中、これまでのやり取りから想像もつかないほどワタルの指を忠実に守っているフカマルが必死に突撃を繰り返す。

「ガブツ」

「・・・ZZZ」

「な、なんで・・・!」

うみとワタルのポケモンバトル。ワタルは感じたことのない恐怖と、一向に倒れないうみのポケモンへの畏怖を感じていた。

フカマルは既にボロボロ、手もちのハクリューは既にひんし判定を受けており、琵琶湖の件で預かっていたギャラドスに至っては、「出すと負けが決まる」状態まで追い込まれており実質戦闘不能。

観戦していたタケシは何が起きているのか全く理解が及ばず、その異様な光景に冷や汗を流していた。

「これは・・・一体!」

「なんなんだよ、そのポケモンは!」

驚きの声を上げる二人に対し、うみは悪い顔でニシシと笑った。

「さあ・・・何でしょう?」

そこには、どこか似合っているようにも見える岩のようなヘルメットを被り、

畏怖堂々とした佇まいでどつしりと構え、  
何者をも寄せ付けないと言わんばかりの、  
巖のような、

鉄壁を体現したかのような、  
難攻不落の要塞と化した

．．．安らかな寝顔のつぼつちがいた。

「．．．ZZZ」

．．．つぼつちがいた！

## 第38話

「マサキさん!」

バーン、と病室の扉を開ける。走ってきたため息があがるが、それよりもマサキさんだ。

「おお、うみちゃんかいな。久しぶりやな」

「お怪我は!?大丈夫なんですか!」

「大丈夫や、幸いにも臓器は傷ついてなかったみたいやし」

ベッドの上でヘラヘラと笑いながら言うマサキに、安堵と共にため息が溢れる。警察署でのバトルの後、キョウさんからの連絡でマサキさんが襲撃されたと聞いたときは肝を冷やした。

「・・・にしても、なんでマサキくんを狙ったんだろうな?言っちゃ悪いが彼はワタルくんと同じで一般人だし」

ついてきていたタケシさんが指を顎に当てそう呟く。隣でバトルの後からずっとどんよりとした空気を背負っていたワタルさんも道中で少しは気を持ち直したのか復活しみんなで考える。

「そのことなんやがな?ワイがうみちゃんから貰っていたポケモンの情報が載っている冊子を強奪されたんや」

「!?!」

「そんな!大変じゃないですか!」

なんてこった、あれ作るの結構大変だったのに!コンビニで印刷するとき紙使いすぎて店員さんから物凄い睨まれながらも頑張って作った俺の努力の結晶が・・・!

「・・・妙だな」

「ええ、おかしいです」

「え?」

そんなことを考えていると、ワタルさんとタケシさんが表情を険しくする。

「うみちゃんのその冊子、うちでも嚴重に保管はしてるけどまだ何処にも漏れるような情報じゃない。というか、存在そのものを知る人が限られてる筈だ」

「ですよね。俺やチャラ男、農家ニキだつて安全の関係でさつきまで知らされなかつたくらいなのに」

「えっと、どういう事ですか?」

よく話がわからず二人に聞く。すると二人とも、ぼつが悪そうな顔で互いの視線を合わせていた。・・・まるで「お前言えよ」と互いに牽制しあっているようだ。

「監視されていた、つて事だようみちゃん」

「キョウさん・・・?え、監視つて?」

するとそこへキョウさんが扉を開けてやってくる。監視?誰を?

「つまり、その情報が出てくるずっと前から、俺たち関係者を・・・いや、はつきり言おう。うみちゃん、君がずっと何者かから監視されていたつてことさ」

「・・・え?」

監視、俺を・・・つまり、いつからかは知らないけどずっと見られながら生活していたと・・・?それって俺の家も・・・っ?!?!

「っ!おい、どこ行くんだうみちゃん!?!」

「おじいちゃん!監視されていたつて事なら、おじいちゃんも襲われてるかも!行かないと!」

「落ち着け!大丈夫、ガンテツさんに関しては先程無事であることは確認したから!今は警察署まで同行してもらつて!いったん落ち着くんだ!」

「っ・・・すみません」

キョウに抑えられ一度冷静になるうみ。しかしそれでも不安げな表情は変わらない。うみの様子を心配げに見ていた一同だったが、ふとマサキがベッドの横に置いてある鞆へと手を伸ばす。

「そうや、うみちゃん。こいつのこと分らんか?」

「f f o f k s b g i ← f んうい g h q k f」

「うわっ!?!」

マサキが取り出したのはモンスターボール。軽く宙へと放ると中から光が漏れ、ポケモンを形作っていく。出てきたポケモンが言語化不可能な妙な鳴き声を上げた。

「なんだこいつ?」

「ゲームキャラみたいな奴だな」

ポケモンを見たタケシとワタルは首を傾げる。蛍光色のピンクっぽい赤と水色の体色、昔のゲームのキャラの様に角ばっているボディ。そんな中うみはというと、目を輝かせながらポケモンを撫で回していた。

「うわあ、ポリゴンじゃないですか! 割と珍しいポケモンですよこれ! どこで見つけたんですか!?!」

「パソコンで作ったAIが突然変化したっぽいんや。ワイが作ったプログラムがパソコンからごっそり消えとったで」

「なるほど、マサキさんが作っていたプログラムを基に体を構成して出現した、ですか・・・興味深いなあ」

マサキと話しながらポリゴンを撫で回すうみ。ポリゴンは気持ち良いのかやめて欲しいのか分からないが、感情の見えない目でただじっとうみを見上げ撫でまわされている。

「そいつは強いのかい?」

「うーん、弱いとは言いませんが・・・ある持ち物を持たせて使ったり、進化させたほうが強いですからね」

「ほお、進化するタイプなんかこいつ。残念やけど資料を盗られとったけんどうなるのか調べられへんかったわ」

そんなこんなでポリゴンを観察しながら話し合いを続ける。

「とにかく今は、ポケモンを手元に持っている人物を集めて保護する必要がある。今回狙われたのがマサキだったのは恐らく、ポケモンを持つていないこととポケモンについて知っていること、この二つが要因だろう。相手は攻撃の意思も持っていた、恐らく今後も手段は選ばない」

「よーするにうみちゃんのリスナー全員が狙われる可能性を持つとるっちゆうこっちゃな」

「そんなの全員保護とか無理ですよ。ただでさえどれだけの人がポケモンを持っているのか分からないのに。配信を見ていない人でも気づかずペットがポケモン化、なんてこともあるでしょうし・・・」



「それだけじゃない、今後はポケモンの情報を配信で流すのも考えないとな。このままだと被害が増加するかもしれないし・・・」

ああでもない、こうでもない議論は止まない。しかしそんな中、うみがきよとんとした顔で発現する。

「・・・? いや、情報はこれからも配信しますよ? というか、言える限り全てを話すつもりです」

「なっ・・・!?!」

その言葉に男性陣が驚愕する。キョウは目を見開き、タケシは口をアングリと開け、ワタルは思わず声を上げる。ただ一人、マサキだけは何かを考え込むように額に手を当てる。

「なんでだうみちゃん?! 情報は貴重じゃ・・・それに、君は狙われているんだぞ!?!」

「ええ。だからこそ、ばらまいておく必要があるんです」

その言葉に男性陣の頭に? がとぶ。そんな中、マサキがハツと顔を上げ手をポンと打つ。

「そうか! ポケモンの情報を制限するんやなくて、大勢に周知してもらうんやな?!」

「どういうことだマサキ。ポケモンの情報をそう簡単に謎の相手に渡してしまうのは・・・」

「いやおっさん、逆や。『話しかんと大変なことになるんや』」

「・・・どういうことだ?」

キョウがマサキへと質問するが、いまいち要領を得てない。チラリとマサキがうみへと目配せをすると、ゆっくりとうみが語り出す。

「ポケモンの情報を制限すると、他国にポケモンがどんなものか理解してもらえないんです。日本なら俺や俺の配信を見てくれた人に知識として渡すことはできるでしょう。最悪マスコミでもなんでも使えるものを使えばいい。でも・・・」

そこで一旦区切り、うみは持ってきたリユックを下ろし中から世界地図を取り出す。

「もしポケモン発生が日本だけの問題じゃないとしたら? そして今まさに、こうしている間も増え続けていたとしたら?」

「一！」

キョウ達が息を呑む。うみは黙って取り出した地図を広げ、一つ一つの国を指差していく。

「俺が軽く調べただけですけど、アメリカ、イギリス、ブラジルに南アフリカ。ニユースになっただけでもこれだけの地域でポケモンと思われる存在が発見されています」

「もうそんなに・・・!?ほぼ全世界じゃないか!?!」

驚愕する男性陣に、うみは真剣な表情で頷く。

「そうです。それに、これもまだ調べてる途中ですけど、多分俺と同じくらいポケモンを知り得ている存在は確認できませんでした。いるのなら対処する為に動くはずですよ」

「・・・!そうか、他国にうみちゃんはいない!ポケモンへの対処が後手後手になっただけ最悪崩壊するのかわ!」

合点がいった、と叫ぶタケシ。遅れて理解したワタルやキョウも息をのむ。ポケモンが大量発生している、そして凶暴なポケモンが街や人を攻撃し始める。にも関わらず対処ができない状況・・・。

「それだけじゃないだろうな。軍事力の高い国、特に米国とかだな。あのあたりの国なら平気でポケモンへ武器を向けるだろう」

「ただの小さな子犬ですら火を吹くような規格外なんだぞ?最初の何匹かは駆除できるだろう、だがその後大量に発生したとしたら、多分携行火器程度じゃどうしようもない。それこそ核を使うなんてことになりかねん。そして使えばその地域は何十年も生物が住めない環境になる。核を使うなんてのは自国にはできず、行われるとしたらそれは他国。それが原因で戦争が始まり、ポケモンと戦争のダブルパンチでジ・エンド、世界的な大混乱ってことか・・・」

笑えないな、と眩き身震いするワタル。戦争は流石に大袈裟すぎた、と思っていたほどだった。ハクリューやフカマル、ギャラドスと言った強力なポケモンを持つワタルにはわかる。相手をしていても、一歩間違えれば簡単にこちらが殺されかねないのだ。ポケモンの機嫌を少し損ねた。それだけでも人は殺されてしまうのだと感じることは多々ある。そんな存在のことを全く知らない状況。それは何よ

りも恐ろしいことである。人は、「知らないもの」を極度に恐れる。そして恐れは身を竦ませ、凶行に走らせ、そして取り返しのつかない先へと進む。

(・・・まあそれを踏まえて考えても、こいつらといることは絶対やめないんだがな)

「さすがに出せない情報もあるし吟味はしますが、概ね基礎的なところは配信でがつつり流す予定ですよ」

「まあ情報については分かった。確かに、ことは日本だけで終わっていい話じゃないしな。その辺をまた大和大臣や井口さんにも伝えておこう」

「お願いします」

そんなこんなで話がひと段落し、マサキの体調を慮り病室を出るところとなった。

「ではマサキさん、お大事に！ポリゴンとしっかり触れ合ってあげてくださいー！」

「あいよ。まあ危険じゃない言うんやったら少しは安心や。ほな、またなー」

ベッドの上でヒラヒラと手を振るマサキと、その上でこちらをじーっと見つめているポリゴンを見ながら、病室を後にしたのだった。

「さてと、準備しよう！」

家へと戻り、久しぶりに本格的な自由な時間を得たうみは、早速配信を行うことにした。配信する旨を早めにチャンネルから発信し、準備を始める。

「おっと、忘れるところだった」

そう言つて準備の片手間にリュックからボールを取り出す。

「出てこい、みんなー！」

ボールを放ると、ライ、ミロ、つぼっち、デオキシスが出てくる。4匹はそこが配信部屋だとわかると、？と首を傾げる。

「今日はみんなこの部屋で好きに過ごしていいよ。俺は配信するか

「あまり構ってやれないかもしれないけどな」

「そう言う作業を続ける。少しして後ろでポケモン達が進んでいる気配を感じつつ作業を続けていると、」

「うわっ・・・ライ?」

「ライ!」

「ライが俺の膝の上へと飛び乗ってきた。驚きながらも覗き込むと、ライは嬉しそうに尻尾を振りながら鳴いてくる。・・・まるまって、動く気はないらしい。」

「フウ!」

「うわ!お前もかよミロ」

「・・・」

「はは、ありがとなデオキシス」

「後ろからは椅子越しにミロが緩く巻きついてきて、動けない俺の分までデオキシスが作業を手伝ってくれる。つぼっちはと後ろを見れば、部屋の隅ですやすやと寝ていた。」

「・・・ああもう、分かったよ。皆で配信しよう」

「どーも皆さんお久しぶりです、うみでーす」

「ライラーイ!」

「フウ」

「・・・」

『待ってた』『舞ってた』『キター!ってか出たー!』『ポケモンだらけやんけ!』『ム〇ゴロウさん・・・?』『ミロちゃん俺だー!付き合ってくれー!』『すげーな、もふもふじゃねーか!』

「配信開始とともに、ポケモン達と一緒に挨拶する。・・・今日は初見の人はまだ少ないな。」

「いやー、色々とゴタついておりまして、ようやく配信の時間が取れました。ム〇ゴロウさんみたいになるのはもっとポケモンが集まってからでしょうね。あ、ミロが欲しいというなら俺とタイムマンですね。屋上へ」

『辛辣ウツ！』『ほんと、前回からだいぶ時間経ったよな』『まー色々あったじゃん？』『むしろうみちゃんがまた配信してくれる気になったのがすごいと思うよ』『アンチのクソ共みてるかー？』

「どうやらリスナーの人達も俺を待ってくれてたようだ。．．．最初期から見てくれた人も何人かいる。本当に、感謝しかない。」

「今日は見ての通りポケモン達と一緒に配信していきますね。それと今回は相談室というより俺の方からいろんなことをお話したいと思います」

『おk』『相談室じゃなかったかー』『あれ、後ろになんか居ない？』『ほんとだ、赤い．．．岩？壺？』

「あ、そうだった。皆さんに新しい仲間を紹介しますね。ポケモン名ツボツボ、愛称はつぼつちです！」

「そう言つて寝ているつぼつちを引きずつてくる。流石にこいつ重すぎて今の俺の少女体型では持ち上げることすら難しいのだ。」

『重そう（小並感）』『あ、首でてきた』『なんかまたえらい不思議な生物だな．．．』『少し可愛．．．いいかな？』

「そうでしょうそうですね、この子は可愛いでしょう！この眠そうなダウナー気味な顔がまたキュートでしょう！」

『うーん、審議中』『にしてもこれまで見てきたうみちゃんのポケモンと比べるとなんだか弱そうだな』『弱そう（小並感）』

「何を言いますか、この子は今日訳あって釣り師ニキとバトルした際にニキのポケモンを1匹で全滅させた猛者ですよ！」

『マ!』『釣り師ニキ負けたんか』『流石うみちゃんだぜ！』『あんなのに負けるとか、ハクリューちゃんがかわいそう』『釣り師ニキの株大暴落』『お前ら好き勝手言いやがるなおいこら』『あ、釣り師ニキだ』『ほつとけほつとけー』『所詮釣り師ニキは、ポケモンバトルの敗北者じゃけえ！』『敗北者．．．？』『取り消すなよ、今の言葉あ！』『お前らぶっ飛ばすぞ!』

「おや、釣り師ニキ。どーもこんばんは！ハクリュー達はもう大丈夫ですか？」

『こんばん。まあ、もう傷は癒えたよ。ただ、負けた悔しきで結構不機

嫌なんだが』『そこはほら、釣り師ニキのフォロー力を見せる時だよ！』

そうして、時折釣り師ニキを弄りつつポケモンの知識を少しずつではあるが視聴者へと発信していった。

そして2時間ほど経過した頃。

「……っ！」

『まだんなこと言ってたのかよ。さっさとその辺な生き物殺せよ』『なんで化け物集めてんの？テロでもする気か？』『んなことよりこれ警察に通報すべきだろ。危険生物を飼ってるんだぞこのガキ』

『なんだ？』『これは、アンチか？』『おい警察ニキ、突破されてんじゃん！』『まずいですよ！』『すまないうみちゃん、物量で押し込まれた。直ぐにBANする』

「……いえ、BANはしなくていいです」  
『!?!』

どうやら警察ニキ……タケシさんが水面下でアンチを配信のコメント欄から排除していたようだが、多勢に無勢で突破されたようだ。申し訳なさそうにコメントしているが、2時間も保たせていただけでもすごいと思う。

『はよ通報』『運営はなんでこんな配信者を野放しにしてんだ？』『さっさとやめろクソガキ』

「……アンチの方。いや、視聴者の方々。聞いてください」

『?』『?』『なんだなんだ？』『うるせえよ』『黙って配信やめろ』『そいつら駆除しろよ』『アンチ黙ってて！うみちゃんの声聞こえない！』  
アンチコメントの嵐に少し息が詰まる感覚を覚えた。しかし心を落ち着かせようと、膝の上で心配げに見上げてくるライを撫でて精神を安定させながら話し始める。

(もう、押し付けるだけじゃない。まずは、知ってもらうんだ！)  
「ポケモンは、人間の敵なんかじゃないです。俺の話聞いて下さい……っ！」

「……こうなることは、分かっていたんだろう？うみちゃん」

対策課。自身にあてがわれたデスクの上に広げられた複数のパソコンのディスプレイを見ながら、言いようのない苛立ちを覚えていた。

『ポケモンは、確かに危険な側面もあります。ですが・・・』

『ほらやっぱ危険なんじゃねえか』『じゃあ何でそんなに危険なやつと一緒にいないといけないの?』

『・・・っ、ポケモンは、犬や猫、ペットのように、家族の一員として共に成長し支え合っていていける存在なんです!例えばこの子とか・・・』  
『火吹いたり、水流を吐くような化け物と一緒に暮らすとか頭おかしいんじゃないか?』『この配信者の家特定してあの化け物駆除しに行こうぜ』『通報した』『させるかよ!うみちゃんの話聞けよ』『うみちゃんはいいぞジョージ』『誰がジョージだよ』『お前ら全員気でも狂ってるのか?得体の知れない生き物を飼ってる上にそいつらは危険なんだぞ?駆除以外にあるかよ』『だからまず話を聞けよ!うみちゃんがそこんところさつきから話してるだろうが!というかウイキくらい見てからこいよ!』『お前は狂人と会話ができると思ってるんですか?』『じゃあ何のためにその狂人の配信に顔出したんですか?』『ちくわ大明神』『誰だ今の』

『お願いです・・・!話を聞いて下さい!お願いします!』

「・・・っ!」

握った拳から血が垂れる。画面の中には一番大きくうみちゃんの配信部屋が映っており。。。うみちゃんは必死に頭を下げていた。

ポケモン達が後ろの方でじつと主人を見ている。それでも膝の上に乗っているライを抱きながら何度も何度も、言葉を変え言い方を変え頭を下げ続けている。

しかし無情にも横に流れているコメント欄は、アンチによる罵詈雑言と擁護するリスナーで荒れに荒れていた。

「・・・タケシ」

「キョウさん。今話しかけないでください」

「・・・そうか」

背後からキヨウさんに声をかけられるが、つつばねる。デスクの上では、まるで自分のものでないような感覚で指がスルスルと動き、アンチコメントを打った視聴者を追跡し続けている。指の動きは滑らかだが、キーボードからは俺の内心が漏れているのか、カチャカチャガチャガチャと耳障りな音を立てている。

(最後の視聴者(アンチ)を捕捉・・・あとはこれを押すだけでアンチどもを一斉に退去させられる)

エンターキーへと指を乗せる。あとはただ、軽く力を入れれば配信に平穏が訪れる。

『お願いします！落ち着いて話を聞いて下さい！』

「・・・っー」

しかし、押せない。それをうみちゃんは見望んでいないからだ。彼女はよりにもよって、地獄の道へと当然のように進んでいる。アンチと通常の視聴者、分け隔てなくすべての人々へと情報を伝えようとしている。いや、これから来るであろう危機を知らせようとしている。それを思うと、思わずエンターキーからゆっくりと指が離れーーーーー

「つくそがあ!!」

そのまま握った拳を壁へと殴りつける。鈍い痛みと、凹んだ壁の感触と、突然の俺の奇行に驚いた他の職員の視線を感じつつ頭を回転させる。

(アンチにだって種類がある。ただアンチ行為をする事が目的の愉快犯、配信者が気に入らない私怨。そして今回は、「自分達の不安を取り除くために脳死で排斥運動に入っている」んだろう)

拳を壁から離し、嫌々ながら画面へと目を向ける。相変わらず頭を下げつつも説明を開始しているうみ。しかし、アンチと思われる視聴者はひたすら「駆除を」の一点張りだ。

怖いのだ。「未知」が。故にこそ、それを排除しようとする。自分達の「普通」を守ろうと、「変化」を認めるのが怖いのだ。

(おそらくこの中にただ煽っているだけの愉快犯タイプの奴もいるんだろうが、多分大半はただ信じたくないから聞きたくないという連中



だろう)

そういう手合いは、無視が一番楽で後腐れがない。互いに知らないフリをして、知らないで突き通せばいい。ネットでの関係などその程度なのだから。だが、

『ポケモンは、現在あらゆる場所で、あらゆる生物が変化して増えていってるんです！彼らを排除するのでは、我々人類はポケモンの波に飲み込まれます！そうなる前に、人とポケモン、二つの種の融和を！』  
『化け物と一緒に暮らすってか？冗談』『お隣さんが化け物を飼っていて、いきなり攻撃してきたとかりしたら、警察沙汰だろ』

『ですからそうならないように、正しい知識をつけないと！ポケモンとの関係は今後の世界で重要になるんです！』

うみちゃんは、それをしない。アンチであろうと、必死に理解を得ようとしている。一切聞き入れてくれなくとも。全てを否定されたとしても。

『お願いです！日本の、世界の人々がポケモンと手を取り合わないといけないんです！』

「・・・無理だ、うみちゃん。一度配信を切るんだ・・・！」  
思わず呟く。

この子はとても純粋だ。純粋にポケモンを愛していて、純粋に人との共存を叶えようと動いている。大人になり、汚れを知り汚さを知った俺には眩しいくらいに。

そんな彼女へと容赦のない口撃が突き刺さっている。

配信を見ている何人が気付いているだろうか。背後のポケモン達や膝の上のライが、段々と悲しげな表情になっていることに。そんなポケモン達の見ているうみが、泣いてはいないものの握られた小さな手が震えていることに。

『駆除は無理なんだって！説明してるじゃんか、既存の銃とか程度じゃあどうしようもないんだって！』『じゃあ戦車でもヘリでも良いから使えば良いんじゃないか。頭使えよ』『お前こそ頭を支え。自衛隊にどれだけの数そんな大型の兵器があると思ってるんだ？それを全国で動かす事がどれだけ難しいと思ってる？』『沖繩に米軍いるじゃ

ん、そつからも協力してもらおうとかで良いんじゃないやね？数いれば化け物  
駆除くらい簡単だろ』『その理論はポケモンにも当てはまるんだよ  
なあ』『ちくわ大納言』『誰だ今の』『なんだ今の』  
(もうダメだ、これ以上は・・・！)

後でうみちゃんから責められてもいいからと、ハッキングしての配  
信切断をしようとする。その時だった。

『ポケモンとやらについて聞きたい。質問良いだろうか』

『・・・っ！は、はい！なんでしようか、なんでもどうぞ！』

『ん？』『ん？』『落ち着けお前ら。今は自重しろ』『私は国内の研究機  
関の者だ。同僚からこのことを聞いて過去にスレッドとやらに来  
たことのある者なのだが、覚えてくれているだろうか』

『・・・！』

『キター！』『研究者ニキ?!生きてたのか!』『勝手に殺さないでやれ』  
『このタイミングで来るってことは自演か?』『またそうすぐ都合の  
良い解釈する』『どうせ研究者とか言っても偽物かマイナーな奴だろ  
う?聞くだけ無駄』

『そうですか、スレの方にきたことのある方なんですね。それで、質問  
というのは・・・』

『あなたの言うポケモンを、私は信じようと思う』

『・・・え?』

「まじか!」

思わずやってはいけないと分かっているがハッキングを試みる。  
ぬか喜びさせるだけの偽物かとも思ったが、そのコメント主を調べ驚  
愕する。

『偽物だろ?さっさと正体あらわせ』『なんでアンチってそう人を煽る  
の?馬鹿なの?死ぬ』『お前が死ぬ』『む、済まない。自分は○○大学  
で生物学の教授をしている大木戸という』『・・・ん?』『ファッ!』  
『え、○○大学って・・・確かすごい大きな国立大じゃあ?』

『ええええええええ!』『キ、キター!!!』『騙されるな、なりすましだ』  
『こんなとこでそれする意味がある?』『落ち着け、まずは話を聞こ  
う!』

コメント欄が大混乱する中、大木戸と名乗った研究者が段々とコメントを残す。

『実は私の孫がポケモンを連れていてね。話を聞いてここどうみちやんの存在を知ったんだよ。それに、孫の協力を得てうみちやんの話していた内容についても研究は始めている』『有能なんてもんじゃない、最強か?』『まじか、いつの間に!』

大木戸のコメントに視聴者が活気付く。呆気にとられた様でぽかんと口を開けていたうみちゃんへ、更にコメントが続く。

『うちの孫が、チャラ男がお世話になっっている様で』

「『お前かチャラ男おおお?!』」

『ふむ、そこまで驚いてくれるとは思わなかった』『ええええええええ?!?!』

『ちよつと待て、チャラ男の方も身バレしてね?』

いやもうこれに関してはそれ以上にヤバすぎるだろ、人材的な意味で!』『最強の後ろ盾やないかい!』

『え、えつと・・・研究者ニキ・・・?博士?』

『大木戸でも博士でも良い。・・・ここまでの流れは見ていた』

戸惑ううみちゃんに、大木戸・・・博士がコメントする。自然と他のコメントが減っていき、静かな時間が流れる。

『正直自分としてはまだ完全には信じられない事もあるだが、調べていき、君の残している動画や情報サイトを見ればわかる。君の言っていたことは全て事実だ。少なくとも、今私が見て、接したポケモンに関しては事実だと嫌でも理解できたよ。そして、先程から君が言っている危機というものなんとなく分かってきた』

『君は間違っていない。私は、君の行動を支持する。これからも頑張ってくれ、私も研究を続ける』

『・・・あり、がとう。ごさいます!』

『俺らもやるぞ!』『何ができるかは分かんけどな』『とりあえずアンチは全員ぶっ叩いてでも分からせよう』『分からせるなら私の出番だな』『分からせおじさん!帰って!』『なんでだ!』『俺も一ポケモントレーナーとして出来る限り頑張る。うみちゃん、君は一人じゃないぞ』『釣り師ニキが言うとなんだか嫌だ』『なんでさ!』

「……は、ははは……」

ゆつくりと椅子にもたれかかり、自然と笑いがこみ上げてくるのを感じた。思わぬ形ではあるが、うみちゃんの言葉は人を動かした。これ以上ないほど完璧な相手のだ。純粋な願いが折れることなく戦っている。それを感じた俺は思わず握っていた拳に更に力が入る。

すでに涙腺が崩壊しかかっているうみちゃんがベソをかきながらお札を言い続けているのを見ながら、決意した。

（俺も、やらないとな……出来ることを。この国のため、市民のため……何よりうみちゃんのためにも）

そしてそつと、コメントを残した。

『俺を忘れるんじゃないぜ！当然俺だってうみちゃんのために幾らでも動くぜ！』『さす警』『さす警』『ちくわ大納言絵巻』『なんだ今の』

「どうなっている!?状況を報告しろ!」

『わ、分かりません!突然暴れ出し……ぎやあっ!』

「おい!おい返事しろ!……クソが!何が起きている!」

とある国の研究所。周囲を森に囲まれたそこでは、警報が鳴り響いていた。脱走した被験体を探し出そうと必死な研究者や警備員達。しかし、少しずつその数は減っていく。

「くそ、被験体番号1番め……!やってくれ!」

研究所の所長を務める男は、爪を噛みながらイラつきを抑えようと辺りを行ったり来たりしている。そんな中、所長室の扉が轟音とともに開く。

「!?おい、見張りは何をしている!?」

「む、無理です!もう持ち堪えらあぎや!」

部屋の前を警備していた男が悲鳴を上げて転がり込んでくる。その顔は恐怖に歪み、そして向いてはいけな方に向いていた。

「ひ、ひいっ!」

「……」

「い、1号!貴様、それ以上近づくな!」

部屋の中へと無言で入ってきた被験体1号は、無言で背中中の砲台を

所長へ向ける。恐怖からか発狂し、喚きながら逃げようとする所長だったが、被験体1号は素早く動き所長の腕を掴む。

「ぎゃあああ!? 助けて、やめて! 殺さないでくれえ!」

「・・・Gi、giggiggii!」

命乞いをする所長に怒りを膨らませていく1号。エネルギーが収束していく砲台を乱暴に所長の頭部へと当てる。

「――仲間を平気で殺したくせに・・・!」

「おごっ!?」

偶然か、所長の頭へと押し付けられた砲口は、口の中へと押し込まれる。所長は涙を流しながら、それをどこか他人事のように感じ天井を見上げた。

「かひほ(神よ)・・・」

パアン、という弾けるような音とともに、所長の意識は永遠の眠りについた。

朝日の登る森の中を、ゆっくりと歩く被験体1号。血塗れの体を拭く事もせずゆっくりと当てどなく歩く彼は、どこか寂しげに空を見上げる。森の中は静かで動物の気配は無く、空にも鳥はいない。

「・・・」

1号は震えながら顔を覆うと、空へ向かい悲しみの咆哮を放つのだった。

「Gi、giggaaaaaa!!!」

## 第39話

朝の日差しを受けながら、庭へ用意された物干し竿へと洗濯物を掛けていく。その横では、お手伝いとして器用にしつぽで洗濯カゴを持ってくれているミロと、風で飛んでいかないよう干した洗濯物へと洗濯バサミをつけていくデオキシスがいた。

少女の体になってからというもの、こういった家事の中で身長的な問題でみんなに手伝ってもらうことが増えた。・・・いつかは、いつかは成長するんだ、うん。

「よっし、終わりー！二人ともありがとー！」

「フウー！」

「ーーー」

朝する家事を全て終え、手伝いをしてくれた二人へ労いの意味も込めて手製のクッキーを渡す。感情の読めないデオキシスはペコリとお辞儀をし、ミロはとうとうとそれはもう嬉しそうに尻尾をビタンビタンと振っていた。

その後ろでは、尻尾が地面を強打するたびにバンギラスがビクツとしていたけども。

「さてと。それじゃあ、少し実験といくか」

そう言つて、ジラーチ以外のいま家にいる全てのポケモンの中から、種類別に1匹づつを庭へと集める。

先日のマサキさん襲撃に関する事で、現在確認できているポケモンを持つ一般人は警察によつて保護・監視を受ける事になった。ワタルさんやチャラ男ニキ、農家ニキの様に元から協力的な人だけでなく、家族でジグザグマ（未確認）を餌付けしたであろう人たちまで、かつて配信で確認されたポケモンを飼い始めた全ての人間が対象となっている。

そんな中、俺はポケモンの総数が多く、練度が高いこともあって警護の優先度は低く、家で待機する事になっている。警護はいらなくても重要人物に変わりはないらしく、たまにキヨウさんやタケシさんが様子を見に来るが今のところ襲撃を受ける気配はない。そして、俺は

俺にしかできない役割もある。

「スペアー、ライ。二人ともよろしく」

「スピッツ」

「ライー！」

元気に返事する両ポケモン。バトルする様な構図で向き合った二人がそれぞれに技を放つ。

「ライ、『じゅうまんボルト』、スペアーは『ミサイルばり』！」

「チュウー！」

「スピッツ！」

時折こちらからも指示を出しつつ、様々な検証を重ねていった。

昼になり、バトルしてもらったポケモンたちを休ませつつ昼食を取っていると、玄関でインターホンが鳴る。

「うみちゃん、来たぜー」

「あ、はい」

一瞬警戒し、隣で食べていたライがピンと耳を立てる。しかし聞えてくるここ最近で聞き慣れた声に問題ないと判断したのか、まったく食べ始めた。

「どうも、わざわざ有難うございます」

「いやいや、こつちも仕事だから気にしなくてもいいよ」

玄関を開けると、そこには刑事らしくスーツを着込んだタケシさんが立っていた。朗らかに笑うタケシさんを家に上げ、リビングの机で向き合う。昼食だったカレーを差し出すと、何故かタケシさんは震えながら拜んできた。

「おお・・・これはうみちゃんの手作りカレー・・・！」

「そこまで凝ったものじゃないですよ？」

「いやいや、うみちゃんが作った、っていうのが重要なんじゃないの・・・うん、旨い！」

大口で本当に美味しそうに頬張るタケシさんに苦笑しつつ自分の分を食べる。少しの間無言の時間が過ぎた時、徐にタケシさんが口火を切った。

「それで、うみちちゃんが言ってた確かめたいことってのは分かった?」  
「ええ、朝の検証で大体分かりました」

口元をティッシュで拭いながら、真剣な話のモードに入る。

「俺の持っていた知識は、およそ9割方正しいだろうと思います。ライ達へのケアや戦い方等、俺の知っている通りでした」

「・・・残り1割は?」

「わざのことやポケモンごとの生態、ですかね」

検証では、ポケモンが使える技の数についてをまず調べた。ゲームの頃は、どんなに頑張ろうとポケモン1匹の使える技は最大で4つが限界だった。しかし、ふと俺は考えた。ポケモンのわざは、本当に4つが限界なのだろうか、と。覚えている技をぼかんと忘れ、直後であろうとすぐに使えなくなる。ゲームならそれはそうだろうが、現実でそんな簡単に忘れてたりできるのか。

そこで俺は、今いる全てのポケモンを対象にひたすらわざを使わせ、そのポケモンが覚えるだろうわざを片っ端から指示してみた。

そうして分かった事が二つ。

・ライ、ミロと言ったパソコン組は4つが限界。

・こちらの世界でゲットしたポケモンは、個体によって違うが4つ以上持つ個体もいる。

恐らくライ達はゲームの世界出身であるため、ゲーム内で育てる際4つのわざしか使ってこなかったからだろう。かつて使っていたわざであっても、指示した際には戸惑っている様だった。

一方のパソコン組以外のポケモンはというと、大体5つか6つほどわざを覚えていた。

数の多いスパークでは、『ミサイルばり』『どくばり』『みだれづき』『こうそくいどう』などに加え、時折『どくづき』や『いかり』を覚えている個体がいた。

どうやら成長過程で覚えたわざをどうやってか取り捨て選択している様だ。つまり野生のポケモンでも同じ事で、想定していなかった戦法を取る個体がいってもおかしくない。

他に、生態面ではゲーム内では凶鑑の説明にあるというだけだった



設定が、ポケモン達に反映されている事だ。バンギラスはマジで暴れた時の『はかいこうせん』で山を崩しかねなかったし、集団生活をするスピーアー達も異様に統率力がある。ライはわざ以外でも器用に電氣を使うため、たまにスマホの充電をしてもらったりもする。

「以上が、俺の検証での見解ですかね」

「・・・ふむ」

話を終え、考え込んでいるタケシさんを黙って待つ。少ししてから、タケシさんは俺を見据える。

「うみちゃんの知識が重要なことには変わりないな。これからも検証は必要だろうけど、まあ今のところは気をつけるだけでいいだろう」「分かりました。こっちでも逐一情報は報告するつもりです」

「頼むよ。・・・で、今日はその話で俺を指名したのかい？」

ある程度話が終わったところで、タケシさんが尋ねてくる。そう、今日は本来キョウさんがやってくる予定だったが、俺が急遽話があるということとタケシさんと代わってもらったのだ。

「いえ、別件で一つ、渡すものがあつたので」

「渡す物・・・？」

疑問符を浮かべるタケシさんに、一つのモンスターボールを渡す。不思議そうにこちらをチラ見したあと、そつとボールを手に取り眺めている。

「これは？」

「ポケモンです。名前はイシツブテ。最近山の方で見つけた奴です」

そういうとタケシさんは驚きの表情を浮かべる。手に持ったボールを放ると、光と共に岩から手が生えたような姿のポケモン、イシツブテが姿を表す。

「シャッ！」

「・・・何で俺にこいつを？」

「襲撃の話聞いた時から考えていたんです。俺にできて、最も有効な対策というか、トレーナー強化案を」

イシツブテを撫でながら聞いてくるタケシさんに、説明する。マサキさんの襲撃から色々なことを考えたが、これが一番シンプルでやり

やすい。

「単純な事です。トレーナーのポケモンを増やせばいい。一体だけでなければならぬなんて理由はないですし。それに、複数のポケモンがいれば不測の事態にも耐えられるでしょう」

「なるほど……でも、なら何でキョウさんは呼ばなかつたんだ？俺もそうだが、あの人もポケモン持ちだし、狙われると……」

「……キョウさんが、襲われてどうにかなると思います？」

「……ああ、うん。えっと……」

俺たちの間に微妙な空気が流れる。なんかキョウさんなら、生身でもテロリストとか捕まえてそんな気がする。まあ、また今度ポケモンは渡すつもりではあるんだけど。話しながら涼をとるために庭に面した縁側へと歩き、座る。

「それに、ただ漠然とポケモンを渡してるわけじゃあ無いんですよ。」

「ほお？」

「タケシさん、今の手持ちの様子はどうですか？」

そう聞くと、タケシさんはニヤリと笑いながらボールを二つ取り出す。

「……出てこい！」

そう言っただけボールを放ると、青っぽいコウモリとゾウのようなポケモンが飛び出して来る。

「わあ……！ゴルバットに、ドンファン！」

「どうよ、俺の手持ちも進化してるんだぜ？」

誇らしげなタケシさんの突き出した腕に逆さに止まるゴルバット。……こいつ結構重いのに、タケシさんは問題なさげだ。警察はみんなマッスルなのか……？

ドンファンも暴れていたところを取り押さえたと言っていたが、見ていると嬉しそうにタケシさんへと鼻を伸ばしている。

「タケシさんやキョウさん、ワタルさん達は皆さん共にポケモンを優しく世話してくれているみたいですから。流石に何するか分からない人にポケモンを託したりはしませんよ」

「なるほどねえ……今のところポケモンを持っている一般人へは、警

察の方で護衛的な形で保護を継続してるよ。今のところあれから襲撃があつたなんて報告はないね。でも、考えると俺たちのポケモン常備は妥当な判断なんだろうなあ」

そう言つてボールを手で弄ぶタケシさん。少しの間静かな時間が流れ、のんびりと空を見上げいつのまにか膝に乗っていたライを撫でつつ、体に巻きつくようにとぐるをまいているミロに寄りかかる。

周囲では、生まれたばかりなのかまだ小さいビードルが縁側で日向ぼっこをしており、スピアーが落ちないよう見ている。サイドンは畑から戻つてきて庭に生えたスピアーの木の下で昼寝をしている。

池ではゾロアが水を浴びてはしゃぎ回っており、ゾロアークはそんなゾロアを嬉しそうに見ている。バンギラスはまた修行でもしているんだろうか、姿は見えない。

「・・・うみちゃんのところは、どのポケモンも楽しそうにしてるな」

「ええ、嬉しいことに。この生活だけは、壊したく無いですね・・・」

まったくだ、と言つたきり静かに自分のポケモンを愛でながらタケシさんも空を見上げて微笑む。晴れた空に浮かぶさまざまな雲を眺めながら、静かで和やかな時間が流れていた。

その時だった。

ガン、ガンガン！ガンガンガン！

「！なんででしょうか・・・」

庭の反対側、玄関から戸を乱暴に叩く音がした。まるで切羽詰まっているかのように、叩く音の間隔は短く、音は激しくなっていく。

「・・・うみちゃんは、そこについて。俺が出る」

真剣な表情でそう言いつつゴルバットに目配せをするタケシさん。ゴルバットは頷くと、タケシの肩からうみの近くへと飛び移り、タケシはそのまま玄関へと向かった。

「・・・ライ、ミロ。もしもの時は」

「ライ！」

「フウ」

タケシさんが玄関へと向かうのを見送りながらも、もしもの時は戦えるようライとミロへ声をかける。他のポケモン達もなんとなく察したのか俺から離れたり、羽音を響かせたりと、いつでも動けるようにしている。

(こんな真つ昼間から襲撃してきたのか・・・?でも、怪しい人物がいれば外を飛んでるスピアーが知らせてくれるはず)

襲撃にしては妙なタイミング、しかもスピアーの警戒網に引っつかからないという訳の分からない訪問者に対して思考を深めていく。

すると、突然何かの倒れるような音とともに玄関からタケシさんの叫び声がした。

「うみちゃん！頼む、力の強いポケモンを連れてきてくれ！」

「！サイドン、表に回って！」

「ゴア！」

サイドンがドスドスと玄関へと向かい、俺もライを連れて靴を脱ぎ捨て縁側から家の中へと入る。

「タケシさん、なに、が・・・」

玄関には、一人の男性が倒れていた。横には手荷物であろう大きめの鞆と、ペットを入れる用のカゴがある。

「結構衰弱してる！病院へ連れていくにしても一旦寝かせたい！」

男性を抱き抱えながらタケシさんがそう指示を出すと同時に、サイドンが玄関へとやってくる。

「ゴア！」

「！と、とりあえずその人をうちに上げましょう！サイドン、お願い！」

「うみちゃん、冷たい飲み物とかある!?この人、多分熱出してる！」

「冷蔵庫に！ライ、布団取ってきて！」

「ライ！」

にわかに騒がしくなる我が家、そんな中タケシさんの背負った男の人が、ボソリと何か呟いた気がした。

「・・・ソラくん、すまない・・・」

「にしても、ずいぶんとハードワークつすねえ」

うみ家にて少々問題が発生している頃。警察署内に用意されたポケモン特訓用の仮道場にて、ぼけっとしながらチャラ男・・・シゲルが呟く。

「ん？別にそんなことはないと思うけどなあ。それよりも緑君、なんかコラツタの動きが鈍くなってたけど回復させないで大丈夫か？」

「グ、リ、ー、ン！農家ニキちよつとしつこいつすよ!?!」

怒り心頭のシゲルをまあまあと宥めながら、回復のために用意されたオレンの実を手渡す農家ニキ。両者のポケモンは疲れ切った様子で寝ており、回復には時間がかかるだろう状態であった。そんな相棒達を気遣いつつ、二人の視線は未だバトルを続ける男達に向いている。

「まあ、ワタルさんは確かになんだかやる気っていうより焦りっぽい感じだけだなあ。さつきからポケモン達と一緒に連戦してばっかだし」

二人の見据える先、道場の中心ではワタルとキョウがポケモンバトルをしていた。

「ハクリュー！『りゅうのいぶき』！」

「ランプラー、『えんまく』！」

ハクリューのブレスを、ランプのような姿のポケモン、ランプラーが煙幕で煙に巻き回避する。連戦の影響で既に相当疲労している状態のハクリューは、ブレスを躲され睨み合いとなり荒く息を吐く。

「ハクリュー、まだいけるか？」

「・・・フウ」

「ランプラー。まだ気を緩めるなよ？」

「！」

両者ともに気合十分、いざ尋常にと互いにブレスと炎を構えた時だった。

「あー、すまないが今大丈夫かな？」

「！」

道場の入り口から声がかげられる。その場にいた全員がはつと振り返ると、そこには警察の制服を着込んだ初老の男性が立っており、その姿を確認した瞬間キョウは慌てて敬礼する。

「はっ、警視総監殿！御足労いただきありがとうございます！」

「ああ、楽しんでいい。私はただ見学にきただけなのでね」

そう言っつてキョウへと笑いかける警視総監。ニコニコと笑いながらスツと道場へと入ってくるその姿に、何となく全員の緊張感が上がる。

「君達も、わざわざ立たなくてもいいよ。疲れているだろう」

「！あ、はい・・・じゃない、失礼します」

言われて初めて、シゲルと農家ニキは自分が無意識に立ち上がって不動の姿勢をしていることに気づいた。警視総監に言われ休憩へと戻るが、チラチラとワタル達を見つつ小声で話をする。

「・・・なんでお偉いさんが？キョウさんに用事でもあつたのかねえ？」

「さあ・・・というか、あれ見ろよ緑くん」

「シゲルです」

農家ニキがそつと指差した先にあつたのは、警視総監の腰に提げられた、赤と白の紅白玉だった。

「警視総監殿、それは・・・」

「ん、ああ。私も一警察の人間として持つておくべきだと思っつてね。少々手間取つたが部下も連れて捕獲したんだよ」

そう言っつて警視総監がモンスターボールを手に取り放る。

光が形を作り、黒い体に厳つい表情の犬のようなポケモンが現れる。

「ガア！」

「それは・・・見たことのない種ですね」

「そうか、私もうみちゃんから受け取つた資料は見たのだが、いかにせん総数が多くてね。見つけるのも一苦労だよ」

ポケモンをマジマジと観察するキョウの横で、口元へ手を当てながら考え込んでいたワタルがボソリと呟いた。

「デルビル、ですね」

「!分かるのかい?」

「ええ、うみちやんの資料のポケモンの名前と絵は全部頭に入れたんで」

「ほう・・・それは凄い」

感嘆のため息をこぼす警視總監とキョウ。照れ臭そうに頬を掻く。そんな中、道場へと慌てたような足音がバタバタと聞こえ、扉を開けて警官が一人飛び込んでくる。

「どうやら、対策課の警官のようだった。」

「キョウさん!ポケモンが出ました!通報も来てます、出勤お願いします!」

「分かった!すぐ行く!ワタルくん達は準備急げ!」

「了解(つす)!」

即座にキョウの指示に従い動き出す3人。既にポケモン関連の事案であれば並の警官以上に対応できる3人は、それぞれにポケモンをボールへ収めつつ道場を飛び出す。

それを見送る警視總監は、悲しそうな、それでいて嬉しそうな表情を浮かべていた。傍で「なんだったんだ?」と首を傾げるデルビルを撫でる。

「・・・ままならんな、何もかも」

謎の男性を保護した俺たちは、布団に包まれ苦しそうに呻く男性を看病しつつ話し合っていた。

「病院には連れて行きます?」

「そのほうがいいだろうね。身元を証明するものもない、どうやら日本人っぽいけどそれだけじゃあ信用に足るとは言えないし・・・」

チラリと寝ている男性を見る。見事なhg・・・スキンヘッドで、かけていた丸メガネのようなサンングラスは枕元へ置かれている。来ていたのは普通の服だが、持っていた荷物の中には白衣が入っていた。俺には分からない妙な器具や聴診器もあり、そこから考えられるのはこの人が医者か、それとも科学者かということくらい・・・。

「とりあえず、俺が連れていくから。車持ってくるから少しの間看病

お願い。・・・ああ、警戒はしつかりね」

「はい」

タケシさんが念押しをしつつ足早に出て行く。それを見送りながら、そつと男性の横に座る。

「・・・」

「にしても、本当に誰なんだろう・・・こんな人見たこと・・・っ」

不意に頭痛に襲われ、手で頭を押さえる。しかし、頭痛は一向に止む気配はない。

(いつ・・・なん、だよこれ!?)

「ライ!?!」

「ラ、ライ・・・ごめん、タケシさん、をーろーろー」

側で慌てて支えてくれようとしたライに、タケシさんを呼んでくれるように言う。だが、とうとう痛みにも耐えるのも限界がきて意識が遠のいていった。

(なにが、起きたんだろう)

意識が途切れてどのくらい経ったのか。俺は真つ暗な空間に一人、ポツンと立っていた。あたりを見回しても、人どころか何かが落ちていたりもしない。真つ暗なのに、何故か俺の視界ははつきりしており、俺自身の体は普通に見えている。

「どこだよここ」。というか、ライは? タケシさんは!?!」

俺の言葉に、答えてくれるものはいない。嫌になるくらいの静寂の中、ジツとしていても仕方ないと、足を踏み出す。

ペた、ペた、ペた。

フロアリングの床を歩くような感触がなにも履いてない足裏からひんやりと伝わってくる。ひたすら真つ直ぐに歩くが、壁にぶち当たることも、何かに出会うこともない。段々と不安と焦り、恐怖が心に渦巻いてくる。

「落ち着け、今はただ歩くしかないんだ。早く戻って、タケシさんに・・・」



『君は相変わらずだな。また一人で食事かい？』

「！」

背後から聞こえてきた声に、とつさに振り向く。そこには、いつの間にも現れたのか、古いブラウン管テレビが置かれていた。若干ノイズの混じった映像が流れており、今の声もそれから流れたようだった。

「・・・」

ゴクリと息を呑み、そっとテレビの前へと座る。この謎の場所へ来て、初めて起きた変化だ。不安ではあるが、これを見逃す手はない。

『・・・』

『おいおい、無視しなくてもいいだろう。一応私は君の上司だよ？』

テレビの映像には、見たことのない部屋でひたすら黙々とスプーンを動かし食事をする女性がいた。黒い髪に若干の銀のメッシュの入った不思議な髪その女性は、研究者のような白衣を纏い、その下はどうやらツナギのようだ。しかし、その服装に関わらず美人という評価を受けるであろう美貌の持ち主だった。

『それに君、もう少しファッションの方もどうにかならんのかね？いくらここにるのが研究者ばかりだとはいえ・・・』

『私はここにやるべきことがあって来ているんです。それに必要なこと以外する気はありません。第一、「彼ら」へと接する上で服なんて選ぶ余裕はないと思われませんが』

『・・・これは手厳しい』

女性に対してかけられる言葉とともに、画面は忙しなくいろんなところを映す。たまに見えてくる手や足などの位置関係から、この映像は誰かの視界が映されているようだ。もう一人の、女性へと声をかけている人だろう。おそらく男性。

基本無視を貫いていた女性だが、一瞬男を睨みつけ、スプーンを置き反論する。それに対して男も聞く耳を持たないな、と判断したのか視界が少しだけ上下する。肩を竦めたのだろうか。

『じゃあ、今日の予定の話にしよう。今から20分後、ミーティングの後に実験の開始だ。まあ、君の資料が正しければ・・・まあ正しいのだろうけど・・・すぐに終わるだろうね』

『……』

『後悔、してるのかい?』

男の一言で、女性は下唇を噛み俯く。寸前に見えた表情からは、悔しさと悲しみが見えた。

そんな女性に対し、最初のようなフレンドリーな声色を取り払った男の問いが刺さる。

『正直に言って、私は君を恨むよ。いくらあの子のためと言っても、あんなことをここに持ち込むべきじゃなかった』

『……黙りなさい』

『君だって気付いてるだろう?彼は君との取引を守る気は』

『それでも!』

『!』

女性の叫びに、画面内の男と俺は思わずビクリと固まる。叫んだ後、ハツとして弱々しく笑い、女性は立ち上がる。

『……ごめんなさい。貴方達には、この世界にはとても悪いことをしたと思う。けど、それでも私はあの約束に、すぎるしか……』

フラリと立ち上がると、女性は男へと近づいてくる。その顔は、悲壮な決意を決めたような真剣な表情だった。

『お願い、カツラさん。頼みがあるの』

『……なんだ?』

カツラと呼ばれた男へと、そっと何かを握らせる女性。そのまま握ったのを確認し手を離すと、女性は夢げに笑いながらそっと耳打ちした。

『あの子を、おn』

ザーーーーー

『……』

ザーーーーー

「……お、おい!?嘘だろ!?このタイミングで!」

まさかのタイミングで完全に砂嵐にしがれを放映し出したテレビに飛びつく。おい、色々と待て!?まだ何にも分かってないんだぞ!?

「おいーお……?」

しかし、テレビをガンガン叩いているとまたしても頭痛に襲われる。今度は先ほどよりもはるかに強い痛みとともに、意識が急速に落ちていく。

「ちくしょう、ちく、しょ・・・」

そうして俺の意識は、またしても頭痛とともに途切れた。

「本当にこれを放送（や）るんですか？」

とあるテレビ局。大手と呼ばれるそのディレクターへと、一人のADが台本片手に詰め寄っていた。一方のディレクターは、それにニヤリと笑い頷く。

「ああ、当然だろ。今話題のタイムリーな最高のネタだ。ただ専門家に取られては困る。今話題のタイムリーな最高のネタだ。ただ専門家に取られては困る。今話題のタイムリーな最高のネタだ。ただ専門家に取られては困る。」

「いやいや・・・大木戸教授とか生物学の権威の空木博士呼ぶのはわかりませんが・・・だとしても、ケーサツからも呼ぶって、正気ですか？しかも、要請するのが少女って聞きましたけど」

「馬鹿野郎、むしろ警察が本命だよ」

「はあ・・・」

生返事を返すADに舌打ちしつつ、デスクに放られていた写真を手に取る。

「トウキのやつが、いいネタ掴んでくれたしな」

「え、あの人がですか？」

驚愕の声を上げたADが、ディレクターの持っている写真を覗き込む。

「・・・女の子、つすか？」

「ああ。まあ、これだけならただの盗撮なんだがな」

「普通に犯罪じゃないっすか・・・って、ええ!?これ、この人らって!?!」  
そこに写っていたのは、どこかの料亭の入り口。そこで、少女と3人の政治家が向き合っていた。3人のうちの一人・・・大和大臣と握手をする銀髪の美少女を睨みながら、ディレクターは自然と頬が上がる。

「いいねえ・・・ビックなネタの匂いがするぜ」

写真を持つ手に力が入るのを感じながら、その目は企画書を睨んで  
いるのだった。

『徹底解明！謎の生物の謎とは！緊急討論スペシヤル！』

## 第40話

「・・・」

鈍い頭痛と共に目を覚ます。何かとても大切な何かを見ていた気がするが、思い出せない。見上げた真っ白な天井を眺めつつぼーっとしている、不意に俺の寝るベッドを覆っていたカーテンが引かれ、男の人が現れる。

「・・・あ」

「・・・!?!もう起きてて大丈夫かい!?!意識は、頭は大丈夫か!?!」

「え、と。はい、もう問題ないです。すみませんタケシさん」

こちらを見て一瞬固まり、次いで物凄い剣幕で俺の寝るベッドへと飛びついた男性――タケシさんに微笑みかける。ようやく頭が働いてきた、今の俺は病院にいるようだ。

「車を回して戻ってみたらぶっ倒れてたんだぞ?・・・ああ、起きないで。まだ寝ておきな。うみちゃんに引っ付いてライが錯乱して大変だったよ」

「・・・みたいですね」

タケシさんから事の顛末を聞きつつ手元を見ると、俺の右手をギュツと握る小さな、それでいて力強い手。反対の手をグルグルと掴んでいるのはどうやらミロの尻尾だ。そういえば、窓辺の方からすごい視線を感じる。デオキシスだろう。

「タケシさん、あの男の人は?」

少しずつ思考がはつきりシテくると共に、気を失う前家にやってきた男性のことを思い出す。それを聞くとタケシさんは、答えることなく反対のベッドが見えるようカーテンを大きく開けた。

「やあ。君達のおかげで助かったよ。礼を言う」

「この通り、無事だったよ。若干の熱中症だったみたいだけどな」

「長いこと歩き続けていたものでな。それに、日本へ来たのも久しぶりで少々この国の夏を舐めていた」

隣のベッドに上半身を起こし座っていたのは、例のスキンヘッドのグラサンおじさん。どうやら元気になったようだ。苦笑いしながら

こちらへと手を上げる様子からは、もう苦しそうな感じはしない。「さて、何から話したものか。私は、名をカツラと言う。私の荷物を見たのならわかるだろうが、研究者だ。主に、物理学のようなものを専攻している」

そう言つて頭を下げるカツラさん。・・・おかしいな、どつかで名前を聞いたような気がする。初対面のはずなんだけど・・・。ダメだ、まだ若干頭が働かない。

そんなことを考えていると、タケシさんが険しい表情でぶつきらばうに答える。

「俺は警官だ。今はまあそれだけ知ってればいいよ。それとこの娘は、警察で保護してる子だ」

(ん？なんでそんな雑な説明・・・)

「今の私は、君たちからすれば突然家にやってきた不審者だろう。危害を加える可能性もある。そう簡単に情報は与えられないというのは分かるが、もう少し友好的には出来ないかな？こちらとしては君たちに危害を加える気はない」

「ああ、そういうことか・・・」

「・・・」

な、なんだろう。二人から「まじかよこの娘」って感じの視線が：：。うう、いや俺はあくまで一般人なんだし、分かるわけないじゃんそんな駆け引きとか。俺なんてせいぜい少しポケモンについて人より詳しいくらいじゃん。

「な、なんですか・・・？」

「いや・・・まだ疲れてるだろ？少し寝てな」

(せ、戦力外通告・・・)

タケシさんの優しい眼差しが今は痛い。しょうがないので、俺は無理やり目を瞑って寝ることにした。

・・・あれ、おかしいな。目から汗が・・・

—————

「・・・さて、それじゃあ少し話を聞こうか？」

うみがベッドに寝て掛け布団をかぶつたのを確認し、タケシがカー

テンを閉める。向き合ったカツラは、タケシが自分へ向ける視線に敵意のようなものが宿っているのを見て冷や汗が出た。

「・・・何から話せばいいかな？生憎と、話したいことはたくさんあつてね。特に彼女には」

「そうかい。だがすまねーんだけど、まずは俺との話を先につけようか」

（随分な態度だな・・・）

カツラに対するタケシの態度は、明確に嫌悪を示していた。流石に初対面の人から悪感情を向けられるとは思っておらず、戸惑うカツラ。

何を言っているか迷っていると、タケシがポケットから一枚のカードを取り出す。

「これ、あんたの持ち物から見つけた奴だ」

「・・・！ああ、それは確かに私のものだ」

「じゃあ、もう言いたいことはわかるな？」

「・・・」

苦悶の表情で項垂れるカツラに、完全に激怒しつつも、隣のうみを決して起こさないように声を押し殺したタケシの声が響く。

「しつかり喋ってもらおうか？『ポケモン研究所』、なんて物のありかをよお」

そう言ってカード：：IDパスがカツラのベッドへと放られる。白い本体色に黄色い縁取りがされており、裏には英語ではなさそうな外国の文字の羅列。表には『A』『特級職員・カツラ』とだけ簡素に書かれていた。

現在のポケモンに関する情報は、うみの配信を除けば一般に出回るものにはかなりの制限が課せられている。

ポケモンの姿は以前から様々な形で確認されているが、それでもまだ本格的に研究を進めている所は少ない。しかも、うみちゃんと対談した大和大臣の働きかけにより、ポケモンの研究目的での所持も一旦禁止とされている。未だに安全を確保できる程の設備的余裕もないからだ。

そんな中、ポケモンを連れ海外から来たと思わしき研究者の男と  
いうのはひどく異質かつ怪しい存在だった。

「それと、なんでうみちゃんを知ってるのかも解せない。彼女はいち  
おー配信者だが、外見以外の身バレするような情報に関して俺らで  
確認できる限りは全力でシャットしてきたんだ、知れる訳がない。住  
所なんてもつての外だ。にもかかわらず、あんたはやってきた」

軽い調子で話を続けるタケシだが、目は全く笑っていない。項垂れ  
ながら、まるで死刑宣告を受ける罪人のように冷や汗を流しながら俯  
くカツラは、ギョツとベッドのシーツを握る。

「……知ってたな？あの家を。うみちゃんという存在を」  
「……」

じつと視線を逸らさず見つめ続けるタケシに対し、顔を上げること  
なく一切視線を合わせないカツラ。

我慢の限界が来たのか、チツと盛大に舌打ちしながらタケシがカツ  
ラの胸ぐらを掴み上げる。

「っ……！」

「おい、俺がうみちゃんに配慮して大声を上げないからってだんまり  
は無しだぜ。別にこれから異常なしつて診断を医者に書かせてあん  
たを取調室送りにしてもいいんだぞ……！」

押し殺したような、しかし怒りのこもったそんな脅し文句を受けな  
がら、なおもカツラは黙り込んだままだった。

「……すまない」

「……そうかい」

掴んでいた胸ぐらを乱暴に離しながら、タケシは最後にもう一度舌  
打ちをして、いつのまにか本当に寝てしまっていたうみを見守るよう  
に椅子へと座り直した。

カツラは、掴まれた胸ぐらを正しながらそんなタケシと、静かな寝  
息を立てるうみを見て悔しさの滲む声を漏らした。

「……ソラ」

「あ？」

「ソラ。それがその子の母親の名前だ」



「・・・てめえ！」

それを聞いたタケシが、弾かれたように椅子から立ち上がる。「んう・・・」と若干唸るうみだつたが、起きることはなかった。しかしそんなことに配慮する余裕も今のタケシにはなかった。

「すまない、許してくれとは言わない。だが、一つの真実として、わたしから伝えられることは先ずそれだけだ」

「ちよつと待て・・・！関係者だろうとは予想してたが、うみちゃんの母親を知ってるのか!?おい、その人はどこだ、どこにいる！」

「・・・言えない」

「言えー！」

もはや声を抑えることすら忘れたかのように叫ぶタケシ。しかしカツラは苦しそうであり、かつ決意したかのような表情で首を横に振る。堪忍袋の緒がキレたタケシがもう一度胸ぐらを掴み上げようとしたその時、病室のドアが開く。

「・・・何やってんだお前？」

「！キョウさん・・・」

呆れた表情でドアを開けたのは、キョウだった。手には見舞いの果物カゴを持っており、仕事のついでにきたのか、いつものスーツ姿だった。

「妙な男が来たっていうから急いでみれば、病院内で尋問か？なんだお前の方がよっぽど危険そうだな」

「いやいやいや！キョウさん待ってくださいいよ！ってかそんなことより！」

妙な流れに話が持っていかれそうに焦るタケシを無視し、よつこらしよと椅子に座るキョウ。カツラと向き合うと、苦笑しながらカツラへと話しかける。

「さてと。うちの者がすまなかつたな」

「いや、構わない。彼の怒りももつともだ」

「そうかい。それじゃあすまないが、一度ついて来てもらえるかな？なに、医者から許可は得ている」

そう言つてキョウが取り出したのは、小さな長方形の紙箱とライ

ターだった。

「・・・」

「タバコは吸わないタイプかな？」

「いやいや、キョウさん。ここ病院・・・」

「ちゃんと喫煙所に行くに決まってるだろうが。お前はそのままうみちゃんを見ててくれ。今夜は少し面倒なこともあるしな」

「ちよ、佐藤さん！落ち着いてくださいよ！」

「うるせえ！これが落ち着いていられるか！つたく、上の連中は頭の中腐ってんのか！」

とあるテレビ局、ポケモンに関する特番を生放送する予定のスタジオでは、担当ディレクターが苛立ちと共にペットボトルをゴミ箱へ投げつけていた。怒り心頭のディレクターに、アシスタントの男がため息をつく。

「まさか、あそこまで露骨な人選になるとは思わなかつたですけどねえ・・・」

「どうせ金でも握らされてんだよ。ンなだから報道関係者の信頼性を疑われんだつつの・・・」

二人が見ているのは、本日生放送予定の番組の出演者名簿。そこに書かれている人物は、皆どこかで聞いたことのあるような有名人ばかりだった。・・・ただ一人、日本人には滅多に見ない銀髪の少女を除いて。

「ま、どーにかこの娘の出演だけは確約出来たのが救いだな」

「前にも言つてましたけど、本当にその娘が最近の謎生物の有識者なんですか？俺には今だにどーにも信じられないっていうか・・・」

「馬鹿野郎、写真見せただろ。若きやり手政治家の大和大臣と、○○党代表といえど誰でも知ってるくらいには有名な鈴木。おまけに過去には総理すら務めたあの井口だぞ？そんな大物と笑顔で対談できるような間柄で、しかも所属は警察だ。最近の警察の動向を考えれば、無関係なわけがねえ」

「そーいえばここ最近は外来種系の事件には妙に早い対応でしたねえ

警察」

そんな感じに他愛のない話をしつつ生放送のスタジオへと歩く佐藤とAD。ADは自身の眩きへの返事が来なくなり訝しげに隣を歩く砂糖を見る。

「見た目からして外国からの専門家……？にしては情報が出なかったな、まさかひつそりと研究を続けてた研究者か……？だがそんなネタを俺が見逃すはずは……」

「……佐藤さん？」

「いや、そもそもあの見た目的に明らか小学生……いつても中学生か？だとしたらやはり海外の飛び級制度の利用？しかしだとしてもこれまで全くの無名ってのは解せない。どこかでニュースとはいかなくても生物学系の論文等で有名にはなるはず……」

「ああもう、まーた考え事に集中しだす……」

悪い癖だつてほんと、とため息をつくAD。佐藤はというとそんな相方など気にも留めずブツブツと顎に手を当てながら眩き続けた。

するとその時

「—————」

甲高い機械音が周囲に鳴り響いた。

「佐藤さん、電話。鳴ってますよ？」

「ん……」

電話に出て静かになった佐藤に、やれやれと疲れた表情でため息をついたADは、缶コーヒーへと口をつける。

「ああっ!?どーいう事だおい！話がちげえだろうが！」

「おあ!？」

すると、それまで静かに電話相手と話していた佐藤が怒鳴る。思わずコーヒーを落としそうになったADが慌てている間に、佐藤は「もういい！」と最後に携帯へ怒鳴りつけ、乱暴に通話を切る。

「……な、なんだったんです？」

正直聞きたくねえー、と思いつつ佐藤へと話しかける。佐藤は、ADを一瞬睨んだ後肩を落としてつぶやいた。

「・・・逃げられたよ、本命に」

「はい？」

派手な照明と、テレビでよく見る舞台セット。カメラが映しているのは、大きなテーブルとその周りを囲むように陣取る人物達。カメラの真正面を陣取るのは、世間ではいわゆる「ご意見番」として定着しつつある大物芸能人だった。その横には今人気の若手アイドル「アカネ」と、有名ニュースキャスターが座り、図らずもその芸能人にとっては両手に花の状態である。

そしてさらにその左右に広がる机には、様々な分野「ー」と言っても生物学の権威がほとんどである「ー」の専門家が、二陣営に分かれて座っている。右手に座るのは、大木戸博士、空木博士をはじめとした、今回の討論における『穏健派』と呼べる人達。対して左手に座っているのは、最近テレビ露出の多い有名大学の研究者達。こちらは『過激派』となっている。

大木戸達穏健派は、リラックスした態度でカメラに微笑みかけている。しかし過激派はと言うと、代表を務める初老の研究者を筆頭に穏健派を不機嫌そうに睨みつけている。

何を隠そう、この派閥の筆頭は大木戸と何度も意見の相違で対立しているのだ。過去に出たテレビではそれはもう痛烈に、尽く意見を論破されている。他の過激派も似たようなもので、大木戸や空木を快く思っていない者も居り、それぞれにカメラより相手の方へと睨みをきかせている。

やや険悪なムードを漂わせる両者に挟まれつつも、カメラが回り番組が始まろうとしていた。

「さて、それでは始まりました大討論スペシャルということですね。えー、本日はさまざまな学者さんに来てもらいましたけどもー、いやー壮観ですねえ！」

司会を務める芸人が、早速とばかりに笑いながら切り出す。今回の明らかに空気の悪い討論を何とかまとめる為にも、会話の主導権を握ろうと必死だ。

「それではよろしく申し上げます、○○教授、大木戸教授」  
「うむ」

「よろしく申し上げます」

明らかに偉そうにふんぞり返って頷く○○に対し、頭を下げて挨拶をする大木戸。既にこの時点で司会の芸能人は穏健派に気持ちが寄り始めているが、そんな事はおくびにも出さず番組は粛々と進行されていくのだった。

—————

【正念場】 配信者・うみちちゃんを応援するスレ【一大事】

127：名無し

お前ら、テレビは点けたか!?

128：名無し

あたぼうよ！こちとら今日はこれだけを楽しみに仕事を終わらせてんだよ！

129：名無し

ポケモン大討論、しかも我らがオーキド博士が出るときたら、見る以外ねーだろ

130：名無し

おいおいおまいら、さては知らねーな？

131：名無し

？

132：名無し

なんだよ

133：名無し

つい数時間前にこのスレにうみちちゃんリスナー兼テレビ局の関係者が来て情報落として行ったんだよ

134：名無し

テレビ局関係者の方が兼業なのか・・・(困惑)

135：名無し  
で？今日の討論がどーしたわけだ？

136：名無し

なんと、うみちゃんが出る可能性もあるらしい

137：名無し

!?

138：名無し

♪——○(≡▽≡)○——♪キター！

139：名無し

我らの勝利だ(大本営発表)

140：名無し

笹食つてる場合じゃねえ！(テレビポチー)

141：名無し

見るしかねーじゃんアゼルバイジャン

142：名無し

グレートですよ、こいつはあ・・・！

143：名無し

しかも、そいつによると付き添いに警察関係者が2人来るらしい

144：名無し

どうあがいても警察ニキと警部さんですありがとうございます

145：名無し

まあそーだろうな、うみちゃんJ○だろうし、保護者がいるだろうな

146：釣り師

いや、警部さんは来ない。代わりに俺がついていくことになってる

147：名無し

釣り師ニキ!?生きてたのか!?まさか自力で脱出を!?

148：名無し

え、でもなんで釣り師ニキ？

149：釣り師

それにも関係することなんだが、ひとつここで悲報だ。うみちゃん  
は番組には出ない

150：名無し

君には失望したよ

151：名無し

マジかよ、那珂ちゃんのファンやめます

152：名無し

どう言うことだってばよ!?

153：釣り師

俺だってまだ連絡受けただけでよくは把握してないんだがな・・・

お前らの中で、都内ですぐに動ける奴らはいないか？

154：名無し

?どした、なんかあんの？

155：名無し

まさかまたポケモン騒ぎが起きたのか!?

156：名無し

いやいや、流石にそれは・・・

157：釣り師

いや、残念ながら正解だ。俺やチャラ男、農家ニキだけじゃ手がた

りねえ、手を貸してくれ

158：名無し

えー・・・あんたらが無理とか、どんだけだよ・・・。なんかやば

そうだが、俺バイト中だしなあ

159：名無し

おい、働けよ

160：名無し

今休憩中

161：名無し

俺は暇っっちゃ暇だけど、もう夜だぜ？流石に外出は・・・親の目もあるし

162：名無し

せやなー。釣り師ニキの頼みとはいえ、少し時間的な問題ががが。

俺も仕事の時間近いし

163：名無し

そもそも俺らポケモン持ってない奴だっているしなあ

164：名無し

ポケモンがらみにガチの一般人如きが何も出来ないって

165：釣り師

うみちゃんが狙われてる。理由やら情報ソースやら、言えない部分も多いらしいが、どつかの組織がうみちゃんを連れ去ろうとしている形跡があるとの警察ニキの情報だ。

166：名無し

俺はテレビ局周辺を張る。不審なやつ見かけたら知らせよう。

167：名無し

今家出た。すぐに応援に向かう、1人で行動は有事の際に危険だ、複数人で行動しよう

168：名無し

今から別スレ立てる、情報はそこで交換だな

169：名無し

おれ車持つてる、ちょうどコンビニ行つた帰りだから言ってくれれば足出来るぜ。コンビニは○○店だ

170：名無し

近いな。ウチに興味で収集してる自転車大量にある、貸し出せるから持ち運びに車使わせてくれ

171：名無し

うみちゃんファンの友人に声かけた、すぐに動けるぞ

172：軍師

なるべく3人組で動くぞ。スレを見ておく奴、不審人物を搜索する奴、もしものとき動ける移動手段を持った奴。各自で連絡とって動けばどーにかなるだろう。

諸君、不届きな輩を発見次第連絡と拘束、ポケモン持ちは相手もポケモンを持っている可能性を考慮して必ず1人はつけ。我々のうみちゃんとポケモンへの愛を、そのクソどもに見せつけてやろう



173：名無し

軍師ニキ有能。了解

174：名無し

了解

175：名無し

了解

176：名無し

了解

177：名無し

了解

178：釣り師

：：おい。まあいいけども、おい：：お前らそれで良いのかよ：：

スレがにわかになぎわつき始めた頃。大討論会の始まろうとしているテレビ局の近くにある路地で、2人の男がじつと局の入り口を見張っていた。

『……………、……………?!』

『……………、……………』

日本語ではない言語でヒソヒソと話している男たち。戸惑いの表情を浮かべ腕時計をチラチラと確認し、携帯端末を確認している。

明らかに何か予定が狂って焦っているようにも見える、そんな2人の背後から不意に声がかけられる。

「うみちゃんならここには来ないよ。というか、生放送自体がこの局じゃあない」

『?!』

男たちがその声に反射的に振り返る。しかし背後に人影はない。

「遅いなあ。キョウさんだったら声かけられた時点で意識ないよお二人とも」

『?!』

『……………?!』

すると今度は前から声がかかる。正面へと向き直した男たちの顔面へと拳が突き刺さり、2人とも顔を押しさえながらよろめく。

「何言ってるかは分かんないけど、多分ドイツ語？つぼいな。アンズさんが得意だったつけ言語学は」

2人組は腰に下げたポーチから即座に消音器をつけた拳銃を取り出し構える。もちろんそんな凶器は日本では所持禁止である。目の前の相手が何者かは不明だが、どうやら此方のことも感じている。

そこまで思考し、冷静に照準を合わせる男たち。しかし、2人ができたのはそこまでだった。

『・・・!?！……』

『……！……！……！……』

急激に意識が薄れていき、銃を構えるどころか、体を立たせていることすら不可能になってゆく。ほぼ同時に倒れ込み薄れゆく意識の中、路地の先から溢れてくる光に照らされた謎の男の横に立つ、蔓のようなものをくねらせた謎の生物を見るのだった。

「……まずは2人確保。師匠のためにも、この調子で頑張ろうね、フツシ」

「ダツネダネ！」

## 閑話 ポケモン達の日常 天獄編

ーバンギラス伝ー

うみ家。それは、最近とうとう万を超える登録者を得て配信者として有名人と言える域に至りつつある少女、うみの住む一軒家である。そこには、種も性別もタイプも違う様々なポケモン達のがのほほんと過ごしていた。あるものはのんびりと縁側で眠り、またあるものは家から近い畑で老夫婦と一緒に畑で農作業をする。各々が家を壊したりうみを傷つけたりしない範囲で好きにやりたいように過ごしている。曰く、「魔境」・・・曰く、「世界で一番安全なシエルター」・・・。

そして、そんな平和な家に1人、いや1匹のポケモンがいた。バンギラス。凶悪なポケモンであり、山すら簡単に砕くと言われる大型のポケモンである。実際にバンギラス自身、サナギラスから進化する前のことではあるが散々暴れ回ったものである。

「ガアア！」

「ライ！」

しかしそんな暴君でも、勝てない存在がそこにいた。うみの手持ちポケモン達である。凶暴なポケモンであり、せいかく的にも戦いを好むバンギラスは、よくうみの手持ちポケモンへと勝負を挑む。そのほとんどは最もノリの良いライであり、たまに不機嫌な時のミロとも戦うこともあるが、その場合は大体水浸しで犬神家だ。

「チュウー！」

「グアア!?!」

そしてその日もいつものようにライへと勝負を挑み、いつものように痛烈な『かわらわり』によって吹き飛ばされる。いつもなら、それで勝負は終わりバンギラスは悔しそうに修行に向かう・・・。

「ガアアア!!」

「！」

しかし、その日は違った。突然の殺気を感じ即座に背後へ飛んだライの目の前を豪腕が通り過ぎる。

「~~~~ツツ!?!」

ライは回避したにも関わらず全身の毛をざわり、と逆立てた。先ほどの一撃で巻き込まれた背部の毛先が数本飛んでいく。

「……当たってたら、ヤバかった。」

これまで遊び半分に戦っていたライの目に明確な殺意が宿る。異様な雰囲気を感じ取った周囲のスピアーやゾロアが慌てて庭にある大きな木へと避難する。唯一、ミロは池から出ることなくけだるげに2匹を眺めている。ただし、その目はいつでも動けるよう臨戦体制の目だった。

ライと、そしてミロは感じ取った。バンギラスが……自分達に近づきつつあるということ。

バンギラスは、肌で感じるライの殺気にニヤリ、冷や汗を流しつつも嗤う。

「……やつと本気を見せたな。」

対するライも目のハイライトが消えてゆく。

「……とうとう本気にさせたな？」

言葉はない。しかし、両者ともにお互いの思考が何となく理解できた。

「……チュウ！」

「！グッ」

先手はライだった。バンギラスの目の前から消えたかのごとき速さで稲妻のようなジグザグ走法で距離をつめる。反応はしたが反撃はできない、そう瞬時に判断したバンギラスが腕を交差させ防御しようとする。ギリギリで間に合った腕に突き刺さるライの飛び蹴り。倍以上の大きさがあるはずのバンギラスが一瞬宙に浮き、数歩分後ろへと押し戻される。

「ガアアア!!」

「ライツ……チュウウウ!!」

押し戻された分を無理やり踏み込みながら、バンギラスがその鋭い爪をきらめかせ「きりさく」で襲いかかる。ライはそれに対して電撃での応戦を選択、「10まんボルト」がバンギラスを包み込む。

「ライ!？」

「グルルルッ」

しかしバンギラスは、電撃を『あえて避けなかった』。全身を包み込む激痛と電気による痺れを感じつつ、バンギラスがライの体を鷲掴みにする。

「~~~~ツッ!!ガアアア!!!」

気合の咆哮をあげながら、ライを空中へとぶん投げる。

『お前さんを見てると少し思うんじゃないかな?』

空中で姿勢を制御しようとするライを睨むバンギラスは、そんな言葉を思い出していた。

『いや、ライちゃんと戦つとるようじゃが、お前さんの持ち味は多分硬さとばわあじやろ?』

静かに、一度目を瞑り腰を落とすバンギラス。それを見たライは、ニシヤア、と牙をむき電撃を纏う。

『それなのに、何をすばしっこいライちゃん相手ですびいど勝負を挑むんじや』

記憶の中の年取った人間が、好戦的に笑う姿が見える。

ライは全身に電撃を纏ったまま、高速で落下していく。

「ボルテツカー」ー——

『競うな、持ち味を生かせッ』

「シヤツツ!!」

ライが射程距離に入った、コンマ1秒ほどの間。その間に、バンギラスは動いた。

「チュ!!?」

一瞬ライには、なにが起きたのか理解できなかった。次に状況を正確に把握したのは、腹部の激痛を感じてからだった。

「ガアツツ」

「チュウ!」

追撃の爪を躲し距離を取るライ。痛みを堪えながら、ライは嫌そうに顔をしかめた。

「……攻撃の時だけ、『自分より早くなった』。

言わずもがな、ライは速度においてバンギラスを優に超える。人から見ればまさに雷のよう、と言える速さを誇る。しかし先ほどの接触の瞬間、先に攻撃を当てたのはバンギラスだった。

ライはなぜバンギラスがその速さで動けたのか、その仕組みは分からなかった。故に、次にとつた行動は完全に本能的なものであった。

「ライー！」

「！」

勝っているスピードでの攪乱。さらには「かげぶんしん」を織り混ぜることで、攻撃のタイミングや速度の緩急を読ませない。

「……」

それに対して、バンギラスもまた目を瞑り、構える。うみから聞いたとんでも修行（漫画由来）や、ガンテツへ師事して会得した格闘技の動き。それら全てが、バンギラスを新たなステージへと押し上げた。

「……ガァー！」

「ラツ!?」

「……人間は、音を置き去りにできる。なら、自分にだってできる……！」

「……明らかに間違つた人間への認識とともに。」

「……………」

「おーい、みんなー。お昼だよー。あれ？バンギラス、お昼にいるなんて珍しいね……つてなんじゃこりゃああ!?!」

昼食の時間、食事を運んできたうみは庭の様子を見て愕然とした。なぎ倒された木々、えぐれた足跡付きのクレーター、水が半分ほど減った池。スピアーの巣では、心なしかげつそりしたスピアーが大きな穴を塞いでいる。ミロはイラついた様子で目を回したゾロアを横に置き縁側にとぐるを巻いている。

「ライーバンギラスー……これお前らかよ!?!」

うみの怒った声に、惨状と化した庭で寝転がっていた2匹がふらふらと立ち上がる。ライは見てすぐわかるほどにバテバテであり、所々

に引つ掻き傷ができています。一方のバンギラスはもつと酷く、顔はズタボロ、からだは何故か焦げてブスブスと煙が立ち上っている。

「とつくんするのは良いけどさあ、庭こんなにめちゃくちゃにするんじゃないねーよ！他のポケモンにも迷惑でしようが！」

((((もつと言つて下さい!!)))

ポケモン達の意味が、統一された瞬間である。

結果だけを言うなら、勝者はライであった。持ち味である耐久性と一撃の火力、加えてガンテツとの修行で得た超反応を駆使してこれまでが嘘のような善戦をしたバンギラスであったが、そこまでであった。

単純な、スタミナ。持久力の差が出たのである。完全に疲れてはいませんがそれでもまだ動けそうなライに対し、バンギラスは既にHP関係なしに戦闘不能なくらい疲れていた。

「とにかく、しばらくはお前ら庭でバトんのは禁止な！あと庭、直しとけよ？」

正座して説教を受けていた2匹に、メツとお叱りの言葉が降り注ぐ。そうして数分ほどの説教の後、2匹はボロボロの体に鞭打ち、オレンの実を齧りながら庭の穴を埋め立てるのであった。

庭の修復が完了した後。バトル禁止令をくらったバンギラスは、うみ家に隣接した森の中にやってきていた。ここはバンギラスのお気に入り、修行場であり、サンドバツク用の大岩や、休憩用の水場がある。

早速大岩の前でいつものように祈り、突くという作業を始める。祈り、構え、突く。この工程をひたすら繰り返すバンギラス。

1時間ほど大岩の砕ける音だけが響く。すると突然、背後の水場が揺らぐ。

「・・・」

「グル・・・」

水面が音もなく盛り上がり、黒い不定形の影がいくつもの腕を伸ば

す。バンギラスは修行に集中しており気づかなかった。

「・・・ガッ!？」

そして腕は一瞬でバンギラスを絡めとると、水場の中へと引きずり込もうとする。咄嗟に影を掴みひっぺがそうとするバンギラスだが、影は触れたところだけがはらり、とモヤになってしまい掴めなくなる。

「ガアアアア!」

ゾプン、バンギラスは抵抗虚しく水の中へと引き摺り込まれた。後には静かになった修行場と、小さな水面の波紋だけが残っていた。

「おーい、お夕飯だよー。・・・あれ?バンギラスは?」

その日の夕方。うみが晩ご飯を持って庭に出ると、そこにはバンギラスの姿だけがなかった。他のポケモンたちに聞いてみるも、全員居場所は知らないよう首を横に振る。

「おつかしいな・・・怒りすぎたのかな」

少し罪悪感を感じ、探してみようかなとサンダルを履き庭から繋がっている森へと向かう。

「バンギラス?おーい」

「ラーイ」

「・・・フーウ」

横をトコトコとついてくるライ(「私は庭を壊しました」看板付き)とミロも一緒に呼びかけるが、返事も姿も無い。

「何かあったのかな・・・ライ、スピアーにも応援をたの・・・うわっ!？」

頭数があれば見つかるか、とスピアーへの伝言を頼もうとすたその時だった。後ろを振り返ったうみは、水辺の近くで大の字に倒れるバンギラスを見つけた。

「バンギラス!?!大丈夫か?」

「・・・グウ」

声をかけると辛うじて返事が返ってくる。昼ごろにもボロボロだったが、今の姿はさらに酷かった。所々というより、もはや全身火



だるまにでもなったのではないかと思うくらい焦げた体に、顔面がアニメや漫画かと言いたくなるくらいに腫れている。返事はしたが意識があるのか判断に困るレベルだった。

「ライ、きのみ、それと残ってるくすり系のやつありったけ取ってきて！ミロは運ぶの手伝ってくれ！」

「ライ！」

「フウ」

うみの指示を聞き、ライは最後に残った貴重なくすりを持つてくるために即座に家へと走りミロがバンギラスを尻尾で出来るだけ傷に触らないよう持ち上げる。ゆっくりと運んでもらう途中何度もバンギラスに声をかけたが、彼は結局なぜポロボロだったのかは話すことはなかった。

バンギラスをいそいそと運んでいくうみ達の背後で、水面が風もないのに波立っているのに気づく者はいなかった。

「・・・」

「・・・」

バンギラスは、状況を必死に理解しようとしていた。

いつもの修練場で突きを繰り返し返していたはず。それなのに今いるのは、嫌に生き物の気配がない世界だった。

「・・・」

「・・・グッ」

そして何故かこちらをじつと見つめ佇む、気配が読めない化け物を見上げてバンギラスは嫌な汗を流していた。相手はポケモンだろうということは流石にわかったが、逆に言えばそれ以外は全くの未知であった。

「・・・」

「グルルルル・・・！」

正体は不明、力量も・・・おそらく自分より上だが・・・不明。自分を引き摺り込んだ元凶であろうその化け物と正対したバンギラス

は、必死に思考する。

・・・というか、ぶつちやけ殴るか殴らないかの判断で迷っていた。

「グリアアア！」

「・・・」

「ゴツ・・・!?!」

一向に動く気配のない化け物に、先制攻撃を仕掛ける。全力で放ったライにすら届いた拳。しかしその結果は、全く見えないカウンターという形でバンギラスを吹き飛ばした。

「グツ、ガアアア!!」

痛みと怒りで視界が真っ白になる中、バンギラスは吼えた。目の前のデカブツがなんであれ、『やれる』なら『殺る』・・・!

「シヤッツ!!」

「・・・GU」

化け物に対して無謀にも思える特攻を仕掛けるバンギラス。対する化け物は、その背中から生えている黒い触手のような羽を動かして攻撃する。

上下左右から遅いくるそれをバンギラスは最小限の動きで、文字通り必死の回避をしつつ接近する。やがて、彼我の距離がバンギラスの射程範囲へと入る。

「ガア！」

「GUGYUGAAA!」

拳を構えたバンギラスに対して、化け物が雄叫びを上げる。その勢いは凄まじく、一瞬動きが止まったバンギラスに強烈な尻尾の一撃が与えられ、またしても吹き飛ばされる。それだけではなく、今度は遠距離からのブレスが降り注ぎ、近づかせないように周囲を破壊する。

「グルアアア!!」

「GARUGYUAーー!!」

バンギラスはブレスの直撃を受けないよう必死に走り回り、化け物はそれを追いかけてつつブレスで攻め立てる。この一方にだけ地獄のような鬼ごっこは、うみがバンギラスを探して修練場に来るまで続いたのだった。

そして翌日。

「おーい、朝ごはん・・・バンギラス?」

朝食を持つてくれたうみとライ(『私はつまみ食いをしました』看板付き)だったが、またしてもバンギラスが見当たらない。

「またか・・・全く、昨日から一体どうしたっていうんだあいつ・・・」  
怒り2割、心配8割といった表情のうみがブツブツ言いながら縁側に座る。その横で数週間ぶりに起きて食事をとっていたジラーチは、そんなうみを見上げ、なんとなく魔がさしてバンギラスの今いる位置を不思議な力を使い遠視する。

「・・・!?!」

「うお、大丈夫か?ちよつと入れすぎたねー、大丈夫だぞー?」

突如、驚いて食べていた食事を吹き出すジラーチ。うみがよしよし、とティッシュで顔を拭いている間、遠視したバンギラスと一緒にいるポケモンに絶句していた。

(・・・アイエエエ!?ナンデ!?)

その後も、バンギラスは時折消えては全身ズタボロで帰ってくる日々が続いたのだった。

「おーい、うみちゃんや。これをあの緑のクマみたいなのに与えてやってくれんか?」

「・・・何これ?」

「砂糖水じゃ。果糖を使っておる。酷使した体にこれであいつも復活するじやろうて」

「どういふこと・・・?」

――――  
My Partner

初めて出会ったのは、生まれた時。タマゴから光とともにピチュー

として出現した時だった。

「きみの なまえは ライ だ！」

ライ。自分の名前。「ピチュー」ではない、自分だけの、自分を示す名前。目の前のヒトは、自分をそう名付けたのだ。

「たんぱんこぞうの ○○に 勝った！」

「エリートトレーナーの ○○に 勝った！」

「ジムリーダーの ○○に 勝った！」

「チャンピオンの ○○に 勝った！」

「タワータイクーンの ○○に 勝った！」

様々な冒険をした。ヒトは：●●はあまり多くを喋りはしなかったが、それでも与えられるポロックや、ポフィン、連れ歩き、そしてバトル。自身への愛情のようなものはあらゆる面から感じていた。

嬉しかった。自分を大切に思ってくれるパートナーの存在に、自分と同じように育てられ、強くなっていく仲間に出会えた。そのことをライは何よりも嬉しく思った。

ある日、ボールに入ったライは機械へと納められた。

なぜ？どうして？と、最初は慌てた。まさかもう出れないのか、そう思い悲しくなった。だが、ふと自身のいる場所、ボックスの名前を見た。

『あいぼうせんよう』

言葉の意味はわからなかった。だが、そこに次々と入れられていく仲間のメンツを見て、その後すぐに取り出されたことから考えて、ライはそこが、パートナーの大切な存在を入れるところだと感じ取った。

また、じんわりと嬉しくなった。その後も何度かそこへ入れられることはあったが、もう悲しくはなくなった。直ぐにまた会える。あのヒトは、●●は自分の・・・

10日経った。ライ達はボックスに入ったきり、10日間出される

ことはなかった。最初の3日は、●●の心配をしていた。次の3日で忘れたのかと怒った。また3日、今度は不安がこみ上げてきた。そして今。

(・・・忘れたの？もういらないの？・・・ボクは、ここだよ・・・?)

もう、月日は数えられないほどすぎていった。●●は、まだ帰ってこない。ライの目から、そっと涙が落ちた。

会いたい。置いていかれたとか、捨てられたとか、そんなことを思うよりもただ、今は会いたいー。

その思いを胸に、ライは眠り続けた。

P O O O O O N

「!?」

突然の音に、ライは驚く。暫くぶりの感覚に思わず目を瞑り耳を動かして何が起きたのかを知ろうとする。

「・・・？」

目が見えてきて、周囲を見渡すと首を傾げる。

(・・・いつもの場所じゃない?)

いつもボックスに入る時に見えていた場所・・・ポケモンセンターでは無いことに気づく。畳や掛け軸、そして外に続く縁側。日本家屋という、見たことのないその空間に戸惑うライ。

「あ・・・ライチュウ？」

「・・・！」

突然、後ろから声がする。恐る恐るふりかえったそこには、布団の上でポカンと口を開けた少女がいた。

「・・・」

「・・・」

2人の間に静寂が訪れる。一体目の前の少女は何者か、ここは何処だ、とライは警戒しつつどう動くべきか迷っていた。

「おいで」

すると少女は、そっと正座してこちらに向き直り、手を伸ばしてきた。

(・・・逃げようかな)

少女は自分を呼ぶが、今はそれよりもせつかく自由になったのだ、

●●を探そう。そう思い立ち、逃げ出そうとしたところでふと、少女から懐かしいという感情を受ける。

(あれ、どこかで・・・これって、●・・・!?!?)

次の瞬間、少女に全く似てもいないはずの男の子が重なる。引きつってはいるが微笑みながら手を伸ばす少女に、ライは飛びかかった。

「ライアイ！」

「ふぐっ!？」

「ライライライライ！」

「ちよ、まって、くすぐったいよ！ あははははは！」

そうして、1人の少女と1匹のポケモンの、止まった時間が動き出したのだった。

## 第41話

「うーん、こんだけか？」

「まあ妥当じゃないか？リアルに忙しいやつだっているだろうしな」

「そーだよなあ、むしろよく今日呼びかけて即集まれたって感じだよな」

都内某所、人通りの少ない住宅地近くにある公園に、全く統一感のない人々が集まっていた。

総勢10数名、成人男性からまだ垢抜けてない学生まで、さまざまの人が思い思いに近くの相手と談笑している。仕事も、学校も違うそんな彼らの共通点。それは、うみの配信をほぼ初期から見してきた古参の視聴者であるという点であった。

「・・・お？」

「なんだ、こんなに集まってくれたのか。正直意外だな」

「これがうみちゃんの人徳ってやつですかねえ」

そんな話し声と共に現れたのは、ラフな着こなしなツンツン頭の青年と、眼鏡をかけ、大きめのコートを着て口元を立てた襟で隠すようにした真面目風な男性だった。

見た目だけを見れば接点などなさそうな2人だが、集まった人々は2人を見ておお、と声を上げる。

「うっわ、チャラ男ニキだ。農家ニキもいるし！やっぱマジの話だったんだな」

「やはりチャラ男ニキはチャラいな」

「うん、存在がチャラいわ」

「チャライ」「チャライ」

「だああ！お前から好き勝手言いやがって！チャラクねえよ！俺だって真面目になる時はなるんだよ！」

青年ーチャラ男ニキことシゲルがうみの視聴者達に一齐にイジられ、うがー！と喚く。それを笑いながら、視聴者達は初めて出会った彼に群がり肩を組んだりつついたりして尚もイジリ倒している。

「あーもう収集つかねー！ちよつとなんとかしてくださいよ野路さん！？」

「ははは・・・まあ慕われてるんだし良いんじゃないかな？」

「そんなー！ともみくちやにされるシゲルを見ている農家ニキこと野路（やる）。しばらくの間楽しんでいる様子だったが、流石に時間が惜しいということで、パンパンと手を叩いて注目を集める。」

「はいはい、チャラ男くんをいじるのはまた後にしよう。「やめてほし  
いんスケド!?」それより、まずは急な話でここに集まってくれたことに礼を言いたい。ありがとう」

「かたいなあ農家ニキく、俺らはうみちちゃんがピンチとか聞いて黙ってられないだけの重度の追っかけだぜ？」

「そうそう、あとはポケモンに関してのファン、かな？」

「俺、うみちちゃんとこの蜂のポケモン好きなんだよなあ」

「スピーカーだろ？良いよなあアレ」

何を今更、と笑う人々に野路は「来てよかった」と心で呟く。一瞬笑みを浮かべ、すぐに真剣な顔へと戻るとポケットから紙を取り出す。

「さて、説明といこう。釣り師ニキは皆さんには緊急ってこともあつて簡潔にうみちちゃんが狙われている、なんて言ったと思う。ただ正確には、狙われてる『可能性がある』」

「・・・」

真剣な空気を感じ取りシゲルと絡んでいた面々も話に集中する。シゲル自身も、野路の言葉に悔しそうに下唇を噛む。

「情報元については伏せる。警部ニキ・・・」

警察が調べて得た情報だ、信憑性が高い。それに、うみちちゃん曰く最近家の周囲で見られてる気配をよく感じているらしい」

時折紙を見ながらそこまで話すと、集まった視聴者の中から声が上がる。

「・・・それって、俺らでどうにかできるの？それこそ警察案件だと思  
うんだけど」

その言葉に、ほかの面々も頷いたり、考え込んだり、近くの者と話



し合ったりしている。しかし野路は首を横に振った。

「ダメなんだ。警察だけだと、今回の相手は止まらない」

「それって……」

「相手はポケモンを使ってるんだよ。だから俺らみたいなポケモン持ちが動かねーとヤバいつてこと」

野路の言葉に続けるように告げられたシゲルの言葉に、周囲が息を呑む。第一回からうみの配信を視聴してきた古参勢だ、ポケモンの怖さはうみの言葉と映像、両方で耳が痛くなるほど知らされてきた。それでも彼らがそこそこに危機感を持つ程度で考えてきたのは、『まだポケモンを戦えるレベルで扱えるのはうみ達だけ』、という認識があったからだ。

これまでポケモンの騒動は多数発生したが、それだつてうみ達が動いたおかげで奇跡的に人的被害は軽微に抑えられてきた。そしてそのポケモンへの圧倒的知識を持つうみという存在。それらによって持っていた安心感が一気に吹き飛ぶ。

「え、でもポケモンって……どーやって?」

「確か動画でもうみちゃんが、散々警告してたじゃん?正しい知識を持ってないと、ポケモンを……その、手懐けるつてのは難しいんじゃない……?」

「本当ならね。……これはマスコミとかにも流れてないから知らなくて当然なんだけど、こっちの関係者が襲撃されたんだ。相手は銃を使つてたらしいよ」

「うえ!?じ、銃……!?!」

現代日本においてまずお目にかかることのない、近代兵器の名前に戸惑いの声上がる。というか、日本で銃って……という嫌な予感が若干冷静な面々の頭の中に流れる。

そんな彼らに、野路はさらなる爆弾を投下する。

「それだけじゃない。そいつらは、うみちゃんから預かっていたポケモンの資料を根こそぎ奪っていったんだ。もう相手はポケモンについて素人じゃないと見て良い」

「……おいおいおい」

そこまで聞いて、全員が状況を理解し、頭を抱えた。銃を使うくらいなりふり構わない得体の知れない相手が、さらにそれ以上に危険でもあるポケモンすら使う可能性があるというのだ。本格的に自分たちは要らないんじゃないかね？というか俺ら危険じゃないかね？という感情に空気が支配される。

「さて、ここまで脅しといてなんだけど、今なら辞めるって言うってくれない構わない。こちらとしては、ぶっちゃけ死ぬ覚悟まではしてないことは織り込み済みだしね」

「俺らは自分の意思でうみちゃんの為に、ポケモンとの生活のために動いてるんすよ。それに巻き込まれてるのは流石にしないんでないじよーぶっす」

野路とシゲルの言葉に、流石に命の危機があると言う事で尻込みをしているのか、沈黙が流れる。すると、その中から一人、パーカーのフードを被ったこの場で唯一の女性——身長的におそらく学生だろう——が手を挙げた。

「アタシ、やりますよ」

「お、おい嬢ちゃん……」

近くにいた男が心配げに話しかける。すると少女はおもむろにフードをとり顔をあげる。うみのような銀髪、というわけではなかったがそれでも日本ではあまり見られない白髪と、前髪を上にあげて留めた髪留めが特徴的な頭を煩わしそうに振り、気の強そうなつり目がちな目で野路を不適に睨む。

「アタシはやりますよ。うみちゃんを助ける。アタシはその為にここに来たんだから。仲間外れにされんのも、何にもしないで見てるだけってのもゴメンだわ」

その少女の覚悟を決めているかのような言葉に、声をかけた男は怯んだように押し黙る。そしてそんな様子を見て、本気だと理解した野路は静かに話しかける。

「……名前は？」

「ホミカ」

「やる気はある……ね。でも流石に、女の子をそう簡単にこんな時間

から動かすつてのは」

「舐めないでよね」

野路の申し訳なきげな発言を遮り、少女・・・ホミカはポケットに入れていた手を抜く。そのまま手に持ったモノ・・・モンスターボールを空に放り、そこから光と共にポケモンが現れる。

「なあ!？」

「ダツネダネー!」

「ポケモン!？」

「・・・ふうん」

突然現れたポケモンに、周囲にいた視聴者達が思わず後退りして離れる。シゲルも声を上げてマジマジと現れたポケモンを見ており、野路も流石に想定外のことにも目を見張る。一方のポケモンはというと、好奇の視線を受けてむず痒そうにしていた。

現れたそのポケモンは、背中に花のタネ、いや蕾のように見えるものを背負っていた。見た目はどう形容すれば良いのかわからないが、緑色の体色やその特徴的な背中から、いわゆる「くさタイプ」のポケモンだろうということはわかった。

「アタシはポケモンを持つてる。そこそこだけど、武術的なものもかじってる。これだけでも、十分使い道あると思うけど?」

そう言つて不敵に笑うホミカに、野路は少し見定めるように視線を向け、やがてため息を吐いた。

「はあ・・・まあ望外の戦力ゲツト、かな。ありがとう、ぜひ力を貸して欲しい」

「ほえー、見たことねーなあ。農家ニキ、分かります?」

「俺もさすがにワタルくん程には資料を読み込めてないんだけど・・・フシギダネ、かな?」

「正解。さっすが」

「これでもポケモンの情報に関するテストだとうみちゃんから太鼓判もらってるんだよ?さすがにわかるよ・・・チャラ男くんはもらってなかったけど」

「ちよつ、それは内緒つて言つたじゃないですか!？」

「へえ〜。まあなんにせよ、よろしくお願いしますね、先輩？」

ポケモン・・・フシギダネを抱き上げながら、ホミカがいたずらに成功した子どものようにニシシと笑う。野路はそんな彼女に複雑な表情を浮かべつつほかの視聴者へと目を向ける。

「この中に、他にもポケモンを持つているっていう人は？」

「い、一応俺も持つてるぞ！アレだ、最近スレにも報告した！」

「・・・あ！イワーク手に入れた登山家ニキカ！」

「ポケモン持ちが4人もいりやあ、なんとかなるんじゃないやね？」

「俺は残るぞ！いや、もとよりやる気だったけども」

「俺も！」「俺もだ！」

「他にポケモン持ちは・・・居ないっぽいね。まあ2人もいたのなら上々。そもそも犯人の相手したりとかの危ない事させようとは思ってなかったけどね。さて、それじゃあこれからやることを話そうか」

ポケモン持ちが集まり、全員の士気とやる気が最高潮に達したのを感じつつ、作戦を説明しながら野路は遠くテレビ局にて死にそうになっているであろうワタルを心配していた。

（・・・ワタルくん、「ままままま、まかせてくださあ！」とか言っただけど、大丈夫かなあ？）

「・・・潜入完了、つと」

（あの時の自分をぶん殴って止めたい・・・）

野路やシゲルが人手を集めているころ。生放送している番組の出演者という、かつての自分なら決して考えられない舞台にいるワタルは、精神が衰弱死しかけていた。

「現在確認される果物等の農作物の収穫量が〜」

「漁業関係者からの懸念の声が〜」

「畜産への打撃と保障が〜」

「生態系への影響が〜」

「自衛隊と警察は一体何を〜」・・・

（無理無理無理無理!! 分かるわけねえよこんな話!? 誰か翻訳を、翻訳家を呼んでくれ! この言語は日本語じゃねえ!）

内心では狂気乱舞（誤字にあらず）しているワタルだが、カメラや共演者の目がある為必死にポーカーフェイスを取り繕っていた。何事も第一印象は大切なのである。

一方の番組そのものは、穏健派と過激派の・・・と言ってもほとんど過激派の暴論だが・・・討論が白熱していた。

「・・・以上のような統計上の結果があるわけで、現在確認されているあの謎の生命体をどうにかせねば、日本の産業は崩壊するでしょう! それに、あの生物に関する研究も早急に行うべきです! 政府はなぜか、各機関へ手出しせぬよう通達していますかね」

そう言つて、過激派の筆頭である大学教授がチラリとこちらの側で座っている大和大臣を睨む。その言葉に続くように「そうだそうだ」「早期解決のために」などと言いながら取り巻きのような過激派連中が頷いている。

・・・いや、そもそも危険だからって政府がちゃんと関係各所に注意喚起をしてる筈だけどな、資料と一緒に。大方オーキドさん、いや博士が自分たちの知らないうちに手柄を得ることが嫌なんだろう。表情からも随分とオーキド博士を敵視しているのが伝わる。

「なるほど。では、これに対してどう思います? 大木戸教授」

自身の言葉に酔いしれるかのように喋り続けていた過激派の教授の言葉に頷き、番組の司会が今度はオーキド博士（うみちゃんから言われて以降、本人がノリノリでそう呼ぶようにと言った）へと話を振る。それを聞いて、オーキド博士がふむ、と顎を一つ撫でてマイクに手を伸ばす。過激派の連中は、一通り喋って落ち着いたのか、余裕綽々でふんぞりかえっている。

「どうも、大木戸です。さて、何から話せば良いやら。少し気になったのでまずは質問と行きたいのですが宜しいですか?」

「ふん、手短かにして貰いたいですな。こんな結論の分かりきった討論に時間をかけたくはないのでね」

どこまでも上から目線な発言に穏健派の空木教授達がムツとする。当然俺としてもいい気分はしない。しかしそんな不遜な態度にも動じず、オーキド博士はニツコリ笑い会釈する。

「ありがとうございます。では質問させて貰います。．．．あなた方の言葉を借りれば謎の生命体．．．私はある人物から聞いた通称で呼んでおりますが、それに対して対処すると言っております。具体的に何か策がおりなのですかな?」

すると、嘲笑を浮かべて相手の教授がマイクを手を取った。

「何か、も何も。警察や自衛隊を投入すべきでしょう。ニュースにもなっていたが、あの生命体達はそれなりには危険であるようです。一部は研究のためにも捕獲が望ましいでしょうが、必要であればもちろん駆除が妥当でしょう」

その言葉に、今度はオーキド博士と俺の顔に笑みが浮かぶ。俺の方は嘲笑だったが、オーキド博士のそれは困ったような笑みだった。

「なるほど。しかしそれは残念ながら不可能であると言わざるを得ないですな」

「．．．なに?」

「．．．ふむ、それではここで少し私は下がりました、その手の専門家へ説明を頼むとしましょうか」

そう言つてオーキド博士はマイクをそつと．．．俺かよ!?

(無理無理無理!博士待つて、MATE!?!俺はあくまでいるだけつて話だからここにいるんですが!?)

(いいからいいから。もしもの時はサポートしたげるから、頑張るんじゃないぞ?)

(なら、警視総監殿に、あの人もうみちゃんの資料は読み込んでたはず．．．)

(．．．)

(け、警視総監オオオ!?!ナンデ!?顔背けて「スマナイ」とかボソツと言わないでください!?!笑ってますよね?その震える肩は絶対笑ってますよね!?)

そうしてまさかのタイミングで回ってきた出番に、一層緊張が高ま

る。相手方の方はと言うと、興味なさげ・・・いや、あれは大学の教授がバカの学生を見る目だな。ム力つくがこれはしようがない、今の俺は「何故か不相応な場所にいる男」程度の知名度しかないんだから。(・・・あーもう、ドウニデモナーレ!!)

「えー、どうも。警視庁の方から来ました、(一応)特別顧問のワタルです。今日ここにきたのは、皆さんが特殊生物と呼ぶ存在について説明するためです」

俺の言葉に、穏健派・過激派両陣営からざわめきが起こる。俺の出演は急な話だったんだ、話す内容についても全部うみちゃんのカンペ頼り。一旦落ち着くまで待ち、静かになつたところで説明に入るー

「待て！何を言っている、あの生物に関しては全ての詳細が不明という話ではなかったのか!?!」

(・・・はあ?)

そこで不意に、過激派の席に座る人物の1人、見るからに自己顕示欲の強そうなガリガリの禿げたどっかの教授が喚き散らす。その表情は必死そのもので、何故かこちらをバカにした様子ではなく驚愕の色が大きかった。

「えー、それについても説明いたします。どうかご静聴頂ければと・・・」

「ええいうるさい!どうなんだ!何故貴様がポケモンについて知っているのだ!」

「ですからそれは・・・なんですって?」

今、この人・・・いや、ジジイはなんと言った?

「・・・チツ、余計なことを」

おい、過激派筆頭のジジイ。お前の方もなんで、なんでそんな舌打ちをする?

「・・・何故ポケモンという名称を知っているのですか?今から発表するつもりだった、まだ公になっていない情報を何故知っているのですか?」

俺の言葉に、禿のジジイの顔が真っ青になる。周囲の他の研究者の

様子をサツと眺めるが、そんな顔をする人間は他にはいない。皆「ポケモンか・・・」「何が語源の名称だ？」など言っており、初めて知ったように見える。

「えっと、それは・・・その・・・」

「何故です？どうやって知ったのでしょうか？・・・答えられないんですか？」

「う・・・うううう！！」

怒りの感情の昂りで、声が段々と低くなっていくのを自分で感じる。相手の方は、頭を掻きむしりながら忙しなく視線を泳がせていた。

「え、え、何やらおかしなことになっておりますが、ところで、ポケモンっていうんですね！なんとも言えないですがいい呼び方だと思いますよワタクシ！」

場の空気が妙なことになっているのを感じ取り、司会が慌てて話題の転換に走る。明らかに引き攣った笑みではあったが、それでもカメラへ向ける顔は常に笑い続けているのは、芸人としての意地だった。

「落ち着いて下さい◇◇さん。まだあなたの順番ではないでしょう。これから説明してくれるというのです、楽しみにお聞きしましょう」

「！そ、そうですね！私の番ではありませんでした、失礼しました」「まて！まだそいつへの質問がまだだ！逃げるんじゃねえ！」

筆頭のジジイの言葉にハツとして、そそくさと座ろうとする禿に思わず叫ぶ。だが相手は取り合おうとせず、座ったまま無視を決め込んでしまった。そこで完全に切れて、マイクを机に叩きつけるように置き卓を乗り越えようとする。

「上等だ、そつちがその気なら・・・！」

「ま、待てワタルくん！生放送だぞ、この場でのソレは不味い！」「でもー！」

小声で叫びつつ引き止めようとしたオーキド博士に肩を掴まれる。言っていることはわかる、生放送で全国区へここの映像は流れている。こんな場で相手をぶん殴ってしまったえば、この後の俺の意見も発言



も「生放送でキレ散らかした変な奴」として無意味なものになる可能性がある。

「どうしました？ぜひ教えて下さい、あなたの知るといふ情報を」  
(このクソジジイども!!)

受け取り方によつては煽りにも聞こえるように過激派筆頭のジジイが行ってくる。失言したのだろう禿もソレに便乗してニヤニヤと嫌な笑みを浮かべている。もう我慢ならん、と俺がオーキド博士の静止を振り切つて飛び出そうとした時だった。

「アホかー!!」

「えっ？ブベラッ!!」

ニヤついていた禿ジジイの顔面に拳がめり込み、椅子から転げ落ちる・・・どころか吹っ飛んでカメラへ激突した。

「「「「・・・え?」」」」

俺やオーキド博士、相手の筆頭ジジイにカメラマン。穏健派過激派その他含む全ての人間が呆気に取られる中、失言禿クソジジイを吹き飛ばしたグーパンチを振り抜いた体勢のままだった人物が、そのピンク色のおさげを振り乱し、普段のテレビでは快活そうな笑みを浮かべているその顔に般若のような形相を浮かべて仁王立ちした。

「オンドリヤこのクソジジイ!あんたあんだけ騒いどつて弁明なしとか視聴者舐めるんも大概にせんかい!釣り師ニキが聞いとんやろが!ウチも含めてスレ民ぜんついん敵に回したで今ア!うみちゃんの配信を見習わんかい!というか一日100回以上は見とけアホンダラア!」

白いホットパンツと黒い靴下という本人の快活さと明るさを表したようなその服装は、彼女のアイドルとしての正装。縦横無尽にステージを駆け回り、時折おバカっぽい発言もするお茶の間のアイドル。しかして今のその姿は、怒りのあまりタガの外れた発言と合わさり触れれば炸裂するダイナマイトのよう。そんな彼女のキャッチコピーは、「ダイナマイト プリティ ギャル」

「ウチの前でアンタに嘘も誤魔化しも許さんで!さあ、さっさと質問に答えるんや!」

そう言っつてふんぞり返る少女・・・『アカネ』の姿に、ワタルは望外の味方を見つけて喜ぶのだった。

「・・・ん？スレ？ニキ？」

一方スタジオ内で見ていたマネージャーは、担当アイドルのその醜態に頭をかかえて隅っこで蹲るのだった。

## 第42話

日も暮れ、夜道を走る車の中で、キョウは思案していた。テレビ局へと向かっていった際に乗せていた他の者はおらず、その表情は後悔するような、切羽詰まっているかのような渋面だった。

(さて、ここからどうしたものか・・・)

.....

時はうみとともに生放送に出演するためテレビ局へと向かっていったところまでさかのぼる。うみ一人でテレビに出演というのも難しく、付き添いとして警察からはキョウとタケシが、一般人のポケモントレーナー代表としてワタルがついていた。

『うみちゃん、緊張してないか?』

『いやいやワタルくん、うみちゃんは曲がりなりにも配信者だよ?今更大勢に見られるくらい・・・』

『だ、だだ大丈夫ですますつ、拙者はぜんじえんよゆうだじえ!』

『かけらも余裕がねえ!』

心配して声をかけたワタルに対して、笑い飛ばしていたタケシ。しかし当のうみ本人はというと、それはもうガツチガチだった。顔は引きつった笑い顔で固まり、携帯のバイブのように小刻みに震えていた。助手席に座っているタケシからは感じられなかったが、隣のワタルには尻から振動が伝わるほどの震えで二人ともうみを見てぎよつとする。

『い、いえね?俺はそもそもコミュ障極めてる人間でして、配信は見た人しか来ないしポケモンについての相談所的感覺でやれたんで問題ないんですけどテレビという大型メディアともなると緊張感が段違いたた胃が痛い』

『ええ・・・』

まさかのガチビビりに戸惑うワタルとタケシ。運転しつつバックミラーをちらりと見て、キョウが苦笑する。

『まあ、今のうちに緊張できるだけしといたほうがいいんじゃないか? 案外本番だと緊張が収まるかもしれないぞ』

『うう……』

ppppp… ppppp…

するとその時、タケシのスマホから着信音が鳴り響く。うんうん唸っているうみに苦笑しつつ出たタケシだが、話していくうちにその表情は真剣なものへと変わる。

『それは本当ですか？…そうですか。ありがとうございます。では』  
電話を切ったタケシは、剣呑な表情で車内の全員へと内容を話した。

『……このことです。後はもう犯人を捕まえないと詳しいことは分からないですね』

『……なんとも胸糞の悪い話だな』

話し終えるとともにキョウウがそう吐き捨てる。ワタルも、表情は無そのものだが固く握りしめられたこぶしがその内情を表している。

『……へえ、そーですかあ』

『……？うみちゃん？』

タケシの話を静かに聞いていたうみの様子にワタルは違和感を覚えた。俯き、目元は見えないが口元は薄い笑みを浮かべている。この日のためにとアンズにまた着せ替え人形にされながら仕立てたワンピースの膝部分に置かれた手はいつの間にかぎゅつと握りしめられ、服をしわくちやにしていた。

なにより、先ほどまであった震えも、困ったような唸り声も鳴りを潜めている。

『……うみちゃん。ついたぞ』

そんな重苦しい空気の中、四人を乗せた車は目的のテレビ局へと到着した。キョウウが静かにうみへと促すが、うみはすぐには下りず、ワタルの方へと紙を差し出した。

『うみちゃん？』

『ごめんなさい、ワタルさん。俺行かなきゃ。テレビの方、おまかせで  
きませんか？』

『はあ？！』

『ちよつ、うみちゃん!』

まさかのお願いにワタルだけでなくタケシもおどろきのこえをあげる。はいカンペ、と押し付けられた紙を握りしめ呆然とするワタルをよそに、うみはドアを開けて車を降りる。

それまで驚きつつも静観していたキョウがさすがに様子が変だと運転席を慌てて降りる。

『うみちゃん!?何をやる気だ!これから重要な生放送だぞ!』

キョウの声に立ち止まったうみは、先ほどまでの気弱な姿はなんだったのかといたくなる可憐な笑みを浮かべて、くるり。と振り返る。ちよつどその後ろに月が浮かんでおり、振り返った際の動きでふわりとはだけた銀の髪を照らす。まるで月明かりをその髪に蓄え彼女自身が光り輝いているかのようにも見えた。

幻想的なその姿に一瞬呆けたキョウだったが、すぐに現実へと戻りうみへと語りかける。

『うみちゃん。さっきの話は、確かに許せるものじゃないんだとは俺にもわかる。けど、この生放送だって同じくらい重要で、それに君でなくてはできないということも分かっているはずだ。違うかい?』

キョウの言葉に、笑みを少し悲しげなものへと変えうみは首を横に振る。そして、海のように深い青のワンピースの腰回りにあつらえた、モンスターボールの付いたベルトからボールを一つ取り外す。

『それは違いますよ、キョウさん。確かに生放送は大事だ。それに、今回の件は農家ニキたちに任せると言ったのも俺です』

そこまで言うてから、うみは手にしたボールを宙に放る。ボールから光が出て、空へとポケモンを形作ってゆく。紫のボディは、夜の更けてきた空へと完全に溶け込んでおり、その不気味な眼の光と、四つに分かれた翼のはためきだけが耳に響く。ポケモンはうみの肩のあたりに器用にホバリングしながら、嬉しそうにほおずりする。それにうみも嬉し気に手を差し伸べながら頬ずりし返すことで応える。

『おーい、うみちゃん忘れ物!』

『え、待ってください、俺マジでこれやるんですか!』

キョウに遅れて車からタケシ達二人が出てきた。ワタルはいまだ

よく状況が呑み込めておらず、自分が変わるの？え？まじで？と慌てふためいており、タケシは車の中に残されていたうみのカバンを放る。うみはそれを片手で受け取ると、浮かべていた笑みを引っ込め、無表情になる。

『ありがとうございますタケシさん。ワタルさん、こんなことになってごめんなさい。でも、俺だって何も無いのあなたを選んだんじゃないんです。あなたのポケモンへの情熱と愛情、それを認めているからこそなんです。どうか、お願いします・・・』

『うみちゃん・・・』

真剣な表情で頭を深く下げうみに、何も言えなくなるワタル。手に持ったカンペへと視線を下ろし、数秒思考する。

『・・・ああ、わかった。俺が行くよ』

『！ありがとうございます！』

苦笑いを浮かべながらそう言うワタルに、花の咲いたような笑顔でうみが礼を言う。ペコペコと頭を下げるうみへ、渋い表情のままキョウが声をかけた。

『うみちゃん。何をする気なのか、あえて聞きはしない。けど、無茶だけはしないでくれよ・・・』

すると、うみは一瞬キョトンとした顔をして、すぐにまた笑う。

『大丈夫ですよ、キョウさん。だってー』

ー少し、ふざけた奴らに分からせてくるだけですから

そう言って笑ううみの目には、明らかな敵意と、ほんのわずかに覗く怒りの炎が燃えているようにキョウの目には映ったのだった。

・・・

「・・・急ぐか」

キョウは無意識に呟きつつ、目的地へとアクセルを踏み込む。手遅れになる前に、と・・・

「・・・で？何か言い訳は？」

「ないですはい」

(・・・なんで俺ここに入れられたの?)

一方その頃、生放送が行われていたテレビ局。その楽屋では、冷や汗を流しつつしょんぼりと正座するアカネと、般若の形相で仁王立ちするアカネのマネージャー。そして、何故か普通に同じ楽屋にぶちこまれたワタルがいた。さすがに出演者同士の暴力沙汰を放映するわけにもいかず、CMに入った時点で番組を中断している。そのため、不本意ではあるが自分の、正確にはうみに割り当てられる予定だった楽屋へと向かっていたところを、スタッフに「あ、こちらです」と言っ

て連れていかれた結果がいまの光景であった。

「いい!?アカネの型破りなどは強みだと私も思うわ、けどねえ!今回のあれはどう考えてもあかんでしょお!何を出演者、それも学者なんて面倒な奴らをぶん殴ってんのかあ!これまで積み上げてきたファンや局、芸能人との関係をパアにするつもりか!」

「・・・面目次第もないわ。つい、カッとなつてな?こう、あるやん?コバっちゃんもそーいう時」

「ありません!!!」

正座し、反省したようにしょぼんとしているが、たまにごめんね?と拝むように手を合わせるアカネ。それに対しコバっちゃんと呼ばれるマネージャーはいまだに収まらない怒りでウガー!と叫びつつ頭を掻きむしる。ワタルは、マネージャーさんの今日スタジオで初めて出会った時の知的なメガネのお姉さんという印象が吹き飛び、その不憫さも相まってなんとも言えない表情で座って見ているしかない。

「ひーん、釣り師ニキ助けてーな。もうウチお説教嫌やわあ」

「こら、逃げない!だいたいあなた最近どつかの動画配信見るようになってから仕事の集中力がね・・・」

「ひー、オタスケ」

「いや俺に言われても・・・」

そろそろ足の方も限界のようで、さつきから上半身だけで謎の踊りをしてるアカネ。だがマネージャーのお説教は文字通りお経を説くかのように止まらない。助けを求められたワタルとしても、どう助けるべきかも分からず苦笑いを返すしかないのだった。

「というか、なんで俺はあんたの楽屋に押し込まれてるんだ...?」

「ああ、それはウチがここに呼ぶよう頼んどいたねん」

ワタルのつぶやきを拾い、そう言うアカネに対し、マネージャーとワタルは同時に変な顔でにらむ。

「なんで無関係な人を楽屋に入れるのよ。．．．まさかこの人に一目ぼれとか!?!」

「．．．え!?ち、ちつがああう!もーコバっちゃん、そんな恥ずかしい勘違いせんといてー!」

「そーやってごまかそうとするとところがなお怪しいわ。というかあんた、また勝手に局の人に迷惑かけたんかい!」

「うっわ藪蛇や!釣り師ニキ助けて〜!」

「もうなんでもいいからここから出してくれ．．．」

ワタルの心からのつぶやきは、アカネとマネージャーの喧嘩の声にかさなり、むなしく消えていくのだった。

夜の町中を、男が二人走ってゆく。二人ともジャケットにジーンズと、格好だけを見れば、その辺にいる一般人といえる。しかしその形相は必死で、何かから追われているかのようだった。道行く人々もかき分けながら走る二人をたまにぶつかると、最初は怪訝そうに見送るも、やがて視界から消えるとともに何事もなかったように歩いてゆく。

しばらく走り、路地裏に入ったところで肩で息をしながら休憩する二人組。少しして息が整うと、今度は人目を気にしながら路地の奥へと歩いていく。

『どうなってるんだ!目標はテレビ局にいるんじゃないのか!?!』

歩きながら、男の片方が音量を押さえつつ叫ぶ。その言葉は日本語ではなかったが、それでも誰かに聞かれてないかと周囲をせわしなく見渡している。するともう一人の方が眉をひそめながら答える。

『どこかで漏れた、それしかないだろう。すでに連絡のつかない奴らもいる。今はとにかく、体勢を立て直すしかないだろう。早く合流するぞ』

『くそっ!例の日本人は見当たらないし、よくわからない奴らに俺た



ちの存在がばれる、最悪の日だ!』

二人が悪態をつきながら路地裏を進んでいく。やがて開けた場所まで来ると、すでに仲間が何人が到着していた。ひとまず合流できたことにホツとし、声をかけようとしたところで背後から声がする。

「はい、案内ご苦労さん」

『なっ!?!ぐあ!』

『しまっ・・・!』

とつさに振り向いた二人のうち、一人が背後からの強打で気絶させられ、もう一人が慌てて飛び退く。集まっていた仲間も敵の出現に警戒態勢に入る。そこにいるのは、どこかの国の人間だろう見るからに屈強な男が少なくとも6人。

そんな相手に対して、背後からやってきた不屈き物は二人だけであつた。

「さあて、おまわりさんだ。あんたら、任意同行でちよつとお話聞かせてもらおうか…?」

「いや、全然おまわりさんに聞こえないよ・・・?精々質の悪いヤクザじゃん」

警察の見せていい表情ではない男・・・タケシと、それに対してドン引きしつつも周囲への警戒を怠らない少女・・・ホミカ。二人を見て、というよりかはホミカを見てそつと腰のあたりへ手を伸ばす男たち。相手はまだ二人、それも一人は子ども。見られはしたがまだどうとでもできる・・・そう思った瞬間だつた。

「いまだ!オニスズメ、『つつく』!」

「いけ、コラツタ!『かみつく』!」

『ぎやあ!』

別の道の方からやってきていた何かに腕を噛まれ、男が一人悲鳴を上げる。それに驚いた男たちが思わず固まった瞬間、上空から大きなスズメのような何かが襲い掛かる。そして、指示を出しつつ配信の視聴者が二人、どこからともなく現れた。そこで男たちは気づき、舌打ちをする。

『しまった!』

『囲まれている!』

動揺しつつも、噛まれた男を助けようと拳銃らしきものを抜き放つ男たち。そこへ、最初にやってきたタケシとホミカが素早くボールを投げ指示を出す。

「ゴルバット! 『ちようおんぱ』だ!」

「フツシ! 『ねむりごな』!」

「ゴルア!」

「ダネ!」

『うつ、しま・・・』

『くそっ! 粉を吸うな、眠るぞ!』

『み、耳が・・・』

ゴルバットとフシギダネによる睡眠と超音波の妨害に、銃を撃つどころではなくなる男たち。その隙について、今度は別の道からうみの配信の視聴者がボールをもって現れる。その男は、以前山でポケモンをゲットしたと報告をあげた視聴者だった。

「いけ、イワーク!」

「ゴアー!」

『で、でかい!』

『出口が!』

『銃が効かないぞ!』

現れたのは、いわへびポケモンのイワーク。その巨体は路地裏でつぶにはあまりにも大きく、男たちは逃げ道をふさがれるようにしてイワークのとぐろの中へと閉じ込められる。

「よーし、うまくいったな。にしてもいい反応だなホミカちゃんも」

「タケシさん・・・だっけ? まあ流石警察の人、って感じですね」

「あれ、俺なんか舐められてる・・・?」

そんな話をしつつ、イワークに囲まれた男たちにフツシがねむりごなを振りまき、ゴルバットのちようおんぱで抵抗する力を削ぐ。身動きが取れないようにしたうえで安全に全員を捕縛するのだった。手伝いをしていた視聴者たちが、イワーク、コラッタ、そしてスズメのようなポケモンのオニスズメとそれぞれの手持ちを呼び戻しながら

作戦通りに事が進んだことで嬉しそうにガッツポーズをとる。

「いよっしーうまくいったな！」

「俺たちでもポケモンを使えばとりあえずは役に立てるな！」

嬉しそうに話している視聴者たち。そこへタケシが微笑みながら近づく。

「ご協力、感謝します。・・・とまあ言ったが、さすがにこれ以上は危険だから、こいつらのことは任せて農家ニキとチャラ男ニキのどこへ応援に行ってくれ」

「りよーかい。警察ニキの方も気をつけてな」

タケシに一声かけ、おふぎけで敬礼をし連絡を取りつつ小走りで走っていく視聴者たちを見送りながら、タケシはふうとため息をついた。

「・・・で、ホミカちゃんは何でまだいんの？」

「この人たち、普通に日本語以外でしゃべってたけど、おにーさん何語かわかる？」

「うん、まず今俺には君のそのスルー力が分かんない」

縛られ、眠らされている男たちをツンツンとつついている呑気な少女がっくりと肩を落とすタケシ。そんなことは気にせずよっこいしょ、と立ち上がったホミカはスマホを取り出し顔をしかめる。

「・・・おにーさん、マズいことになったよ。ポケモン持ちが出たって」

「・・・そりやマジでやばいな。農家ニキのどこ？」

「っぽいよ。いまチャラ男ニキが向かってるって。ほら」

ホミカが見せてきたスマホを覗きタケシは舌打ちをする。そこには、農家ニキを囲む形で男たちがポケモンを繰り出している画像が映っていた。画像の手前側では険しい表情の農家ニキとコロがおり、それに相対するようにドーベルマンのような黒い体に特徴的な大きい角を持ったポケモンが3匹立ちはだかっていた。農家ニキの方にもポケモンを持っている人員はいたはずだったが、画像で見える範囲では既に他はやられているようだった。

「・・・まずいな」

「ですね」

二人して難しい顔になりながらスマホをにらむ。タケシは面倒そうな雰囲気を感じず、ホミカは画像を見ながらまあ、と独り言をつぶやいていた。

「なんにせよポケモンの相性的にも頭数的にもまずいですよねこれ。登山家ニキのイワークに行ってもらった方がいいんじゃないですか」  
ホミカの提案に、ふむとタケシは考え事をしつつ縛った男たちを見る。そのまま数秒考えこんでいたタケシは、ホミカの怪訝な表情に気づきポンと手を打った。

「よし、ホミカちゃんだったっけ？君に農家ニキを援護に行ってもらいたい」

「え？いいけど、おにーさんは？」

「おれはほら、こいつらを同僚に届けたいといけないな。万が一を考えると農家ニキがやられるのは痛い。ホミカちゃんのポケモンなら相手のあのポケモン・・・ヘルガー達にも搦め手で援護くらいできるだろう？」

背後の男たちを指さしながらそう言ったタケシになるほど、と頷くホミカ。奇襲に備えだしっぱなしにしていたフツシをボールに戻すのにやりと笑って駆け出す。

「おにーさんも気を付けてね」

「あいよ。君も、補導とかで警察の方につかまるとかは勘弁な」

「それはアタシも勘弁」

街中へと駆けていくホミカを見送ったタケシ。ひらひらと振っていた手をおろすと、チツと舌打ちをした。その表情は、先ほどまでの飄々としたものではなく完全にキレていた。

「おい！おきろ、おい！」

『う、うう・・・』

眠っている男の一人、先ほどの状況で指示を出していた指揮官的位置と思われるその男の胸ぐらをつかみ、たたき起こす。

「さあ、しゃべれ・・・！なんで『』の人間がうみちゃんのことを狙うんだ！」

『う、うわあああ！』

『に、逃げろ！』

農家ニキとタケシたちが男たちを捕縛しているころ。別の場所、人気もない夜の港にある建物の中で、悲鳴が上がっていた。そこには銃を持った男たちはおらず、代わりにポケモンを持ったもののみが集められていた。

男たちは基本的に銃を持つ者、ポケモンを持つ者をなるべく均等にチーム分けしていた。だが、このチームだけは、最高戦力としてポケモン持ちのみで固められていたのだ。

『嘘だろ!? おい、動けよこの役立たず!』

しかし、そんなある意味で精鋭に位置づけられていた男たちは今、たった一人の少女に追い込まれていた。

用意していた連携も、切り札としていた大型ポケモンでさえ、ほぼ一撃でつぶされた。そして今、最後の一人のポケモンがやられ、きぜつしてしまったのだ。

総勢10名。それだけの人数がいながら、ポケモンはすべて黄色いネズミのようなポケモンと巨大な蛇のような、それでいて魚のような優美なポケモンにやられ、念のために持っていた銃は夜の闇の中から飛んでくる蝙蝠のようなポケモンによって叩き落され、壊される。逃げようにも背を見せるとこれまた蝙蝠のようなポケモンにやられ気絶させられる。中には宇宙人のようなポケモンに連れ去られ、目を回して落ちてきた者もいた。最初の3人が逃亡を図り倒れたあたりで、ようやく男たちは動いたものから順に狙われていることに気づいた。

「マ、マてーマツテくだサイ!」

打つ手がなくなり、いつ襲われるかわからないという恐怖の中、一人が拙いながらも日本語で声を上げる。男たちはその男がしゃべりだすと同時に息をのみ、静かに相手の反応を待つ。

「ワタシたち、コウさん! オトナしくする! 話をきいてクレ!」

すると、雲に隠れていた月が顔を出し、淡い光が建物の屋根にある天窓から降り注ぐ。そして、男たちの目の前にいた少女を照らし出した。

「うーん、ヘルガーにベトベターにポチエナ、あとは大きいのだとリングマカ。どれも個体ごとのレベルはそこまで高くないね。技についても知識は得たけど使いこなすための習熟は行わなかったんだね。レベルもタイプもばらばらだし、連携も最悪だ。トレーナーっていうよりも、ただその辺で捕まえて無理やり使ってるって感じかな。さつきから技を出すのに指示が『やれ』とか『追い込め』とか雑にもほどがあるし」

「?・・・ナ、なにを」

言っている、と言おうとしたところで男は息をのんだ。頬から電撃を放っているネズミのような黄色いポケモン。羽ばたいて飛んでいるにもかかわらずなぜか一切羽音を立てない蝙蝠のようなポケモン。見た目は美しく、だがその目つきが尋常じゃないレベルで悪いポケモン。そして、空に浮かぶ宇宙人のようなポケモンは、その無機質な眼を光らせ、腕の触手をくねらせていた。

それら異形の存在に囲まれ、守られるようにしながら、少女は淡々と自分なりの考察を続けていた。男たちの様子など一切気にしていない。興味がない。

「・・・ああ、この子たちですか?うちの大事な家族です。すごいでしょう?」

ふと思い出したかのようにそういつて自慢げに微笑む少女。だが男たちには、その笑みがまるで地獄の化け物の威嚇のように見えていた。

「そのポケモンたちとモンスターボールの出どころもそうですけど、そのポケモンたちの首につけてる悪趣味な拘束具に関しても気に入らないですね。まあとりあえず・・・」

『ば、化け物か・・・!?!』

恐怖に竦む男たちを見ながら、少女・・・うみはいつそ優しげに見えるくらいに笑みを浮かべていた。

「お前らは、別にもういらないかな」

## 第43話

「状況は？」

暗い部屋の中、低い男の声が響く。その言葉に一度深呼吸をし、報告のために自身の口を必死に動かす。

「・・・日本国内へ潜入させた部隊はそのすべてが音信不通。第一目標である『資料』については奪取に成功、現在ここへと移送中です。ただ、第二目標の『少女』に関しては失敗、回収できなかつたとのこと。最後の通信記録はここに」

そういつて差し出したレコーダーを受け取るや否や目の前の人物はスイッチを入れる。数秒のノイズ音のち、定期報告であげられていた通信が再生される。

『・・・こちら第一部隊！目標を発見、「交戦」に入りました！繰り返す、交戦に入りました！対話での連行は不可能と判断。これより実力行使による回収に移ります・・・！アウト』

短い言葉ののち、レコーダーが停止し再度静寂が訪れる。そんな中、不意に笑い声が響いた。

「フ、フッフ、おやおや、君たちの部隊はこんなお使いすらできないのか？私が命じたのは、『二つのモノ』と研究者一人の回収だぞ？君たちならば、と期待を込めて送り出したのに、全く残念だよ」

その言葉に、言いようのない怒りがこみ上げる。常日頃精神を落ち着け、冷静に思考することこそが重要だと部下へ言い続けているが、普段であれば抑え込み謝罪を述べていたであろう私の口からは怒りのままに目の前の暫定的な上司への非難が吐露された。

「我々の本分は、国と国民を守る盾となり、また時には仇なすものを刈り取る矛となること。このような非合法かつ人道的でない作戦のための訓練などしておりませんでした。・・・博士の指示も、少々曖昧だったのでは？」

「非合法手段が出来ない部隊など、どこの国にもないだろう。軍とは、兵とはそういう『モノ』だ。そんなくだらないことを聞きたくて君を呼んだわけではないんだよ？私は事実のみを求めているんだ」



「・・・ならば、我々ではなくそちらの者を動かせばよろしかったのでは？得意でしょう、ああいう任務は」

そう言つて背後へと目を向ける。唸り声をあげる巨大なナニカが、こちらへと威嚇するように睨みつける。すると、その横に立っていた人影がそつとナニカの頭を撫で、落ち着かせる。

「フフ、いやあ、彼らはまだ『調整中』でね。それでも多少はやれるだろうが、あれを相手取るにはまだ早い。その点、君達ならあれだ、今回のような事態になつても問題ないじゃないか」

その男の言葉に頭の中へカツと血が昇るのを感じる。問題ない？部下たちを捨て駒にすることがか？握りしめた拳からわずかに血が滲む。そんな私の様子をにやけながら見ていた男は、最後に一つため息をこぼし立ち上がる。

「まあいい。今回はある程度成果は得たことだし、次は恐らくあちらから来るだろう。日本に残存する部隊は戻したまえ」

「・・・はっ」

男は座つていた椅子にかけていた白衣を羽織り、敬礼をした私の横を通り過ぎる。背後にいた人影とナニカはいつの間にか居なくなつていた。一人、部屋に残された私の胸中にはこんなことに加担せねばならないことへのやるせなさだけが残つたのだった。

「どいてくれ！俺だ！」

車を飛ばし、うみちゃんの持つていた携帯のGPSを辿つてついた港には、既に他の課の警察がやってきており、パトカーのランプの赤い光が彩っていた。

「ん？あ、お、お疲れ様です！」

「うみちゃ・・・例の協力者の少女は？」

「それでしたら、あちらに」

こつちを見た警察官の一人に手帳を見せ、うみちゃんの居場所を聞く。相手の警官は一瞬驚き、その後パトカーの横にしゃがんでいるうみちゃんを指さした。

「ありがとう。ところで、被害はどうなっている？」

「はい、外国籍の男が10名ほど。一部の者は気絶はしてませんが全員外傷は軽微です。……ただ、よほどショックなことがあったのか、短期記憶に障害が見られます」

「……そうか、ありがとう。もういいよ、仕事すまない」

答えてくれた警官へ礼を言い、うみちゃんへと近づく。うみは今日のために用意されたワンピースが汚れるのも構わず、地面へと直に体操座りした膝へと顔を埋めている。

横では6つのモンスターボールがベルトと一緒に乱雑に置かれ、唯一ライだけがボールから出てきており心配げにうみを見上げている。

「ライくん。うみちゃんと話がしたいんだ。いいかな?」

「……ライ……ライライ」

声をかけると、ライくんは俺を見上げ、次いでうみちゃんへと手へ上げ悲しげに何かを訴えかけている。

すると、うみちゃんはゆっくりと顔を上げこちらを見た。

「……きょうさん、ですかあ?」

「……?!?!」

あまりの驚きに返事が出なかった。

うみちゃんの顔には、表情がなかった。いや、実際にはうみちゃんは笑っていた。だがそれは、笑った顔の仮面を被っているような、と感じるほどに不気味なものだった。この表情を見て、本当に笑っていると思う者はいない、そんな笑顔だった。不自然に作られた笑顔と、目元にくつきりと残った涙の後。そして最も印象的なのは、暗く深い、どこまでも落ちていく深海のような風いだ瞳だ。そこにあるのは笑顔とは真逆の暗い感情のみだった。

「ああ、すみません。かってにでていってしまつて。でももうだいいじょうぶです」

「……うみちゃん」

「のうかにきたちもがんばってくれたみたいですし、はやくてれびきよくにもどりましょう」

「うみちゃん!」

思わずサツとしゃがみ、肩を掴んでいた。突然肩を掴まれたことに

驚き、うみちゃんはキョトンとしていた。しかしすぐにまた先程の工  
ガオに戻ってしまう。

「・・・だいじょうぶですよ？おれ、がんばれますよ？たしかにてれび  
にでるのなんてはいしんじょうにこわいですけど、きようはほら、  
まだまだげんきだ」

「うみちゃん・・・もういい、もういいんだ。よく・・・頑張った」

もう聞いていられず、そっと抱きしめる。顔は見えないが、一瞬跳  
ねた肩から力が抜けていく。

「キョウ・・・さん・・・？」

「何があつたかは今は聞かない。でも、頼む。君が何を背負っている  
にしろ、俺たちを・・・大人も頼ってくれ」

「・・・！」

息を呑む音が聞こえた。そして、今度は徐々に大きくなる嗚咽と、  
肩には湿った感触が伝わる。

「・・・キョウ、さん・・・俺、おれ、え・・・！」

「・・・大丈夫、今は誰も、俺も見えない。大丈夫だ。あんな緊張して  
るとか、怒っているような演技なんてしなくても良い」

今日、車に乗った時から気付いてはいた。明らかに無理をしている  
彼女の態度。恐らくは車に乗っていた男達は皆気づいていた、うみ  
ちゃんの余裕がなくなっていたことに。

だがそれでも、うみちゃんにしか出来ないからと、うみちゃんだか  
ら大丈夫だと、勝手に思い込んだ。何を考えていたのだ、この子はま  
だ子どもだというのに。そして、うみのその演技は、車の中がかかっ  
てきた電話の内容を聞いてからより顕著になっていた。

「おれ・・・！話を、聞いて・・・！車で聞いて真っ先に、『ころす』っ  
て、思っちゃったんです。しかも、ポケモンを・・・家族を使ってそ  
れをしようとしたんです・・・！ほんとうにころす直前になって、ラ  
イが声をかけてくれて、それではっとなって、その時には、周りに沢  
山のポケモンが転がってて、人も、ひどい感電とか、気絶とかしてる  
人もいて・・・！」

「うん、そうだな。びつくりしたんだよな」

泣きながら、吃りながら喋るうみちゃんの話の静かに、相槌を打ちながら聞く。恐れていた通り、彼女は他者を傷つけたことへの罪悪感と、ポケモンの家族をそれに加担させようとしたことへの罪悪感でいっぱいだった。

彼女が車を飛び出して行った時にもうわかっていた。ポケモンを使う相手にはポケモンを。毒をもって毒を制すことしか手立てがない現状、必ずこうしてうみちゃんが人と悪意を持って出会うことは想像がついていた。それでも、うみちゃんを行かせてしまった。やらせてしまったのは誰だ？・・・俺だ。

「づ、ううう・・・！あゝあゝあゝあゝ!!!」

(情けない・・・本当に情けない・・・！)

心の中に今回の相手と、何もしてやれない自分への怒りが生まれる。今の俺には何がある。警察なのに、対策課の中でも上位の地位にいるのに、ポケモンも持っているのに、こうしてうみちゃんを、少女を助けることすらできない。

(いる・・・力がある・・・！この国を、市民を。何よりも、この少女を護れるだけの、力が・・・！何をしても・・・！)

未だ泣きじやくるうみちゃんを抱きながら、心の中には黒い、それでいて確固たる決意が形成されていた。

—————

「・・・分かりました。はい、了解です」

「ど、どうだったっすか？」

電話を切った農家ニキへと、恐る恐るチャラ男ニキが話しかける。携帯をしまい、一度深呼吸をしてから振り返った農家ニキは、満面の笑みを浮かべていた。

「作戦終了！全部解決だそうです！皆さん、お疲れ様でした！」

「・・・おお〜！」

「！！っしやあ！！！！」

その言葉につられて、集まっていた面々が皆歓声をあげる。近くのものど肩を組む者、一人連れているポケモンを愛でながら喜びを分かち合う者。それぞれに喜びを体で表していた。

「じゃあ、今日は本当にありがとう。皆さんのおかげでどうにかかなりました」

「詳細は追ってスレか配信でお伝えするっす」

「いやー！大成功！よかったよかった！」

「にしてもやっぱポケモンすげーな！これで俺たちもポケモン持ちかー」

「わかっているとは思うが、悪いことすんなよ〜？」

「うっせ！んな事するかよ！」

「農家ニキ達も、お疲れ様だな！」

「お先ー！また今度会おう、お二人さん！」

お辞儀をした農家ニキとチャラ男ニキへと労いの言葉をかけつつ、視聴者はそれぞれに帰っていく。そうして農家ニキとチャラ男ニキだけが残った。人の気配がなくなった瞬間、慌てながらチャラ男ニキが農家ニキへと食ってかかる。

「……で！実際はどうなんすか！うみちゃん無事なんですか!？」

「……落ち着いて。うみちゃんは無事だよ。ただ……」

「……なんすか」

「ちよつとやりすぎたそうだ。今はキョウさんが見てくれてるが、心に傷を負ったかもしれない、らしい」

「……くっそが！」

それを聞いたチャラ男ニキは近くにあった箱を蹴り飛ばす。両者の間に静寂が流れる中、突如二人以外の声が響く。

「それで、どうなの？うみちゃんって今どうしてるんですか？」

「!？」

慌ててボールを取り出した二人の前に、物陰からヒョコツと白髪少女……ホミカが現れる。

「な、君なんで……！」

「いや、ちよつとお二人の様子が気になったので帰ったふりして隠れてました。それより心が傷ついたって聞こえましたけど」

「それを君にいう必要があるかい？」

「今回の助力は助かったけど、今はお前に話してる暇ねえんだよ」

「チャラ男ニキ、なんかキャラ変わってません・・・?というか、アタシとしてはうみちゃんに話があるっていうか・・・」

警戒心が強い二人を見ながら頬をかくホミカ。どうするかなー、と考えていたところへ背後から声がかかる。

「まー、その辺は今から聞くし良いんじゃない?」

「・・・タケシさん?」

「やつ、ども」

片手をヨツと上げながら、上着だけ脱いだスーツ姿のタケシが現れる。背後に立たれたホミカはびっくりしたく、と言いつつ横へと退け道を開ける。

「話を聞く・・・ですか?」

「うん、キョウさんからさつきメール来てた。ポケモン持ちの他の人には監視をつけるんだけど、あからさまに持つてる情報量が多そう。なこの娘さんは残ってもらえって」

そう言っただけで疲れたー、と伸びをするタケシ。少々不満げな様子。農家ニキ達をチラリと見つつ、ホミカはふーんと人差し指を顎に当てにやけながら声をかける。

「思ったより慎重なんだね。てつきりまずはうみちゃんが私に興味持つかと思ってたわ」

「あー、まああれだよ。あんな怪しい輩が日本に来るし、仲間も一人被害受けてて、さらにはうみちゃんの方も問題発生するしさあ」

「?」  
カチャリ、という音とともにホミカの額へと冷たい鉄が押しつけられる。ホミカはというと「あちゃー、これは接触の仕方ミスったかも」と心の中でつぶやいていた。

「こっちは既に余裕なくなるくらい怒り心頭なんだわ。ちよつと、お静かに、任意同行願おうか・・・?」

ホミカがそつと顔を上げると、そこには能面のような表情で普段は閉じているかの如く細められていた目を見開いたタケシが銃口を突きつけていた。

(いや、この人達凄く親バカじゃん・・・パパみたい)

流石に驚いたのか呆然とした農家ニキ達をよそに、ホミカは呑気にそう考えていたのだった。

一方、テレビ局。ドツタンバツタンしつともどうにか放送再開という事になってはいたが、過激派側がこれ以上の出演を辞退、その後の内容は全て大和大臣からのポケモンに関する法的扱いなどを放送するという事になった。

当然アカネは逃げんな、と再度修羅に入っていたが、放送直前にイイ笑顔のマネージャーが何かを耳打ちした瞬間真つ青になり再開時にはいつものぶりっ子キャラへと戻っていた。今更だが。

「つ、疲れた・・・」

放送の中でワタルの立ち位置は完全にポケモンの専門家、という位置であり、どうにか全ての質問に答えてはいたが最後の方にはもう喉がからっからになり何を言っているのか自分でもわからなかった。

番組終了後、即座に大和大臣と一緒に自販機コーナーへと走り、現在は缶を片手に重いため息をついているのだった。

「お疲れ様。うみちゃんが来ないと聞いた時には驚いたが、ワタルくん、だったかね。良い説明だったよ」

「あ、ど、どうも・・・でも俺はうみちゃんのカンペ通りに読んだだけなんで、別に・・・」

「ガブガブガブツ」

「フウツ！フウツ！」

「あだだだ！フカマルよせ！頭を齧るな!?!ハクリューも、尻尾で背中を叩くのはやめろ！」

突然ボールから勝手に出てきたフカマルに頭を甘噛みされ暴れるワタル。続いてハクリューも出てきて尻尾での強烈なしばきが背中へと叩き込まれる。その様子に驚いて目を見開いていた大和大臣だが、少し様子を見てメガネをクイと押し上げて微笑む。

「その子達は、君も頑張ったんだと言いたいんじゃないか？」

「え？・・・そうなのか？」

「ガブツ」

「フウ！」

コクコクと頷き、ふんすと鼻息を荒くするフカマルに心の底がじんわりと暖かくなるワタル。ありがとな、とフカマル達を撫でつつポールへと戻す。

「にしてもよくフカマルの考えていたことわかりましたね」

「いや、私も家ではペットを飼っていてね。なんとなく表情や仕草によつては色々わかるものだよ」

「いやー、にしても丸っこいサメやったなく！それに綺麗でかっこいい龍みたいなんも！釣り師ニキは顔だけやなくてポケモンもかっこいいんやな！」

「いや、ポケモンと顔は関係ないでしょう」

「いやいや！実際ここに釣り師ニキという事例がおるわけやし！まー今後も色々と関係深まつてくるやろし、よろしゅうな！」

「うーん、フカマルはかっこいいのは認めるが噛み癖がな」

「……」

「つて！誰だ君（あんた）!?!」

「おお、ツツコミ上手いな！ええ感じやでお二人さん！」

のんびりと缶を傾けていたが突如会話に混ざっていた女性に驚くワタル達。女性はというとそんな二人を見つづいたずらの成功した子どものような笑みでミルクセーキを飲んでいた。

「あー！さっきの面倒なアイドルの！」

「誰が面倒や！失礼やな釣り師ニキ！」

「君は……番組中にいた子だね。たしかマネージャーとADの人に連れて行かれてたと思っただが」

「ぼつくれた！ウチ悪くないもん！」

「子どもか！」

「あ、でも穏健派の人らには悪い思ってるで？ウチのせいで色々台無しやろし」

てへ、と舌を出しつつ謝ってくるアイドル……アカネを見つつ、二人はキヤラ濃いなあ……とため息をついていた。



「それで、今後はどうなるんです？」

「うん。それについてはこれから話そう」

それぞれに色々と思うところのある夜となった騒動の翌日、対策課が用意した会議室にはこれまでポケモンに関わってきた多くの人々が集まっていた。

イワークを捕獲し、前回の大捕物でも参加していた登山家の男や、過去に家でジグザグマを拾い飼い始めていた家族の代表である父親、生物学の権威である大木戸博士など、関係の大小に関わらず集められている。

そんな人々の中心にいるのは、髪をポニーテールに括り動きやすいズボンとシャツに青いジャケットを羽織ったうみだった。

余談だが前日のワンピース姿とは打って変わってスポーティな、それでいていつもの快活な姿とは違う憂いを帯びた表情で女の子らしく手鏡で髪をいじっていた様子に、最初に集まった際何人かの紳士が鼻血を噴いた。

「まず、前日の作戦に参加してくれた方には政府側の人間として改めて私の方から礼を言いたい。ありがとう・・・そして、今後についてだ」

政治家の井口と鈴木、そして大臣である大和が揃って頭を下げる。大物3人が頭を下げる姿に動揺が走るが、それはキョウが鎮め話が進む。

「まず、うみちゃんからの情報やこれまでの経緯を含めての国会での認識だが・・・ポケモンという存在については、一先ずは受け入れる、という方針になった」

「・・・一先ず、ですか？」

大和の説明にワタルから質問が出る。他の面々も、不安げに見守る中、大和大臣は頷く。

「ああ、ポケモンについては目に見えた被害も何度かあったから、国会においてもかなり難色を示されていた。だが最終的にどの件でも人への被害が『公には』確認されていないということと、対策課の対応

の速さが評価され、納得してもらえた。

ただ提出した資料を読もうともせず偽造だの夢でも見てるのかだの頭がおかしいだのと人の足を引っ張るバカどもが多いせいで全く・・・」

「あー、大和くん?」

「!・・・失礼」

井口の呼びかけにゴホン、と咳払いをし続ける大和大臣。なんだか国会の闇を見た政府の人間以外の人々は苦笑いをしていた。

「とにかく、危険であることや無闇に近づかないことなど、基本的なこととはまた番組やHPなどで少しずつ、でも手早く公開していくつもりだ。法改正や新法の成立、司法における事件への刑罰の設定も今急ピッチで進めている」

「それはわかつたんすけど、結局俺らが集められたのはどういう理由につきか?それだけなら俺らじゃなくても警察側の人たちだけで報告でも変わらないと思うんすけど・・・」

「これシゲル、もつと言葉遣いをちゃんとせんか」

「ええ、でも・・・ああはいわかった、分かりましたよじいちゃ・・・大木戸博士」

チャラ男ニキの発言に大和は眼鏡を押し上げニヤリと笑う。

「ああ、今から説明する。簡潔に言おう。今この場にいらつしやる人々全てを、国立の新組織へと勧誘したいんだ。対ポケモン事件・ポケモン案件の専門家として」

「えっ・・・!?!」

その発言に会議室が俄にざわつく。突然伝えられたまさかの内容に、驚きと戸惑いの声が大きくなる。

「それって、公務員ってこと、ですか?」

「ああ。将来的には警察・消防と同系列としての運用を経てそれらの組織との連携・合併も視野に入れている」

「つまり、ポケモンを使って問題を解決する警察官や消防士になるってことか!?!」

「うっそだろ、俺たちが・・・?」

ざわめく面々を大和は静かに見守る。彼としては、最悪断る人については半数までは諦める気であった。

「突然のことではみなさん混乱していらっしやると思います。普段は自分たちの仕事をしている人もいらっしやると思います。そこで、有事の際にはポケモン対策組織としての権限を持つ、資格を有する者としての在り方を求めたいのです」

「なるほど、普段はいつも通り生活していて、必要になった際行ける人がその権限でもって解決にあたると・・・」

「そうです。現在うみちゃんからの指導の下資格所得に必要な知識やポケモンを扱う技術に関する試験等の草案を製作中です。これの完成と共に、ポケモン対策組織「レンジャー」を設立することをここに報告します。・・・どうか、皆さんのお力をお借りしたい」

最後にそう締めて深々と頭を下げる大和大臣。静寂が周囲を包み込む中、真つ先にワタルの声が響いた。

「それ、年齢制限とかないですよ？俺はやりませよ」

「まあ下にうみちゃんとかいるわけだしなあ。だいぶ低いだろ。あ、俺も参加希望で」

「俺もだな。なんだか面白そうって好奇心でここまできたけど、こんな大事になつてるし、こうなつたらとことんまで付き合うしかないだろ！」

ワタルに続いて若い者から年配の者まで、次々に声を上げ参加を表明する。そんな人々に、大和はほつとため息をついた。ここで賛同を得られなければ、組織の設立は不可能に近くなる。それはつまり、ポケモンへの脅威を抑えるための力を日本が持てなくなるということだ。しかし今、こうして人とそのポケモン、両者が両者を守る為に立ち上がるようにしていた。

「皆さん、ありがと」

「ごめんなさい」

大和が礼を言おうとしたその瞬間、嫌に通る凜とした声があった。ざわめいていたはずの会議室がまた静寂に包まれ、声の主・・・これま

で不気味なほど喋らなかつたうみへと視線が集まる。

「うみさん・・・？」

「おい、うみちゃ」

「ごめんワタルくん。待ってやってくれ」

戸惑う大和へとうみは辛そうな笑顔を向ける。うみの後ろにいたワタルは何か嫌な予感がして手を伸ばすが、それをキョウが止める。

暫く迷うように俯き服を握りしめていたうみだったが、警察から受け取っていた権限を示す警察手帳を机に置く。そして泣きそうな顔で大和達を見渡した。

「ごめんなさい、俺は・・・」

俺はその組織に入る資格ありません」

今日一番の驚愕の声が、会議室に響き渡った。

—————

会議室で、うみが爆弾発言をしている頃。うみの家の2階にある私室で、誰も触っていないパソコンが起動した。パソコンはひとりでにファイルを開いていき、そしてポケモンの預かりシステムを起動する。カーソルが残った最後のボールへと向かい、そしてクリックされた。

piiiiiiiiiiiiiii BOM!!!

そして預かりシステムが誰もいない部屋へとボールを排出し、それはコロコロと床を転がる。

すると、またしてもひとりでにボールは開き、光と共にポケモンを解放した。

光はポケモンを形作り、やがて全てを出し切ったボールはカチリと音を立てて閉まり、仕事を終えたパソコンも完全にシステムを終了させてシャットダウンした。

出てきたポケモンは、妙な姿をしていた。ひび割れた石から、水色のモヤのような体と、紫の魂のような模様。凶悪な面相をしており、

ここまで一切の鳴き声を発さないその様子は不気味そのもの。

やがてそのポケモンはそつと部屋の扉を開け、ピヨンピヨンと飛び上がりながら家の中を見て回る。

「・・・」

と、リビングの扉が開き、寝不足解消のためリビングで暖房をつけながら寝ていたジラーチが寝ぼけつつ出てくる。

「・・・」 チラツ

「・・・」

「・・・」

「・・・?!?!?」

そのままポケモンと出会ったジラーチは、寝ぼけていたため最初は夢かを通り過ぎたが、次の瞬間完璧な二度見をして全力で泣きながら二階へと逃げるのだった。

「・・・おんみよくん」

後に残されたポケモンは、それを眺めどこか悲しそうな声をあげるのだった。

## 第二章 海外編

### 第44話

「はあ!? 欠航ですって!?! 全便!?!」

「は、はい・・・例の生き物についての問題が発生しまして、現在全ての旅客機の運航を取り止めております」

広い空港の中、ある女性が職員へと食ってかかる。その声は大きく、周囲の他の人々が振り返るほどだった。それに気づいた女性は慌てて口をつぐむ。尚も問いただそうとした女性だったが、一瞬会話が途切れたことをこれ幸いと職員は一礼してそそくさと去ってしまった。それを再度大きな声を出して呼び止めるわけにもいかず、ため息をつきつつ見送った女性は伸ばした手を所在なさげにポケットへと伸ばし、予定を書いたメモ帳を開くと再び、今度はさつきよりも大きいため息をついた。

「もう、久しぶりに叔父さんが私を頼って呼んでくれていたっていうのに・・・」

このままここにいてもしょうがないと、女性は金色の髪をなびかせ、フンスフンスと怒り気味に空港の外へと歩いていく。空港の出入り口を出ると、他の人々も欠航の影響か出入り口へとごった返しており、電話で知り合いや家族へ連絡をとっている者や近場の宿泊施設がないか案内図を見る者などで賑わっていた。そんな中女性は周囲を見渡し、すぐ近くへと停車していた車へと近づくと、窓を叩き中の人物へと声をかける。

「先生」

「どうだったかな?」

「ダメでした。全便欠航、次の便の目処もたってない。これじゃあ、日本に帰るのなんて無理ですよ」

「そうか・・・残念だったね、久方ぶりの帰国予定だったと言うのに」  
私不満ですと言う態度を隠しめせず口を尖らせる女性に、先生と呼ばれたその男性は苦笑する。女性が今日のこの日を楽しみにしてい

た事は知っていたためやむを得ない事だろう、とさえつつも理不尽に突っかかられたと思われる空港職員へと心の中で慰めの言葉を残す。「それで、これからはどうするのかね？前に借りていた部屋は引き払ってしまったのだろうか？」

「当面は研究室をお借りすることになりそうです。はあ、しばらくはシャワー生活かあ・・・やっぱりカトレアに頼んだほうがいいかも知れない・・・ん？」

女性がため息をつきつつカバンを車へと押し込んでいると、ふと顔を上げた先に気になるものを見つける。

「ん？どうしたのかね？」

「あー、ごめんなさい七竈（ナナカマド）博士、ちよつと待っていてくださいー！」

「あ、おい！シロナくん！」

突然走り出した女性・・・シロナは車に乗った博士へと声をかけ、颯爽と空港の出入り口へと再び戻って行ってしまった。後に残されたナナカマド博士は、髭を撫でつつ途方に暮れるのだった。

くシロナく

今日は日本へと帰国できるいい日になるはずだった。ここ数年ほど研究のゴタゴタで帰れていなかったが、その間で日本でもいろいろあったようだし、家族へと顔を見せる意味でも帰る時期だろうかと思案していた。それが叔父さんからの頼みということもあって早まり、一定のめどが立つところまで研究をまとめていざ帰ろうというところでもさかの飛行機の欠航。理由が理由なのでしょうがないとは分かっていたのだが、それでも私が乗る飛行機の便でちょうど欠航と言うことになってしまったのは流石に文句が言いたい。せっかく久しぶりに母さんの手料理が食べられると思ってたのに。

そんなこんなで、しばらくは少々窮屈な研究室暮らしということにゲンナリしながら博士の車へと乗ろうとした時であった。ふと顔を上げた先、空港の入り口に男が一人立っていた。それだけならば、特に気にする必要もない事だったのだが、問題はその男が熱心に声をか

けている相手だ。

「あのお、そういうのいいから早く行かせてください」

「まあまあ、ちよつと話すくらいいいだろう？俺なら一番安いタクシー抑えられてるからさ、ね、これくらいいいから」

「いや、だから俺はタクシーは・・・もおく困ったなあ」

(日本語・・・日本人なのかしら)

男から声をかけられていたのは、鼻眞目にみても可愛いと言える美少女だった。かろうじて聞こえる声から日本語を話していることと、顔立ちから日本人だと分かった。日本人にしては珍しい、というよりはふつうは見ないだろう透き通るように陽の光で煌めく銀髪が目を惹く。不釣り合いなくらい大きい旅行カバンを引きずるように手に持っており、早く移動したい様子だが男からの猛アプローチに若干引いているよう。

・・・というか、周囲に保護者が見当たらないけれどまさか一人なのかしら。

もしそうなら流石に見つけてしまった以上見過ごせない。このままだともしかしたらあの子、そのまま男になし崩しに連れて行かれるんじゃないかしら・・・？

「ん？どうしたのかね？」

「あー、ごめんなさい七竈(ナナカマド)博士、ちよつと待っててくださいー！」

「あ、おい！シロナくん！」

ナナカマド博士に一声かけてから、サツと愛用するコートを翻して少女へと近づく。男の方はすぐに此方に気付いて怪訝な表情を浮かべたが、少女は背後の私に気付かないようで男が黙ったことに首を傾げている。

「あー・・・お姉さん？」

「え？・・・わっ!？」

男に後ろを指さされ、少女が振り向く。私を確認して驚く様はちよつと大げさに思うがもとが可愛いからかあざとさは感じず、むしろ見た目以上に年齢が低いように感じ余計に愛らしい・・・と、そ



うじゃないわよね。

「ごめんなさいね、妹が迷子になっちゃったみたいで。見つけることができてよかったわ」

「え、えつと・・・？」

少女はきよとんとした顔でこちらを見上げていたが、少ししてはつとしたようにカバンを持ち直し私の手を握る。

「お姉ちゃん、どこ行ってたのー心配したんだよー」

・・・なるほど、この子演技とか嘘つくの苦手なタイプね。あまりにもあんまりな大根芝居をする少女だったが、私という保護者の出現で男は愛想笑いを浮かべてそそくさとどこかへ行ってしまっていた。それを見て少女は握っていた私の手を離すと、遠ざかっていく男を見ながら不敵に笑っていた。

「俺ひよつとして演技上手いのかな・・・」

・・・どうやら天然も入っているみたいねこの子。

くうみく

「あの、ありがとうございます。いらなくて言っていたのにしつこく困ってたもので」

そう言って頭をきつちり直角90°に下げる。空港へついて早々に妙な輩に絡まれて困っていたが、なにやらきれいな女の人に助けてもらった。幸先は悪かったが、まあこんな美人な人と知り合えたならチャラだろう。

「どういたしました。ところであなた、一応聞くんだけけど日本人よね？」

「え？ああ、そうですよ。これはその、色々ありまして・・・地毛ではあるんですよ？」

女の人は気さくに笑いながらごく自然に俺のカバンを持ってくれる。引きずっていたのを見てだろうが、優しい人だと分かる。どうや

ら俺が困っていたのを見かけて一芝居うつてくれたみたいだ。髪について言及されたので一房手に取って見せてみる。女の人は一瞬きよとんとした顔をしたがクスリと笑って髪を一撫でだけ撫でてから今度は頭へと手を伸ばしてきた。

「……」

「……」

「……というか、なんかすっごい撫でてくるんだけどこの人。いやまあそこまで嫌とは思わないんだが、周囲の視線が……」

「あ、あの？」

「っ、ご、ごめんね、ついかわい r . . . 撫でたくなっちゃって」

周囲の人がチラチラこちらを見ていたためさすがにこれ以上は、と声をかけると微笑みの世界から帰ってきた女の人はハツとして顔を赤らめつつ手をどかした。言い直したのにもっと訳が分からないことを言っていて本人の顔がさらに赤く染まっている。

「……なるほど、見た目とかは結構クールだけどこの人天然だな？」

「つと、自己紹介が遅れたわね。私の名前はシロナ。日本からこっちの大学に来て神話や歴史を研究してるの」

「あ、俺はうみっぺいいま……え？」

「え？シロナ……？マジで!？」

まさかの相手に、思わず自己紹介の途中で固まってしまった。女の人……シロナさんはそんな俺を見て首をかしげている。思考停止してしまっただが、とりあえず自己紹介は必要と気を取り直し、正面を向きできる限り愛想よく笑う。

「俺、じゃないや私はうみっぺです！」

「へえ、じゃあうみちゃんは一人で来たの？」

「はい。色々と事情があつて、探し物の手がかりがなくなつて」

立ち話をするには場所が悪く、シロナさんも知り合いを待たせてい

るといふことでそのまま車へと案内された俺は、そこでまたしても聞き覚えのある名前の人物と出会った。その名はナナカマド博士。なんでも、この国の結構大きい大学で教授をしており、シロナさんの恩師でもあるそうだ。後ついでに何度も賞を受賞しており研究者の中ではかなり有名ならしい。自慢げにシロナさんが教えてくれた。快く俺を乗せてくれたし、荷物をトランクへ入れる時も「こんな重いモノを淑女にもたせるのはいかな」とか言って変わってくれた。なんだこの紳士。現在俺は、ナナカマド博士の運転する車の後部座席でシロナさんと二人並んで座り、お話としゃれこんでいる。まあ、俺の目的とかは若干はぐらかしてるけど。

「それにしても、来るにしても保護者同伴でのほうが良かったのではないかな？君のような子ども一人では少々危ないと思うが」  
運転しながらもナナカマド博士はそう言っただけでちらりと俺を見る。その目つきは鋭く若干怖い感じがするが、言葉の端からこちらを心配している感じが伝わってくる。多分この人子どもにやさしいタイプの人だ。そんな博士の言葉に、俺は苦笑しながらつい何も考えず爆弾発言を落とす。

「あー、俺親とかいないんですよー。お母さんしか顔も知らないし」  
「・・・すまない」

「え・・・あ？いや別に大丈夫ですよ！別に気にしてないです！」  
だめだ、なんかシロナさんもナナカマド博士もすごい顔になって黙っちゃった。そうだよな、普通こんな快活に親いないとか言わないよな。やっちゃったなあ・・・。少しの間気まずい空気が流れ、元凶である俺はどうすることもできず遠い目で外を眺める。すると、黙り込んでいたシロナさんがそつと俺の頭へと手を置いてきた。

「・・・うみちゃん、宿のあてはある？」

「え、ああいや、今はまだ決めてはいないですけど・・・」  
そう言うと、シロナさんがそつと隣に座った俺を抱き上げ・・・つて、なんで膝の上ののせてるんですか・・・？唐突にシロナさんに捕獲されてしまった俺は状況が読めないままシロナさんの膝の上で撫で繰り返される。

「先生、研究室の件ですが、うみちゃんと一緒に泊めてもいいですか？」

「え？」

「そうだな。子どもを一人で宿に泊めるよりは・・・いや、二人が良ければのはなしだが二人とも私の家に泊まるかい？」

「え？」

いきなりの言葉に固まってしまう。ほぼ初対面のはずの俺を、博士は自分の家に泊めようというのか。いや、まあ俺は別に何か悪さする気はないけども。シロナさんの方は嬉しそうであり、思わずといった感じで博士の申し出に手を合わせて喜ぶ。

「いいんですか！ぜひ、ぜひお願いします！」

「ああ、もともと君が研究室に泊まると言っていた時から考えていたことだしね。その子という不安材料もあるならなおさらあんな場所には泊められないさ」

「ちよ、ちよっと」

「ありがとうございます！やったね、うみちゃん！」

「・・・はい、お世話になります」

・・・まあ、宿代浮いたからいいか・・・？そんな感じで、俺の宿が急遽決まったのだった。そして博士の家へと向かう中、俺はずっとシロナさんの膝の上へ置かれたままなでなでを享受し続けるのだった。

くキヨウく

「・・・」

「・・・どう思います？..これ」

日本。警察庁の元ポケモン対策課、現「レンジャー」本部には、緊迫した空気が漂っていた。職員は誰も声すら出さず黙々と仕事をしており、皆一様に冷や汗を流している。そんな状況になっている原因

は、本部の中でも役職的に高い位置、というかなんやかんやで完全に本部のまとめ役とされてしまったキョウにあった。

キョウの机の前にはタケシがうみの家から発見した置き手紙が差し出されており、タケシ自身の顔も能面のようになっておりなにやらまがまがしい雰囲気を漂わせている。

少し前、ようやく発足したポケモンの為の正式な組織。しかしそれにはうみは参加できない、そう言った。当然、そんな彼女にその場にいる人々は驚愕し、何故と問うた。だが彼女は決して答えることはなく、ただひたすら謝罪の言葉を述べるだけだった。そのため、その場ではキョウがうみを一度家へと帰し、その他の人々だけで組織の概要や参加についての話し合いが行われたのだが、やはり皆うみが参加しないということが気になるように会議はあまり進まなかった。その後、対策課の方へとうみが顔を出すことはあったがどこかぼーっとしており、レンジャーのメンバーと出会う度に申し訳なさにうつつむいていた。

キョウやタケシはそんな彼女のことを心配し、仕事の合間にうみの家へと訪れ近況を話し合ったりポケモンの修行と称してポケモンバトルをするなど積極的に関わっていた。そんな中今日、タケシがうみの家へと尋ねたところ、いるはずのうみはおらず、幾つかの小物や着替えがなくなっており、うみが特に好んで連れているポケモンたちがいなかった。まさかすでに次の魔の手が、と慌ててタケシがとびだそうとしたところへ、残っていたポケモンたちが渡してきたのがいま二人の目の前にある手紙である。

「・・・家には、これだけだったんだな？」

「はい。さつきうみちゃんの家を訪ねたら、バンギラスがすごい気まぐすそうに渡してきました」

二人のしている置き手紙はうみの字で丁寧な、しかし子どもらしい書き方で書かれていた。

『ちよつとイギリスに行つてきます。バンギラスたちはおじいちゃんに任せてます』

「・・・」

「・・・」

二人はなおも静かにそれをしばらく見続けた後、そつと顔を見合わせる。

「つまりあれだな？何者かに狙われていたこともありながら、俺達には事前に知らせず、護衛も無しに一人で海外旅行に行った・・・と？」  
「そうなりますね。あと、なんかたまたま俺予定とか聞いてきたこともあったんで多分結構前から計画してやっていますよこれ」

「ふむ。そうか」

「ええ、そうです」

そこで二人の会話が途切れ、ちょうどそのタイミングで部屋のドアが開く。

「キョウキーン、来ましたよー？」

そう言つて入ってきたのは、レンジャーの隊服を着たワタルだった。キョウは立ち上がると、そんなワタルのもとへと近づき無言で一枚の書類を手渡した。

「なんですこれ・・・休暇届？」

「ああ、イギリスに行つてもらいたい。有給扱いにするから」

「イギリス!?ナンデ!？」

驚愕するワタルへと書類を押し付けながら、キョウは地の底から響くような怒りのこもった声でつぶやいた。

「・・・バカ娘を引きずつてきてもらいたい。駄々こねるようなら一発げんこつ入れてきても構わん」

「帰ったら俺とキョウさんの分も説教と形だけだけど反省文あるつて伝えといてねー」

職員一同とワタルは、自業自得と思いつつも遠い異国の地にいるであろろうみへと心の中で合掌するのだった。

## 第45話

【ポケモン】 うみちゃんねる活動休止 【危機】

145：名無し

今北産業。これマ？

146：名無し

マ（絶望）ちなみに期間は不定期

147：名無し

おい、これから何を励みに生きていけばいいんだよ！

148：名無し

落ち着け、みんな意見は同じだが落ち着け。別にうみちゃんが怪我したとかじゃないんだろ？

149：名無し

それな。チャンネルの概要欄にも「諸事情につき活動を休止します。怪我とかではないです」って本人が書いてるし

150：名無し

それでも心配だわ、ここ最近の日本国内激動すぎるし

151：名無し

誰か最近起きた事件とか公式発表とかまとめれるやつおりゆ？正直起きたことが多すぎてまとめきれん

152：名無し

僭越ながらこの俺がまとめてやるとしよう。

ポケモン関連の法案が通って「環境特異生物保護及び保有権指定法」通称「ポケモン法」が一応施行される。

←

ポケモンに関しての問題専門の超法規的組織「ポケモンレンジャー」の設立（釣り師ニキを筆頭にスレ民や視聴者の多くが在籍してるの確定）

←

ポケモンの保有についての明確な罰則が司法に追加される。この段階だとまだ世論は肯定派と否定派は2：8くらいの流れ。

← 動物保護団体の過激派な馬鹿が、レンジャーの保護活動中に現れてデモを開始し、毒タイプのポケモンに不用意に近づいて刺激してバイオテロ問題になる。レンジャーによって鎮圧、団体は叩かれまくり世論が徐々にポケモンとの共存肯定派に傾き始める。

← 釣り師ニキ・農家ニキにより、ポケモンの生態とバトルについての説明が簡易にテレビ中継され、バトルの様子が若年層にウケる。というかバズる。(ここから一気にポケモンが許容され始める)

← だいぶ前にテレビで例のアイドルにぶん殴られた研究者、隠れてポケモンで非道といえる実験をしていたのがばれる。

← 研究者の管理体制の不備で実験のために入れていたケースからポケモンが脱走、レンジャーによって捕獲されるまでに市民に被害が出る。(研究者は逮捕ののち無期懲役、一気に排除派・否定派だった奴らの勢いが落ちる)

← 上記の事件を治めたレンジャーのチャラ男ニキが表彰され話題に。またしても若年層ってか20代を中心にレンジャー志望の人数が激増する。

← ポケモンを一般の人でも捕獲・所持できるようにするために法案の整備される。後ついに世界初のモンスターボールの量産体制が整ったことにより全世界へとポケモンの基礎的な情報が提供される。

← 世界へのボール輸出の話が出る。利益の面で見ても日本に入る分は半端ないという発表がされて一気に日本国内のポケモン支持層が増加。それに伴い釣り師ニキとかがスター俳優バりに注目される。

← うみちやんのチャンネル謎の活動休止、現在の安否不明↑いまここ



153：名無し

はい有能。ってかこうしてみるとマジで否定派と過激派は自滅ばっかで草

154：名無し

ポケモンについての知識ほぼないくせに勝手に喚くだけ喚いてるだけだから当然だぞ。うみちゃんがのこしてるポケモンについての過去動画すら見てないという体たらく

156：名無し

無能&無能。ってか、ボールの量産で好景気きそうなのなんで？海外でもボール発見されてるんじゃないのか？

157：名無し

》156調べてきた、どうやら世界中ポケモンが発見されたことのある地域ではボール自体は発見されてるんだが、しばらくしてからボールが発見されなくなったらしい。今じゃ政府の方で少額だけど懸賞金まで賭けて探してたっぽい。つまり、海外でボールは数が限りある貴重な物資ってことになる。

158：名無し

そういうことか、サンクス。あれ、でもなんかおかしくないか？

159：名無し

は？なにが？

160：名無し

ちよつと俺も調べてきたんだが、海外の方でボールが発見されなくなった時期と日本での同様の現象が起きた時期に差がある。日本の方は海外で発見されなくなってからもしばらくの間見つかつてるっぽいぞ。

161：名無し

確かに妙だな、海外の方は最初の発見から2, 3か月で見つからなくなつてるところがほとんど、海外での一番最後の発見についてはアメリカのほうで最初の発見から3か月と10日で見つからなくなつてる。でも日本ではそこから+2か月ほどの期間は普通に見つかつてるな。

162：名無し

それだけじゃないっぽいぞ。SNSの画像だから信ぴょう性薄いが一度に見つかる数の方も海外では1個しかないのに日本ではいちどに2, 3個ひと塊で見つけた情報が多い。

163：名無し

・・・つまり、日本の方がそもそもモンスターボールの発見数が多いってことか？なんで・・・？

164：名無し

日本と他国の間の明確な違いが何かあるんだろうな。そこが多分ポケモンという存在そのものにつながる重要な情報なのでは？

165：名無し

おまいら絶対普段は頭いいだろ。いつも変態してるくせになんでそこまで考察できるんだよ。

166：名無し

うみちゃんへの愛

167：名無し

うみちゃんに褒められたいが故

168：名無し

うみちゃんにご褒美でなでなでもらいたい

169：名無し

うみちゃんを存分に甘やかしたいから

170：名無し

もうヤダこいつら

171：名無し

動機が不純以外の何物でもねえ・・・

172：名無し

・・・なあ、一つ嫌な考えが浮かんだんだが

173：名無し

》172なんだよ不安になるな、おい

174：名無し

海外と日本のポケモン関連の明確な違いってさ・・・

175：名無し

あ、まて、おれも思い至った。マジでちよつと待て

176：名無し

おい、俺もちよつと何言いたいかわかった。でも待ってそれあかん

177：名無し

なんだよ、有能民どもが一気に察しだしたんだが

178：名無し

怖いって、なんだよやめろよお前ら

179：名無し

・・・心して聞けよお前ら。後あくまで仮説だということを頭に入  
れとけ

180：名無し

日本と他国の違い・・・ポケモンについてで一番のやつって言った  
ら

うみちゃんの存在だろ

「さて、着いたぞ。ここが私の自宅だ」

「で、でかい・・・」

ナナカマド博士の家に厄介になる事となった俺。到着した家は俺  
の自宅よりずっと大きい、いわゆる豪邸と言つていいレベルだった。  
威圧されるようにただ見上げることしかできない俺の横を、シロナさ  
んは何でもないようにスタスタ歩いていく。

「・・・うみちゃんどうしたの？早く入りましょ」

「あ、はい」

・・・これが感覚の違いかあ。そんなこんなで家の中へと案内され

る。外観の時点でわかつてはいたが、内装も明らかに高いのだとわかる装飾の壺や俺にはわからないけどたぶん名画なのだろう絵画が壁にかけたり置いてあったりする。好きな場所に座るといい、と博士が言ってくるがどう見ても俺の家の家具より高級感のある家具とか椅子を見ると、正直触るのをためらってしまう。

「うわあ・・・リビングに暖炉って本当にあるんだ・・・」

「あら、先生奥さんは出かけてるんですか？」

俺がどうすればいいか悩んでいると、もうすでにシロナさんは豪華なソファへと座りくつろいでいた。この人、強すぎるだろ・・・いや、ひよつとして引き払ったとか言ってた部屋もこれくらい豪華なのか？

「ああ、君たちを泊めると連絡したんだが、食材が心もとない量だったらしくてね。今買い物に行っているよ」

「あ、あの、すいません急に・・・」

「ああ、うみくんが気にする必要はないよ。私が言い出したことだ。それに、実はシロナ君は何度か食事に来たことくらいはあるしね」

「先生の奥さんの手料理、とつてもおいしいのよ。楽しみにしましよ？」

そう言って笑う二人に、なんだかずつと遠慮してるのも悪い気がしてきた。・・・正直飛行機内では何も食べてなかったからお腹もすいてる。空腹を自覚したとたん、俺の腹からクルルルウ、という音が鳴ってしまった。

顔に血が上り、真っ赤になるのを自覚する。ちらりと見てみると二人にも音は聞こえていたようで、博士は微笑ましいものを見る目で苦笑しており、シロナさんに至っては顔を手で覆って俯いているが、肩が定期的にはねている。

「・・・笑わなくてもいいじゃないですか」

「ふふ、ご、ごめんなさいね。大丈夫よ、私も鳴ってないだけでお腹ペコペコだから」

「それはフォローになってないですよ！」

変な助け舟を出してきたシロナさんにツツコミを入れるが、本人に

はあまり響かず普通に笑い続けられた。くそう、何かあった時にイジリ倒そう。

「さて、じゃあ部屋を案内しよう。うみちゃん、ついておいで」

「あ、はい」

博士から呼ばれ、荷物をもって二階へとついていく。階段を上がり、廊下をまっすぐに歩いた突き当りにある二つの扉の前で止まる。「こっちの、右側の部屋を好きに使うといい。今はもう成人して出ていった息子の部屋だが」

「あ、ありがとうございます。見てもいいですか？」

もちろん、と言われて遠慮がちにドアノブに手を伸ばす。そっと開けると、ドアは軋みもせずスツと開いた。

「・・・うわあ」

「おっと、しまったな。片づけていかなかったのか」

部屋の中は、the男の子の部屋といった感じだった。机に本棚、大きめのベッドなど基本的なものはそろっており、そのいたるところに何かのスポーツチームの壁紙だったりバスケットのボールだったり、プラモデルっぽい何か飾られていたりした。

「すまないうみくん。とりあえず片づけるから後でもう一度・・・」

「へー、ずいぶんと懐かしい漫画だなあ」

「・・・」

とりあえず俺の荷物をおろし、本棚に雑に突っ込まれていた漫画の一つを取り出す。どうやら日本から持ってきた漫画の一つらしく、日本語のものだ。他にも机の上にはパソコンが置かれていたらしいスペースと、それを囲むように小物が置かれている。小物は全部日本でも見られたものだし、多分イギリスに来た際に持ち込んだものなのだろう。

「あ、別にいいですよこのままで。ただちよつと俺の荷物とかを置くためにも整理くらいはしますが」

「あ、ああ。うみ君がそれでいいなら構わんが・・・隣は娘の方の部屋だから、そっちに変えてもかまわんのだが・・・」

「ぜひこっちでお願いしますー」

女の子の部屋とか下手に触れないから落ち着かない……！絶対こっちだろ！

必死に頼むと、博士は面食らった様子で目をぱちくりしていたが、俺がいいのならと言って承諾してくれた。

「ありがとうございますー！」

「う、うむ……最近の女の子の間ではああいうのが流行っているのか……？」

部屋を一瞬見渡してなんかつぶやきつつも博士は退出していく。それを見送ってから、俺は扉を閉じ急いでカバンを開く。

「さて、片づけもそうなんだけど……あった」

カバンの中から取り出したのは7つのモンスターボール。その中から1つを空中に放ると中から光と共にライが飛び出す。

「ライー！」

「ごめんねライ。色々あったからすぐに出してあげられなかったよ。他の子もごめん、またあとで外で出してあげるから」

残りのボールへ声をかけつつ、飛びついてきたライの背中を撫でる。チャア〜と気持ちよさそうな声を上げるライをそのまま撫でつつ、もう1つボールを取り上げる。

「さてと。じゃあ片づけをするんだけど、まずは……おいで、ミカ」  
そう言つて再びボールを放ると、今度は水色の靄のような体を持つポケモンが姿を現す。

「おんみよーん」

「それじゃあよろしくね、ミカ」

出てきたのはゴーストタイプのポケモンで、俺のてもちの一人であるミカルゲのミカ。寡黙な仕事人で、仕事となれば即座に行動する社会人の鑑みたいなポケモンである。既にやってほしいことは日本出国前に伝えていたため、俺の言葉に一つうなずくと部屋の窓を透過して外へと出ていく。

あっちはおそらく時間がかかるだろうし、今はとりあえず片づけ優先だ、そんなわけでライに手伝ってもらいつつ部屋の物を分けていく。

「うみちやーん？食事の用意ができたって」

「はい。すぐ下りますねー」

しばらくの間整理と仕分けを繰り返していると、ノックと共にシロナさんの声がする。一声返事をしてから、小声でライに待っててねと伝え、ボールの中へと入ってもらおう。

「あら、その子がうみちゃんね」

一階のリビングへと下りると、そんな声がかけられる。

そこには、おいしそうな料理をもった女性がおり、テーブルの上になんか料理を並べているところのようだった。

「えっと・・・博士の奥さんですか？」

「ええ、よろしくね」

「うみちゃんこっち、椅子あるわよー！一緒に食べよー」

奥さんと話していると、すでに座っているシロナさんが隣の椅子を叩きながら言う。・・・というかあの人の手元のコップ、あれ酒じゃね？後ろから博士がやってきて先にシロナさんの対面に座り、シロナさんを見て眉を顰める。

「おいおいシロナ君、もう飲んでいるのかい？というか、その銘柄はウチにおいていたものじゃない気がするんだが・・・」

「私が持ってきてたやつですよー？これおいひいんれすからー」

「・・・まだ一口目だろう？それ」

ダメだこの人・・・弱すぎる・・・。えへへくと、べろんべろんに酔ってしまったシロナさんには、初対面の時のカツコよさも女の人としての淑女的な面もない。まあそれでもきれいで美人というのが変わらないのはさすがというか・・・。

「まあしょうがない。さ、うみちゃんも座りなさい。私の妻の料理は旨いぞ」

「あらやだ、ハードル上げないでよあなた」

「・・・はいー！」

まあとりあえず、今はご飯を楽しもう。後でこっそり少量をもらってライ達にも食べさせてあげないと・・・というか、ライたちの説明

どうしょ。

(・・・あとでいつか！)

そうして俺は、目の前の料理へと向かうのだった。・・・え、うまつ。

「・・・」

うみがナナカマド博士の家で料理に舌鼓を打っていた頃。イギリス内某所、大量のモニターに囲まれる一人の男がいた。その男の手は絶えずキーボードの上を動き回っており、その視線は目の前に乱雑に置かれたモニターをぎよろぎよろと視認し続けている。すると不意にかし続けていた手を止め、男が一つのモニターを凝視する。

「・・・見つけタ」

そう言って口元を歪にゆがめた男の背後から、軋むような音が鳴る。

「どうですか？目当てのものは、見つかったのでしょうか？」

「ああ、反応がある。今、『この国』にイル。・・・おまエの方は？」

「？ああ、ようやく落ち着きましたよ。全く、あれが何なのかはわかりませんがね・・・非常に不快ですよあの化け物め」

男は背後を振り返らずそこにいる何者かと会話する。落ち着いた知的な声ではあるが、所々に傲慢さの見え隠れするその何者かの声に、不快だと言わんばかりの激情がこもる。

「ですが私の作り出した『首輪』は完璧です。どんな化け物であろうと完全に操れる。まあ今は『奴ら』に使う前の試運転といったところですがね」

その言葉には、自身の作り出したという『首輪』への絶対的自信と化け物と吐き捨てる何かへの屈折した感情が乗っていた。不敵に笑い、自分の言葉に酔いしれる何者かだったが、不意に男のこぼした言葉でその雰囲気激変する。

「・・・キサマの発明じゃあないだろう」

「・・・なんだと？」



「あれは、カツラとあのおんナの研究を基に再現しただけの模造品だろウ？そもそも試運転なんテあそこですでに終わっていたはずダ」  
「あれは私の物だ!!!あれを作り出したのは私だ!!!あの女じゃないっつっ!!!」

何者かの怒声が響き、静寂が訪れる。大声をあげた何者かの荒い息遣いだけが聞こえる中、男の嗔れた笑いが響く。

「なんだ、ずいぶんと荒れるじゃないか。それじゃア凶星だと言ってイル様なものだゾ」

「・・・!」

男のその言葉に再び怒りを覚えた何者かがその肩をつかむ。ギリギリと力が込められていく手を横目に、尚も男は嗤う。

「まア、いい。仕事ハきつちりやるサ」

「・・・当然だ。そのために貴様をここまで連れてきたんだからな」

男の肩から手を離すと、何者かの足音が離れていく。再び背後から軋むような音が聞こえ、その後大きな音でなにかが閉まり、静寂が訪れる。

「ひとを超え、化け物を超え。そうして何者になルつもりなのやラ」

男はそうつぶやき、再びキーボードへと手を伸ばすのだった。

認めない。あんな女の考えたモノより、私の作り出したものの方が優れている。これは確定事項だ。

あんな男に頼らねばならないのは癪だが、それでもあれは優秀だ。使えるのなら使い倒し、遣い尽くし、つかい潰すだけだ。

あの男、そして『首輪』。必要なもののうち2つは揃い、試運転の成  
果は上々。

あの女のせいで逃した最後のピースも向こうの方からやってきて  
いる。

「ようやく・・・ようやくだ。ようやく私は・・・。」

神を超える」

私は目の前に広がるそれを見上げ、心を高鳴らせるのだった。

「○○遺跡より出土 古代神話の碑文」

はじめに あったのは

こんとんの うねり だけだった

すべてが まざりあい

ちゆうしんに タマゴが あらわれた

こぼれおちた タマゴより

さいしよの ものが うまれでた

さいしよの ものは

ふたつの ぶんしんを つくった

じかんが まわりはじめた

くうかんが ひろがりはじめた

さらに じぶんの からだから

みつつの いのちを うみだした

ふたつの ぶんしんが いのると

もの というものが うまれた

みつつの いのちが いのると

こころ というものが うまれた

せかいが つくりだされたので

さいしよのものは ねむりについた

「〇〇遺跡付近の伝承」

さいしよのものはねむりのなかあり  
ねむりをさますはふたつのぶんしん  
くさりのまえにぶんしんきたり  
さいしよのものはいかりくるう  
そのいかりすべてをのまん  
いかりをしずめよ

みなものまなこにつきのぎん  
いのちもやしていかりをしずめよ  
さればいのちはこえにこたえん

## 第46話

これは夢だ。

初めに感じたのはそんな感覚だった。いるのは俺の家だ。体は透けてて、よくある幽霊みたいな感じだな。

そんな幽霊のような俺の目の前には泣き腫らした顔をパソコンに向けながらぼーっとしている俺自身と、その後ろで心配げにみている相棒たち。ポケモン達

『……データに問題はなさそう？いや、ほぼ素人の俺じゃあ分からないレベルの何かがあるのかも。マサキさんに見てもらった上でこれならシステムに何かウイルスがあるとかでもないだろう。じゃあなんで急にミカが締め出された……？本人の意思で出たとは考えづらい、それに前からこのシステムには不明な要素も多かった訳だから……』

必死になって慣れない手つきでキーボードを叩き、画面に流れる複雑な文字の羅列を忙しく見ていく。そうだ、イギリスへと飛ぶ数ヶ月前。俺がレンジャーに入ること断った後位の事だ。

ミカが何故かボックスから出てきており俺の手持ちのポケモン全てがパソコンから自動で引き出されていた。しかもそれに気づいた時には、ボックスそのものが機能を停止し預けることもできない状態に。

慌ててマサキさんに連絡して原因を調査してもらったが、帰ってきたのは申し訳ないという表情と原因不明だという結果だけ。

そんなことがあって、俺の毎日の日課にこの預かりシステムをいじる事が加わることとなった。

『……だめだ。やっぱり俺一人じゃ無理だ……』

『フウ……』

『あ、ごめんごめん、ご飯だったね』

『ライライ……』

『バツ、クロバツ！』

『ライ、クロ……。みんな、ありがとな。じゃあすぐにご飯用意するな

？』

ポケモン達が気を遣ってくれてるのが痛いほど伝わってきて、慌てて笑いかけながら席を立つ。・・・俺は上手く笑えているのだろうか。もっと、この子達を安心させられるように頑張らないと・・・そう思いながらライを抱き上げ、肩にクロが乗ってミロやデオキス、ミカが各々部屋を出ていく。ツボっちは部屋の隅で寝ていた。こいつはまあ平常運転だからいいか。

ピロン

『あ、メール……え？』

最後に俺が部屋を出るため、ドアノブへと手を伸ばした時だった。不意にパソコンがメールを受信したことを知らせる音が響く。マサキさんとは何度かメールでやりとりをしていたし、配信の方で対応しきれなかった相談事とかも視聴者から届くため、きつとその類だろう。ひよつとしたら、マサキさんの方でシステムの不調について何かわかったという知らせかもしれない。題名だけ見て返信は後にしよう、そう思いつつ再び席に座りメールを開く。

『これは……でも何で急に？』

しかし、届いたメールは想像していたどれとも違うものだった。だが、そこに書かれていた題名は俺の心を大いに揺さぶった。思わず腕の中のライを置いてパソコンへと飛びつくほどには。

驚いたライとクロがポカンとしているのを横目に、拡大されたそのメールを慎重に確認する。

【君の母親を知っている】

「君の母親について知りたければ、イギリスへ向かえ。手がかりが欲しければ、○○大学の考古学研究室のナナカマドという博士を尋ねるといい。君の力になってくれる存在が見つかる」

突然のそのメールは、とても簡潔な内容であり、差出人不明という異質さを見せていた。返信しようにも、何故か存在しないアドレスと

なっておりコンタクトを取る事はできない。

何故イギリスなのか。何故、ナナカマドという博士が手がかりなのか。そもそも、知っているのなら何故このメールでは教えてくれないのか。

ありとあらゆる面で、信用に値しない情報だ。差出人の意図もわからないし、わざわざイギリスへと行かねばならないという点も、俺の中に忌避感を抱かせた。

今の俺は身柄を狙われたことのある重要人物として国が保護しようとして手を回しているとキョウさんやタケシさんから聞いている。一人で派手に動くのはもう難しいだろう。

それに、家にはバンギラスなどの俺が保護したポケモン達もいて世話をせねばならない。保護したものの責任として、それを放棄するわけにはいかない。

『……なのに、なんで。俺は……』

そつと胸のあたりへと手を当てる。イギリスという言葉を見てから、胸の奥が熱い。何か言いようのない焦りや悲しみといった感情が溢れてくる。何がこの体を、『うみ』を突き動かしているのか。母親に会う事ができれば、それが分かるかもしれない。

メールの内容を読み終え、削除ボタンへとカーソルを合わせる。……だが結局、俺はボタンを押す事ができなかった。言いようのない感情を押し込めることはできず、結果俺の手はキーボードを滑り、イギリス行きの方法についての検索を始めるのだった。

「大学に行きたい?」

「はい。観光ついでに、折角なので海外の学校の様子とか見れたらなーって。……ダメですかね?」

イギリスへと渡る理由となった夢を見た翌日。大学へ向かうというナナカマド教授と、お酒で醜態を晒した事で若干しよぼんとした様

子のシロナさん、俺に食べさせるため腕によりをかけて作ったと笑う教授の奥さんの3人に囲まれながらの朝食をいただく中で、教授へ大学に行きたいとお願いする。

結局、あのメールの差出人はわからないままだがこうして入国早々に教授やシロナさんと出会えたのはある種の運命だろう。まだ完全に信用したわけじゃないが、あのメールの内容以外に手がかりはない。ひよつとしたら、あのメールが示していたのはナナカマド教授ではなく、何か別の手がかりが教授の近くに……大学にあるのかも。

そう考えた俺は、教授に許可を求めた。こつそりついていくとか、ライ達の助けがあれば忍び込むことも余裕で可能だろうけど……勝手に入るのは流石にまずいだろうし。なによりバレたらシロナさんや教授に迷惑がかかる。

「ふむ。私としては構わない、ぜひ研究室に来るといい……と、言いたいところなんだがね。残念だが今は無理だろう」

「?何か、トラブルでもあるんですか?」

「ああ」

トーストを齧りながら尋ねると、教授は神妙な表情で頷く。俺の隣に座っているシロナさんも険しい表情をしており、なにやら訳ありのようだ。深掘りしていいのか不安になる雰囲気だなあ。

「うみちゃんは知っているかしら。最近世界中で話題になってる、ポケモンという生物」

「……………ええ、まあ」

「うちの大学の施設の一つに、そのポケモンっていう生き物が住み着いちちゃったらしくてね。政府や警察が対応に追われてて今は立ち入り制限されてるのよ」

……そうか、ポケモンの影響か。イギリスでもやっぱり起きているようだ。話を聞いてみると、どうやら鳥の姿をしたポケモンの群れが大学内で巣を作っているとのことだ。興味を持った学生がちよっかいをだし、それによって興奮状態になってしまったポケモン達によって巣の周囲は酷い有様になっているらしい。

「幸い人的被害は軽微らしいから、大学に入ることには制限されてない

んだがね。流石に部外者を招き入れることはできん状況だよ」

「うへえ、でもそんな状況でも大学の授業はやるんですね……」

「我々としても休校措置が妥当だとは思うのだがね。大学の上層部や警察等によると刺激しなければ安全であることは確認したということ。休校まではいっていないようだ。講義は一部を除いて自主的に止めているがね」

大学っていうのも大変なんだなあ。教授の話聞きながらサラダを食んでいると、元気を取り戻したシロナさんがにっこりと笑いながら手をポンと合わせる。

「そういう訳で、うみちゃん！大学へ行きたいなら問題が解決した後で連れて行ってあげるから。ちょうどいいし、私と一緒に観光に行きましょう！案内するわ！」

「シロナ君？君はまだやるべきレポートが残っていると他の教授に聞いているんだが？」

「……お願いします！なんとかごまかしておいてください！」

「教授に言うことではないだろうその発言は」

「そーですけどお……うみちゃんと一緒に遊びに出たい……ダメですかね？」

「だめだ。やることはちゃんとしなさい」

教授とシロナさんが言い合っている間に、俺は頭の中でどうするか考える。預かりシステムが機能していない現状、俺のてもちはいつもの相棒たちのみ。

レベル的に考えればよほどの大物が相手じゃない限りは『制圧』できるだろう。つまり、シロナさん達の大学に行けば、問題は解決できる。

……だが、今俺がいるのは日本ではない。ここで俺がしゃばったところで、良いことはないかもしれない。ここは大人しく、大学の方の騒動が治まるのを待つ他ないか。

「うう……ごめんねうみちゃん。また今度のお休みに案内するから、今日は私は学校に行くことにするわ」

「はい、分かりました。シロナさんも頑張ってきてくださいいね。俺、一



緒に出かけるの楽しみにしてますから!」

「……やっぱり、教授には病気って伝えて今日一緒に」

「シロナ君?」

「何でもないです……ハイ」

心底残念そうなシロナさんに苦笑しつつエールを送る。尚も未練がましくナナカマド教授に視線を送っていたシロナさんだったが、結局眉をひそめて名前を呼ぶ教授に睨まれ、肩を落とすのだった。

「フフフ、心配しなくてもシロナちゃん、楽しみができて良かったじゃない」

「そ、そうですね……折角だし一緒にショッピングとかたくさんしたいじゃないですか」

「うーん、じゃあ次のシロナさんの休日の日に、一緒に出かけてくれませんか?町の案内つてことで」

「!ええ、任せといて!良いお店知ってるから!」

急激に機嫌を直したシロナさんに、教授の奥さんと俺は顔を見合わせて少し笑い、ナナカマド教授はやれやれと肩を竦めていた。

その後、朝食を終えた俺は教授の奥さんと一緒に、次の休日に関することについてウキウキで考えているシロナさんと、それを呆れた様子で引つ張っていくナナカマド教授が大学へと向かうのを手を振って見送ることとなった。

「では、行ってくる」

「ええ、気を付けてね」

「シロナさん、いつてらっしゃ……あの、い、いい加減放してくださいよお」

「もう少し。あと10分ほど。まだうみニウムが補充できてないわ」  
「なにそのいかがわしい成分!?!」

うう、なんだかシロナさん自分のポンコツっぷりがバレてから遠慮なくなっていないか……?そんなことを考えていると、外出の準備を進めていた教授の携帯端末が着信音を発する。相手は友人か何かのよううで、教授は電話に出て少しの間は楽し気にしゃべっていたが、段々と表情が険しくなる。

「……そうか、わかった。いや、ありがとう、では」

「……?どうしました?」

「シロナくん。仕事だ」

「!」

「?」

仕事……?何のことだろう、シロナさんは大学生だって言っていたし。バイトか?と俺が首をかしげていると、抱き着いてきていたシロナさんが真剣な表情で頷き、先ほどまでの姿からは想像できないほど機敏に準備を済ませ、教授の車に乗り込んでしまった。

「あなた……またなの?」

「ああ。帰りがいつになるか分からん。すまないが夕食は二人だけを想定しておいてくれ」

「分かりました。でも、あなたもシロナちゃんもどうか無事でね?」

「大丈夫ですよ奥さん。無茶をするつもりはありませんから」

教授と奥さんが何やら不穏な会話をしている。不安そうな奥さんの肩へ手を置いた教授が安心させるように頷き、車の中からシロナさんも声を上げている。……仕事って、なんだ?

口を挟めるような空気でもなかったため黙って二人が車で去っていくのを見送り、そっと教授の奥さんに尋ねる。

「あの、お仕事って?教授もシロナさんも、大学の人、ですよね?」

「ええ。でも、それだけじゃないのよ。……あの人も、シロナちゃんも」

そう言つて、名残惜しそうに二人が去っていった方を見ながら、教授の奥さんは不安げな表情を浮かべていた。

「今回は何が?」

車の中でカバンを開け、中身を漁る。…おかしいわね、最近はこの中に入れているはずなんだけど。

もう何回目になるのかもわからなくなるくらい行っている仕事だが、相変わらずこの感覚には慣れない。私の問いかけに、視線は前から動かさずに教授が答える。

「大学の敷地内だ。ちょうど今朝話していた鳥型のポケモン。あれが大規模な移動を開始したらしい」

「なるほど。それで私ですか」

納得だ。私以外にも現在この国には何十人も存在しているというのに、学生である私へと一足飛びで仕事が来たというのが疑問だった。

そりゃ、自分の所属する大学なんだから私が連れて行かれるわけね。

「ええつと。ID、ID……あ、あら？」

「おいおい、勘弁してくれないかシロナくん？今から取りに戻っているような時間はないぞ」

「ちよ、ちよつと待っててくださいね……？あ、あつた！大丈夫ですよ、あはは……」

「……帰ったら部屋の掃除もしてもらうぞ。妻に監督してもらおう」「うぐうつ!？」

予想外の流れ弾だ。ま、まあ大丈夫。ちゃんと今朝服も本も片づけた（当社比）し、大丈夫……。

このままじゃマズいと、話の流れを変えるため先ほど見つけ出したIDカードを眺めながら教授へと声をかける。

「それにしても、どうしてこうまで嚴重に管理するんですかね……」

「……仕方あるまい、まだこの国では管理体制も、設備も、まるで足りていないんだ。問題が起らないように管理するためには、今のところはこれが最善という考えだろう」

「……そう、ですかね」

よくある免許証のような形に、私の顔写真。ついで住所に氏名、電話番号まで載せられたそれを真上に持ち上げて眺める。裏面には英国の国旗マークと、絶対に読むことを想定していないだろう、と思える小さな文字の羅列。その一番下、最後の一行を見る。

『ポケモン保有者としての資格を認める』

「私は……あの子ともつとずつと一緒に居たい。ただそれだけなのに……」

そう呟いた私の言葉に、教授は肯定も否定もせず、ただアクセルを更に踏み込んだ。

## 第47話

「到着しました！」

「遅い！」

現場である大学へ到着したシロナとナナカマド教授に、大柄な男性が叫ぶ。大学の入り口にはバリケードテープが張られ、警察が大勢で封鎖を行っていた。

締め出されたのちちょうど来たところで入れなかったのか、大学に所属する生徒や教員、その他職員がテープの外で野次馬をしている。スマホを取り出し大学構内を撮影しようとする者、どこかへと連絡を取る者などがごった返す中を強引にかき分けてシロナはテープをくぐる。その後ろにはナナカマド教授がついてきている。

「警部、お久しぶりです」

「フン、もう顔を合わせなくて済む方が俺としてはありがたかったんだがな」

人ごみを抜けたことで一息つき、挨拶をするシロナへ大柄な男性――現場を担当している警部がふてぶてしく答える。その表情や態度からは、現状がよろしくないことを察することができる。

「ですが、これが私の仕事ですので」

「分かっている。上の決めたことに逆らう気はない。お前のパートナーはあっちだ」

「ありがとうございます」

鬱陶しそうに警部が指した先には、逮捕者を護送するための大型の警察車両が停まっている。それを見て一瞬だけ顔をしかめたが、すぐに取り繕いシロナはお辞儀をして歩いて行った。

後にはナナカマド教授と警部だけが残った。手持無沙汰になったナナカマド教授は、咳ばらいを一つして、イラついているように足をコツコツ鳴らしている警部の横に立つ。

「相変わらず彼女とはそりが合わないですか。警部殿」

「当たり前だ」

簡潔に、吐き捨てるようにケビン警部が答える。即答ですか、とナ

ナカマド教授が苦笑した。シロナが仕事をするようになってからずっと現場で顔を合わせてきたこの警部は、シロナという存在が現場にいることに常に不満を持っているのだ。

「上もどうかしている。民間の、それも他国の人間を使うなぞ」

「ふむ、しかし彼女も私も、今はこの国籍を持っているのだがね」

「そういう問題じゃない！」

ナナカマド教授に苛立ち、そう吐き捨てる、警部は車両のそばに待機していた警官と話をしているシロナを見て目を細める。

「こんなクソみたいな問題の最前線に、俺たち警察ではなく守るべき一般人を送り込むんだぞ。上の見解も彼女の持つ利点も、理解はしているが納得などできるか」

「……そういう君だからこそ、シロナ君も安心して仕事に取り組んでいるんだと思うがね」

「なら精々嫌われるように努力する」

一般人を巻き込むこと、それを懸念し、思案し、憂慮している生粋市民の味方のおまわりさんな警部に、ナナカマド教授は相変わらずだな、と心の中で呟くのだった。

「お疲れ様です！」

「！来たか！すでに準備はできている！IDはあるな？」

「はい！」

警部とナナカマド教授に見送られ、案内された車両の前へとやって来たシロナ。管理を担当していた警官との挨拶もそこそこに、颯爽と車両内に入りこむ。そこには、前回の仕事から変わらぬ姿の頼もしい相棒が透明な防弾ガラス製のボックスに載って待っていた。

「ガブア！」

「ええ……久しぶりね。元気？ガバイト」

「ガブガブ！」

鯨のような鰭のついた尻尾に背中、小型の恐竜を思わせるフォルムでありながら頭部はシユモクザメを想起させる。太腿の前側につい

た鋭い突起なや一本の大きな爪のついて両手は、これまた鮫のような鱗に似た形状をしていた。

全体的に、総評するなら『鮫と恐竜を足して二で割った』、といった風体のポケモン、ガバイト。彼が、シロナの相棒であった。

シロナがIDカードをボックスについている機械へとかざす。電子音が鳴るとともに、ボックスの一面がゆっくりと開き、我慢できないとばかりにガバイトが飛び出してきた。

二度三度、体を震わせたガバイトは、その強面な表情を破顔させ、シロナへとドストドスとすり寄っていく。

「ガブルルルウ」

「よしよし。どこも悪いところは無い？」

「ガブー！」

シロナはそんな相棒を受け止め、久しぶりのスキンシップを楽しみながらガバイトの身体をチェックしていく。その際に、ふと目に入った首元のチョーカーに悲しい表情を浮かべるが、そんな暇はないと一度かぶりを振り、後ろで待っていた警官の方へと顔を向ける。

「……もう大丈夫です。いけます」

「よし。では、規定に則り、管理番号001。個体名ガバイトの施設外での活動を受諾。……後は頼む」

警官にしつかりと頷くと、シロナはガバイトと共に大学構内へと歩き出した。

「さあ、ガバイト。行くわよ」

「ガブア！」

2人を見送る警官は、大学の中へと進む二人に祈りながら手に持った端末を叩き、ガバイトの首輪を起動するのだった。

シロナとガバイトが、仕事の為に意を決して歩き出した頃。

「うう、お、重い……フィットシユアンドチップスってこんなに油っこいのか……!?!」

シロナとのショッピングも大学への訪問も流れてしまったうみはというと、じつと教授の家で待っているというのも存外暇という考えから、観光半分・母親の手がかり探し半分で街へ出ていた。

「うぷ……も、もう無理だ、ライあげる」

「ライ？ライ！」

食べきれないと判断し、背負っているリュックの中にいるライへとパスする。嬉しそうにがつつく音を感じながら、俺は胃もたれしかけている腹をさする。ライがスツポリと入り込む大きさのこのリュックは、キョウさんとワタルさんに頼んで用意してもらった特注の一点物だ。

ライを入れること前提のため、通気性抜群かつ丈夫で軽量な素材に、内側に施された防電処理によってライが背後でうっかり寝ぼけて電気が漏れても感電しない。肩に乗せて連れ歩くつもりだった俺だが、あまりにも貧弱なマイボディはライ1匹すら抱きかかえるのがやっとであると判明した故の措置だった。……いやごめん盛った、普通に抱っこもキツイ。

「はあ、にしても何だかなあ」

気を落としても仕方ないので、改めて街並みや行き交う人々を見渡す。普通に車やら人やらが行き交っているのだが、よくよく見ればポケモンの影がチラついている。例えば、今俺の座っている噴水の上の方には、鳥ポケモンであるポッポやムツクルが数匹乗っかっているし、路地裏の方ではコラッタかポチエナっぽいポケモンが俊敏に走っていくのがギリギリ見える。空を見れば虫ポケモンのバタフリーが1匹、ヒラヒラと飛んで行った。

(シロナさんの言っていた通り、この国もポケモンが大分浸透……いや、この場合は侵食なのかな？なんにせよ、あまり受け入れられているとは言えない状況なのかな)

見れば、車はともかく道を歩く人々は、路地から走り出してくるポケモンや噴水で休んでいるポケモン達を見て露骨に避けている。町の人々の表情を見ても、どこか怖い猛獣でも見ているような雰囲気を纏っている。

「さつき調べた感じで言っても、まんま猛獣とか害獣みたいな認識の



人が多いらしいし……」

シロナさん達を見送った後、俺は洗濯などのお手伝いを済ませ、その報酬代わりとして教授の家でパソコンを借りた。そこで調べたのは、この国でのポケモンの立ち位置について。法律とか憲法とか、その辺は難しい言葉も多くて分かんなかったけども、何となくこの国におけるポケモンへのスタンスは分かってきた。

（ざっくり言って『様子見』。積極的な駆除策を使うわけではないけど、寄り添っていかうとも思っていない、結構消極的な対応だったな。それでもポケモンに興味本位とかで近づく人がいたりモンスターボールとポケモンの有効利用について気付く人もいたんだろうけど）

ポケモン発生と同時に出現していたモンスターボール、現在この国の政府主導で買取りや搜索を進めているようだ。この動きは日本と変わらないけど、どうやら日本みたいに多くのボールが見つかるわけじゃないようで、公開されているだけの発見例だけ見ても日本とはダブルスコアで離れてる。そのため一時期は懸賞金すらかけられたみたいだった。

加えて、ポケモンの所持についても結構嚴重に管理されている。I Dの発行と聴取が義務付けられているらしく、しかも捕獲したボールもポケモンも全部没収、国が作った施設で調査・保護をしているらしい。

俺のボールやポケモン達も、見つければ没収からの事情聴取とかになりそうだったので、反則技だし普通にバレたら犯罪になりそうでマズインだけデオキシスにこっそり運んでもらった。スピードフォルムと『こうそくいどう』を駆使しての入国だし、人間による目視ではまずバレない。……今朝見たネットニュースやテレビで空港付近で謎の飛翔体をレーダーが感知したとか報道されてた気もするけどあれは関係ない。ないつたらない。

「……ライもみんなも、もうしばらく出さない方がいいみたい。ごめんな、狭いけど我慢してくれよ?」

「ライー!」

背中から聞こえてくるライ元気な声に励まされつつ立ち上がり、ス

マホを取り出し、100を超えて今なお増え続けているキョウウさんやタケシさんからのメールと電話の着信履歴に冷や汗をかきながら、マップを開いて歩き出す。

「ええと、シロナさんが昨日言ってた名前は、と……」

マップの検索機能を立ち上げ、シロナさんが仕事とやらをしているはずの大学への道のりを調べる。一人でどうにか出来ないかと探し歩いてみたが、やっぱりこのまま手がかりもなく歩き続けてもダメだ。俺の方からシロナさんの問題へと手を貸すことはできないだろうけど、一度大学に行ってみるしかない。もうあの謎のメールしか俺の——いや、うみちゃんのお母さんへの道は続いてない、気がする。「つと、ご、ごめんなさい」

『——?』

人ごみをどうにかすり抜けながら、大学へ向かって歩いていく。目的地へ近づくにつれて人が増えていき、色んな人や物にぶつかってしまふ。

なんだか警官の数も増えてきてるみたいだし、このままじゃ動けなくなりそうだ……。

「ーライー!」

「?どうした?」

不意に背後から小さくライが声を上げる。人に聞かれては事だと黙らせようとしたが、その時急にどよめきが広がる。

『——!』

『——!?!』

(なんだ?早口過ぎてわからない……!)

「……な!」

周囲の人々が、上を見上げて口々に何かを叫んでいる。そのおかげでライの声は誰にも聞かれていないようだった。しかし、俺も何が起きたのかと周囲の人々と同じく上を見上げる。

そこには、黒い羽を羽ばたかせて大学らしき建物の上空を旋回する鳥ポケモンの群れがあった。数は分からない。数え切れないほどのポケモン達は、輪の形をとって群れで空を旋回しており、明らかに異

常な動きを見せていた。

一瞬思考が停止するほどのたいりようはっせいに面食らったが、不意に近くを飛んできた群れの1匹が街頭に留まった。黒い三角の特記が生えた帽子のような頭に、全身真っ黒で毛羽立った尾を持つそのポケモンは、夜に出会うとわざわざいを呼ぶとも言われるポケモン。

「……『ヤミカラス』！」

『！』

俺がつぶやくと同時に、ヤミカラスは他の群れと合流し飛び立つ。大学の上空を舞う群れがそのまま降りていくのに合流したのを確認して走り出す。無理だ、シロナさんがどんなポケモンを連れてくるのかは不明だが、おそらく一匹しかてもちは無い。どんなに強力なポケモンを持っても、一匹だけであんな数相手にするのは無理だ。海外だから、仕事の邪魔だから手を貸すのはマズいなんて言ってられる様子じゃない。人ごみをかき分けるのを諦め、横道に入り駆け出す。目指すのは、警官や野次馬のごった返してるのとは反対、大学のどこか別の入口を探す。

(なんでヤミカラスが人が沢山いる大学を根城に選んだのかはわからないけど、ヤミカラスの群れだって言うなら当然、『アイツ』が群れのトップのはず……！)

「ライ、着いたらすぐ戦えるよう準備しといてくれ！」

「ライ！」

頼むシロナさん、早まらないで……！群れに手を出しちやダメだ……！

「ガバイト！来たわよ！」

「ガブガブ！」

「カアアア!!」

大学に入って10分位は経った。私とガバイトはなるべく慎重に移動することにしたため、出来る限りの隠形を試みている。

その甲斐あってか、鳥ポケモンの群れとの戦闘を最小限に留めつつ

巢があると思われる場所まであと少しのところまで来ていた。大学に入った瞬間から定期的に件の鳥ポケモンから襲撃を受けているけど、今のところはガバイトも私も問題は無い。群れとはいえあまり統率が取れてないのかしら、さつきから2、3匹程度のチームで襲撃されるくらいだし、1匹やられたら他は一目散に逃げていく。

「……ガバイト、まだやれるわよね？」  
「ガアブ」

当然！つとばかりに腕を回して応えるガバイトに、思わず笑みがこぼれる。普段あまり一緒にいられないからなのか、こうして仕事の時に出会うと張り切って暴れるのだ、この子は。

施設での保護という名目で軟禁状態だからかしら、普段からフラストレーションは溜まっているだろうししょうがないのかもしれない。あとでまた思いつきり撫でてあげようかしら。

仕事終わりの楽しみに少しだけ気分を持ち直しながらも、警戒は怠らないようにして進む。すると、予定していた通りのタイミングで開けた場所に出た。目的地、鳥ポケモン達の巢があるとされる中庭だ。(妙ね……襲撃が止まった。それに、彼らの気配もない。一体何が)

「！ガブ！ガブガブ！」  
「！どうしたの!?!」

考え事していると、前を歩いていたガバイトが声を上げる。咄嗟にガバイトのしている方向へ顔を向け、私は絶句した。

「……」  
「「?」……」  
「「「「「「「……」」」」」」」  
「……これ、は……!?!」  
「グ、グルル……」

襲撃してこなくなった鳥ポケモン達。常に2、3匹で攻撃してきては、逃げていった彼らは、どこに行ったのか。

その答えが、私とガバイトの上空に広がっていた。

「カア」  
「カア」  
「カア」

「カア」「カア」「カア」「カア」「カア」「カア」「カア」  
「カア」「カア」「カア」「カア」「カア」「カア」「カア」  
「カア」「カア」「カア」「カア」

鳥ポケモン達は、逃げたのではなかった。蹴散らしたはずの彼らは、集まっていたのだ。襲撃者である私たちを、確実に倒すために。「まさか、そんな……誘い込まれた、ってこと!？」

上空を埋めつくす鳥ポケモン達。黒い体色と相まって、まるでこの一帯が夜になってしまったと錯覚するほどの群れだった。

その圧倒的物量差に呆然としてしまった私とガバイト。思わず明確な敵地であるこの場に棒立ちという悪手をうってしまった。

次の瞬間。

「!・ガア!？」

「ガバイト!？」

背後から突然現れたポケモンが、ガバイトを蹴り飛ばした。

壁へと激突し呻くガバイトに近寄って助け起こしながら、下手人を睨む。

ソフト帽を髣髴させるような意匠を持つ頭部、もっさりとした白い胸毛が生えたその姿は、明らかに上空の鳥ポケモン達の進化系だった。

「……ガバイト、動けるかしら?。」

「ガル」

短く応え、起き上がると同時に前に出て戦闘態勢をとるガバイト。先程のとっしんのダメージや対面しての威圧感を鑑みて、甘く見積っても相手はガバイトとほぼ互角。ただしこちらは一人、相手は群れ。これまでの仕事での経験は対一、複数のターゲット相手の経験は1度きり。初の対物量戦、ガバイトもここまでの戦闘により疲労感を感じている。……まずいわね。

「さて、どうしたものかしら?。」

「……カア」

圧倒的不利な状況に、一周まわって笑みと、冷や汗がこぼれる。どう足掻いても、どう楽観的に考えても。

「……ピンチって、奴よね」  
そうつぶやくと同時に、空から夜が猛り、襲いかかってきた。

## 第48話

「回避―！」

「ガブア―！」

咄嗟の指示に反応して、ガバイトが私を抱えて全速力で跳び退った。

そのほんの数瞬後、先ほどまで私とガバイトの立っていた場所へと鳥ポケモンたちが群れを成して襲いかかる。

逃げられたことに気づいたのか、たちこめた砂埃の中から再び鳥ポケモンたちが羽ばたき飛び出してくる。

回避し、少しずつ逃げていた私たちに気づくと、彼らはすぐに群れを成して追いかけてくる。

彼らが飛び立った後には、爆弾でも落としたのかと思うほどの大きさの陥没ができていた。

それは彼らが、何の躊躇いもなく地面へと突っ込むという自殺行為に近い攻撃をためらいなく行った証拠だろう。

少しでもガバイトの回避が遅れていたら、あれに巻き込まれていたかもしれない。そう思うと背筋が凍る。

あのポケモンたちは痛みとか、恐怖といった感情をどこかへ置いていったのか……？

「ガバイト―！煙幕を―！」

「ガッ―！」

ガバイトは私の指示に短く叫んで応じ、全力の突きを地面に向けて放つ。

勢い良く放たれた一撃により、先程の彼らの突撃の時のものより更に大量の砂塵が舞い、私たちと鳥ポケモンの群れを包み込む。

周囲は見えなくなつたが、彼らもその条件は同じ。あちらこちらから、鳥ポケモンたちの慌てた鳴き声が聞こえてくる。

「今よ―！お願い―！」

「ガブ―！」

今しかない。ガバイトは私の指示を受けて、全速力で駆け出した。

少数での威力偵察に、群れで上空の制空権を確保。それに気づいて足が止まった相手への奇襲、そして先ほどの迷いのない突貫。明らかにこれまでの野生のポケモンとはレベルが違う。

彼らは本能だけじゃない、知性を持ち、相手を観察し、隙を突いて狩りに来る。

その有様は、なんとも厄介で、なんとも危険。

街に出すわけにはいかない、このままでは、彼らは私たちを追いかけて街に出てしまう。

街であんな数のポケモンが統率されつつ暴れたりなんてしたら、警察では手が付けられない。かと言って今の私たちにもこの群れを倒したり、せき止めるような力は残念ながら無い。

現状のままでは、間違いなく戦力不足……！

「カー」

「なっ、嘘!? ガバイト、左！」

「ガブ!?」

逃げながらそんなことを思考していた時、背後から例のボスポケモンの声が響いた。

次の瞬間、砂埃の向こう側から耳障りなほどの数の羽ばたきが聞こえ、突風が吹き荒れて砂埃が飛ばされていく。

私たちを守ってくれていた煙幕が晴れ、視界が広がる。私たちにとってそれは都合の良いことでは無かった。

視界が開け、獲物の位置を特定したボスポケモンの指示で再び数匹のポケモンたちが襲い掛かってきた。今度は砂埃を警戒してか、翼をはためかせ、目に見えない風を飛ばす攻撃を繰り返してくる。

絶望的な数の不可視の攻撃を、ガバイトは我武者羅に躲していく。当たりはしなかったが、それによって思うように逃げる事は出来ず、気がつけばまた黒い壁のように迫る群れに取り囲まれてしまう。

「ガバイト！」

「カー！」

「ガ！ガブアー！」

再び逃げ出したいところだが、鳥ポケモンたちは今度こそ逃がさな



いとばかりに波状攻撃をガバイトへと仕掛けてきた。

突進してくるもの、風をぶつけてくるものなど、一切の容赦も隙も無い攻撃にさらされたガバイトは、みるみる傷だらけになってしまふ。

ガバイト一人だったのなら、あるいは地中に逃げるといふ手段があつただろう。……それをしないのは、私がここにいるから。私を守するために……！

もはやガバイトは無事なところを探す方が難しいくらいに傷だらけ。自らを犠牲にして守ってくれているその姿に、私は……私の心は耐えられなかった。

「ガバイト、逃げて！あなただけなら、地面を掘り進んで逃げられるはずよ！警部と、それとポケモン所有者の応援をお願い。……ガバイト？」

「ガブ！ガブア！」

「ガバイト!？」

逃げて、と指示を出したにもかかわらずガバイトは首を横に振つた。鳥ポケモンたちに囲まれ、爪や翼に打ち据えられてもなお、頑としてその場を——私の目の前を離れようとしなない。

一切の慈悲もなく襲い来る攻撃に晒され、より一層傷だらけになつていくガバイト……しかし、倒れない。急所や顔を腕でガードしながらも、その身を盾にして私を守るように鳥ポケモンたちへと立ち塞がる。

「ガバイト！もういい！今は逃げるのよ！」

「ガブガブ！」

「……！こんな時に、わがまま言わないで！逃げなさい！」

「ガブ!!」

どれだけ指示を出しても言う事を聞いてくれないガバイト。私を助けようとしてのことだと分かつてはいる。でも、私はこれ以上傷つく貴方を見たくない……！

最後の手段として懐からボールを取り出し、ガバイトを戻して遠くへ投げる、そんな考えを思い浮かべる。

しかし、敵はそんな隙を逃さなかった。

ボスポケモンの声がまた響き、今度はフラつくガバイトと私の間に鳥ポケモンたちの壁が構築され、その向こうからは容赦ない攻撃の音だけが響く。

それを呆然と、絶望と共に見るしかない私は、ここに来てついに膝から力が抜け、崩れ落ちる。これが数の暴力、これが群れと戦うという事なの……？

辛うじて隙間から時折見えるガバイトは、もう立ってすらいない。

ガバイトの目は死んでない。だが、もはや気力だけではどうしようもない状況だった。体はとうに限界を超え、彼は地に伏している。それでも尚苛烈になる蹂躪は、ガバイトが倒れたことでは止まらない。

もうだめだ、これ以上は彼も、私の心ももたない。そう思い私はボールを持った手を相棒へと向ける。

「カア」

「カアー！」「カア!!」「カア」

「カア」「カア」「カア」「カア！」

「な、なんでよ……！お願い！反応して！」

無情にも、ボールは反応してくれない。距離の問題なのか、鳥ポケモンたちが壁となっているからなのか。どちらにしる変わらないのは、ガバイトはもはや逃げられないという事だけ。

私に何もできないのだということ悟ったのか、鳥ポケモンたちは私から視線を外し、ガバイトへとより苛烈な攻撃を加えていく。

どうしよう。どうすれば。必死に思考を回すが、行き着く結論は全て変わらず、ガバイトを助けられないという結果のみであった。

(何も……できないの……？ガバイトを、置いていくしかないというの!?)

感情が嫌だと叫び、理性が逃げるべきだと警鐘を鳴らす。せめぎ合う考えをまとめる事が出来ず、また立っていることすら辛くなり膝をつく。

届かないと分かっているが、ガバイトへと手を伸ばし、私は無力感に押しつぶされていった。

ああ、誰でもいい。どうか、お願いだから……!!

「助けて……」

何もできない、何もしてやれない己への無力さを呪いつつ、思わず零れた弱音。その、次の瞬間だった。

不意に攻撃が止んだ。襲い掛かってきていた鳥ポケモンが一匹、また一匹と離れていく。

鳥ポケモンたちの突然の行動に訳も分からず、ただ呆然とするしかなかった。鳥ポケモンたちは、私どころか、倒れ伏すガバイトすら、もはや見ていなかった。

鳥ポケモンたちを統率し、少し離れたところで眺めていたボスポケモンもだ。彼らの視線はまっすぐ、ガバイトを超え、膝をついた私をも超えたその先を見ている。

「ヤミカラスを見た時点で予想はしてたけど、ドンカラスか……街中にも出没するポケモンだけど、普段は森の中に巣を作るんだった気がする。というか、進化条件はどうやって……ああ、カラスなんだから光物集めたりしててやみのいし拾ったのか?どんなレアケースだよ……」

後ろから聞こえてきたのは、聞こえるはずのない、しかし聞き覚えのある、幼いながらもどこかしつかりした意思を感じさせる声。ありえない、だって、大学の場所こは教えていない。あの娘がここに、来るはずが、第一理由がない……!!

ありえないと思いつつ振り返って見れば、ゆっくりと歩いてくるのは想像通りの銀のキラキラとした髪をなびかせる少女の姿。

初めて出会った時と同じ、帽子を深めに被り、体格に対しややサイズが大きすぎる気もするリュックを背負った彼女は、ブツブツと何かを呟きながら冷めた視線を鳥ポケモンたちへと向けていた。

「う、み、ちゃん……?なんで……!!」

「来るのが遅れちゃいました。あ、でもごめんなさい教授とか警察の人にはバレないようにこっそり入ってきちゃったんで内緒でお願いしますね!」

「いや、ごめん待って、色々追いかからないわ」

うみちゃんの雰囲気が変わり、いつもの——と言ってもまだ数日の付き合いだ——ほんわかとした抜けた表情へと変わり、あたふたと胸の前で手を振り、シー、と指を口元へ持つていく。いや、そこじゃない。そこじゃないわ私のツツコミたい所は。

「っ！うみちゃん話は後！逃げて！ここに来ちゃダメよ！」

「カー！」

突然のうみちゃんの乱入に固まっていたが、そもそもここは危険地帯であるということ思い出して、叫ぶ。

しかしそれと同時に、ボスポケモンのするどい鳴き声が響き、群れから飛び出した三匹の鳥ポケモンが、うみちゃんへと迫っていた。

（しまった！）

思わず歯噛みし、背後に現れたうみちゃんをかばうように立ち上がる。ガバイトはすでにボロボロで、うみちゃんへと向かう鳥ポケモンたちを抑える事が出来ない。私が、私しか今の娘を助けることのできる者はいない……！

何ができるという訳でも無い。でもせめて、盾になって逃げる時間を……！

そう思いながら、懸命にうみちゃんへと手を伸ばす

「ライ、『ボルト』」

「チュウ！」

瞬間、閃光が弾けた。

「……は？」

「『グエエエエ!?』」

向かっていた先、うみちゃんの背後から元気な鳴き声が出た。同時に、強烈な光と轟音が轟く。思わずしりもちをついた私の横へ、その光の中から若干焦げた鳥ポケモンたちがうめき声を上げながら転がってきた。

「改めて、ごめんなさいシロナさん。俺としては、仕事の邪魔をするつもりはなかったんですけど……」

「うみ、ちゃん？」

倒れ伏す鳥ポケモンを見ていた私の横を、うみちゃんが通り過ぎていく。その足元で、今まで見たことのない黄色いポケモンがこちらを見つめていた。興味深そうな、それでいて歯牙にもかけていないような視線を向けられ、思わず固まる。

ポケモンは、そんな私を見て興味を失ったのか首をこてんと傾げてからうみちゃんの前へと進み出て、鳥ポケモンたちへと正対する。

「……緊急事態みたいでしたし、見過ごせなかつたので。余計なお世話かもしれないけど……手、出させてもらいます」

「余計なお世話かもしれないけど……手、出させてもらいます」

「ライライ！ライ、チュウ！」

「…………ガブ」

ライがシロナさんのポケモン……ガバイトへと何か声をかける。ヤミカラス達は、どうやらライが圧倒的格上であることは気づいているみたいだ。いそいそとボスのドンカラスのもとへと下がっている。

ガバイトはボロボロの体を引きずりながら、ライの呼びかけに素直に頷いてシロナさんのもとへ戻っていく。

横目でそれを確認しながらも、ヤミカラス達からは意識を外さない。

スピアーたちを相手したときから心がけるようにしている鉄則だ。野生のポケモン、特に群れているポケモンからは意識を外さない。何ならそのまま周囲への気も配り、伏兵という名の横やりも警戒する。これは決してゲームじゃない。悠長に一回一回素早さが高い順にわざを交互に出すことなんてしない、他のポケモンが戦ってるからって、一対一で戦ったりなんてしてくれない。

入れ替えの隙を待ってくれないし、何ならトレーナーをダイレクトアタックしてくる奴だって平気である。ルール？何それ？状態である。

野生のポケモンだって必死で、こちらを倒すためには手段を選ばず来る。不意討ちだまし討ち上等、ゲームの様なターン制バトルなんて無い。

そんな対野生ポケモン戦。ソースは日本での戦闘経験だ。

辞退した身だったもんで肩身は狭かったが、何度かレンジジャーの仕事を手伝い、実践で学んできた。全ては、こういう時の為に。

(ヤミカラス達はとくに問題じゃないかな。問題なのは、やっぱリドンカラスの方か)

相手の群れと、ボスであるドンカラスを見てそう判断する。不意に現れた俺たちに対して、ヤミカラス達の反応は戸惑い半分、さっきの電撃への恐怖半分といった様子だ。

対してドンカラスはと言うと、興味1割怒り6割、警戒3割……かな？だめだ、まだ俺じゃ正確には分からないや。でも、雰囲気からそんな感じがする。ライを見てもまだ戦意が衰えている様子は無い。

こういう相手の表情とか仕草から情報読み取るのはキョウさんとかタケシさんが得意なだけだなあ……。いや、顔とかないはずのデオキシスの感情の機微まで解るような人らレベルにはちよつと……。そんなくだらないことを考えていたからだろうか、不意にヤミカラス達が羽ばたきによる見えない攻撃……。『かぜおこし』かな？……を群れ総出で繰り出してきた。

「ライ、あの子らは気にしないでいいよ。狙うのはアタマだけでいい」「ライー！」

強風の吹き荒れる中、俺の一言でライは目にもとまらぬ速さで駆ける。レベル差と練度のごり押しによって行われるそれは、シロナやガバイト、ヤミカラス達には捉える事すらできないものだった。

「っ！嘘でしょ……!?!」

「ガアッ!?!」「グエ!?!」「ギャッ」「アイエ!?!」

かぜおこしを強引に突破したライは、その勢いのままにヤミカラス達の中へと突っ込む。オレンジ色の軌跡が走るたびに、群れの中から悲鳴やうめき声が響き、一匹、また一匹とヤミカラス達がぎぜつして堕ちてくる。

ライは俺の指示通り、アタマ……つまり、ドンカラスを狙っていく。途中でできずして墮ちていくヤミカラス達は、まあ、うん。多分だけど、足場にしてるんだろうな。『ボルテッカー』で電気を纏っているライにひき逃げ食らってるんだ、ひとたまりもないのだろう。

そんな様子を少し離れた上空から見ているドンカラスは、露骨に顔をゆがめつつ逃げるように高度を上げる。

相当いら立っているな。これは、ライのでたらめさ加減になのか、自身の群れのふがいなさへなのか。

「まあどっちでもいいけどね。さて、これで君は裸の王様だ。そろそろ降りてきてくれると手間が省けるんだけど」

「……」

時間にしておよそ1分。群れは全滅していた。夜になったのかと見紛うほどの規模の群れだったことを考えれば驚異的な速さだが、ライと俺からすればこんなものは分かり切った結果だ。

というか、ドンカラスを狙えて言ったのにライの奴……。

周囲には、呻いたり、呻く余力も無かつたりするヤミカラスの群れが転がっている。

まあ、放っておいて俺の指示通りドンカラスを攻めても良かったけど、シロナさんを人質にされたりしては面倒なので、とりあえず群れを全部しばいたつてのがライの判断だろう。

俺の足元に戻ってきたライにありがと、と伝えながらドンカラスを見上げ、降伏を呼びかける。

しかし、残念ながらドンカラスは何も言わずに翼をはためかせ、そのままどこかへと飛び去ってしまった。

「な、追わなきゃ……！」

「いえ、逃がしましょう。今はシロナさんとガバイトの担当が先です。どっちにしろあいつは群れを失ってる。今回みたいな騒動をまた起こすのはしばらくは無理でしょうから」

実は既に終わっているのだ、ということはない。今頃、ドンカラスはクロバット——俺のうちの一体、名前はクロ——に叩きのめされているだろう。ここに来る前に、逃げる奴を倒しておくよう

指示しておいたし。

でも、俺のてもちは密輸して持ってきてるやつだから、おいそれとネタバラシはできない。

「でも……………つつうー!」

「!シロナさん、大丈夫ですか!?!」

ドンカラスを追いかけようと立ち上がったシロナさんだったが、やはり怪我が酷かったみたいで、すぐに倒れこんでしまう。地面にぶつかる前に何とか俺の体を滑り込ませて抱きかかえ……………つとお!?

「う、(ぐ)ぐ……………!シ、シロナさん、気をしっかりいい……………!」

流石に少女の体で支えるのは不可能だったみたいで、ぶっ倒れるのは阻止できたけどそのままシロナさんに押しつぶされるような形で倒れてしまった。

慌てて声をかけるが、戦闘が終わって緊張が切れたのか、完全にシロナさんは意識を失っている。

力をありつたけ込めてみるが、全く動かない。希望を求めてガバイトを見るが、そつちももう限界だったみたいで、倒れそうなところをライに支えてもらって壁に寄りかかっていた。

「ラ、ライー!ちよつとシロナさんを持ち上『シロナくーん!!』つげ!?!」

ライに代わってもらおうとしたその時、遠くからナナカマド教授の叫ぶ声が聞こえてくる。辛うじて動く首を持ち上げると、遠くから警察らしき格好の人を引き連れてやってくるのが見えた。

……………つてえ!ライ見られたらマズい!!

「ライ、ボール!ボール入って!」

「ラ、ライ!」

慌てて叫ぶと、ライは急いで俺のリユックにしまつてあるボールへと入っていく。ギリギリのタイミングだったが、ナナカマド教授達が来た時にはなんとかバレーずに済んだ。

「な、うみ君!?!なぜここに!?!」

「い、いやあ、あはは……………み、道に迷いました!」

「何をバカなことを言つて……………!いかん!シロナ君!」

『どうなつてるんだ……………。カラスどもが全員ぶっ倒れてる!?!』



『……総員、カラスを確保し檻にぶち込め。それと！救護班と救急車！急げ！』

到着した教授は、俺を見て驚いていたが、俺の上に倒れているシロナさんを見て、血相を変えて持ち上げて地面に寝かせる。

ついてきていた警察の人は、なんか上司っぽいおじさんが指示を出したのを聞いてヤミカラス達を捕獲していた。

ライの電撃にやられたんだからしばらくはきぜつしてるだろうし大丈夫、だとは思うけど……。

『……で？教授さんよ、そのガキは誰だ？』  
「……」

あ、あれ？なんか警察のおじさんがすごい形相で睨んできてるんだけど。こわ……。というかよく周囲を見れば、ヤミカラスの捕獲に参加していない警察の人に囲まれてた。

あれ、なんで囲まれてるんです？その手に持つてる銃はなんですか！？ナズエミテルンデイス！？

教授！？なんか言つてよ！？

『よしてくれ！……危害を加えるような子では、無いんだ……』

『この惨状を見てもか？』  
「……」

な、なんか教授がシロナさんを介抱しながらおじさんと話してる、んだけど……な、なんでおじさんが周囲を見渡したら黙り込むんですか？

というか、なんで周囲の警察の方々は一歩包囲網を狭めたんですか？……？

『……ま、なんにせよこの嬢ちゃんには話を聞かないといけない。それは分かってるよなアンタ』

『ああ。正直に言うと、私も聞きたいことは山ほどある』

『オーケイ、オーケイ。んじゃ、話は早いな。おい、連れて行け。ガキだからさすがに手錠はいらん。が、それはそれで厳重に警戒して連れて行け』

『了解』

「え、あの、あれ？教授!?なんでおれ捕まってるんですか!？」

「すまない、うみちゃん。今はおとなしくついていてくれ……」

え、何その沈痛な面持ち!?さっき英語で何話してたの!?まさか俺これ、逮捕!？」

「ちよ、待って!いや、アーーーーー!？」

こうして俺は、屈強な警察の人二人に両手をもって引きずられるという、何とも言えない体勢でズルズルと連行されてしまったのだった。

「い、いやああああキョウさんに怒られるうううううう!？」

うみが未知との遭遇めいた連行をされていた頃。空港では、一人の青年がげっそりとした表情で降り立っていた。

「ここがイギリス……な、長かった……」

キャリアケースを転がしながらため息をつく青年……ワタルは、肩をポキポキと鳴らしながら目的の少女の写真を取り出す。そこに映っているのは、オレンジ色のねずみポケモンと嬉しそうにほおずりしている銀髪碧眼の少女、うみ。

今回の捜索のため、特別にガンテツから借りてきた写真の一枚である。なお、紛失した場合命の保証はないとのこと。

「ぎっさと見つけて帰らねえと……うみちゃん割とトラブルメーカーだからな、何か騒ぎを起こす前に捕まえないといけないな……キヨウさんが怖いし」

そうしてワタルは、頬を張って気合を入れなおし、腰に巻いたモンスターボール付きのベルトをひと撫でしてタクシー乗り場へと向かうのだった。

……もはや、手遅れであることなどつゆ知らず……。

## 第49話

ドンカラスたちとの戦闘から数時間。現在うみは、警部の所属する警察署にて軟禁されていた。

ポケモン事案へ警察と協力者が対応している中、突然現場に現れたうみは、諸々の罪の疑いもあつて取り調べの必要があるのだった。

なぜか大学内に侵入していた。当然、これは不法侵入。更には、大学は騒動が起き警察が封鎖措置を行っていた。そんな場所への侵入、警察の仕事の邪魔、捉え方によれば公務執行妨害も考えられる。

うみが連行されたのも当然であった。

逮捕とはいかないまでも、補導したいのが警察側の心情だがうみの保護者を呼ぼうにも大陸と海を挟んだ向こう側で呼びつけることなど無理。と言うよりも、呼びつける人についてもうみから話を聞かねばならないという事に。

突然発生したという雷鳴と閃光の件についても関連性が疑われており、そうした懸念からうみの身柄は取調室にて、それはもう嚴重に保護させているのだった。

『……おい、教授はまだか』

『もう少ししたら、こちらに着くとのことです。何分、病院からここは少々距離がありますから』

『チツ。妙な子どもがいるとは思ったが、まさか日本人だとはな。しかもこちらの言葉が通じん。……シロナと言いつこの子どもと言いつ、ポケモンに関係する奴らは女や子どもじゃなきゃいけない決まりでもあるのか?』

(やべえ、何言ってるのか知らんけどこのおじさん機嫌悪そう……)

ど、どうしよう……。まさかシロナさんがぶっ倒れるなんて思わなかった。というか、さっと助けてさっと逃げる予定だったのになんでこんな事に……。英語分かんねえ、日本語でおkってこういう事なのか……。?

ライ達相棒やボールも没収され……てはない。というか、俺がポケモンを持つているとはまだバレてない。この建物へと連行される中、持ち物検査の直前に隙を見てライにボールを高速で持って逃げてもらったし、手持ちの中でもクロとミカはすでにボールの外だった。

『しかし、なんであの場所にこんな少女が?』

『知らん。それを今から取り調べるんだろうが』

『そうですねえ……お、警部。ナナカマド教授が来られたそうです』

『通せ。通訳がおらんと話にもならん』

シロナさんが証言すれば俺のでもちについてもバレるだろうけど、俺が連行される中でも意識が戻った様子は無かったし、まだ大丈夫なんだろう。どうにかして手早く取り調べを終わってもらえれば良いんだけどな。

……シロナさん、大丈夫だろうか。外傷は死ぬようなものじゃなかったとは思うけど、ぶっ倒れたのは気がかりだ。

警察の人達が何を話しているのかわからないからと、そんなことを考えつつ話をしているのを眺めていた。すると、急に彼らが話すのをやめて連絡を取り始める。その数十秒後に部屋の扉が開き、見知った人が入ってきた。

「ナナカマド教授!」

「うみ君! 大事ないかね?」

「いや、もうこの状況がすでに大事ですけど?」

「ははは、違うない」

先程現場で別れたナナカマド教授が取調室へ現れ、歓喜から思わず立ち上がる。どうやら教授はあの後、シロナさんの付き添いで病院に行っていたらしい。

若干呑気な発言をする教授へとジト目を向けるが、乾いた笑みを浮かべている。……ここに教授が来るってことは、少なくともシロナさんの命に別状はないんだろうか。そうだと嬉しいんだけどな……。

すると、俺たちの様子を見ていた警察のおじさんが我慢ならないといった様子で声をかけてくる。

『感動の再会に喜び合うのはいいが、さっさと取り調べを終わらせた

いんだが？今回の事件の事後処理もあるんだが??？」

『おっと、すまない警部。彼女が緊張している様子だったのでつい雑談に興じてしまった。まあ少しでも落ち着かせた方が話もしやすいだろう?』

『……まあいい』

教授はおじさんと話をしてから、表情を変えて椅子に座った。背後の方では、別の警察の人がメモを取っている。

「さて、うみ君。君は、今の自分の状況については理解できているかな?」

「まあ、はい。俺があそこにいた理由とかを疑われているってのは分かってますけど……」

「ふむ、よろしい」

そこまで話したところで、教授が背後に立っているおじさんへと振り向く。

『警部、何から聞き出すかね?この娘は聡い、聞きたいことはとりあえずぶつけても良いだろう』

『なんだっていい、話ができるならな。ならばまずは……』

何度か会話を交わし、教授が俺の方にまた顔を向ける。……質問内容の相談でもしてたのかな?

「待たせたね」

「いえ、大丈夫です。こたえられる物なら、どんな質問でもどんとこい、です」

「フツ、良い返事だ」

さて、ここからが問題だ。ここで俺の立ち位置や持つてる情報……多分ポケモン関連ばっかりだろうけど、それを提示してでも乗り切る。

それで、この国の警察や教授の手を借りる事が出来れば良し。そうじゃなければ、おそらく強制的に日本へ送還されたり、拘束されるだろうなあ。

俺のこの国での行動の自由を確保するためにも、俺の目的でもあるうみとしての母親捜索の手がかりを得るためも。頑張らないと!

……これ以上キョウさんに怒られないようにするために!!

「お疲れ様です」

「……ん、おう」

取り調べを終え、レストルームで煙草をふかしていると、部下の一人が声をかけてくる。先ほど、取調室で書記をしていた奴だ。

「隣失礼します。……あれ、そう言えば警部、煙草やめたんじゃ……」  
「煙吸ってなきややってられるかっての、化け物相手なんぞ」

そう言つて新しい一本を取り出していると、笑い声が隣から聞こえてくる。

そう、化け物相手。ぽけ……なんだったか、とりあえず略してポケモンというらしいそいつらが現れてから、俺の警察としての仕事もものすごい勢いで変化していった。

娘のために減らし始めていた煙草の本数が戻ってしまうのも当然だろう。……流石に家では吸わんが。

「まあ、分かりますけどねその気持ち。俺だつて、警官として働いてきたのに何故か妙な生物の相手させられたりするようになるとは思ひもよらなかつたですし」

「まったくだ、おまけにその化け物どもを従えた子どもや一般市民を指揮して対応させられるわ、そのうちの一人がケガするわ、散々だよ。この後も始末書や保護者への説明やらであつちこつちだよ」

一番くそつたれなのはここだ。市民を協<sup>戦</sup>力者として考えなきやならん。

しかも、ただの戦力ではない。未だ謎も多い化け物であるポケモンを保有・使役する一般市民だ。いったいどこら辺が一般的なのか教えてくれ。

その中でも、ひときわ厄介だったのがシロナ。現在治療のため入院している今回の功労者だ。

化け物どもが発生した最初期に、偶然フィールドワークの最中ポケモンを発見、それを保護し進化までさせた、確認できている中でも世界初の人物、とされている。それが彼女だ。

「それにしても、あのシロナちゃんど……ガバイト？でしたっけ？あの2人は大したものですよねえ。まさか、大学内の送電線を集めて漏電させることであの鳥どもを一網打尽にするとは」

「どうだか。むしろ、ここで負けていればよかつたんだ。辛勝するよりも」

「うわ、ひつでえ。自分としては、彼女らは良くやってる方だと思いますよ？」

「……」

部下の呟きを否定し、今一度思考の海へ意識を戻す。そう、出来すぎている。彼女と管理番号001、あのペアは現状この国で認められた100を超えるポケモン保有者の中でダントツの実力を有している。

管理番号001がまだ小さかったころから、常に他の保有者の一歩先に行くように事件を解決していく。

そんな彼女の活躍は最近ではニュースで取り上げられることもあるほどに、注目を集めているのだ。

先程の少女の取り調べでは、事件の顛末についてを中心に話を聞いた。

そこでの話を信じるのなら、結果はいつもと変わらない。彼女が解決した、怪我はしたし気絶するほど追い込まれていたがそれでも勝った。

この事実もこの後の報告を見た上が、メディアが面白おかしく脚色して英雄の様に祭り上げられるのだろう。

……それが個人的にひどく我慢ならない。

「このままあの女に期待を寄せ続けてりや、いつか潰れる。どこかで折れて、負けて。そうして周囲からの期待が減らないとダメなんだろうが」

「言いたいことは分かりますけど……でも、実際のところここまで何



の問題もなく解決してますし、彼女の相棒も進化？ってのをしてからさらに強くなってるじゃないですか。俺としては、このまま何事もなく強くなった方が良いと思うんですけどね。個人的にも応援してますし」

(だからそれがダメだって言ってるんだろうが……！)

部下の楽観的過ぎる言葉に、心の中で怒りの言葉をこぼす。さすがにレストルームで騒ぐほど分別の無い歳でもないので、ため息とらみを一つくれてやりつつ立ち上がる。

そろそろ休憩が終わる。まだ、事件の顛末しかあの少女から聞き出せていない。

「つたく、英語くらいできるようになってから来いっての……取り調べの進みが悪い」

どうか、この妙な状況を打開できるような、画期的な情報を持っていないものか。

そんな自分の考えに自嘲の笑いをこみ上げさせつつ、取調室へと戻る。長いこと警察として生きているんだ、そこまで情報が簡単に手に入ることなどありえないのは分かっているだろうにと自分に言い聞かせながら。

「えっと、ポケモンについてですよ？知ってますよ、情報」

「……は？」

『おい、何と言ってるんだ教授』

『いや、その……ポケモンについての情報を持っている、と』

『』

「……教授、スマホ持ってませんか？」

「む？持つてはいるが……ここでは使えんぞ」

「じゃあ、警察の人に伝えてください。ポケモンに関する、俺の持っている情報を可能な限り渡します。日本の俺の上司の許可を仰ぐことはなりませんけど、必要なら先程の事件で暴れてたポケモンについても教えます、と」

「う、うむ。分かった」

「それと、これも頼んでほしいんですけど……」

意識を取り戻して最初に見たのは、真っ白な天井だった。

「……………は？」

「あーシロナさん！起きましたか？教授ー！シロナさん起きましたよー！」

声のした方へと顔を向けると、看護師がパタパタと足音を鳴らしながら離れていくのが見えた。

……………病院？なんで？

今日は大学に……

いや、うみちゃんとシヨツピング……

違う、そうじゃない。

確か、仕事が……。

そうだ、大学で仕事……

たしかガバイトと、ポケモンの群れを。

「……………つつ!!ガバイト!つつう……………!?!」

「ああ、動かないでください!?!外傷が酷くないとは言っても、打ち身や青あざなどで痛みがあるはずですよ!」

思い出すと同時に飛び起きる。でも、その次の瞬間には激痛に身をよじってしまい、近くにいた医師に止められそつとベッドへと寝かされる。

ガバイトは、私は一体。いや、そこじゃない。

「ふむ、シロナくん。調子はどうかね?」

「教授……………まあ、生きてはいますね」

「それは重畳」

私が寝かされていると、ナースに連れられて病室へと見知った顔がやってくる。その人——ナナカマド教授は、かぶっていた帽子と羽織っていたコートを片手にベッドへとやってくる。

教授の登場に一度落ち着いた私は、ベッドにおとなしく寝る。実は

さつきから、飛び起きた反動でやってきた痛みが辛いのだ。

「教授、大学の方は……？それに、ガバイトは無事なんですか!？」

「安心したまえ、無事復旧しているよ。一部校舎の壁などは修繕する必要があるがね。ガバイトも大丈夫だ、今は治療のために別棟で隔離されているようだがね」

「そう……ですか……」

教授の言葉にほう、とため息をつく。大学には思い出の場所や知り合いの大事なものもあった。自身の過ごしてきた大学を守りきれた事実は素直にうれしい。

そして、ガバイトが——相棒があればほどの蹂躪を受けて生きながらえてくれたことが、それよりさらに嬉しい。

「しかし、君も随分と無茶をしたようだね？大学にあった電線を集めて漏電させ、群れを一網打尽にしたと聞いたぞ」

「……え？」

な、何のこと……？そんなことはした記憶がない。

「きよ、教授。それは一体何のことなんです？あの群れを倒したのは……」

「ふうむ？……現場でうみちゃんが保護されたのだが、もしや彼女が？」

「？え、ええ。それが何で私がしたことに？というか、そのうみちゃん……」

「ああ、それなんだがね……ふむ、どうやら私の感じていた違和感は解決したよ。まったくあの子は、重要なことをなぜ隠すのか……というか、隠せると思っていたのかね……」

「え？え？」

「いや、すまない。大丈夫、悪いようにはされないだろう。彼女も一応は無事だ。全く、あの場で大嘘をついてくれるとはな……」

「??？」

だ、ダメだ。教授が何を納得しているのかわからない。うう、一体何を言ったのようみちゃん……!？」

どうにか取り調べを乗り越えた後、俺は復旧作業中の大学内へとやってきていた。取り調べでは、俺の、身分というか、日本での所属について明かし、ヤミカラス達のポケモンとしての情報の提供、現場の様子についてもしつかりと説明したことでどうにかお咎めなしを勝ち取ることができた。

……まあ、監視つきの自由だけど。どうやら俺の肩書きの中でも、日本のポケモン対応に動く組織の所属というのが大分衝撃的だったらしい。

何とも言えない表情の警察のおじさんに見送られながらの出所と相なった。情報提供の代わりに条件として色々と無茶をのんでもらったし、その一環で俺の母親について警察の方でも調べてもらっている。

俺一人で街を回るより、警察のデータベースで調べてもらった方がずっといいしね。肝心の母親の情報については、過去に見た記憶をもとに似顔絵を描いて警察の人へ渡した。割と会心の出来だから、すぐに見つかるとは思うんだけど……。

そんなわけで自由の身となった俺は、当初の予定通りナナカマド教授の研究室や大学の見学に行くことになったのだが、残念ながら教授は用事があるというので俺一人で大学を見学することになってしまった。

ふふふ、まさかごまかすためについたでっち上げのウソが、普通に通るとは。完璧な誤魔化しだったみたいで、俺が解決したとはバレてないみたいだ。教授が用事を済ませたら、シロナさんのところへ口止めに行かないとな。

「にしても、ひつろいなあ……大学ってのは、やっぱり学ぶことが多いから施設も多いのかな」

背後の少し離れたところで監視する警察の人を気にしながら大学を回っているんだが、どうにも広すぎる。ナナカマド教授の研究室で待つよう言われてただけで、マップ見ても分からん！

事件の後そんなに時間も経ってないから、登校してきてる人とかも

少ないみたいだ、まるで人が通らない。

……あれ、待てよ？よくよく考えたら、俺英語喋れないよな？人に聞こうにも、ここはイギリス……日本語、通じない……。

「う、うわあああやらかしたあ……。教授についていくんだったあ……！」

頭を抱えてうずくまる。そうだよ、ここに来てから教授やシロナさんにすぐ会ったから、日本語が通じないことすっかり忘れてた……！簡単な単語だけで、道とか聞けるのか！？

うごごご、英語わかんねえええ！と唸っていると、不意に気配を感じる。顔を上げると男性が一人、こちらを心配げに見下ろしていた。

「？」

「あ、あー、その……アイキャントスピークイングリッシュ？」

「??？」

（し、しにてええええ?!いや死にたくはないけど穴があつたら入らせてえええ!!）

は、恥ずかしい……！顔に血が上るのが分かる、多分今顔真っ赤だ。俯いていると、頭の上からクスリと笑い声がした。

「おや、日本人だったのかい。すまないね、だれか教員の娘でも来ているのかと思ったよ」

「え？日本語？」

キョトンとした表情で見上げると、男性と目が合う。俺のとはまた少し違う青の瞳に、八割がた白髪 of 金髪。服装はナナカマド教授に似ていて、年齢的にもこの教授や教員の一人だと分かる。

男性は人当たりの良い笑みを浮かべながら会釈をしてきた。

「過大な評価だが、これでも世界中で講演をするくらいには顔が広いからね。日本にも何度か訪れているんだよ。おかげで日本語もこの通り、という訳だよ」

そう言つてウインクする男性は、大人びた雰囲気のままに、どこか子どもっぽくも見える。慌てて頭を下げつつ自己紹介をした。

「あ、その、俺、うみつていいいます。ここには、ナナカマド教授の縁で来たんです。ただ、研究室に行きたかったんですけどどこにあるかわ

からなくて……」

俺の言葉に、男性は驚愕の表情を浮かべる。次いで少し嬉しそうに手を差し伸べてきた。

「そうなのかい!? ナナカマドくんは私の友人だよ! いやあ、彼にこんなかわいい孫がいるなんて知らなかったなあ!」

「あ、いえ俺は教授の孫とかじゃないんです」

「ふむ? では娘……? いや、流石に歳が……おっと、自己紹介も抜きに詮索などするもんじゃないね」

差し出された手に思わず俺も手を出し、握手をする。男性は何かを思案していたようだったが、我に返ってまた人当たりの良い笑顔を浮かべた。

「初めまして、私はアダム。ここで教授をしているものだよ。専攻しているのは生物学だ、まあ各国で講演ができる程度の、しがない大学教授さ」

「い、いや世界中で講演するような人はしがなくは無いないじゃ……?」  
はっはっは、と笑いながら腕をブンブン振ってくる教授。お、俺は大学とか行ったことないんだけどこの人、ひよつとして滅茶苦茶すごい人?

ほら、背後の監視の人もなんか驚いた表情してるし。

「おおそうだ、ナナカマドくんの研究室に行きたいんだったね。いいよ、送ってあげよう」

「えっ、でもアダムさ……教授は仕事があるんじゃない……」

「いやいや、さつきまで色々あったんでね。もう今日は流石に仕事も講義も無いんだよ。私はただ忘れ物を取りに来て、ちよつと大学内の様子を見に來ただけだから暇さ。それと、呼び方は呼びやすいものでいいよ」

「でも、いや、ううん」

どうしよう、いいのかな。いや、日本語のわかる大学に詳しい人っていう超絶運のいい出会いなんだけど。……なんだか、胸の奥が、ざわつく、ような……?」

「いいよいいよ、忘れ物についてももう取りに行つたし、見周りだつて

絶対必要なことでもないしね。それに、うみくんだってこのまま大学内をさまようよりはずつといいだろう?」

「ぐっ、そ、そうですね……」

ま、まあこのままよりは。胸のざわつきはまだあるけど、まあ気のせい、だよな?

そうしておれば、さつきからある胸の引っ掛かりのような何かを無視して、男性——アダム教授についていくのだった。

「アダム教授、よろしくお願いします」

「まあ、実は結構近くまでは来ているんだけどね。案内は私が提案したものだし、責任もって任されるとしよう。これは確定事項だ」

「ははは、そんなに堅苦しくしなくても……」

「いやいや、実はこの廊下のつきあたりに、猛毒生物を飼っている飼育ケースが……」

「え、は!?」

「嘘だよ?」

「……」

「ははは、ごめんごめん。ちよつと揶揄っただけだよ」

……この人、苦手だ!

うみがアダム教授と出会っているところ。イギリスへとやってきていたワタルは、どうにかこうにか大学へとやって来たのだった。

「ここが、うみちゃんのパソコンの検索履歴にあったっていう大学か……」

(生物学に強いつて触れ込みみたいだが。ポケモン関連の何かがあったやって来たのか? いや、そんな履歴は無かったらしい……)

「まあいいか、とりあえず……入ってもいいのか? なんか慌ただしいけど……」

そう呟きながらも、ソロソロと構内へ入るワタル。周囲に大学生らしい人は少なく、警察の装いをした人ばかりが目につく。

「なんか事件でもあったのか?……お?」

中庭に出たところで、ふとワタルは、巨大な焦げ跡のある場所を見かける。そこには大勢の警察が集まって何やらしているようで、大学生や教諭らしき人々が遠巻きに見物している。

ボヤ騒ぎか何かかな、そう思いながらも何となく惹かれたワタルは野次馬に混ざってそつと現場を見て見る。

「うっわ、ヤミカラス……?」

焦げ跡の中では、手ひどくとされたと見えるポケモン、ヤミカラスが数匹転がっていた。見える範囲以外にもまだいるようで、どうやら警察は彼らを捕まえて移動させているようだった。

「随分と倒してるんだ、なあ?」

ふと、一番近くに転がっていたヤミカラスを見てワタルは固まった。そのヤミカラスは、全身が焦げているのとは別に、どこか痺れているかのように足をけいれんさせていた。——まるで、雷にでも打たれたかのように。

(雷……大群……外傷、見た感じあまりないみたいだし、一撃。見える範囲の個体は全部同じか。一発のわざか何かでまとめて倒されたのか。それほどの実力のある、でんきタイプのポケモン……)

「まさかの、一発で当たり引いたかな……?」

ワタルはそう言つて、野次馬から離れ歩き出すのだった。

あア、あタマがいたイ——。

しこうが、さだマラナイ——。

なにモ、かんがエガマトまらない——。



。 | 。 | 。

どうでも良い。  
考えなどいらぬ。

破壊

はかい

ハカイ

はかい

ハカイ

壊す崩す倒す蹂躪する殲滅する滅ぼす

。

— コロス

## 第50話

アダム教授とともに入ったその先で出迎えてくれたのは、大量の紙に囲まれた研究室だった。

壁に沿うように置かれた複数の棚には、どれもこれも見たこともない形の彫像や英語の分厚い本などが押し込まれるように並べられている。

書類仕事をするのだろうか。机の上は辛うじて空いている程度で、後は全て紙、紙、紙。地図のようなものから英語で書かれた難しそうな書類、学生のものっぽいレポートの束なんかもあって混沌とした散らかり様だ。

「うわあ、きたな……凄い部屋ですね」

「はっはっは、こんなもんだよこの学校の研究室は。傍目で見れば散らかっている様に見えるんだろうけど、これでもまだマシな方だよ？」

「えっ」

俺の呟きに反応して笑いながら言うアダムさん。こ、これでまだマシって……どんだけ汚、いや個人的な部屋があるんだよ。

ドン引きしている俺を笑いながら、アダムさんは机の上に無造作に置かれていた写真の束を手取る。そういえば、案内してもらいながらいくつか話をしたけどこの人は冗談が好きだった。さっきの話もきつと冗談だろう……冗談だよな？

ここに来るまでの割と短い間に5回も脅かしたり、曲がり角で変なものが出てくるとか言ってお脅してきてたし絶妙に信頼がおけない。マジで研究室にたどりつくまで、まったく話題を尽きさせず話し通すとか、語彙力どうなってるんだ。

「そうだな、例えば……ほら、これ」

「え、見てもいいんですか？ ナナカマド教授の大事な研究なんじゃない……」

「大丈夫、コピーだよ。本物は学会に提出済みだし、見るくらいは問題ないよ。あ、流石に写真とか撮っちゃったらダメかな」

そう言つてアダムさんが見せてきたのは、一枚の写真。全体的に土の色が目立つ茶色い写真の中で、中心では作業着のような服を着た男性が数名、嬉しそうに泥だらけの手を握手している。その背後には、見たこともない文字が描かれた岩が鎮座していた。これまた泥だらけで、どうやら発掘されたばかりのもののようなようだ。

「これは？」

「ひと月ほど前に、ここから西へ行ったところにある国立公園で発見された遺跡で出土した碑文だよ」

そう言つてアダムさんは、興味深そうに自身の顎へ手を当て、自身も写真を眺めながら説明してくれた。

「これまで地盤の脆さが原因で調査が進まなかった場所で発見された遺跡さ。当初は遺跡の頭部分だけが地面から突き出っていて、何度も調査希望が出されていたんだよねえ。まあ許可は下りなかったんだけど」

そう言つて、アダムさんは一息つく。俺も説明を聞きながら物思いに耽つていた。確かに、許可がいるような場所つてその許可が出るまでが大変だつてよく言うしなあ。……キヨウさんもよく愚痴つてたな、許可を得る許可を得る許可とかのややこしい手続き。

俺がぼう、と虚空を見つめながら取り留めもない思考を巡らせていると、アダムさんが再び話し出す。

「そのまま長い交渉が始まるところだったんだがね。つい先日、震源不明の謎の地震があつて、遺跡の大部分が地表に露出してきたんだ。その結果、ある程度調査できる程度に安全が確保されたということ。調査と発掘の許可が下りたつて感じだよ。発掘開始からすぐに出土したのが、その碑文だね」

アダムさんはそう言つて説明をしてくれながらコーヒーを入れ始めた……それ、ナナカマド教授のものだよな？ い、いいのかな……。

俺の視線は気にせず、アダムさんはスラスラと話を続ける。

「そんなこんなで碑文は回収され、現在は博物館行きさ。遺跡そのものの調査も本格的に開始したのはつい最近の事だったね。そうだな、およそ4日前くらいからかな。……そして、問題が発生した」

アダムさんは、自身のコーヒーを手に、もう片方には別のカップを持ってきて手渡ししてくれた。……ジュースかこれ。

軽くウインクをして渡してくるその姿は、もういい歳のおっさんなのにどこか愛嬌がある。話の途中だったこともあつて少しだけ会釈すると、これまたいい笑顔で手を振るアダムさん。

コーヒーに一口だけ口をつけて、再び話し出す。

「ある、未知の生物が遺跡の中にたくさん存在していることが分かったんだよ」

「！」

飲もうとしていたジュースを持つ手が思わず止まる。未知の生物って、もしかして……

「うみちゃんも聞いたことはあるんじゃないかな？最近世界中を騒がせている、『ポケモン』って生物だよ」

「そう、ですね。聞いたことがあります。というか……」

「ん？……ああ、そうか。この大学でも暴れてたんだったね。知ってて当然か」

俺の内心での予想は当たっていたようだ。……ごめんアダムさん、知ってるどころかむしろもちで持ってます。

「ポケモンという生き物は、遺跡の中に大勢潜んでいて調査チームへと襲い掛かって来たんだ。幸いにも、今の時点では遺跡の外には出てくる様子は無く、すぐに逃げたから調査チームにも被害者は出てない。もし被害が出たなら、早々に研究どころではなくなって遺跡の封鎖とか有り得たらしいよ」

そう言つてアダムさんは肩を竦めた。確かに、遺跡がどれほど狭いのかは知らないけど、閉所でポケモンと出会った発掘作業員さんは生きた心地がしなかつただろうなあ。

「このままでは遺跡の調査もままならない。つてことで、研究チームに知り合いがいる私とナナカマドくんに、そのポケモンという生物の調査と撃退方法を調べるといふ依頼が来たという訳だね。これは参考資料と共に同封されていた、碑文を発見した調査隊が撮影した写真の一つなんだ」

アダムさんの説明を聞きながら写真をもう一度まじまじと見つめる。碑文の文字は経年劣化でひび割れ、掠れてしまっていて全く読めないが、所々に絵が描かれているため何とかそれを見つめてみる。まあそれでもやっぱり何が書いてあるのかはさっぱりだ。

「……すごい難しいですね。俺にはさっぱりです」

「当然だよ。私やナナカマドくんですら解読は難航しているんだ。君にちらっと見ただけで理解されたら研究者として自信失くすよ」

そういつてアダムさんは写真を手にとって肩をすくめる。それもそうか、専門の人や大学の教授が調べて分からないって言うてるのに、俺なんかはすぐわかるわけがないか。

「……うーあれ、でもアダムさんも教授も生物学の専攻なんですよ？ 歴史学とか、遺跡学とかの人が調べるんじゃないんですか？」

「そうだよ。普通であれば、ポケモンの対処についてだけで碑文の解読に我々が関わる必要はなかったんだ。……まあ、普通じゃなかったんだがね」

俺の質問に、さつきまで柔らかな笑みを浮かべていたアダムさんの表情が曇る。いや、曇るといふよりは困惑の表情だ。どう伝えるか困っている、そんな風にも見える。

アダムさんは碑文の写真の置かれていた資料の山の中を漁りだした。しばらくして彼は、紙の山から文字だらけの、見るだけで頭が痛くなりそうなレポートを引っ張り出してくる。

「解読が開始してすぐに、どうやらこの碑文が何らかの生物についての伝承だということが報告されたんだよ。その内容が支離滅裂で、現存する地球上のほぼすべての生物の特徴と一致しない。そこで、特徴の合致する生物が存在しないかの研究を我々が依頼されたんだ」

「へえ、これ生き物関係の伝承なんですか……。どんな生き物なんですか？」

「ふむ、その話は私も参加してからにしてみらおうかな？」

「ひょつ!？」

突然かけられたそんな声にびっくりしながら振り向く。そこにはコートと帽子を手には扉を開けたこの研究室の主、ナナカマド教授が



さて、碑文に書かれていたという生き物、どんなのだったのか。実は話を聞いて結構興味も沸いてきていたので、無意識に前のめりになりながら教授に催促した。

「……その碑文に描かれているのは、神話に分類されるものだよ」  
「神話……？」

オウム返しした俺に、ナナカマド教授は一つ頷くと、自身の机の上の紙束から、さつきよりも一回りサイズの大きい写真を取り出して壁に画鋏で貼り付けた。

その写真は、先程見た写真の碑文を正面から撮影した物のようだ。先程とは違い発掘員もおらず、碑文全体がよく見えるように撮られている。

ナナカマド教授は壁に貼った写真の碑文、その一番上の部分へと指示棒を取り出して指し示した。

「ここ、この部分だ。この碑文に使われている言語は、複雑という訳ではないがかなり特異な物だった。体系的には象形文字だろう」

そう言つて教授が指し示した部分へと視線を向ける。当然ながら、読めやしないので文字とつながっていそうな碑文の絵の所を見ている。

碑文の中では、棒人間に近いデザインの何かが大量に描かれている。それらは人間たちを取り囲むように円を描いており、その中にいる人々の絵は動作や表情だけで見れば、苦しそうに見える。

首を傾げながら話を聞いていると、今度は教授のいる方とは反対側から、アダムさんが同じ指示棒を持って碑文の文字の部分を目指す。

「これまでの研究では、まだ序盤の文しか解読出来てはいないんだけどねえ……」

『さいしよのものはねむりのなかあり　ねむりをさますはふたつのぶんしん

くさりのまえにぶんしんきたり　さいしよのものはいかりくるう  
そのいかりすべてをのまん

いかりをしずめよ　みなものまなこにつきのぎん  
いのちもやしていかりをしずめよ　さればいのちはこえにこたえ

ん』……こんなところかな?」

「はえ……」

「……分からなくても問題は無いぞ?」

「……っ、……っ!」

ううん、わからん。気を使ってくれてるナナカマド教授には申し訳ないけど、教えてもらってもなんでそう読めるのか分からん……。あとアダムさんは、顔を隠してるけど聞こえてるからな笑い声!畜生!にしても、この碑文の神、だいぶポケモンに似ているなあ。

あ、この壁画、『』に似てるs

だれだ貴様

「っ?!?!」

「うみ君?どうしたのかね?」

「い、いえ……」

心配そうにこちらを見る教授と不思議そうに様子を見てくるアダムさん。な、なんだ?今、確かに何かを感じた。凍てつくような、視線とも声とも取れる何かが……。あれ、俺……この壁画、何に似てるって思ったんだっけ?!

(……もう、感じない、か?な、なんだったんだろう、背中に氷を突っ込まれたみたい……)

「やはり、うみ君には難しかったみたいだな。すまないね、こんな話をしてしまつて」

「あ、いえ!個人的にはかなり興味深かったです」

「そうかい?まあ、つまらないという事にならなかったのなら良かったよ」

謎の視線に背筋を凍らせていると、教授が勘違いしたみたいで心配してくれる。……もう治まった、かな?



逃げるな、感じているぞ。 ミツケタ ソコカ

「さて、そういうえばうみ君。君は、これからどうするつもりかね?」「?どうする、というのは?」

「この後の予定はあるかね、と聞いているんだよ」

そう言っただけ教授の、少しだけ鋭くなった視線が俺を見据える。あ、あれ??なんか誤魔化しとかしたらヤバそうな雰囲気……。

アダムさんも空気の変化を感じ取ったのか、手に持った自分のカッブを覗き込み、ああおかわりとしてこよう、と言って出て行ってしまった。

……なるほど、シリアスな空気があればアダムさんを黙らせられるのか。つとと、そんなことより教授の質問だ。

「警察や教授のことを考えると、まあ今後についてはまずポケモンについての情報提供を完全に済ませる感じですかね。また明日という事にはなりませんが、警部さんからも早急に終わらせたいと頼まれますし。……個人的には、シロナさんのお見舞いに行ったり、この国に來た当初の目的を達成したいなあ」と

オレを 感じたんだろ。 オレも感じているんだから オマエモ

「ふうむ。母親の搜索、だったね」

教授の呟きに一つ頷く。教授は眉間に手を当ててもみほぐしながら、黙り込む。その時ちょうど、後ろの方から扉が開く音がした。ああ、アダムさん戻って来たかな。

「俺の母親の手がかりが、この学校にあるという情報を得たんです。だから、俺はこの国に來て、それでたまたまだけけど、教授やシロナさんに出会えた。ちよつと出来すぎなくらい丁度良い話ですけどね」

「それで？手がかりは見つかったかい？」

「……いいえ。ひよつとしたら、ただの勘違い。いや、もつと質の悪い、ガセネタだったのかもしれないです。でも……それでも、俺はここにきて、何かを感じてる」

膝の上で握った手に汗がにじむ。当初の予定とは違ったが、警察とのコネクションを得た。教授とも出会えた、研究室にも来れた。

この国に来てから、狙った様に俺の行きたい場所、知りたいことへの道が開けている。これを、俺は母親のことを知るためのチャンスだと思いたい。

「でも、俺一人の力でこれ以上を調べることはできないと思うんです。だから……お願いします」

だからこそ。俺は椅子から立ち上がり、教授に向けて深く、深く礼をする。

オレを ミツケロ サガセ オレノ 敵

「俺の、探し物を、手伝ってください」

「……」

教授にメリットは無い。というか、教授が母親と出会っているとかじゃなければ、手伝うもクソも無いかもしれない。だってその場合、面識もない、事情も知らない。そもそもいたのかどうかも分からない人物について情報をくれと言ってるようなものだから。

母親の手がかりがあるというあのメールも、ただのいたずらの可能性は捨てきれない。

でも、それでも、今の俺には母親を探す足掛かりはこれしかないんだ。この人に、ナナカマド教授に協力してもらおうしか。

嫌に長い沈黙が続く。教授は何も言わない。後ろにいるのだろう、アダムさんも空気を呼んで静かにしてくれている。

たっぷり数十秒後。教授が、ハアとため息をつくのが聞こえた。

「やれやれ、私はうみ君の母親なんて知らない、とは思ってたがね」  
「っ」

「まあ、でもいいだろう」

ハツとして、顔を上げる。教授は、困ったような。それでいて、どこか嬉しそうな表情をしてこちらに微笑みかけていた。

「いいだろう、微力ながら協力するでしょう。私ができる限りの支援は約束する」

「！あ、ありがとうございます！」

コイ コイ コイ……………

コイ!!!!!!  
オレハココダ  
!!!!!!

「いやいや、かなり突拍子もない話だがね。うまく言えないが、取り調べの際話を聞いてみて、私もうみ君の母親について少し気になることもある。……なにより君にはシロナ君の命を助けてくれた恩があるのだ、ぜひ手伝わせてくれたまえ」

そう言って笑う教授に、歓喜の感情が胸中を渦巻く。これで、ようやくスタートラインに立てるのだ。

「さて、そうと決まったなら。……まずは、うみ君の最初の試練だね。日本にいるという君の保護者にも話をして、滞在を納得してもらわな  
いと」

「うっ……。そ、それはそうですけど、今は何というか、その。もう  
ちよーつとだけ、時間をおいてから連絡しますハイ」

取り調べの時にも感じたけど、明らかにキョウさんの雰囲気やバ  
い。いやオレが無断で勝手な行動したのが悪いんだけど、ちよつとそ  
の辺を一回柵に上げて逃げ出したくなるくらい怖かった。あれダメ

だ、今はあのヒトと向き合いたくない。

「ふうむ？しかしどうやら、そんな時間は無いようだが？」

「あ？？」

不思議なことを言う教授に首をかしげていると、教授は苦笑しながらそつと俺の背後を指さす。

指さす先を見ようと振り返ると、そこは研究室の入り口。必死の形相で、口を抑えながらあふれる爆笑をこらえているアダムさんの横に、一人の男性が立っていた。

暗い青色のパーカーを着て、背中に大きいリュック、右手はキャリーケースを握っている。顔は帽子を目深にかぶって下を向いているので見えづらいが、横からはみ出ている赤い髪の毛にはどこか見覚えを感じる。

……というか、あれ??あのパーカー。それに帽子。日の丸をモンスターボールで表現したあの特徴的なワッペンどこかで見たこと

「……あゝっ」

「……よお、うみちゃん。とても楽しそうなお話してるねえ？」

男性が、そう言っつてゆっくりと帽子をとる。若干帽子で押さえられていた髪を軽くワシヤワシヤとほぐすと、もう何度も見慣れた髪形の男性がぎこちなく、やや怒ったようにも見える笑みを浮かべていた。

「詳しく。聞かせてね??」

「ワ……ア……ア……」

「ワア、じゃないだろ！散々心配かけといてその態度は違うだろおお!!」

「ひいひい！すいませええん?!?!」

怒鳴り声に肩をすくませながら、俺は必死にその男性——ワタルさんにペコペコと頭を下げるのだった。

マダ キヅカナイ ノカ

アア……ワカッタ　ワカッタ　ノゾミ　ドオリ……

コロシテ　ヤル!!!!!!!!

## 第51話

日本のとある警察庁ポケモン対策課「レンジャー」の事務処理部屋では、電話のコール音が途切れることなく鳴り響いていた。

「はいこちらポケモン対策課……はい、はい、分かりました！今最寄りのレンジャーへ連絡をお繋ぎいたします！」

「今戻りましたあ！次現場どこですか!？」

「あー、次も山！車はもう下にあるからお願います！」

「はい！イワークの休憩挟んだらでいいです!？」

「いやもう行って！今他の人手足りてないの！今すぐいかないと徹夜コースだからー！」

「はあ!?!、いやでも徹夜は……ああもう！了解です！」

「頼んだ！今日はその案件だけで上がっていいから頼む！」

「はい、はい……ええ!?!ちよ、ちよっと待って下さいね!?!……タケシさんー！タケシさんいますー!?!」

「あの人今現場だろ!?!電話しろ電話!?!……いや待て、シゲル君今終わってたって！繋ぐからそっちに案件回せ！」

「いえ、今タケシさんが注文したドミ〇ピザが届いたから受け取れと受付から……」

「二二「追い返せそんなもん!!」二二」

殺人的な量のポケモン関連の通報。それを受け止めるため、レンジャー結成から常に人員の増員が行われていた日本は、世界で最高の練度を誇るポケモン対応の専門家を保有する国として知られることとなった。

うみという、どこにも替えの効かない最強の最終兵器少女<sup>ジョーカ</sup>と、それに鍛えられた精鋭ともいえるレンジャーたち。後から採用された者達も、うみ及びキョウ監修の地獄のような情報量の詰め込み座学と意識を失ってからが本番なのかと思うレベルの訓練を乗り越えた精鋭に次ぐレンジャーたちだ。レンジャー間の連携など、粗はあれど立派に今日まで日本を支えているメンバーとなっている。

……なってしまうた、とも言えた。

「おい、誰だファイリピンの電話繋いだ奴!?なんで一警察官に大使館の電話繋ぐんだいい加減にしろ!」

「しようがないでしょ!?日本にある大使館にはその倍以上連絡来ててパンク寸前なんだって!」

「だからってこつちに流されても困るってのになあ……!日本こつちだって全然人が足りてないんだからさあ……!」

電話対応の職員たちの怒号は止まらない。他の国にはレンジャーのような専門家集団はいない。あつたとしても、それは過去にうみが編纂したwikiなどの心もとない情報か、良くてうみが政府に届けた機密書類から主要各国へ提供された断片的なものを基に動く警察組織程度だった。

当然、そんなものでは実戦も経て練度が高まり続けた日本のレンジャーには遠く及ばない。進化前ポケモンや、大人しいポケモンの対応だけならまだ問題ない。そもそも被害が少ないからというのもあるが。

問題となるのは当然、凶暴性や毒性など、洒落にならない破壊力を持つポケモンや尋常ではない群れをつくるむしポケモンなどである。ポケモン発生が公然の物となって既に長い月日が経ったが、それでもポケモンの危険性を軽んじる者は多い。

各国でも、『しよせん動物』『やろうと思えば軍で対応できる』、そのような考えで動き手痛いダメージを受けたところが大半だ。無事であり、それでいてある程度の治安維持組織や部隊を確立できたのはせいぜい、アメリカや中国などの大国・主要国家だけである。対応できなかった主要国家にもあるが、そこが今どうなっているのかは一警察組織には知らされていないことになっている。

早い話が、『一番すごい日本に助けてもらおう、ウチじゃどうしようもない』ということである。残念ながら、過去にレンジャーの海外派遣まで話がいったことは無い。

「あー全く、嫌になるよなあ。ポケモンについて一般にまで話が普及したせいで……せいで、はまずいか?」

「構わんでしょ、ポケモンがこんなに発見されるようになるんだった

ら秘匿したりする意味無いし、むしろ動きが遅くなって大変だったろう。……レンジャーの人らが今以上に少なかった、って考えたら？」  
「うっわ、そりゃ無理だ。今ですら現場で稼働できるレンジャーの人たち行ったり来たりで地獄なのに」

「俺たちの電話対応や事務仕事なんて、実は割と恵まれてる方かもな……ん？」

世間話の様に愚痴をこぼしつつも、手は止めないで作業をこなす事務員や警察官たち。その時、大きな音を立てて事務処理室の扉が開いた。立っていたのはレンジャーの一人だった。うみ達レンジャー発足時の人員ではなく、新隊員募集で採用された二期生の青年である。登録されている相棒はメノクラゲである。ワタルと同じ漁師の息子であったこの青年は、そのまんまワタルに自分を重ねてレンジャーに憧れて入隊してきた。その経歴や相棒となるポケモンの関係上、海での仕事に回されることが多い隊員だ。

「……………」

「お、落ち着け君。何かあったのか？レンジャーの待機場所は下の階のはずだが……」

慌てて走って来たのか、青年は苦しそうに咳き込みながら何かを伝えようとしていた。たまたま近くにいた職員が水を手渡すと、ひったくるように受け取りキャップを乱暴に開け、ゴボゴボと飲み干していった。

「……………ぶはあー！し、死ぬかと思った……………」

「だ、大丈夫か…………？」

「ハア、ハア……………！それどころじゃない！うみちゃん、いや先ずはキョウさんに！それと……………政府にも！」

「お、おい!?なんだ、どうしたっていうんだよ?なんで、いや何を見た?」

血相を変えて食ってかかる青年に驚きつつも、異常事態の発生を予感した職員は、渡した水のペットボトルを取りつつ青年を落ち着かせようとその両肩を抑える。

しかし青年は、そんな職員の説得に答えることなくブツブツと何か



をつぶやき続ける。職員に抑えられた肩が。いや、その全身が異常に震えていた。

「うみちゃんは……アレのことを言ってたのか……? いや、そもそもなんだよあんなの……!? デカいだけじゃない、あれはもう……同じ生き物か……!?!」

「おい! だから、なんなんだ! 君は何を見た!?!」

「らちが明かないと、職員が強めに青年のからだを揺する。流石にその振動に気がついた青年はハツとし、目の焦点が合う。

「お、俺はさつきまでいつもみたいに港での通報に対応してたんです……。いつも通りポケモンをメノクラゲに説得してもらったり、追いつ返したりしてたんですけど……」

「ああ、確かに君は沿岸を主に派遣場所にされてたな」

「そ、それで! 見て、見たんです! 見てしまっただんです! 資料で、座学で教えられた特徴の通りだった……! でも、知らされてないぞ!?! あんな、目視できる距離、陸地の近くにあの大きさで来るなんて、俺の目がどうかしてるのかと……!」

「……おい、おい待て君。まさか」

嫌な予感がして、話を聞いていた職員だけでなく事務処理室内部の人間全員が固まる。

「間違いなかったです……! 嘘や見間違いはありえないです……! 『でんせつ』です……! 『でんせつポケモン』が、日本近海に!」

瞬間、事務処理室は。いや、その後数分後には、警察庁含むポケモンに対応できる日本の全ての組織が蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

カノモノハ マダ カエラナイカ

ツギハ モウ セマツテイル トイウノニ

ハヤク ツレテ イカネバ

カノモノ ハ モウ ジカンガ アトワズカ ダトイウノニ

「えー……では、他人の研究室を借りての、キョウさんからの伝言伝えついでの説教を終わります」

「……いやはや、これはまた随分と」

「あつはhっはははh!!!」

「やめてあげないかアダム。いや、確かにこれはかなり……その、自業自得だが」

「ゑエエへへ……ゴメンナサイイ……」

日本から離れ、イギリスの大学研究室。そこには、正座して真っ白になったうみと、その前で仁王立ちしながら上司からの伝言メッセーヂ（原稿用紙5枚分）を読み終えたワタル。その横で優雅にコーヒーを飲みつつ見ていたナナカマドとアダムがいた。情緒が壊れたのか、ひきつった笑みを浮かべたうみは特徴的な美しい銀の髪が、灰化したかのような雰囲気と纏わせつつ正座した脚部から伝わる痺れを享受していた。

「……全く、俺もキョウさんから話聞いた時は呆れたよ。何やってんのこの大変な時に……」

「うう、すみません……」

半泣きなうみへと、ワタルは重い重いため息をこぼし、原稿用紙をリュックへとつつこみ今度はポケットへと手を突っ込んだ。

「じゃあ、次は大和大臣からね」

「まだあるんですかあ?!?!」

「冗談だよ」

絶望の表情を浮かべたうみに、何も持っていない手をポケットから出しつつワタルがぐんぐんとベロを出した。それに安心するやら気が抜けるやらで、うみは思わずへにやりと体を前方へと倒す。

「説教タイムは終わり。色々聞きたいこともあるけど……ほら、ま

ずは日本に戻ろう。いい加減自覚しなよ、自分が超重要人物だつてこと」

「あ、ちょっと待ってください足ガガガ……いや、知ってはいるつもりなんですけど……」

「じゃあ自覚が足りないね。レンジャーの仕事でも絶対うみちゃんだけでは行かせないで俺や農家ニキがついていくのなんددだと思ってるの。戦力的には余裕でも、君の護衛が外せない理由とか、分かってる？」

「うう……」

ワタルからの、本当に心配していることが分かる言葉にうみは肩をすくめる。自分勝手な今回の旅行に余計な人員を割かせないため、というのは先程言い訳として言ったが、キョウの置き説教（言い訳を先読みされてカウンターの説教が出てきた）に封殺されているため何も反論ができない。

「……でも、待ってくださいワタルさん。今、ちょっと色々あつてこちらの警察とも話をしてるんです」

「はあ？警察……？なんでイギリスで??？」

「ふむ、それについては私も話に入った方が良いかもしれんな」

うみの言葉に困惑していたワタルに、傍観者だったナナカマド教授が手を上げた。そして、入国時のうみとの出会いから大学でのポケモン騒動と事後処理、ついでにうみが警部と行った取引についての説明を行った。

最初は真剣に聞いていたワタルだったが、うみが警部に情報提供とその他諸々の支援を取り付けた話を聞き天井を見上げ顔を手で覆った。

「……またこの、こんの頭幼女……いやもう疲れた、ツツコミたくない……」

「え、えへへ」

「笑いどころじゃない」

「はい……」

またしても自分から正座してしよげるうみを横目に、ワタルは教授

たちへと頭を下げる。

「もうほんと、何から何まで申し訳ないです。こんなアホの子の世話してもらって……」

「いや、構わんよ。久しぶりに孫と戯れた気分で楽しませてもらったしね」

「僕としても、中々に素晴らしい出会いだったよ。むしろ出会えた奇跡にありがとう、かな？」

嬉しそうにそう言う二人に、もう何も言えなくなったワタルはじろりとうみの方を見て指をつきつける。

「うみちゃん！」

「ひゃいー」

「とりあえず、事情は聞いた。うみちゃんの母親の情報について、結果が出るまでは待つ。でも、結果が分かり次第さっさと帰るからな！あと！これからの行動は俺と一緒にしてもらうからな！流星にもう一人行動は許せん！」

「は、はいいー」

「……はあ、分かったらもう言う事は無いよ。終わり」

その言葉に、うみは膝を崩して床でのたうち回る。そんな無様な姿を見つつワタルは用意された椅子に腰かけ、深い深いため息をついた。ナナカマド教授は新しくコーヒーマグを淹れたマグカップを用意し、ワタルへと渡す。

一方アダムは、苦しむうみの脚をツンツンして苦しむ様を楽しんでいた。

「ああそうだ、ワタル君、だったかな？ここに滞在中の宿泊先の当てはあるのかね？」

「え？ああ、一応泊まれるようにホテルは予約してますけど……」

「うみちゃんの護衛だというのなら、もしよければ我が家に泊まるかね？幸い、うみちゃんの部屋はまだ使えるベッドもある」

「え、いいんですか？でも、急な話でナナカマドさんのご家族にも迷惑なんじゃ……」

「いや、先程連絡したが家内はもう来ると思ってた喜んで夕食を用意し

「ているそうだ」

「早すぎないですか!？」

ナナカマドとワタルがそんな話をしている一方で、辛うじて足の痺れから復活したうみは改めてアダムと共に遺跡の写真や研究報告を眺めていた。

「んで、この文字が『あ』」

「ほうほう、分かりません」

「だよ。ちなみに本当は『あ』じゃなくてこの箇所だけで『私の名前』って意味だけだね」

「いや、知らない言語についてボケられても反応できないですって!」

あつはつは、と笑うアダムに頬を膨らませながら抗議するうみ。そんなことをしていると、不意に一つの写真に目が行く。

「もう……ん?」

「?うみちゃん、どうかしたかい?」

「あ、いえ……この写真、見ても?」

「いいよ……げっ、それが」

「?」

少し気になったのでその写真を手に取ったうみは、一応許可は得とこうとアダムへと写真を見せる。すると、最初は上機嫌に説明や解説をしてくれていたアダムの顔が歪む。

一体この写真に何が、と思っていると、うみの後ろから話を終えたナナカマド教授とワタルが写真を覗き込む。

「ううむ、その写真か……」

「え。あ、教授」

「……俺には何が何だかわからないな。何かの動物の絵か?」

「うむ、確かに動物なのだが……」

「それねえ、今まで近いフォルムの生物は考えたけど、現存するどの生き物にも当てはまらないんだよ。だから、壁画を描いた何者か、若しくは描いた集団が何かの動物を見間違えたり、誇張して描いたつてのが考えられるんだよねえ」

そう言つてアダムが、うみの手から写真をそつと取り研究室に置い

てあるホワイトボードへとマグネットで留める。

写真には、若干ひび割れた壁画の一部が写っている。文字はほぼなく、デフォルメされたアニメのような印象を与える生き物が二匹、描かれていた。二匹は向かい合うように描かれており、その周囲では人間のように見える絵が描かれており、どの絵も絶望して頭を抱えていたり、必死になって子ども？の手を取って二匹から逃げているように見える。

向かい合う壁画の片方は、四足歩行に突き出た後頭部、背中の子きな羽が特徴的だ。対するもう片方は、二足歩行で首は長く、背中には二枚の羽を広げている。

「……あれ？」

「?どしたうみちゃん」

「あ、いえ。何でもありません」

写真を眺めていたうみだったが、不意に妙な既視感を覚える。その感覚は、写真の中でも、特に中心の二匹の生き物へと感じていた。

その感覚は、知識として知っているからとか、映像や写真を見たとかの感覚ではなかった。どちらかと言うと、まるでここ最近、若しくはかつて実物を目にし、感じたかのような……

(どっかで見た……?ポケモンか?いや、この絵そのものはデフォルメが効きすぎて判断がつかない。でも、なんだこの、喉に骨が引っ掛かったみたいなの違和感……)

クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
ス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
ス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
ス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
ス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス  
ス クロス クロス クロス クロス クロス クロス クロス

「っ、また……」

(また変な痛みが……なんなんださつきから)

「うーん、ワンチャン若い子の発想力とかでわかつたりするかなって思ったんだがねえ?」

「ふむ、しかしまあそんなに頼るわけにもいくまい。これは私たちの仕事だろう」

「言えてるね。さて、それじゃあこれについてはまた今度、という事にして……ワタル君だっけ?」

「あ、はい」

「君とうみちゃん、結局すぐには帰らないんだろう?」

「ええ、まあ……」

ワタルが戸惑いつつ答えると、アダムはそれを聞いてニヤリといったずらっ子の様に笑う。

「よし、じゃあ明日は時間をもらえるかな?連れて行ってあげよう、僕の権限で」

「連れて行くって、どこにですか?」

「おいおいうみちゃん?話の流れでわかるだろう?ここさ、ここ」

ハヤク コイ

「この写真を撮った、遺跡の調査にさ!」

「……ああ。……ああ。分かった、すぐに用意しよう」

「どうしタ？」

「ターゲットが動いた。明日、遺跡調査に同行することだ。護衛もいるようだが、構わないだろう？」

「……ああ。じゃア、そこを狙うんだナ？」

「そうだ。当日、遺跡内部に侵入し……」

あのクソガキを、コロせ。



「緊急事態！退避！退避ー！」

「早くしろ！遺跡が崩れる！」

「おい待て、なんだあれは!？」

「知るか、早くしろ！崩落に巻き込まれたら助からないぞ！」

「白……いや、灰色の……」

「！閉じ込められた!?! いつの間に……!！」

「な、なんで氷が……!?!」

「さ、寒い……! 急に気温が!?!」

「ヒイ!?! う、うしろおお!!」

「は?……な、うわああああ!?!」

『……………』

アア、ヨウヤク　クルカ  
………ン？

オイ、ナニ　コチヲヲ　ノゾイテイル？

## 第52話

『えー、教授……流石に部外者の遺跡探索への同行は認められないです……』

『えー』

『いや、えーじゃないですよ……ただでさえこの遺跡は未知の部分も多いですし、何より国の命令で検問されてるんですから駄々をこねられても我々は職務を遂行するだけですよ?』

『というか、あの二名は他国の方ですよね? どう考えても許可証持っていないでしょう』

一度ナナカマド教授の家に帰って一泊した翌日。俺とワタルさんは、先日言われた通りアダムさんに連れられて謎の遺跡へとやっつけていた。

アダムさんの話だと彼の権限で遺跡内を見学させてあげる、という話だったのだが……案の定というか予想できたことというか、遺跡の入口に駐在している警備員により止められていた。

英語は相変わらずわっかんないが、アダムさんの表情や警備員の『勘弁してくれ』と言わんばかりの表情を見れば何となく状況は察せられる。完全に部外者だからなあ俺たち。

「……どうやら、何かあったみたいだな。封鎖がどうか、遺跡で問題がとか言ってるみたいだ」

「え、ワタルさん英語分かるんです?」

「少しはね。ゆっくり話してくれたら全部わかるかもだけど、早口すぎて断片的にしか理解できてないよ」

「ほえ、頭良いー。なんか意外ですね、ワタルさんが頭いい所見せてくれるの」

「うみちゃん俺のことなんだと思ってたの???俺一応レンジャー入る前は大学生だよ??」

「大学なんて遊ぶためにある場所なので大学生なんて学力皆無だって聞いてたもので」

「すっごい偏見を感じる情報!?誰だよそんなこと言ったの!」

「タケシさん」

「あの人は警察だから警察学校あがりでしょ!? 情報にすごい悪意あるなあの人……」

俺よりはよっぽど英語が分かるらしいワタルさんだが、それでもアダムさん達の会話を詳しくは分からないらしい。全く分からない俺的にはそれでも凄いと小学生並みの感想が零れる。

まあ、どんなに凄かろうと、コミュニケーションが取れない以上警備員の説得には参加できない。仕方ないので俺とワタルさんは、少し離れた位置でのんびりとその様子を見ながら雑談に興じていた。

「……レンジャーの皆さんは、どうなっています?」

「正直滅茶苦茶厳しい。知識面でも戦力面でも明らかに人手不足。……そういえばどこかに、両方の面で優れている最強の一般人がいたはずだけど? なんか勝手に単独行動してるし、国外に逃亡してるけど」

「うぐっ」

しまった、藪蛇つた。じとーつとした視線を向けてくるワタルさんからそつと目を逸らす。

……責任から逃げ続けている自覚はあるので、何も反論できない、特にワタルさんは俺がいない分レンジャー内最強の立ち位置で知られているし、立場や責任が重いのだろう。

日本のレンジャーという組織は、世界的に見て最高水準の対ポケモン組織として見られているらしい。が、その実態は突貫工事にもほどがある欠陥組織である。本来ならそこで一番有名で、一番多忙であろう存在こそ今俺の横でずっとこちらを瞬きすらせず見つめてきているワタルさんであらう近い近い顔近い。

「つたく……ん?」

「? どうしました?」

呆れられた気配はするけどワタルさんがジト目をやめてくれた程度その時、警備の人たちと話をしていたアダムさんが戻ってきた。彼には珍しいとても真剣な表情で駆け足で戻ってくる様子からは、思っていたより重大な何かが起こったのではないかと思えてくる。

「ごめんごめん、待たせたね！」

「いえ、それは良いんですけど……何かあったんですよね？」

「うん……かなりマズいことが起きてるみたいだ、遺跡内部で」

「内部で……？」

俺とワタルさんが首を傾げつつ尋ねると、アダムさんは困り顔で遺跡の方を見る。つられて俺たちも眺めてみると、アダムさんと話をしていた警備の人がどこかへ無線で連絡を取っていた。どこから別の警備もやってきており、どの人達も表情は驚愕や恐怖、困惑に彩られている。

集まってくるのは警備の人間だけではないようで、警察やレスキュー隊もやってきているようだ。

あつという間に遺跡の入り口には黄色いテープが張られ、封鎖が始められている。

「騒がしくなってきたな。ここも長居していると邪魔になる、一度も少し離れたところに行こうか。公園の入り口まで戻ろう、そこで説明するよ」

「分かりました。うみちゃん、動くぞ……うみちゃん？」

「……は、はい。急ぎましょう」

……まただ。また、変な視線。それに加えて、さっきのは……声？

(疲れたのかな、俺)

どこか遠くから聞こえてくるような軽い耳鳴りと、少し痛む頭に不快感を覚えながらも先に行くアダムさんとワタルさんを追いかけた。

『……………キタ』

「それで、何が起きたんです?」

「警察だけじゃなくてレスキュー隊みたいな人たちもいましたし……誰かが遺跡内で事故に遭った、とかですか?」

遺跡の入り口から離れ、公園前まで移動した俺たちは、各々軽く飲み物を持ちつつアダムさんへと尋ねる。ワタルさんはコーヒー、俺はりんごジュース。アダムさんはミネラルウォーターだ。

「……どうやら、昨日から遺跡内の探索に出ていた研究チームの消息が途絶えたらしい。無線などの通信機器も不通で、これから救助作業だそう。残念だけど、うみちゃん達の見学は無理だろうね」

「いや見学自体は元から無理だったんじゃない?……?」

説明するアダムさんは、捜索対象のチームのことを考えてか、なんてことは無いように説明しつつもどこか少し気落ちしているように見える。

「それじゃあ、遺跡の中で遭難したってことですか?そんなにあの遺跡は広いんですねえ」

「うーん、違うんだよなあ。そこが不可解なんだ」  
「不可解?」

俺が首を傾げると、アダムさんは困惑の表情で説明してくれた。

「あの遺跡、確かに広いのは広いんだけど、迷路のような個室が広がるような広さではなく、いくつかのの大広間が通路とかも無く隣接した構造なんだ。……こう言えばわかるかな?日本の伝統の、襖で仕切られた和室という奴。しかも、1階しか無いから、ジャパニーズ・長屋?みたいな感じでもあるんだけど」

「あー、何となく?」

「……俺も、言わんとしてることは分かりますよ」

なんとなく、という様子で頑張って教えようとしてくれるアダムさ

ん。俺とワタルさんはギリギリ想像はつく程度ではあるが、二人とも頭の中でブロック区画に区切られた部屋と部屋がつながった間取りを思い浮かべる。

「そんな遺跡なわけだから、隠し通路やら何やらも結構分かりやすいものばかりなんだよねえ。というか、隠し通路なんて遺跡の入り口の真反対につながる一つしか見つからなかったし。この道を行く者なら、遭難するような場所じゃないんだよね。ましてや研究チームは皆探索のスペシャリストのはずだ。なにか危険があつたなら直ぐに逃げられるだろうし……」

うんうんと唸りながらそう説明してくれたアダムさんに、話を一緒に聞いていたワタルさんがふと思いついたように呟いた。

「……でも、確かこの遺跡では出るんですよね？ポケモン」

「あ、もしかしてそのポケモンに襲われて？」

俺もその話を思い出し、ポンと手をうつと共に心配になる。もしそうだとしたら、さっきの救助に集まった人達が危ない。そう思った俺が、ワタルさんと顔を見合わせ移籍へと足を向ける。

が、そこでアダムさんが首を横に振った。

「いや、待つて欲しい。どうやら研究チームが探索に乗り出したのは、そのポケモンという生物が出てこなくなったタイミングらしいんだ」「ポケモンがいなくなった？」

「どういうことですか？」

妙な話だ。そう思い、俺とワタルさんの歩みが止まる。アダムさんは、怪訝な表情で首をかしげる俺たちに遺跡の不思議な現象について教えてくれた。

曰く、発見当初は内部どころか、遺跡入り口にすら未確認生物——ポケモンがたむろしていた。

曰く、原因は不明だがある日を境に、ポケモンたちが遺跡内部から出る頻度と数が減っていった。

曰く、遺跡内部への調査が始まった初日こそ、研究室で教えられた通りポケモンから襲われていた。しかし、それすらもここ最近は見かけなくなっていた。

「…………どう思う?」

話を聞き終えたワタルさんが、意見を求めるようにこちらを見る。質問には答えず、俺は自分の中で思考を巡らせる。

(遺跡内に出てくるポケモンにもよるだろうけど、初期はたむろしていたという話を考えると、一つ。いや、二つくらいは群れがあったはずだ。それが、遺跡内に引きこもるようになったり遺跡内部でも姿が見えない?どこかのタイミング、誰も見ていなかった時に群れが大移動をした?……ありえない、とは言わないけどそんな可能性あるか?そもそも……ポケモン達が遺跡の周囲や内部に生息していた理由はなんだ?そういう習性のポケモンしかいなかった?……だめだ、情報足りない)

「…………うみちゃんでも、原因は分からない、かな?」

「ううん、こればかりは……せめて、遺跡内部を調査する事が出来れば、分かるんですけど……」

「肝心の遺跡は閉鎖、か」

「ふうむ。ままならないなあ、しかもこのままだと研究チームも助けが間に合うかどうか……お?」

八方手詰まり、と三人そろってため息をつく。そんな中、周囲を見渡していたアダムさんが不意にキョトンとした表情を浮かべて遺跡の方を見ていた。

「?何かありました?」

「…………うみちゃん、ワタル君。君ら、確か日本で、いや世界で唯一のポケモン専門家なんだよね?」

「?ええ、まあ……」

変な質問だな?研究室でもうそのことは話したし、今なんでそれを確認する必要が……?

そう思いつつワタルさんと顔を見合わせていると、アダムさんがニツと口元を釣り上げながら親指を立て、遺跡の前で作業をしている人々のうち、どこか見覚えのある人物へと向けた。

「goodーじゃあ、あの人に話を通して遺跡に入れてもらおうか!」

「?…………あ」



「封鎖はどうだ」

「はい、全ての入口の封鎖完了してます！現在は、レスキュー隊の隊員が遺跡内への探索準備に取り掛かっています」

「あとどれくらいだ」

「……あと五分あれば！」

「よおし、そのまま続けさせる。研究チームがそう長く保つとは思えんからな」

（まあ、保つどころか、死体になってるだろうがな）

現場でせかせかと走り回り作業している警官や消防隊に指示を出しつつ、警部は内心でそう吐き捨てた。既に行方不明となつてかなりの時間が経過している。ただの洞窟内での遭難でもはや絶望的なほどの時間だ。

更に残念なことに、この遺跡内には人の命など簡単に奪えるらしいポケモンなる生物もいる。

士気に関わるため、本音をこぼすことは絶対にしない。が、既に警部の中では半ば研究チームのことは諦め始めていた。

「つたく、ここ最近はとんだクソツタレだ。事件やら事故やら、何かあるにつけてポケモン、ポケモン」

頭を乱雑に掻きながら警部は、ポケモン、と言うところでここ最近捕まえた妙な少女のことを考えていた。

（……日本の、ポケモン対応の専門家あ？急に増えだした多発的ポケモン発生に、わが国随一の一般協力者ですら対処できない事件の発生……妙にタイミングが良すぎるんだよなあ）

警部はそこまで考えてから、取調室での少女——うみとの対話を

思い出す。

日本と連絡を取り、情報提供についても確約された後のこと。

『教授、最後に一つ、質問を訳してくれ』

『ふむ？』

『……幼女。ああ、くそ、この言い方は誠意がないか。……うみの嬢ちゃん。アンタ、簡単に情報を提供したりこちらに協力してくれてるがな』

「？ええ、はい……」

『見返りは、要求はなんだ。ここまで、日本との通話も含めて全部。こちらにはメリットがある、いやメリットしか無い。が、嬢ちゃんには……母親の調査だったか？それしか提示されてねえ。完全に、ただの私事だ』

そこまで教授に訳してもらってから、警部は一息つく。ここまで聞いても、うみからは何も返事は無い。その名前の様に、深い海のような青い瞳でジッと警部を見つめ、言葉を受け止めている。

『釣り合っていないんだよ、お前さんの話と取引は。こちらにはほしいものを全部惜しげもなくもたらしておいて、嬢ちゃんは情報だけ。捜索してくれ、指名手配してくれと言うでも無い。ただ、この国にいるのか、それしか欲してない』

『悪いが正気かと問いたい。お前さん、母親を探しているという割に意欲が薄い。だのに、全く関係ないポケモンについての話だけには何故そこまでというレベルで介入してくる』

『……と、言うのをまとめて質問だ。お前さん、今何を考えて首を突っ込もうとしているんだ？』

教授が、最後の言葉を訳し終える。聴取を書き留める警官も思わず手を止めて固唾を飲んで見守る中、最後まで聞き終えたうみはそつと瞑目し、数秒だけ考え込む。

そして次に目を開き、警部を見た時には、その目にはただならぬ決意が込められているように見えた。

「……俺は——」

「——ぶ？警部？」

「っ、なんだ」

不意にかけられた部下からの声に、思考の海の中から浮上する。どうやら既にレスキュー隊の準備が完了したようで、後は現場の指揮を執っている警部の号令があれば移籍へと突入できる状況だ。

「ああ、すまん。よし、ではこれよりとつにゆ……」

「いえ、警部……。その、お会いしたいと言う人が……」

「はあ？何言ってるんだ、今は封鎖中だろうが」

不思議なことを言う部下にそう吐き捨てるように言うが、部下の方も困った表情でつづけた。

「いえ、それが……アダム教授が来ております。ここの調査メンバーにまだ在籍しているので、自分は関係者だから通せ、と言ってまして」

「バカか！今はンなこと関係あるか！非常事態だ、つまみ出せ！」

「え、ええと、その……もう、警部の後ろに」

「……は????」

思わず、警部は口をポカンと開けて振り返る。いつの間にかいたのか、そこにはぶん殴りたくなるほど爽やかな笑みを浮かべて手をヒラヒラ振るアダムと、その横で必死に頭を下げるワタル。そして最後に、警部が見つけたのはこの中で一番小柄な人物——うみが、複雑そうな表情でたたずんでいた。

「さて諸君、準備は良いかな？」

警部との会合から数分後。こちらをチラチラと不安げな表情で見てるレスキュー隊員や警官の人たちに囲まれながら、ワタルさんとアダムさん、そして俺——うみが、遺跡の入り口までやってきていた。

「……ワタルさん、これどう考えても」

「ああ、日本帰ったら始末書だろなあ。海外の事件にここまで首ツッコむのはいくら何でもキョウさんが許してくれなさそう……」

一人だけ、どんよりとした未来に確定してしまった地獄へ恨み言を吐いているワタルさんに、巻き込んでしまった者として苦笑いしかできない。一方のアダムさんは……なんかこの人、イキイキしてんな。そんなに楽しみかよ。

「さて、行方の知れない研究チーム、いなくなったポケモン。何が判明するのか、してしまうのか……不謹慎だけど、今僕はとっても血沸き肉踊ってるよ！」

「あ、アハハ……でも、気を付けてくださいね？本当にポケモンが内部に居なくなつたとは限りませんから」

はしやぐアダムさんと、項垂れるワタルさん。対称的な二人に挟まれながら眼前の遺跡へと目を向ける。入り口には過去の調査の際に置かれた照明器具が等間隔で置かれているため、割と奥の方まで見えている。

しかし、それなのに俺の感覚は、遺跡の入り口が未知の怪物の大きく開けられた口であるかの様に警鐘を鳴らしている。

(……でも、行かなきゃ。この件に、ポケモンがかかわっているのなら、それは俺の問題だ)

準備の際に与えられたヘッドランプ付きのヘルメットのつばに触れ、後頭部部分を抑え位置を整える。全員の準備ができたところで、レスキュー隊員を先頭に、救助隊は遺跡の内部へと足を踏み入れていった。

遺跡内、地下20階

対象の覚醒を確認。睡眠剤の追加投与開始……失敗。対象の睡眠剤への耐性獲得を検知。睡眠剤を、規定致死量の投与へ変更……成功。

……なんだ、もう起きたか

睡眠剤の効果を検知。規定通り、このまま同量の投与を継続。

くそ……またか……あのニンゲンが置いていった、これのせいか

……

管理者権限よりアクセス。目標人物の侵入を確認、対象への睡眠剤の投与を停止。覚せい剤、および興奮剤の規定致死量の投与を開始……成功

………あア、ようやく、キタのカ

はやく来い……ハやく……

対象の耐性の上昇を確認。コード1109、対象の『試製拘束制御鎖』

へ通達、意識の抹消を開始

まだ、我が、シナないウチに……………

遺跡内、地下4階

「目標の遺跡内侵入を確認」

『よろしい。封鎖が早すぎたときはどうなるかと思ったがな』

「…………あの、子どもを。やれというのか」

『そうだが？不服かね？』

「…………いや。だが、忘れてないだろうな？この任務を成功させたら」

『ああああ、はいはい、分かっているよ。もし成功したなら、あれはもう必要ないからねえ？』

「忘れるな？」

『くどい。口を慎め、お前にできるのはただ私の命令を聞いて、あのガキを…………あの女の娘を殺すことだけだ。…………これは、確定事項だ』

「…………了解」

「許してくれ、とは言わない。恨んでくれていい……ソラさん」  
「行くぞ、ヘルガー」  
「ガル」